9801 Space Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第400号1998年1月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

SD

特集

SD Review

1982-1996 SDレビューの15年

東孝光　安藤忠雄　伊藤哲夫　岩村和夫　鹿島建設設計部　クリストファー・アレキザンダー　黒川哲郎　小宮山昭　坂倉建築研究所　佐々木葉　設計組織アモルフ　高松伸　武澤秀一　長島孝一　日本設計事務所　林賢次郎　fromnow　東孝光　荒知晃　安藤忠雄　大浦洪二　小川雷之　小宮山昭　斎藤年明　鈴木エドワード　設計組織アモルフ　セクションR　高松伸　髙順　田村浚治　戸尾任宏　富永讓　中嶋龍彦　中野誠一　三上祐三　石田敏明　井上揚子　片岡山翔　木村吉夫＋野田俊太郎　黒川哲郎　小林克弘　小宮山昭　小屋雅義＋大内栄　鈴木了二　高松伸　竹ノ内一雄　中澤王久東　中野佳子　能勢修治＋永井久美　早川邦彦　海老塚耕一＋菱沼利行　若林広幸＋角野元俊　渡辺武信　新居千秋　石田敏明　出江寛　板井宝一郎＋セクションR　海野健三　大野秀敏　北村修一　小嶋一浩　末吉栄三　團紀彦　伸陸介　中筋修　西岡弘　萩原剛＋藤田純也　坂茂　元倉眞琴　山田朗　山本理顕　吉田保夫　上田篤世　伊藤哲夫　大野秀敏　小川守之　鹿島建設建築設計本部　北村陸夫　北山恒＋谷内田章夫＋木下道郎＋野口昌夫　久保清一　七月工房　鈴木エドワード＋曽森則次　竹ノ内一雄　團紀彦　土井康雄　中込清　長島孝一＋中村勉　西岡弘　日本設計事務所　パルフィ・ジョージ　堀池秀人　堀場弘　吉田保夫　青島裕之　東利恵＋東孝光　板井宝一郎＋西島裕　桂英昭　神谷武夫　岸和郎　木田加夫利　木下庸子　隈研吾　栗生明　小石川敏　シーラカンス　白川直行　スタジオ建築計画　團紀彦　ナイジェル・コーツ＋彌設計　日本設計事務所　野々瀬徹　前田紀貞　（大成建設設計本部）　山里夜樹　青島裕之　石原健也＋石原弥穂子　今・井アソシエイツ　入江一史　沖申衛行　實志雅樹　北山孝二郎　久保清一　黒田和司　シーラカンス　鈴木文章＋坂牛卓　妹島和世　玉川和正＋坂牛卓　西岡弘　坂茂　ブランソン・コーツ・アーキテクツ＋彌設計　松島健　山中知彦＋丸山浩　M.タルディッツ＋石田壽一＋D.コラノヴィッチ　郵政省建築部（関淳夫）　若林広幸　渡辺誠　安藤治雄　新居千秋　猪狩一　板井宝一郎　大塚聡＋相場克彦　小川晋一　沖申衛行　栗竹伸一　栗生明　笹森則次＋笹森るり子　関本一　滝澤陸　ダムダン空間工作所　團紀彦　戸田潤也＋細田みどり　西本圭敦　林賢次郎　原尚　ベフルズ・ナニジ・ジャン・ナニジ　吉松秀樹　渡辺誠　飯村和道　石田敏明　槻本文夫　小川晋一　木村博昭　小西泰仁　ジシ・ヨハネス　妹島和世　瀬広登　中込清　長坂大　難波和彦　新田正樹　乗富久哉　吉田保夫＋吉川宏一＋藤原伸治　渡辺誠　新井清一＋岡崎泰之　飯村和道　石田敏明　石原健也　牛田英作＋ヤッサリン・フィンドレイ　大塚聡　小川晋一　川口とし子　小松清路　佐田野剛（竹中工務店）　白川直行　妹島和世　A.T.System＋竹内申一　長島孝一＋AUR　中村勇夫　中村勉　前田紀貞　増田友也＋米田有　宮本佳明　渡辺誠　新井清一＋大藤淳哉　井坂幸恵　石原健也　小川晋一　ジョージ国広　隈研吾　近藤裕之　高橋晶子＋高橋寛　戸田潤也　中尾寛　乗富久哉　松岡哉子＋王大岩　三栖邦博＋浜田明彦（日建設計）　村井正＋山口智　宮伏次郎　吉松秀樹　片木篤＋有馬立郎　河西立雄　北村修一　クライン・ダイサム・アーキテクツ　斎藤正　白川直行　杉本洋文　樹井信二　戸田潤也　中村勉　宮元健次＋東京コミュニケーションアート専門学校スペースデザインコース　森徹＋若松久男＋植野純　安田幸一＋中屋敷公一（日建設計）　吉本剛　和田宏明　荒木正彦　有泉秀明＋グリニス・M.ベリー　石原由紀＋田堀英　遠藤秀平　荻津郁夫　加茂紀和子＋マニュエル・タルディッツ　城戸崎和佐　鈴木敏彦　中村勇夫　花田勝敬＋大西直子　細田みどり　堀池秀人＋妹田滋子　前田紀貞　丸谷勝也　三栖邦博＋浜田明彦＋安田幸一＋持田英明（日建設計）　エストス・ピザル＋ペーター・ルーゲ　吉松秀樹　市原出　遠藤秀平　大林直衛（KAJIMA DESIGN）　佐々木聡＋中村宏美　佐藤光彦　夢織男　手塚貴晴＋手塚由比　トム・ヘネガン＋安藤和浩＋槇直樹　長坂大　長田直之＋荻真司　中東輝一　西沢大良　藤本壮介　山口智　吉田浩＋松本哲弥＋有馬浩一＋森吉直剛（大成建設）　由田徹＋岡本美樹　城戸崎和佐　黒木正郎＋横田千晶　佐藤光彦＋槇満真　三分一博志＋塚田哲也＋西尾通哲＋土井一秀　高橋晶巳　長田直之＋荻真司＋清水裕二　西沢大良　宮沢透　宮脇勝　安田光男＋杉山陽子　エストス・ピザル＋ペーター・ルーゲ　由田徹＋岡本美樹　吉松秀樹　RE(I/Responsive Environment　渡辺真理＋木下庸子＋三谷徹＋長谷川浩己

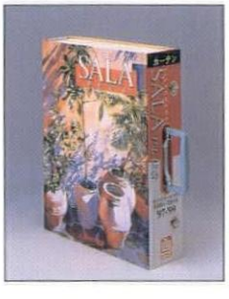
Monthly Journal of Art and Architecture



サーラプラス
'97-'99
SALA PLUS

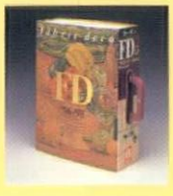
新発売

■サーラ……3,000円／m^2までの商品
■エクセ……5,200円／m^2までの商品

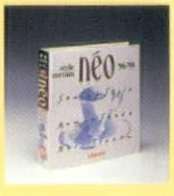


色に、柄に、素材に、時代をビビッドに映す
リリカラのカーテンコレクション“サーラ”。
インテリアの多様化、高級化にいち早くお応えするために、
今回、従来よりもワンランク上の
上質なクラス“エクセ”を加え、
見本帳を“SALA”から“SALA PLUS”にバージョンアップ。
クォリティとボリュームの両面からいっそうの充実を図りました。

リリカラ
カーテン見本帳
ラインナップ



カーテン総合
ファブリックデコ



スタイルカーテン
ネオ



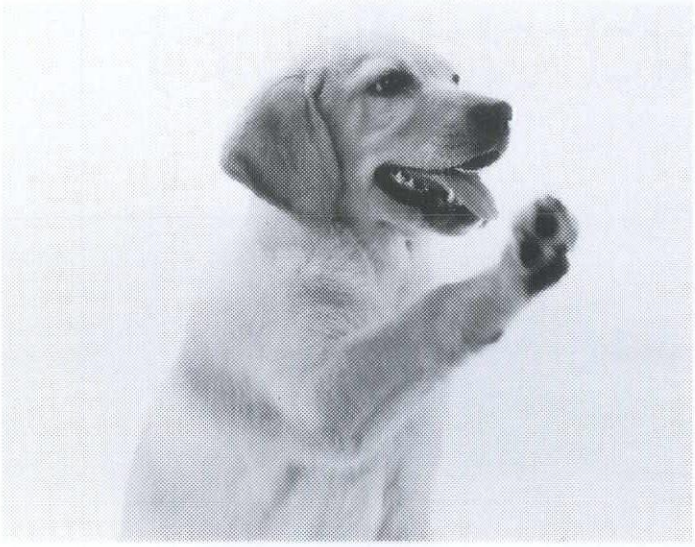
コントラクト
カーテン Vol.5

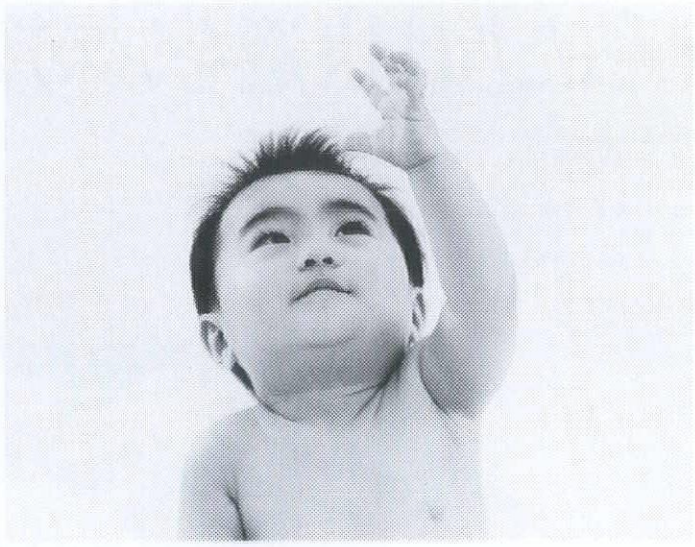
新インテリアイズムを創造する

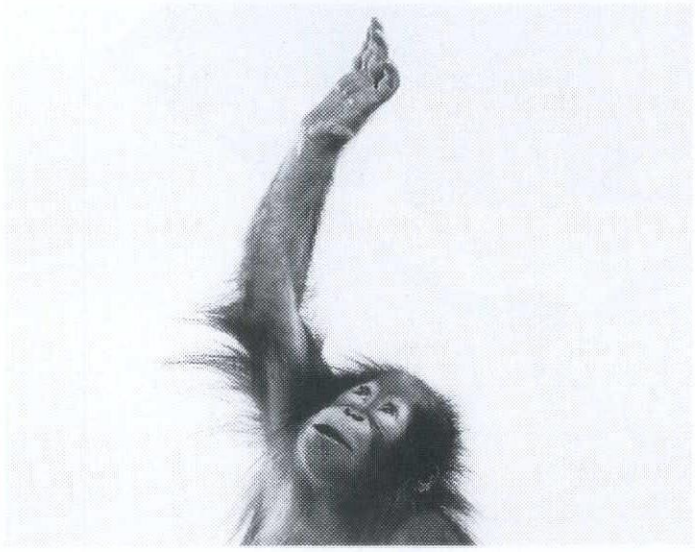
リリカラ

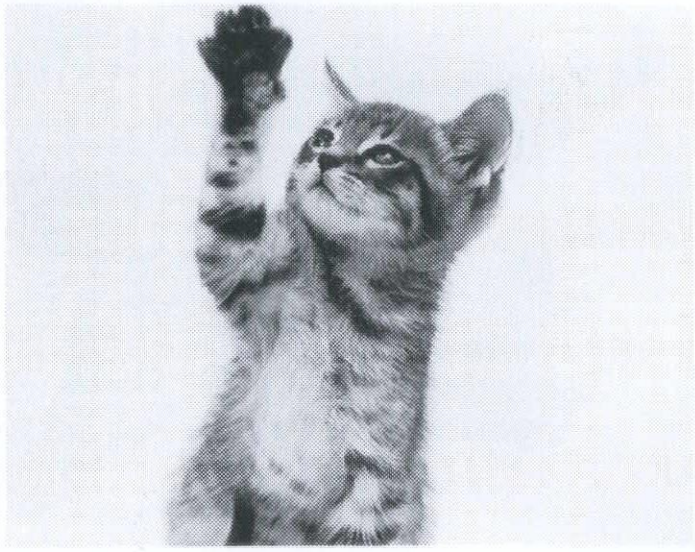
本 社：〒160 東京都新宿区西新宿7-5-20 Tel.03-3366-7865

KANDENKO









大切なのは、
何かをつかもうとする心。

電気は光・熱・情報・音響などに姿を変え、私たちの暮らしを支えています。関電工はこうした電気を、住宅で、オフィスで、劇場で、工場で、環境への配慮と安全性を第一に具体的なシステムや設備のカタチでお届けしています。そしてつねに、さらなる可能性を広げようと、新たな夢を描き、日夜さまざまな研究を続けています。今までも、これからも、関電工の技術はいつもあなたの近くにいます。

いつも、人に優しい技術で未来へ。

関電工

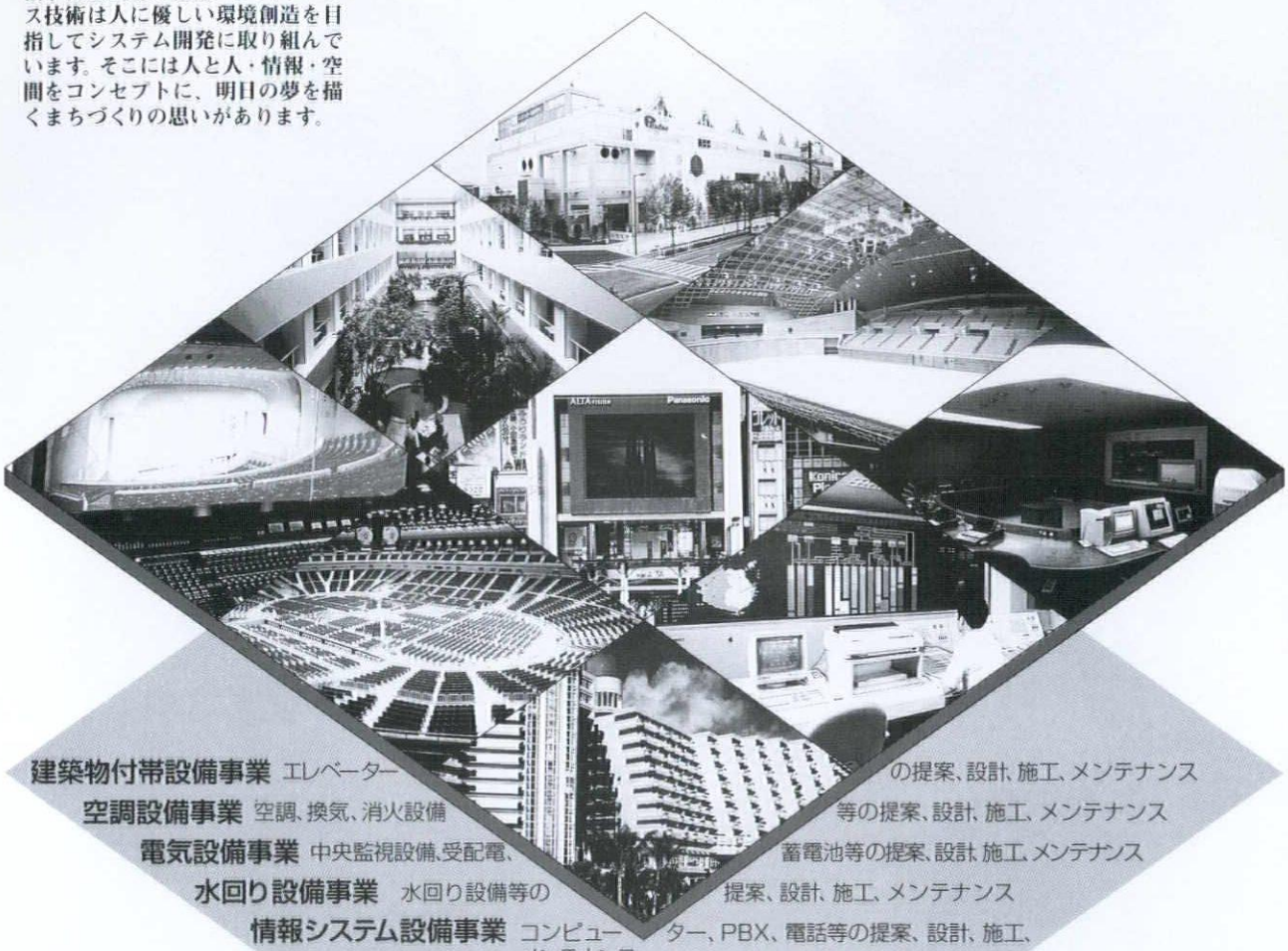
本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号
☎：NTT 03(5476)2111 TTNet 03(4431)2111

広告についてのお問合せの際は≪SDを見て≫と御明記願います　A1

National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーター　の提案、設計、施工、メンテナンス

空調設備事業 空調、換気、消火設備　等の提案、設計、施工、メンテナンス

電気設備事業 中央監視設備、受配電、　蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

水回り設備事業 水回り設備等の　提案、設計、施工、メンテナンス

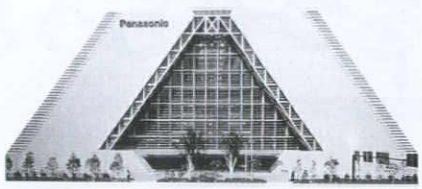
情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

松下電器産業株式会社
建設システム営業本部　☎03-5500-7504
北海道支店　☎011-207-7722
東北支店　☎022-711-3551
新潟支店　☎025-246-1031
関東支店　☎0286-37-2241
神奈川支店　☎045-651-5051
建設システム営業本部中部支店　☎052-951-6010
長野支店　☎0262-26-3990
北陸支店　☎0762-23-1121
静岡支店　☎054-247-5155
建設システム営業本部関西支店　☎06-949-2111
中国支店　☎082-247-5272
四国支店　☎0878-26-1711
九州支店　☎092-431-1100
沖縄支店　☎098-869-2926

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めていきます。



AV&CC FLAPS

AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM

自然素材の意匠にクッション性と抗菌性をプラスして—新登場。

HOSPITALITY FLOOR



「こんな床がいいな！」

★やさしさとぬくもりのある自然素材の表情を再現しました。
★適度の弾力性と特殊加工によって、歩きやすく、また、カツカツと響く靴音や転んだときなどの衝撃を和らげます。
★特殊抗菌剤の配合により、床面に落ちた菌やカビの増殖を防ぎます。

病院・福祉施設の病室・居室・待合室・談話室・廊下などに。

コーキンフォーム クレオ

(木目調&コルク調)

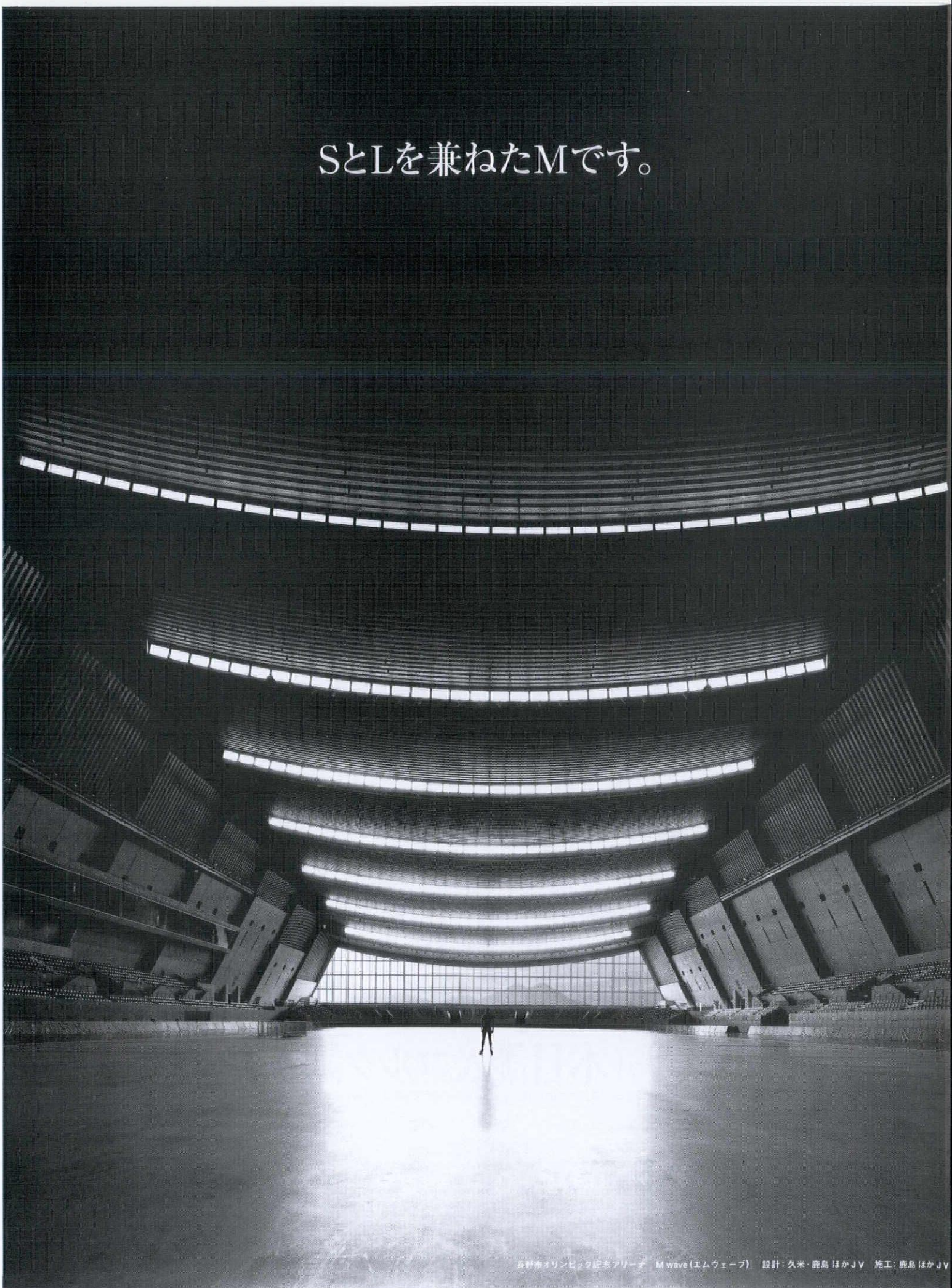
■3色　■規格：寸法／2.8mm(厚さ)×1.82m(幅)×9m(長さ)、〈受注生産品〉寸法／3.8mm(厚さ)×1.82m(幅)×9m(長さ)

お客様の満足が私たちの目標です
ISO 9001 認証取得

ときめきの生活空間をサイエンスする
ロンシール工業株式会社
●本　社／〒130 東京都墨田区緑4-15-3　☎03(5600)1821
●大阪支店／〒532 大阪市淀川区西中島3-9-13大北ビル☎06(304)2700
URL http://www.lonseal.co.jp/

●営業所
札幌☎011(271)0411　大宮☎048(664)1511　静岡☎054(251)3712　広島☎082(211)2700
盛岡☎019(624)6925　土浦☎0298(32)8813　名古屋☎052(935)7063　高松☎0878(31)4177
仙台☎022(265)4771　千葉☎043(246)5851　金沢☎076(292)1161　福岡☎092(472)5857
新潟☎025(243)3791　横浜☎045(662)7370　岡山☎086(231)6011　鹿児島☎099(258)6571

SとLを兼ねたMです。



長野市オリンピック記念アリーナ　M wave（エムウェーブ）　設計：久米・鹿島 ほかＪＶ　施工：鹿島 ほかＪＶ

大きなアリーナ。いいですねえ。夢がありますよね。世界大会、大コンサート、何万人もの観衆、沸き上がる歓声・・・。大空間はやっぱり建築の醍醐味です。でも、最近、空間の巨大さが気になることが、ときどきあるんですよね。
というのは、大きな空間になればなるほど、「本来の目的」以外の使い方が、必ず増えてくることがはっきりしてきたからなんです。(プロ野球の本拠地になっているところでさえ、ほかの目的で利用される回数の方が圧倒的に多いそうです。)ところが、いままでのやり方だと、たとえばアリーナ全面を使う必要のない場合でも、無理して全面使ってしまったり、あるいは仮設スタンドを入れても、実は天井から跳ね返ってくる音のことを我慢していたり。人が気持ち良く過ごすことを目指した場所で、結果としてまずその気持ち良さが犠牲にされている。おかしなことだと思いませんか。

長野に世界一のスピードスケートリンクをつくろう、ということになったときは、だから、大イベントだけでなく、他の目的で空間を小さく使うこともほんとに真剣に考えたらどうなるか、初めてやってみたいと思ったわけです。全世界に向け、日本をアピールできる大空間であることと、その後何十年も何百年もに渡り、少しでも多くの地元の方に気持ち良く使っていただけることの両立・・・。
いわば、ほんとの意味で「大は小を兼ねる」といったところでしょうか。

この建物の愛称『M wave(エムウェーブ)』の由来になっている、ドームとは逆に真ん中の下がった「木造吊り屋根構造」は、そんなわけで、'前代未聞の形'とか'日本らしさ'とかそういうこと以上に、アリーナの大きさをいろいろ変えても、気持ちいい空間規模をつくれることが狙いなんですね。スタンドだけじゃなく、照明も音響も含めた全体を可変式にしたのも同じ意図です。その結果、アメフトとママさんバレーが、一流の大コンサートと一流の小コンサートが、じっさい両方できるようになりました。(もちろん、この空間、空調がしやすいので氷の状態がベストに保てるし、木だと結露しにくいのでリンクに露がたれてこないし・・・と、世界一のスピードスケート競技を実現するたくさんのメリットが集約されているのは、いうまでもありません。ご心配なく。)

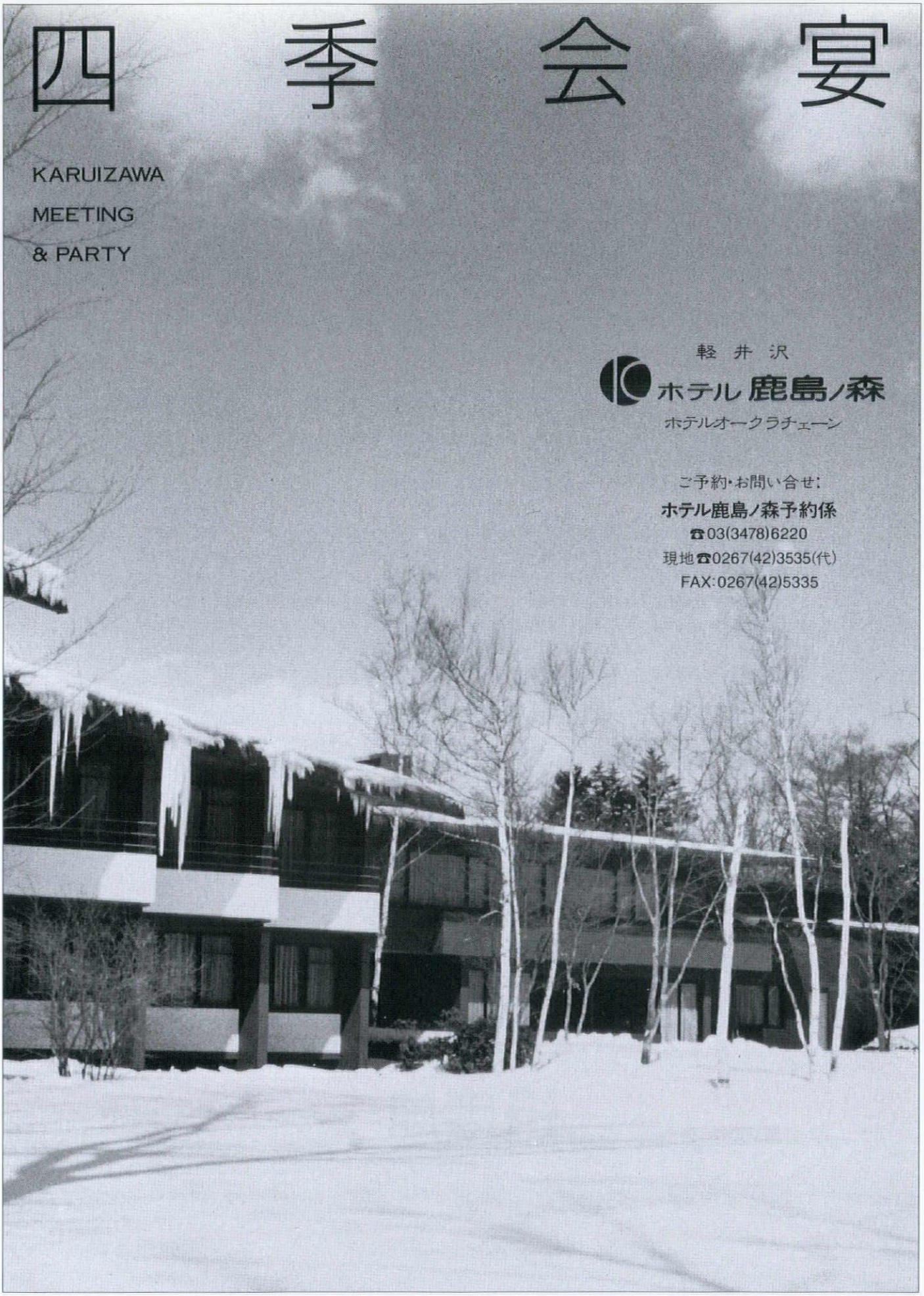
ところで、いろいろな仕事で、このようにいろいろな疑問にぶつかり、答えを探していくうち、わたしたちは、こんな考えを持つようになりました。「技術やスケールだけで建築を語る時代は、そろそろ終わりにしよう」。どんなにすごい建物でも、できただけでは、まだ未完成。これからの建築は、そこで人間が様々なドラマを繰り広げて、初めて完成したというべきなんじゃないかな。そう思うんです。

以上。わたしたち鹿島は、そんな視点で、新しい仕事に取り組んでいることを、ここにご報告いたします。

ある日、
その発想に
人は集まる。

鹿島

〒107東京都港区元赤坂1-2-7 tel.03-3404-3311(代表)
http://www.kajima.co.jp


四季会宴
KARUIZAWA
MEETING
& PARTY
軽井沢
ホテル鹿島ノ森
ホテルオークラチェーン
ご予約・お問い合せ:
ホテル鹿島ノ森予約係
☎03(3478)6220
現地☎0267(42)3535(代)
FAX:0267(42)5335



Classical Elegance in Tokyo

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一歩脚を踏み込めば、あなたの新しい物語がはじまります。

■モダンを楽しみ、ヨーロッパを憩う■

東京都現代美術館宿泊プラン

■期間　1998年3月31日まで

※ただし12月28日～1月4日を除く※美術館の休館日は、毎週月曜日（祝日の場合は翌日）となっております。

ホテルから東京都現代美術館へ、徒歩10分。現代美術をゆったりと楽しみホテルで優雅に憩う、そんな心の贅沢を充分に満喫できるプランです。

お一人様料金	
1室1名様利用（シングル）	¥16,500
1室2名様利用（ツイン）	¥13,000
1室3名様利用（トリプル）	¥11,500

※一泊朝食付・美術館入場券（常設展）・お土産・サービス料込み、税別。

HOTEL East 21 TOKYO

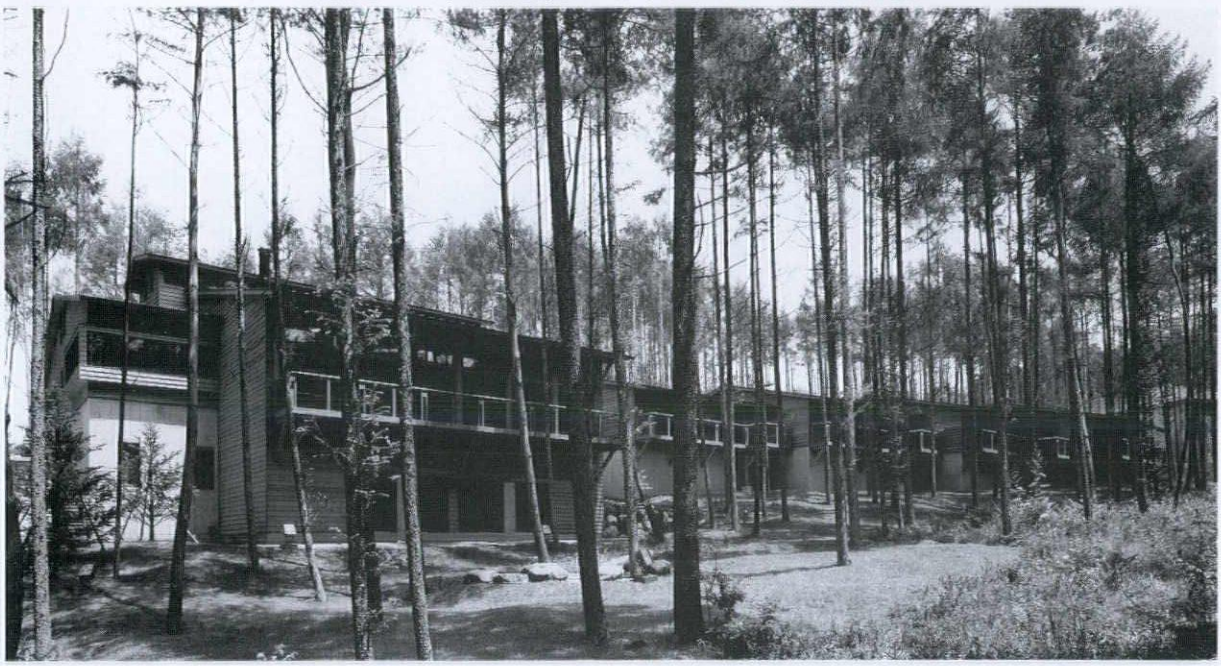
株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135　東京都江東区東陽6-3-3　TEL 03(5683)5683（代）　FAX 03(5683)5775
地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

大興物産の海外建材シリーズ

No.6　木製品(ツーバイフォー,集成材)







大興蓼科山荘

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、
企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。
〒107 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL03-5474-6054 FAX03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ　**大興物産株式会社**

本　社　〒107　東京都港区元赤坂1－6－4安全ビル

本　社	☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076	札幌営業所	☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074	四国営業所	☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
東京支店	☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915	東北営業所	☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867	九州営業所	☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
横浜支店	☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996	関東営業所	☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719	シンガポールオフィス	☎65-3440590　FAX65-3446714
名古屋支店	☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179	北陸営業所	☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248		
大阪支店	☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074	広島営業所	☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270		



マルエス S 日新
総合防水メーカー
日新工業株式会社
営業本部■103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

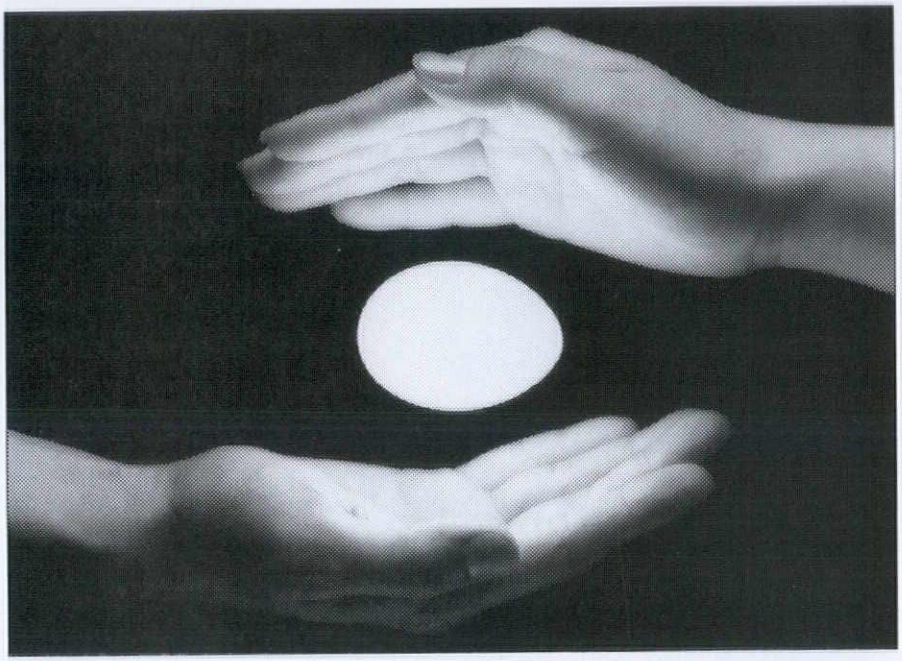
東京 ☎03(5644)7221(代表) 福岡 ☎092(451)1095(代表)
千葉 ☎043(227)9971(代表) 札幌 ☎011(281)6328(代表)
横浜 ☎045(316)7885(代表) 仙台 ☎022(263)0315(代表)
大宮 ☎048(642)5811(代表) 広島 ☎082(294)6006(代表)
大阪 ☎06 (533)3191(代表) 高松 ☎0878(34)0336(代表)
名古屋 ☎052(933)4761(代表) 金沢 ☎0762(22)3321(代表)

ミス太郎

広告についてのお問合せの際は≪SDを見て≫と御明記願います

SANKEN
ENVIRONMENTAL ENGINEERING

設備は手にとって選べません。
だから……



大切なのは、技術の信頼性。
豊富な実績と、
そのなかで培われた
確かなノウハウです。
私たち三建設備工業は、
求められる環境を
信頼の技術で創りだします。

望まれる環境を、信頼の技術で。

三建設備工業株式會社

〒103 東京都中央区日本橋蛎殻町1-35-8 TEL03-3667-3431



あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。
きっと、多くの方が、
大自然の中をイメージされることでしょう。
私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に
創造していきたいと考えています。
人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、
新しい最適環境を創造していきたい。
もっとナチュラルに、
いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.

―光と空気と水を生かす―
ダイダン

建築設備の一役を担う

電気設備工事

最新の技術と信頼される施工

大栄電気株式会社

代表取締役社長　伊藤　　赳

本　　社　東京都中央区銀座3－7－10　TEL 03(3562)0311(大代表)

支店営業所　大阪、名古屋、北海道、東北、北関東、東関東、神奈川、浜松、神戸、四国、中国、九州、沖縄



最先端のハーモニー。

さまざまな先端技術が調和して、「快適」という名のハーモニーを奏でる。トーエネックのエンジニアリングは、まさにそんなイメージです。電気設備をはじめ、情報通信・冷暖房・空調・防災設備など…。システム設計から施工・保守まで、高度で総合的な技術力を活かし、全国主要都市を拠点に幅広いネットワークでみなさまにお応えしています。オフィスビルやマンション、ホテル、工場、さらにはコミュニティ施設。あらゆるスペースを、心地よい技術のハーモニーで包み込みたい。インテリジェント&ヒューマン。私たちは、トーエネックです。

先端技術で、システムする。

TOENEC

株式会社 トーエネック

本　店/名古屋市中区栄1-20-31 〒460 ☎(052)221-1111
東京本部/東京都豊島区巣鴨1-3-11 〒170 ☎(03)5395-7111
大阪本部/大阪市淀川区新北野3-8-2 〒532 ☎(06)305-2181

快適さは…安全、確実が基本。

快適な環境づくりに、豊かな経験。



●技術と伝統の…
内線工事■外線工事

東光電気工事株式会社

本社　〒101 東京都千代田区西神田1-4-5　TEL.(03)3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

SD

バックナンバー

鹿島出版会
東京都港区赤坂6-5-13
電話：03-5561-2550
振替：00160-2-180883
Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm
年間定期購読料
26,000円（特別定価号＋消費税、送料込み）

SDバックナンバー常備店
［東京］
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店（神田）
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
［大阪］
旭屋書店本店
柳々堂 06-443-0167
［札幌］
旭屋書店 011-241-3007
［横浜］
有隣堂本店 045-261-1231
［京都］
大龍堂書店 075-231-3036
［大学生協内書店］
東北工業大学　東京工業大学
法政大学工学部　早稲田大学理工学部　関東学院大学

9601　都市づくりを仕掛ける建築家たちの実践　2854円
地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例：くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ルネッサンス、白石メディア・ポリス

9602　建築のメモリア：イタリアの合理主義の流れ　1988円
イタリア建築の基調として流れている合理主義の現在を考察。6人の建築家の作品を紹介する。アントニオ・モネスティローリ、フランコ・ステラ、他。

9603　ベトナム建築大博覧　2548円
ベトナムの都市と建築：ハノイ、フエ、ホイアン、チャンパ遺跡、ホーチミン。ベトナムの工業団地、ベトナム現代建築事情、他。文＝重枝豊、中沢信一郎、村松伸、他

9604　大地と光の変様　オーストラリア建築1788-　1988円
1788年入植以来のオーストラリア建築の変遷を追う。［**ネクストジェネレーション in New York：スミス=ミラー＋ホーキンソンとジョエル・サンダース**］

9605　多様性と調和の建築　ゲルカン＋マルクの最新作　1988円
コンペの秀作で知られる大規模設計事務所の'90年代の新作を紹介。［**海と建築――鈴木了二の最新作**］物質試行：佐木島プロジェクト、佐木島の住宅

9606　建築家の椅子111脚　3059円
19世紀後半から現在に至るまでの建築家がデザインした椅子を111脚紹介。C.R.マッキントッシュ、A. ガウディ、O. ワーグナー、ル・コルビュジエ、M.van D.ローエ、C. イームズ、A. ロッシ、他

9607　再考 建築家土浦亀城　1988円
戦前、戦後の作品を紹介しながら、昭和初期モダニズムにおける土浦の再評価を試みる。作品：土浦邸（第1、2）［**スタジオ建築計画の集住考**］最新作 FH-HOYA-IIを取りあげながら彼らの設計思想を紹介

9608　マイケル・ホプキンス　2447円
「構造上の表現がクリアな」主要作品を紹介。ホプキンス自邸、イギリス国税局新庁舎、ブラッケン・ハウス、他［**光と空間の夢を訪ねて：ドナルド・ジャッドとウォルター・デ・マリア**］文＝南條史生

9609　デンマーク・モダンハウスの最盛期　1988円
デンマークの50-60年代の住宅を紹介。キンゴー・ハウス、ヨーン・ウッツォン、他［山上の都市と塔の家――イエメン：都市と住居の形態学］文＋写真＝芦川研究室

9610　中世の光と空間　1988円
フランス中南部のロマネスク建築を紹介。ル・トロネ修道院、他。写真＝堀内広治、文＝羽生修二、他［**ふたつの都市考〈近代都市と芸術展〉〈未来都市の考古学展〉**］［**97の椅子プロジェクト**］

9611　栗生明　2548円
彼のみごとなディレクションに裏付けられた、コラボレーションの結晶を紹介。岡崎市美術館、植村直巳冒険館、カーニバル・ショーケース、他。［**田窪恭治のサン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂プロジェクト3**］

9612　SDレビュー1996　1988円
第15回SDレビュー誌上発表。ユストス・ビザール＋ベーター・ルーゲ、高橋昌巳、城戸崎和佐建築設計事務所［**伊丹潤の近作より：石彩の教会、木の教会、土の教会**］



9701
葉祥栄：カリステニクス
柔らかい建築のための12の柔軟体操
キーワード「柔軟体操」をもとに12のカテゴリーに分けて、全主要作品を紹介。老人保健施設サンダイヤル、他。
3059円



9702
木を生かした架構と空間
木の性質を生かした国内外の25例を紹介。金山の火葬場、モルジュのホール、他。文＝川口衛、今川憲英［**アジアを熱くする新世代建築家たち：IAA国際会議より**］アジアの都市・建築の現在、未来を問う。
1988円



9703
ミニマル・スペース・アーキテクチュア
ミニマルでシンプルな建築表現が特徴的な、4人の建築家を紹介。ジョン・ポーソン、小川晋一、岸和郎、石田敏明。文＝丸山洋志、他［**東京国際フォーラム**］写真＝堀内広治
1988円



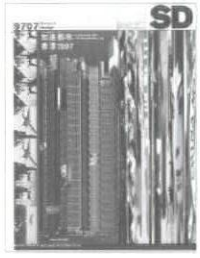
9704
拡張するデジタル・デザイン
コンピュータとネットワーク技術による、建築・都市の新しい環境を造り出すプロジェクトを紹介。文＝田島則行、山口重之、桂 英史、マイケル・ベネディクト、藤幡正樹、久保田晃弘、坂村健、奥出直人、両角光男、他
3059円



9705　アフラ＋トビア・スカルパと「ベネトン」
アフラ＋トビア・スカルパによるベネトンのオフィス社屋、ショップなどを紹介。文＋インタビュー＋写真＝豊田博之［**都市ビサとカルマッシの仕事**］カーサ・ムーティ、ヴェルディ劇場修復計画など
2000円



9706
柳澤孝彦：劇場の空間構成
新国立劇場、東京オペラシティビル、三鷹市芸術文化センター、他。文＝長友宗重、本杉省三　対談＝川向正人×柳澤孝彦［**装飾を排したフォルムデザイン――スウェーデンのグッドデザイン展より**］
2000円



9707
加速都市・香港
「速度」をテーマに激動する香港の姿を捉える。参加作家＝アラン・チャン、タイクーングラフィックス、浅川敏、江頭慎、他　監修＝村松伸、小嶋一浩、木下光　文＝松田直則
2000円



9708
R.ヴェンチューリ＋D.スコット・ブラウン：90年代の仕事
日本での処女作〈メルパルク日光霧降〉を中心に90年代の作品を紹介。シアトル美術館、他。文＝香山壽夫、安山宜之、他［**岐阜県営北方住宅プロジェクト**］談＝磯崎新
2400円



9709
駅空間の新曲面
コミュニティ性を重視した駅を紹介。JR矢吹駅、JR大曲駅、他。国際コンペとして衆目を集めたJR京都駅も併せて紹介する。文＝宮林敬幸、饗庭孝男、他。対談＝横尾忠則×原広司　写真＝大野繁
2000円



9710
ガラス建築
光学的、構造的特性など、ガラスの性質を幅広く採り入れた作品を紹介し、ガラス建築の現在と今後の可能性を探る。ガラス建築23作品、他。座談会＝伊東豊雄×難波和彦×今川憲英、他
3000円



9711
隈研吾
ポストモダン以降の建築における言説を続けてる隈研吾。今年建築学会賞、ヴェネディクタス賞を受賞した近作を紹介する。慰霊公園、他。文＝飯島洋一、グレッグ・リン、対談＝槇文彦×隈研吾
2800円



9712
SDレビュー1997
第16回SDレビュー誌上発表。建築研究室高安重一事務所＋佐久間達也＋橋爪宏直＋重富博之、川人洋志、藤本壮介、松澤穣、他。［**光と色が彩る空間――チェコのガラスアーティストたち**］写真＝鈴木豊
2000円

SD

現代の建築家、ハードカバー・シリーズ

鹿島出版会がホームページを開設いたしました。

SDをはじめ、当社で出版している書籍の検索が出来ます。是非ご覧下さい。

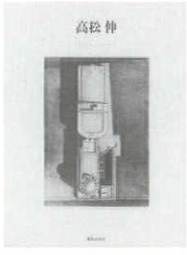
Address: http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武藤 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、磋き澄まされた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。繊陣Ⅰ、Ⅲ、他。

3800円



槇事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館（TEPIA）というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。槇文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILAGE、ラビリンス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



磯崎新❸ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジョルディパレス、お茶の水スクエア、他。

4800円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐霄館、ノアビル、聖アキラ館、昨雪軒、尻別山寮、虚白庵、他。論文＝磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井晟磨。座談＝大江宏＋藤井正一郎＋宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

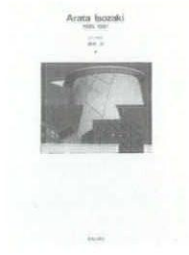
3605円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



磯崎新❹ 1985-1991 part 2

part 1 同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティームディズニービルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、パラディアム、［蝶々夫人］舞台美術、他。

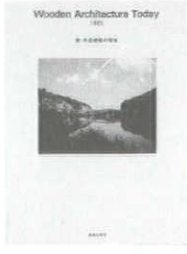
4500円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協町民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文＝荒俣宏、宇佐美圭司、他。

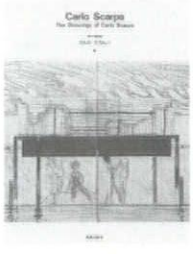
4000円



続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英×安村基。

3708円



カルロ・スカルパ図面集

ブリオン家墓地を始めとする主要作品のドローイング約150点を収蔵。ブリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

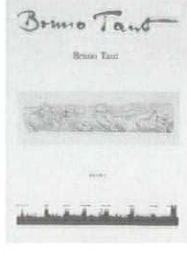
3500円



槇 文彦❷

槇文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品＝熱海の家、ボスポラス海峡に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

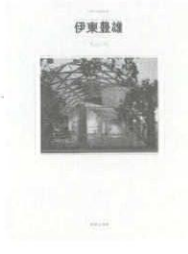
2575円



安藤忠雄❸アンビルト・プロジェクト

70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトⅠ、Ⅱ、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



伊東豊雄

風のように、光のように変様する建築。独自の感性で貫かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

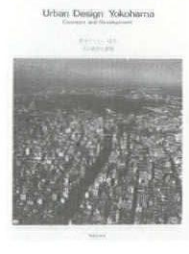
3914円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高階秀爾、ボザール一その歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレコの形成、折衷主義の世界、近代の憂愁、戦後のボザール、パリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



都市デザイン｜横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、槇 文彦×養原敬×小澤恵一、他。

5000円

9801 Space Design

スペースデザイン 第400号
1998年1月号
都市・建築・芸術の
総合誌

SD

5 特集
SDレビューの15年

6
SDレビューが始まった頃
槇 文彦

7
SDレビュー15年の
メモランダム

10　94　170
SDレビューの軌跡
1章　2章　3章
飯島洋一

96
巡回展を振り返って
「新しさ」への問いかけ
原 広司

172
巡回展を振り返って
中筋 修　水野一郎
奥保多聞

269
座談会
鈴木了二　元倉眞琴
栗生 明　小嶋一浩

277
SDレビュー入選者
審査員一覧

13　1982
東 孝光
安藤忠雄
伊藤哲夫
鹿島建設設計部
黒川哲郎
小宮山 昭
設計組織アモルフ
高松 伸
長島孝一+AUR
林 賢次郎
fromnow
クリストファー・アレギザンダー
岩村和夫
坂倉建築研究所
佐々木 繁
武澤秀一
日本設計事務所
象設計集団（招待）
谷口吉生（招待）

29　1983
東 孝光
小宮山 昭
セクションR
設計組織アモルフ
戸尾任宏
富永 譲
中嶋龍彦
三上祐三
荒 知幾
安藤忠雄
大浦洪二
小川富之
齊藤年明
鈴木エドワード
高松 伸
巽 順
田村宏治
中野誠一
鹿島建設建築設計部（招待）
竹中工務店大阪本店設計部（招待）
福沢健次+小宮山 昭（招待）
原 広司（招待）

45　1984
高松 伸
若林広幸+角野充俊
石田敏明
小宮山 昭
鈴木了二
竹ノ内一雄
早川邦彦
井上搗子
海老塚耕一+菱沼利行
片岡山訓
木村丈夫+野田俊太郎
黒川哲郎
小林克彦
小屋雅義+大内 栄
中澤正久東
中野佳子
能勢修治+永井久美
渡辺武信
槇 文彦（招待）

61　1985
小嶋一浩
山本理顕
大野秀敏
坂 茂
元倉眞琴
吉田保夫
新居千秋
石田敏明
出江 寛
板井宝一郎+セクションR
海野健三
北村修一
末吉栄三
團 紀彦
仲 隆介
中筋 修
西岡 弘
萩原 剛+藤田純也
山田 朗
高松 伸（招待）

77　1986
北山 恒+谷内田章夫+木下道郎+
野口昌夫
上田 堯世
伊藤哲夫
大野秀敏
團 紀彦
長島孝一+中村 勉
堀場 弘
小川守之
鹿島建設建築設計本部
北村陸夫
久保清一
七月工房
鈴木エドワード+笹森則次
竹ノ内一雄
土井慶雄
中込 清
西岡 弘
日本設計事務所
パルフィ・ジョージ
堀池秀人
吉田保夫

97　1987
桂 英昭
栗生 明
木下庸子
隈 研吾
スタジオ建築計画
ナイジェル・コーツ+弾設計
青島裕之
東 利恵／東環境・建築研究所+
東 孝光
板井宝一郎+西島 裕
神谷武夫
岸 和郎
木田加夫利
小石川 敏
白川直行
シーラカンス
團 紀彦
日本設計事務所
野々瀬 徹
前田紀貞／大成建設設計本部
山里茂樹

113　1988
ブランソン・コーツ・
アーキテクツ+弾設計
妹島和世
青島裕之
石原健也+石原奈穂子
沖中高行
貴志雅樹
西岡 弘
坂 茂
若林広幸
今・井アソシエイツ
入江一央
北山孝二郎
久保清一
黒田和司+NEU総合計画事務所
シーラカンス
鈴木文章+坂牛卓
玉川和正+坂牛卓／日建設計
M.タルディッツ+石田壽一+
D.ユラノヴィッチ
松島 健
山中知彦+丸山 恭
郵政省建築部
渡辺 誠／アーキテクツ オフィス

133　1989
新居千秋
小川晋一
吉松秀樹+ARCHIPRO
板井宝一郎
沖中高行
栗生 明
ダムダン空間工作所
戸田潤也+細田みぎわ
西本圭敦
林 賢次郎
原 尚
安達治雄
猪狩 一
大塚 聡／UNITZ D.F.+相場克彦
寒竹伸一
笹森則次+笹森るり子／
Atelier TO²
関 太一
滝澤 隆
團 紀彦
ベフルズ・チニジ+ジャン・チニジ
渡辺 誠／アーキテクツ オフィス

153　1990
妹島和世建築設計事務所
新田正樹
石田敏明建築設計事務所
木村博昭／Ks Architects
ジン・ヨハネス
渡辺 誠／アーキテクツ オフィス
飯村和道／ダンス
榎本文夫
小川晋一
小西彦仁
瀬 広空
中込 清
長坂 大+Méga
鹿波寿治
乗富久哉
吉田保夫+吉川宏一+藤原伸治

173　1991
石田敏明建築設計事務所
新井清一+岡崎泰之／
アライ・アーキテクツ
牛田英作+
キャサリン・フィンドレイ
大塚聡アトリエ
小川晋一
白川直行アトリエ
長島孝一+AUR建築・都市・研究
コンサルタント
中村勇大
飯村和道／ダンス
石原健也／デネフェス計画研究所
川口とし子／アーキスタジオオゾン
小松清路／小松清路建築研究所
佐田野剛／竹中工務店
妹島和世建築設計事務所
A.T.System+竹内申一
中村 勉
前田紀貞アトリエ
増田 実+米田 有／Archadia
Architects Office
宮本佳明／アトリエ第5建築界
渡辺 誠／アーキテクツ オフィス

189　1992
新井清一+大藤淳哉／
アライ・アーキテクツ
井坂幸恵
石原健也／デネフェス計画研究所
隈 研吾／
隈研吾建築都市設計事務所
戸田潤也
中尾 寛
乗富久哉
松岡恭子+王 大君
小川晋一
ジョージ国広
近藤裕之／システム シーツー
高橋晶子+高橋 寛／
ワークステーション
三栖邦博+浜田明彦／日建設計
村井 正+山口 賢／Beam Studio
室伏次郎／アルテック建築研究所
吉松秀樹／アーキプロ

205　1993
吉本 剛／吉本剛建築研究室
片木 篤+有馬立郎／
計画意匠研究所
クラインダイサムアーキテクツ
白川直行アトリエ
杉本洋文／計画・環境建築
中村 勉
森徹+若松久男+植野斜
安田幸一+中屋敷公一／日建設計
和田克明
河西立雄
北村修一／キタムラ・アソシエイツ
齊藤正 毅工房
照井信三／照井信三建築研究所
戸田潤也
宮元健次+東京コミュニケーション
アート専門学校スペースデザイン
コース

221　1994
ユストス・ビザル+ベーター・ルーゲ
前田紀貞アトリエ
荒木正彦設計事務所
有泉秀明+グリニス・M.ベリー／
Studio a/b
石黒由紀+田堀 繁
鈴木敏彦
細田みぎわ
丸谷勝也／
アークユニットスタジオ
吉松秀樹／アーキプロ
遠藤秀平／
遠藤秀平建築設計事務所
荻津郁夫
加茂紀和子+
マニュエル・タルディッツ
城戸崎和佐建築設計事務所
中村勇大／中村勇大アトリエ
花田勝敬+大西直子／
ウイング建築事務所
堀池秀人+益田滋子／
堀池秀人都市・建築研究所
三栖邦博+浜田明彦+安田幸一+
持田英明／日建設計

237　1995
手塚貴晴+手塚由比
遠藤秀平
佐々木 聡+中村宏美
トム・ヘネガン+安藤和浩+槻直樹／
アーキテクチャー・ファクトリー
長田直之+筏 真司／I.C.U.
中東壽一／乃善創_設計工房
藤本壮介
由田 徹+岡本美樹
市原 出
大林直高／KAJIMA DESIGN
佐藤光彦
季 鐵男／CHI'S WORK SHOP
長坂 大／Méga
西沢大良
山口 賢+BEAM STUDIO
吉田 進+松本哲弥+有馬浩一+
森吉直剛／大成建設設計本部

253　1996
長田直之+筏 真司+清水裕二／
I.C.U.
西沢大良
城戸崎和佐
黒木正郎+横田千晶／日本設計
佐藤光彦+横溝 真
三分一博志+塚田哲也+西尾通哲+
土井一秀
高橋晶巳
宮脇 勝
ユストス・ビザル+
ベーター・ルーゲ／
Pysall・Ruge Architecten
由田 徹+岡本美樹
吉松秀樹
RE[ ] Responsive Environment
宮沢 透
安田光男+杉山陽子
渡辺真理+木下庸子／ADH+
三谷 徹+長谷川浩己／S.E.D.O.

282　森島紘史の起こし絵図——日本のかたち紙考　森島紘史
1.　正月

285　ニュース　梅宮弘光
表現から構成へ——「国際期」デ・ステイルと日本

289　書評

293　メトロポリタン・ライブラリー　渡辺武信

294　新刊紹介

294　お知らせ

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子　高木伸哉
大野由美　飯塚りえ
高森和志
制作協力：久世 健
勅使河原馨／guild
アドバイザー：伊藤公文

発行人：平田暢那
編集人：長谷川愛子

発行所：鹿島出版会
〒107-0052 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
振替00160-2-180883番
Home Page：
http://www.kajima.co.jp/
group/publish/index.htm

印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174-0056 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・
大阪屋・太洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

定価：2,800円
[本体2,667円]

年間直接購読料：26,000円
特別定価号+送料込み

表紙デザイン：
小泉均+楠元康裕

9801 Space Design

Monthly Journal of Art and Architecture
No. 400
Jqnuary 1998

SD

5 **Special Feature:**
SD Review 1982-1996

6 The Early Days of "SD Review" Fumihiko Maki

7 Notes on the Fifteen Years of SD Review

10 94 170 Reviews of Review Chapter 1, 2, 3 Yoichi Iijima

96 SD Review Tours in Retrospect Quest for "Newness" Hiroshi Hara

172 SD Review Tours in Retrospect O.Nakasuji I. Mizuno T. Okubo

269 Round-table Discussion R. Suzuki M. Motokura A. Kuryu K. Kojima

277 Chronology of the SD Review

13 **1982**
Takamitsu Azuma
Amorphe Architects Studio
Tadao Ando
Tetsuo Ito
Kajima Corporation
Tetsuro Kurokawa
Akira Komiyama
Shin Takamatsu
Koichi Nagashima
Kenjiro Hayashi
fromnow
Kazuo Iwamura
Christopher Alexander
Sakura Associates
Shigeru Sasaki
Shuichi Takezawa
Nihon Architechts, Engineers and Consultants
Team Zoo
Yoshio Taniguchi

29 **1983**
Takamitsu Azuma
Amorphe Architects Studio
Akira Komiyama
Section R
Tadahiro Too
Yuzuru Tominaga
Tatsuhiko Nakajima
Yuzo Mikami
Tomoiku Ara
Tadao Ando
Koji Ohura
Tomoyuki Ogawa
Toshiaki Saito
Edward Suzuki
Shin Takamatsu
Jun Tatsumi
Koji Tamura
Seiichi Nakano
Kajima Corporation
Takenaka Komuten Co.,Ltd.
K. Fukuzawa & A. Komiyama
Hiroshi Hara

45 **1984**
Shin Takamatsu
H. Wakabayashi+M. Kadono
Toshiaki Ishida
Akira Komiyama
Ryoji Suzuki
Kazuo Takenouchi
Kunihiko Hayakawa
Yoko Inoue
Sankun Kataoka
T. Kimura+S. Noda
Tetsuo Kurokawa
Katsuhiko Kobayashi
M. Koya+S. Ouchi
Okuto Nakazawa
Yoshiko Nakano
Shuji Nose+Kumi Nagai
K.Ebizuka+T. Hishinuma
Takenobu Watanabe
Fumihiko Maki

61 **1985**
Kazuhiro Kojima
Riken Yamamoto
Hidetoshi Ohno
Shigeru Ban
Makoto Motokura
Yasuo Yoshida
Chiaki Arai
Toshiaki Ishida
Kan Izue
Hoichiro Itai +Section R
Kenzo Ueno
Shuichi Kitamura
Eizo Sueyoshi
Norihiko Dan
Ryusuke Naka
Osamu Nakasuji
Hiroshi Nishioka
T. Hagiwara+J. Fujita
Akira Yamada
Shin Takamatsu

77 **1986**
K. Kitayama+A. Yachida+ M. Kinoshita+M. Noguchi
Takayo Ageta
Tesuo Ito
Hidetoshi Ohno
Norihiko Dan
K. Nagashima+T. Nakamura
Hiroshi Horiba
Moriyuki Ogawa
Kajima Corporation
Rikuo Kitamura
Seiichi Kubo
Atelier Shigekatsu
E. Suzuki+N. Sasamori
Kazuo Takenouchi
Takao Doi
Kiyoshi Nakagome
Nihon Architects, Engineers & Consultants
Hiroshi Nishioka
György Pálffy
Hideto Horiike
Yasuo Yoshida

97 **1987**
Hideaki Katsura
Akira Kuryu
Yoko Kinoshita
Kengo Kuma
N.Coates+
Dan Sekkei Associated Architects
Kenchiku Design Studio, Tokyo
Hiroyuki Aoshima
R. Azuma+T. Azuma
H. Itai+Y. Nishijima
Takeo Kamiya
Waro Kishi
Kaori Kida
Satoshi Koishikawa
Coelacanth
Naoyuki Shirakawa
Norihiko Dan
Nihon Architects, Engineers & Consultants
Toru Nonose
Norisada Maeda
Shigeki Yamazato

113 **1988**
Branson,Coates Architects+
Dan Sekkei Associated Architects
Kazuyo Sejima
K. Ishihara+N. Ishihara
Takayuki Okinaka
Masaki Kishi
Hiroshi Nishioka
Shigeru Ban
Hiroyuki Wakabayashi
Hiroyuki Aoshima
IMAI Associates
Ichiro Irie
Kojiro Kitayama
Seiichi Kubo
K. Kuroda+Neu Plan
F. Suzuki+T. Sakaushi
K. Tamagawa+ T. Sakaushi [Nikken Sekkei Tokyo]
Coelacanth Architects
Ken Matsushima
T. Yamanaka+K. Maruyama
Bldg. Dept. Ministry of Post and Telecommunications [Atsuo Seki]
M. Watanabe/Architects Office
M. Tardits+T. Ishida+D. Juranovic

133 **1989**
Chiaki Arai
Shinichi Ogawa
H. Yoshimatsu+ARCHIPRO
Hoichiro Itai
Takayuki Okinaka
Akira Kuryu
DAM DAN
J. Toda+M. Hosoda
Yoshinobu Nishimoto
Kenjiro Hayashi
Hisashi Hara
Haruo Adachi
Hajime Igari
S. Otsuka/UNITZ D.F.+K. Aiba
Shinichi Kantake
N. Sasamori+R. Sasamori/ Atelier TO²
Taichi Seki
Takashi Takizawa
Norihiko Dan
Behruz Çinici,Can cinici
M. Watanabe/Architects Office

153 **1990**
K. Sejima Architect Associates
Masaki Nitta
T. Ishida Architect Associates
H. Kimura/Ks Architects
Gin Johannes
M. Watanabe/Architects Office
Kazumichi Iimura/Dans
Fumio Enomoto
Shinichi Ogawa
Hikohito Konishi
Hiroaki Taki
Kiyoshi Nakagome
Dai Nagasaka+Méga
Toshiharu Namba
Hisaya Noritomi
Y. Yoshida+K.Yoshikawa+ S. Fujiwara

173 **1991**
T. Ishida Architect Associates
K. Arai+Y. Okazaki/ Arai Architects
E. Ushida+K. Findlay
Satoshi Otsuka Atelier
Shinichi Ogawa
Naoyuki Shirakawa Atelier
Kouichi Nagashima+AUR
Isamu Nakamura
Kazumichi Iimura/Dans
Kenya Ishihara/Denefes
T. Kawaguchi/Archistudio Ozone
S.Komatsu/Seiji Komatsu Architect and Associates
T. Satano/Takenaka Corporation
Kazuyo Sejima Architect Associates
A. T. System+Shinichi Takeuchi
Ben Nakamura
Norisada Maeda Atelier
M. Masuda+T. Yoneda/ Arcadia Architects Office
K. Miyamoto/Atelier Cinuquiéme

189 **1992**
K. Arai+J. Ofuji/Arai Architects
Sachie Isaka
Kenya Ishihara/Denefes Inc.
Kengo Kuma/Kengo Kuma & Associates
Junya Toda
Hiroshi Nakao
Hisaya Noritomi
K. Matsuoka+S. Tachun Wang
Shinichi Ogawa
Hiroyuki Kondo/ C2 system Co.,Ltd.
George Kunihiro
A. Takahashi+H. Takahashi/ Work Station
K. Misu+A. Hamada/ Nikken Sekkei
T. Murai+K. Yamaguchi/ Beam Studio
Jiro Murofushi/ Artec Architects & Associates
Hideki Yoshimatsu/Archipro

205 **1993**
Tsuyoshi Yoshimoto/ Tsuyoshi Yoshimoto Architect Associates
A. Katagi+T. Arima Planning and Design Laboratory/
Klein Dytham Architects
Naoyuki Shirakawa Atelier
Hirofumi Sugimoto/Keikaku Inc.
Ben Nakamura
T. Mori+H. Wakamatsu+O. Ueno
K.Yasuda+K.Nakayasiki/ Nikken Sekkei
Katsuaki Wada
Tatsuo Kawanishi
Shuichi Kitamura/ Kitamura Associates
Saito Tadashi/Atelier Nave
Shinzo Terui/Shinzo Terui Architect & Associates
Junya Toda
Kenji Miyamoto

221 **1994**
Justus Pysall+Peter Ruge
Norisada Maeda Atelier
Araki Architect & Associates
H.Ariizumi+G. M. Berry/Studio a/b
Y.Ishiguro+S.Tabori
Toshihiko Suzuki
Migiwa Hosoda
Katsuya Marutani/ARC Unit Studio
Hideki Yoshimatsu/Archi-pro
Shuhei Endo/ Shuhei Endo Architect & Associates
Ikuo Ogitsu
Kiwako Kamo+Manuel Tardits
Nagisa Kidosaki & Associates
Isamu Nakamura/Isamu Nakamura Architect & Associates
K. Hanada+N. Onishi/ Wing Architects
H. Horiike+S. Masuda/ Hideto Horiike+Urtopia
K. Misu+A. Hamada+K. Yasuda+ H. Mochida/Nikken Sekkei

237 **1995**
T. Tezuka+Y. Tezuka
Shuhei Endo
S. Sasaki+H. Nakamura
T. Heneghan+K. Ando+N. Kaji/ The Architecture Factory
N. Nagata+S.Ikada/I. C. U.
Hisakazu Nakahigashi/Nofuzou
Sosuke Fujimoto
T.Yoshida+M.Okamoto
Izuru Ichihara
Naotaka Obayashi/Kajima Design
Mitsuhiko Sato
Ti-Nan Chi/Chi's Workshop
Dai Nagasaka/Méga
Taira Nishizawa
Ken Yamaguchi+Beam Studio
S. Yoshida+T. Matsumoto+ K. Arima+N. Moriyoshi/ Taisei Corporation

253 **1996**
N. Nagata+S. Ikada+Y. Shimizu/ I. C. U.
Taira Nishizawa
Nagisa Kidosaki&Associates
M. Kuroki+C.Yokota/Nihon Sekkei
M. Sato+M. Yokomizo
H. Sanbuichi+M. Nishio+
T. Tsukada+K. Tsuchiya
Masami Takahashi
Masaru Miyawaki
J. Pysall+P. Ruge/Pysall, Ruge Architecten
T.Yoshida+M.Okamoto
Hideki Yoshimatsu/Archipro
RE[ ]/Responsive Environment
Tohru Miyazawa
M. Yasuda+Y. Sugiyama
M. Watanabe+Y. Kinoshita/ ADH Architects+
T. Mitani+H. Hasegawa/S.E.D.O.

282 The Okoshi-e of Hiroshi Morishima: Forms of Japanese Tradition in Paper 1. New Years — Hiroshi Morishima

285 News — Hiromitsu Umemiya

289 Book Review

293 Metropolitan Library — Takenobu Watanabe

294 Book Information

294 Announcements

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Kazushi Takamori
Production Cooperation:
Takeshi Kuze
Kaoru Teshigahara/guild
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Kanna Hirata
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107-0052, Japan
TEL:
03.5561.2551 [Management]
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Management]
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J
Home Page:
http://www.kajima.co.jp/Group/publish/index.htm

Printed in Japan

This Copy: ¥2,800
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page304

Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID+
Yasuhiro Kusumoto/NID

特集

SDレビューの15年

SD Review 1982-1996

SDレビューが始まった頃

槇 文彦

1980年代の始め、私をとりまくいくつかの状況が偶然重なりあった時期でもあったように思う。ひとつは70年代中頃のオイルショックの影響がまだその頃は残っていて、建築界もどこか閉塞的な雰囲気が漂っていた。特に若いジェネレーションの人たちにとってバブル期のような仕事があった訳でもないし、また今のようにプロポーザル、コンペも殆ど存在しなかった。彼等にとってどこかで何かを発表していく機会を潜在的に求めていた時期でもあった。

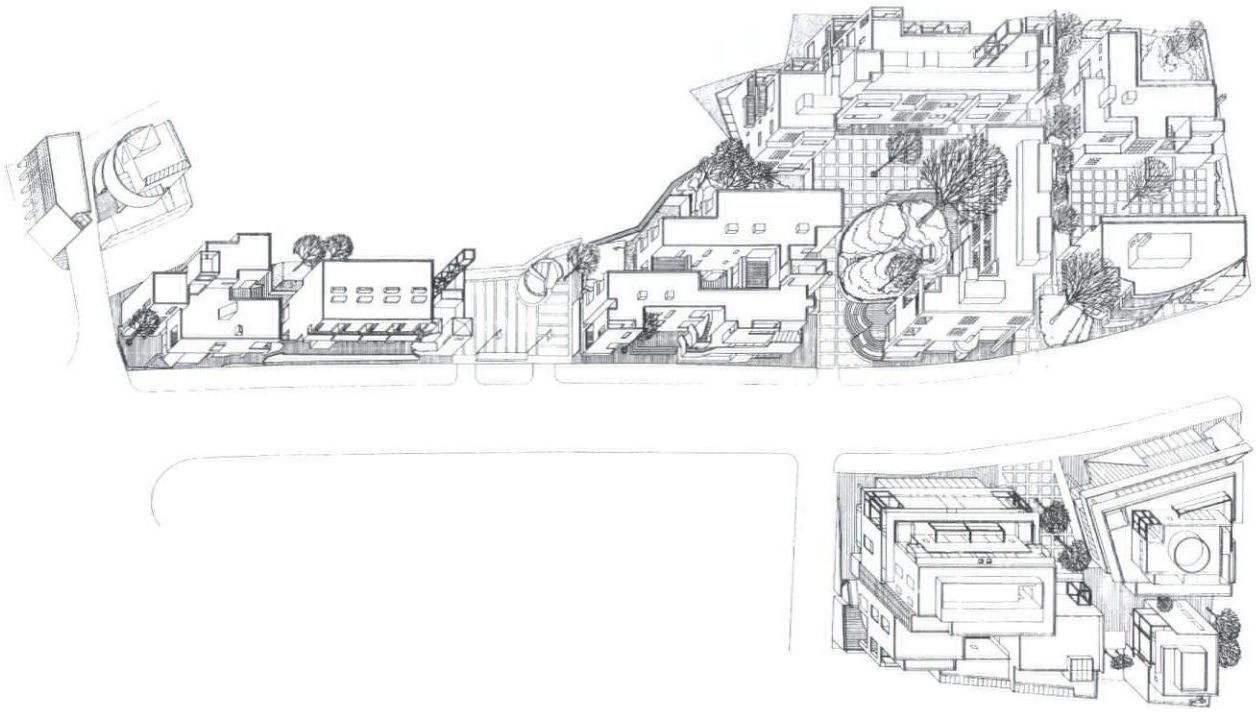
一方、この頃ヒルサイド・テラスの第3期、続けて直ぐ隣りにデンマーク大使館が完成した。第1期の頃と違って漸くこの計画が少しは世に知られるようになると共に、同種のアンビアンスをもった店舗がその周辺に立ち始め、独特の地域の性格が造られかかっていた。たまたま、オーナーの朝倉さんと話をしているうちに、単に店舗、レストラン、集合住居のコンプレックスがあるだけでなく、そこから何か文化性のあるイヴェントを立ち上げる事によって、地域の性格をより幅の広いものにしたらどうかという希望が彼等にある事がわかってきた。恐らくいまでいう「メセナ事業」のささやかではあるがひとつの始まりだったのではなかろうか。こうした朝倉さんの希望に応えるべく、建築やデザインのイヴェントを継続的にやっていくとしたら何がいいだろうかと、粟津潔さんも含めて集まりを何回かもった事もよく覚えている。

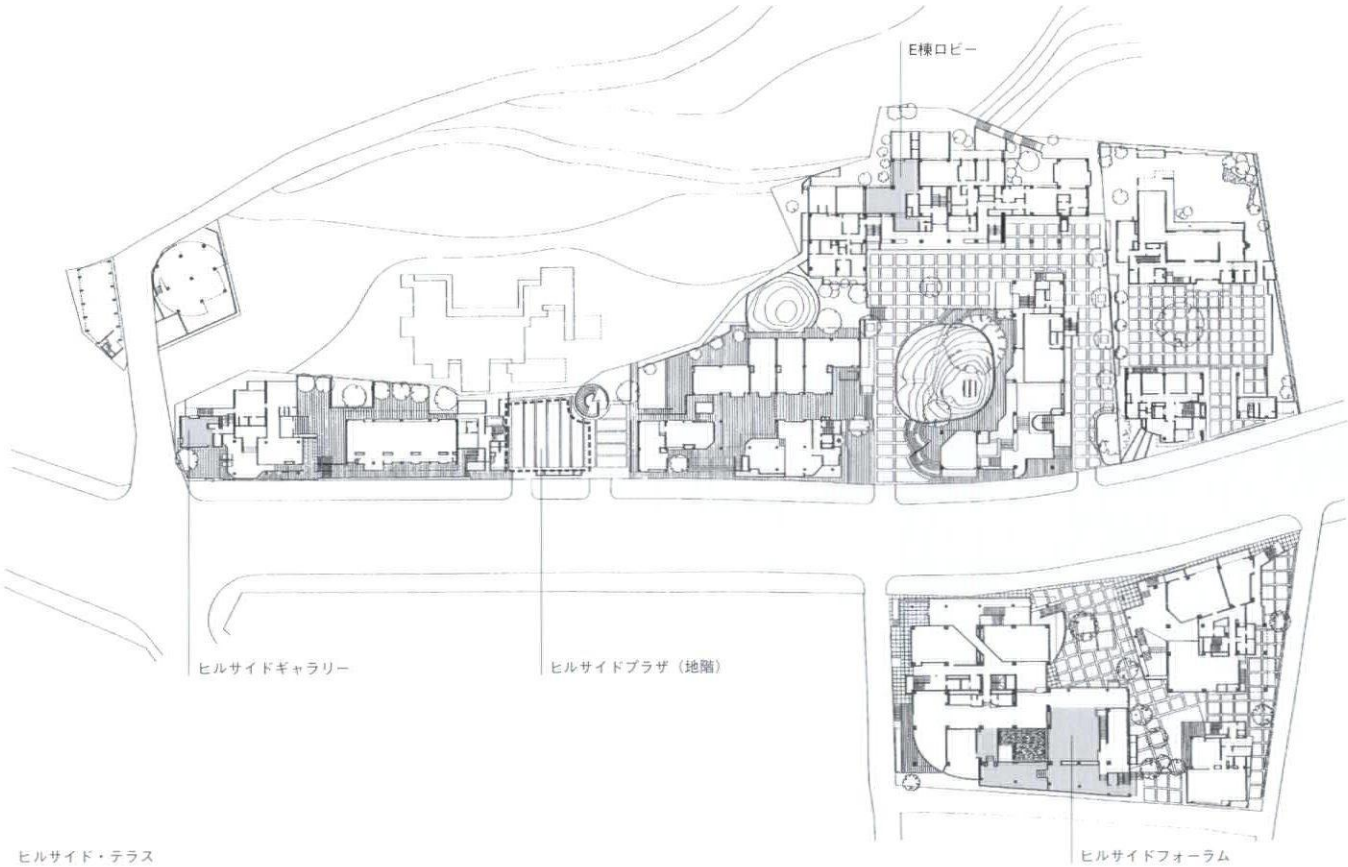
一方アメリカの『PA (Progressive Architecture)』誌が毎年行っていたPAアウォード・プログラムの審査員の一人に招待され、その選考の過程を内側から詳しく得る機会を得たのもその頃だった。PAのこの年間賞は私がまだアメリカの大学に留学した頃から始まった、いわばPA誌にとって顔のひとつとして重要な恒例イヴェントであった。毎年1月号に発表されるその特集号は、当時米国の若い建築家達にとって建築がどこへ向かおうとしているかを知る絶好な指標でもあったので、1月号だけは待ちかねるようにして読んだものである。また、当時第一線で既に活躍している建築家達のドラフティング・テーブルから送られる数々の計画案の中で、新進の建築家が2、3年続けて選ばれる事になれば、彼等にとって建築界への登竜門的意味合いももっていた。私の記憶では50年代から60年代の始めにかけて、このプログラムが産んだ最も華やかなスターはポール・ルドルフであった。そして10年を経て、マイケル・グレイブス或いはピーター・アイゼンマンがルドルフの後に続いたのである。61年だったと思うが、当時ワシントン大学で私が担当して計画中であった小さなメディテーション・チャペルがそのひとつに選ばれた。案がPA誌に掲載される以外に2月頃ニューヨークで案が選ばれた全員が審査員と共に招待されるという行事がついていた。その時の審査員の一人がI.M.ペイであり、私にとって彼と知り合う最初の機会であった。こうした懐かしい想い出と、朝倉さんからの相談、当時の日本、特に若い世代のための建築界の状況、こんな事が幾つか重なって、現在のSDレビューのきっかけとなるアイディアをSD誌の編集長であった長谷川愛子さんにもちかけてみようという事になった。PA誌の場合と異なり、既成の作家よりも寧ろ出来るだけ若い人達にむかってアピールする事と、選ばれた作品をギャラリーに展示するというかたちにする事等によってPAと異なった特色をもたせることにしたいと思った。SDの編集の方々と何回かの打ち合わせによって煮詰めていったのがSDレビューである。単に誌上発表するだけでなく展覧会が行われる事が人気をよんだのだろうか。当初企画する側にあったどの位作品が集まるだろうかという些かの懸念を解消するに足る上々のすべり出しだったと思う。第1回にあたる1982年のSDレビューに選出された人々の中にクリストファー・アレギザンダー、東孝光、アモルフ、安藤忠雄、高松伸、長島孝一、黒川哲郎等の名を見出す。特にアモルフ、安藤忠雄、高松伸等はその後、続けてSDレビュー入選の常連となり、3回位でドクターストップにして貰おうという冗談すら出てきた記憶がある。また、審査員は出来るだけ異なったジェネレーションで構成する、そして何年かで交替制にするなども当初から継続されてきたシステムであり、優秀案の中から更に鹿島賞、朝倉賞が与えられるのもこの企画にひとつの華を添える事となった。

PA誌は去年廃刊となり『Architecture』誌にこの企画は移行されたが当時の建築界にあたえたインパクトは最早ない。

SDレビューの場合、この15年間にヒルサイド・テラスの会場も当初の第1期と第3期にまたがるふたつの小さなギャラリー・スペースから地下にあるヒルサイド・プラザへ、更に5年前に完成したヒルサイド・フォーラムへと移り変わっていった。また、年々応募作品の内容、インスタレーションの方法も的確に時代や特に若い世代の関心が反映していると思う。当初からこの企画に参加したものとして、SDレビューが今後も若いジェネレーションを中心に常に新鮮なものとして育っていく事を望んでいる。

●まき・ふみひこ／建築家




E棟ロビー
ヒルサイドギャラリー
ヒルサイドプラザ（地階）
ヒルサイド・テラス
ヒルサイドフォーラム

SDレビュー15年のメモ・ランダム

1982年に始まったSDレビューも16回を数えたこととなった。これは槇文彦氏の発案のもとに開催され、現在も継続している(SDレビュー開催の契機や草創期、巡回展については本号収録の各氏の論や座談会で触れられているのでご一読いただきたい)。「建築・環境・インテリアのドローイングと模型」の展覧会とその誌上発表という形で毎年行われてきたSDレビューの今日までの足跡を辿り、思いついたことをメモしてみたい。

建築家・デザイナーたちの「実施を前提とした設計中ないしは施工中のもの」という条件で作品を公募し、その中からの入選作を展覧に供すという試みはそれまでなかったように思う。そこには実現されないアイディアコンペとは違い、設計を通して建築家たちが現実社会の中でどう格闘しているのかを見ようとしている新しい視点があった。しかしながら、編集部にとっては試行錯誤の連続で、ましてや展覧会場作りは展示のプロフェッショナルの手によることなく、元倉眞琴氏のボランティアを仰ぎ設営はすべて素人の手作りである。東京展の会場自体は、2カ所の小さなギャラリーを出発点としてヒルサイドテラスの発展と共に、ヒルサイドプラザ、ヒルサイドフォーラムへと移行し、より快適になったのだが、素人の手作り展示だけは現在も変わらない。出展者の方々には展示に関してご不満があろうことは承知しているが、これは権威づけにならぬようにというSDレビューらしさのひとつとも思っている。会場作りのことはさておき、会場が広く充実するにつけ、展覧会でのプレゼンテーションもより密度ある多様な展開が見られるようになった。これは展覧会が継続されることによって出展者たちのプレゼンテーション・テクニックに磨きがかかってきた証左ともいえるだろう。

第4回目(1984年)より、SDレビューも大阪へ巡回することとなった。これを機に関西地区の建築家たちのパワーが年々強くなるのも感じ取れた。第13回(1994年)でこの大阪展も諸般の事情により一時中断となってしまった。しかし第15回(1996年)に、場所をかえて大阪展が復活した。これで再び関西地区の建築家たちのSDレビューに向ける力も持続されることだろう。

また1987年から5年間(第6回〜10回)、金沢展が開催され、さらに多くの人々の目に触れられることとなった。地元紙にもSDレビュー展が紹介され、この年頃から増々の熱気を感じた。さらに翌年には、スイスでのチューリッヒ展が実現され、SDレビューも海外へ渡った。外国展はこの年限りのものではあったが、1988年は4カ所を巡回することとなった。またこの時日本はバブル期に突入しており、応募作品におけるその数でも、プログラムでも、プレゼンテーションでも、最も盛り上がりを見せた時期といえる。これらの巡回展と同時に、竹山実氏が大阪展(第4回1985年)で、原広司氏が金沢展(第6回1987年)とチューリッヒ展(第7回1989年)でSDレビュー記念講演会が開かれた。また、1991年に第10回記念として東京において、それぞれ5年間審査委員長を務めていただいた槇文彦氏と原広司氏の対談(司会=團紀彦氏)が行われ、両氏のSDレビューへの眼差しが語られた。この10年間でSDレビューも確固たる存在となったように思う。

第3回(1984年)から毎年約15〜20の入選作品の中からさらに優秀作品数点に賞(例えば1996年は、鹿島賞、朝倉賞、SD賞であるが、年度によってはあと数点が賞の対象として選ばれた)が与えられることになった。こうしたことにより、入選者にとっても記念性が高まると共に、プロジェクトによっては、SDレビューに入選したことや、さらに賞を受賞したことが実現への後押しをするという役割も担っていたようだ。

ちなみに、賞品としては年によって違いがあったが、海外の著者、建築家、デザイナーのデザインによる、銀製ポット、銀製トレイ、銀製キャンドルスタンド、銀食器セット、サーリネンの椅子、カレッジバック、照明器具、壁掛け時計、卓上計算機等々が贈呈された。この場をかりてそれぞれのスポンサーに感謝したいと思う。

SDレビューも現在では、若手建築家の登竜門的色彩が濃いものと認知されているが、初期の数年間の入選者の中には、東孝光、安藤忠雄、伊藤哲夫、長島孝一、小宮山昭、鈴木了二などが常連として名を連ねており、応募者の世代としても幅広く、第一線で活躍している建築家たちの仕事を垣間見ることができた。また同時期数名の招待建築家にも出展依頼し、華を添えてもらったが、これは当時、入選者だけの出展で展覧会としての密度やパワーが保たれるかという危惧があったためだが、そうした配慮は無用といえるほどの力作が出展された。

しかし、年を重ねるごとに、第一線で影響力のある活動をしている世代の建築家たちの応募が減少し(もうSDレビューは卒業だと思われているようで)、若い世代が着実に増えている。SDレビューの目的にある、「若手や東京圏以外で活躍している建築家たちの発表の場、交流の場となる」ことはかなり満たされてきており、それを持続することはもちろん重要なことと思うが、そこに偏ることなく幅広い世代の現況を眺めることができる展覧会として機能してもよいようにも思える。そのためには、新たな土俵を用意すべきなのか、主催者側としては大きな課題として受けとめている。

展覧会でのプレゼンテーションについても初期の頃よりはかなり出展者に対して自由度を高めてきてはいるが、展示スペースの都合や、前述したように手作りの展示でもあることから出展者の方々には何かと不満の残ることがあると思う。さらに今後は若い世代によるプレゼンテーションの手法が変わってくる可能性は大いにあると思える。それに対処できる展覧会場のしつらいも考慮する必要があるだろう。

そしてSDレビューが実現を前提とするプロジェクトを通して現状の問題点に対して建築家がどう向き合っているのかを見せる場として機能するためには、現在のプレゼンテーションだけではない、もっと現況のわかるリアリティある表現手段が望まれるのかもしれない。

また、より広い建築の状況を捉えようとするならば、海外の建築家たちの参加を積極的に呼びかけることも考えていくべきとも思える。

今日のSDレビューも多くの方々の協力によって、さまざまな「動き」を孕みつつ継続することができてきたのである。今後のSDレビューも、すべてが定形化されたものとしてではなく、徐々に動き続けるレビューとして存在するものだと思う。(編)

SDレビューの軌跡：1982–86年

飯島洋一

「SDレビュー」の第1回展が開かれたのは、いまからちょうど16年前の、1982年である。私はこの論を書くにあたり、「SDレビュー」が80年代に始まった企画であることに注意すべきだとまず言っておきたい。それは第1回の「SDレビュー」の記録が掲載された雑誌を眺めてみればわかることだが、そこに展示されている作品は、いま見ると、その多くが80年代的な志向性を指し示していることに気づくのである。

しかし「80年代的な志向性」とは、具体的にはどういうことだろうか。たとえば見田宗介は、その著書『現代日本の感覚と思想』の中で、この難しい問いに対して、実にうまいこたえ方をしている。少し長いが、肝心な部分を引用してみよう。

「現実（リアリティ）との関わりということで言うなら、『理想』に生きようとする心性と『虚構』に生きようとする心性は、現実に向かう仕方を逆転している。『理想』は現実化（realize）することを求めるように、理想に向かう欲望は、また現実に向かう欲望である。表現のさまざまな様式の歴史において、リアリズムという運動が多くのばあい、理想主義的な原動機に裏打ちされているように、理想の時代は、また『リアリティ』の時代であった。虚構に生きようとする精神は、もうリアリティを愛さない。1980年代の日本を、特にその都市を特徴づけたのは、リアリティの『脱臭』に向けて浮遊する『虚構』の言説であり、表現であり、また生の技法であった」[*1]。

ここで見田が言おうとすることは、80年代には、「理想」が既に終わっているということである。では「理想」とは何か。「理想」とは、たとえば普遍的なものを求める心性であると言っていいだろう。もっと具体的にいえば、モダニズムとはこの「理想」主義そのもののありようであったといえる。そして見田の見解を借りるなら、「理想」主義者はあくまでも、自らの「理想」を「現実」の延長に位置づけていた。すなわち、「現実」を変革することが「モダニスト＝理想主義者」の革命なのであり、それは絵に書いた餅では済まされないのである。

それに対して、「虚構」は「現実」と、いわば無関係に存在し得る。「虚構」は「現実」を変えようとはしない。「虚構」はそれゆえ、虚構の世界で自己完結しようとする。たとえばモダニズムに対して、その普遍主義を否定したポストモダニズムは、この「虚構」を演じた様式であったということができるだろう。そして見田の言い方を借りれば、この80年代の都市を彩ったのは、「リアリティを愛さない」「虚構」のありようであり、「都市を特徴づけたのは、リアリティの『脱臭』に向けて浮遊する『虚構』の言説であり、表現であり、また生の技法であった」わけである。つまり80年代とは、ポストモダニズム（虚構）の時代であったわけだ。

個人的な話をすれば、私はこの「SDレビュー」を、かなり初期の頃から見ていた。その印象をいま思い出してみると、そこにはある奇妙な空気が、最初から色濃く漂っていたと記憶する。その印象を一言でいうと、やはりさきほどの見田説のような、それはある種のリアリティに対する希薄さであったと思われる。それが最初の頃から、この展覧会にはかなりはっきり見られたのである。わかりやすく言えば、それはいまも述べたような「虚構」のありようであり、「ポストモダニズムという空気」にほかならなかった。「SDレビュー」は結果的に、その点において70年代とはっきりと一線を画す展覧会となっていた。

念のために言うが、私は何も、80年代の「SDレビュー」の作品群が著しくポストモダニスムを謳歌していたと決めつけたいわけではない。1982年度の第1回展を見ても、その中には、いまだに「理想」の時代を生きているような作品も見られるからである。また第1回の審査委員による座談会の中の、たとえば槇文彦の次のような発言をみても、それは明らかなことである。槇はそこで次のように言っている。

「最近流行のポストモダニズムうんぬんの過程の中で、モダニズム自身の中にもまだ何かあるんじゃないかという見直しがなされる一方、ポストモダニズムと呼ばれるものの中にもより抑制されたかたちのものが出てくるとか、ふたつが絡みあって新しいものが生まれてくるというような現象があって、結果はともかくとして……ずいぶんみじめなポストモダニズムの建物もありますから……、ものの見方としてはポストモダニズム論議にもかなりの貢献度が認められると思うんです」。

槇がここで言っているのは、ポストモダニズム（虚構）へと全体が流れる中で、しかしいまだにモダニズム（理想）を追い求めているような動きもあるという感想である。彼が中盤でいう、ポストモダニスム（虚構）とモダニズム（理想）の「ふたつが絡みあって新しいものが生まれてくる」という部分は、（虚構と理想が絡むことは原理的にあり得ないから）一体何が言いたいのかよく理解できないが、ともあれこの槇の発言からも、82年には早くも新しい動き、つまり「理想」でなく「虚構」を求める段階に入りつつあるということが、できるのではないだろうか。そしてこの翌年の1983年、ポストモダニズムは磯崎新の〈つくばセンタービル〉の完成によって、揺るぎの無いポジションを獲得することになるのである。

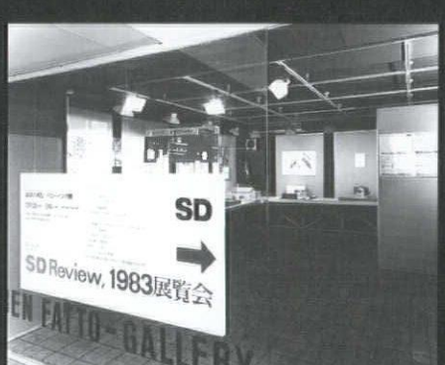
こうして私は、「SDレビュー」とは、この「虚構」へと向かう動きを、この後もずっと展示し続けてきた企画であったと考える。そのことは回を追うごとに明らかになってゆくが、それに関しては具体的な作品を通して見ることにしよう。「虚構」への志向性は、まず1982年の第1回展では、高松伸の作品と鈴木了二の作品によく出ている。この二人が、「SDレビュー」の前半期をひっぱってゆく役割を果たすことは、決して偶然ではない。

この時、高松が提示したのは京都府城陽市の〈寺田の家〉という作品である。この作品

第１章

新たな建築展へ向けて

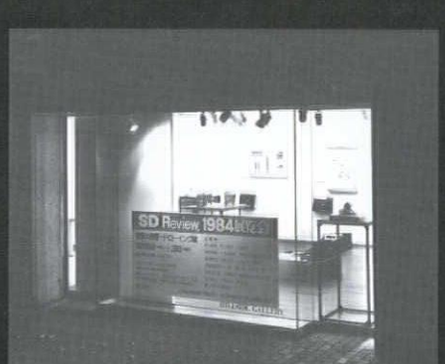
1982年-1986年



1983年第1会場　ヒルサイドテラス、ベンファット・ギャラリー



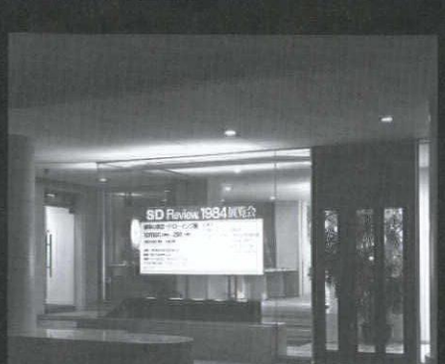
1985年第2会場　ヒルサイドテラスE棟ロビー



1984年第1会場　ヒルサイド・ギャラリー



1986年第1会場　ヒルサイド・ギャラリー



1984年第2会場　ヒルサイドテラスE棟ロビー

は翌年に出来上がっている。高松はすでに81年に〈織陣 I〉を、さらに83年には〈ARK〉を完成させているから、彼の最初期は既に順調に始まっていた時だった。〈寺田の家〉は、「SDレビュー」の場合と、ほぼ同じかたちで出来上がっている。この家で特徴的なのは、切り妻屋根の家の2階の真ん中を走り抜ける、吹き抜けの空間で、そこでは家型が入れ子のように4つ向かい合って、家の中にもう一度、外部の街並がつくり出されたような演出がされている。それはまさに「虚構」の都市といえるものであり、その虚構の風景は、現実の都市とは何らつながりがないのである。高松の作品は、ここでは「理想」から遠く隔たれたところにある。その空間はまさに、「リアリティの『脱臭』に向けて浮遊」しているといえよう。

実際「SDレビュー」で高松は、「この様ないわば不完全な空間は一種のエア・ポケット……、脱落の空間とでも呼べる空間を拡散する時間の中で唐突に刻印するかもしれない。極めて小さな住居にぽっかりとあいた異郷」と言っている。ここで高松のいう「エア・ポケット」こそは、先の室内の吹き抜けが、「現実」から「脱落」している場所であることをまさに指し示している。それは「理想」のように「現実」を変えようとはしない。むしろ「現実」から隔たった場所に、「異郷」を生み出そうというのだ。つくりものの世界としての「異郷」を。

またfromnowの時代の作品としての、鈴木了二の〈Seijo First Building〉は、〈成城ファースト—物質試行10〉という名で82年に完成しており、私もこの作品は実際に見たことがある。外皮の複雑な断片が織りなすパターンが特徴だが、同時にそれらの断片は、エッジを見せつけるのではなく、むしろそれらが相互に溶け合うようなさまになっていて、鈴木独特の仕上がりになっている。鈴木はこの外皮のプレゼンテーションを展覧会では提示したが、その破片の意味するものが、失われた「理想」の残骸であることは言うまでもないだろう。

高松は83年の「SDレビュー」にも〈六地蔵の家〉を出品し、84年には〈修学院の家 II（欠けた刃）〉を出品している。それは「欠けた刃」という副題がつけられているように、全体が一個の鋭利な刃物のようなシャープな形態である。欠けた、と高松がわざわざいうのは、そこに樟の木のある庭があって、最初からその部分が欠落されたようにデザインが進められているからである。高松はこの「木を理由もなく残すことに決めた時、この建築は欠損をのっけから受け入れてしまったと言える」と「SD」誌上で語っているが、それは彼が言うように、はじめから現実的な理由などのない「理由」によってつくられた「欠損」なのであり、この「欠損」は、先の〈寺田の家〉の内部の吹き抜けに呼応する「虚構性」を有している。実際に高松自身も、後に〈修学院の家 II〉（1985年）として完成し、この作品を収めた作品集でも、この中庭を「システムの心臓部に位置する空洞、いわば虚の部屋」[*1]と言っているのである。

また同じ84年に〈杉並の住宅—物質試行13〉（同年に竣工）を出品した鈴木了二は、作品（住宅）中を貫通するカーブする壁＝Rを他者と見立て、それとの関係性を模索する作品を提示したが、彼はそこで、「ゲームとは、いつもそんな始まり方をするものらしい」と、このカーブする壁＝Rとのかかわりを実にシニカルにとらえている。この感覚は、明らかに、もはや「理想」は失われたことを表明する作家の乾きそのものであろう。

つまり建築という行為は、この80年代にあっては、「虚構」にくるまれてゆく過程において、「ゲーム」と化してゆくのである。設計とは操作でしかないという80年代後半の高度情報化社会に向かおうとしていた気分が、私には、この時代を生きた建築家たちの偽らざる心境としてあったと考える。そのゲームを、この上ないほどに明快にやって見せたのが、84年に出品した早川邦彦の〈Shirasagi Complex〉である。

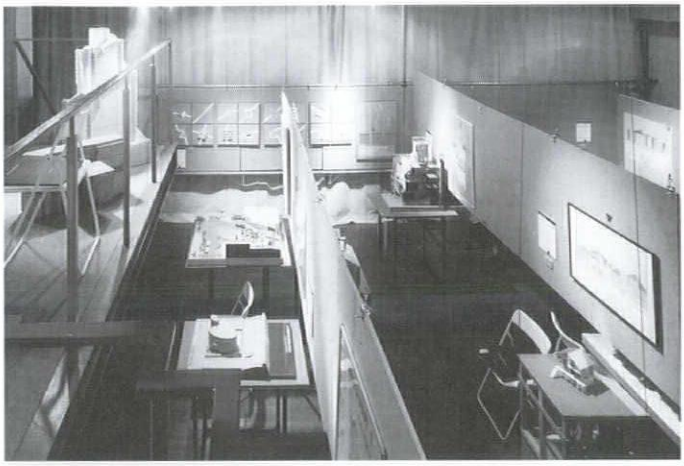
85年に〈アトリウム〉という名前で完成し、早川邦彦の代表作となるこの集合住宅は、展覧会の際にはずいぶんと抑制されたプレゼンテーションであったが、実際の建物は全体で18色もの色が使われ、中庭だけでも、ピンク、ブルー、グリーン、ベージュという具合に極彩色の空間が織りなされている。中庭にはチェッカープレートの模様が地面にはめこまれ、三角の壁がそのまま手摺りとなり、小さなプールが置かれ、集落のようなアーチの通路が設けられている。無関係ともいえるさまざまな要素が並列化され、操作されるこの手法はポストモダニズムの典型的なあり方であり、同時にそれはファッショナブルな80年代の感性にもぴったりとあてはまるものであった。後にこの建物が「もうリアリティを愛さない」主人公たちの出て来る乾いたトレンディ・ドラマの舞台となった事実は、決していま述べたことと無縁ではあり得ない。早川はこの〈アトリウム〉をはじめとして、この後も、生活感の希薄な演劇化された日常の舞台としての家をつくり続けることになる。

ともあれ、この早川の作品と、85年の招待作家である高松伸の〈ひなや本社第3期工事〉、すなわち後の〈織陣 III〉（1986年）のめざましい過剰性によって、ポストモダニズム（虚構）は、いよいよ前半の一つのピークを迎えることになる。

●いいじま・よういち／建築評論家、多摩美術大学助教授

*1：見田宗介『現代日本の感覚と思想』講談社学術文庫、1995年

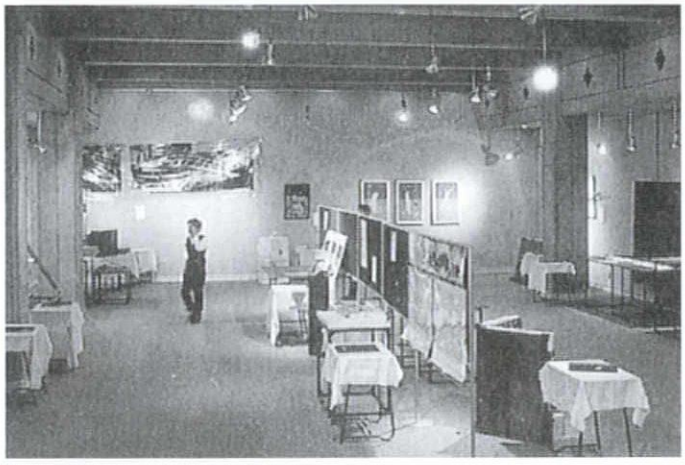
*2：『GA Architect 9「高松伸」』A.D.A.Edita Tokyo、1990年



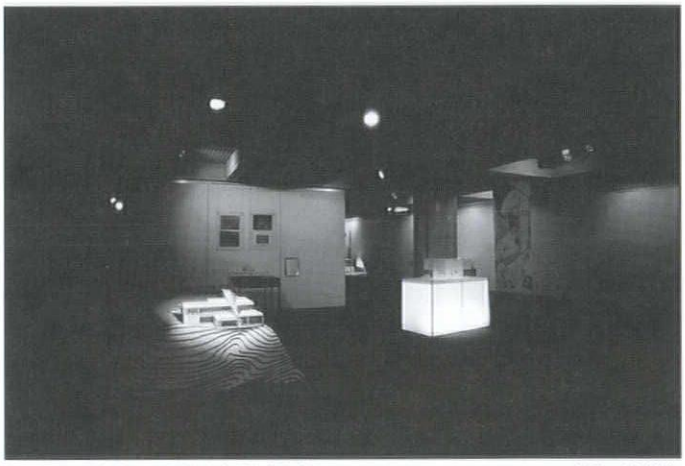
1985年大阪展会場――都住創センター　　写真＝ヘキサ



1988年チューリッヒ展会場――チューリッヒ工科大学（E.T.H Honggerberg）



1990年金沢展会場――金沢工業大学ライブラリーセンター



1996年大阪展会場――大阪芸術大学芸術情報センター　　写真＝難波美加

次ページからの入選作品紹介に関しては以下のように編集しています。
・記載のない模型写真はすべて堀内広治氏（新写真工房）の撮影です。
・出展者名は当時のものを使用しています。団体に所属する一部の方が出展した場合、「担当者名、代表者名／団体名」という表記をしています。
・作品名は出展当時のものを使用しています。竣工後に作品名が変更になったものは（　）で記しています。［　］はサブタイトルに相当するものを表しています。
・実現した作品には、作品名上部に―のマークがついています。
・連絡先が不明の方、諸事情により今回新たな資料の掲載を希望されなかった方および招待建築家の方のページは、当時のSDレビューを紹介した本誌から解説文、ドローイング、図面等を再録しています。

第1回　1982年



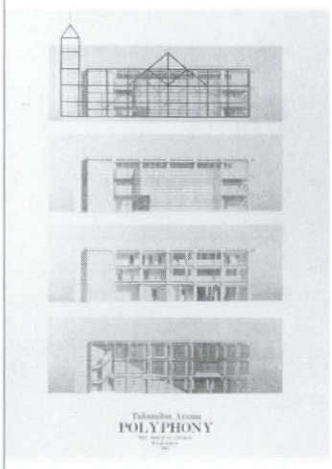
写真＝堀内広治

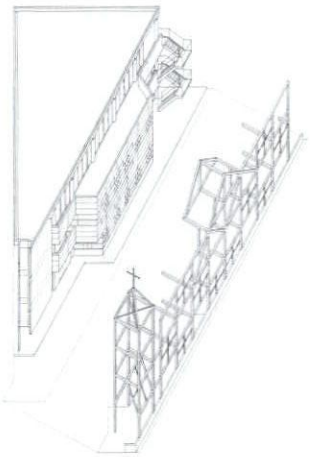
東京展：10月15日～10月28日
第1会場：ベンファット・ギャラリー
第2会場：ヒルサイドテラスE棟ロビー
審査員：槇 文彦、鈴木 恂、元倉眞琴、布野修司
応募総数：64作品
入選数：17作品、招待2作品

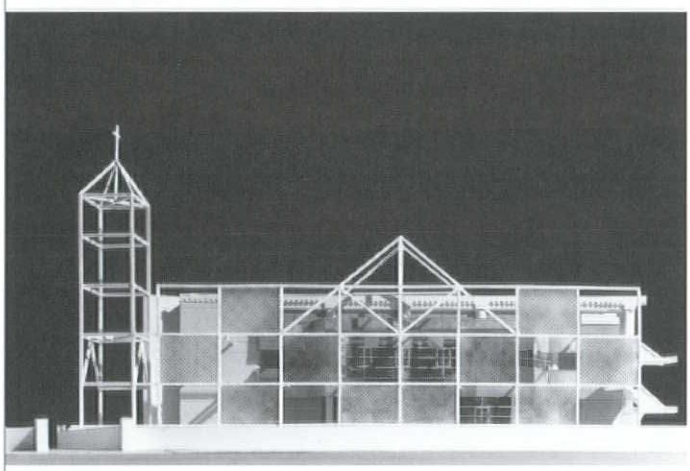
東 孝光　聖書キリスト教会・高田馬場会堂
クリストファー・アレグザンダー　札幌のアパート
安藤忠雄　六甲ハウジング
伊藤哲夫　鎌倉楕円の家
岩村和夫　バトーコック［Bateau Coq］
鹿島建設設計部　かこいの家
黒川哲郎　伊東邸
小宮山 昭　W邸
坂倉建築研究所　東大和市立中央図書館
佐々木 繁　高橋邸
設計組織アモルフ　高尾の歯科医院
高松 伸　寺田の家：House with the Valley
武澤秀一　F会館
長島孝一+AUR　聖アンデレ教会
日本設計事務所　国営沖縄海洋博記念公園・熱帯ドリームセンター
林 賢次郎　音楽箱：ある音楽家のための練習室
fromnow　Seijo First Building
象設計集団（招待）　T邸
谷口吉生（招待）　清春・白樺美術館

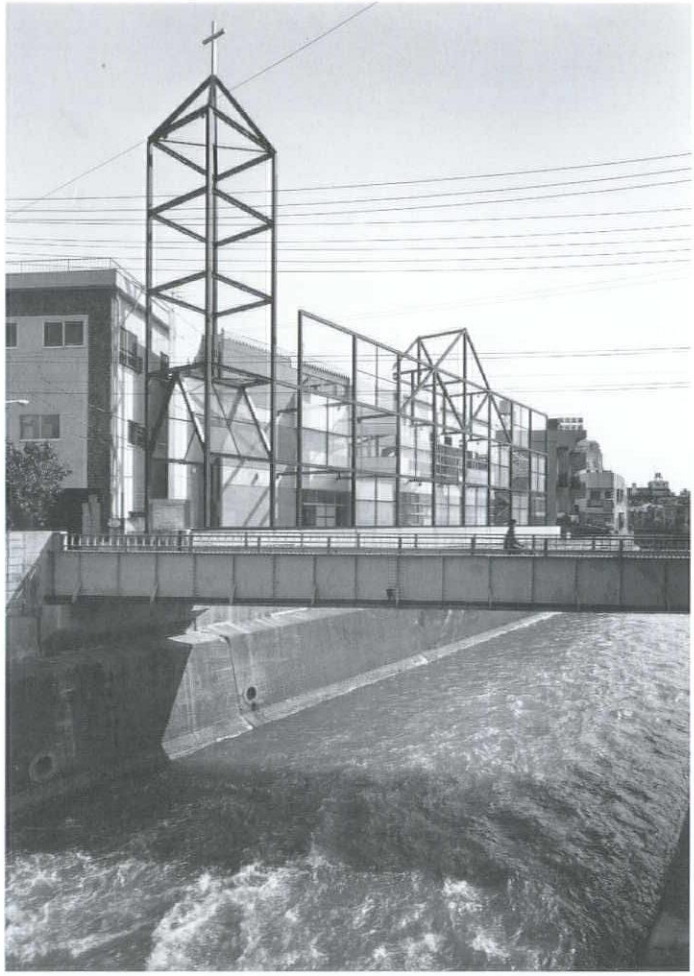
東 孝光

聖書キリスト教会・高田馬場会堂
(聖書キリスト教会会堂)











写真(右2点)＝大橋富夫

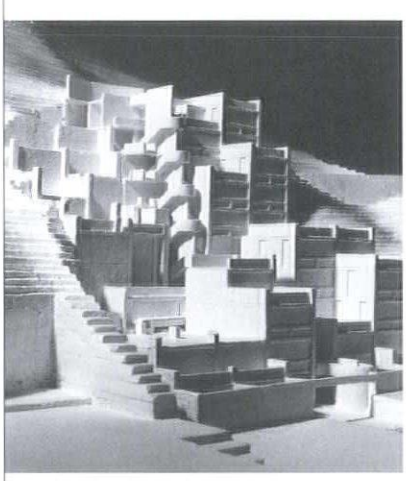
東京、山手線高田馬場駅に近い神田川沿いの敷地は、ほとんど道路に点で接する三角形の敷地であり、しかも川岸に沿った一番長い辺が河川敷で恒久建築が許されないという難条件の土地であった。奥にRC造の礼拝室を作り、河川との間に鉄骨造の事務室や牧師諸室を巡らせ、一番外側にコールテン・スティールの骨組みにエキスパンドメタルを市松に張って教会の外観を表現するという複合的表現に挑戦した。SDレビューの応募は、教会に提出したプレゼ用の書類をそのまま使って入選した。POLYPHONY のタイトルで3重の外観と室内断面を表現したポスターを作ったのは、SDレビューの展覧会のときであった。その後建築は完成して外観の内部に光と影の模様が映し出されるという特異な表現が魅惑的であった。その後、教会は河川改修の用地としてこの土地を東京都に売り渡し、設計者には取り壊しの期日が知らされないまま、1996年のある日、この建築は地上から姿を消した。POLYPHONYのドローイングはコロンビア大学図書館の建築家のコレクションに所蔵されている。

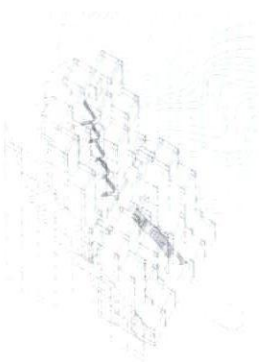
所在地：東京都豊島区
建築用途：教会
構造：RC造、一部S造
敷地面積：425.50m²
延床面積：249.61m²
竣工年：1982年12月

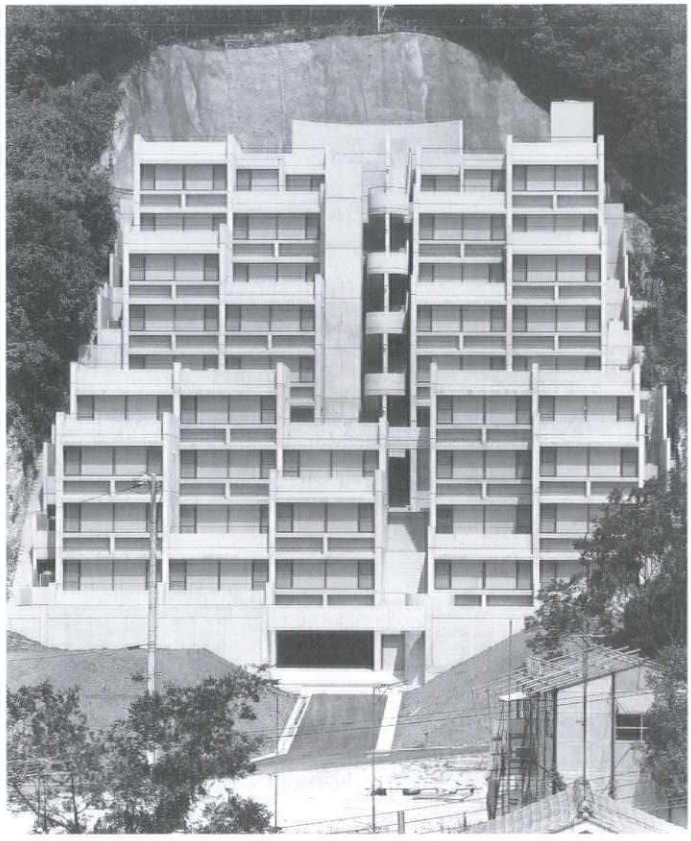
あずま・たかみつ
1933年大阪府生まれ。応募当時東孝光建築研究所主宰。現在千葉工業大学工業デザイン学科教授、建築家

安藤忠雄

六甲ハウジング（六甲の集合住宅 I）







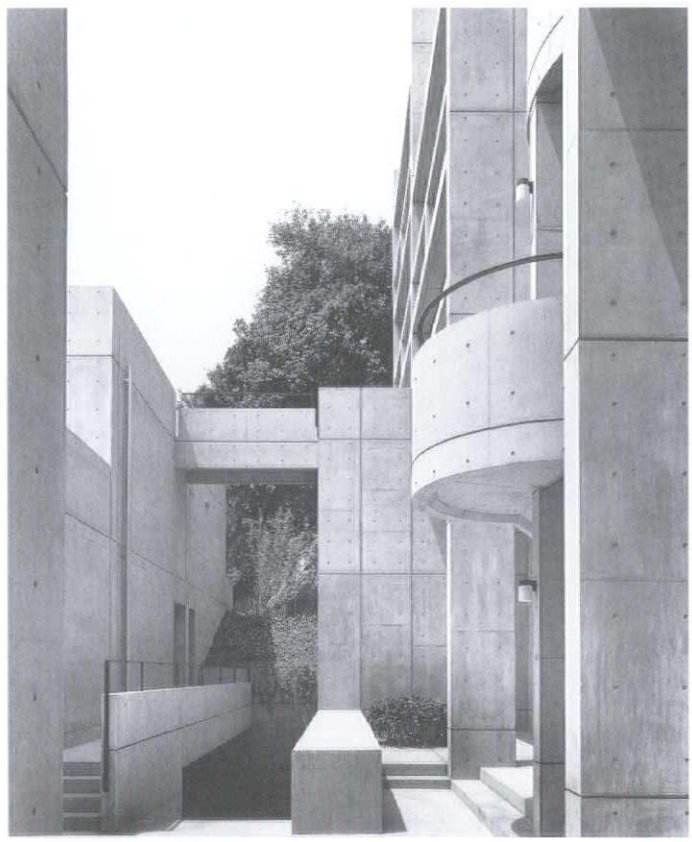


配置図

敷地は、海と山が接近し瀬戸内海に面し南側斜面が連続する阪神間の、神戸の市街地を見下ろす急斜面にある。周辺は緑で覆われている。その緑を海に見立てて帆船が海に漂っているように、建物が緑の中を漂うことをイメージした。そのため建物は傾斜に沿わせた形で大地に埋め込まれている。建物は5.8m×4.8mのユニットの集合とし、シンメトリーを基本としながら、中央に階段を配し、建物の隙間から海が眺められるように配置した。ユニットは場所に応じて一戸一戸すべてが異なる個性的な住居をつくっている。60度の勾配を実際に目にして、本当に実現できるのだろうかと不安をもったが、83年に完成することができた。当初考えていたことをほぼ実現することができたと思っている。その後、隣の敷地に計画した第2期の建物は、93年に竣工した。さらに、第3期が99年春の完成を目指して現在工事中である。第2期、第3期の敷地面積はそれぞれ、第1期の約4倍、約8倍である。

所在地：兵庫県神戸市灘区
建築用途：集合住宅
構造：RC造
敷地面積：1852m²
延床面積：1779m²
竣工年：1983年

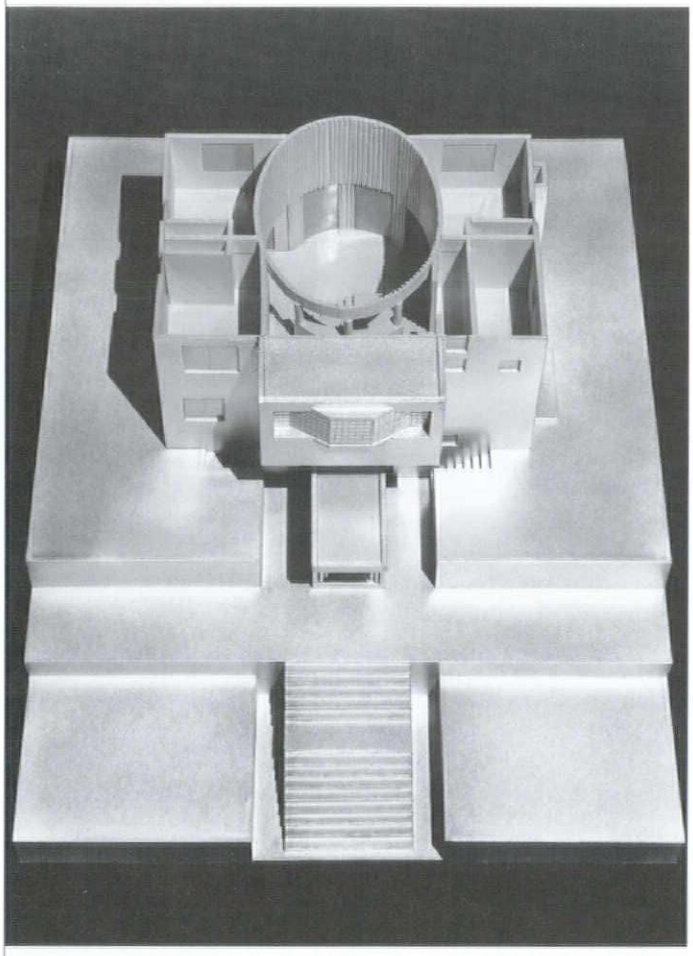
あんどう・ただお
1941年大阪府生まれ。建築家

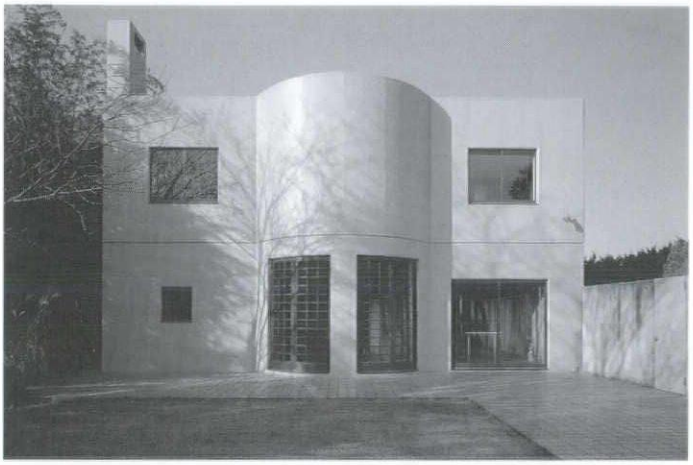


写真（右2点）＝新建築写真部

伊藤哲夫

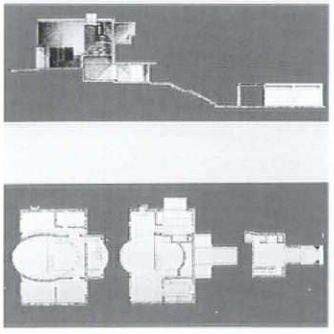
鎌倉楕円の家

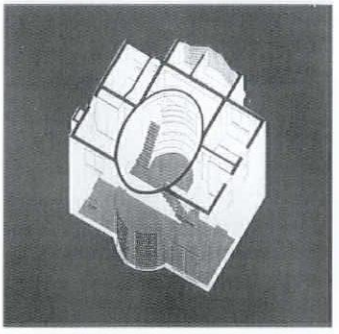






写真（上2点）＝堀内広治





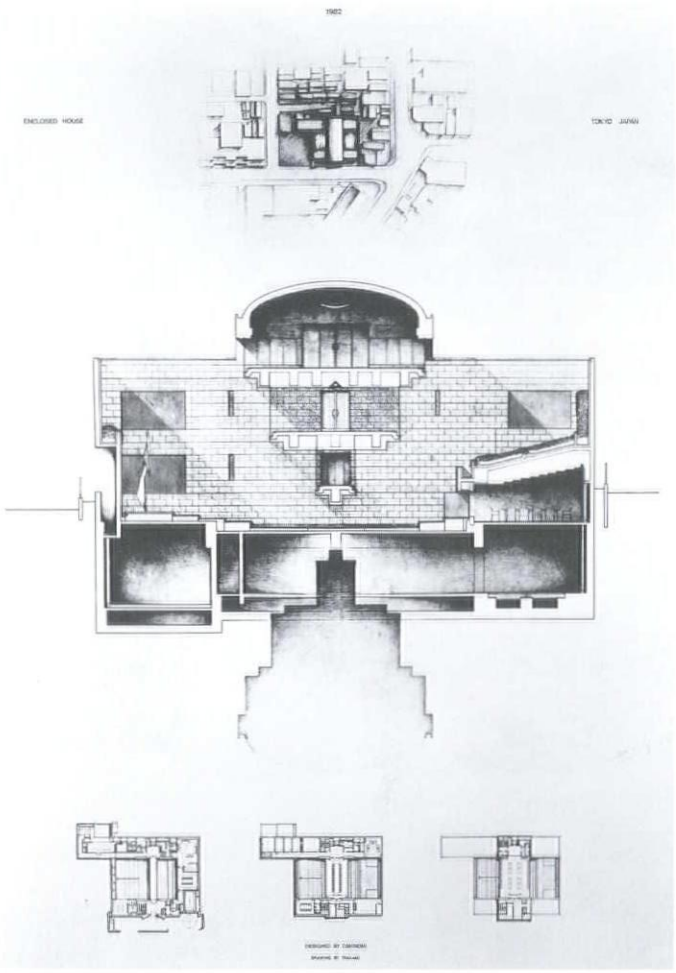
楕円の空間性を手懸かりに、住宅の内部空間のつながりを模索にした習作です。応募したのは、皆さんに見て頂いて、議論の種にでもなったら、と思ったわけです。実際の施工に際して、特に天井の形態、材質などに悩み、考え巡らしました。完成してみますと、上から見おろす方が楕円空間の効果が大きいことを認識し、次の機会にこれを狙いたいと思ってます。

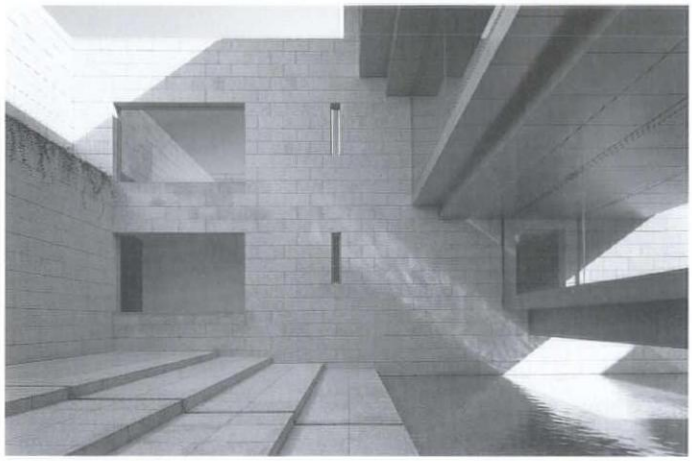
所在地：神奈川県鎌倉市
建築用途：住宅
構造：RC壁式構造
敷地面積：2,589.95m²
延床面積：174.76m²
竣工年：1982年10月

いとう・てつお
1942年山口県生まれ。伊藤哲夫建築計画研究室
主宰

鹿島建設設計部

かこいの家（桧町研修所）







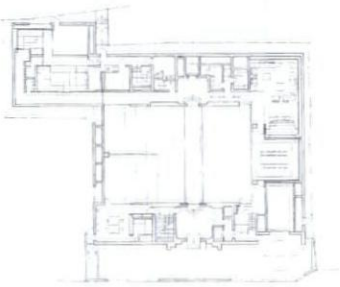
写真（右2点）＝高瀬良夫（GA photographers）



2階平面図



3階平面図





1階平面図

都心の住宅や商店などが密集する界隈に計画された会議室や食堂などの緒室をもつ企業のゲスト・ハウスで、プライバシーを確保しつつ自然光を取り入れるためコート・ハウスとなっている。光の移りゆく様子を敏感に捉えるため中庭を反射のための池とし、その上に大会議室を懸ける断面形状となっているのが特徴である。内庭に射す光は大会議室となっているヴォールト状の蓋で半ば絞られ、登り庭の植え込みや壁のラフ仕上げの御影石に反射し、さらに裏蓋に相当する軒天のアルミパネルにより屈折されて内庭の水面に映り込み、幾重にも反射された光が室内に取り込まれている。室内に取り込まれた光は床の磨き込まれた大理石や漆仕上げのテーブルを照らし、クロスを塗り込めた壁を仄かに舐めるように意図された。坪庭に面した和室にも竹が植え込まれて柔らかな自然光が取り入れられていて、全体として光を重視した都心部における新たなコート・ハウスの可能性を示すことができた。

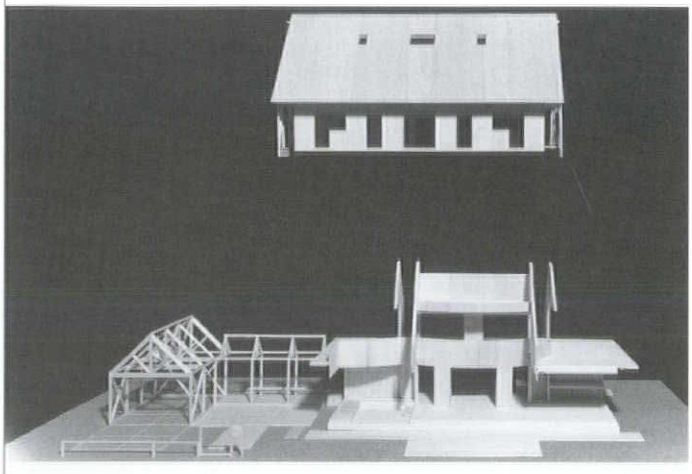
（押野見邦英）

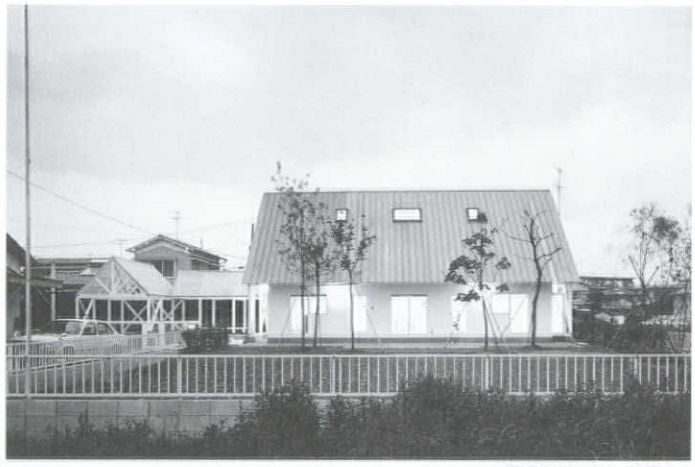
設計者：押野見邦英
所在地：東京都港区
建築用途：ゲストハウス
共同設計者：石井幹子デザイン事務所（照明デザイン）
構造：RC造、一部SRCおよびS造
敷地面積：1,222m²
延床面積：2,338m²
竣工年：1983年

おしのみ・くにひで
1941年東京都生まれ。応募当時鹿島建設設計部勤務。現在KAJIMA DESIGN勤務

黒川哲郎

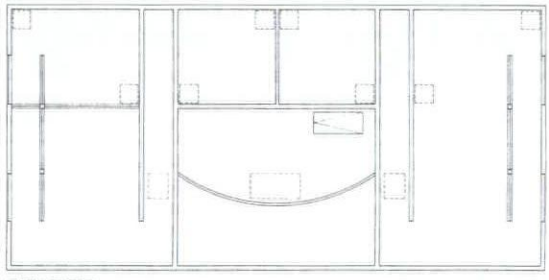
伊東邸



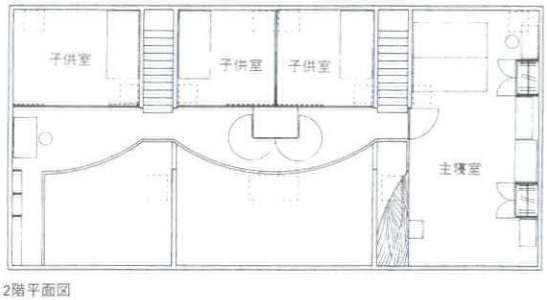


写真（左下、右）＝大橋富夫

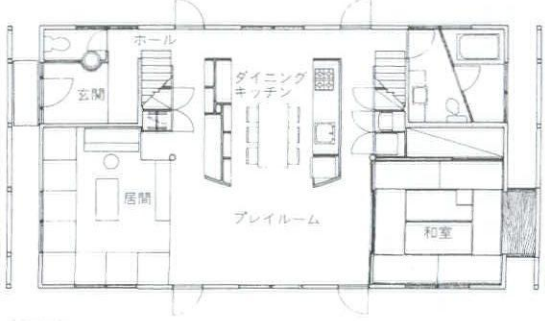




屋根裏平面図



2階平面図



1階平面図

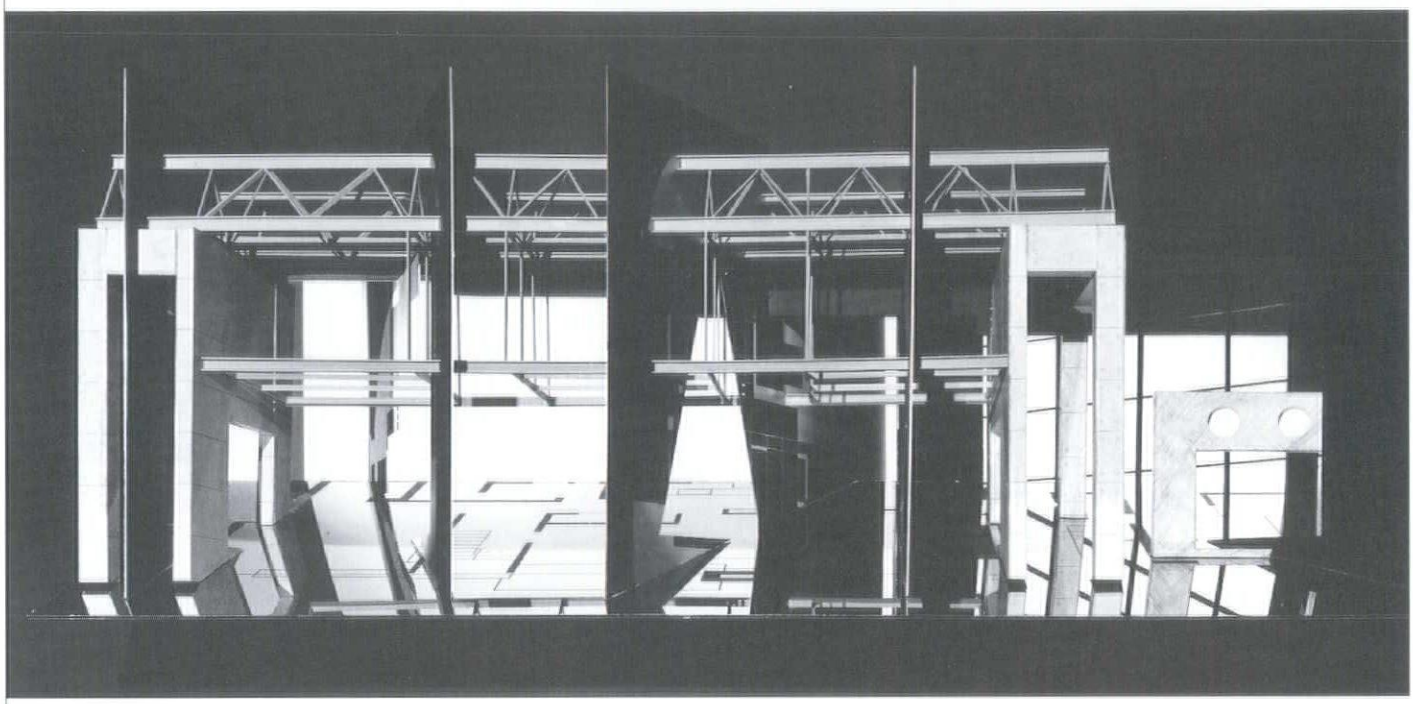
550m²の空間の中に、コモンス・ペースが1階の14.4m×7.2mの床一杯にひろがり、2階の若夫婦と幼い3人の子供たちのプライベート・スペースがその上に蓮弁のように浮かんでいる。山形屋根を結ぶ2組4枚の隔壁が2階に最小限のプライバシーを刻み出し、そこを貫通しながらゆるやかな曲線を描くギャラリーは子供たちだけの世界である。4枚の障壁と2階の床版は1階を、アルコーブ状の居間、食堂、客和室、コア状のエントランスとサニタリー、そして3つのアルコーブをつなぐギャラリーの6つの空間に分節する。空間相互のミューチュアル・スペクテーターシップな関係は、1階と2階それぞれのギャラリーを、最も多様な光景（シーン）を描き出す。床版の生み出す重層性と隔壁の造りだす虚の透明性は、ワンヴォリュームの空間を背景的な風景（シーナリー）とし、日常生活に日々刻々に変化するシナリオを描きつづけている。

所在地：大分県大分市
建築用途：住宅
共同設計者：デザインリーグ
構造：木造2階建
敷地面積：815.59m²
延床面積：164.83m²
竣工年：1982年12月

くろかわ・てつろう
1943年大分県生まれ。東京芸術大学建築科助教授

小宮山昭

W邸



だいぶ前のことなので確かではないが、建主の要望を聞きながら2年位は設計していたと記憶する。

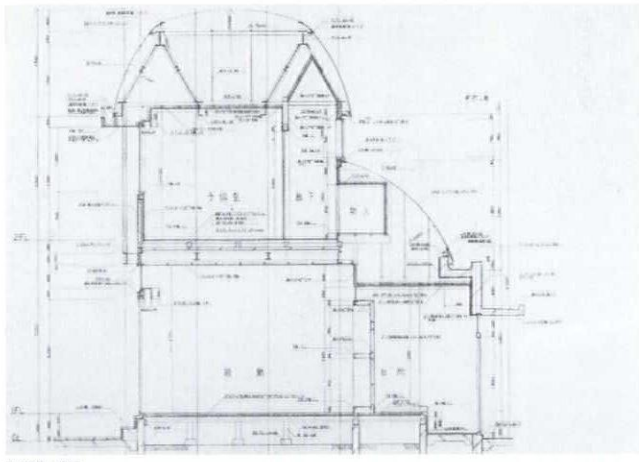
結果的には悲劇的にも没になった。原因はこちらから言えば、住み手と建主が違うことだった。

夫婦が子供達と住む家なのだが、お金を出すのは奥さんの父親だったのだ。口は出さないといっておられたお父さんの、こんな変な家はだめだという一言で設計は全てご破算となった。相手の方から見れば初めから、私は提案のきつすぎる設計者だったのかもしれない。

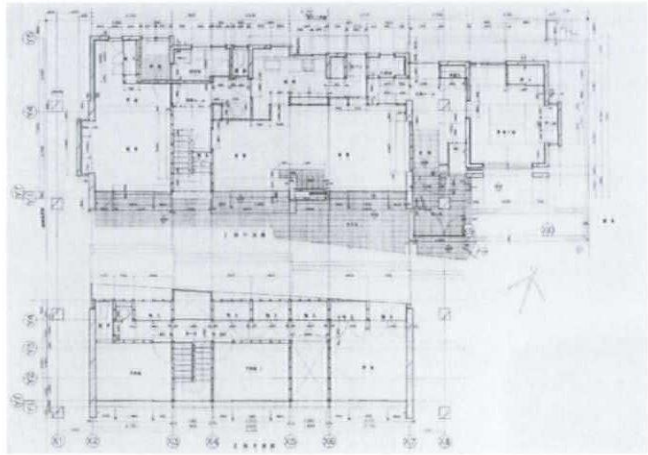
コンクリート造の門型の柱脚の上に2本の鉄の立体トラスを渡して、このトラスから2階を吊り下げ、1階を広い庭に思いっきり開こうとした。この提案は振り返ってみても筋の通ったものだ。菊竹清訓のスカイハウスを意識していたのかもしれない。一方、住宅のようなスケールで大袈裟な構造かなという悩みもあったことを記憶している。この作品は自分ではとても気に入っていたので、実現しなかったのは何とも無念だった。

所在地 ：東京都大田区
建築用途 ：住宅
共同設計者 ：赤堀忍、伊藤寛
構造 ：S造、RC造
敷地面積 ：500.7m²
延床面積 ：183.0m²

こみやま・あきら
1943年東京都生まれ。応募当時小宮山昭＋アトリエR主宰。現在ユニテ設計・計画主宰

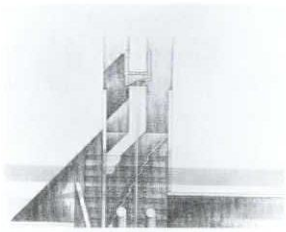
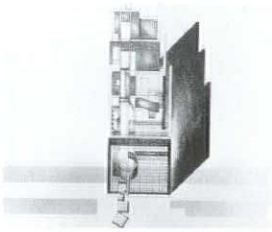
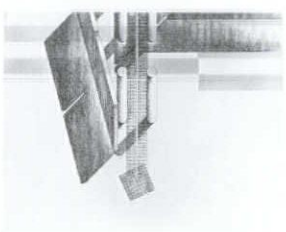
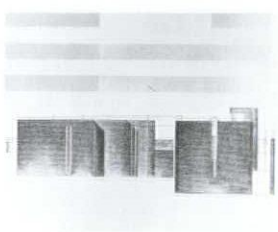
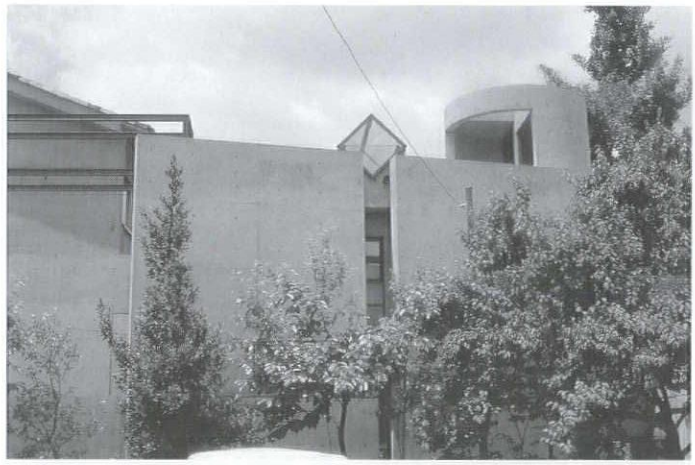


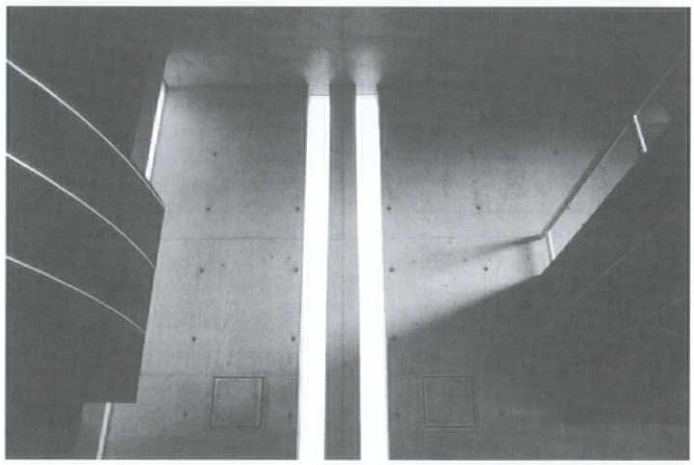
断面詳細図



平面詳細図

高尾の歯科医院（高尾の歯科医院+住宅）

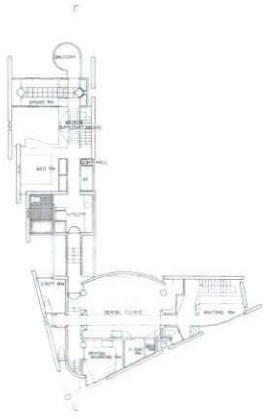


写真（左下、右2点とも）＝設計組織アモルフ

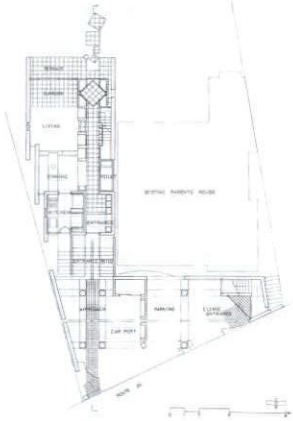
異質の他者の関係性：異なった者をどう組み合わせるか、とか、場の構成：物体ではなく、軸線や隙間などの空間を通して考える、とか、とにもかくにもプログラムやコンテクストと格闘しながら、それまでただ直観的に追ってきた方法を、はっきりと自覚して遂行した初めての建築だった。構造的な解決や、構法的なそれも、構造や設備の優しくも厳しい兄貴のような設計者に教えられて、まがりなりにも自分らしい、切れ味のよい空間ができたと感じた。場として構成された空間は、壁と柱によって張られる。このことを表現するために、レリーフ・モデルと呼ぶ表現を工夫した。SDレビュー的プレゼンテーションの、ひとつの方向を示したと自負している。応募の動機は、日本のPA Awardだ、と直感したことと、槇文彦という建築家の感性に圧倒的に期待したこと、そして何よりそれが初めての試みだったから、これから歴史を作る現場に立ち会えるのだ、という意気込みに燃えたこと、以上である。（竹山 聖）

設計者：竹山 聖、宇野 求、榎本弘之、中嶋 いくこ
所在地：東京都八王子市
建築用途：歯科医院+住宅
共同設計者：宇野 求、榎本弘之、今川憲英／T.I.S.&Partners
丹野昌美／創設備
構造：RC造
敷地面積：706.8m²
延床面積：242.32m²
竣工年：1983年5月

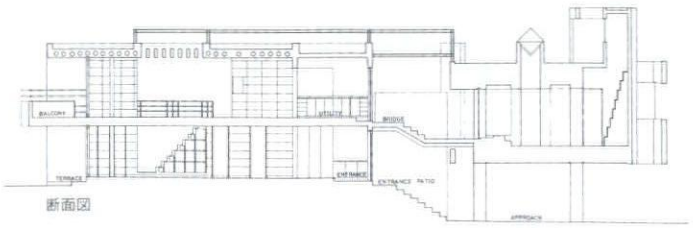
たけやま・せい
1954年大阪府生まれ。応募当時設計組織アモルフ主宰。現在京都大学助教授



2階平面図



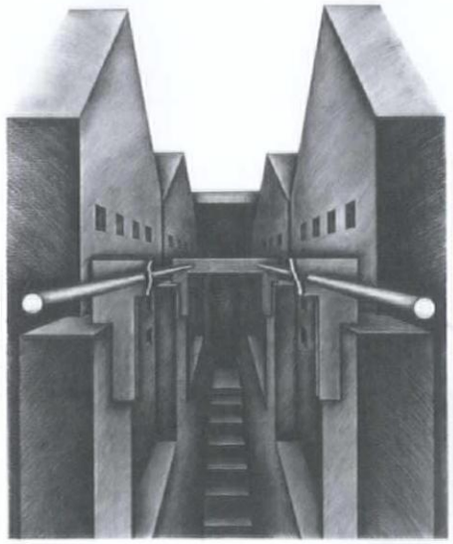
1階平面図

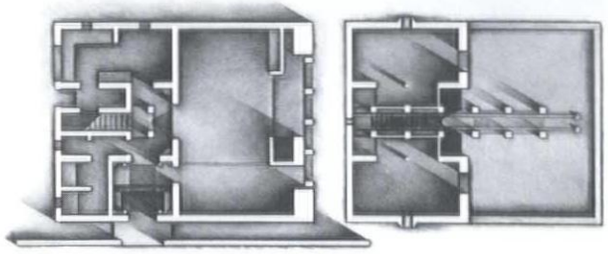


断面図

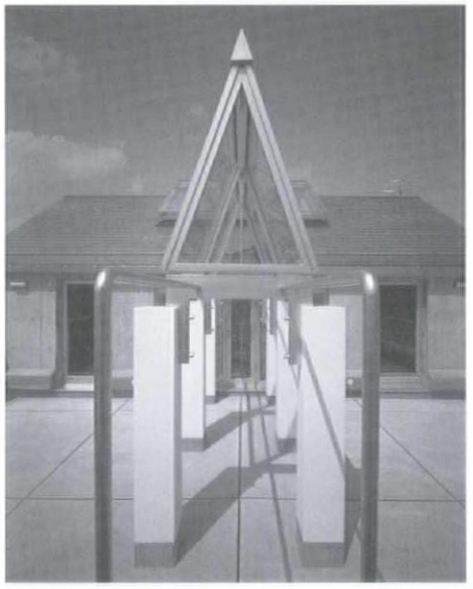
高松 伸

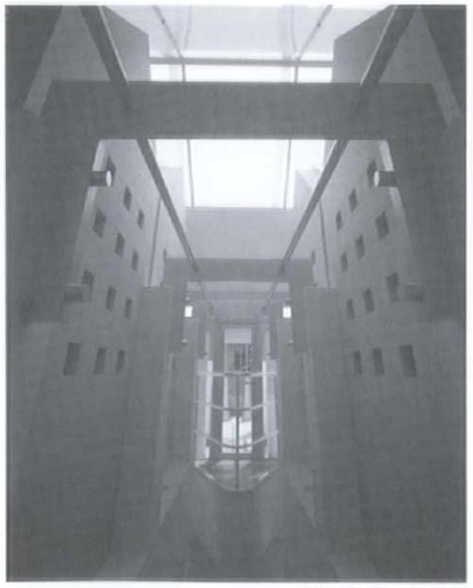
寺田の家：House with the Valley











この住宅のほぼ中央に封じ込められてあるクレバスのような空間は１本の短い階段を軸とする様々の要素によって成り立っている。

列柱、切妻のフォルムの連続、門型の小さなフレームの連なり、外部へとそのまま辷り出してゆく高架線のような架構、そういった要素が階段に切り取られた空虚な谷の周囲にからみ合いながら異質な層状の空間をいくつか形成している。

しかし、そのそれぞれは単独で純粋な生成を保証されている訳ではなく、むしろ互いに他の成立を妨害する様なかたちでのみ設定を許されてある。また、各々のスケールも微妙に変質せしめられており、こういった操作もまた順当な視覚効果を妨げていると言える。

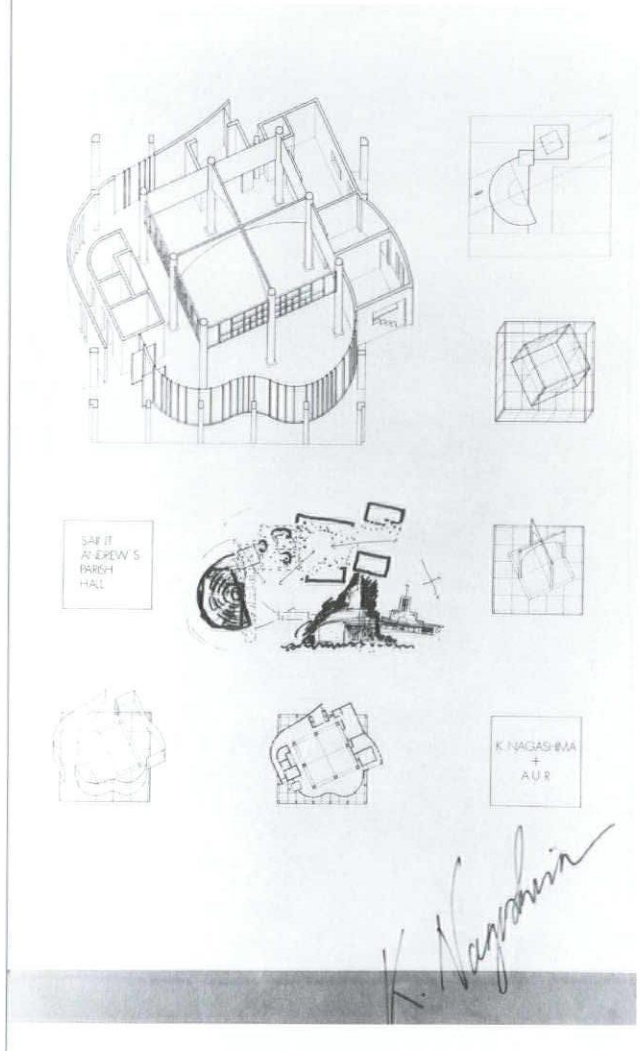
この様ないわば不完全な空間は一種のエア・ポケット……、脱落の空間とでも呼べる空間を拡散する時間の中で唐突に刻印するかもしれない。極めて小さな住居にぽっかりとあいた異郷。

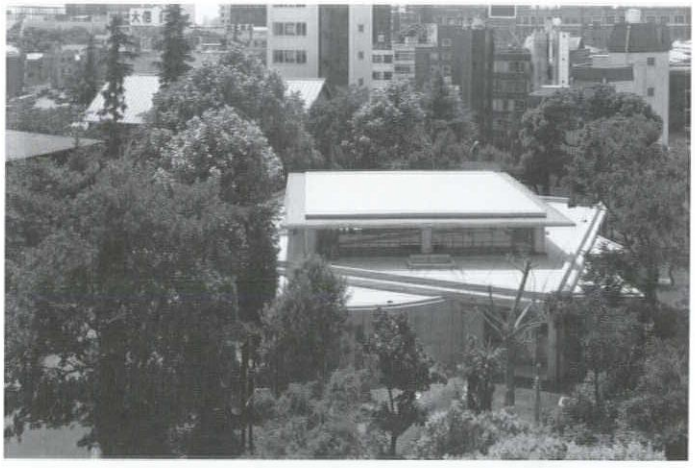
所在地 ：京都府城陽市
建築用途 ：住宅
共同設計者 ：高松伸建築設計事務所
構造 ：RC造
敷地面積 ：153.72m²
延床面積 ：130.20m²
竣工年 ：1983年

たかまつ・しん
1948年島根県生まれ。応募当時高松伸建築設計事務所主宰。現在京都大学工学研究科教授

写真（右3点）＝古館克明

聖アンデレ教会（聖アンデレホール）







写真（右2点）＝新建築写真部

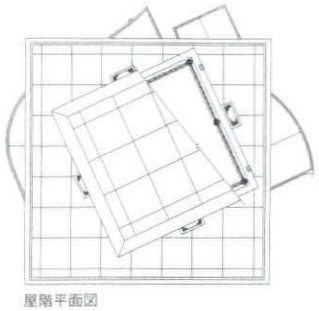
建物は都心に近い2,000坪ほどの教会敷地内にある。多様な用途をもつこのホールは、教会の建物群の中で要の位置を占めている。

ホールの中心は信徒会室であり、将来聖堂が建設される時の仮聖堂の役割をも果たすことになっている。この空間は平面的広さに対応した高い天井に交差する、ふたつのアーチで構成されている。道路に平行な軸をもつ格子状の構造と、東西軸に平行な信徒会室の構造との間に曲面の壁を貫入させることによって、空間の構成により変化をもたせることを意図した。これによって聖堂に比べてインフォーマルな活動の多い信徒会館にふさわしい、柔軟性のある空間が生み出された。

軒庇の深いところでは木製サッシュを使用し、コンクリート打ち放しのテクスチュアと組み合わせている。

所在地：東京都港区
建築用途：集会室
構造：RC造
敷地面積：4,383m²
延床面積：359.73m²
竣工年：1983年3月

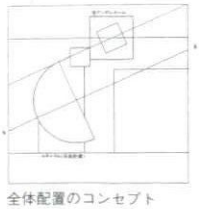
ながしま・こういち
1936年東京都生まれ。AUR建築・都市・研究コンサルタント主宰



屋階平面図



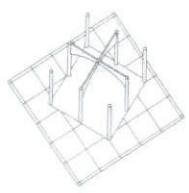
1階平面図



全体配置のコンセプト



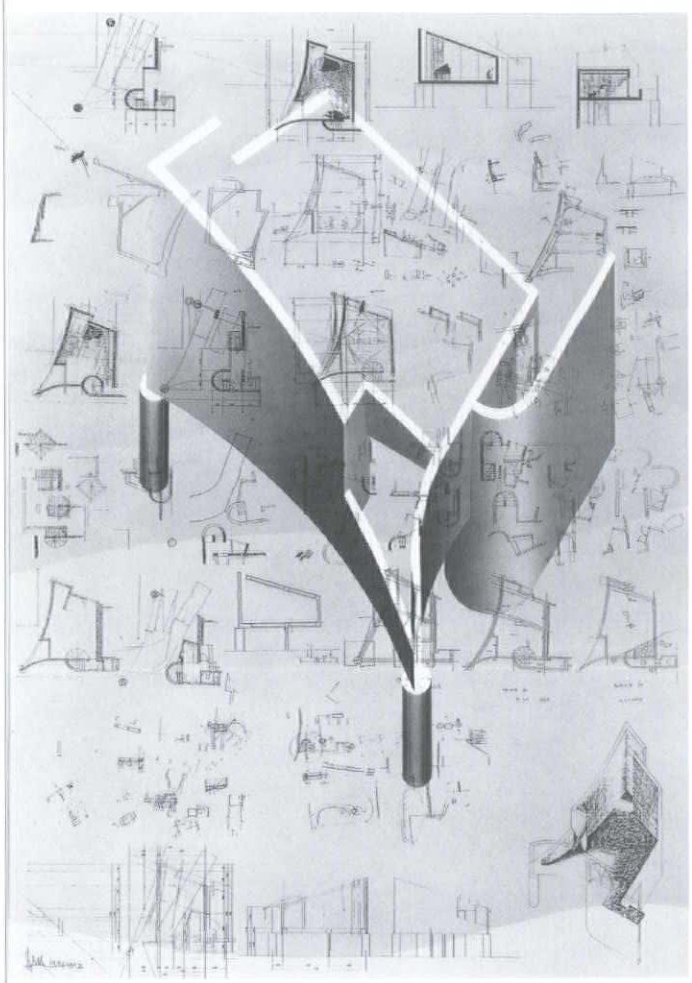
ふたつのグリッド

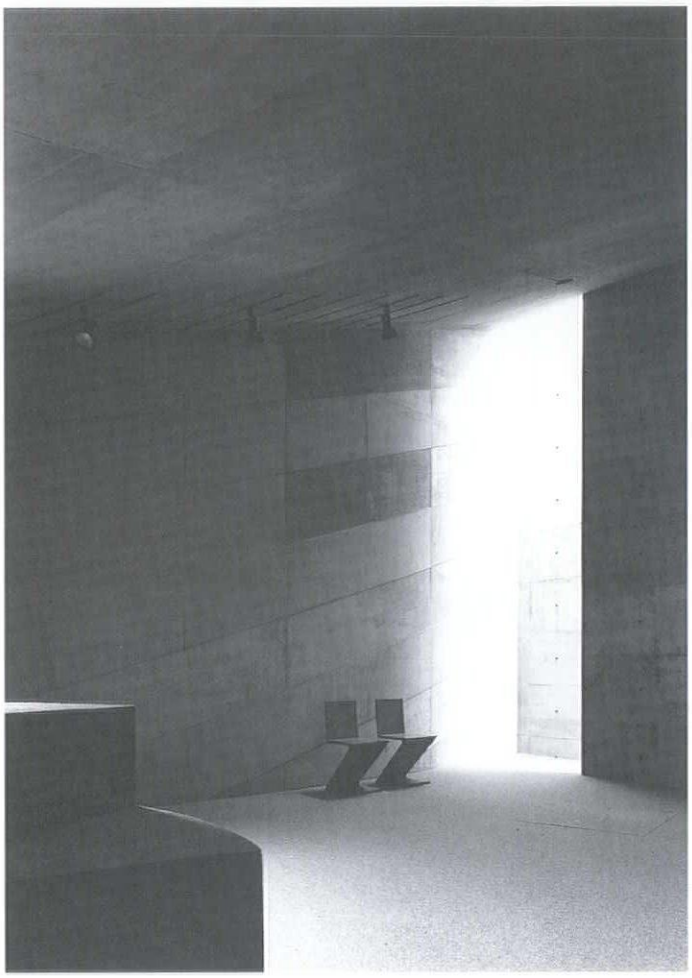


交差するふたつのアーチとグリッド

林 賢次郎

音楽箱：ある音楽家のための練習室





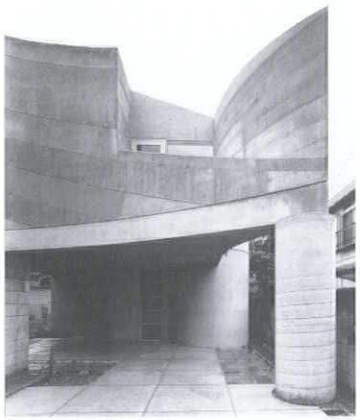
1回目のSDレビューだった。スケッチの何枚かとスタイロで作った簡単な模型の写真を一緒に送ったら入選した。吃驚(あわて)たのは私だった。小さな建築だったし、そのような事は期待も想像もしていなかったからだ。展覧会のために、模型は鈴木さんが好意で作ってくれた。ドローイングはデザイン過程のスケッチのほとんどを、縮小コピーでB3サイズ3枚に纏めて、それを「地」にしてプランとアクソメを描いた。

応募時点でデザインは固まっていたので、そのまま建築は出来た。できて、施主が「ここで練習して帰った学生に『自宅(うち)に帰ってやってみても上手くいかないんですよ」と云われ「ここは音響がいいんだよ」と言って遣りましたよ」などと話してくれた。

今度の事で音楽箱を久しぶりに訪ねた。歳月を経て多少汚れてはいたが、それなりのあじだとも言える。外まで聞こえはしなかったが、私の耳(こころ)にはモーツァルトが聞こえてきた。

所在地：東京都調布市
建築用途：音楽練習室
共同設計者：浜宇津正（構造）、
鈴木孝一+添田正人+斉藤秀一（模型）
構造：RC造　ランダムに配置された柱梁および耐震壁による構造
敷地面積：262m²
延床面積：53.32m²
竣工年：1982年

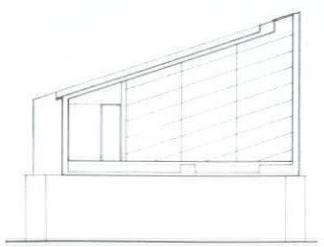
はやし・けんじろう
1942年東京都生まれ。林賢次郎・建築設計事務所主宰



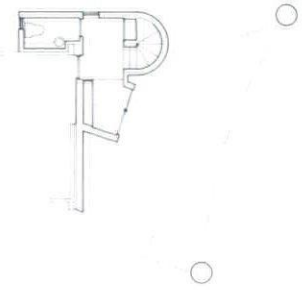
写真（上2点）＝堀内広治



2階平面図

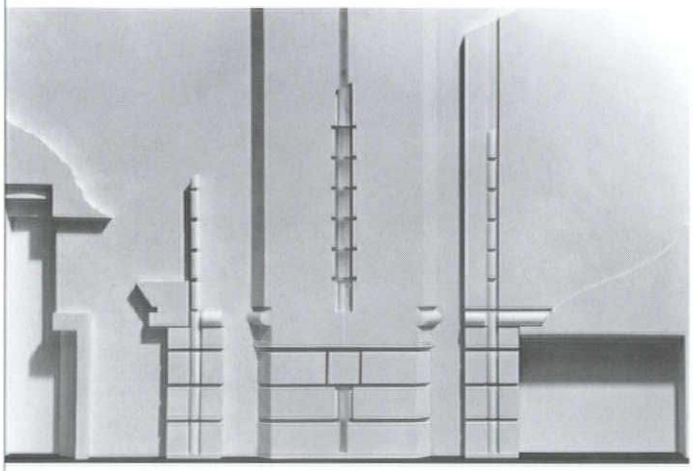


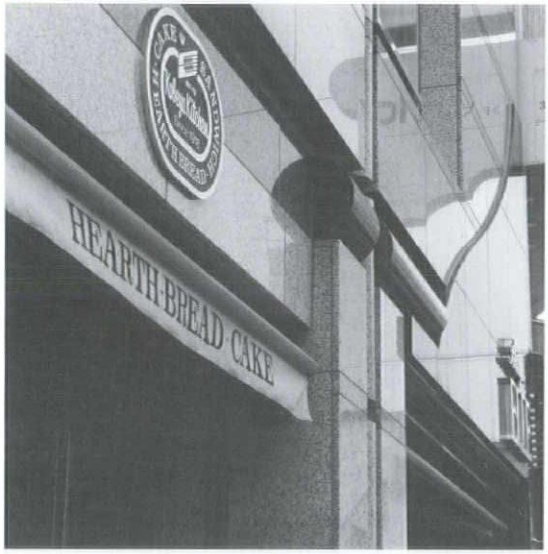
断面図

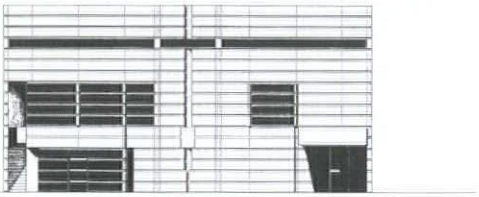


1階平面図

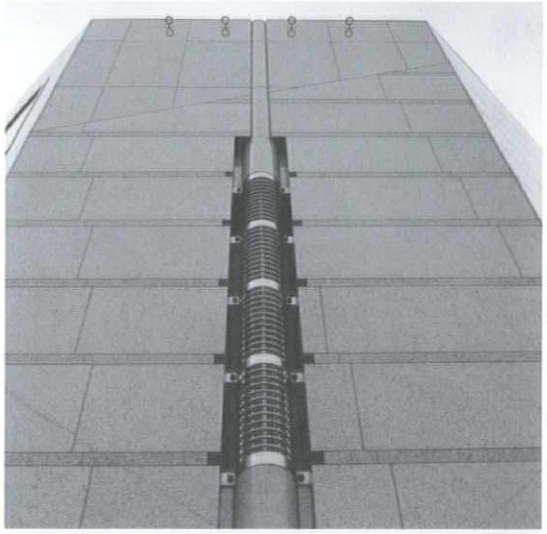
Seijo First Building（成城ファースト――物資試行10）

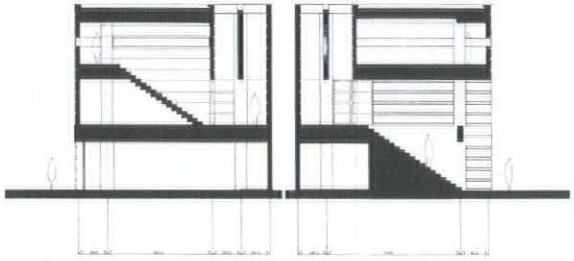






立面図



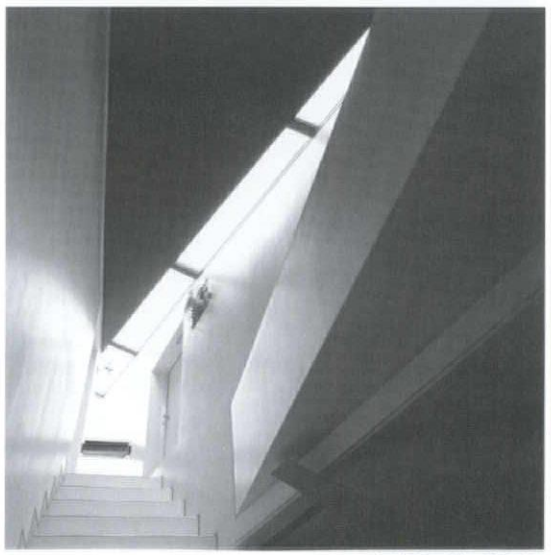


断面図

電話で参加依頼を受けたときには、すでに現場がかなり進行していたので、とりあえず目の前に散らばっていた実施図の何枚かを無造作に送り出しはしたものの、最終的にどんなプレゼンテーションにするのかその時点では何のアイデアもなかったが、しかし商業ビルという性格上与えられた厳しい条件の下で、苦し紛れに気の付いた2、3の事柄については、実作とは別に、いずれは明らかにしたいと思っていたし、それ以上に、SDレビューの規定の提出物が、たまたま三次元のモデルと二次元のドローイングであったことは、このときの設計のプロセスで「物質」と「表面」とのギャップ、「絵画」と「建築」の中間領域に特別関心を払っていた我々にとって、極めて好都合なチャンスであったようである。

設計者：鈴木了二、白石義紘、板野正明、笹崎直弘
所在地：東京都世田谷区
建築用途：店舗
共同設計者：白石義紘、笹崎直弘、岡北良三
構造：山辺構造設計事務所
敷地面積：114.94m²
延床面積：317.47m²
竣工年：1982年

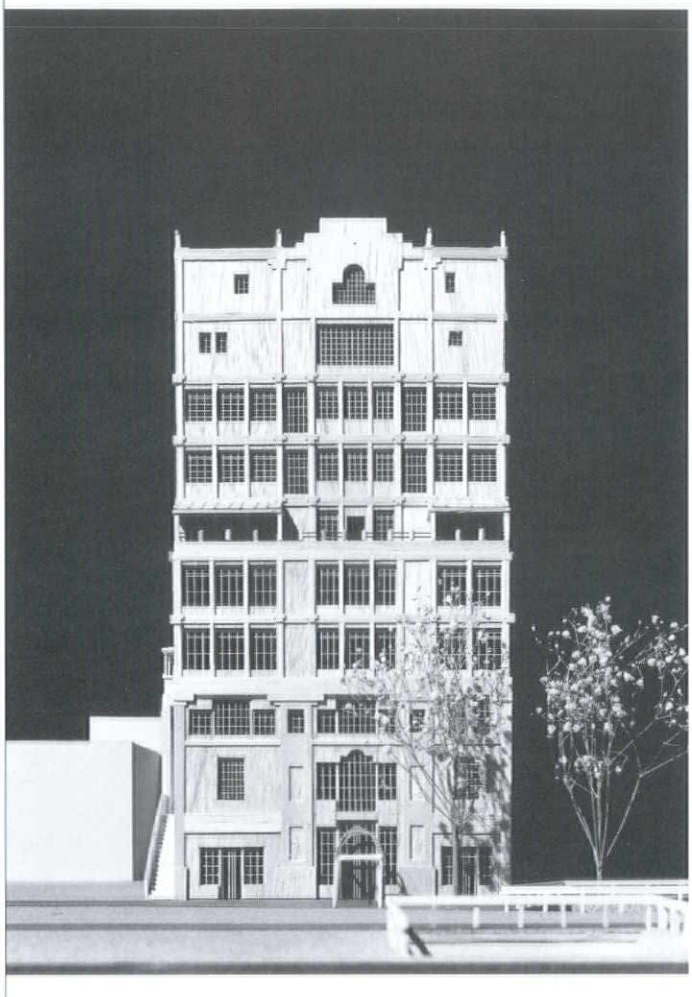
すずき・りょうじ
1944年東京都生まれ。応募当時fromnow建築計画事務所共同主宰。現在鈴木了二建築計画事務所主宰



写真（右3点）＝藤塚光政

クリストファー・アレギザンダー

札幌アパート



SDレビューが、ジャーナリズム誌として実現をめざした先進的なチャレンジ性を評価しようとした試みは正しかった。

このプロジェクトが、実現しなかった背景の根はかなり深刻であった。専門家の無理解、設計施工のシステムを支配する規範のもつ硬直化した体質、公的機関の官僚制、そのパラダイムがこぞって、このプロジェクトをつぶしてしまった。アレギザンダーの案は、建築の原点に戻った生産方式の提案も含んでおり、感情的反感も伴っていた。

人は、これは、現況建築システムにアレギザンダーを含め、私たちが無理解、無能力であったと言う。私はそう思わない。15年たった今ですら、このパラダイムは存在し、一部の建築家のサークルは、これを守り、利用し、建築を生み出し、結果的に現在の混乱状況を生み出す元凶とすらなっている。これは、今日の問題である。

今のパラダイムを認め、うまく利用する者が建物を、実現できる成功者であると言う私の主張は、ジャーナリズムの場で、客観的に検証されるべきである。

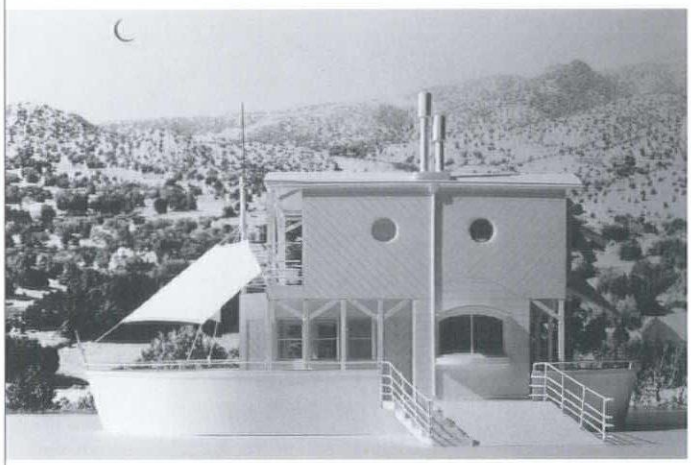
SDレビューが、そういう場となる試みにチャレンジすることを強く強く希望する。（中埜 博）

所在地：北海道札幌市
建築用途：アパート兼住居+店舗
共同設計者：イングリッド・キング
中埜 博
構造：RC造、一部SRC造
敷地面積：1,248.4m²
延床面積：2,952.56m²

Christopher Alexander
1936年ウィーン生まれ。カリフォルニア大学バークレー校環境デザイン学部建築学科教授

岩村和夫

バトー・コック［Bateau Coq］





写真＝岩村和夫

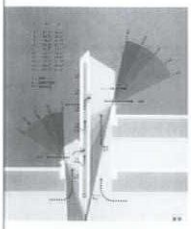
那須高原に大規模なテニスコート（52面）および関連施設がある。その敷地に隣接して15,000m²程度の遊休地があり、そこにユニークな集落が計画されつつあった。〈バトー・コック〉と名づけたこの住居併用店舗は、その第1棟目として建てられたものである。集落は、住宅、セカンド・ハウス、アトリエ、店舗、リゾート施設等が周囲を自然に囲まれ、雑多に混在するアジア的な構成がイメージされていた。それを象徴するかのように、この建物はセカンド・ハウス兼季節的な焼鳥屋。ポップな形態の操作と、実利性との関係性がこの極小かつ超ローコストの空間の中でクロス・オーバーし、俄にオブジェ化した。広大で無限定なランドスケープに向かって船出したスクリューのない小舟は、しかしその後の経済の荒波に抗うことはできなかった。竣工から15年後の今、バトー・コックは幻の集落の完成を見ることもなく、港を求めて山を下り、そしてその姿を消した。

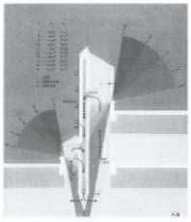
所在地：栃木県那須郡那須町
建築用途：店舗併用住宅
共同設計者：東条一己
構造：木造（在来）
敷地面積：65.88m²
延床面積：54.27m²
竣工年：1982年10月

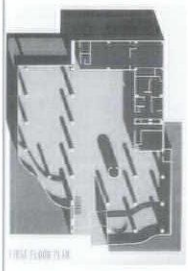
いわむら・かずお
1948年兵庫県神戸市生まれ。岩村アトリエ代表取締役

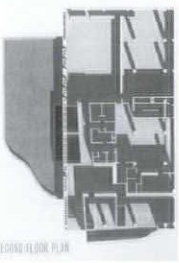
坂倉建築研究所

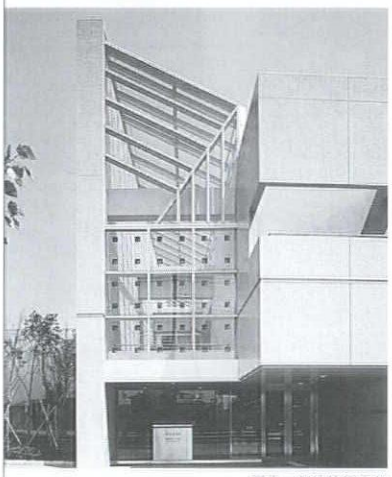
東大和市立中央図書館



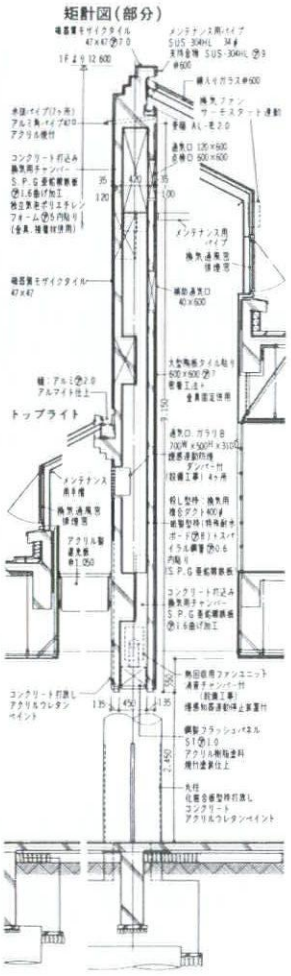








矩計図（部分）



写真＝新建築写真部

「呼吸する壁」――Thermal Circulation Wall　パッシヴ・ソーラーのもうひとつの試みとして

この建築は、比較的小規模な公共施設である。そのための特殊な機械設備を施すことなく、自然の法則を利用して省エネルギーへの寄与を目指すパッシヴ・ソーラーの考え方に立って設計した。

一般開架室中央上部に架け渡された大壁を、円形の特殊耐水ボードにスパイラル鋼管を内貼りしたものを打ち込むことによって作られるボイドウォールによって「二重外被（ダブルスキン）」とし、西日からの遮光・断熱性能をもたせると共に吹抜け部分を利用して室内空気の自然循環系路（熱回収や採熱・排熱等）とすることによって、空調計画の一要素となるように考えた。結果として、このコンセプト通りに実現した。

夏季は、自然のエントロピーの差を利用し、熱せられた空気は1階の低い位置に設けられた窓から、吹抜けを介して高窓で排気される。

この効果によりブラウジングコーナーも、緑化した庭を抜ける爽やかな風が誘引され快適である。

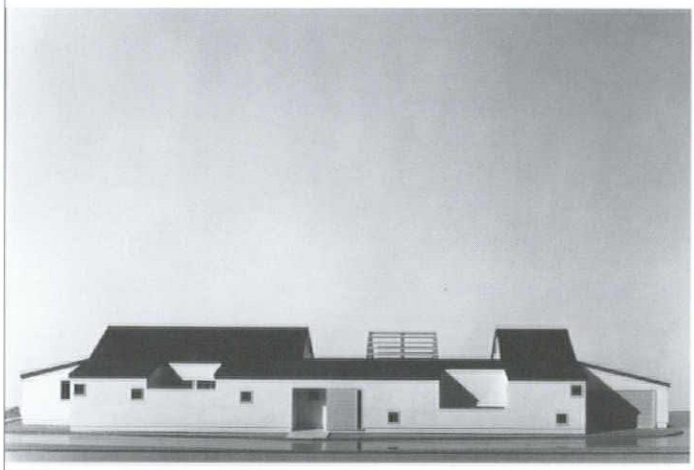
冬季は、午前中の太陽光で熱せられたトップライトまわりの空気や吹抜けを上昇した暖房空気が、壁内上部のスリットからボイド管とチャンバーを伝って熱回収され、1階の一般開架室へ送られている。（山岡嘉彌）

設計者：阪田誠造、山岡嘉彌
所在地：東京都東大和市
共同設計者：高島秀訓（元所員）
知久昭夫（元所員）
建築用途：図書館
構造：RC造
敷地面積：23,041.50m²
延床面積：2,689.72m²
竣工年：1983年12月

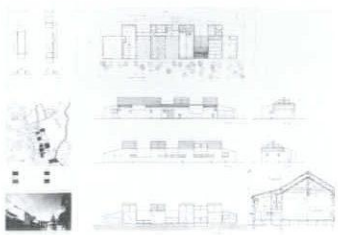
さかた・せいぞう
1928年大阪府生まれ。坂倉建築研究所
やまおか・よしや
1946年東京都生まれ。応募当時坂倉建築研究所。現在山岡嘉彌デザイン事務所

佐々木 繁

高橋邸







写真＝堀内広治

高崎市郊外、榛名山の麓の町に建つ住宅である。この町は、戦国時代には上杉氏の関東一円を睨む出城としての歴史を持ち、今も一部には蔵を有する大きな民家が連なって統一感のある古い町並みを残している。しかし、この町並も住居が建て変えられるにつれ、徐々に統一がくずれていく方向にある。

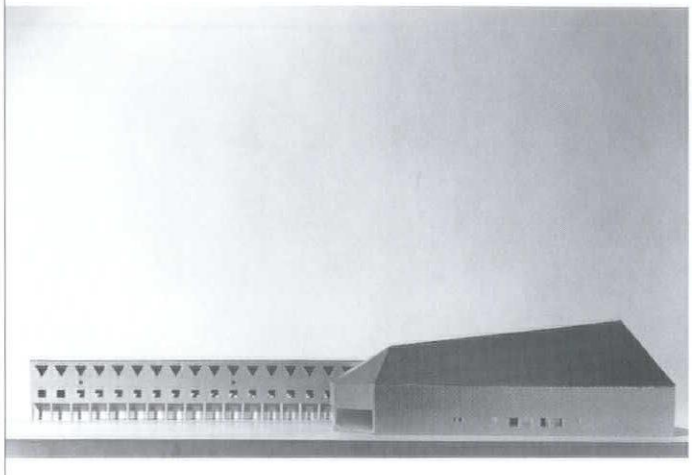
したがって、第一のテーマを古い町並にフィットした住宅とすることに置き、既存民家の構成システムを抽出して、それに準じた住宅構成とすることにした。

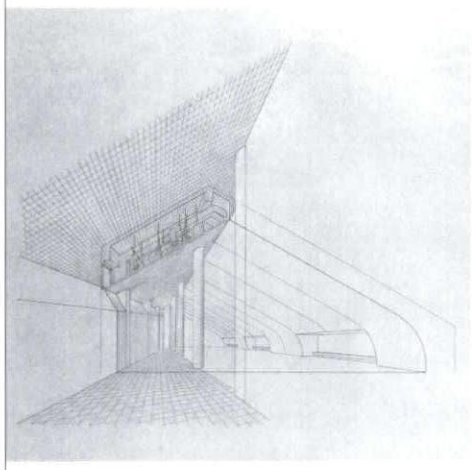
また、敷地は、東西40m、南北10mの細長い形状で、北、西面を道路に、南面を神社に、東西を小川に接するという個性的な条件を備えており、住宅内部に関しては、この敷地条件をくらしの中に最大限に生かすことをテーマとした。すなわち、西の前面道路から東の小川までの間にプライバシー度による居室配置をし（パーキング－接客－居間・食堂－寝室）、その居室間にパティオを挿入して南側に解放し、神社の林を借景とした。

所在地：群馬県箕郷町
建築用途：住宅
構造：木造
敷地面積：352.10m²
延床面積：162.81m²

武澤秀一

F会館





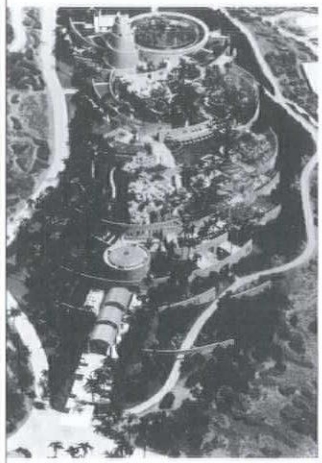
幾何学の丘・祝祭の空間
関東平野、緑の大海に
幾何学の丘、緑の結晶体が
地中深くより地表に姿を現わした。
東方よりの光を初めて浴びて
濡れて輝くその頂きは、
夜明けの空に希望と理想を指し示し、
かつ、内深くへと曙光を導く。
光の到達するところ、
そこにひろがるのは祝祭の空間である。
新たなる誕生の時。

所在地：埼玉県
共同設計者：浜野次郎
構造：RC造
敷地面積：60,000m²
延床面積：1,312.5m²

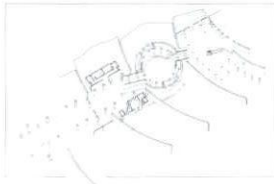
たけざわ・しゅういち
1947年群馬県生まれ。応募当時東京大学助手。
現在用美強・建築都市設計代表

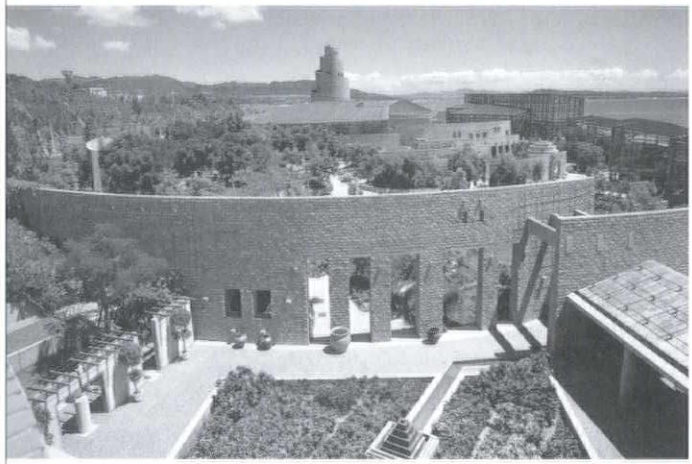
日本設計事務所

国営沖縄海洋博記念公園・熱帯ドリームセンター（熱帯ドリームセンター）









写真＝川澄明男

「ジャングルを開墾したところ、大型レンガを積み上げた曲面を伴ったたくさんの壁の遺跡が現われた。そこでこれらを利用し、その他必要を思われる建物や温室を付加することによって植物園として再生しようということになった」というコンセプトをベースに熱帯ドリームセンターが発想された。SDレビューの文章もそういった雰囲気で書かれたため、会場で編集長にこんな遺跡があったのですかと誤解されたこともある。設計は79年に終了。私は80年から1年半ロンドンで過ごすことになった。81年に帰国。SDレビューが企画された。現場は当時コンクリート躯体と鉄骨とガラス・カーテンウォールまで建ち上がり、ほど良いスケールの空間がそこにあった。86年にオープン。最近久しぶりに訪れたが、海側から見ると遠見台以外はほとんど植物に覆われていて、全体が当初発想した廃墟のイメージになっていた。
（淺石優）

設計者：淺石優
所在地：沖縄県国頭郡本部町
建築用途：植物園
共同設計者：愛植物設計事務所、
プランタゴ、京央造園設計事務所
構造：RC造、S造
敷地面積：60,000m²
延床面積：13,053m²
竣工年：1985年2月

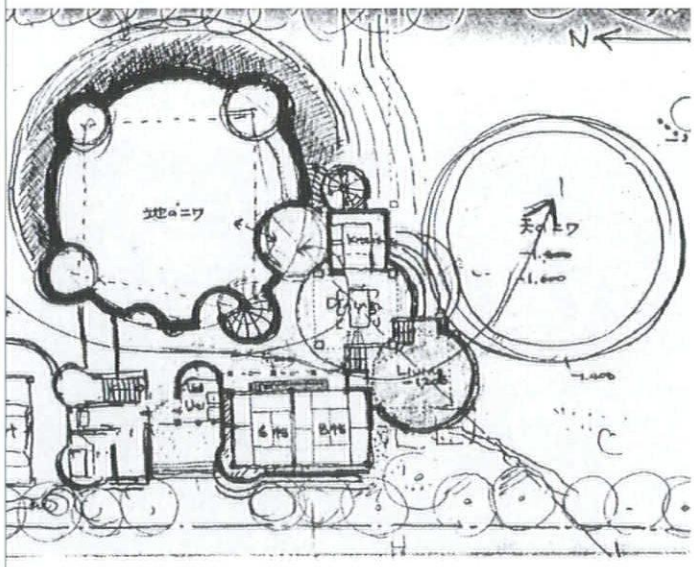
あさいし・まさる
1947年東京都生まれ。日本設計勤務

象 設計集団

T邸

招待





この住居は、船橋市街地後背の台地に位置することになる。

太古から人々は、このような土地を求めて住みついた。姥山古墳をはじめとして、周辺に点在する遺跡群にはかつてあったであろう人々のくらしが刻印されている。

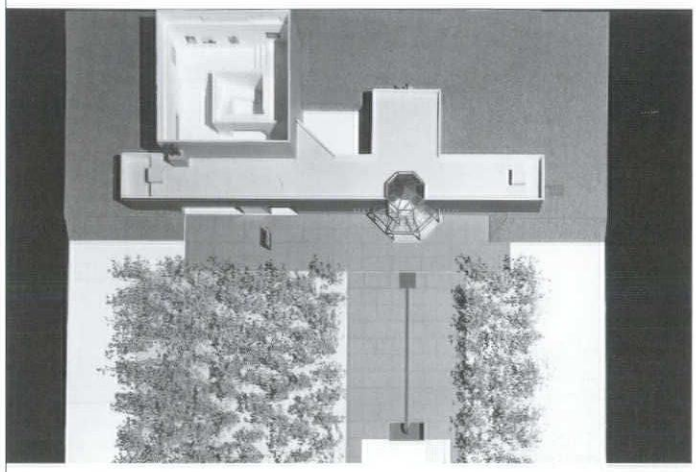
そのような痕跡を辿りながら、発掘された時の断片をつなぎとめ、この住居の中に、新たな時を刻み込みたい。

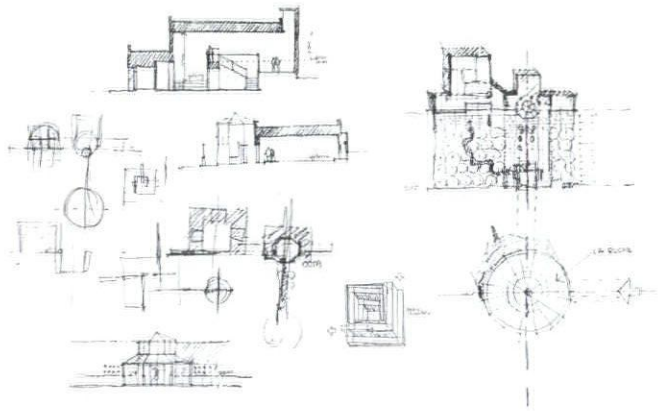
所在地：千葉県船橋市
建築用途：住宅
構造：RC造
敷地面積：1,021.2m²
延床面積：約300m²

谷口吉生

清春・白樺美術館

招待





東京銀座に画廊を経営する吉井氏が、山梨県清春に芸術村を作る構想を立て、その一部がすでに完成している。敷地は小学校の跡地であり、天然記念物の桜が春には美しい花を咲かせ、遠景にはアルプスの山々がそびえる。この村に、すでに竣工しているラ・ルーシュ（蜂の巣の意味）の原型はモンパルナスにあり、画家のモヂリアニなども、このアトリエで創作に専念した縁りのある建物である。

清春白樺美術館の建築は、この芸術村に今年（1982年）の10月末に竣工する。私が設計を始めるに当たって特に考慮した点は、ラ・ルーシュ等の個性の強い既存の建物といかに調和を保つかということと、芸術村全体のマスター・プランを作り、その中にこの美術館を位置づけることのふたつの問題であった。

ラ・ルーシュの中心を起点として新しい軸線を設け、その線上に小さなガラスのキュポラを置き、企画展示場としても使えるレストラン部分のアトリウムとした。16角形のラ・ルーシュ、8角形のキュポラ、4角形の展示場、そして螺旋形をしたその内部は一連の図形のシークエンスとなり、美術館と既存の建物を形態的に関連づける。新しく引かれた軸線は、芸術村全体の将来計画にオーダーをあたえ、スタジオ、集会場、図書館、教会などの諸施設が完成した後も、この村の象徴的な中心軸として全体を組織づけるであろう。

所在地：山梨県清春
建築用途：美術館
共同設計者：高宮真介、岡田裕康／谷口建築設計研究所
構造：RC壁構造
敷地面積：16,593.16m²
延床面積：367.97m²

第2回　1983年



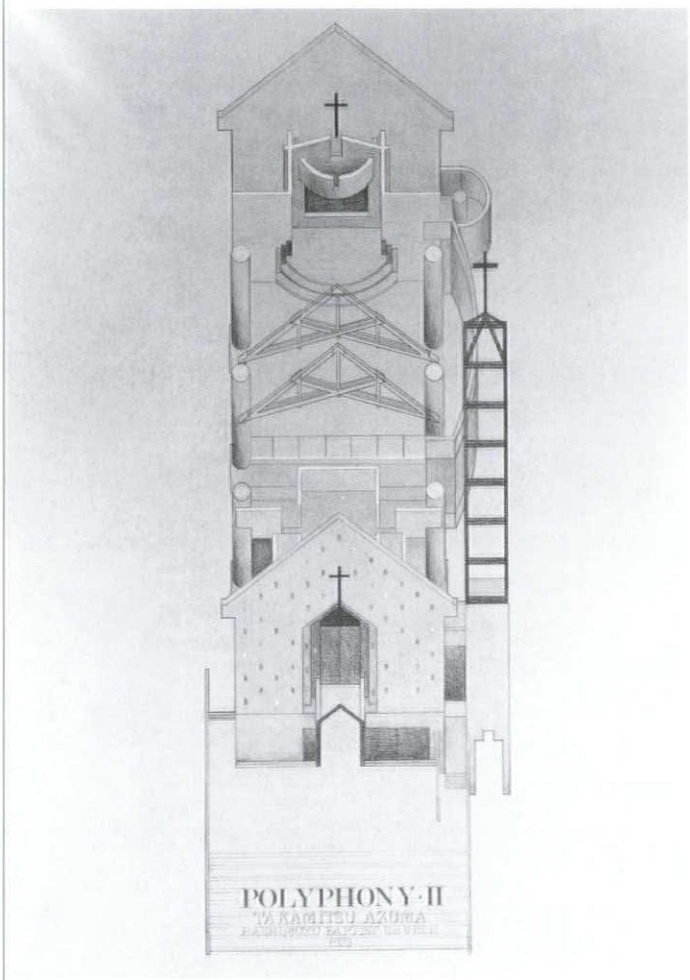
写真＝堀内広治

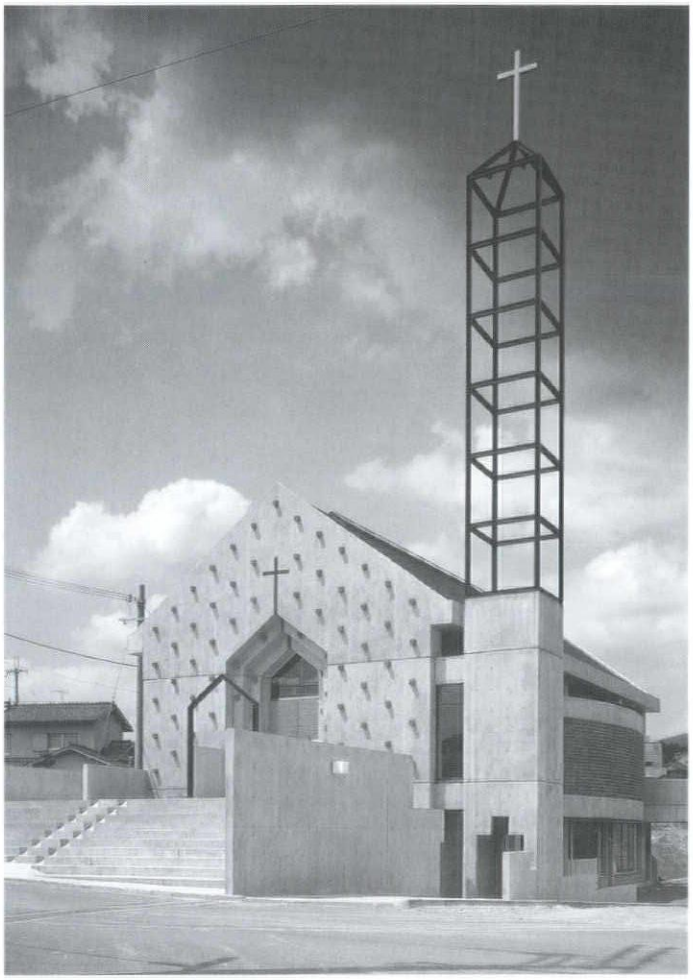
東京展：10月5日～10月28日
第1会場：ベンファット・ギャラリー
第2会場：ヒルサイドテラスE棟ロビー
審査員：槇 文彦、鈴木 恂、山本理顕、布野修司
応募総数：86作品
入選数：18作品、招待4作品

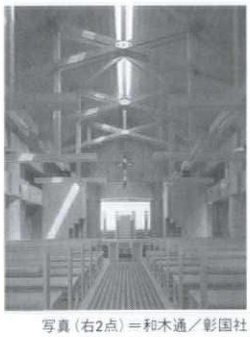
東 孝光　橋本バプテスト教会
荒 知幾　ゴールドウィン富山工場
安藤忠雄　茂木邸
大浦洪二　釜山海高徳寺山門
小川富之　西村邸［HOKN］
小宮山 昭　N邸
齊藤年明　28家族のための小広場
鈴木エドワード　サンテラス・ユニー
設計組織アモルフ　古河の歯科医院
セクションR　C.P.M.スタジオ
高松 伸　六地蔵の家
巽 順　I氏のアトリエ
田村宏治　宮城カトリック学園・石巻カトリック幼稚園
戸尾任宏　都立埋蔵文化財調査普及施設
富永 譲　新ゆりグリーンタウン高層集合住宅
中嶋龍彦　四天王寺学園第2期計画
中野誠一　苦楽園の家
三上祐三　洗足学園大学・前田ホール
鹿島建設建築設計部（招待）　パリ、新オペラ座国際コンペ［入選案］
竹中工務店大阪本店設計部（招待）　パリ、新オペラ座国際コンペ［入選案］
福沢健次+小宮山昭（招待）　パリ、新オペラ座国際コンペ［佳作案］
原 広司（招待）　パリ、ラ・ヴィレット公園国際コンペ［入選案］

東 孝光

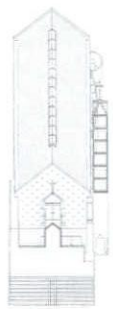
橋本バプテスト教会







写真（右2点）＝和木通／彰国社



アクソノメトリック

〈練馬バプテスト教会1981〉の竣工後、2年後に和歌山県の橋本市の郊外に新しい教会をつくる機会を与えられた。練馬の教会は、宿泊室や牧師館もある都市型の複合建築で、やりがいのあるプロジェクトだったが、教会堂の本質に迫るような素朴なものに取り組みたくなり、機会があればと願っていたところ、意外に早くその機会を与えられた。敷地は小さな流れのほとりにあり、周りには人家もまばらで独立して建築を考えることが許される環境であった。まず道路に対して正面を家形につくり、右側に十字架をいただく小塔をたて、基部はコンクリートにして階段室とした。正面はコンクリート打ち放しの壁、礼拝堂自体はコンクリートの柱梁で組み、屋根は木造、外壁に煉瓦ブロックを使ったのは、教会員の工事への参加が可能なようにと考えたのだが、最後は正面の壁に大人や子どもの手作りの煉瓦の彫刻を埋め込んだものにした。計画のほとんど最終段階にSDレビューに応募し入選したので、前面小広場のディテール、十字架のデザイン以外には変更なしに実現できたのは幸いであり、私の好きな作品のひとつになった。

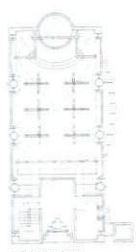
所在地：和歌山県橋本市
建築用途：教会
構造：RC造　一部木造
敷地面積：573.98m²
延床面積：363.62m²
竣工年：1984年2月

あずま・たかみつ
1933年大阪府生まれ。応募当時東孝光建築研究所主宰。現在千葉工業大学工業デザイン学科教授、建築家



1階平面図

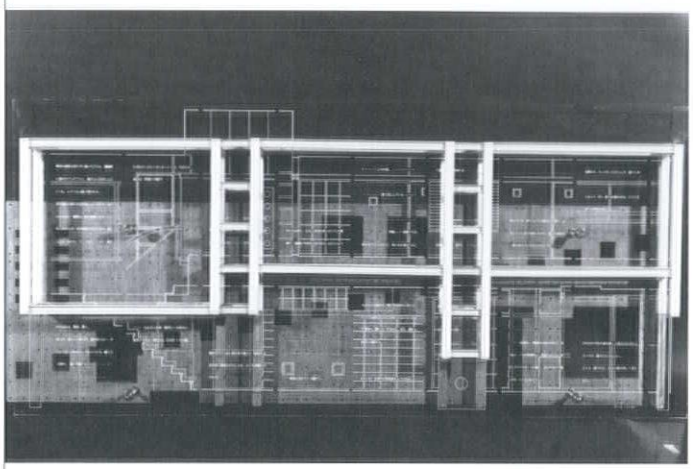
2階平面図



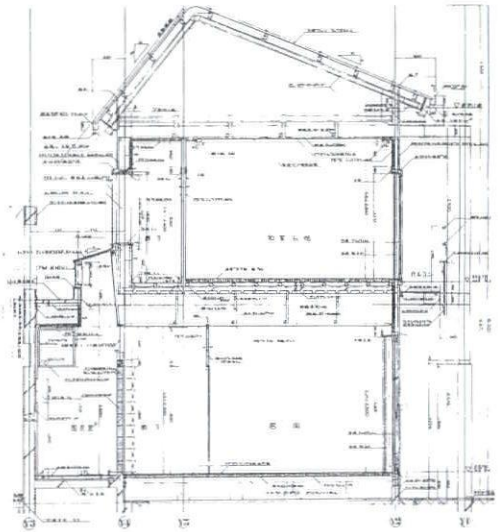
3階平面図

小宮山 昭

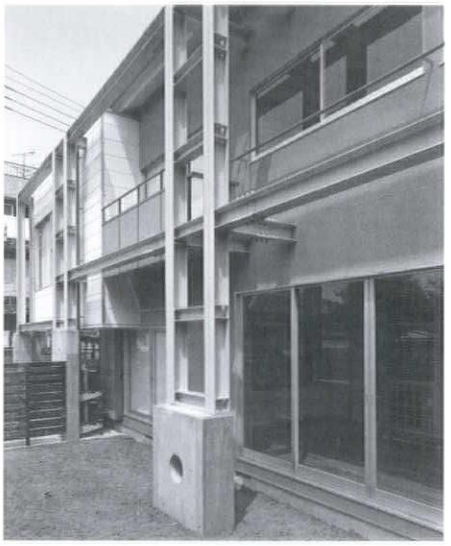
N邸

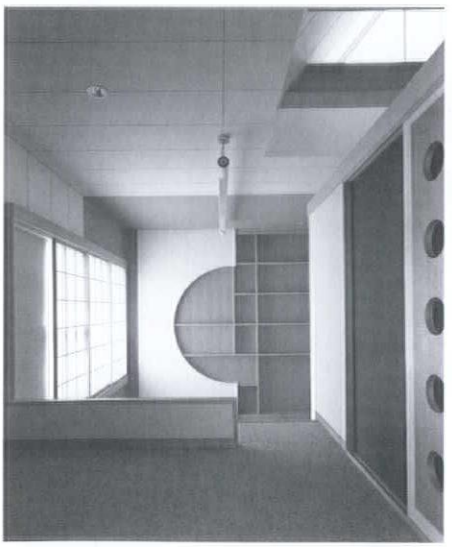






断面詳細図





W邸のすぐあとの仕事、従って考え方は似ている。コンクリート、鉄骨の混構造である。この住宅は、今も大変良い状態で住まわれている。但し、住み手の家族構成は大きく変わった。老人は亡くなり、子供はひとり独立した。幸いに、間仕切りや、内装は全て木造のため、自由に改装したり、平面を変えられる。建主は近く改築を考えておられ、私もその仕事を楽しみにしている。住宅はある期間の生活の変化に耐えられなくてはならないということを実感した。私にとっても、自分の建物の改築の設計をすることは、新築の時とは違う尽きない興味がある。

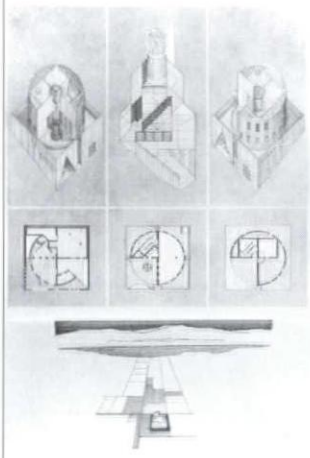
この作品は、道との境界条件を決めるコンクリートの壁と、家を支える鉄骨の柱と梁と、生活の各々の場面に対応する木造から成っている。私はかなり意図的にそれら3つを並置した。それらが関係を変えて新たな建築的様体を見せることになる改築、今からゾクゾクする。

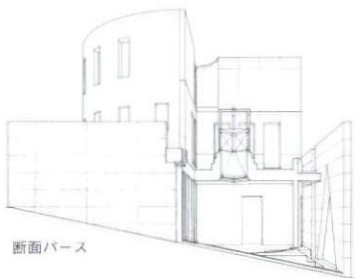
所在地 ：埼玉県与野市
建築用途 ：住宅
構造 ：S造、RC造
敷地面積 ：165.3m²
延床面積 ：148.5m²
竣工年 ：1984年

こみやま・あきら
1943年東京都生まれ。必藤当時小宮山昭＋アトリエR主宰。現在ユニテ設計・計画主宰

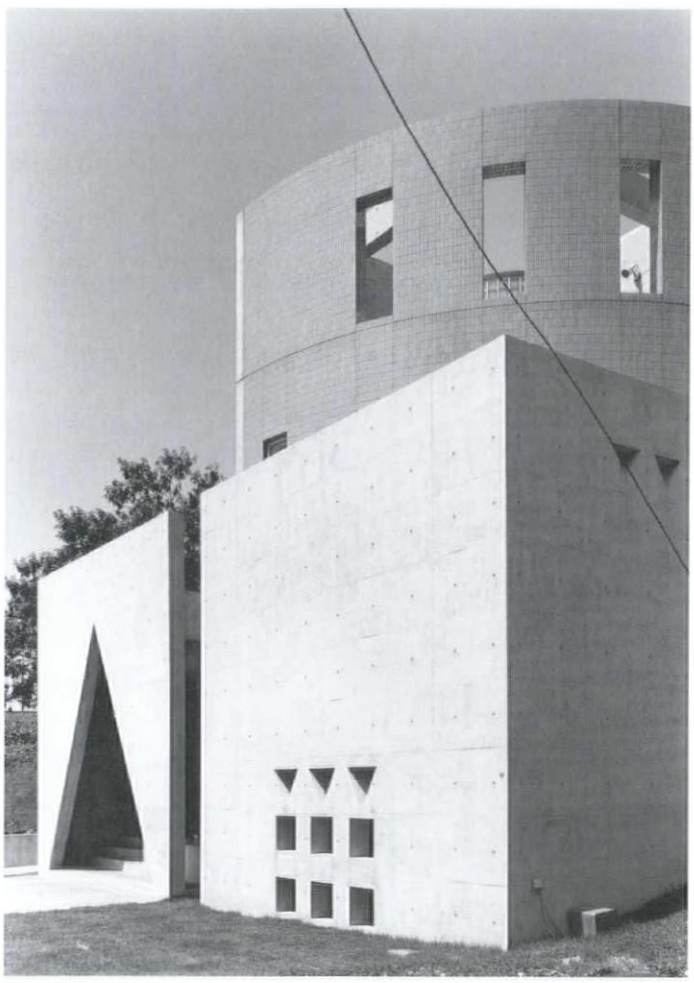
写真（右3点）＝新建築写真部

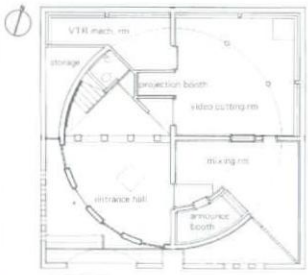
C.P.M.スタジオ



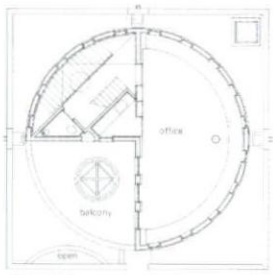


断面パース

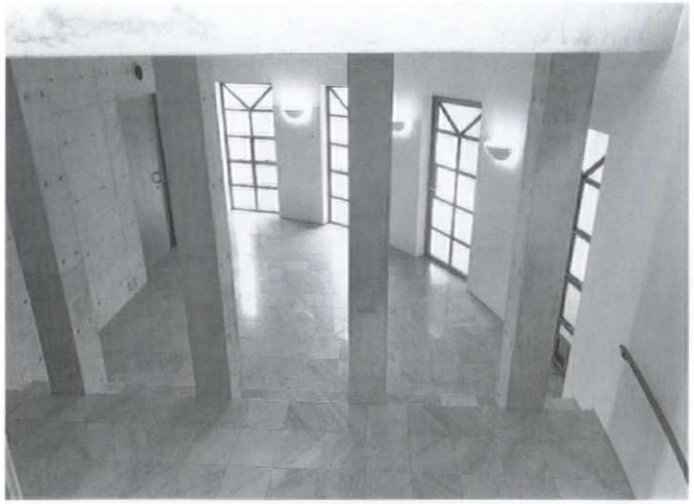




1階平面図



2階平面図



写真（右2点）＝新建築写真部

この〈C.P.Mスタジオ〉を設計していたころ、私達のアトリエでは、過密な都市環境の中で設計する仕事はほとんどなかった。CMビデオのエディティング・スタジオが主要な用途になるこのCPMスタジオも、その周辺を畑に囲まれた牧歌的な地方都市郊外のプロジェクトであった。

私達の関心は、この国の都市郊外に特有のとりとめのない光景のなかで、いかに建築として自律させるかといった問題だった。ここでは初元的な幾何学形態が構成の原理となっている。単純なフォルムが誘い出す特権的な形式で「場所」と直截な関係を取り結ぼうとした。

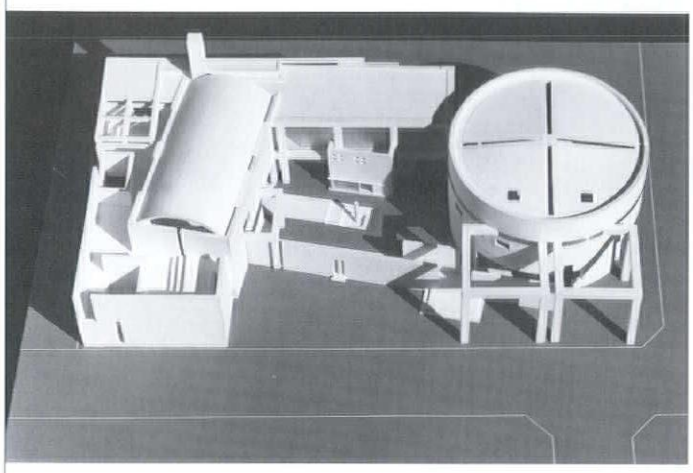
SDレビューでは作品そのものより解説文の「語り口」が硬直しているといった点を痛烈に批判されたが、この作品の置かれた敷地環境が生み出した「語り口」は、私にとってリアルなものであった。

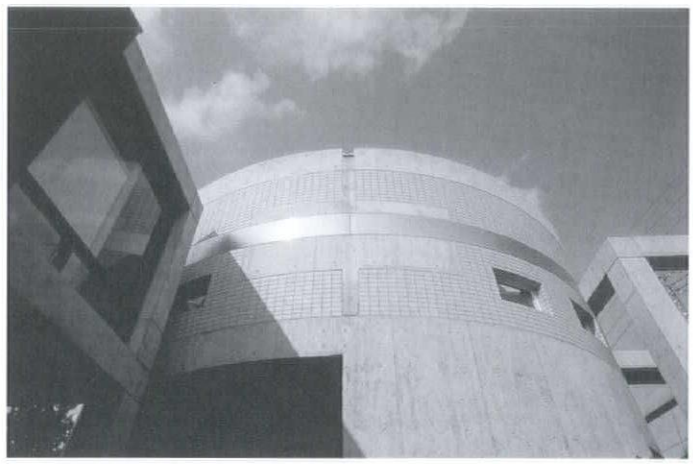
設計者：板井宝一郎、西島裕、
木田順滋
所在地：石川県小松市
建築用途：ビデオ編集スタジオ・サロン
共同設計者：建築研究室セクションR
構造：RC壁構造
敷地面積：594.60m²
延床面積：190.76m²
竣工年：1983年12月

いたい・ほういちろう
1948年兵庫県生まれ。セクションRアーキテクツ主宰

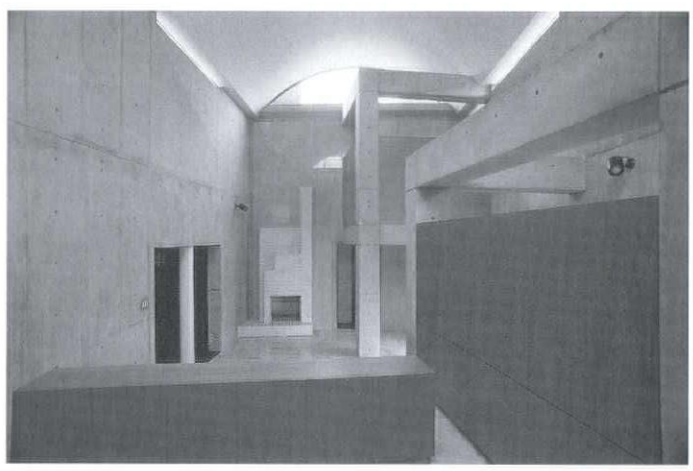
設計組織アモルフ

古河の歯科医院（古河の歯科医院+住宅）

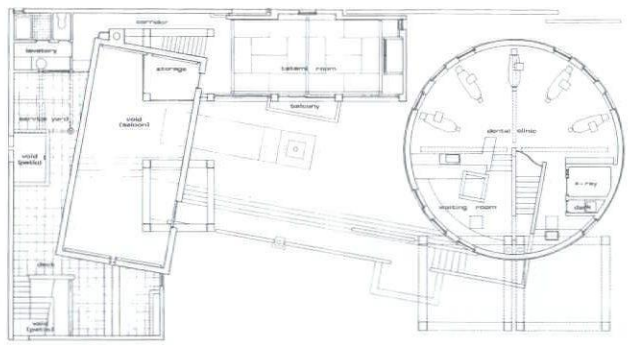




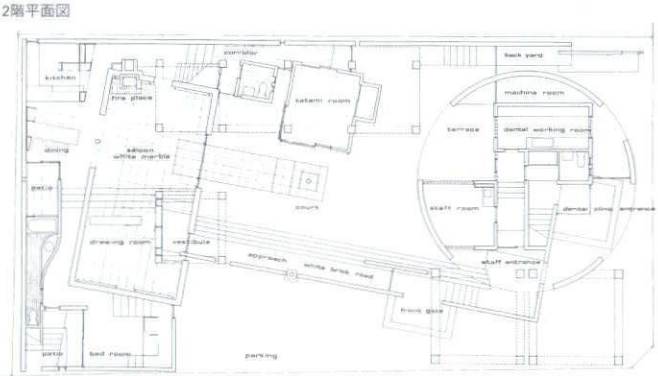




写真（左下、右2点）＝設計組織アモルフ



2階平面図



1階平面図

前回入賞の余勢を駆って、さらにグレードアップした空間構成とプレゼンテーションで臨んだ。異質の他者を組み合わせるのに、ただ連結するのでなく、重ね合わせること、しかも角度を変えて。シフトされた軸に沿った動きが、実は訪れる人々を導くサーキュレーションを示唆していたことも、後でよく考えて気づいたほど、自身のサウンドに酔っていた。柱はフレームの一部となり、壁体にも曲面が現れ、空間にヒエラルキーがもたらされて、予想を超える象徴的な空間が出現して大いに驚いた。キース・ジャレットのケルン・コンサートのような、硬質な抒情を込めたいと思ったし、ぎしぎしと軋むような緊張感とともにそれは実現もされたのだけれど、もうちょっとイージーリスニングっぽいサウンドを期待していたクライアントの両親には、ずいぶん怒られてしまった。ただ硬質の抒情と軋む緊張感は、その後の僕の方向を決定したと思っている。

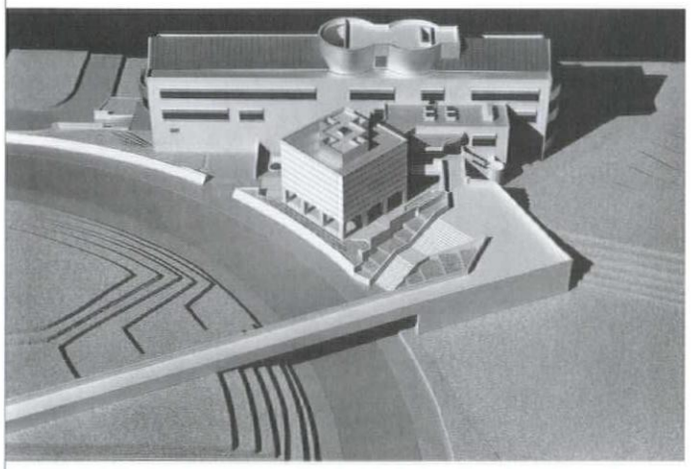
透明なガラスに転写された絵柄、そしてその重ね合わせというプレゼンテーションの手法はまた、以後のSDレビューの典型的なスタイルともなったように記憶している。（竹山聖）

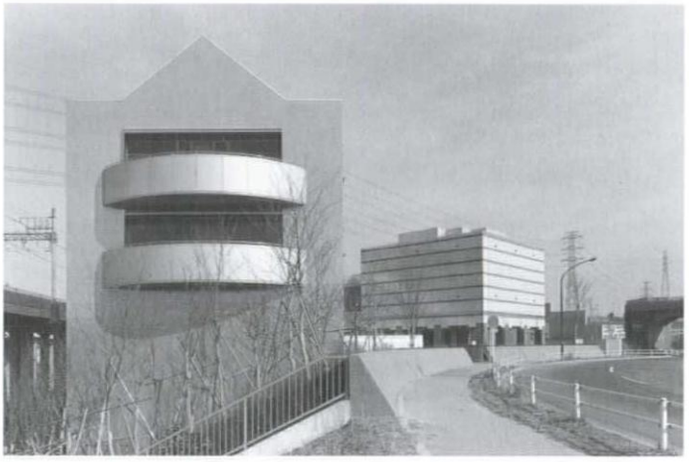
設計者：竹山聖、榎本弘之
所在地：茨城県古河市
建築用途：歯科医院+住宅
共同設計者：宇野求、榎本弘之、
今川憲英／T.I.S. & Partners、
丹野昌美／創設備
構造：RC造
敷地面積：459.46m²
延床面積：225.26m²
竣工年：1983年8月

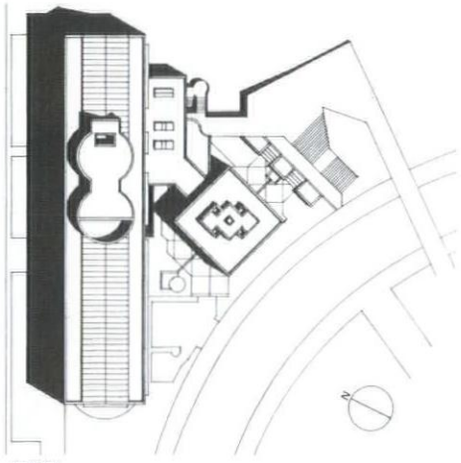
たけやま・せい
1954年大阪府生まれ。応募当時設計組織アモルフ主宰。現在京都大学助教授

戸尾任宏

都立埋蔵文化財調査普及施設
（都立埋蔵文化財調査センター）



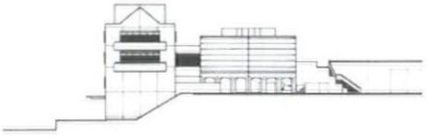


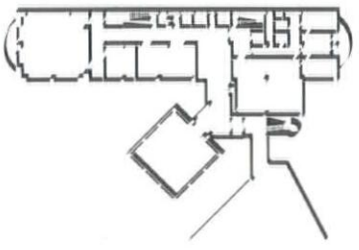


配置図



写真（右2点）＝新建築写真部







この施設は、東京都設計候補者選定委員会の選定により、設計者第1号として設計委託を受けたものであり、多摩ニュータウン開発事業に伴う発掘調査により出土した埋蔵文化財の収集、調査、研究、普及活動を行うという目的に沿って計画されたものである。

収蔵施設と研究施設が大部分を占めるこの施設は、文化財の保存に必要な環境が経済的に維持できることが求められたが、同時に多摩地区のタウンシンボルとして、地域の人々に親しまれ、利用される文化施設としての内容と性格を併せ持つことも必要であった。

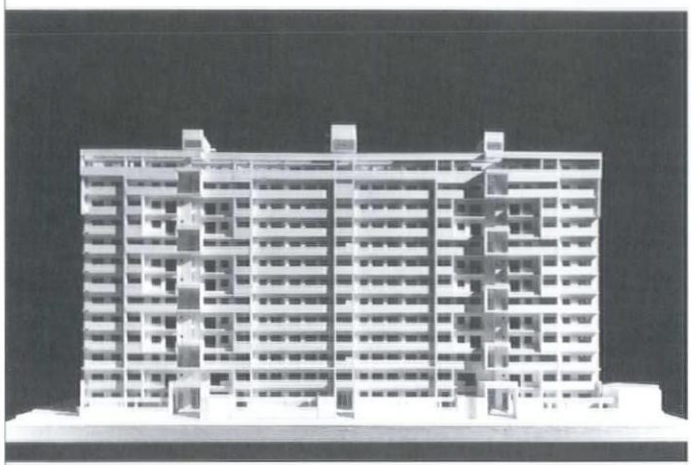
SDレビューに発表した案とほとんど変更なくでき上がり、展示室棟1階ピロティ部分に設けられた文化の1%の予算によって実現した「流れの広場」も市民や地域の子供たちに親しまれ、初期の目的は達成された。建物周辺に植え込まれた樹木も生長し、都市のオアシス的たたずまいとなっている。

所在地：東京都多摩市
建築用途：埋蔵文化財センター
構造：RC造
敷地面積：12,154.9m²
延床面積：4,090.3m²
竣工年：1984年12月

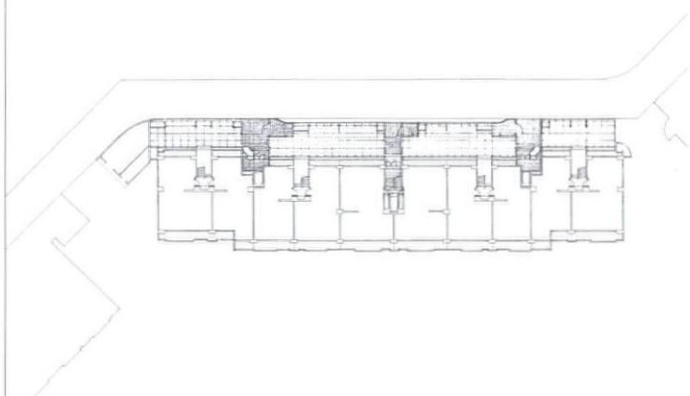
とお・ただひろ
1930年兵庫県生まれ。現在建築研究所アーキヴィジョン主宰

富永 譲

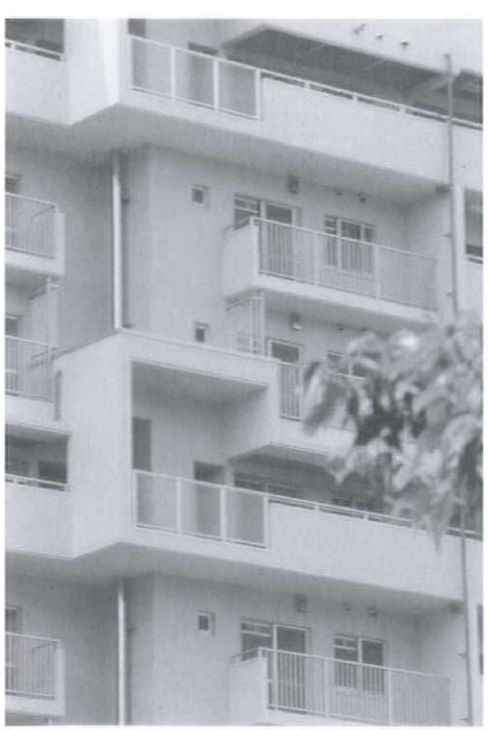
新ゆりグリーンタウン高層集合住宅











この計画では高層の住居形式を本質的に縦の上下方向の繋がりとして捉え、一住戸の身近かにある専有的なエレベータをつうじて、住戸から直接地上へと至るルートを重んじて視覚化することにより、高層住戸内部の孤立感を少しでも柔らげようとした。板状の高層住居の水平方向の繋がりである横方向の廊下は、人間的な尺度を越えて無性格になりがちであったので、エレベータを増すことによってそうした空間を最小に切りつめ、エレベータ回りの2軒や4軒の親しみやすい空間の尺度に戻した。応募当時は、専有EV方式の高層住宅は少なく、ルートを視覚化することによって、高層の立面構成が変化すると考えたことが応募の動機である。この様型のとおり実現し、現在も環境がととのって住まわれている。基本、実施設計のみで監理には携わらなかった。

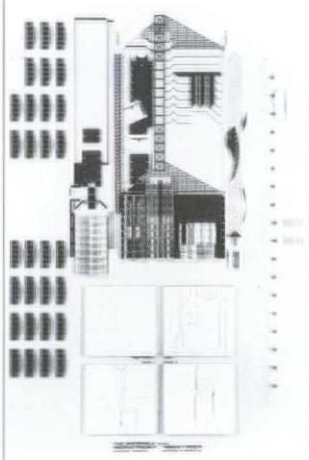
所在地：神奈川県川崎市
建築用途：集合住宅
構造：SRC造
敷地面積：56,187m²
延床面積：25,512m²
竣工年：1984年

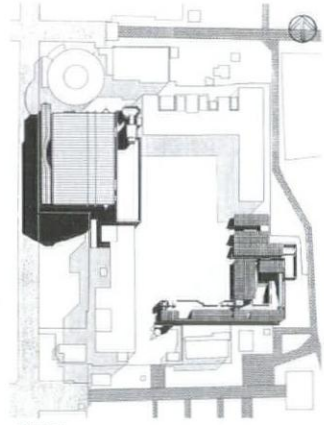
とみなが・ゆずる
1943年奈良県生まれ。(有)富永 譲+フォルムシステム設計研究所主宰

写真（右3点）＝富永譲

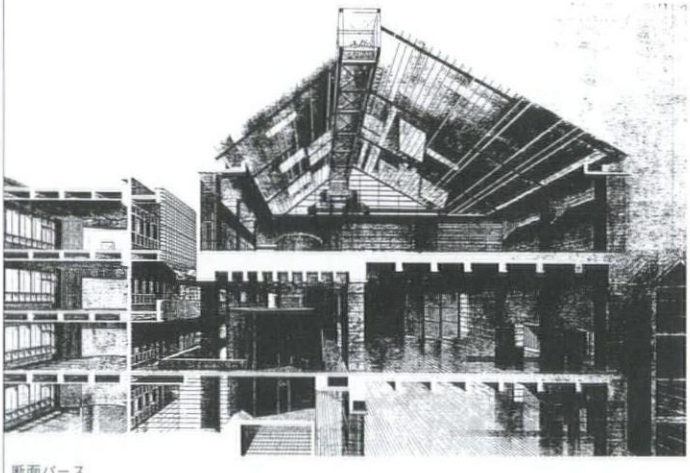
中嶋龍彦

四天王寺学園第2期計画（四天王学園第2期・体育館・教室棟）

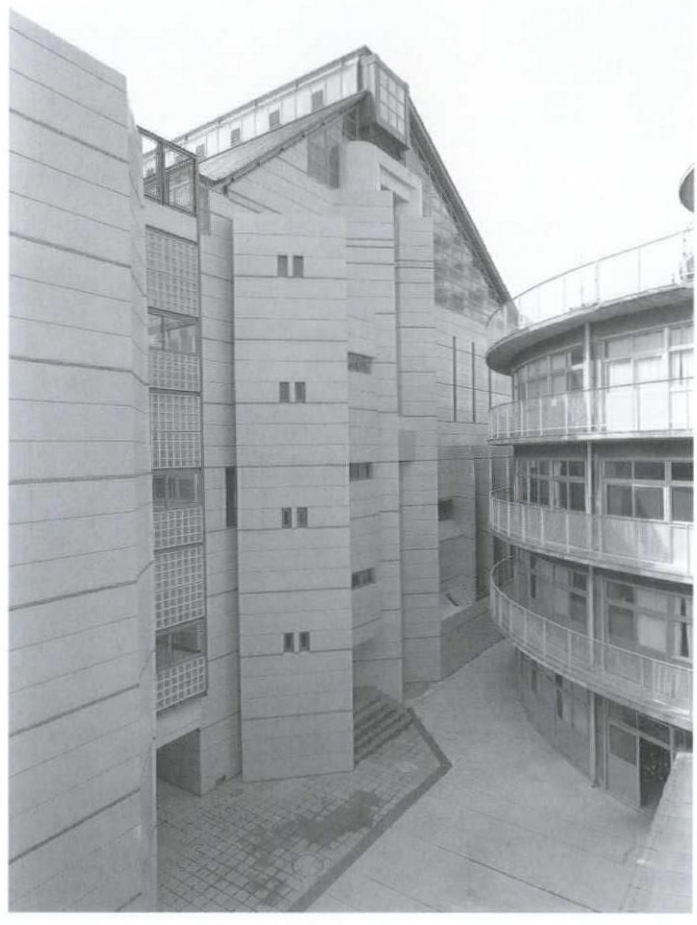




配置図



断面パース



この作品は3つの顔を持つことを義務付けられていた。その1は四天王寺という境内にあり、その建築的環境との整合である。その2は四天王寺学園という知育、徳育、体育という三本柱の教育理念の実践空間の具現であり、その3は、古来より日想感の体験として培かわれてきた西側参道の都市景観への融合と寄与である。

ここではそれらを建築目的と呼応して、単純に3つの建築形態とそれらの造り出すふたつのはざまを徳育の場として生徒達（女生徒）の心の深奥に沈殿する空間を求めたものである。

これらの配棟には開校を続けながら工事を進めなければならないという学園側の事情と、それにもまして古刹四天王寺という歴史的遺産の中での建築*というふたつの命題を克服するためにとられたブロックプランでもあった。従って体育館を縦に真二つに分けての建築という例を見ない計画となり、その解としての偏芯した棟持柱による龍骨構造がこの建築を特徴付けることとなった。

結果的には東西の両棟が中央の巨大空間に控えながら夫々の環境に対応し、その間に個の和を醸し出す建築ができ上った。

＊発掘調査による基礎と建築の制限

所在地：大阪府大阪市
建築用途：体育館、教室
共同設計者：坪井善勝研究室・青木繁研究室（構造）、山口建築環境研究所（設備）
構造：SRC造
敷地面積：11,821m²
延床面積：6,917m²
竣工年：1985年12月

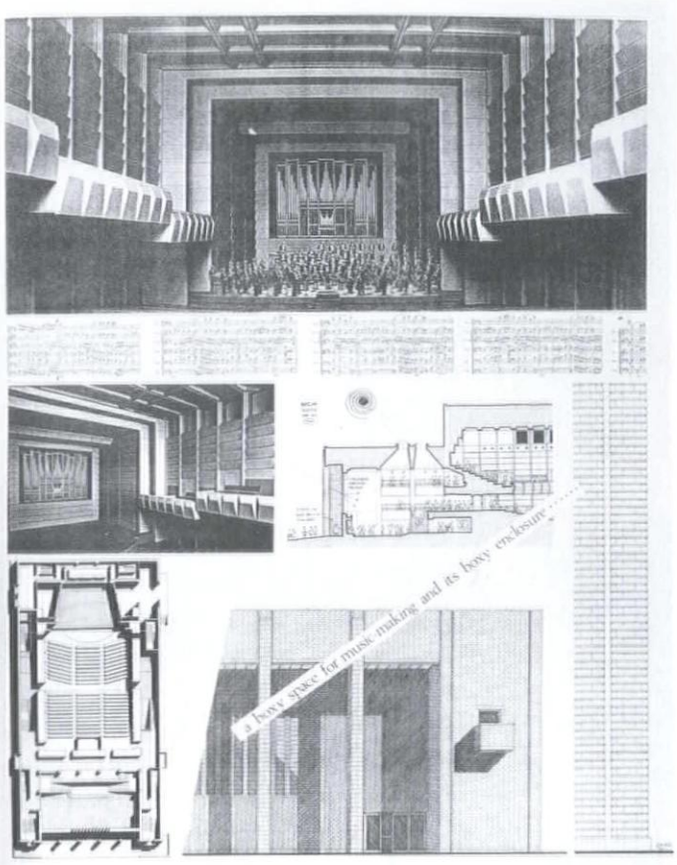
なかじま・たつひこ
1940年大阪府生まれ。中嶋龍彦建築事務所主宰



写真（右2点）＝新建築写真部

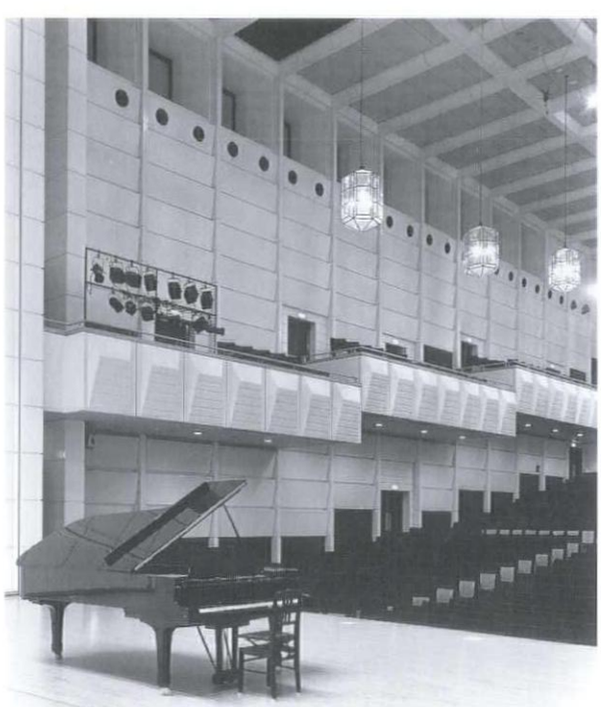
三上祐三

洗足学園大学・前田ホール









この作品は、出展したドローイング・模型とまったく同じ形で竣工した。完成後の音響性能は、設計時に石井聖光先生と想定した通り非常に優秀で、音楽関係の方々から高く評価されたのは嬉しかった。

また朝日・毎日新聞等の一般紙にも広く紹介されたため、「シューボックス型」という言葉が本ホールや磯崎新さんのノバホールの出現を機に一遍に普及し、その後全国各地にシューボックス型の音楽専用ホールが多数建設される契機となった「草分け」でもある。

インテリアについては、出展時に槇文彦さんから「ピューリタンの教会を思わせて禁欲的」と評され、完成後には金 寿根さんに「吉村順三先生の影響が見られて非常に日本的」といわれたのが私にはおもしろかった。

このホールを見た東急グループから、作者は渋谷の東急文化村のオーチャードホールの設計を依頼された。SDレビューの効果と発展性は、けだし絶大なものがある。特にアトリエ派にとっては。

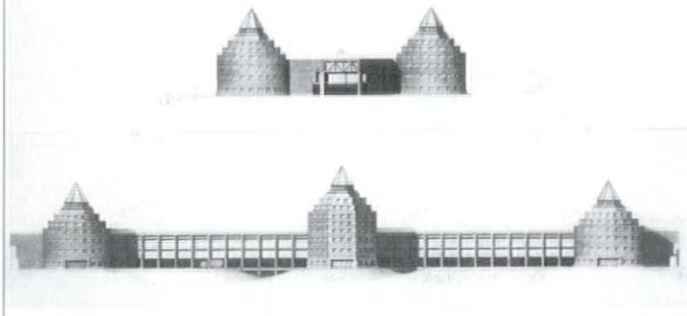
所在地：神奈川県川崎市
建築用途：クラシック音楽ホール・式典場
共同設計者：石井聖光／東京大学生産技術研究所（音響コンサルタント）、武藤構造力学研究所（構造）
構造：SRC造
敷地面積：56,544m²（学園全体）
延床面積：6,534m²
竣工年：1984年

みかみ・ゆうぞう
1931年東京都生まれ。MID総合設計研究所代表

写真（右3点）＝川澄明男

荒 知幾

ゴールドウィン富山工場





ゴールドウィン工場計画の記憶

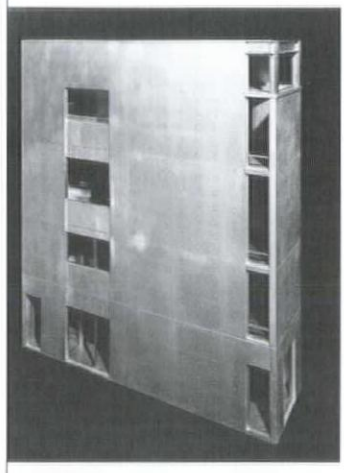
私が、イタリアでの建築デザイン修業から帰国して、日本での活動を開始した頃の計画で、基本構想は、フィレンツェに行き、スーパースタジオのアトリエで行ない、プレゼンテーションは、東京の私のアトリエで行なわれた事を記憶している。イタリアにおけるドローイングとは、ルネッサンスからの伝統である、アルベルティのドローイングが示す様に、建築家の哲学、思考、イメージを表現する手段として、それ自体作品的意味を持つものである。この計画は、施主の経済的理由のために実現できなかったことは残念だが、計画案は現在でも「永遠の記憶」として存在している。「工場は、南北に一直線に長く低く構築され、1階部分を道路が貫通している。それは、柱廊空間であると共に、北陸地方の巨大な雁木空間である。幾何学的な形態の集合体である「長い記念碑」は、丘陵の自然に対比的な共存を目的とした。小さな都市である」。

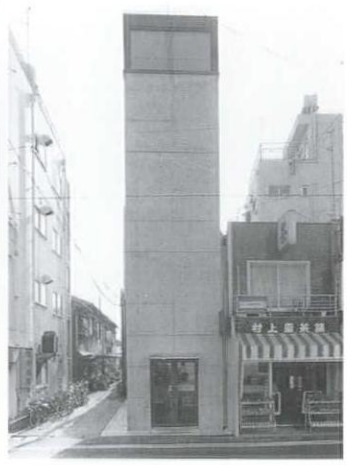
所在地：富山県小矢部市
建築用途：工場および事務所
共同設計者：クリスティアーノ・トラルド・ディ・フランシャ（スーパースタジオ）
構造：RC造
敷地面積：116,500m²
延床面積：57,500m²

あら・ともいく
1950年東京都生まれ。必募当時スタジオ・トモ・アラ建築デザイン研究所代表。現在スタジオ・トモ・アラ・アソシエーツ代表

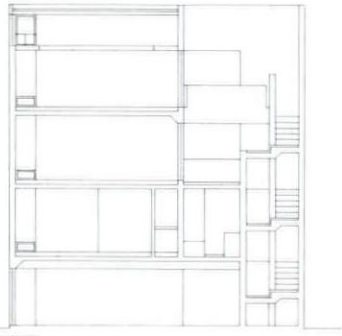
安藤忠雄

茂木邸









断面図

写真（右上、左下）＝安藤忠雄建築研究所

依頼を受けた敷地を訪れた。

北と東の2面が大小の道に接した目前の極小の土地は、建築が成り立つ場所としては極限に近く、まるで建築する行為を拒否しているかのようであった。

このような狭い敷地は、はたして人が生活を営むための豊かな空間を生み出すことが可能なのだろうか。また密集した環境の中で、たったひとつのユニットを立て替えたとしても、それは建築のレベルに達するものなのだろうか。このような不安ともいえる疑問が、襲いかかる。敷地は明らかに不可能を表明している。

しかし、私はここに建築することの意味を問い直してみた。無から有を生み出す建築行為は、決して観念だけの遊戯に終わるのではなく、現実という確固とした基盤の上に成立するものである。私は考え得る限り考えて、その末に、この困難な状況に取り組んでみようと思い至った。細長い敷地に、間口2.5m、奥行き10mの建物をつくり、文房具店と、夫婦とふたりの子供のための居室を階段を中心にして配した。建物の一辺、2.5mという寸法は、西洋の壁の厚さに匹敵する。したがってこれは、あたかも一枚の壁をくりぬいて、住まいをつくろうとするようなものである。

1階を文房具店とし、奥に設けた階段状の中庭によって、2階のリビングルーム、さらに3階の寝室、4階では、デッキを渡って子供室へと達することができる。屋根裏部屋は、子供たちの寝室である。

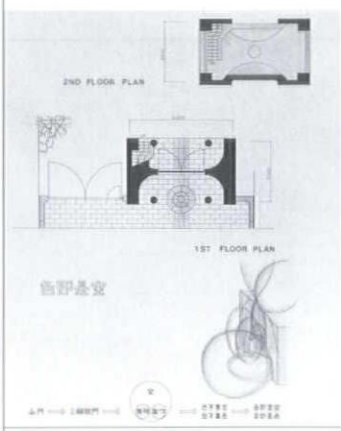
極小に近い寸法と格闘することによって、ともすれば慣れに陥りかけていた寸法に対する感覚が、新たに塗り変えられた。

所在地：兵庫県神戸市
建築用途：住宅
構造：RC造（壁式構造）
敷地面積：32.1m²
延床面積：94.7m²
竣工年：1983年

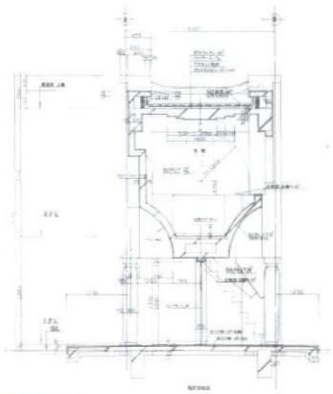
あんどう・ただお
1941年大阪府生まれ。建築家

大浦洪二

釜山海高徳寺山門



FUZANKAI KOTOKUJI SANMON. 1983
DESIGNED BY KOJI OURA



断面詳細図





写真（下2点）＝大浦洪二

2階に鐘楼を持つ山門である。仏教の最終目的である、涅槃の境地に入るため、通らねばならない「空・無相・無作」の3つの解脱門を現す。その昔、仏教伝来時に人々が抱いたであろう新鮮な喜びと驚きを、形骸化した伝統様式のコピーでなく、無相・無作を包含した「空」として造形する。陰（凹部）を具象化し、接する外部空間に、陽（凸部）を思考させる。波紋状の曲線で空間への広がりと、仏智が無限に広がる様を現す。ファサード両端は、仏の慈悲の掌であり、万人に対する慈しみを現す。事物の実相を照らし、惑いを断って悟りの境地に導く、あるいは、心に照らして自分を顧みる、という意の「智慧」を現すため、仕上げは花崗岩本磨きの鏡面を主とする。

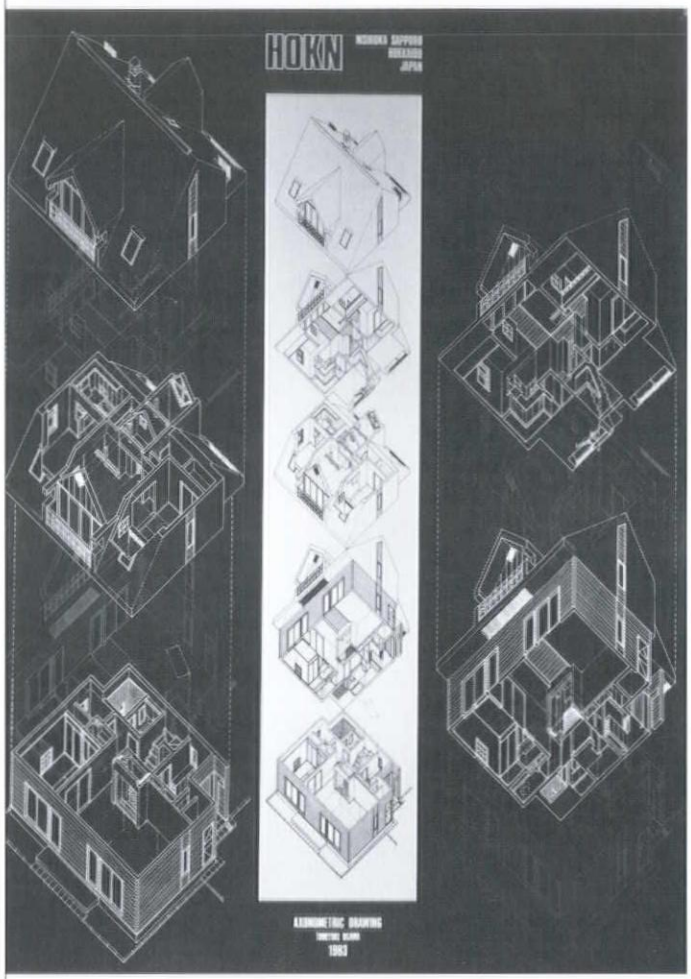
ファサード最上部両隅を、出展時より彫りを深くし、アールを際立たせたことで、当初のイメージを、さらに強調できたと思う。

所在地：佐賀県唐津市
建築用途：寺院山門
構造：RC造
敷地面積：1,315.69m²
延床面積：21.00m²
竣工年：1984年

おおうら・こうじ
1941年佐賀県生まれ。おおうら設計事務所代表取締役

小川富之

西村邸［HOKN］



札幌市の南、西岡に計画されたこの住宅は、西に円山・藻岩山を望む新興住宅地に建つ住宅である

計画は生活の中心を2階に配し、ストーブを1階の中心に据えた、中心性の高いニュートラルなものとし、プライベートな空間とパブリックな空間を小さな吹抜と階段室で解放し連続させている。

形態は大きな矩勾配の三角屋根の平に、居間と階段が内在するドーマーを軸にした対称性の高いフォルムで、アイデンティティを高めることを心掛けた。

ごく普通の敷地に、極普通の家を、ごく普通につくることがこの家のテーマである。

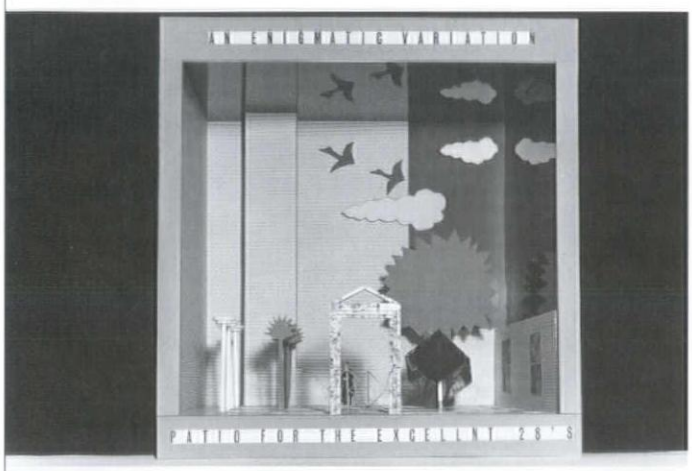
北の住まいの雪や内（家）の温かさに対する配慮はとかく付加的な技術による解決方法にたよりがちだが、空間や形態のもつ豊かさやその本質を大切にすることで対応していきたい。

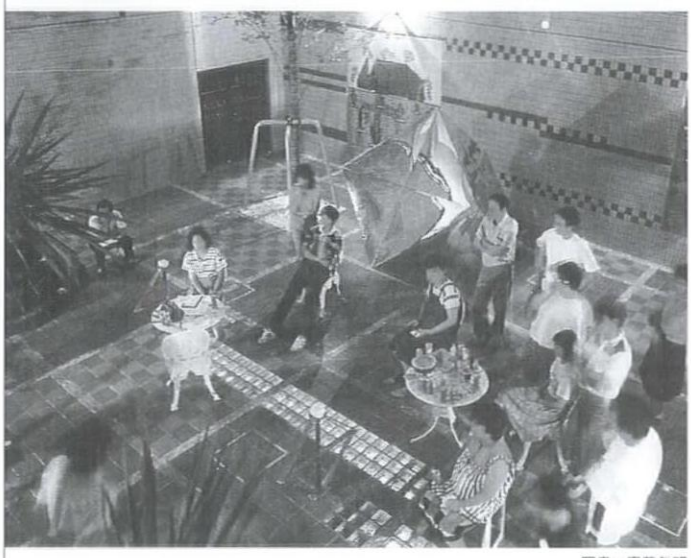
所在地：北海道札幌市
建築用途：住宅
共同設計者：長谷川 徹、山崎敦子、新具孝之、野際卓司
構造：木造
敷地面積：272m²
延床面積：109.95m²

おがわ・とみゆき
1953年生まれ。小川富之建築工房主宰

齋藤年明

28家族のための小広場（レスポワール上福岡）





写真＝齋藤年明

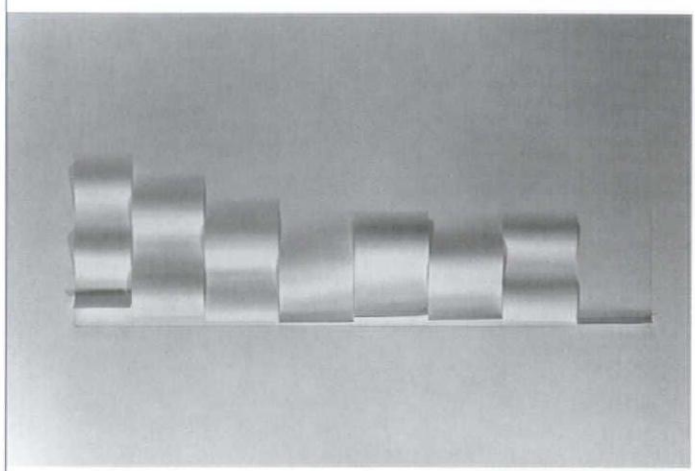
分譲マンションを配置した敷地の残余部分に巨大な浄化槽が埋め込まれ、その上を小広場にする提案は方向性の見えない建物の床に幾何学的秩序を与え、正方形を基準としたアートを軸線上に配置することで求心性を得ようとした。分譲マンションという性格から、目に見えない28家族のためにアートではあるがポップなものを選択する意志は、出展作も実現作も変わっていない。当時の気分がイエロー感覚に感染していたことも相まって選択したモノ達はその感覚基準に従っている。AN ENIGMATIC VARIATIONはタイトルだけダギーフィールズ絵画のひとつからの引用だが、この不可解なモノ達の組み合わせがその後第三者によって替えられ、竣工当時からすると変質してしまった原因は探らなくてはいけない。建物の所々にみるチープな装飾も小広場の意図とはかけ離れており、アイロニーとしてのイエロー感覚が正直にチープと同居してしまった結末は、建物のデザインにまでイニシアチブをとれなかったところに原因がある。

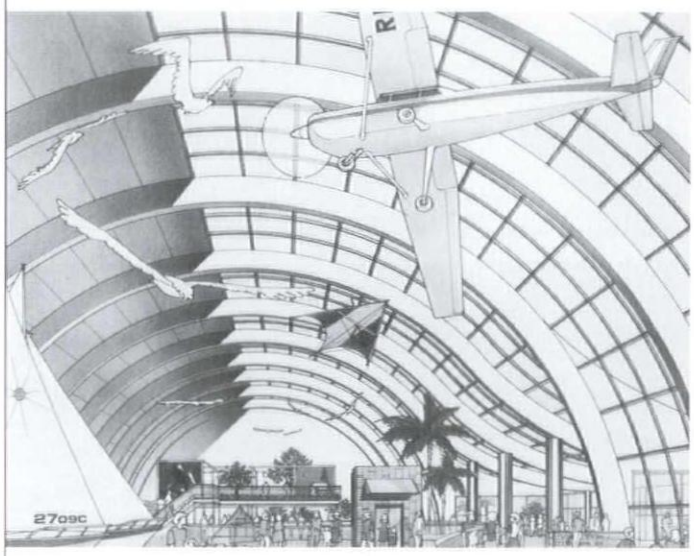
所在地：埼玉県上福岡市
建築用途：小広場
共同設計者：山崎稔（立方体の中の宇宙）、川村易（壁画）、アートフロント（協力）
敷地面積：126m²（小広場）
竣工年：1984年4月

さいとう・としあき
1953年群馬県生まれ。応募当時千葉建設勤務（現在（株）リプラン）。現在アトリエCENTNEN主宰

鈴木エドワード

サンテラス　ユニー





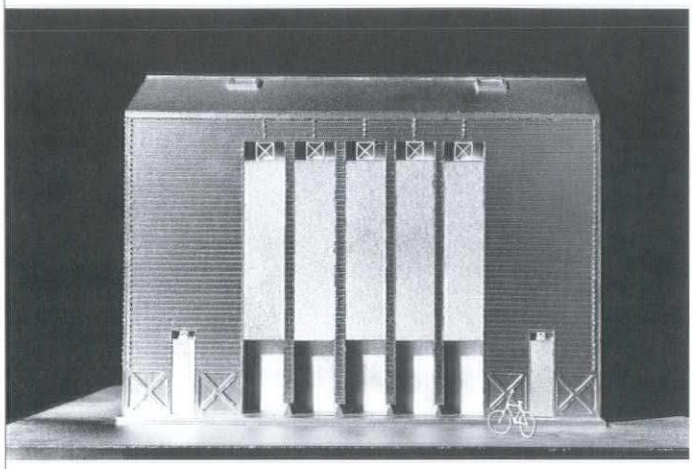
冬が長く寒い町に夏を運んでいこうというのが、このショッピングプラザの出発点だった。ストア・コンセプトとしては「comfortable and tasty」、イメージ・キーワードは「bright and breezy」。最上階にボールト型の空間、そして建物の中心にはボイドを儲け、光・風・時の流れで全空間を結んだ。

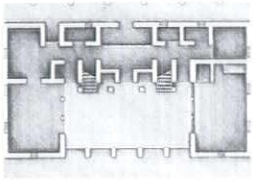
建築用途：ショッピング・プラザ
共同設計者：内田繁（ディレクション）、青木満（コンセプトワーク）、スタジオ80（インテリア）、レンダリングハウス（パース）、スペースシステム（協力）
敷地面積：11,286.0m²
延床面積：27,292.5m²

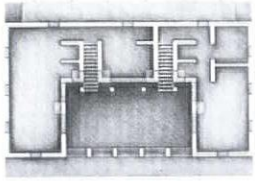
すずき・えどわーど
1947年埼玉県生まれ。鈴木エドワード建築設計事務所主宰

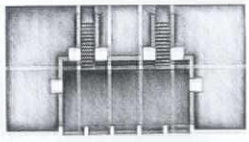
高松 伸

六地蔵の家









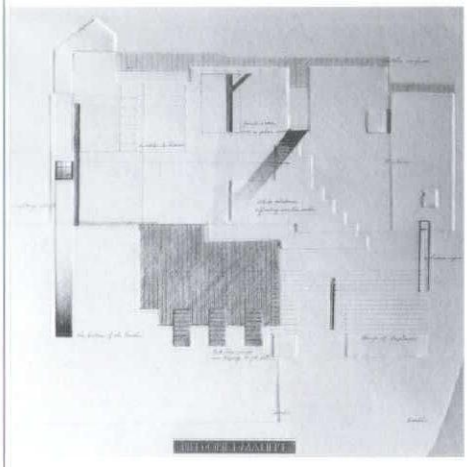
テッセノウを思わせる小さな箱、それはこれみよがしな饒舌へとふくらみもせず、かといって寡黙なるものの凶々しさへと切りつめられることもない。その中に矩形の余白を残して配置された3つの垂直の箱。その箱の先端には天井まで届くトラス状の光塔が配され、その布置は屋根に穿たれた穴と正確に符号する。こういった箱と余白と光のいわば漂白された配列を縫ってピンクの細々とした架構が横断する。この緩い等方性の空間では大仰なオブジェの差異による凝固した力動性や、形式的なるものに戒められるまことしやかな演舞など産まれはしない。視線はそれぞれの等方の網にいくらかは、からまりながらもその表面を等速ですべってゆく。時間は流れもせず淀みもしない。昼もなく夜もない。そんな深さを欠いた病理的な空間は、たぶんもともと結像への負荷を携えてあった事物とその配列が唐突に病み疲れ弛緩した時にこそ可能となるのだろう。これは秘めやかな失速の空間である。

所在地：京都府宇治市
建築用途：住宅
構造：木造
敷地面積：240.89m²
延床面積：138.98m²

たかまつ・しん
1948年島根県生まれ。応募当時高松伸建築設計事務所主宰。現在京都大学工学研究科教授

巽 順

I氏のアトリエ





写真＝藤塚光政

＜I氏のアトリエ＞は、当時、早稲田大学の池原研究室に在籍していた私の修士論文の一部として、設計した作品です。展覧会の約1年半後、クライアントがひとりで暮らすアトリエ的空間であったことと、私の作品に対してよく理解していただいたことが幸いして、ほぼ計画通りの形で竣工しました。一番奥の「背景の壁」に導びかれて玄関を入ると、吹き抜けになっている「土間」からこの建物の構成が一目で見渡せます。

「山を形取られた階段の壁」「浮遊する2枚の床」「破られた壁の開口部」「そこに凛と残る柱」上昇した空気は、「光の筒」として「板の間」に出現し、その光を放ちながら地の底へと到達します。幾重にも重なる壁で囲まれた空間の中に、これらの「モノ」達はお互いの緊密な関係を保ちながら存在しています。

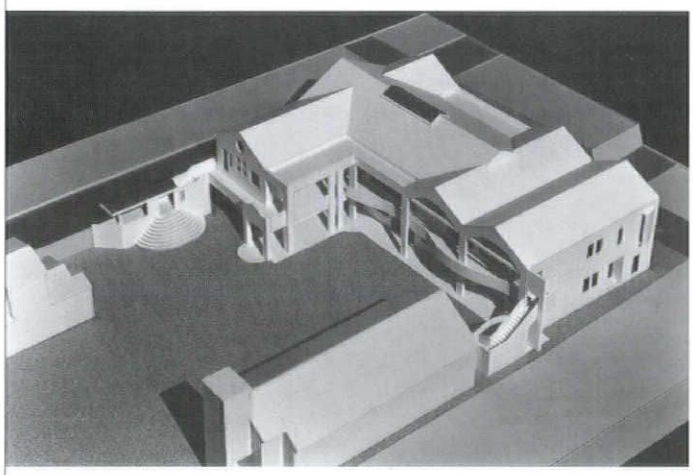
私にとって処女作であるこの作品は、「空間」と「モノ」の関係に対する初めての問いかけでした。そして今、この関係性を「シナリオを持つ建築」の構成として考え続けています。

所在地：神奈川県足柄下郡真鶴町
建築用途：専用住宅+アトリエ
構造：木造
敷地面積：162.75m²
延床面積：69.44m²
竣工年：1984年

たつみ・じゅん
1957年兵庫県生まれ。応募当時レーモンド設計事務所勤務。現在ベルセン建築計画代表

田村宏治

宮城カトリック学園・石巻カトリック幼稚園
（学校法人東北カトリック学園　石巻カトリック幼稚園）





写真＝田村宏治

『Progressive Architecture』誌のPA賞は、学生の頃からその動向に注目しており、日本でもこうしたプロジェクトを発表していく場があればと思っておりました。SDの場合には、実施を前提とした計画ということで、施主からの要望、敷地条件、コスト、社会の流れ等、様々な制約条件の中でデザインしていくわけで、コンセプト・イメージをいかに強く出し、新たなるものを構築していくか問われていると考えています。

この幼稚園は、ほぼ応募した作品と同じかたちで切妻屋根の重なりで教会の幼稚園としての雰囲気をかもし出すようにしています。現在は、少子化に伴い3才児保育のため一部改修していますが、竣工時のまま大事に使用しているようです。

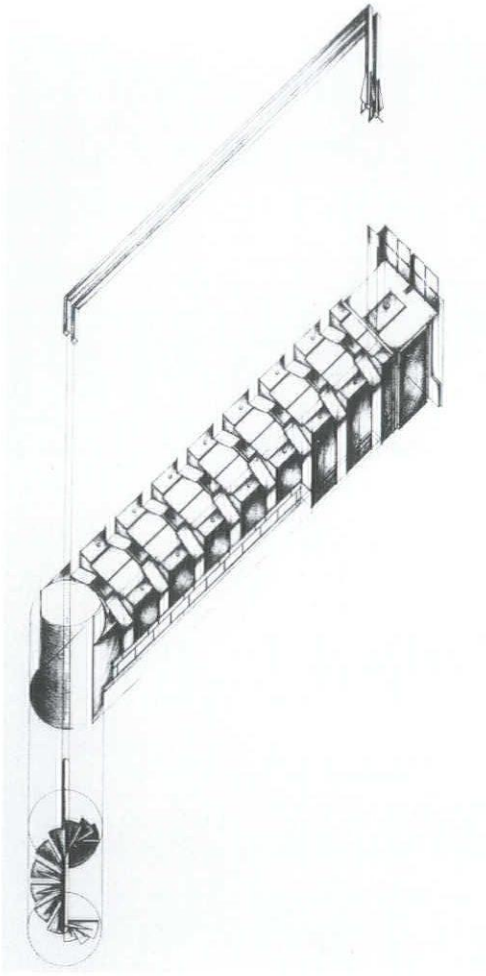
既設の木造の教会・司祭館が古くなっており、いずれこれらの建築に携ることができれば、時間の流れの中での私の変容も加わり、より一層地域に融けこんだ建築群が形成されてゆくでしょう。

所在地：宮城県石巻市
建築用途：幼稚園
共同設計者：宮城弘明
構造：RC造2階建
敷地面積：2,058m²
延床面積：913m²
竣工年：1983年10月

たむら・こうじ
1947年岩手県生まれ。みちのく設計所属

中野誠一

苦楽園の家（小西邸増築工事）



「穴ぐら」といえば、恐怖感とともに、ある種のあこがれを抱く。帰胎本能によるものかもしれない。

小西邸の敷地は、道路から3mほど高い所に地盤面がある。2階からは瀬戸内海を見渡せる。もともとは、ここにスカッシュコートの上屋をデザインすることが主な仕事だった。

が、地盤の落差を生かしたアプローチを考えているうちに、いっそのこと、トンネルを掘って、そのドンツキで上部に出るようにしようということになった。この時点で、デザインの主眼は、このトンネルの方に移行した。

幅2.1m、長さ15mばかりのトンネルは、ギャラリーとしても利用される。建築主が楽焼をたしなんでいらっしゃるからだ。

このリニヤーな空間を、単調さを回避しつつ、よりリニヤーに見せるために、付柱およびハンチをリズミカルに付与した。それは、構造的必然性をも暗示する。そして、人工照明光と自然光とが交差する位置に地上への出口をかいまみる。緊張と安堵……。そのはざまに空間を感じとる。

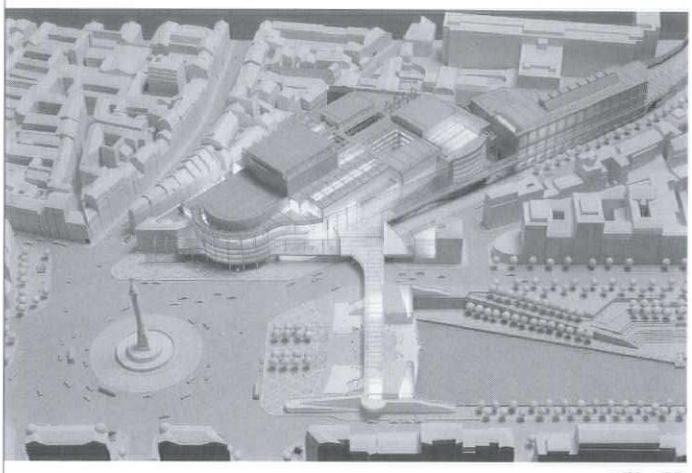
所在地：兵庫県西宮市
建築用途：住宅
共同設計者：山本博之、村上巧、中村幸一郎
構造：S+RC壁構造
敷地面積：508.53m²
延床面積：136.84m²

なかの・せいいち
1953年生まれ。応募当時大阪大学大学院博士課程および都市空間研究所

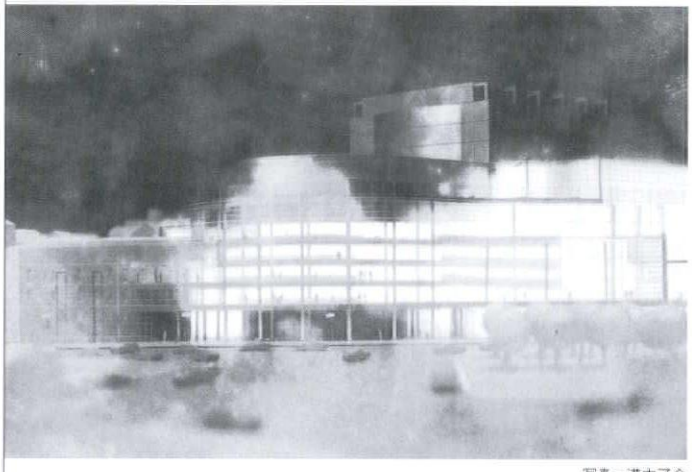
鹿島建設建築設計部

パリ、新オペラ座国際コンペ［入選案］

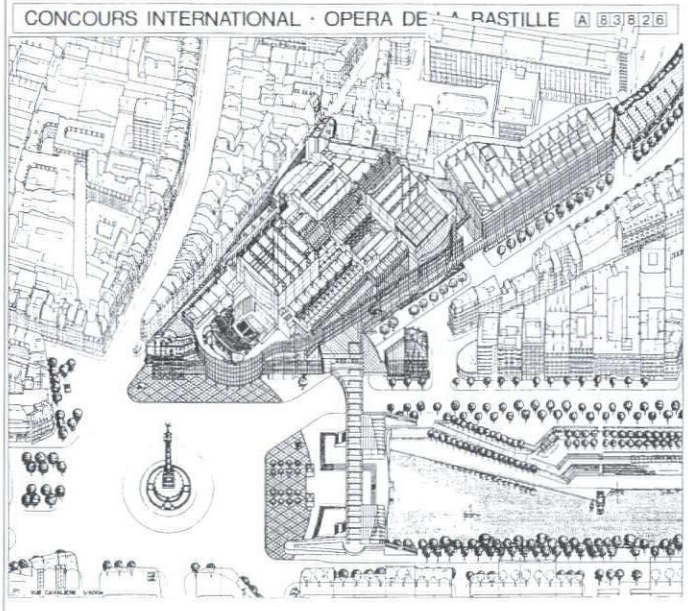
招待



写真＝畑亮



写真＝溝内了介

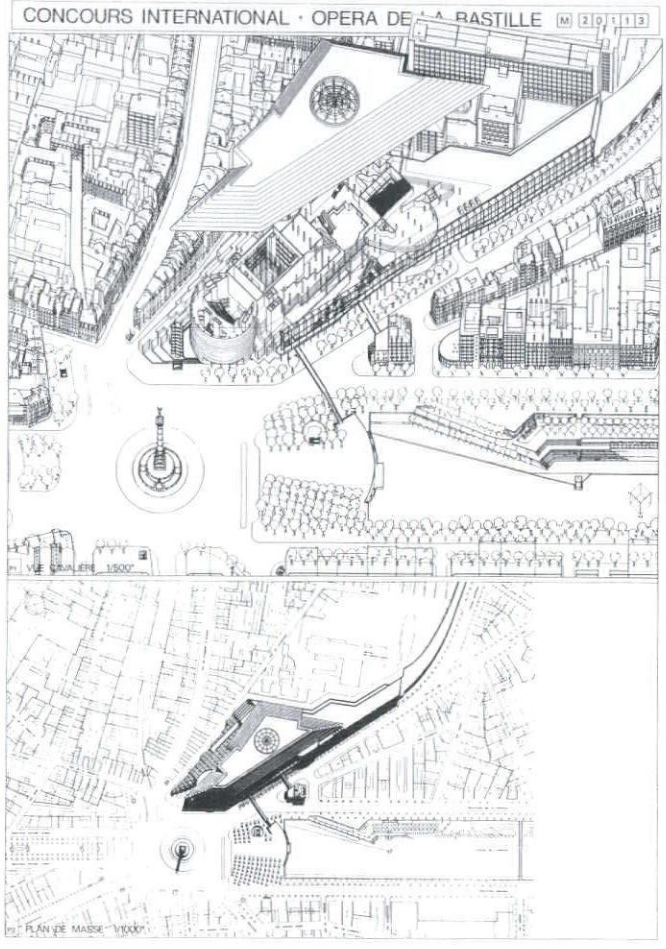


設計者：由里知久、若松久男、坂本弘之、北典夫

竹中工務店大阪本店設計部

パリ、新オペラ座国際コンペ［入選案］

招待

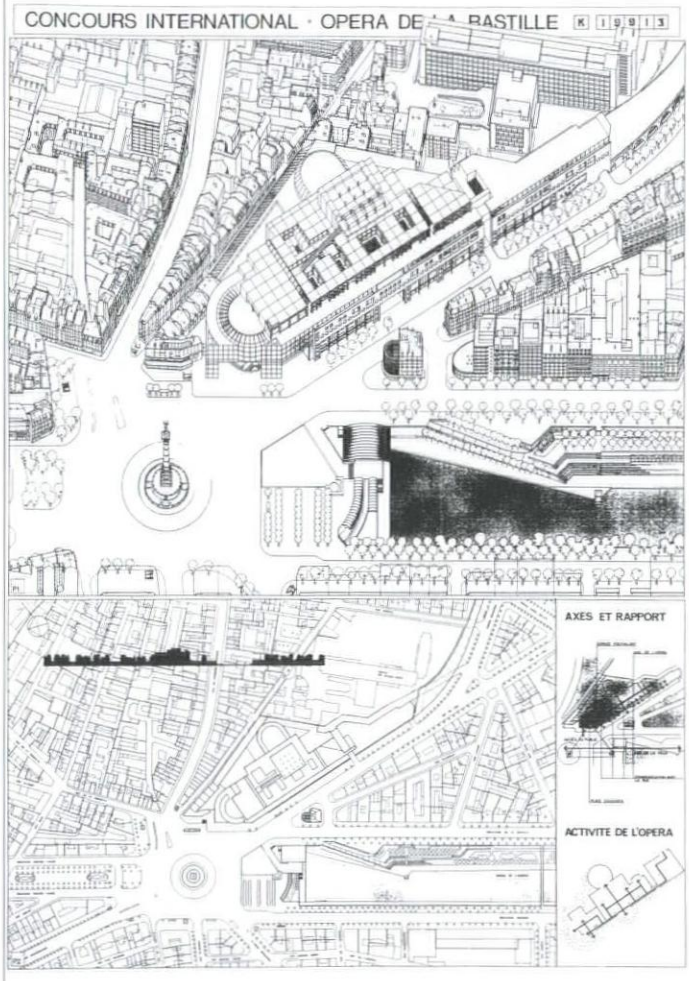


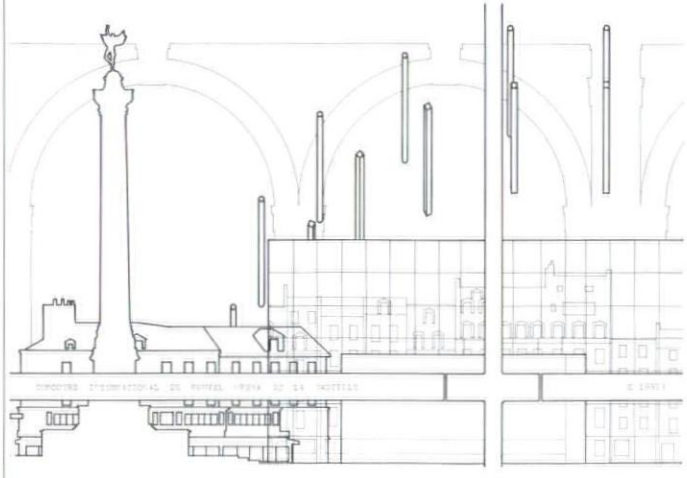
設計者：三国泰路、永田祐三（現在：永田北野建築研究所）

福沢健次＋小宮山昭

パリ、新オペラ座国際コンペ［佳作案］

招待



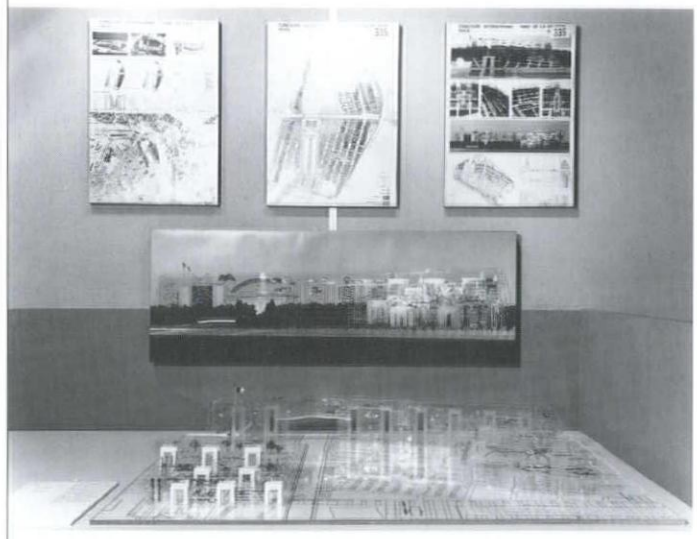


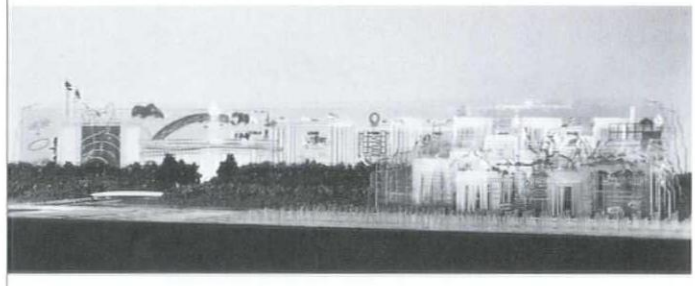
共同設計者：岡房信、赤堀忍、榎本哲也、伊藤寛、増田多加男、柳沢勝義、小平恵一、高橋典子、根本恵子、田中文子

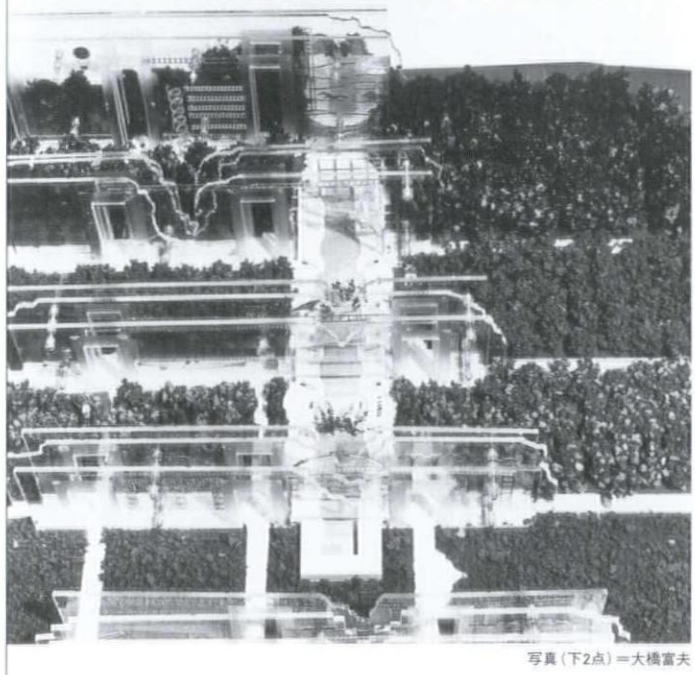
原 広司

パリ、ラ・ヴィレット公園国際コンペ［入選案］

招待







写真（下2点）＝大橋富夫

設計者：原広司、中村善一
協力者：アトリエφ、ZEN、東京大学原研究室

第3回　1984年



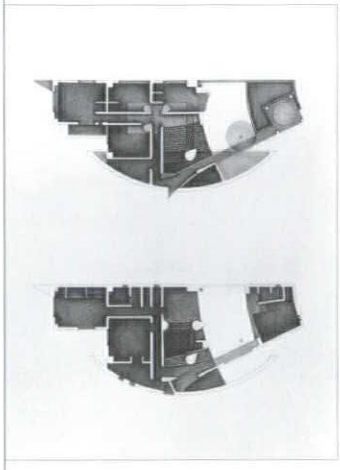
東京展：10月16日～10月29日
第1会場：ヒルサイドギャラリー
第2会場：ヒルサイドテラスE棟ロビー
審査員：槇 文彦、竹山 実、山本理顕、八束はじめ
応募総数：94作品
入選数：18作品、招待1作品
受賞者：
高松 伸（鹿島賞）
竹ノ内一雄（朝倉賞）
鈴木了二（SD賞）
小宮山 昭（SD賞）

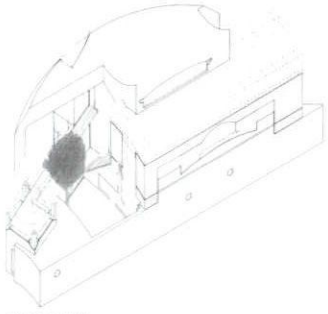
石田敏明　浦崎の家
井上揺子　二世帯の家
海老塚耕一+菱沼利行　東八幡平帰蝶山荘
片岡山訓　かねす蒲鉾本舗本社屋
木村丈夫+野田俊太郎　株式会社コサカ本社社屋
黒川哲郎　MAISON FORMURA 1984
小林克彦　小笠原社宅
小宮山 昭　FEV HOUSE
小屋雅義+大内 栄　KOYA APARTMENT HOUSE
鈴木了二　杉並の住宅ー物質思考13
高松 伸　修学院の家II
竹ノ内一雄　石幡邸［径と広場のある家］
中澤王久東　ATLANTA'83 KATSURA・PART I
中野佳子　衣笠の画廊喫茶
能勢修治+永井久美　東北タマヨシ
早川邦彦　SHIRASAGI COMPLEX
若林広幸+角野充俊　ライフイン京都
渡辺武信　池田病院
槇 文彦（招待）　M山荘

高松 伸

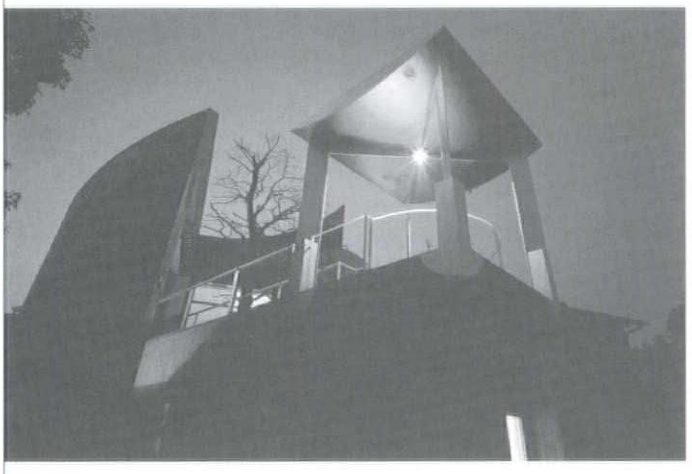
修学院の家II［欠けた刃］（修学院の家II）

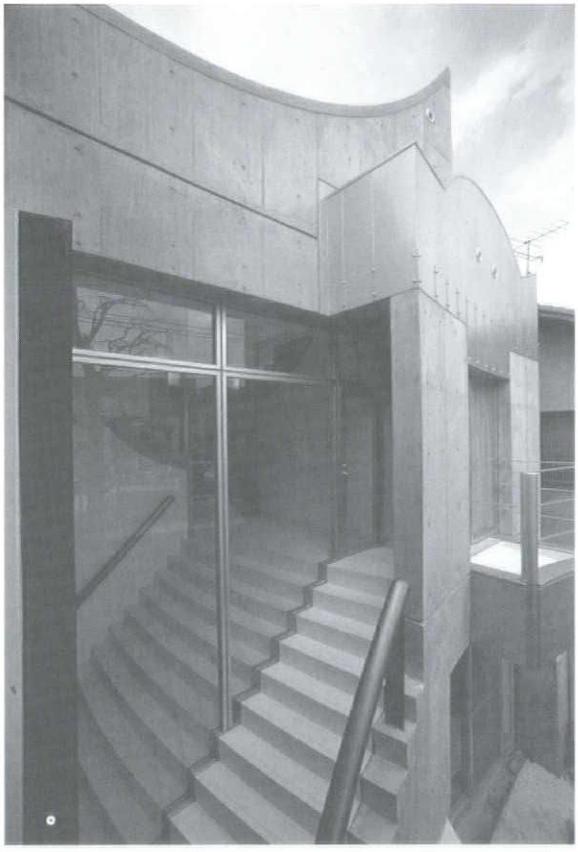
鹿島賞

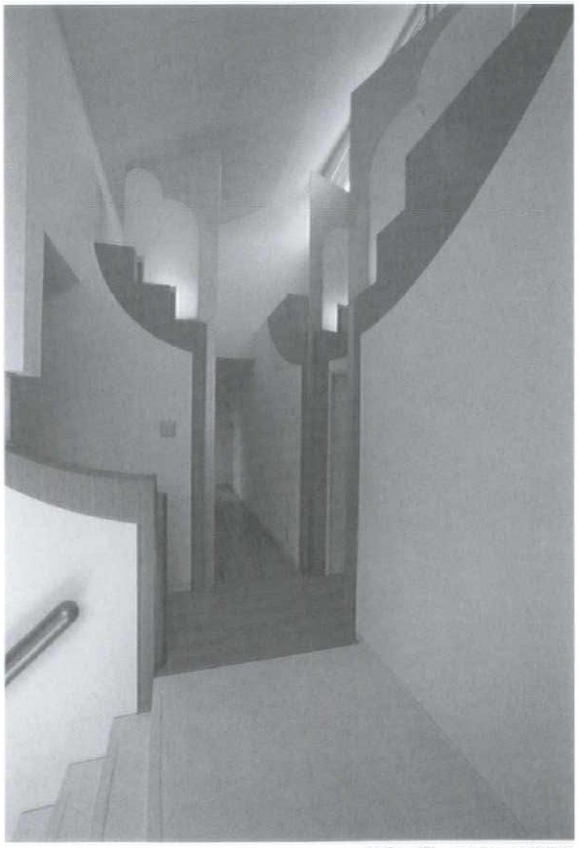




アイソメ図





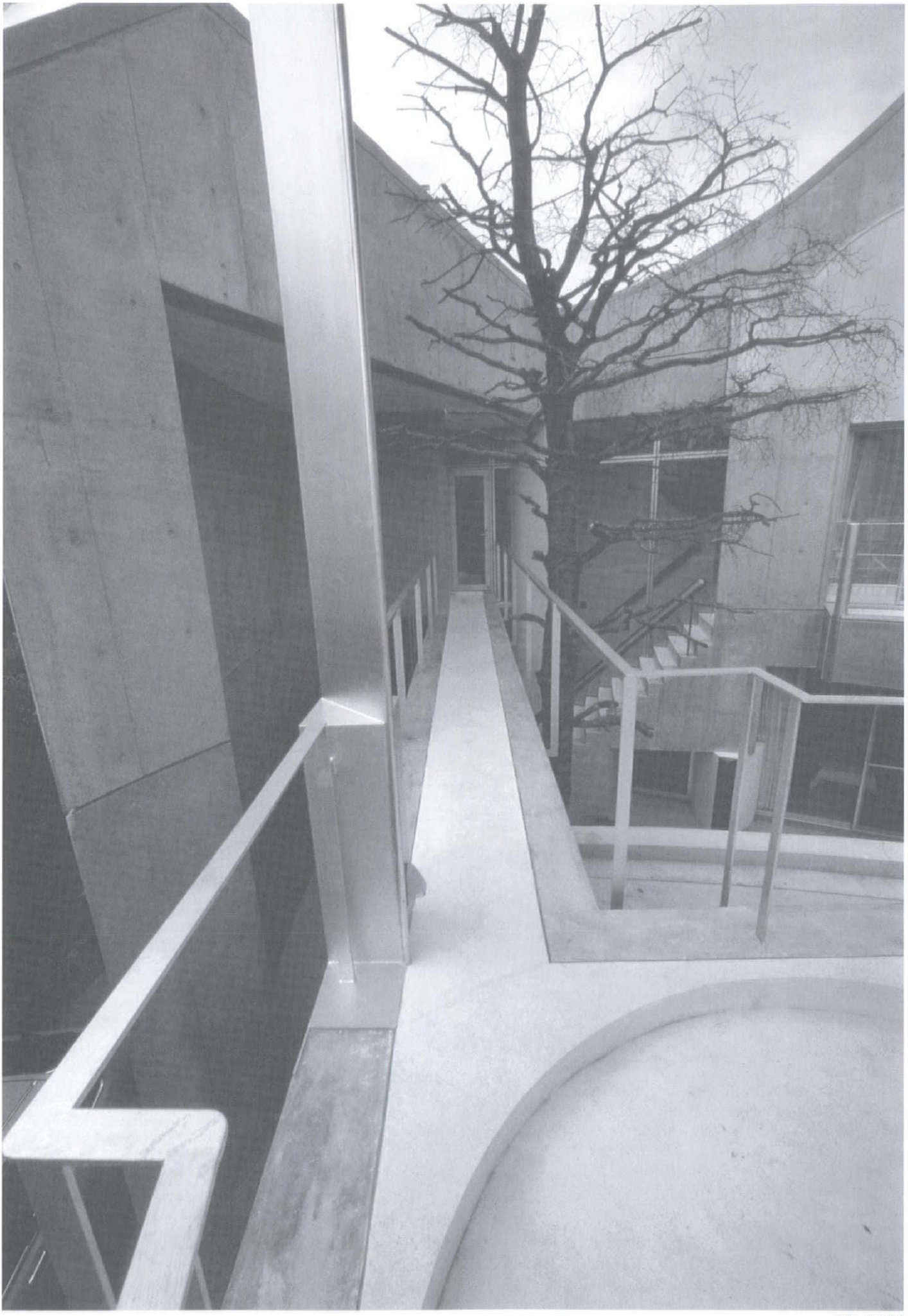


打ち損ねた刃物のように北に向かって歪に反り返ってゆく土地のほぼ重心にあたる位置に、自信たっぷりの庭師によって執拗に剪定されたに違いない樟がある。その朱儒のような木を理由も無く残すことに決めた時、この建築は一種の欠損をのっけから受け入れてしまったと言える。希薄なグラフの海を運ばれてきたかの様に、切れ切れの形態が萎縮した重心の近傍に漂着する。抗い難い求心力と斥力の間でおもわせぶりな距離が測定され、弛緩した弦月状の軌跡が記録される。その軌跡に切り欠かれた空隙は曖昧に他を浸食しながら遠く苛立たしい円環を形成する。非積極的な循環運動……非扇情的な相貫もしくは相姦。砂上の言語の様に乾いた欲動と解剖室の生理の様に適度な湿度を持った痛覚が不意に精錬されないものだろうか。この建築もまた打ち損ねた刃である。

所在地：京都府京都市
建築用途：住宅
共同設計者：高松伸建築設計事務所
構造：RC造
敷地面積：266.67m²
延床面積：207.11m²
竣工年：1985年

たかまつ・しん
1948年島根県生まれ。応募当時高松伸建築設計事務所主宰。現在京都大学工学研究科教授

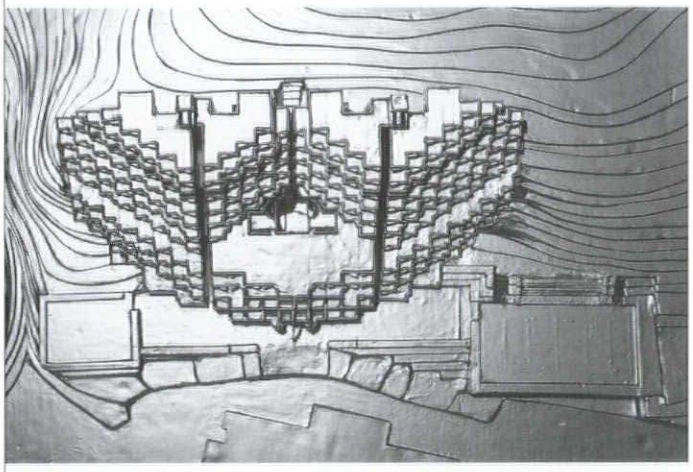
写真（左下、右2点）＝古館克明

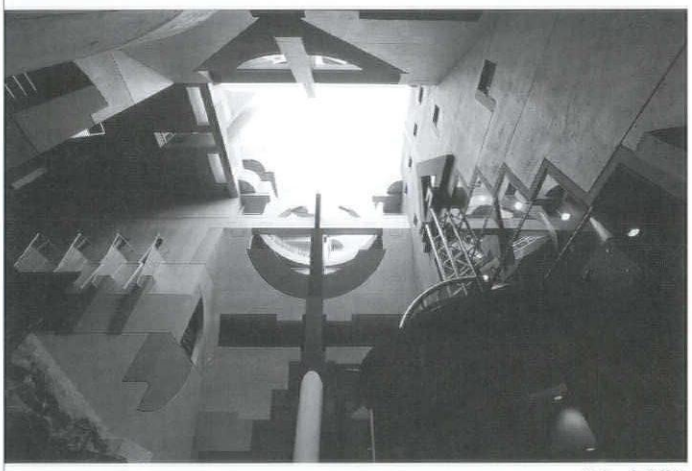


写真＝古館克明

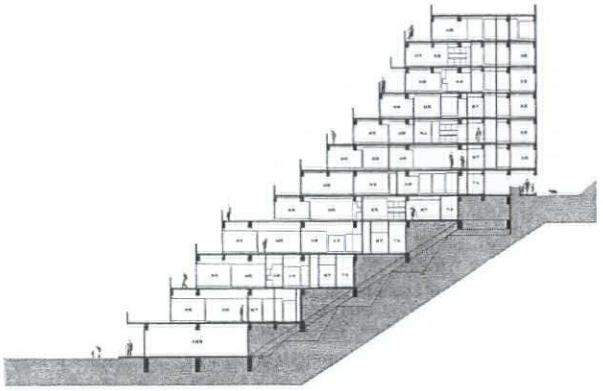
若林広幸+角野充俊

ライフイン京都

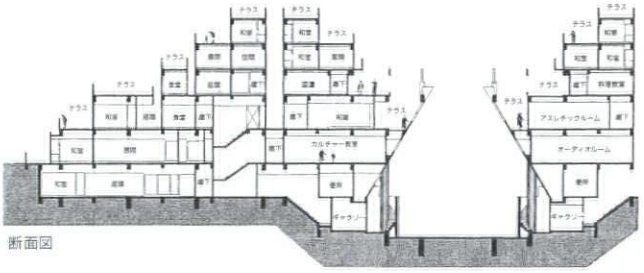




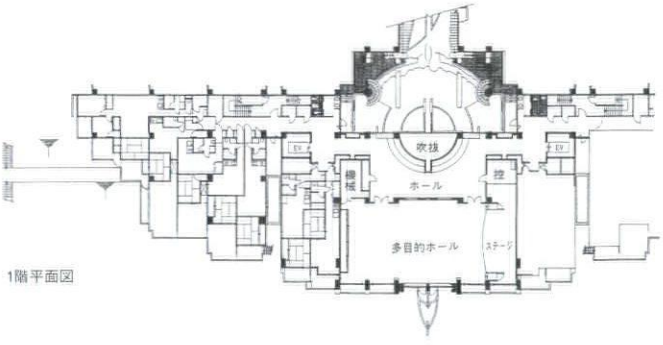
写真＝白鳥美雄



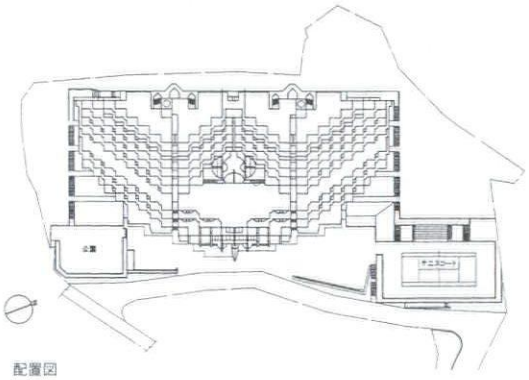
断面図



断面図



1階平面図



配置図

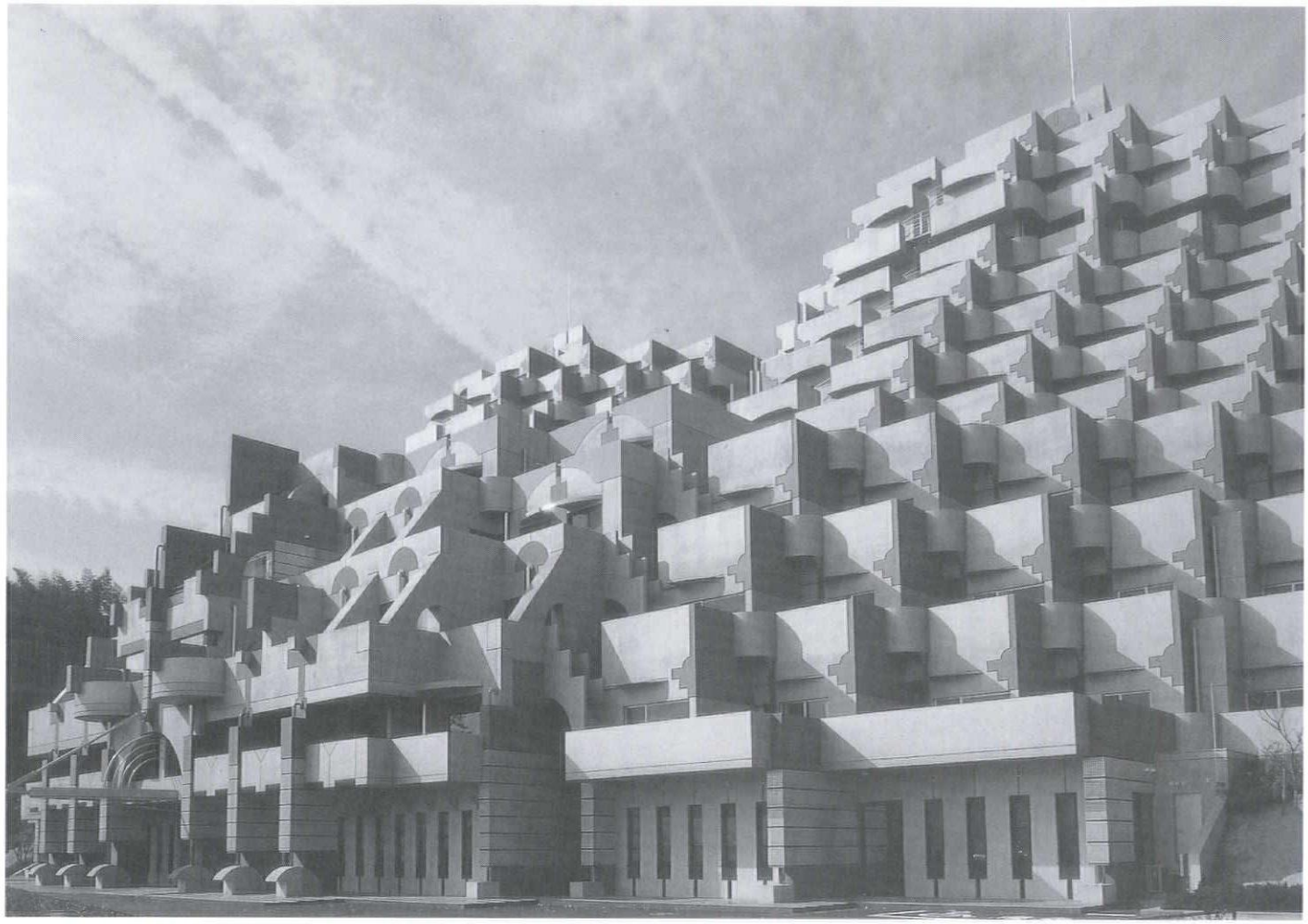
このプロジェクトは民間のコンペ形式で行われたものである。当時、京都市内で総工費30億円を超えるプロジェクトは数えるほどしかなく、京都の地元大手事務所との競争の中で、私を含め所員が4人、しかも開設して1年足らずの我々の事務所が勝ち取ったことは大変な驚きであったに違いない。しかし、これだけの大規模なプロジェクトという事もあり、クライアント側からゼネコンとのジョイントの提案がなされた。従って基本設計図と構造の基本図等々による概算入札を行い、業者決定を行う事になった。結果として、熊谷組、大林組、青木建設3社のJVが落札し、ゼネコンとの協働体制で実施設計を行っていった。施工金額の決定した中で、私自身設計上の思いは尽きる事無く、何百枚とスケッチを書き重ね、相当な無理難題を押し付ける結果となったが、この施設の設計思想に共感するスタッフの協力を得、前向きに解決していく事が出来たのは私にとって大変幸運な事であった。

完成した施設そのものは、従来の有料老人ホームの概念を塗り変えるものとして大変な話題となり、その後の同様施設に少なからず影響を与えるものとなった。

ただ、十数年経った現在、我々がこの施設の運営スタッフと共に話し合いを重ね、その結果作り上げた様々な設計上の重要な理念が、スタッフの入れ替わりと共に曖昧になってしまっているのが残念である。

所在地：京都府京都市
建築用途：有料老人ホーム
設計協力：角野充俊
構造：鉄骨鉄筋コンクリート造
敷地面積：12,446.54m²
延床面積：16,122.52m²
竣工年：1986年10月

わかばやし・ひろゆき
1949年京都府生まれ。若林広幸建築研究所主宰

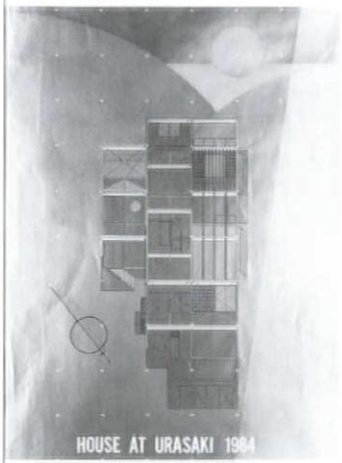


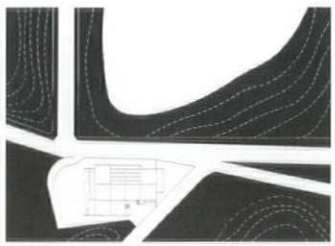


写真（2点とも）＝白鳥美雄

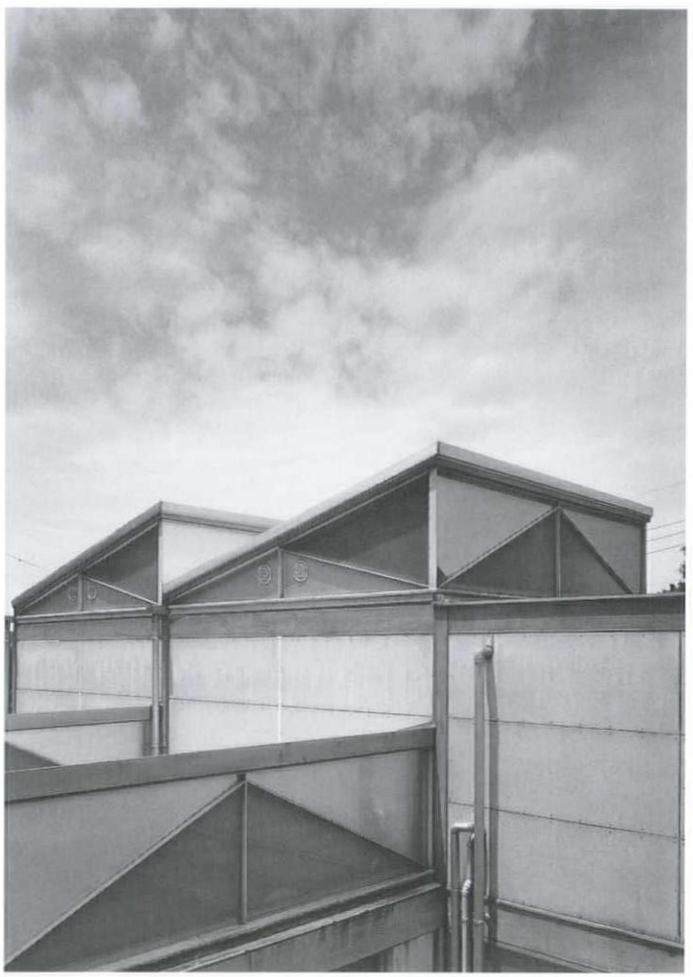
石田敏明

浦崎の家




配置図





写真（左下、右）＝平井広行

グリッドシステムのもつ強い空間属性に対して装置による空間の変換をテーマにした住宅である。均質なグリッドで規定された個々の場には依頼主から要求のあった必要な諸室が割り当てられ、自然条件と各室の関係性でその位置が決定され平面ができている。各室は室を構成するさまざまな装置で構成され、あたかも舞台装置のようなしつらえで機能を満たしている。つまり、架構の段階で同質であった個々の場は、各種装置を取り入れ組み合わせることによりそれぞれ固有の空間となっている。

これは私にとって独立後の処女作でありプロジェクト段階でどのように評価されるのかSDレビューに応募することで指標にしたいと思っていた。応募時点では躯体が出来上がりつつある時で、入選したことで確信をもって、竣工まである自信を持続できた記憶があり、応募時点からはほとんど変更なく実現できた。

所在地：広島県尾道市
建築用途：専用住宅
構造：木造+RC造+S造
敷地面積：430.07m²
延床面積：181.83m²
竣工年：1984年

いしだ・としあき
1950年広島県生まれ。応募当時石田敏明建築設計事務所主宰。現在前橋工科大学建築学科教授



2階平面図

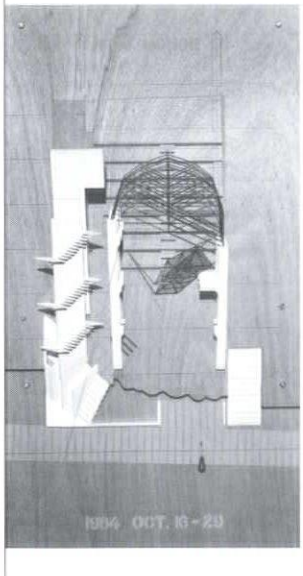


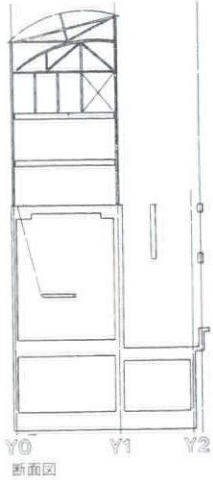
1階平面図

小宮山 昭

FEV HOUSE（4th）

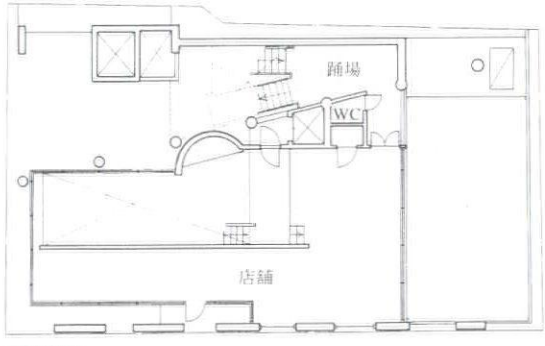
SD賞



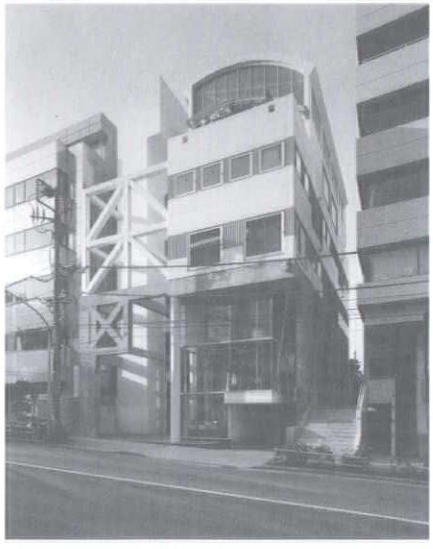


断面図





1階平面図





写真（右3点）＝白鳥美雄

SDレビューに応募した時は、建主といろんな議論をしている真っ最中だった。夢中で展示の模型を造った。建主にも代官山で展示をみてもらった。プロジェクトの初期の段階でドローイングか模型で考え方を公表してしまうのはとても良いことだと思う。その後、さまざまな現実的な問題で計画案が変更されるとしても、当初の記録が公にされることで実現された建築の成り立ちがより解るからだ。特に、公共建築では、建築家の最初のスケッチがもっと公表されるのを望みたい。

この建物は4分の1の比例関係で少なからぬ部分ができている。当時、私は記号論に凝っていた。正直いって今はそれほどでもない。しかしながら、建築を造る上で、建築的記憶や建築的参照によるのを出来る限り控えて、かといって思うがままにとは違う方法を私はいつも求めている。

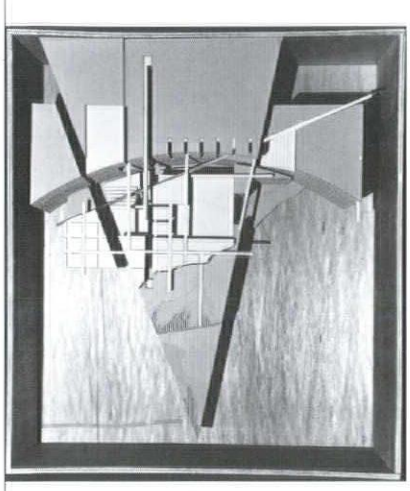
所在地 ：東京都渋谷区
建築用途 ：住宅
共同設計者：MUSA研究所（構造）、啓設備設計（設備）
構造：RC造一部S造
敷地面積 ：291.90m²
延床面積 ：892.01m²
竣工年 ：1985年

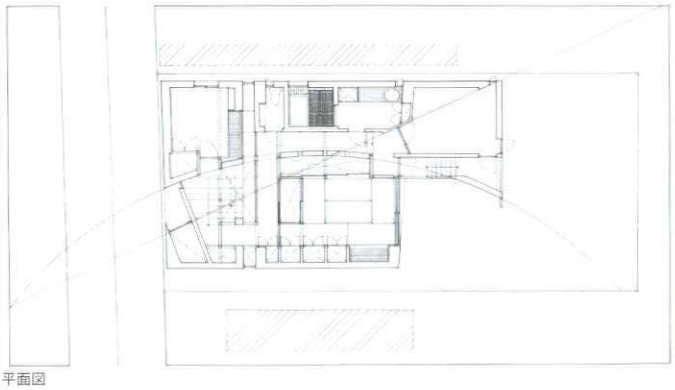
こみやま・あきら
1943年東京都生まれ。ユニテ設計・計画主宰

鈴木了二

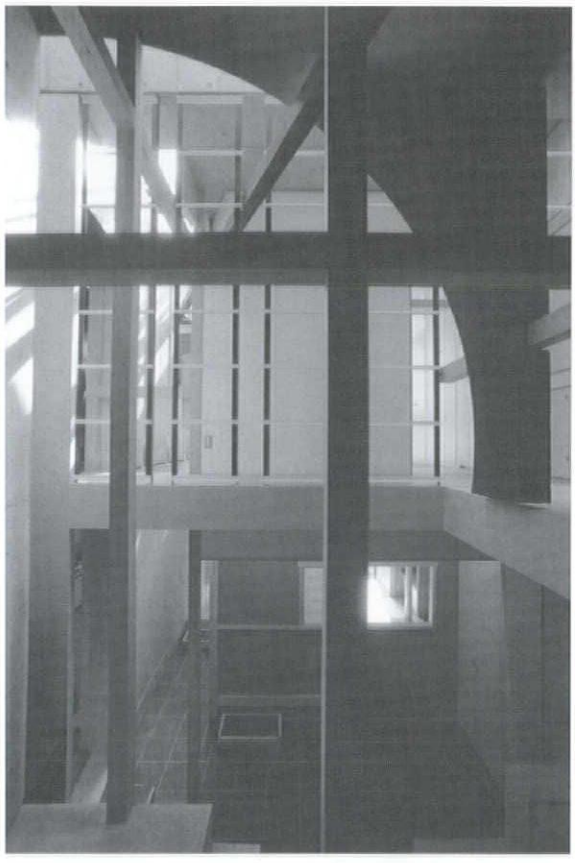
杉並の住宅——物質試行13

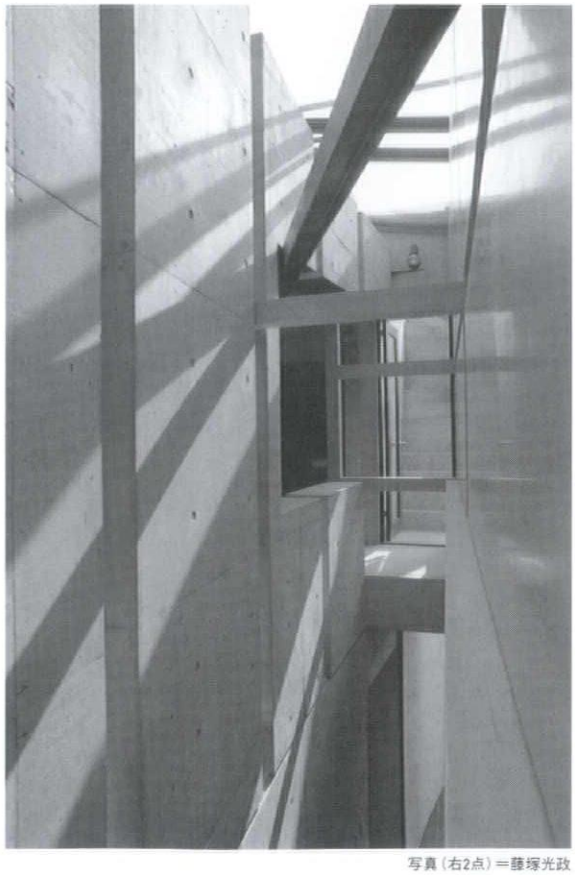
SD賞





平面図





写真（右2点）＝藤塚光政

当該敷地のはるか外部に中心をもつ巨大半径の円弧が、われわれの前に初めて姿を現した記念すべき建築がこの住宅で、その「直線に限りなく近いアール」によって秩序づけられた内部を縦断する「空隙」部分が、さらに、垂直でもなければ水平でもない1本の斜線によって不意に貫かれたのは、20分の1スケールのスタディ模型を切ったり貼ったりの長い試行錯誤の結果ついにバラバラになりかねなくなった頃であり、このとき、われわれは「ここにはなにかが足りなくてなにかが多すぎる」という、あのいつも付きまとわれてきた「欠如／過剰」の成層圏からいきなり離脱したように思われたから、その「瞬間の力学」を今一度はっきりと定着することがとりもなおさずSDレビュー参加への動機となったが、その提出モデルのための主要素材だった積層段ボールのマッスは、この展覧会以後、幾つかの画廊に場所を変え「断層建築」シリーズとしてスケール・アップしながら発達し、また「直線に限りなく近いアール」の方は、その後の「物質試行」にも頻繁に出現したばかりではなく、さらには「空隙モデル」として概念化され長く我々に一定の思考基盤を提供し続けた、と言える。

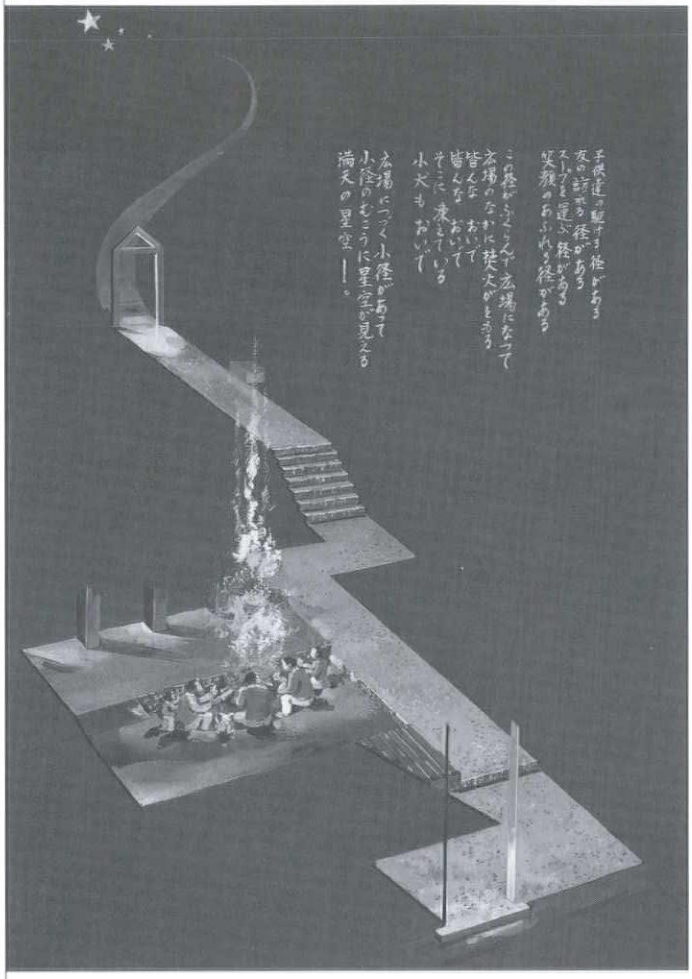
所在地：東京都杉並区
建築用途：住宅
共同設計者：岡北良三、桜田 滋、
笹崎真弘／山辺構造設計事務所
敷地面積：180.47m²
延床面積：154.07m²
竣工年：1984年

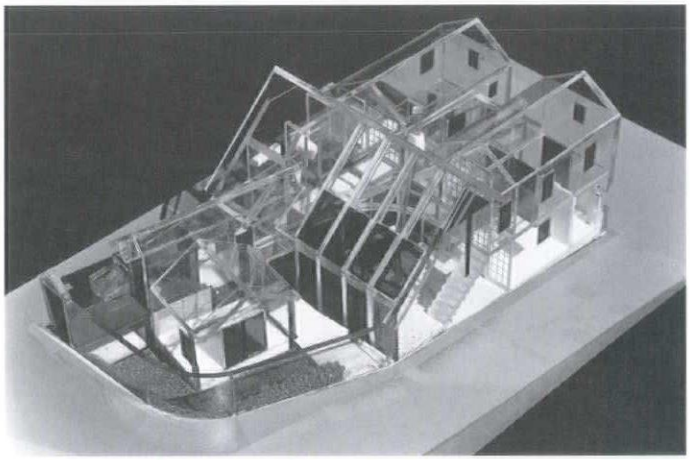
すずき・りょうじ
1944年東京都生まれ。鈴木了二建築計画事務所主宰

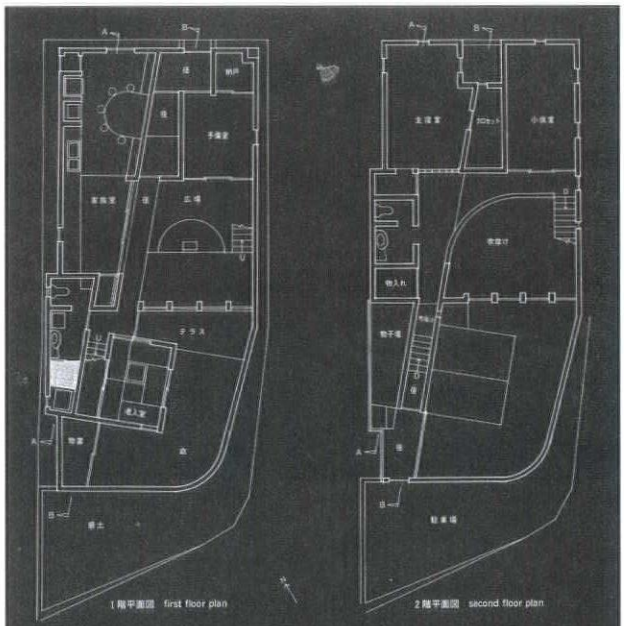
竹ノ内 一雄

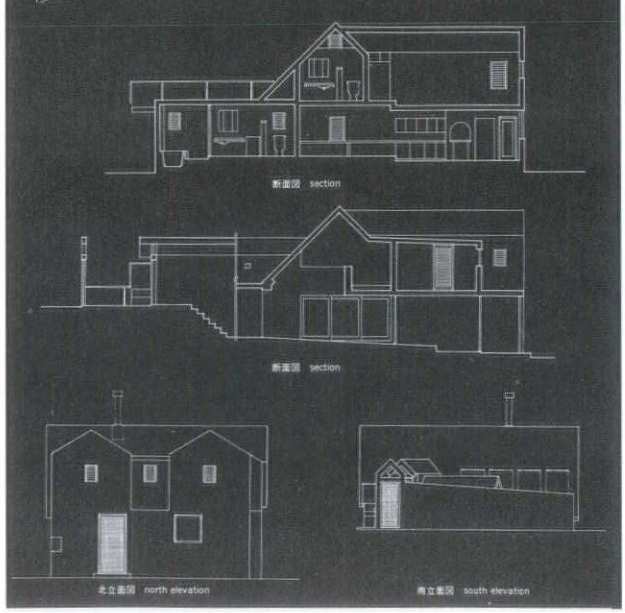
石幡邸［径と広場のある家］

朝倉賞









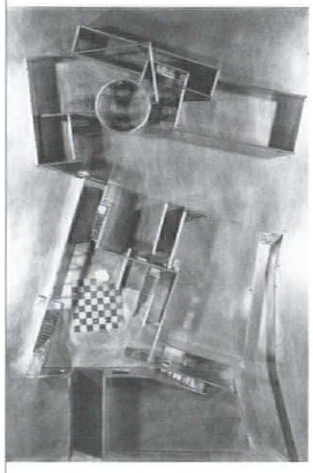
「一旦乗り入れると後戻りが許されず、前方へ、前方へと人々は急がされ、けしかけられ競争に巻き込まれる」現代の道（オットー・フリードリッヒ・ボルノー）。道ばかりでなく現代社会もまた前進運動の急流なのだ。そんな渦巻きの中から離れ、わき径に降り立ち、深呼吸をするときの幸せ感……。この家の住人は、スポーツマン一家である。気さくなスポーツ仲間達と、たき火を囲み、星空をあおぎながら酒を酌み交わす。そんな仲間達の家でもあるから、かしこまった家はそぐわない……。このとき私は、頼まれもしないのに、ふたつの家を設計してしまった。こちらは確認申請も終っていた。両方を見積ってもらったが、わずかな予算オーバーで、もうひとつの方が採用された。実現した家は、日本建築士会連合会賞受賞作品である。

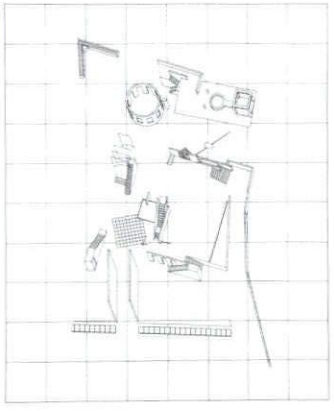
所在地：栃木県日光市
建築用途：専用住宅
共同設計者：遠藤 剛、藤森裕治（詩）、石橋龍一（パース）、西山正幸（構造）
構造：RC造
敷地面積：198.84m²
延床面積：186.14m²

たけのうち・かずお
1921年京都府生まれ。竹ノ内一雄設計事務所主宰

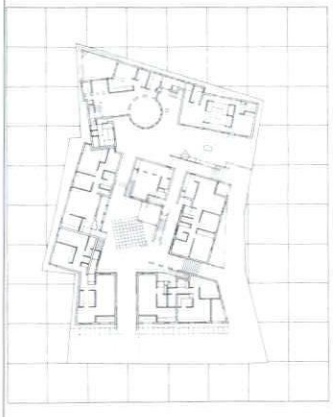
早川邦彦

SHIRASAGI COMPLEX（アトリウム）

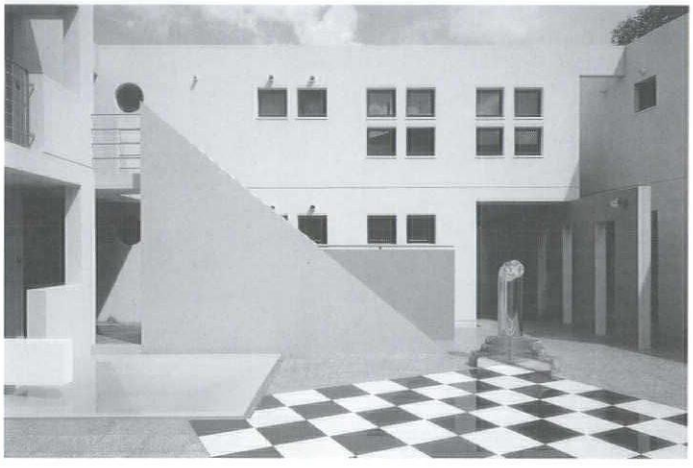


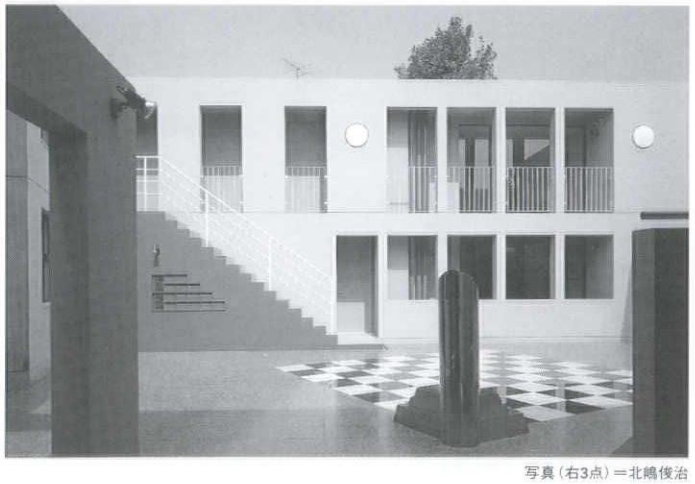












写真（右3点）＝北嶋俊治

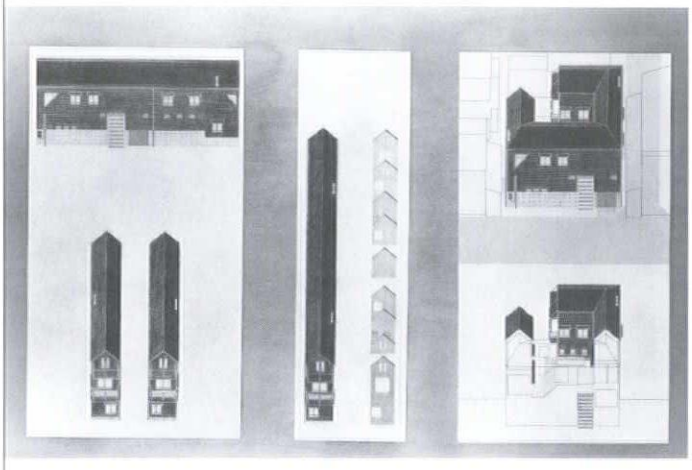
都市の風景を内包した、従来までになかった新しい集合住宅の「型」を提案したかった。SDレビューに応募したプレゼンテーションは、作業の一断面を提出した。したがって出展作品と最終的に完成したものとの間には大きなギャップはない。

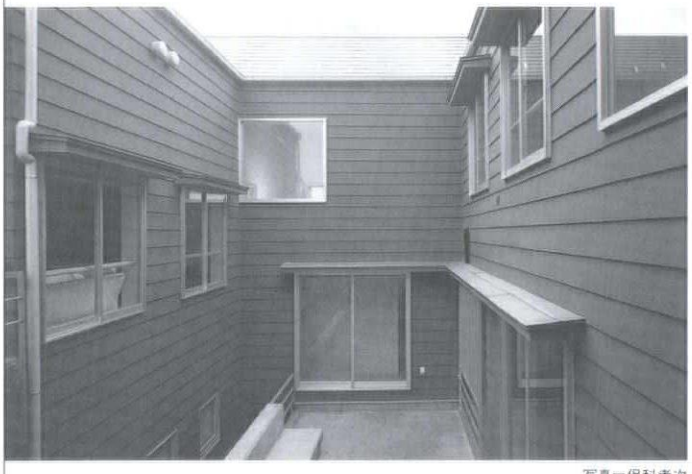
所在地：東京都中野区
建築用途：集合住宅+専用住宅
構造：RC壁構造
敷地面積：1,267.73m²
延床面積：999.96m²
竣工年：1985年

はやかわ・くにひこ
1941年東京都生まれ。早川邦彦建築研究室主宰

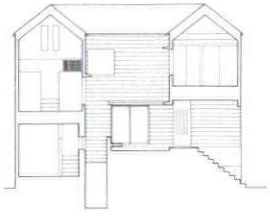
井上揺子

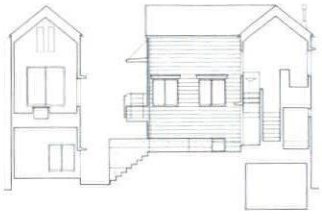
二世帯の家





写真＝保科孝次





ふたつのL型プランがコートを芯にして繋がり、一隅を切り取られた四角い円環となる。それぞれの住戸の独立性は高いが、もうひとつの家族がひとつ屋根で暮らしていることを感じる構成である。

二世帯の住人は、互いの窓からコートの向こうに、我が家の投影を見る。切り取られたコーナーでは、居間の壁に現れる切妻型と同形の外壁が出会う。向き合うエントランスから、互いに背を向けて入室するが、内部の一番奥に行き着くと、バルコニー越しに声を掛け合うことができる。

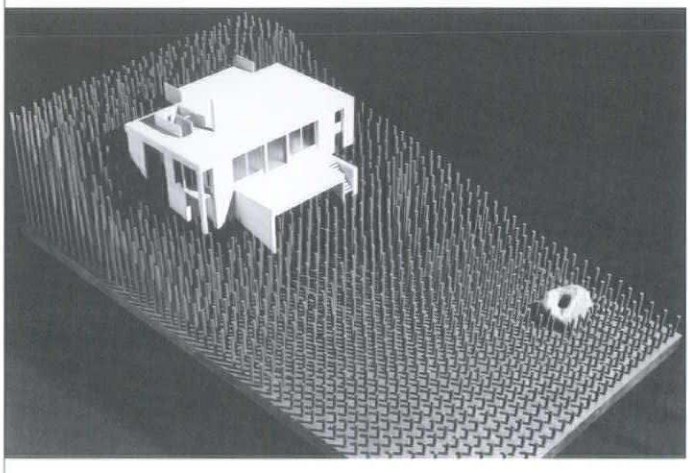
この住宅を設計した時から、私の住宅設計は多少の変化をした。周囲の環境を感じる構成が、今の最大の関心である。

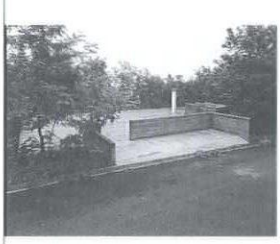
所在地：東京都杉並区
建築用途：専用住宅
共同設計者：野村軍平／GA建築設計事務所（構造）、伝田剛／スペースエンジニアリング（設備）
構造：木造、一部RC造
敷地面積：165.54m²
延床面積：199.24m²
竣工年：1984年

いのうえ・ようこ
1955年東京都生まれ。井上揺子設計アトリエ主宰

海老塚 耕一+菱沼利行

東八幡平帰蝶山荘









写真（下2点）＝山本糾

1984年の入選作をめぐっての座談会で、竹山さんの「でも、今回の展示模型を見ると、鉄筋製の地形に建物本体がすっかり押されてしまっている。力強さが地形に吸い取られてしまっている気がします」という評が、この作品のコンセプトを逆に言い当てていると思います。今考えてみると、模型の向きを180°回転させて展示するだけで、演劇的な構造を持つ「変換器」をより鮮明に表現出来たのではないかと思います。

「応募者が、実施を前提とし、応募の時点において設計中ないし施工中の建物」という規定に興味をもって何回か応募しましたが、いろいろな意味で、応募の時点が、設計中と施工中の差よりも、基本設計の段階か実施設計に入っている段階かの差の方がはるかに大きいと思います。

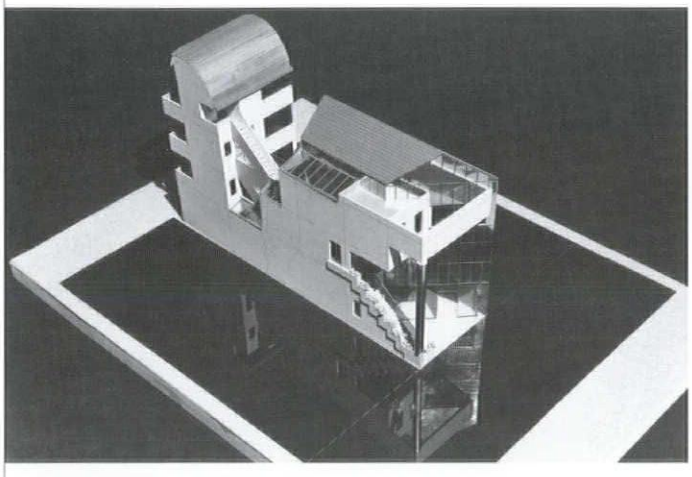
所在地：岩手県岩手郡松尾村
建築用途：別荘
共同設計者：菱沼道予
構造：木造
敷地面積：1,608m²
延床面積：70.61m²
竣工年：1984年

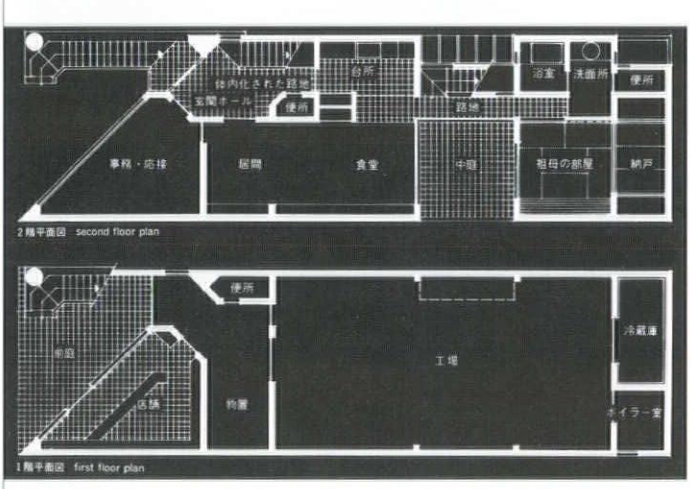
えびづか・こういち
1951年神奈川県生まれ。応募当時多摩美術大学芸術学科研究室助手。現在多摩美術大学美術学部助教授

ひしぬま・としゆき
1951年静岡県生まれ。菱沼建築設計室主宰

片岡山訓

かねす蒲鉾本舗本社屋





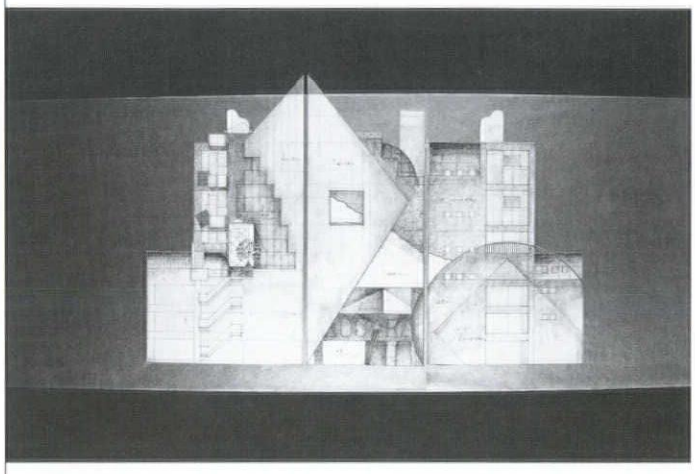
南北方向に細長い敷地に計画された建物は、創業から約80年という歴史を持つ〈かねす蒲鉾本舗社屋〉として、1階に工場、店舗、2〜3階にクライアントの住宅、4階に従業員のアパートを持っている。建物は正面道路に面した前庭と建物中央部にセットされた中庭を階段状路地で結び、これを軸として、工場、店舗、家族の居間、食堂、各人の個室、従業員の宿舎が展開される。また以前は内庭として明かり取りを主とした庭を半開放の路地の一環として利用し狭い路地空間に息抜きの場を造り出している。この地域の町屋の地割りは京都の町屋に似て間口が狭く奥行きが深いものが多く、博多の歴史的一面をのぞかせているが、かっての出会いの場としての路地、井戸端的な存在はなくなりつつある。この計画では、「前庭－路地－中庭」を装置として建物内に導入し、共同生活の中での各人のプライベートな空間の確保と同時に、出会いの場としての路地の復活を意図している。

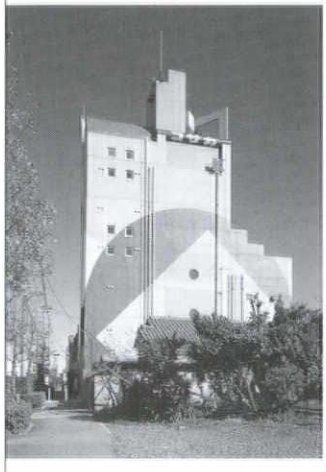
所在地：福岡県福岡市
建築用途：工場、店舗、住宅、社員寮
構造：RC造
敷地面積：166.4m²
延床面積：430.0m²

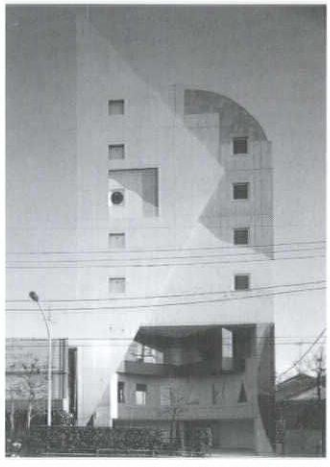
かたおか・さんくん
1946年中華人民共和国生まれ。応募当時アトリエK一級建築士事務所

木村丈夫+野田俊太郎

株式会社コサカ本社社屋







写真（下2点）＝新建築写真部

地上7階建ての医療機器問屋の本社ビルである。

環七に面しながらも、回りを低層建物で囲まれているため、建物は360°の多様な視線にさらされることになった。

各立面は、それぞれが向き合う環境の質をセンシティブに受け止めて、内部の機能区分とは無関係に分節、形態操作されている。その結果、環七に面したファサードは、車の速度に呼応したスケールの大きい建築言語、裏側のファサードは歩行に呼応した微細なスケールの建築言語で包まれることになった。幼年期の記憶のかけらを寄せ集めたような、多くの人にとって既視感のある風景を構築できないかと考えて設計したが、竣工後の周辺の人びとの反応は、おおむね好意的なものだった。（木村丈夫）

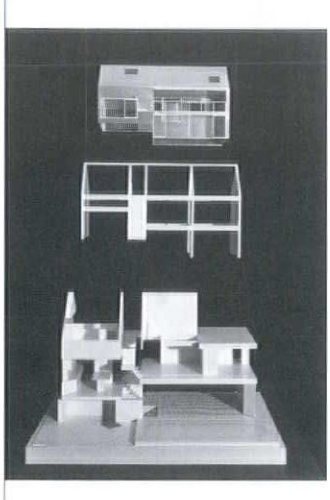
所在地：東京都練馬区
建築用途：事務所、ショールーム
共同設計者：千葉雅昭
構造：SRC造、一部RC造
敷地面積：247.52m²
延床面積：740.50m²
竣工年：1986年6月

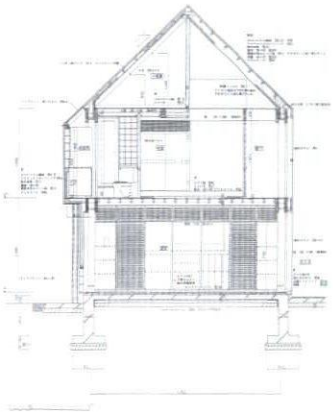
きむら・たけお
1949年東京都生まれ。応募当時建築環境計画TAO所属。現在タオ・アーキテクツ所属

のだ・しゅんたろう
1951年東京都生まれ。応募当時建築環境計画TAO所属。現在人・空間研究所所属

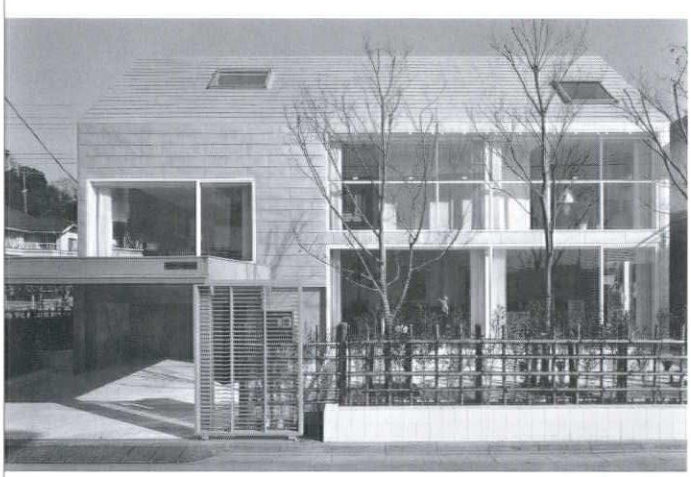
黒川哲郎

MAISON FORMURA 1984
（FORMURA HOUSE 1984　山本邸）





断面図



写真＝大橋富夫

ケーキ箱のように単純なフォルムの空間の中を、6つの異なるレヴェルの床版が重層しながら連続している。このミューチュアルでギャラリー的な流れの中で、主寝室だけが常に閉じた空間であり、母親の寝室はドアによって夜のみ姿を現し、客和室の垂壁がさらなる分節を加え、生活を連続し重畳したものにしている。

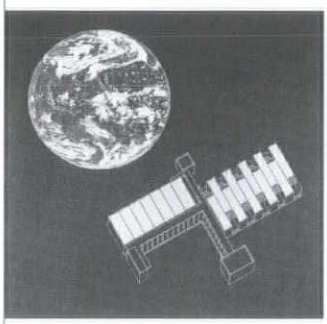
ガルバリューム鋼板とガラスのフラッシュサーフェィスな皮膜が、このワンヴォリュームの空間や生活を包み込み、電子メディア装置のようにその重層性や重畳性のなかに生活の光景を映し出している。この「虚実の間」的な皮膜によって隔てられた内部空間は、敷地の中に入れ子のように挿入され、その外部空間をさらにメディア的な透明皮膜によって包み込まれた存在として感じさせている。

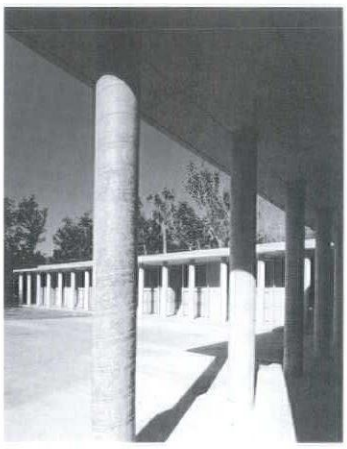
所在地：東京都調布市
建築用途：住宅
共同設計者：デザインリーグ
構造：木造2階建
敷地面積：152.63m²
延床面積：150.71m²
竣工年：1984年10月

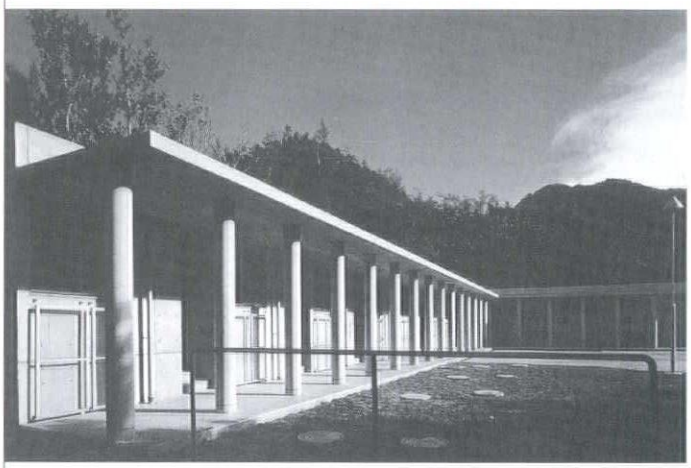
くろかわ・てつろう
1943年大分県出身、北京生まれ。東京芸術大学建築科助教授

小林克彦

小笠原社宅







写真（上、下）＝ナカサ＆パートナーズ

この建物は、紺碧の空と刻々と変わるエメラルド色の海に囲まれた、太平洋上に散在する小笠原諸島最大の島、父島の美しい大自然を背景にして計画された集合住宅である。

計画にあたっては、離島としての地理的条件、厳しい自然条件等の特殊性を考慮し、かつ自然景観に調和した快適な集合住宅を提案することがテーマであった。

敷地は、ギンネム林に囲まれた谷間にあり、建物は、回廊のある中庭を中心として、ゆったりと配置されている。

コンクリート打放しの壁と柱の単純な構成とし、大自然の厳しさに対峙し、存在感のあるものとした。壁の開口部は、縦スリット状とし、彫りの深い陰影のある立面構成をとっている。

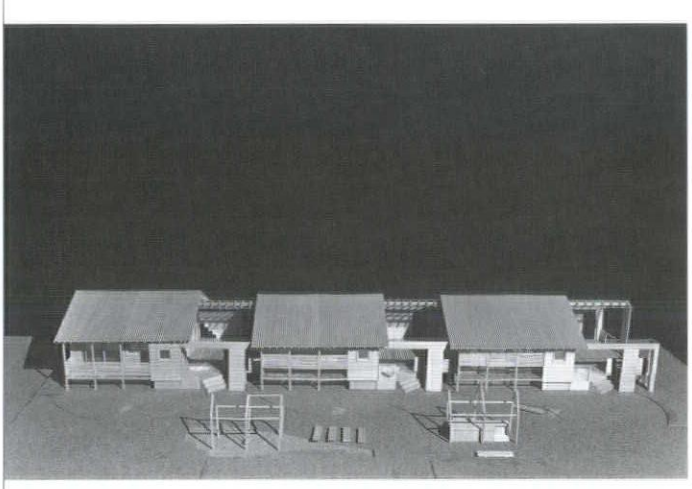
建物は、応募時点の基本計画のコンセプトどうり竣工することができ、12年目を迎えることができました。

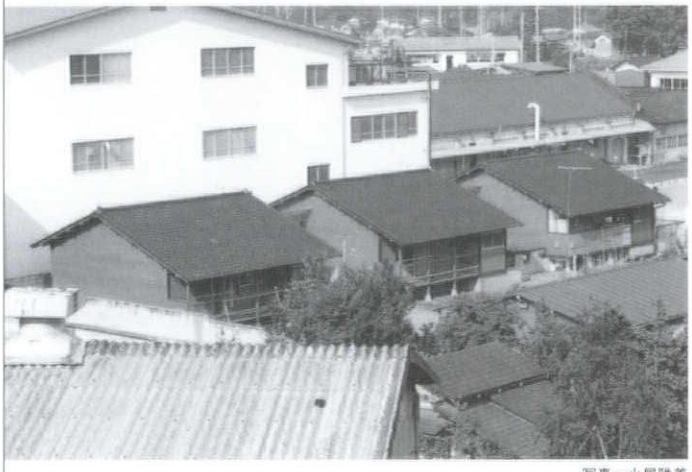
所在地：東京都小笠原村父島
建築用途：集合住宅
共同設計者：遠藤恵一
構造：RC造
敷地面積：2,560.11m²
延床面積：792.28m²
竣工年：1985年11月

こばやし・かつひこ
1952年栃木県生まれ。応募当時日本電信電話公社建築局設計課。現在NTT都市開発株式会社企画部

小屋雅義+大内 栄

KOYA APARTMENT HOUSE





写真＝小屋雅義

塀のない住環境のあり方を考えたいと思った。塀により遮断していたまち（公的空間）と住まい（私的空間）の生活空間を連続させることは、住みやすい地域社会をつくることであり、大事な意識だと思っている。そのために建物と路地の間に5mの緩衝帯を設けた。また通行人と視線が合わないように建物の床を1m上げた。

入居者は車を持たない高齢者であった。短冊状にしつらえた南面の空間は、広めの路地と、住民の家庭菜園・花壇として利用され、テラスはその趣味の作業場として使われていた。季節の花々や野菜等であふれた空間は、周りの住人の目を引いた。入居者が変わっても今なお同様な使い方がされている。路地と住まいが生活空間として連続していると痛感した。

100%考えを実現できたためしはない。あとは、どう積み重ねていけるかである。（小屋雅義）

所在地：群馬県山田郡大間々町
建築用途：賃貸住宅
構造：木造平屋建
敷地面積：835m²
延床面積：269.2m²
竣工年：1985年4月

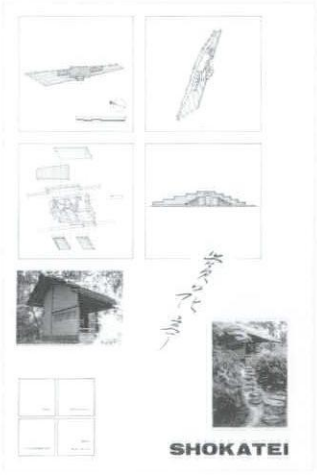
こや・まさよし
1954年群馬県生まれ。小屋建築設計事務所主宰

おおうち・さかえ
1957年群馬県生まれ。応募当時大内栄建築計画設計工房主宰。現在大内 栄+空間工房主宰

中澤王久東

ATLANTA '83　KATSURA•PART I







空間の構造と全体像の把握は、どんな建築であれ印象の断片の統合化によってなされる。人間の認知に於ける空間統合の秩序を桂離宮で学び、そこで見い出した部分と全体との秩序を場の形成レベルと建築構成の抽象レベルとのふたつにおいて試みた。実施設計段階では、物質感とスケール感を与えない闇の中の光による空間の透明性と無重力性を、いかに秩序形成に生かすかが施主との議論のテーマであったことを記憶している。

この考え方は、陸と水・土木と建築・自然と人工・使われ方と器のあり方などの対概念の関係性は人間と環境との相互作用として形成される空間構造づくりであると捉え、現在も企画から設計そして運営へのプロセスに取り入れている。秩序要素には「時」と「変化」が加えられた。

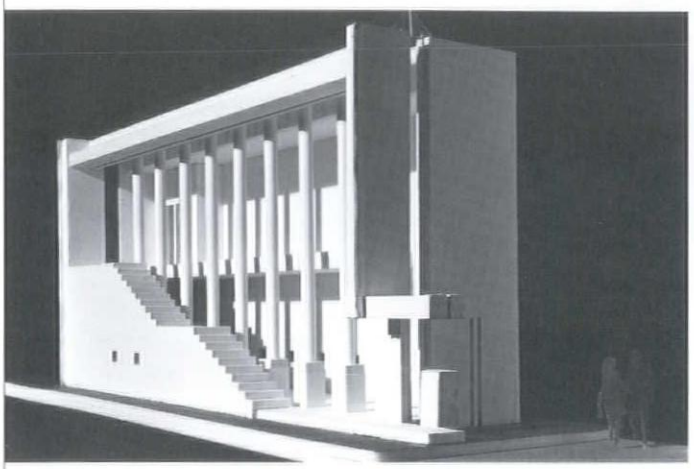
このティーハウスを中心とした庭園プロジェクトは、残念ながら施主に不幸があり中断され、現在は既存家屋にドイツ人が住まわれている。

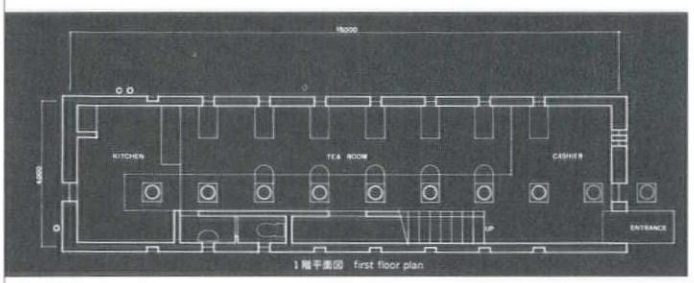
所在地：4035 STOVALL TER., N.E., ATLANTA GA. 30342 USA
建築用途：ティーハウスを中心とした庭園の全体計画
共同設計者：清水郁子
構造：木造、一部RC造
主要仕上：ステンレス、玉石、黒御影、米杉
敷地面積：5,526m²
延床面積：2,550m²（計画庭園面積）

なかざわ・おくと
1954年東京都生まれ。応募当時東京理科大学工学部建築学教室設計計画助手。現在スペースプロデュース主宰

中野佳子

衣笠の画廊喫茶　TEA & GALLERY AT KINUGASA





1階平面図

間口4m、奥行き15m、高さ8mの小さくて細長いコンクリート・ボックス。1：2の比率で縦真ふたつに切断された箱。櫛の刃状の柱列8本が、穿たれた亀裂の、まさにその部分に挿入される。

亀裂からもれふりそそぐ天空光は、垂直に上昇する柱1本1本の存在を顕らかにする。

すでにそこにあることを予測されていたかのごとく存在する柱列の、リニヤーな関係性は、単調だがしかし力強く空間の場を張る。

あたかも凝縮されたがゆえに密度の倍増したゴシック聖堂のごとく、緊張をはらんで空間は響きわたる……。

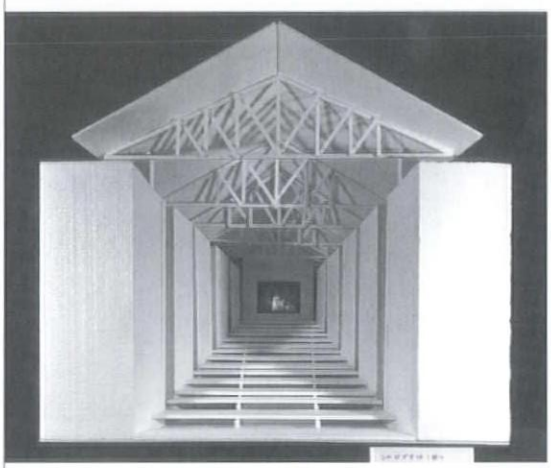
「閉息した結界」の町京都の、町並にもまして、目立たず、静かにひっそりと佇みつつも、ひとたびその中に足をふみ入れるやいなや、日常性に楔するがごとき場を励起せざるをえない市中の隠、願わくはこの箱がそんな空間を演出する装置であってほしい。

所在地：京都府京都市
共同設計者：中野佳子／studio EXCES（プロデュース）、中野誠一（設計）、宍道弘志（ドローイング製作協力）
構造：RC壁式構造、地上2階建
敷地面積：347.7m²
延床面積：97.5m²

なかの・よしこ
1953年生まれ。応募当時大阪大学大学院博士課程所属

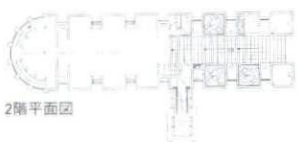
能勢修治+永井久美

東北タマヨシ（21GRID）

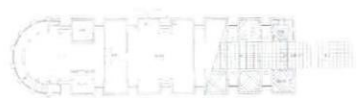




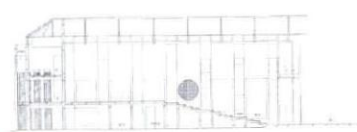
写真＝小林浩志



2階平面図



1階平面図



断面図

応募した頃は大学院生で、実際に建つものの設計経験のない状態でした。計画中のものでも評価の対象になるということで応募したのだと思います。応募した時点の案と展示作品との間には、現実化の度合いの違いが出ていたと思います。経験がないのに、現実の建物の設計をするということで、単純なコンセプトがそのまま建築化されたような建物が、一番力が出るのではないかと思っていました。建築を正方形平面のシャフトを並べて構成するというものでした。機能的なものとか、意味のあるものを、シャフトに入れて、それを2列に並べ、シャフトに挟まれた空間がパブリックスペースというものでした。実際にはシャフトが閉じた状態では使えないので、フロアがある部分はシャフトの半分の壁を取払い、挟まれた空間と一体の空間としています。フロア上部の空間が吹き抜けており、そこではシャフトが完全な姿をしているので、なかなか力のある空間が出来上がりました。展示作品と実際に建った建物の間にはほとんど違いはありません。

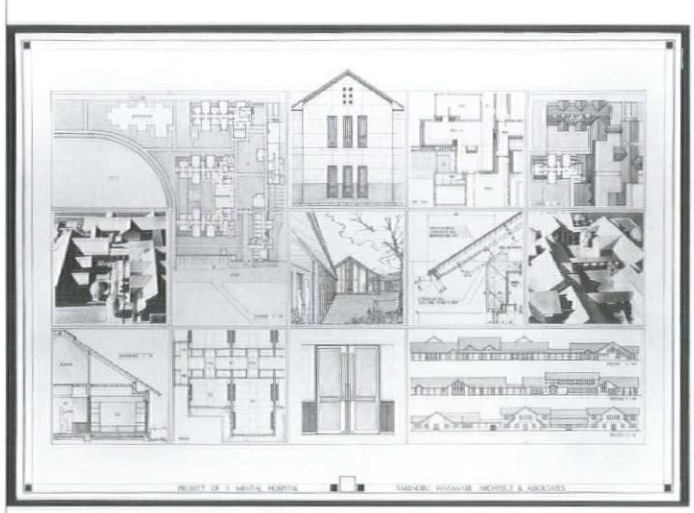
所在地：山形県山形市
建築用途：真珠ショールーム+カフェ
共同設計者：永井秀次郎（構造）、ナディウム・カラム（ショールーム・ディスプレイ　在レバノン）
構造：独立コアの連続によるRC造（かんじき基礎による）
敷地面積：792.00m²
延床面積：337.35m²
竣工年：1985年

のせ・しゅうじ
1960年長崎県生まれ。応募当時早稲田大学大学院池原研究室所属。現在石本建築事務所勤務

ながい・くみ
1961年山形県生まれ。応募当時東京大学生産技術研究所原・藤井研究室所属。現在永井設計主宰

渡辺武信

池田病院





写真＝畑亮

東大吉武研究室では1960年代末まで病院、学校の実施設計が行われていたが、全共闘から委託研究への批判が高まり、学内の設計活動は消滅した。その政治的是非はさておき、研究室を修業の場としていた私は大学を離れざるを得ず、アトリエ事務所を開いた。アトリエの仕事はほとんど住宅で、医療・教育施設を設計する機会はないまま十数年が過ぎた後、院長の自宅を設計した縁で恵まれたのがこの仕事で、私にとって最初の社会的施設であり、それまでに最大の規模だったので、SDレビューへの応募と入選の感慨は深い。

この建物は実施段階の変更はなく、出展図面どうりの形で竣工した。平面のポイントは、敷地の広さを生かし、病室を間隔を空けて廊下に取り付け、中廊下の閉鎖性を避けたことにある。また切妻の妻面をモチーフとする外観は、形態をヒューマン・スケールに分節化することによって住宅的な親近感を醸し出し、管理者、利用者双方から評価を得た。

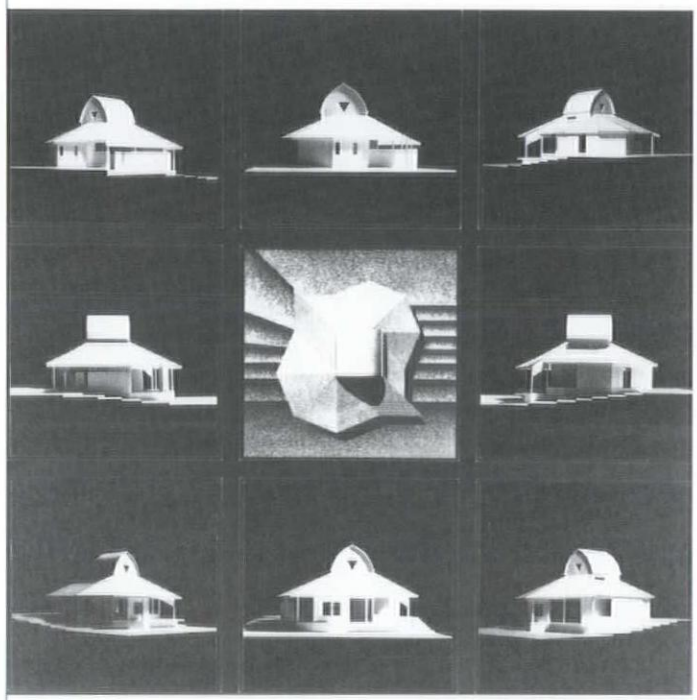
所在地：茨城県竜ヶ崎市
建築用途：精神科病院
構造：壁式RC造　一部S造
敷地面積：20,530.14m²
延床面積：3,652.46m²
竣工年：1985年12月

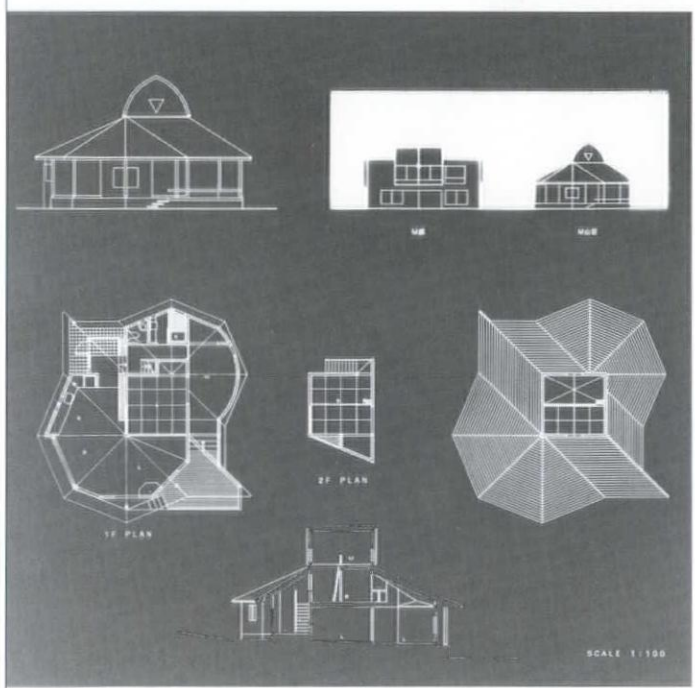
わたなべ・たけのぶ
1938年神奈川県生まれ。渡辺武信設計室主宰

槇 文彦

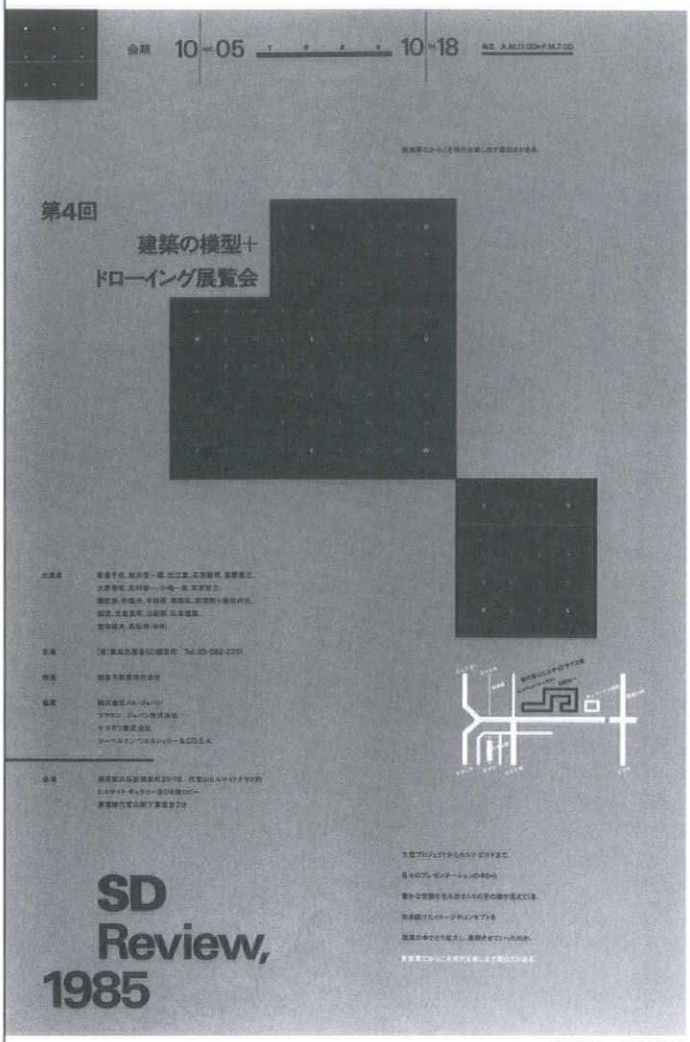
M山荘

招待





第4回　1985年



デザイン＝工藤強勝

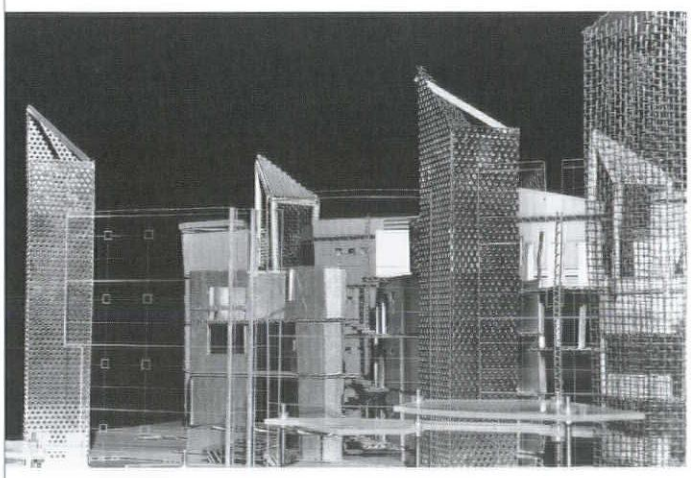
新居千秋　梅ヶ丘中学校正門前道路環境整備計画
石田敏明　茅ヶ崎の家――裸形のグリッドII
出江 寛　芦屋浜の家 A HOUSE ON SHORE: ASHIYA
板井宝一郎+セクションR　Villa Balcone
海野健三　海建築家工房事務所併用住宅
大野秀敏　天城の山荘
北村修一　ワインギャラリー・ヨシムラ
小嶋一浩　氷室アパートメント SCORPIUS
末吉栄三　知念高校創立40周年記念会館
團 紀彦　マンダラの道
仲 隆介　権守塔
中筋 修　都住創内淡路町プロジェクト
西岡 弘　フラワーショップ［マージオーキッド］
萩原 剛+藤田純也　浦和高校山岳部OB会山小屋 HÜTTE ALPEN-GLÜHEN
坂 茂　3枚の壁
元倉眞琴　HILLSIDE ANNEX
山田 朗　新羽緑道パブリックトイレット
山本理顕　GAZEBO
吉田保夫　吉田邸
高松 伸（招待）　ひなや本社第３期工事

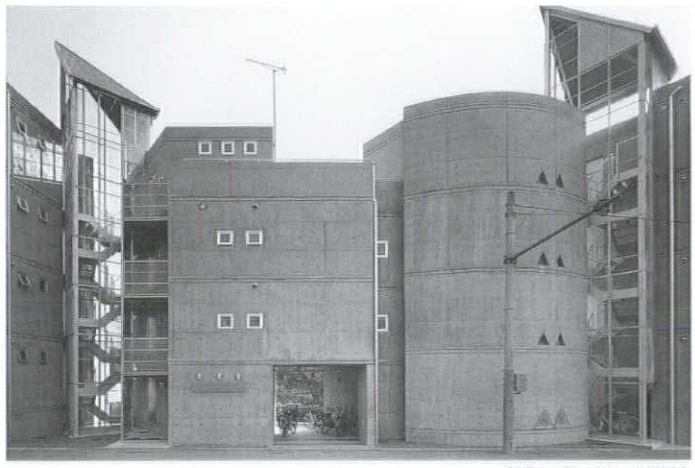
東京展：10月5日～10月18日
第1会場：ヒルサイドギャラリー
第2会場：ヒルサイドテラスE棟ロビー
大阪展：11月19日～11月28日
会場：都住創センター
大阪展イベント：竹山 実講演会
審査員：槇 文彦、竹山 実、小宮山 昭、八束はじめ
応募総数：120作品
入選数：19作品、招待１作品
受賞者：
山本理顕（鹿島賞）
小嶋一浩（朝倉賞）
元倉眞琴（SD賞）
吉田保夫（入賞）
團 紀彦（入賞）
萩原 剛+藤田純也（入賞）

小嶋一浩

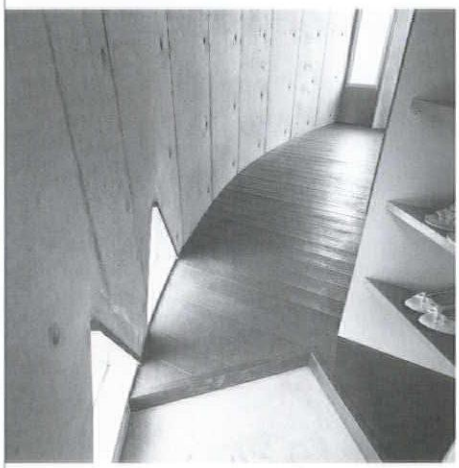
氷室アパートメント SCORPIUS

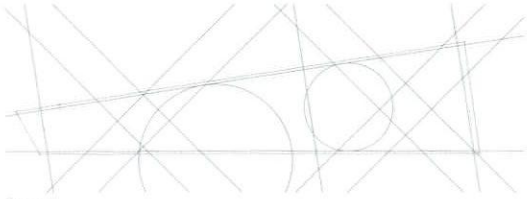
朝倉賞



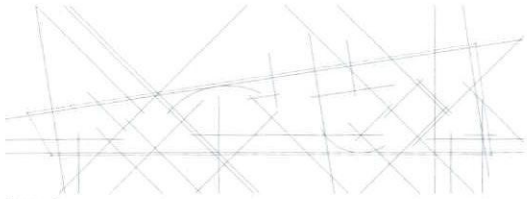


写真（左下、右）＝大橋富夫

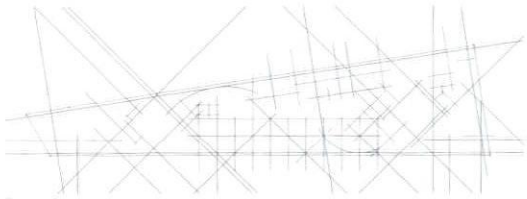




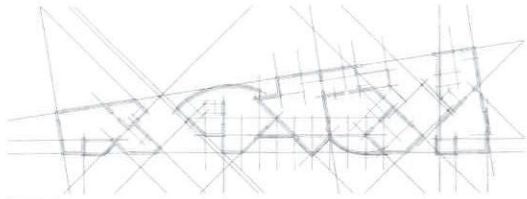
Stage 1



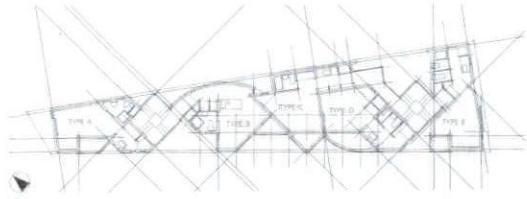
Stage 2



Stage 3



Stage 4



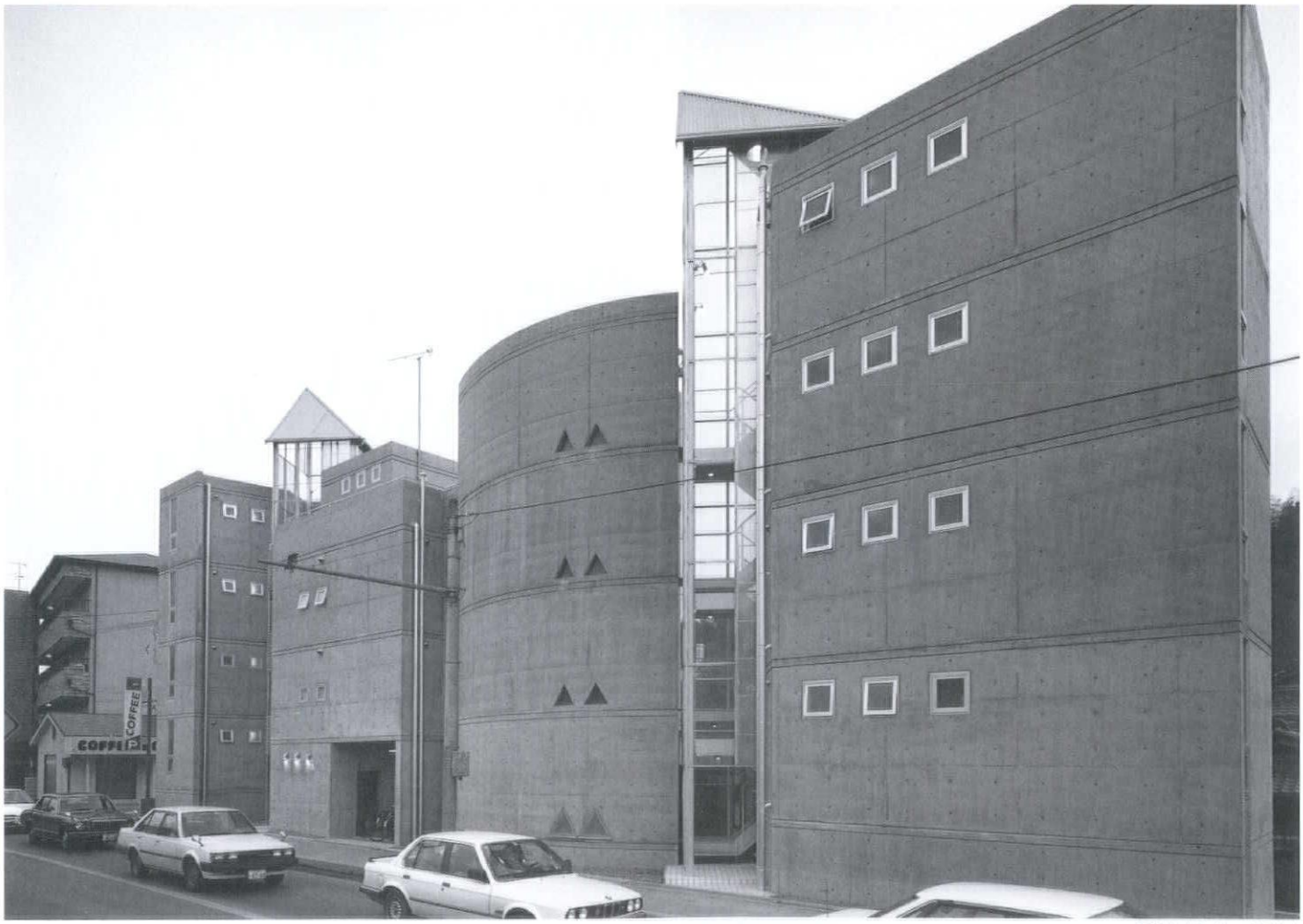
Plan

京阪奈丘陵のはずれの川と国道に挟まれた細長い敷地に建つ建築。賃貸アパートを通過点と位置づけ、18戸の集合をフィクショナルな街ととらえて設計した。幾何学的に基準線を操作し、敷地全体に空地を離散させながら、多くの壁を基準線の上にまっすぐ立ち上げて、交錯する壁の隙間に空間を重ねている。道路側は閉じ、川側に開き、階段や自転車置き場の部分で反対側が透けて見えることで板状の薄さを示した。建築全体が蜃気楼のように現れてほしいと考えた。これは私にとってはじめて実現した建築である。実務経験など全くない大学院在学中だったから半年間現場に張り付いていた。自分で設計した建築が実現するというリアリティもどこか希薄だったのが、SDレヴューに入選した時初めて実現するかもしれないと考えたのを思い出す。計画は応募案からほとんど変更していない。竣工して10年以上経過し、100人近くがこのアパートを通過したことになる。

所在地：大阪府枚方市
建築用途：集合住宅
共同設計者：シーラカンス
構造：RC壁構造
敷地面積：189.64m²
延床面積：395.80m²
竣工年：1987年

こじま・かずひろ
1958年大阪府生まれ。応募当時シーラカンス、東京大学大学院原研究室所属。現在シーラカンス、東京理科大学理工学部助教授



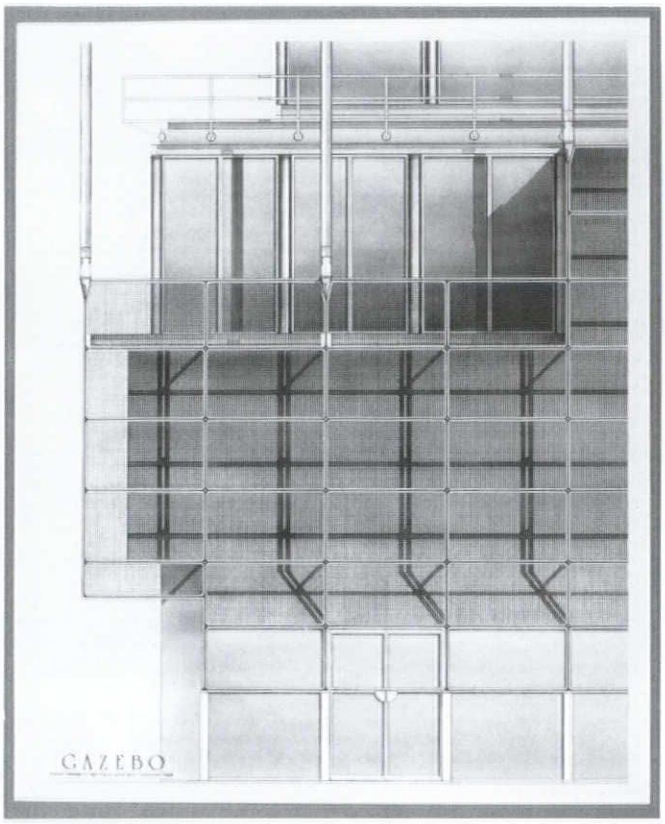


写真（2点とも）＝大橋富夫

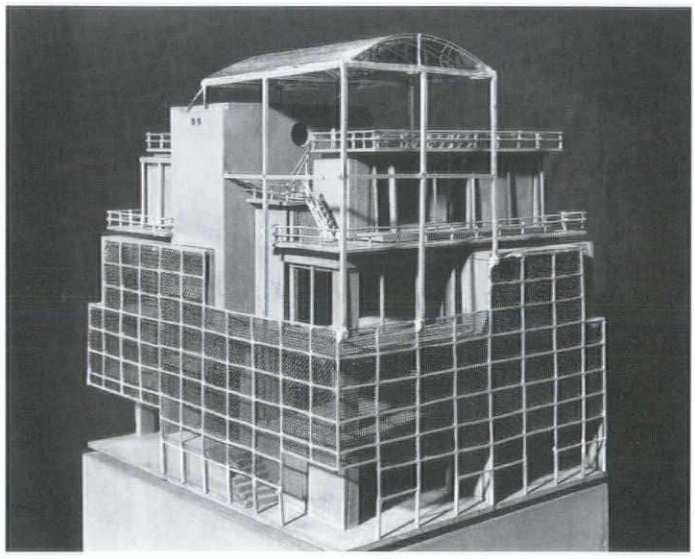
山本理顕

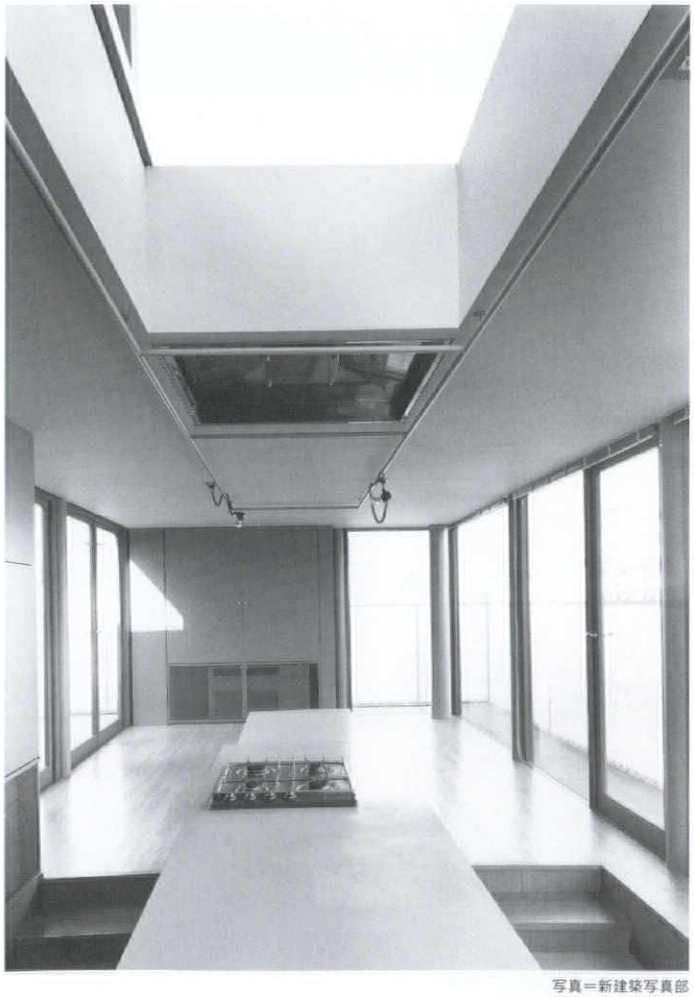
GAZEBO

鹿島賞



ドローイング＝築摩幸





写真＝新建築写真部

ステンレス・メッシュのファサード、H鋼のフレーム、丸パイプで持ち上げられたキャンティレバーのスティール・デッキ、布の天蓋、どこかで見たはずの、金属細工の遠い記憶の断片。などと当時恥ずかしげもなく書いたけれども、ベトナムへ行ったらこんな建築ばっかりで驚いた。何が遠い記憶だ。

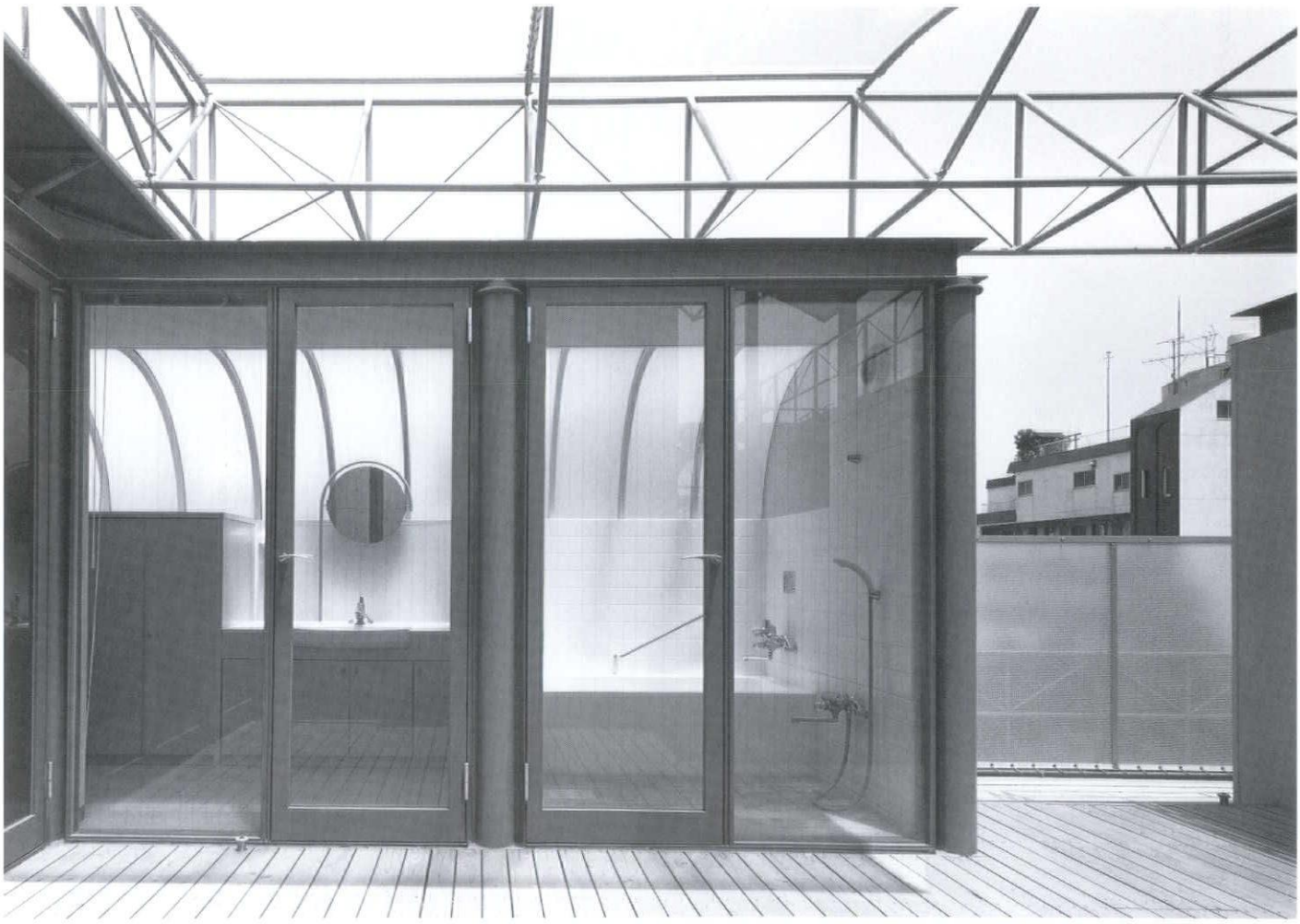
ただ、ここに住んでいると、日本は東南アジアの一部なんだということを実感する。

私にとってはこの家は、こうした様々な実感と仮説との検証装置になっています。

所在地：神奈川県横浜市
建築用途：専用住宅　賃貸（店舗・事務所・住宅）
構造：RC造　4階S造
敷地面積：229.03m²
延床面積：664.60m²
竣工年：1986年

やまもと・りけん
1945年北京生まれ。山本理顕設計工場主宰

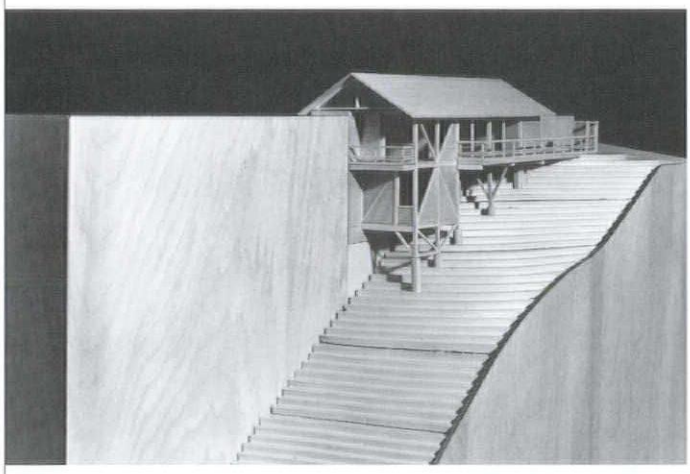


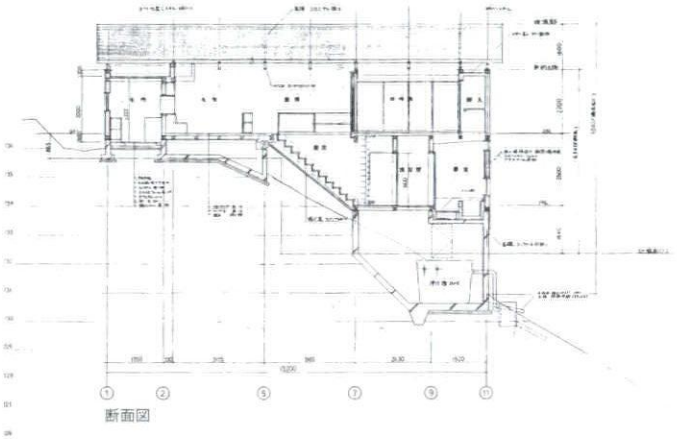


写真（2点とも）＝新建築写真部

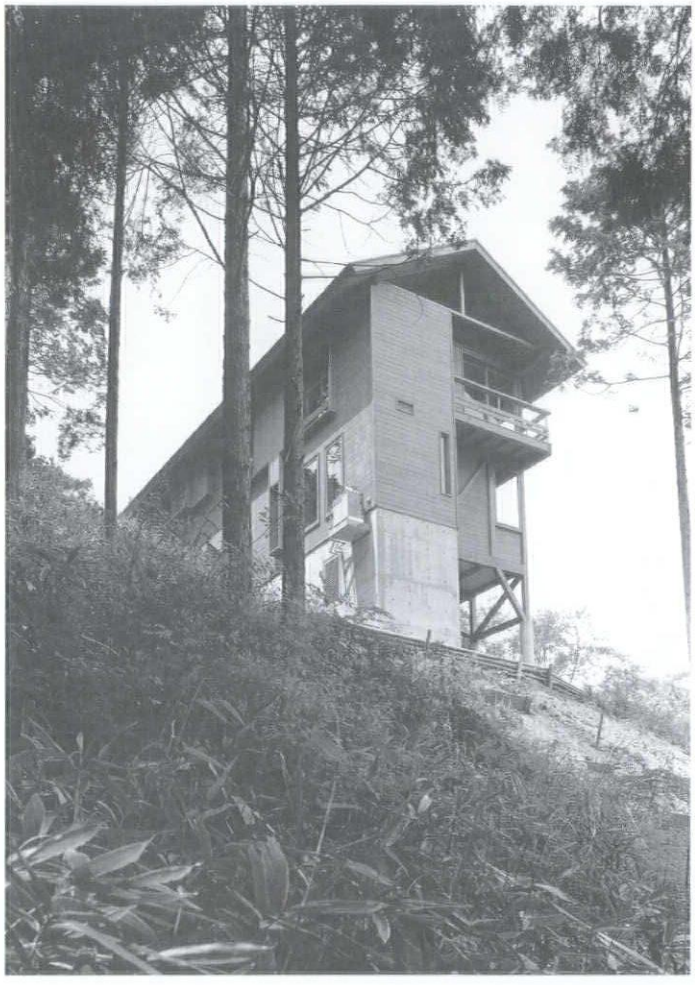
大野秀敏

天城の山荘





断面図





写真（右2点）＝新建築写真部

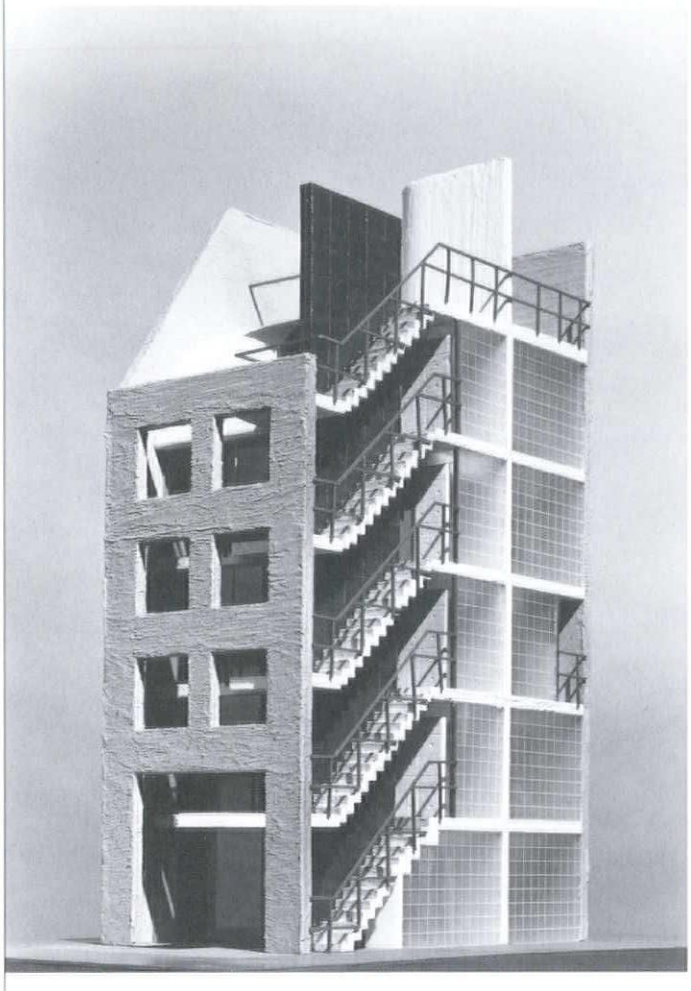
このプロジェクトは、私たちの事務所の最初の建築プロジェクトであり、思い出深い作品である。この敷地の最大の魅力は、伊東市街地からその先の相模湾に浮かぶ初島への眺望であったが、地表面に立つと周りの木立に閉ざされてしまう。道路レベルのまま水平に乗り出さなければならない。そこで、斜面にタワーを立て、道路レベルにプラットフォームを懸けるという構成をとり、そこを主室とした。単純な平面のなかに複雑性を持ち込むために、南側（山側）と北側（海側）を壁／柱・梁という形態的な対比をテーマとした。出展模型は、タワーとプラットフォームと南北のふたつの対比を表現しようとして、南側半分を模型の台＝地形に埋めた。このテーマはその後の私の作品の基調になった。実物は木造で、できるだけシンプルになるように努力した。当時謀誌のインタビューに「糊の効いたYシャツのような建築を作りたい」と答えた。

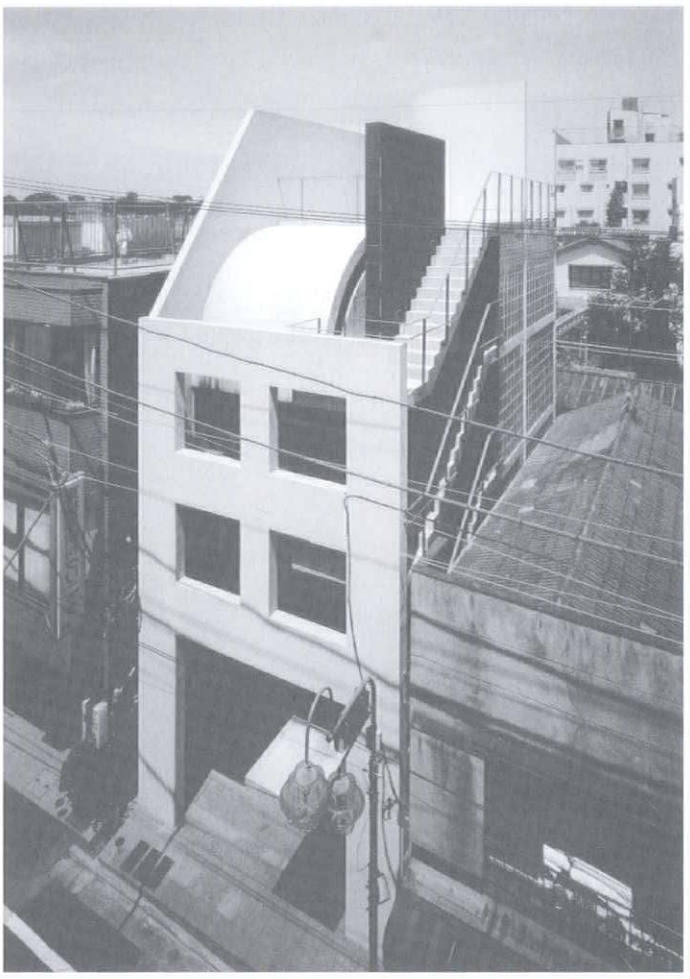
所在地：静岡県中伊豆町
建築用途：住宅
共同設計者：花輪建築構造設計事務所（構造）綜合設備計画（設備）
構造：木造一部S造
敷地面積：934.70m²
延床面積：75.07m²
竣工年：1985年

おおの・ひでとし
1949年岐阜県生まれ。東京大学助教授

坂 茂

3枚の壁（B BUILDING）



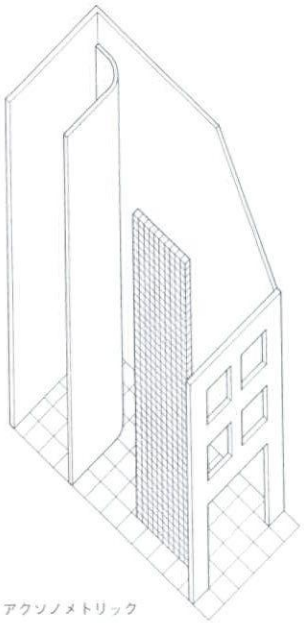


写真＝平井広行

このプロジェクトは12年半前、私がニューヨークのクーパー・ユニオンを卒業後帰国し最初にデザインしたもので、学生時代から考えていたいくつかの建築的アイデアを現在の仕事へと連続させるコネクターとなった重要な作品である。

「3枚の壁」は、それぞれ異なる意味とテクスチャーにより明確にアーティキュレートされ、それらの隙間にはすべてガラスやガラスブロックが使われ、さまざまな方向から光が入り込み、アーティキュレーションの効果を高めている。プラン的には、「3枚の壁」により各階まったく同一の間取りになっているが、2次的エレメント（間仕切り家具や異なった天井高をつくるスラブ）によってまったく雰囲気の違った空間をつくり出している。

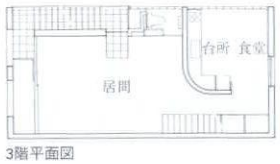
所在地：東京都世田谷区
建築用途：事務所兼住宅
構造：RC造
敷地面積：71.48m²
延床面積：194.10m²
竣工年：1988年



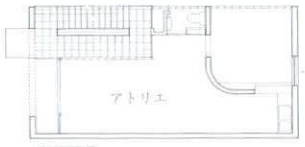
アクソノメトリック



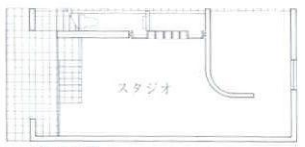
4階平面図



3階平面図



2階平面図



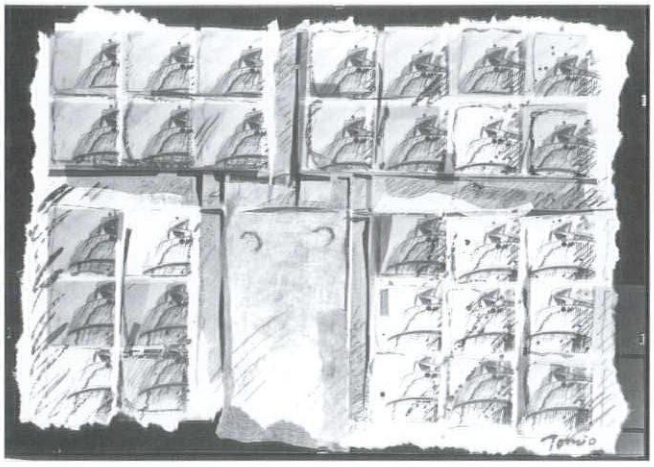
1階平面図

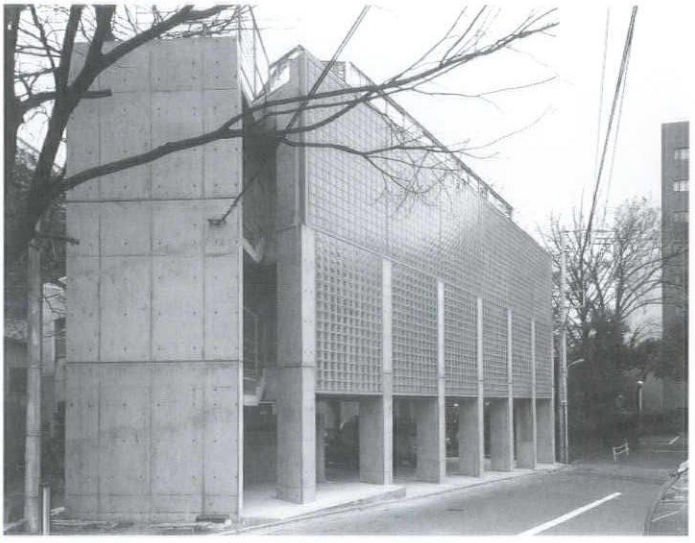
ばん・しげる
1957年東京都生まれ。坂茂建築設計主宰

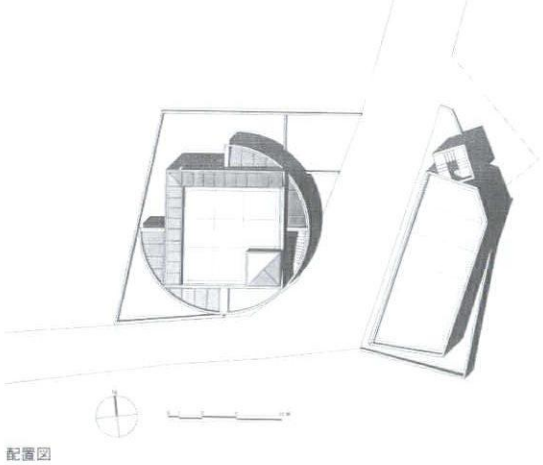
元倉眞琴

HILLSIDE ANNEX （HILLSIDE TERRACE ANNEX）

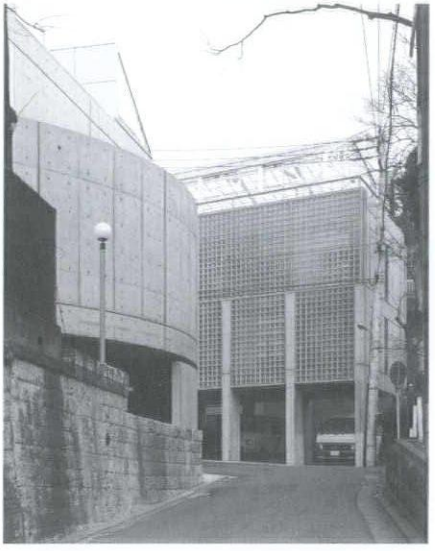
SD賞







配置図

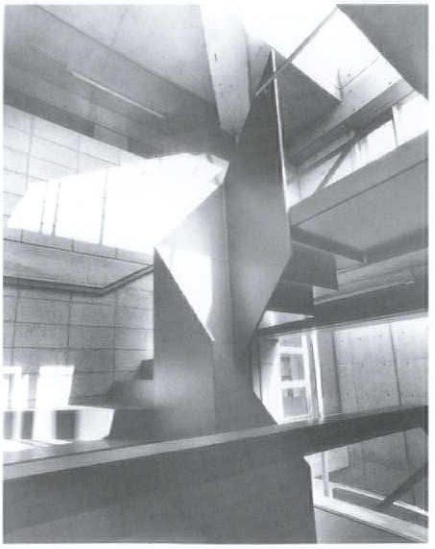


表通りはヒルサイドテラスの一連の建物が町並みを展開し、正面には巨大な壁状のマンションがそびえ立っている。表通りからちょっと入った細い坂道の曲がろうとするあたり、道を挟むようにこのふたつの建物が建っている。周辺にはまだ大きな樹木が多く残っている。このような場所には、強いメッセージを主張したものではなく、周囲の環境を注意深く読んだ建築がつくられるべきだと思った。ふたつの建築ともに駐車場とギャラリーという単純な用途であり、敷地も大きくないことから、各々の建築にひとつづつの役割を負わせた。丸いコンクリートの壁の建物は曲がり角そのものを表わし、ガラスブロックの建物は坂を登って来るときの明るいアイストップとしての役割を担っている。

当初の意図通りの建築を実現させることが出来た。変わったところといえば既成の温室を屋上に載せたことと、足元に昔からここにあるお地蔵様のシェルターを設計できたことである。

所在地：東京都渋谷区
建築用途：アトリエオフィス、ギャラリー
構造：RC造3階建
敷地面積：437.61m²
延床面積：588.42m²
竣工年：1985年

もとくら・まこと
1946年千葉県生まれ。スタジオ建築計画主宰

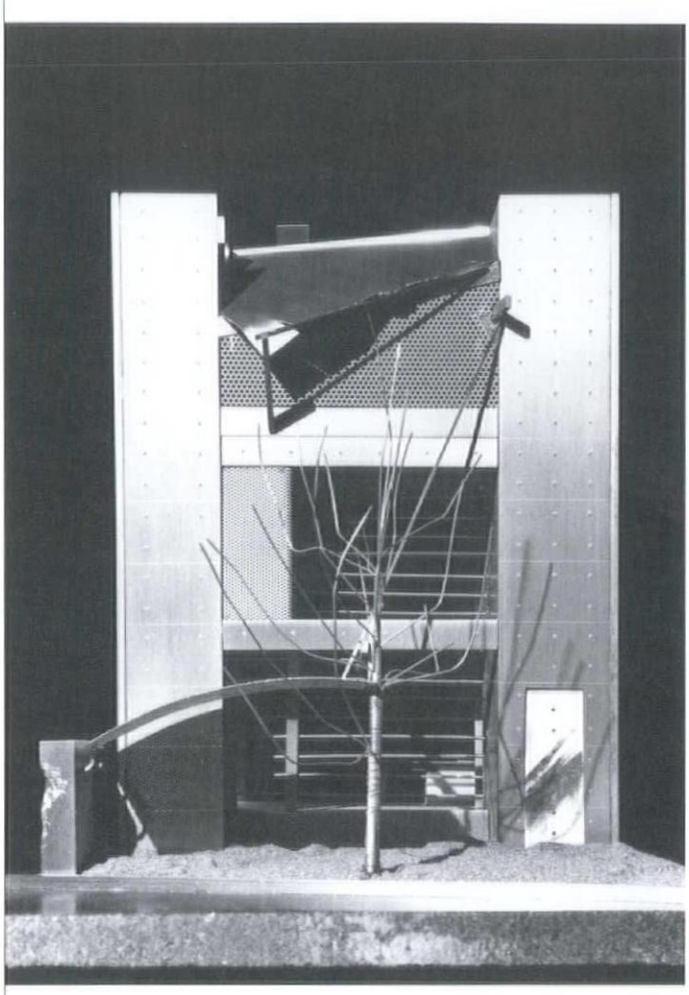


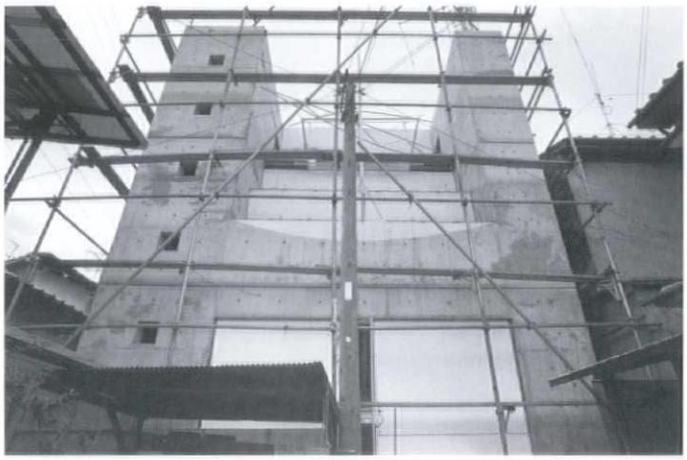
写真（右3点）＝宮本隆司

吉田保夫

吉田邸

入賞







写真（右2点）＝下村純一

金瘡星――地球時間が1年となる、ある星のささやき

「コルちゃん、あなたは大変な問題を残したまま、この星に来た訳だけど、私達が言い争ったパリ博のあの日、建築を建築として語り続けたのに、それから1ヶ月もたたない間に、どうしてこんな混乱した状況になってしまったのかね？」

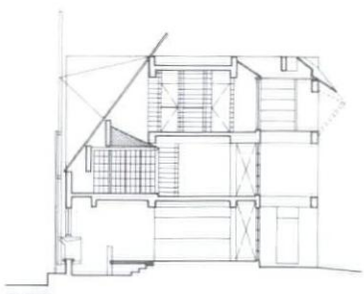
「ソーさん、それはあんたがいけないんだよ。わしは、パートナーはパートナーとして建築を創らしたのに、それを、あんたがよーわからん人達をパートナーにしただろう。あんたのあのセーヌ川に面する百貨店は、思い出すだけでも吐気を催す。早く潰せばいいのに。今の地球に住む建築家で、その時の事を知る人は数少ないだろうが、あの時、あんたがいなければ、もっとしあわせな時を過ごせているのに。あんたが悪いんだ。」

「コルちゃん、あなたは今も変わらんね。みんな、あなたの言葉に耳を傾けていたのに、それは、答えになっていないよ。2週間程前に、ルイちゃんがここに来て、誰とも話をしたがらないが、疲れているのかね。それにしても、この若僧のプランを見なさいよ。あんたらしくもあり、私らしくもあるこの住宅を。金瘡星の様に、地球も大変なんだね。ねえ、コルちゃん、どう思う？」

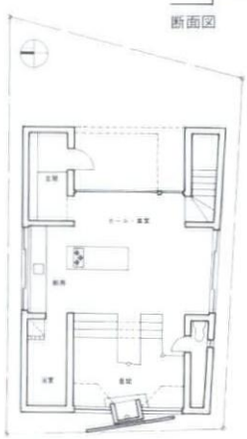
「こんな若僧とは口も聞きたくない。もう、わしは寝る。またあした。」

所在地：大阪府四条畷市
建築用途：住宅
構造：RC造
敷地面積：113.30m²
延床面積：138.28m²
竣工年：1987年

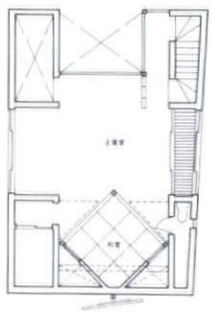
よしだ・やすお
1947年佐賀県生まれ。吉田保夫建築研究所主宰



断面図



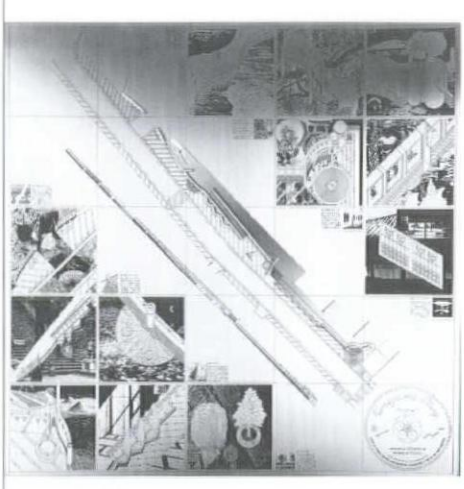
1階平面図



2階平面図

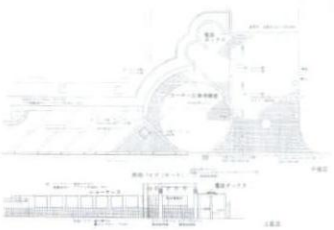
新居千秋

梅ヶ丘中学校正門前道路環境整備計画（梅ヶ丘ふれあい通り）









写真（左下、右）＝斎部功

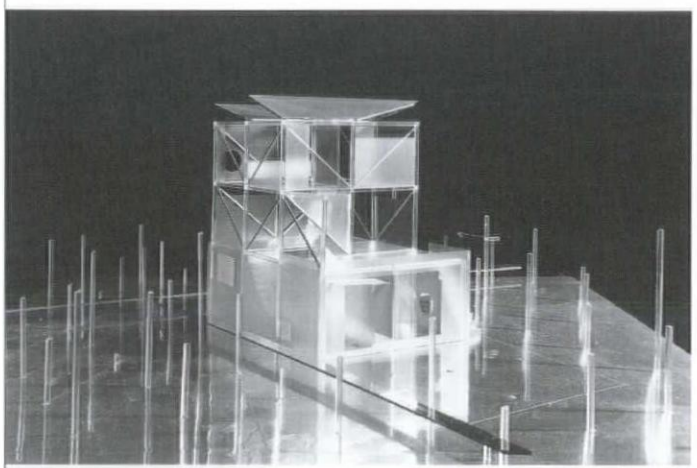
私達の道は、高齢者や障害者、ひいては一般の人びとの生活のしやすさを考えることであった。NHKやNTT、世田谷区と我々や林泰義らのコンサルタントと、武蔵野美術大学の協力を得て、共同実験の結果からは、現在の電話器の改良や、危険であった障害者用電話ボックスの撤廃等に繋がった。また電柱の径の縮小化（直径350mmを250mmに縮小）や、道路中央面での照度の取り方（調査をして0.3ルクスを道路中央面）、電柱共架灯の設計、ガードレールの実験及び設計、また電柱や交通標識の道路側への移設によって、180cmの道の実際には80～100cmしか使われていなかった部分を160cm程度まで使用可能とすることが出来た。この実験の結果や段差のスタディのデータが東京都や横浜市等の福祉の街づくりの基準になったり、周囲に少しづつ広がっている。また住民の人達と雑草を集め、押し花の手法を使ってタイルに焼き付け、失われて行く草花の名称や、役目などをある種のタイムカプセルとして埋め込んだ。

所在地：東京都世田谷区
建築用途：歩道及び中学校擁壁
共同設計者：世田谷区土木部工事第1課、公園課、建築部営繕第1課、学校教育部施設課
施設概要
歩道：幅員2.7～7.7m、面積670m²
（学校側）幅員1.7～2.1m、面積320m²
（西側）、車道：幅員6m、面積1100m²、
学校内：工事面積410m²
竣工年：1986年

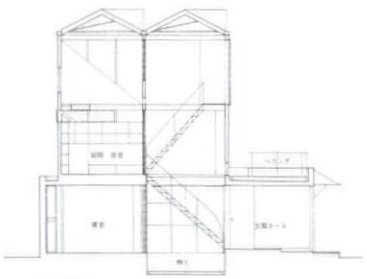
あらい・ちあき
1948年島根県生まれ。新居千秋都市建築設計主宰

石田敏明

茅ヶ崎の家――裸形のグリッドII（茅ヶ崎の家）







断面図

写真＝新建築写真部

前作「浦崎の家」と比較すると立地条件が都市的になっているし、モジュールも3.8mから2.7mに小さくなっているけれど基本的なテーマは連続した思考でできている。むしろグリッドシステムは平面から立体に移行しているし、建築の構成要素を断片化し部品として意識的に扱っている。また立体格子の架構の上に屋根をずらして置くことで、グリッドによる厳格な秩序性による束縛からの解放を試みている。このことにより空間をパースペクティブに捉えるのではなくむしろ拡散し、建築を構成している全体と部分の関係が希薄で移ろいやすい空間を指向している。

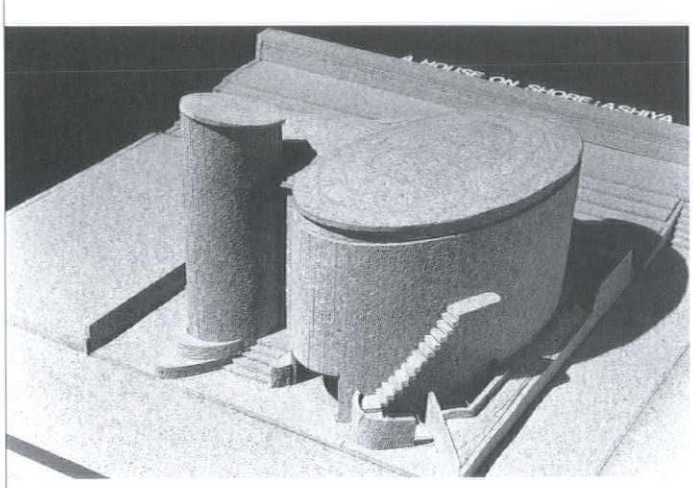
展覧会でのプレゼンテーションはコンセプチュアルで抽象的な模型を展示したけれど、審査員の八束はじめ氏の指摘にあったように具体的な表現の方がより理解していただけたのではと思った。

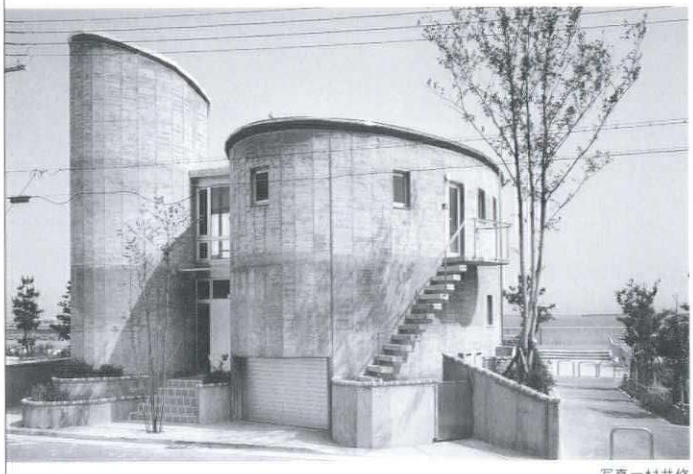
所在地：神奈川県茅ヶ崎市
建築用途：専用住宅
構造：RC造+S造+木造
敷地面積：101.37 m²
延床面積：84.19m²
竣工年：1986年

いしだ・としあき
1950年広島県生まれ。応募当時石田敏明建築設計事務所主宰。現在前橋工科大学教授

出江 寛

芦屋浜の家　A HOUSE IN SHORE: ASHIYA



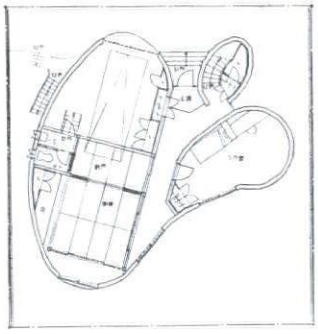


写真＝村井修

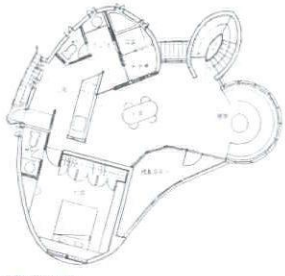
海辺に建つ建物として、船のイメージで造った。

庭のデザインは、瓦による波が押し寄せているようなデザインとした。

インテリアは、船のデッキに居るような感じにした。



1階平面図



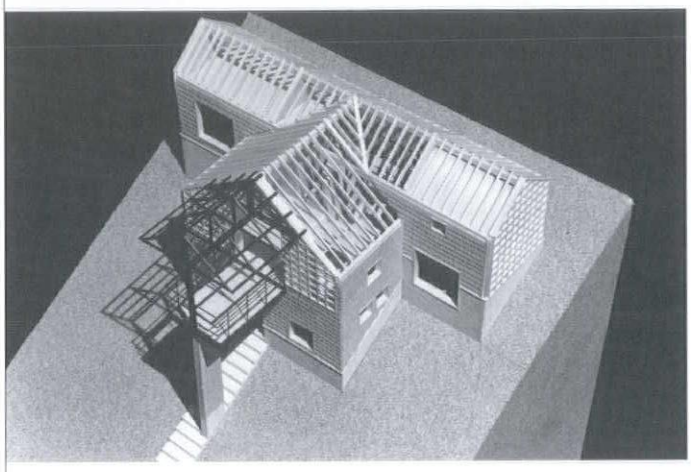
2階平面図

所在地：兵庫県芦屋市
建築用途：住宅
共同設計者：出江寛建築事務所
構造：RC造、一部S造
敷地面積：227.7m²
延床面積：199.9m²
竣工年：1985年8月

いずえ・かん
1931年京都府生まれ。応募当時出江寛建築事務所主宰。現在出江建築事務所株式会社主宰

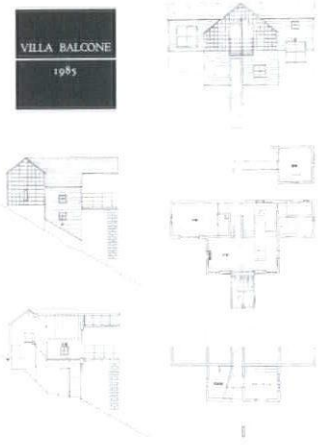
板井宝一郎+セクションR

Villa Balcone





写真＝新建築写真部



眺望にめぐまれた急斜面にたつヴィラ・バルコーネも、83年に出品したCPMスタジオと同様、「場所」と建築の関係が主要なテーマになっている。

外観は、単純なフォルムで構成されている。その幾何学的に完結した形態は、とりとめもなく拡がる雑木林のなかで、ひとつ秩序を生みだそうとする表明である。

室内空間は斜面を生かしたスキップ・フロアで構成され、それぞれの用途に応じて「場」がセッティングされている。

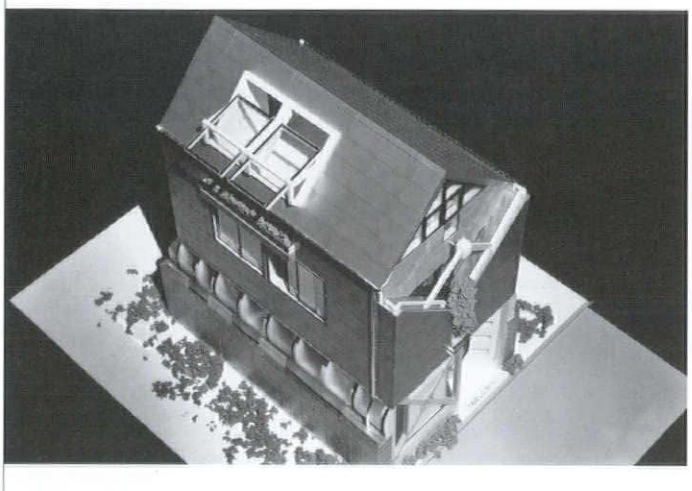
斜面に突きだされた小さなバルコニーは、設計時の想像以上に、「場所」に対する関係を明確にし、この小さな山荘にひろがりを与えてくれたと思っている。

所在地：栃木県那須郡
建築用途：別荘
共同設計者：建築研究室セクションR
構造：木造2階建
敷地面積：440.44m²
延床面積：68.45m²
竣工年：1986年4月

いたい・ほういちろう
1948年兵庫県生まれ。セクションアールアーキテクツ主宰

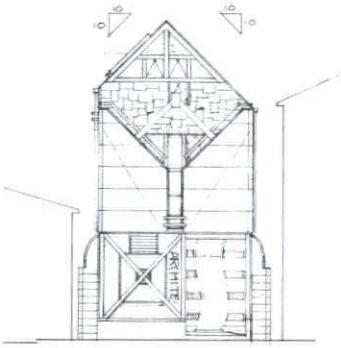
海野健三

海建築家工房事務所併用住宅（ウイングハット）





写真＝新建築写真部



立面図

その頃やってみたいことが頭の中にいっぱいあり、しかしいきなりクライアントの住宅でやってみるには無理がある、というものを、自分の家で全部やってみようと思った。それも、考えたことと実際に作ることとのずれを体感したかったので、ほとんどを自分で施工することにした。

出展した時は、あらかた施工も進み、デザインも煮つまってきた頃なので、実際に出来上ったものと大して差異はない。

実際に自分でやってみることで、材料のこともよく判り、道具のこと、部品のこと等がわかり、その後の建築活動に役立つこととなった。

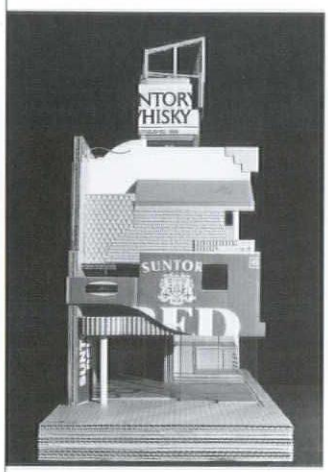
今では事務所を他に移し、専用住宅となっている。

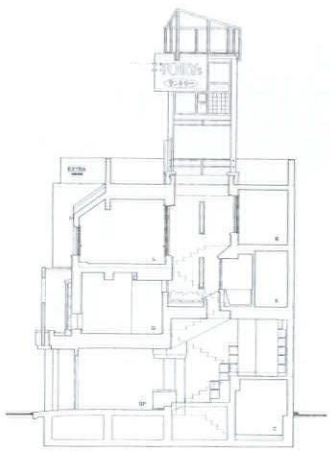
所在地：東京都江戸川区
建築用途：専用住宅
構造：木造3階建
敷地面積：38.95m²
延床面積：87.9m²
竣工年：1986年

うんの・けんぞう
1949年東京都生まれ。海建築家工房主宰

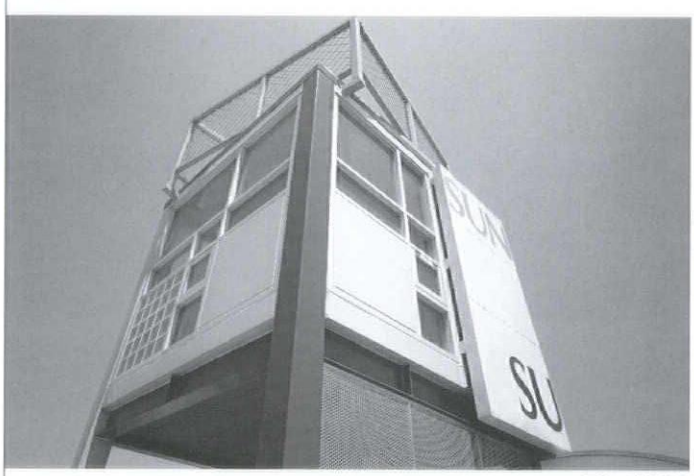
北村修一

ワインギャラリー・ヨシムラ





断面図



写真＝北嶋俊治

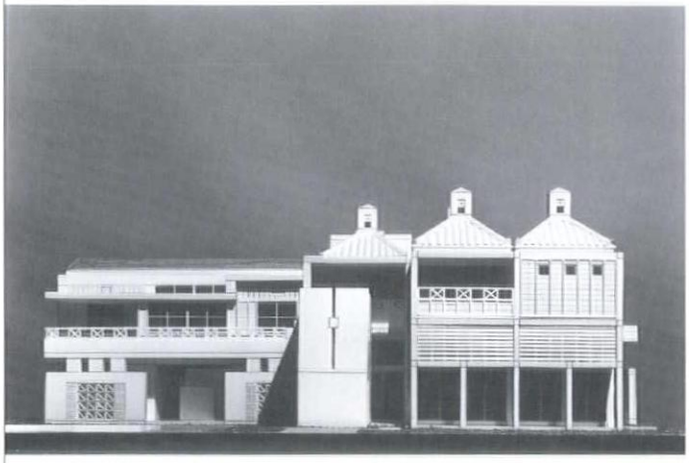
ワインギャラリー・ヨシムラは、私鉄駅前の広場に面して建つワインを主としたリカーショップである。75.3m²の小さな敷地ながら、この中には店舗の他に住宅やワインセラー、屋上のペントハウスから中庭までを取り込んでいる。しかし駅前広場に面するファサードこそがこの建築のメインテーマとなっている。ここでは「酔う」をコンセプトとし、1985年の設計当時としては時代を先取りしたような「落書きアート」のような不協和音のデザインを試みている。SDレビューにおいても「ダンボールアート」の模型と落書き風のCGスッケチを提示し、当時としては先進的であったと言えるだろう。また以後建築デザインにデコンが流行したことを考えると、この建物の先進性はより裏打ちされる感がある。実際の建物では、同時に「味わい」の表現にこだわり、質感のある素材を用いたことにより、見ようによっては落ち着いた建築のようにも見えるだろう。

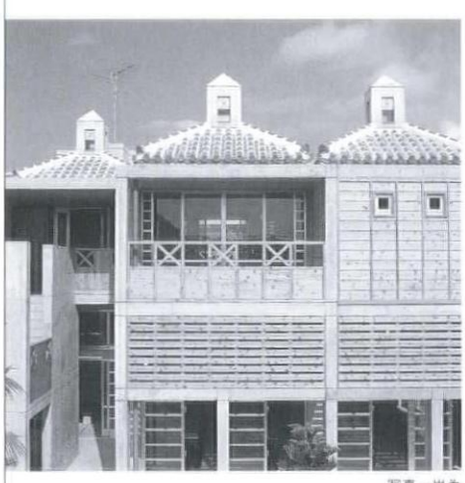
所在地：神奈川県大和市
建築用途：店舗+住宅
共同設計者：秋本 恭仁子、高橋尚入、丸山正実
構造：RC造
敷地面積：75.3m²
延床面積：178.8m²
竣工年：1985年

きたむら・しゅういち
1949年神奈川県生まれ。キタムラ・アソシエイツ主宰

末吉栄三

知念高校　海鳴館





写真＝岩為

高校の創立40周年記念事業として建てられた建築で、建設資金はすべて同窓会、在校生等多くの人びとの募金で賄われた。それ故に「ローコスト」が必須の条件である。

私達の意図したことはこの建築によって、バラバラに置かれている施設群にひとつのまとまりを与えること――学園全体の焦点となる強力な中心的場所を生み出すことであった。建物は345m²で、規模的には周りの校舎の比ではない。それを密度の高い魅力のある場として出現させるために、1階の学生ホール、2階の同窓会室そして研修室（和室）を、各々が全く雰囲気の異なる3つの独特な場所として作る事にした。異種の空間の併存とともに、素材的にもRC、コンクリート・ブロック、木材、赤瓦、レンガ、タイル、砂利等々を等価のものとして併存させている。熱を切り、風を抜くために、いくつかの簡単な工夫も施している。

SDレビューに出展した案が、ほぼそのまま実現している。

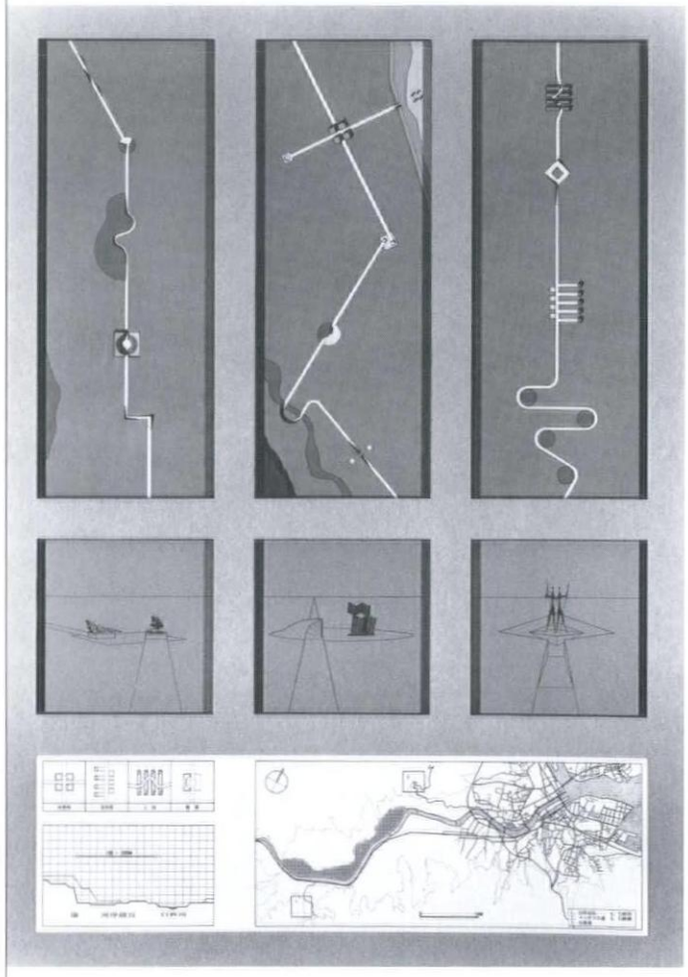
所在地：沖縄県島尻郡与那原町
建築用途：高校同窓会学生会館
共同設計者：後藤尚美、高江州加代子、末吉丈治、高良信次、倉沢智
構造：RC造、2階建
敷地面積：34,084m²（高校全体敷地）
延床面積：345.33m²
竣工年：1986年3月

すえよし・えいぞう
1945年沖縄県生まれ。末吉栄三計画研究室主宰

團 紀彦

マンダラの道

入賞



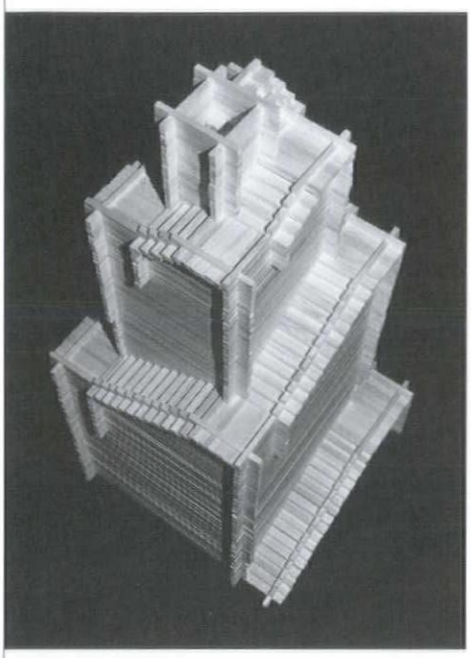
マンダラの道計画案は、金沢美術工芸大学で教えておられた彫刻家の故高橋清先生に伴って、大分県臼杵市を訪れた時に、市の要請に答えて提案したアートワークの展示空間としての道の計画である。市は、分断されがちな市内と臼杵石仏を何とか結びつける脈絡を求めていたので、臼杵川沿いの4kmに及ぶ河岸段丘の草地にアースワーク状の道の造形と、彫刻作品が生成発展しながら徐々に作られる形式を提案した。実際には、農地の転用や、用地収容の困難さから、実現しなかったが、その後の私自身の土木的なフィールドにおけるデザインや、アートと建築とのコラボレーション等の問題意識の出発点になった。

所在地：大分県臼杵市
共同設計者：高橋清（彫刻家、金沢美術工芸大学教授）
規模：全長4km

だん・のりひこ
1956年神奈川県生まれ。応募当時ARCHI STUDIO主宰。現在團紀彦建築設計事務所主宰

仲 隆介

権守塔



始まり
権守さんは、高給取りでも、特段時間に余裕があるわけでもない。ごくフツーのサラリーマンである。そんなサラリーマンが、何を思ったか、「自分が生きていた証を世に残したい」と思うようになった。それがこのプロジェクトの始まりである。

セルフビルド
お金があれば、ゼネコンに頼んで一気に造りあげることも可能であるが、ない。決してセルフビルドでなければだめだなんて考えていない。お金がないから自分でつくるしかないだけだ。材料費の貯えも十分ではない。働いて稼がなければならない。だから、毎日働いて、休みに出かけて行って少しずつ造り続けるしかない。

提案
一歩一歩階段を登って行くと頂上に辿り着く校倉造りの塔を提案した。完成まで長い時間がかかることが予想できたから、頂上に辿り着く日を夢見ながら一本一本積んでいけるようにとの期待も込めた。完成すると、かなりの存在感のある塔になるはずだ。

やっと始まる
権守さんは、安い材料探しを始め、古い電柱の廃材に目をつけた。基礎だけは、奮発して、専門家に頼んでコンクリートを打ってもらった。現場小屋もつくりを始めた。材料置場も造った。お金を稼いでは、電柱を買い足した。本格的に塔をつくるために現場で生活のできる小屋が必要だと言って、カナダで買ったログハウスまで造り始めた。これがもうじき完成する。そして、来年の春くらいから塔の建設に入れそうだと言っている。この間、12年。

やっと始まる
SDレビューが今までのまとめをしようとしているというのに、その時間を準備に使ってしまった。まだ、どんな建築になるか分からないが、デザインがいいとか悪いとかいったレベルとは違う次元のものになるだろう。権守さんの思いをストレートに表現できればとても良くなるはずだ。

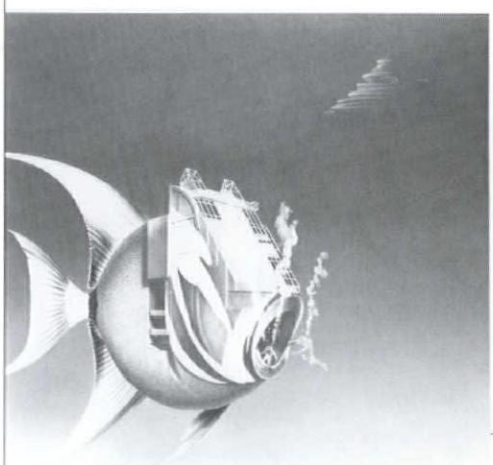
そして
SDレビューの20周年には無理でも、なんとか30周年には間に合って欲しいものだ。権守さんもそろそろ50歳。そんなに時間が有り余っているわけではない。

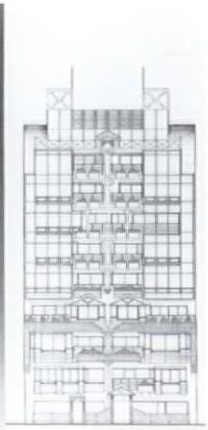
所在地：長野県南佐久郡
建築用途：別荘兼モニュメント
共同設計者：権守均
敷地面積：1,987m²
建築面積：100m²
延床面積：189m²

なか・りゅうすけ
1957年大分県生まれ。応募時東京理科大学助手。現在宮城大学専任講師

中筋 修

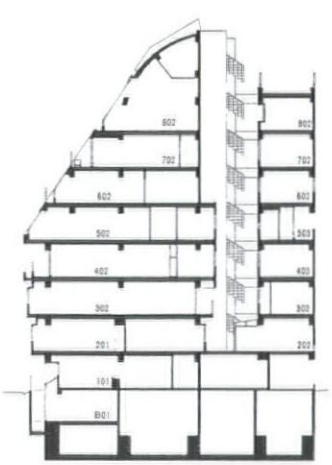
都住創内淡路町プロジェクト（都住創内淡路町）







写真＝新建築写真部



断面図

大阪の都心部にコーポラティブハウスを創り続けてちょうど10年目、第12号目としてスタートしたプロジェクトであった。

設計は応募した時点のままで無事に竣工することが出来た。

竣工式はその2年前に完成していた、第10号釣鐘町の1階にある「都住創センター」で賑やかにとり行われた。SDレビュー大阪展の会場として10年間提供していた場所である。

入居して既に12年目、20区画のうち2区画が売却により転出。18区画は今も初期のメンバーが健在である。

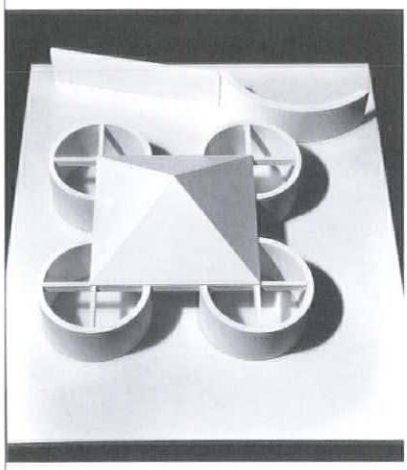
現在外壁補修、ペンキ塗直し工事が行われている。

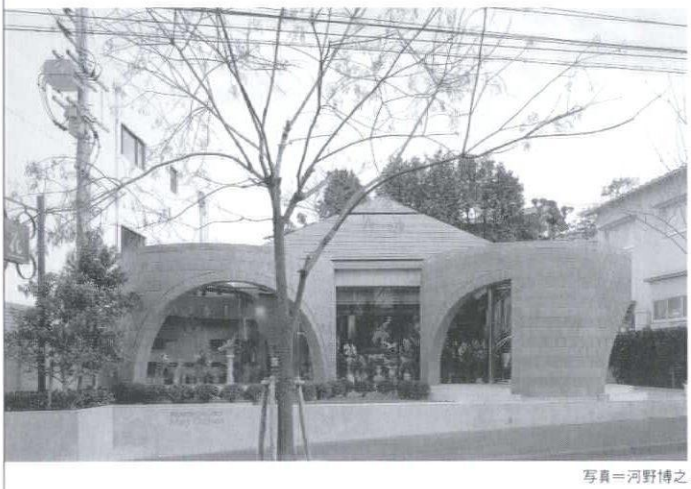
所在地：大阪府大阪市
建築用途：住居12戸+事務所7戸+店舗1戸
共同設計者：担当：中村清久（旧所員）、坪内優（旧所員）、谷口構造設計事務所（構造）、ASK設備設計事務所（設備）
構造：SRC造、一部RC造
敷地面積：357.64m²
延床面積：1,865.15m²
竣工年：1986年4月

なかすじ・おさむ
1939年大阪府生まれ。ヘキサ主宰

西岡 弘

フラワーショップ［マージオーキッド］





写真＝河野博之

幾何学形態の集積を比較的プリミティブに表現した計画だったが、施工的には幾つかの試みを行っている。

ひとつはコンクリートブロックその物を外形枠としてコンクリートを打設し、石積み的表現を出したことと、コンクリートブロックに顔料を入れて、チープな印象しかもち合わせない素材に付加価値をつけた事である。シリンダー状の壁面に穿たれた半円形の開口は、建物に強いサイン性を与え、ほとんど看板表示のない建物だが集客には充分役に立っている様だ。この建物は私の師である磯崎 新先生の福岡シティ（旧相互）銀行本店や、黒川紀章氏の福岡銀行本店など2、3の大型の建物と共に、第一回の福岡市都市景観賞を受賞した。

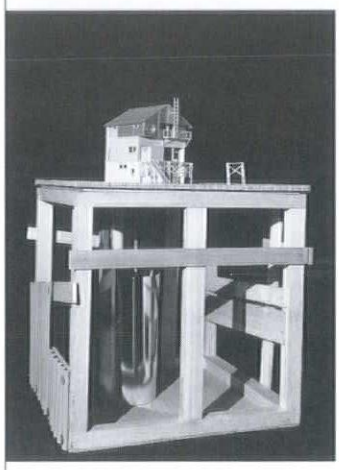
所在地：福岡市中央区
建築用途：店舗
共同設計者：増山幸雄
構造：RC造、一部S造（屋根）
敷地面積：492.59m²
延床面積：106.43m²
竣工年：1986年2月

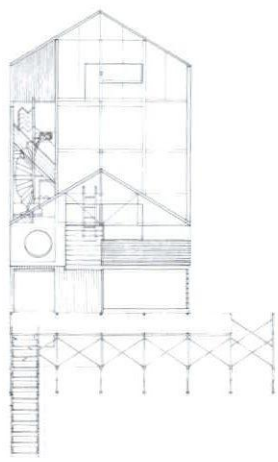
にしおか・ひろし
1945年群馬県生まれ。西岡 弘建築工房主宰

萩原 剛+藤田純也

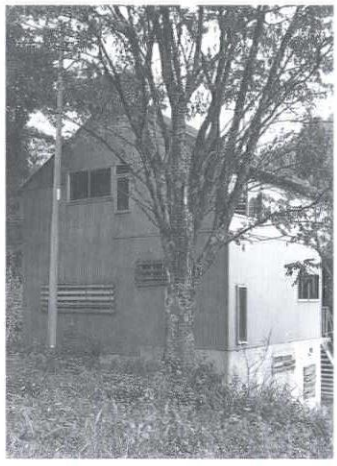
浦和高校山岳部OB会山小屋　HÜTTE ALPEN-GLÜHEN

入賞









写真（下2点）＝大野繁

「複数の施主から出されるそれぞれの嗜好を、できる限り切り捨てることなく並置することに可能性を見い出そうとした。‥‥統合されたあるSTYLEへの指向は消失していく」（設計コンセプトより）。

このプロジェクトは私が学生である1984年、10人の共同出資により山小屋を作りたいという話に卒業生のひとりとして係わったのが事の始まりです。次の年、就職先の寮生活で知り合った藤田氏と共にこの設計は進みました。工事は7月から10月までの4ヶ月間で行なわれ、毎週のように大阪から夜汽車に揺られ、湯沢へと向かったのを思い出します。午前10時に現地へ到着、その日の最終新幹線で大阪へ。約900万の出資金は、ほぼ外装が立上がった時点でなくなりました。その後、内部は参加者のセルフビルドによって年々手が加えられ、利用されているようです。冒頭の文章を再び読み返してみる時、「ニュートラルに並置することの可能性」あるいは、「ひとつのSTYLEに統合されることへの危機」といった、これからの時代背景を予感した問題意識がふたりをつなぎ止め、そして今もお互いの設計理念のひとつとして漂い続けているのではないかと思います。（萩原 剛）

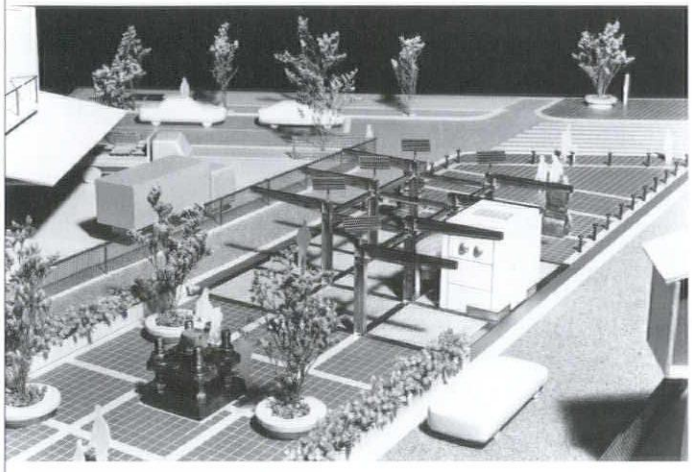
所在地：新潟県南魚沼郡湯沢町
建築用途：山荘
構造：木造、一部RC造
敷地面積：333m²
延床面積：118m²
竣工年：1985年（内部未完）

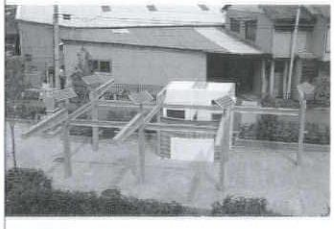
はぎわら・たけし
1961年埼玉県生まれ。竹中工務店勤務

ふじた・じゅんや
1959年神奈川県生まれ。竹中工務店勤務

山田朗

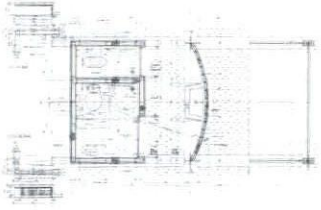
新羽緑道パブリックトイレット（新田緑道パブリックトイレット）



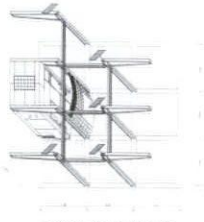




写真（左下2点）＝山田朗



平面図



アクソノメトリック

工場と住居が混在する周辺地域の中心部にあった排水路を埋め立てて、緑道公園（インダストリアル・コミュニティモール）として整備されようとする中で、この小さなトイレが従来のように公園の単なる付帯施設でしか過ぎないというものではなく、何かインパクトのあるトイレが出来ないものか、たとえば当時のパリなどに見られたストリートファニチャー的にデザインされたトイレを提案することを試みた。まず、片隅に追いやられるトイレからより積極的に前面に配置する。人通りの多い交差点近くに配しこのモールのゲートとしての機能をもたせる。又、周辺工場から提供される使用済み機械類をモールのモニュメントとして配置する中で核となるデザインをする。太陽光発電を積極的に取り入れトイレの夜間照明に当てるなど、ハイテックぽく小気味よいデザインを心がけた。SDレビュー発表後、関係者の努力もあってほぼ基本通り完成した。

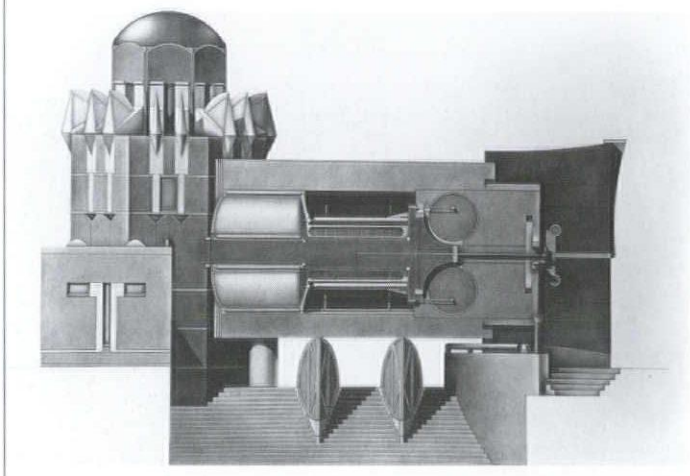
所在地：横浜市港北区
建築用途：公共トイレ
共同設計者：高野ランドスケープ
構造：S造
敷地面積：1,410m²（第7ブロック）
延床面積：エリア81m²　建物5.25m²
竣工年：1987年

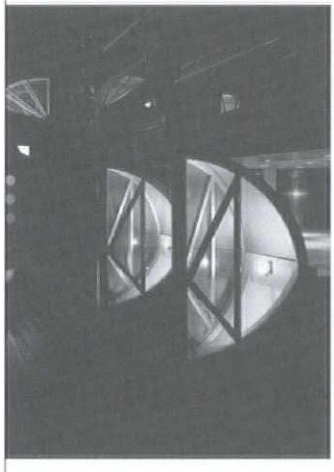
やまだ・あきら
1952年北海道生まれ。計画機構代表

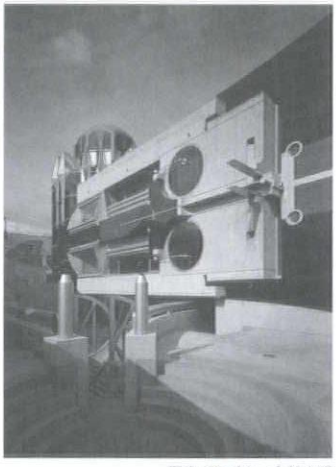
高松伸

ひなや本社第3期工事（織陣III）

招待







写真（下2点）＝古館克明

当建築は5年ほど前に完成した通称〈織陣〉の第3期工事である。ふたつの通りを東西につなぐ60mほどの敷地の東から第1期工事が開始され、この建築が西端に建つことによってとりあえず計画の総てが終了することになる。施主側からの条件はこれまでと同様シンプルなもので、大ざっぱに言ってしまえば西側の通りへの特異なメッセージを創造せよという極めて抽象的なものであった。ギャラリーやサロンや和室といった静の部分と、作業場（手織の機織り機ージャガードを数台設置する）の動の部分との分節という簡明な用途上の要請には八角形のシャフトを軸にゾーニングするという素直な解法で応じてある。ともあれふたつの通りにふたつの顔を持つ建築が建つことになった。いわば京都特有のうなぎの寝床に眠る全長60mの双頭の龍とでも言おうか。

所在地：京都府京都市上京区
建築用途：本社ショールーム
共同設計者：高松伸建築設計事務所
構造：RC造
敷地面積：483.19m²
延床面積：745.87m²
竣工年：1986年

たかまつ・しん
1948年島根県生まれ。応募当時高松伸建築設計事務所主宰。現在京都大学工学研究科教授

第5回　1986年



デザイン＝工藤強勝

東京展：10月9日～10月22日

第1会場：ヒルサイドギャラリー

第2会場：ヒルサイドテラスE棟ロビー

大阪展：10月27日～11月8日

会場：都住創センター

審査員：槇 文彦、木島安史、小宮山 昭、鈴木博之

応募総数：138作品

入選数：21作品

受賞者：

伊藤哲夫（鹿島賞）

パルフィ・ジョージ（朝倉賞）

吉田保夫（大阪賞）

長島孝一+中村 勉（SD賞）

北山 恒+谷内田章夫+木下道郎+野口昌夫／ワークショップ（入賞）

上田堯吞（入賞）

鹿島建設建築設計部（入賞）

上田堯吞　木・もく高知

伊藤哲夫　鎌倉の家

大野秀敏　YKK市川寮［風の門］

小川守之　北八朔の家

鹿島建設建築設計本部　NO OTHER PLACE

北村陸夫　田口邸［アルミのカラス］

北山 恒+谷内田章夫+木下道郎+野口昌夫　ビアホール ハートランド

久保清一　N.I.B.C.［Nara International Business College］

七月工房　K-HOUSE

鈴木エドワード+笹森則次　HASEGAWA VILLA［木漏れ日の影］

竹ノ内一雄　坂径のあるクラブハウス

團 紀彦　海のガラス工房

土井鷹雄　鎌倉の家

中込 清　K's VACATION HOUSE　第2案

長島孝一+中村 勉　那須友愛の森・工芸館

西岡 弘　杵築の住宅

日本設計事務所　東京都多摩動物公園・インセクタリウム

パルフィ・ジョージ　（仮称）千歳ビル　J&R maison

堀池秀人　札幌集合住宅

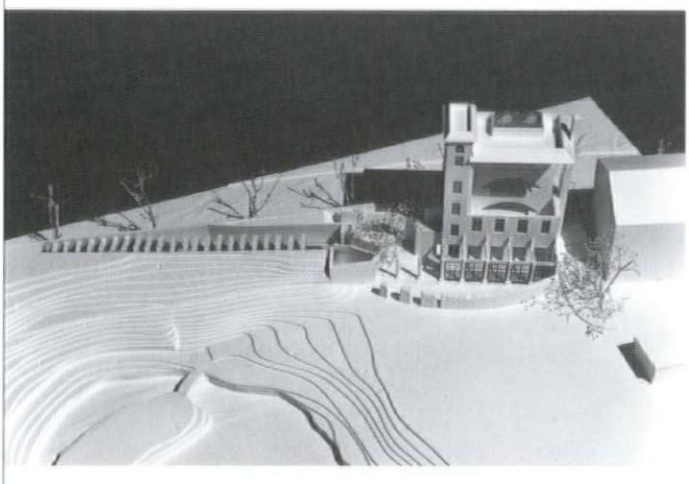
堀場 弘　堀場邸

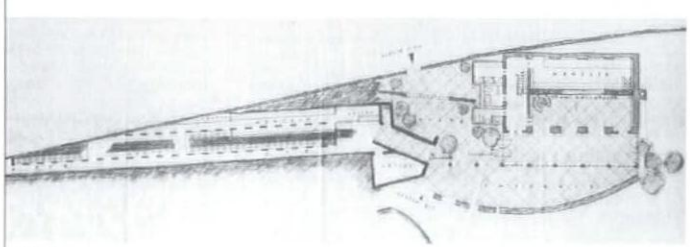
吉田保夫　銭湯・カタコンベ　第2期工事

北山恒+谷内田章夫+木下道郎+野口昌夫

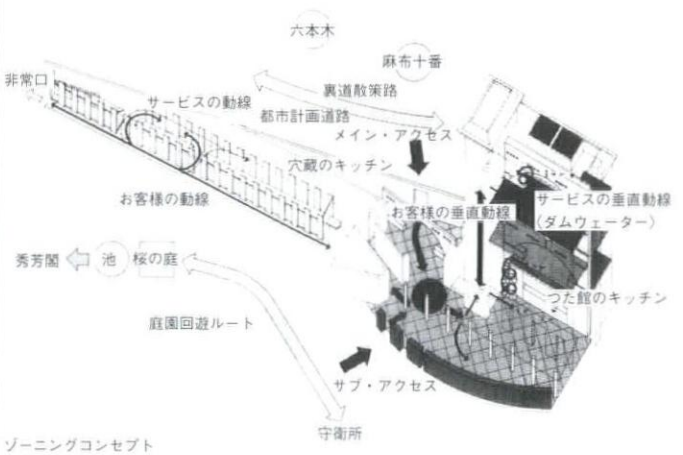
ビアホール「ハートランド」

入賞

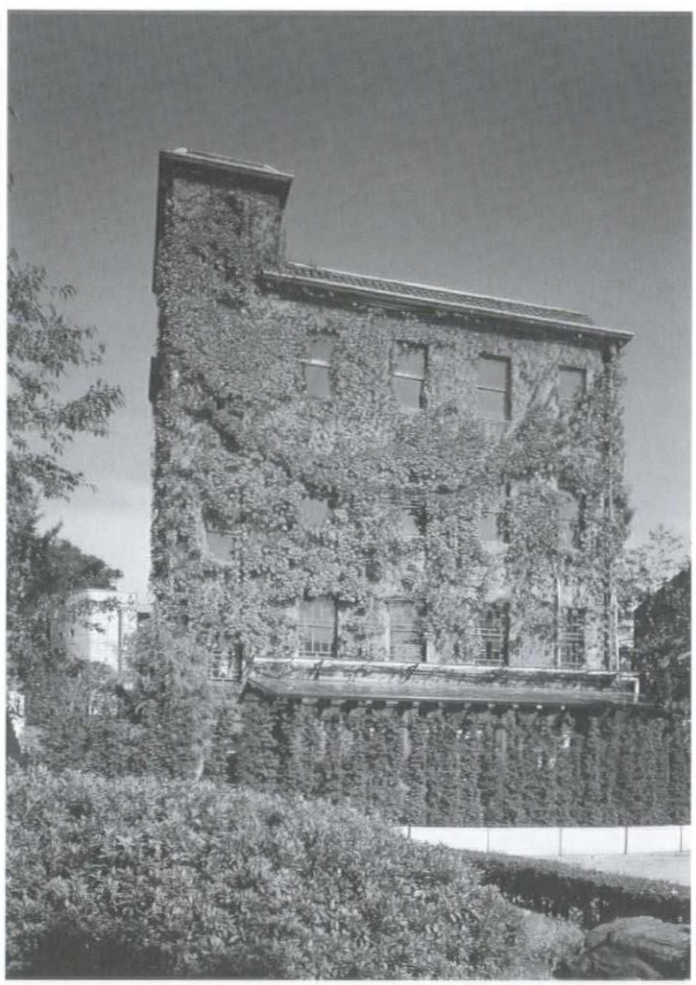




平面図



ゾーニングコンセプト



写真＝宮本隆司

明治以降の近代建築総体の中で、際立った歴史的価値を持たない部分は、資本の理論のもとに、次々と姿を消してゆく。これを救済するひとつの方法を、建築家の側から提示したい。

1925年岡田信一郎が設計した、つたの絡まるRC造洋館。その傍らに掘られた年代不明の穴蔵。時代とともに当初とは異なる機能を持たされ、それに応えてきたこのふたつの古い容器を、この度新たに、ビアホールとして再生させる。つた館では、一枚の補強壁が4層を貫いて挿入された。これはファサードに手をつけずに構造強度を確保するための手段であると同時に、内部のふたつの吹き抜け空間を演出する装置として働く。穴蔵では、細長い虚空の中に、光で切り取られたリニア・スペースをインサートし、既存の壁体をそのまま残す。

部分の補修ではなく、既存骨格全体に関わる挿入行為を基底とした再生である。これは、時間の流れが刻まれた断層に対し、新たなる一枚の層を積み重ねる作業に他ならない。

設計者：北山恒+内田章夫+木下道郎／ワークショップ、野口昌夫
所在地：東京都港区
建築用途：飲食店
構造：つた館　RC造4階建を鉄骨で補強、型枠コンクリートブロックで2階建を増築
穴蔵RC1階建（既存部分）、S造（新築部分）
敷地面積：8,564.78m²
延床面積：542.94m²
竣工年：1986年

きたやま・こう
1950年生まれ。応募当時ワークショップ主宰。現在横浜国立大学助教授。architecture WORKSHOP主宰

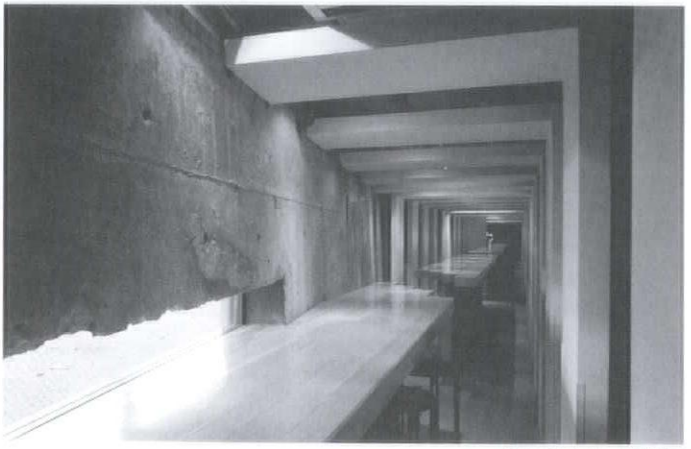
きのした・みちお
1951年生まれ。応募当時ワークショップ主宰。現在木下道郎／ワークショップ主宰

やちだ・あきお
1951年生まれ。応募当時ワークショップ主宰。現在谷内田章夫／ワークショップ主宰

のぐち・まさお
1954年東京都生まれ。応募当時東京工業大学大学院研究生。現在東京芸術大学助教授





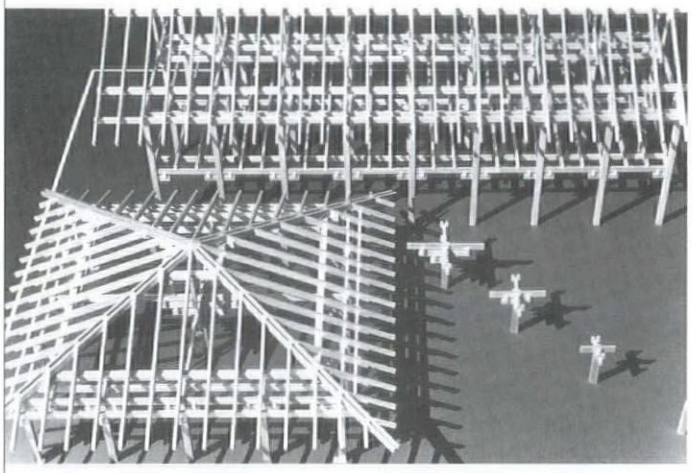


写真（3点とも）＝宮本隆司

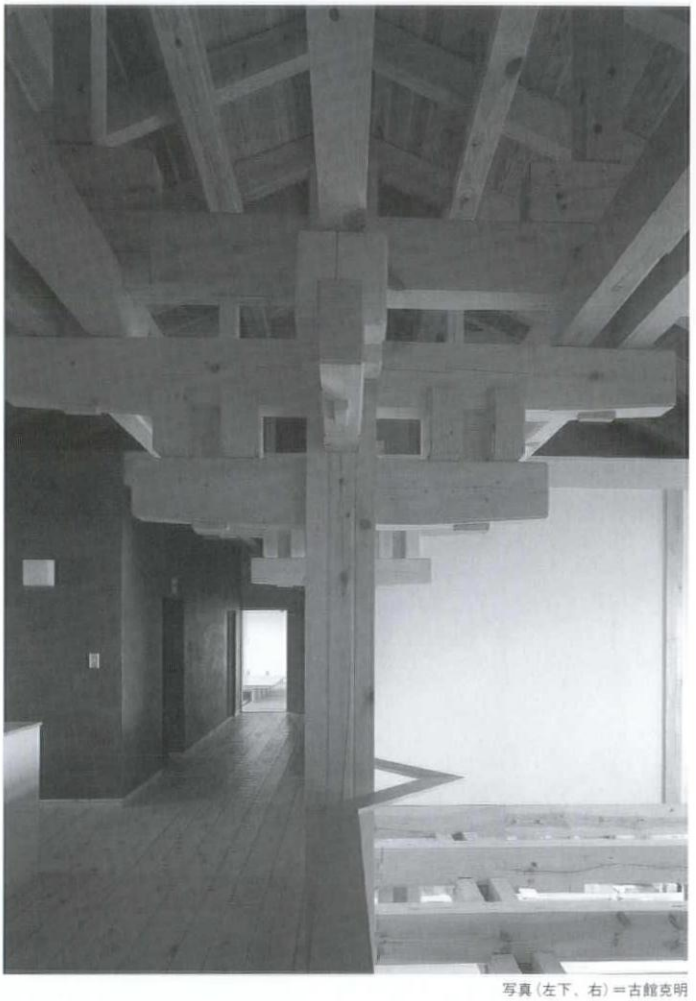
上田尭吞

木・もく高知（ウッドコミュニティ高知）

入賞







写真（左下、右）＝古館克明

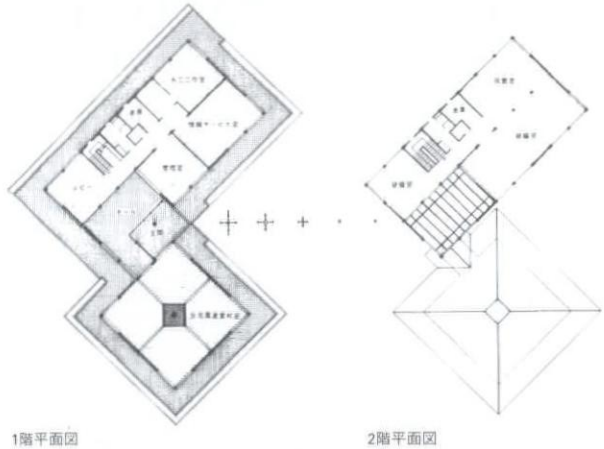
高知県は県土の84%が山地。その64%に植林された杉・桧が育つ。

その木々はそろそろ伐採期に入る。豊かな資源であるが、唯の木となる恐れがあります。この建築は林野庁の補助事業として、木造の新規使用法・構法が求められました。少し大きな空間を有機質である木を無機質である鉄のように、規格化された一般流通材（梁材は全て4×8寸）をシステマティックに構成し、現代人の感性に合う構法の確立を試みたものです。日本には伝統的に広いスパン、大きな屋根、庇を支えるために肘木の構法があります。先人により洗練された肘木構法に貫構法（接合部をラーメン化）を加味し、接合部をラーメン化したものです。建築は補助金の性格もあり幸いに応募したそのままの形で建築されました。また地方を活動の場としている僕にとっては、86年のSDレビュー入賞はその地の風土（自然）と時が証明してくれた恵と蓄積された技をもって建築をつくるというコンセプトが認められ大きな自信と誇りとなりました。

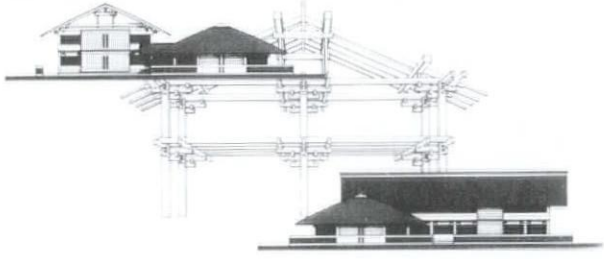
日本の風土に育まれた木々は、大工達の永く育まれた構法で、と願いを込めて。

所在地：高知県高知市
建築用途：事務所
共同設計者：山本幸延（構造）
構造：木造
敷地面積：12,431.5m²
延床面積：633.0m²
竣工年：1987年3月

あげた・たかよ
1942年高知県生まれ。（合）上田建築事務所代表



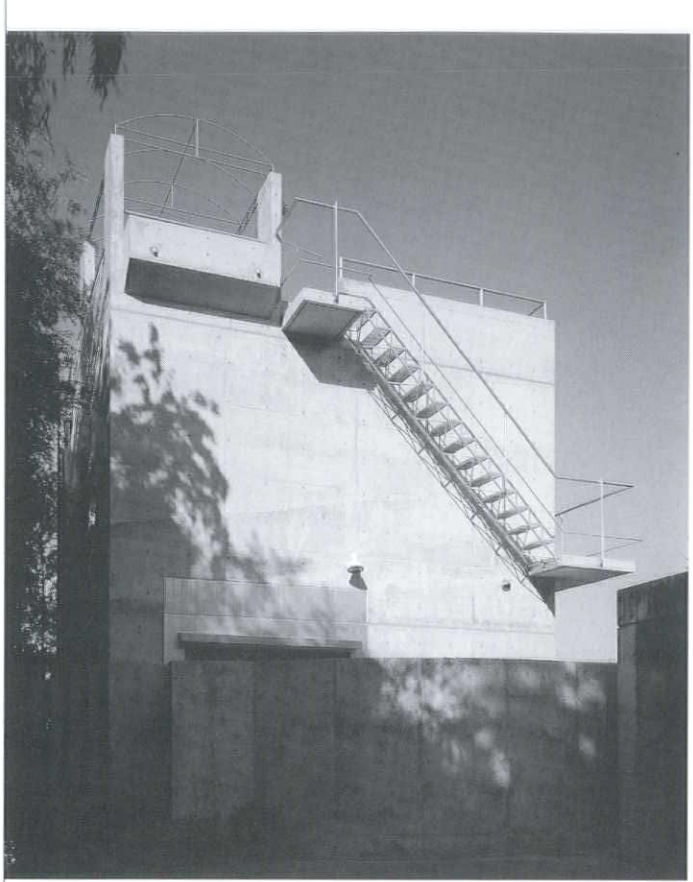
1階平面図　2階平面図

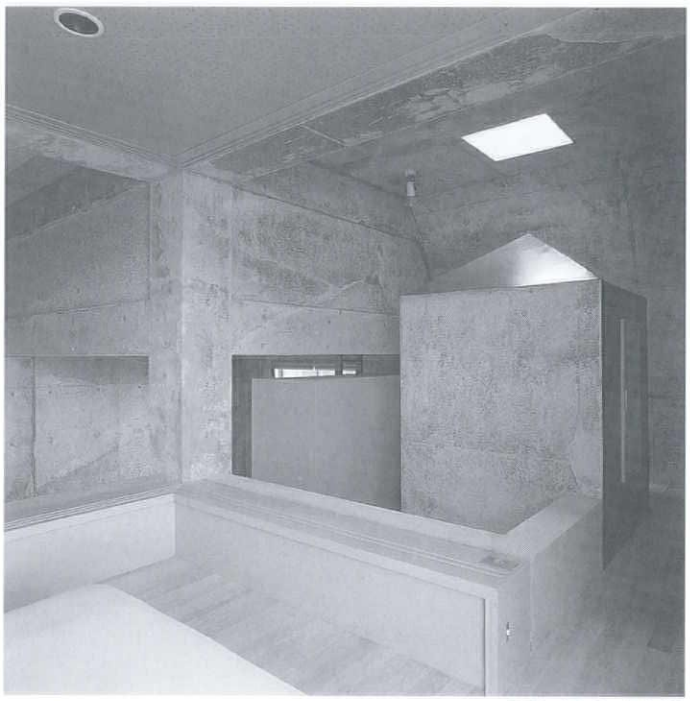


伊藤哲夫

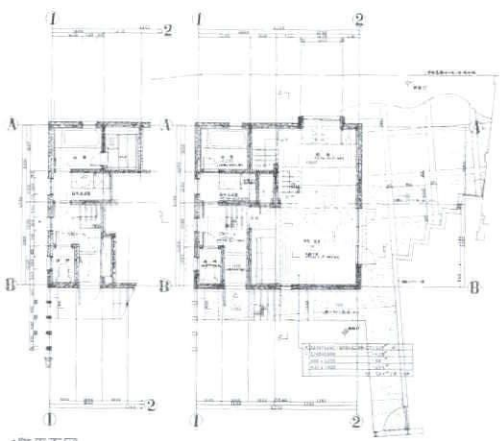
鎌倉の家（立体最小限住宅）

鹿島賞





写真（2点とも）＝堀内広治



1階平面図

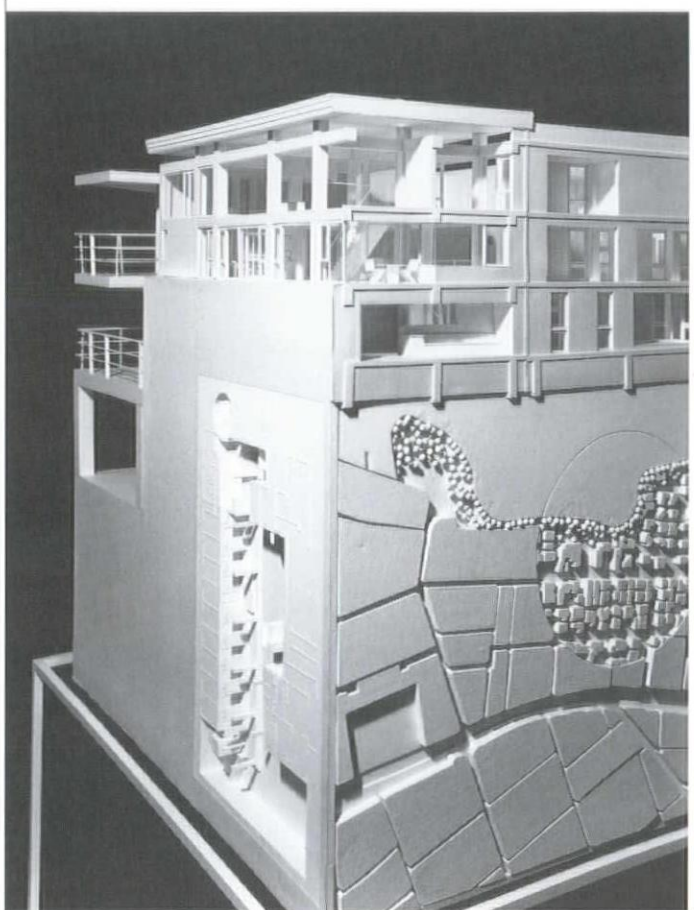
6×6×6mの立方体中にあって、多種な機能空間がレヴェルを異にしている。——そうして住宅の内部空間のつながりを模索した習作です。応募して、ある程度評価を得、うれしく思ったことを覚えています。完成した空間は設計段階でイメージした空間との差異はほとんどありませんでしたが、住まい手の住まい方と住空間の関係が気掛かりになっています。小さな空間でも十分使え、豊かになる可能性を確認できた気がします。

所在地：神奈川県鎌倉市
建築用途：住宅
構造：RC壁式構造
敷地面積：218.61m²
延床面積：67.03m²
竣工年：1987年8月

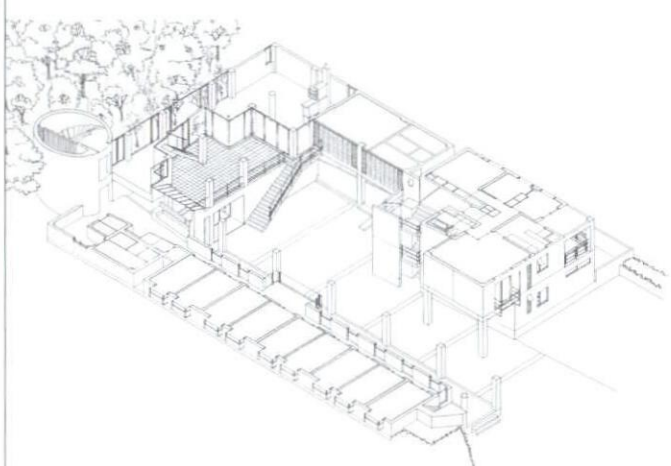
いとう・てつお
1942年山口県生まれ。伊藤哲夫建築計画研究室

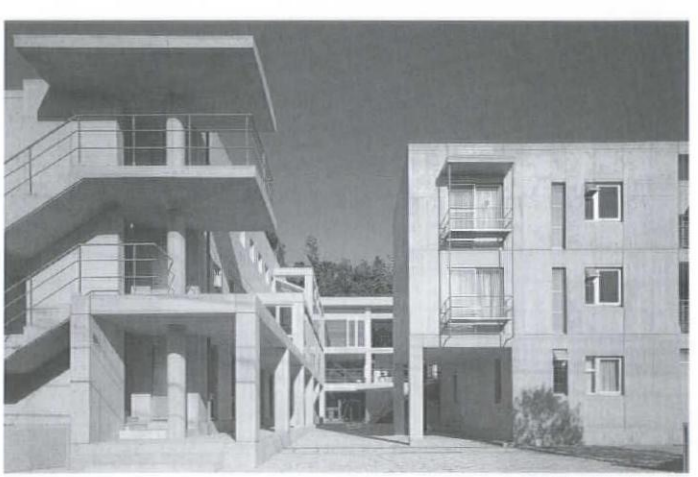
大野秀敏

YKK市川独身寮「風の門」（「風の門」YKK市川寮）









写真（右2点）＝北嶋俊治

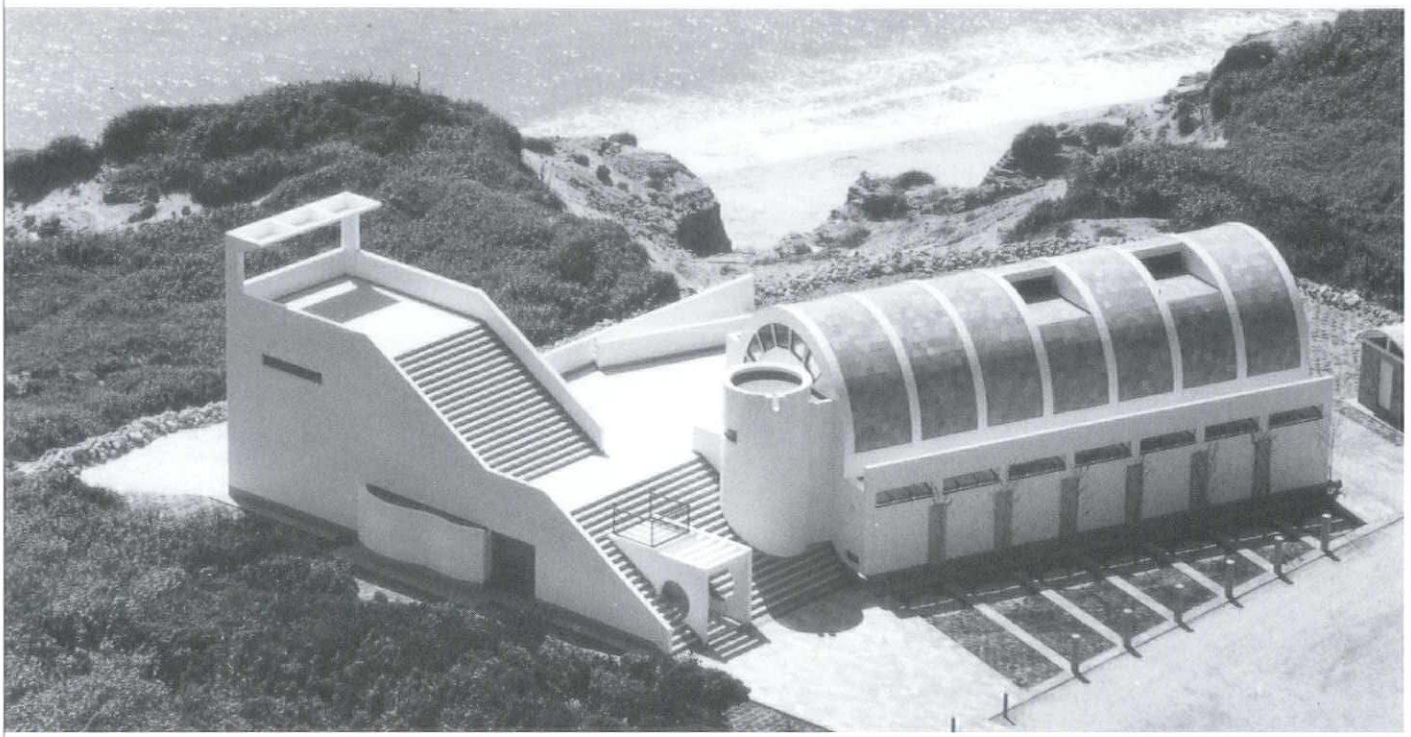
これは〈天城の山荘〉に続くプロジェクトである。敷地は市川の真間川近くの住宅地で10mほどの高低差のある斜面緑地を控えた、条件の良い場所であった。この建物が建つ以前には、この緑地が路上からもよく見えたので、新しい建物によって塞いではならないと考えた。道から緑地への透明性を作り出すことが設計のテーマであった。大きな単純なマッスから削り出してゆくような構成法はコルビュジエのアーメダバッドのショーダン邸を、小さな空間の扱いについてはアルド・ヴァン・アイクを研究して進めた。建物の全体構成原理をキュービックな立方体から削り出したような模型表現によって表現しようとした。ただ、この模型では建物を透かして背後の緑地を見せるというテーマは殆ど表現されていない点が不十分であった。この模型は、その後分解して継ぎ足し、現場の検討模型として余生を全うした。

所在地：千葉県市川市
建築用途：独身寮、一部社宅
共同設計者：花輪建築構造設計事務所（構造）、総合設備計画（設備）
構造：RC壁造、一部柱梁構造
敷地面積：1,600.31m²
延床面積：1,370.65m²
竣工年：1987年

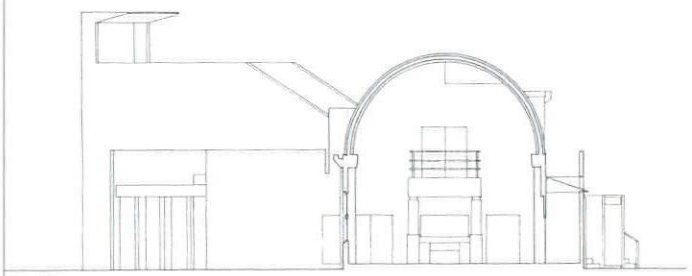
おおの・ひでとし
1947年岐阜県生まれ。東京大学助教授

團 紀彦

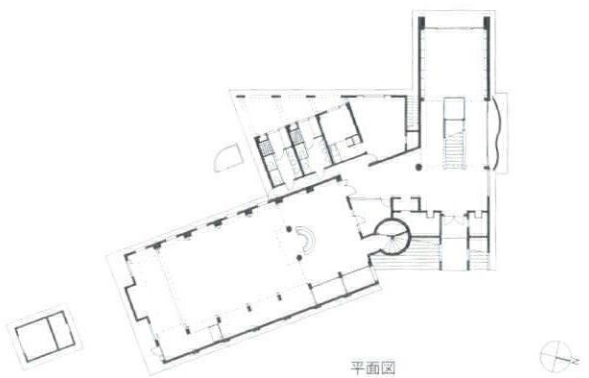
海のガラス工房［新島グラスアートセンター］



写真＝読売新聞社



立面図

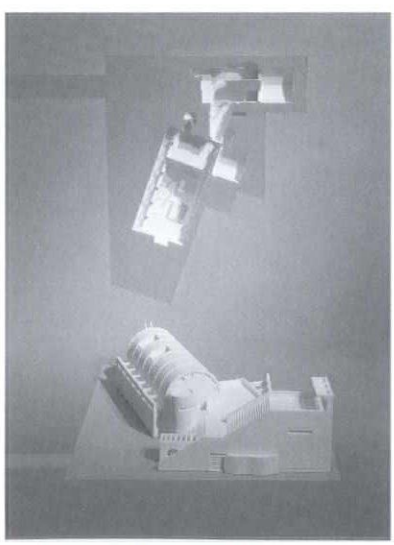


平面図

SDレビュー入選の4作品中唯一実現した作品。

敷地は、新島南西部の間々下海岸の砂丘上に位置しており、そこに、村で産出される抗火石と呼ばれる軽石状の石材を溶融して作られるガラスを使ったアートワークの工房の計画である。SDレビューに出展した時期には、美しい砂丘の前端部を横断する道路計画があって、それを景観上内陸部へ移設する交渉と、公共の建物なので収益性を重視した観光土産工場とするべきであるとする役所内部の声に対して、あくまでもグラスアートの教育と普及を目的とし、国際的な視野に立った人的交流のための文化施設として位置づけるべきであるとの説得を行っていた。その後この計画に続いて、セミナーハウスとしての新島島民塾（1991年）、また橋元勝久氏設計の新島ガラス工芸館FIN（1995年）が完成してこのエリアの一応の景観形成が完了した。

所在地：東京都新島村
建築用途：工房
共同設計者：東森香織
構造：RC造
敷地面積：9600m²
延床面積：496m²
竣工年：1988年7月

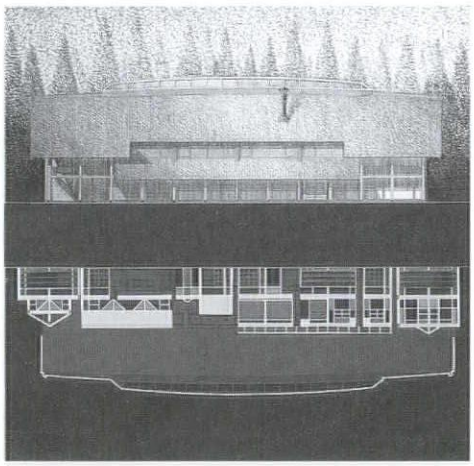


だん・のりひこ
1956年神奈川県生まれ。応募当時團・青島建築設計事務所主宰。現在團紀彦建築設計事務所主宰

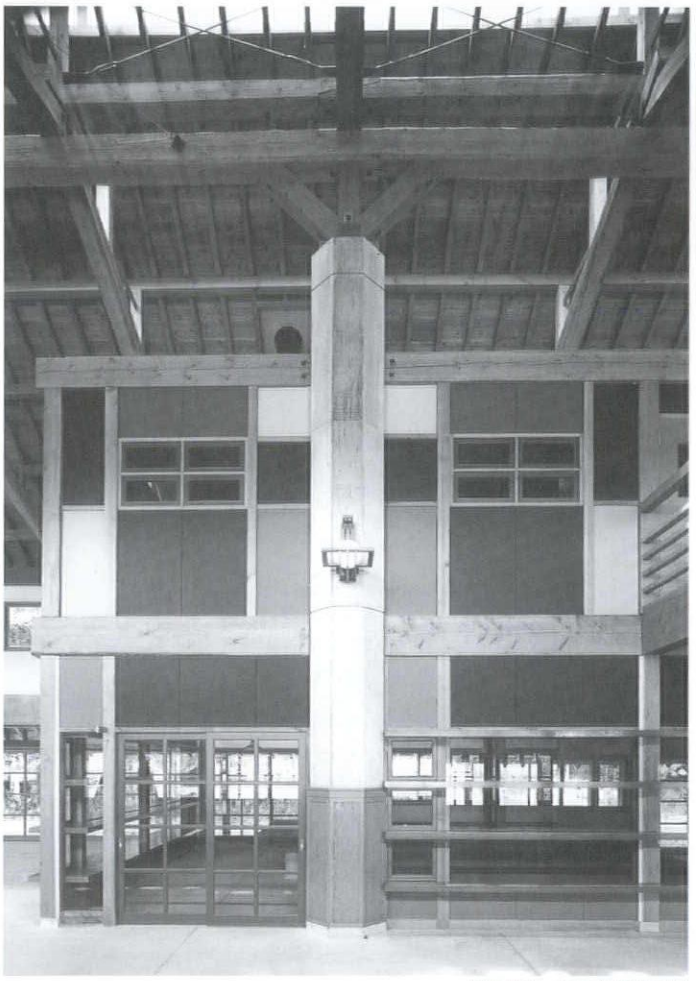
長島孝一+中村 勉

那須友愛の森・工芸館（那須友愛の森定住センター）

SD賞







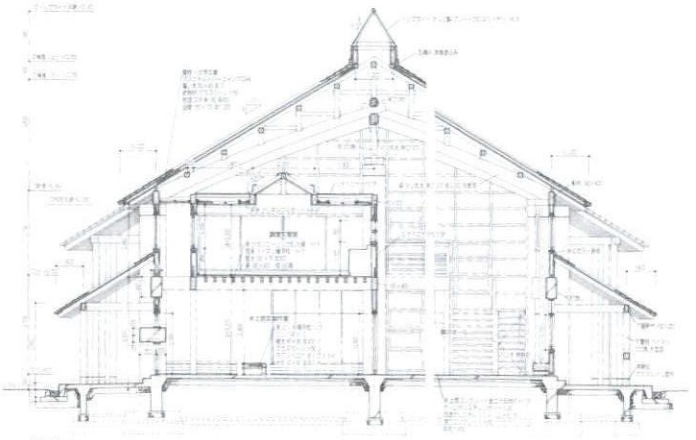
写真（左下、右）＝新建築写真部

過疎化によって廃校となった中学校の敷地に建つこの建物は、地元の人々の定着を図るための工芸の発展と、日常生活のアメニティを豊かにし、町としての文化性を高めて観光資源に資することを目的としてつくられたコンプレックスの要をなす。

建物のイメージは、大きな反りをもった屋根の納屋である。建物の平面を紡錘形にふくらませることによって、屋根にも自然なむくりが生まれ、空間的にも形態的にもゆったりした感じを出した。大屋根の下の空間にありがちな暗い雰囲気を避けるため棟にトップライトをつけて天空光を入れ、むくりをより強調する日本刀のような反りをガラスでデザインした。

内部には、全体を包む大きな納屋空間の中に文化活動の拠点となる木工、竹細工、石工のための小さなワークショップと研修室を配した。大きな家の中の小さなお家である。内部空間は、直裁な木による構成とモンドリアン風の面構成のイメージを重ねた空間構成とした。

所在地：栃木県那須町
建築用途：工房+展示場
共同設計者：
構造：RCおよび木造
敷地面積：29,635m²
延床面積：652.70m²
竣工年：1986年9月



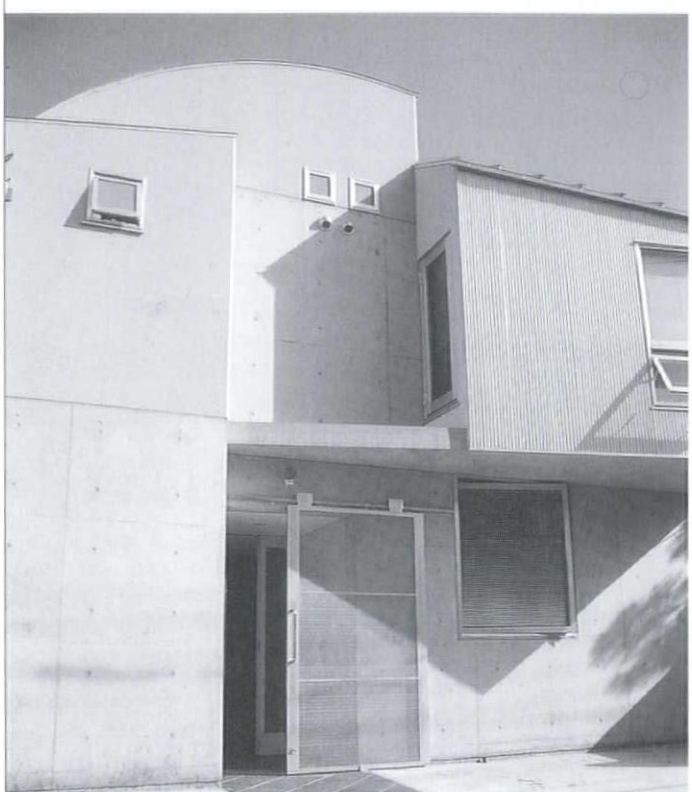
断面図

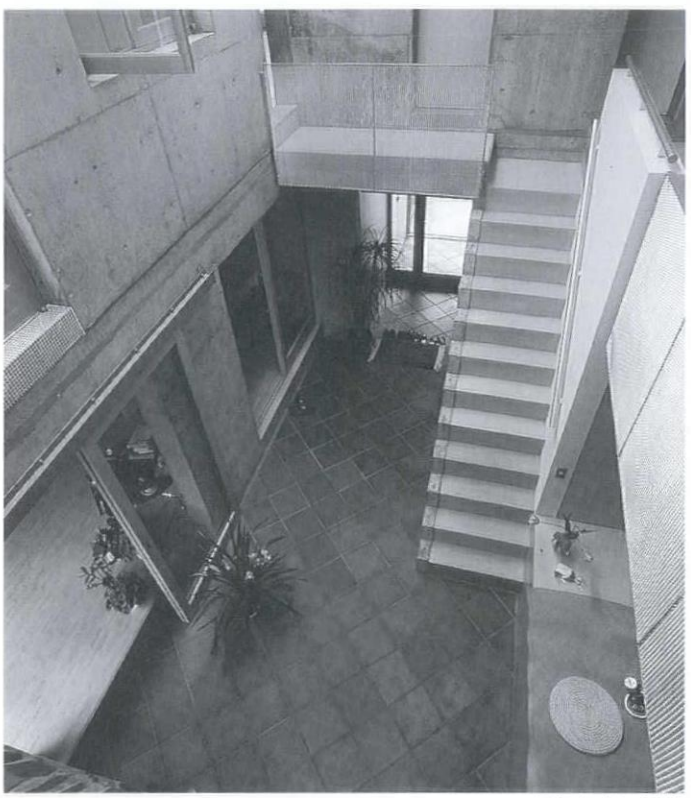
ながしま・こういち
1936年東京都生まれ。AUR建築・都市・研究コンサルタント主宰

なかむら・べん
1946年東京都生まれ。応募当時AUR建築・都市・研究コンサルタント取締役。現在（株）中村勉総合計画事務所主宰

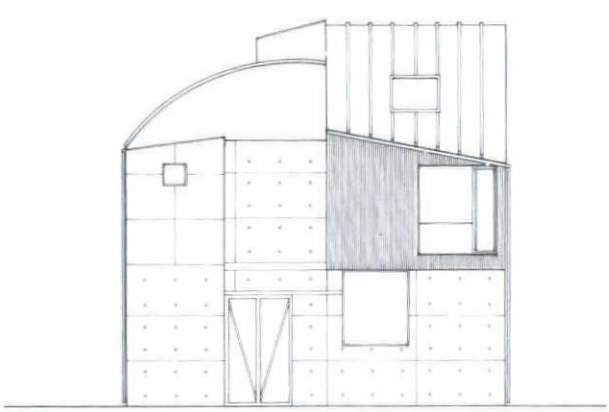
堀場 弘

堀場邸（永福の住宅）

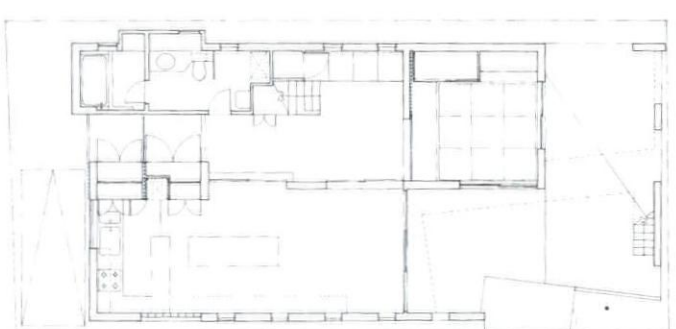




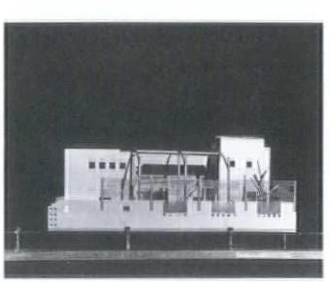
写真（上2点）＝堀場弘



立面図



平面図



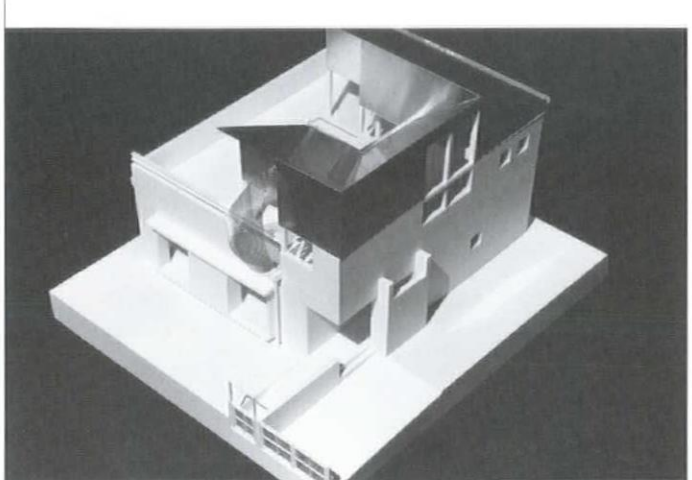
密集住宅地で敷地全体の建築化によって、広がりのある室内外にわたる空間を実現し、建築の重たい覆いを感じさせないような場所をつくろうとした。私にとってはじめての実現作品。当時、家族のさまざまな流動的な状況の中で住宅を建てなければならなかった。空間的な目標はこの入選ではっきりとしたが、施主として自分が家を建てるときの現実的な問題を設定することができず、案も紆余曲折、現場に入ってシーラカンスでの活動が忙しかったこともあって中断し、やっと実現した。そのあと一時家を離れていたが、97年に改築して2世帯住宅として住んでいる。吹き抜けはなくなったがテラスや屋上をつくった。この住宅からは多くを学んだ。様々な変化を受け入れるのが住宅であり、変化する生活に対応する部分を大きく包むような建築として成立するためのコンセプトが必要だろう。住宅は生活のリアリティとそれを飛び越えたフィクショナルな部分の両方あるのがいい。

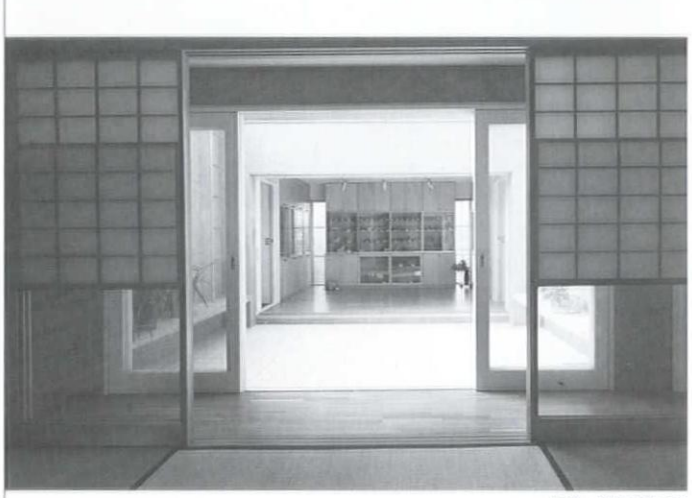
所在地：東京都杉並区
建築用途：個人住宅
共同設計者：COELACANTH ARCHITECTS
構造：RC一部S造
敷地面積：153.24m²
延床面積：約150m²
竣工年：1990年（1997年改築）

ほりば・ひろし
1960年東京都生まれ。応募当時COELACANTH ARCHITECTS共同主宰、東京大学大学院研究生。現在株式会社シーラカンス代表取締役

小川守之

北八朔の家





写真＝新建築写真部

鉱物標本室を持つ、父母と娘二人のためのセカンドハウスである。与条件はタイトで、平面を見ると施主の要求のこもっていない室はひとつとして存在しない。施主の求め、敷地条件その他の与件にキッチリと応じながら、空間としてどれだけ豊かな建築にできるかを考えると、一定の目的を持った「室」ではない、階段、廊下、屋根裏といった、補足的な内部スペース、そしてパティオ、テラス、庇下といった内部と外部の接点としての「中間領域」がひときわ大事なものになる。光と風を如何にパティオに導入するかと考えるうちに自然と、2階の配置や、屋根の形がきまってきた。この時とった方法は、与条件から導き出される形態は、如何に見慣れない形であろうと、できるだけそのままにすること。むしろクリシェに寄らないように注意し、与件を排除せずどんどん包摂するインクルーシブな方法である。この方法と中間領域の概念は、この後の普連土学園以降の設計に引き継がれた。

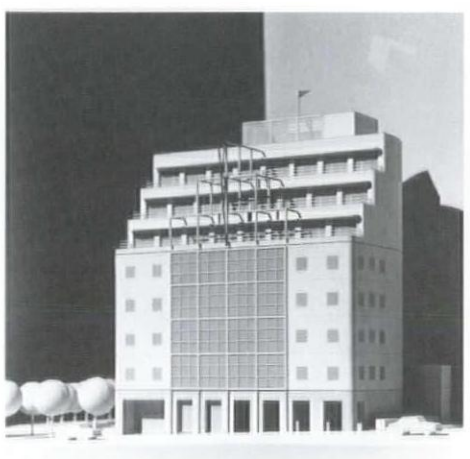
所在地：神奈川県横浜市
建築用途：専用住宅
共同設計者：小川光広、百田宣彦／百田構造設計（構造）、遠藤龍彦／TEC（設備）
構造：RC壁式+木造混構造2階建
敷地面積：193.257m²
延床面積：115.05m²
竣工年：1987年

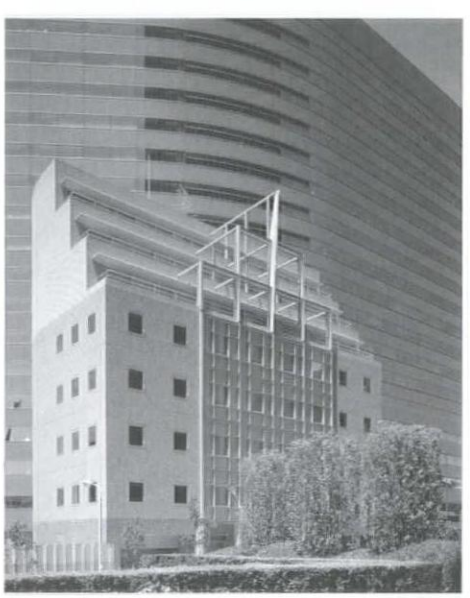
おがわ・もりゆき
1946年東京都生まれ。（株）小川守之建築・設計事務所主宰

鹿島建設建築設計本部

NO OTHER PLACE（商工会館・弁理士会館）

入賞





写真＝村井修

霞ヶ関ビル、新霞ヶ関ビル、特許庁総合庁舎などの巨大ビルに挟まれた変形の敷地の中で存在感のあるデザインを試みたもので、不利な設計条件を逆手にとって、周りの建物にはない、小さいが故に許される可愛らしさのようなものを持ち込んだ。モダニストの私にしてはめずらしく三層構成や正面性をテーマにして、周囲のメタルや石などの冷たい感じの外壁仕上げとの違いを強調するために土っぽい精せっ器タイルを工夫したり、玄関ポーチに大きなテラコッタを張ったりして頑張った。施主側のコンサルタントから効率一本槍の代替提案などが出されて実現が危ぶまれたこともあったが、高齢の施主会長が趣旨を理解してくださり励まされて、官庁街にしてはホットなインテリアのラウンジや会議室を備えた一味異なったオフィスビルが出来上がった。逆風が吹き荒れても、デザインの可能性をいつも忘れないことの大切さを教えてくれたプロジェクトでもあった。

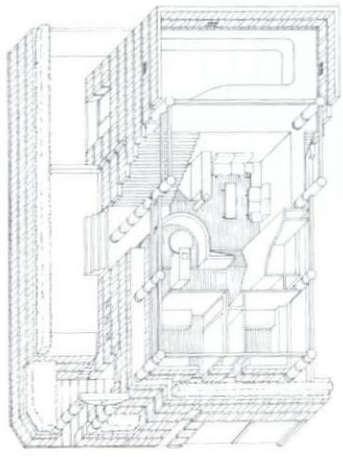
設計者：押野見邦英
所在地：東京都千代田区
建築用途：事務所ビル
協同設計者：北典夫／KAJIMA DESIGN
構造：SRC造
敷地面積：662m²
延床面積：5,083m²
竣工年：1988年

おしのみ・くにひで
1941年東京生まれ。応募当時鹿島建設設計部勤務。現在KAJIMA DESIGN勤務

北村陸夫

田口邸［アルミのカラス］（輝ける廃虚／T邸）







写真＝大竹静市郎

この応募案は、やや崩れた石造風の基壇（大地的なもの）、その上に浮かぶアルミの逆さかまぼこ屋根（天空的なもの）の二層構造をコンセプトにしています。

実はこの住宅、「不純な動機」かもしれませんが、SDレビューに出品のためにつくりました。施主は豪気な人で、他の建築家にも案を出させるし、予算は不明、敷地すら変わるという有様で、私ごときが勤まるわけないから、最後に出品用にと案をまとめました。

ところが、施主はこの案を大いに気に入り、これで行け！　すぐにやれ！ということになり、あれよあれよのうちに（散々苦労しましたが）、出来上がってしまいました。

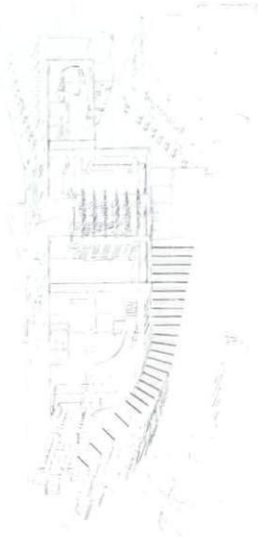
完成後の感想ですが、施主の気分を反映してか、力の入り過ぎが気になります。特に屋根の形など、もっと軽くしたかったのですが、施主の許しを得ることはできませんでした。結局、最初にプレゼンした通り、ほとんど変わらずに実現してしまったということです。

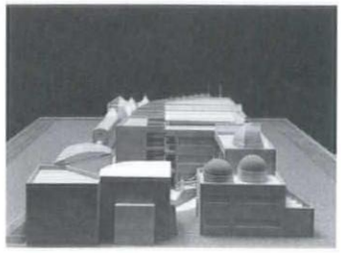
所在地：大阪府藤井寺市
建築用途：住宅
構造：RC+S造
敷地面積：441.81m²
延床面積：361.01m²
竣工年：1986年12月

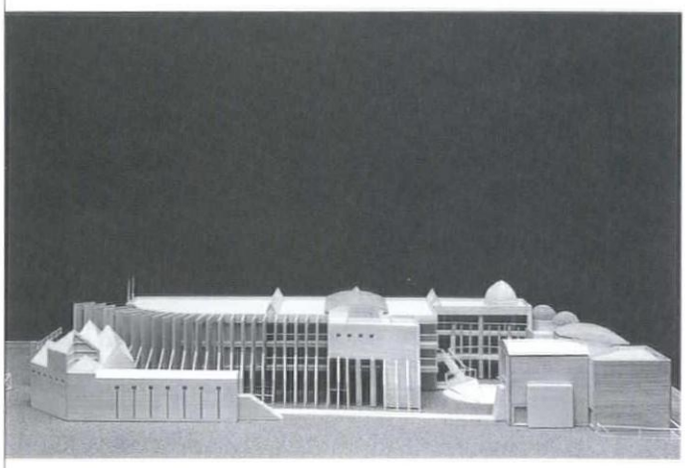
きたむら・りくお
1944年奈良県奈良市生まれ。ズーム計画工房主宰

久保清一

N.I.B.C.［Nara International Business College］







奈良国際ビジネス専門学校（N.I.B.C.）は、福祉系学科とスポーツ医療系学科の2部門より構成され、社会に開かれた新しい専門学校として構想された。古都奈良という歴史的環境を生かしながら、いかに現代というコンテクストを組織化できるか、がテーマとして選択され、時代精神を反映する現代建築の可能性が求められた。

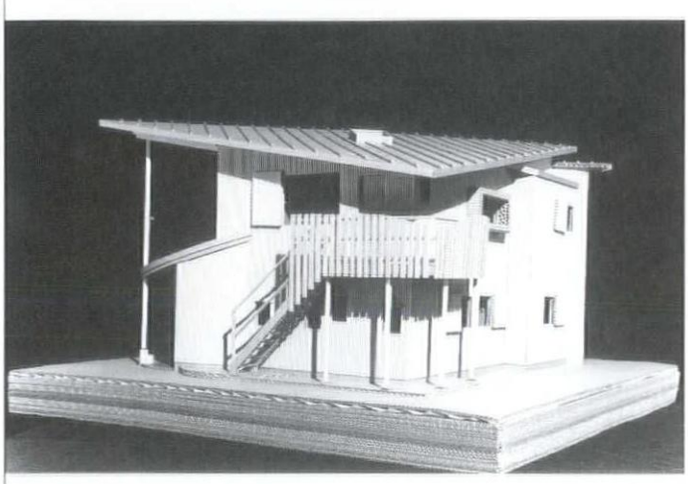
SDレビュー入選後、しばらくは順調にプロジェクトは進行した。基本計画、基本設計が完了し、実施設計に入る頃だろうか。経営組織側にいくつかの問題が発生し、設計の中止という事態になってしまった。決定的理由は、クライアントである学校法人となる理事会の解散である。当時はまだバブル状況下でなく経済も安定していたこと、また、既に幾つかの学校を運営していた施主であったことなどから考えても、私自身、中止のショックは大きく、しばらく床に臥せったことを今でも鮮明に覚えている。

所在地：奈良県奈良市
建築用途：専修学校
構造：RC造
敷地面積：4409.19m²
延床面積：2740.78m²

くぼ・せいいち
1953年静岡県生まれ。現在アルキービ総合計画事務所代表、大阪芸術大学助教授

七月工房

K-HOUSE（K-HOUSE　国分寺北町の家）





写真＝古館克明

幾何学的な三角形の組み合わせがこの住宅の骨組みを構成している。敷地の周辺環境、光や風の動き、人の流れ、空間と空間の組み立てを形にしていく中で生まれた線である。時間をかけて、身体的な動きが線を決め、小さな住宅の中に、いろいろな性格の場所をつくることを考えた。人の生活の場と深く結びついた形を求めた。

実施設計が終わり、着工後に現場の進行と並行して展覧会のプレゼンテーションの作業を進めるスケジュールであった。それは、現場に追われ、日々形を変えていく建築と向き合いながら、もう一度客観的に形の生まれるプロセスを見直す時間になった。

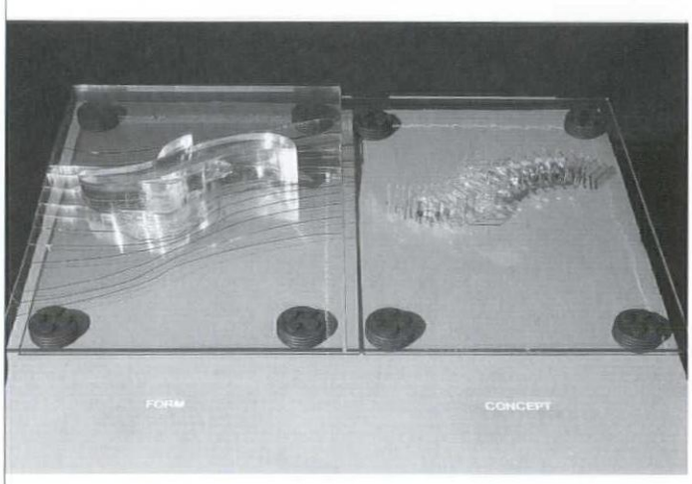
K-Houseの設計をきっかけに、住宅の設計が続いている。人の生活と結びつき、街並との接点をつくり、限られた条件の中でその場所を生かし、たくさんの人の出会いの中でつくっていくことが建築のおもしろさである。小さな建築が街を変えていく。

設計者：齊藤祐子
所在地：東京都国分寺市
建築用途：専用住宅
共同設計者：島田幸男、向井志郎、三友富士子
構造：木造2階建
敷地面積：359.27m²
延床面積：104.42m²
竣工年：1986年12月

さいとう・ゆうこ
1954年埼玉県浦和市生まれ。応募当時七月工房勤務。現在空間工房101主宰

鈴木エドワード+笹森則次

HASEGAWA VILLA 木漏れ日の影（SUPER VILLA II SERPENTE）





写真＝新建築写真部

スーパーヴィラセルペンテ
中軽井沢の鬱蒼とした森のなかにひそむように建つ比較的大きな別荘である。建主と親戚らが其々同時に分けて使えるよう、リビングを兼ねた広いダイニングルームを真ん中にはさみ、左右に各々のベッドルーム、そしてバス・トイレエリアが配置されている。この建物のへびのようなフォルムは、うねるような地形に馴染ませるということで自然に生まれ、決定した。この曲線を木造在来工法で生かすため、細いピッチの骨組みがへびの構造の如く現れている。樹木が茂るすきまから最大限日光を採り入れるため、南側全面は床から天井まで二重のミラーガラスで覆われている。晴れた日には、木漏れ日が光と影のいたずらあそびをするであろう。

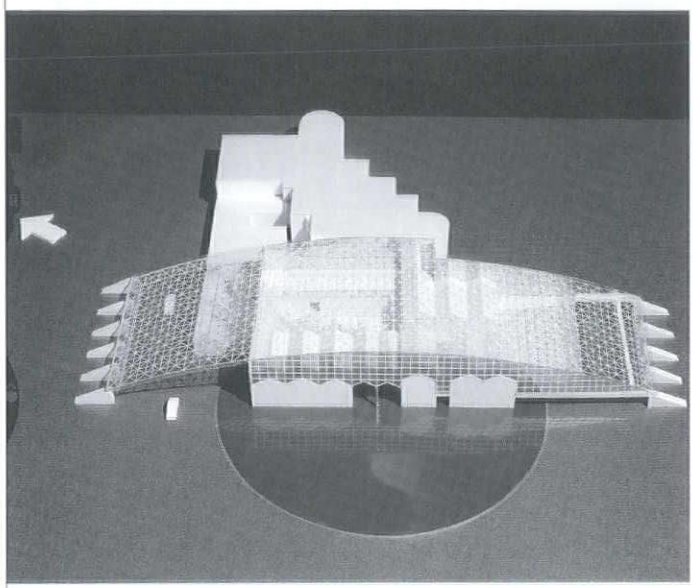
所在地：長野県北佐久郡
建築用途：別荘
構造：木造一部S造
敷地面積：29712.37m²
延床面積：392.29m²
竣工年：1987年8月

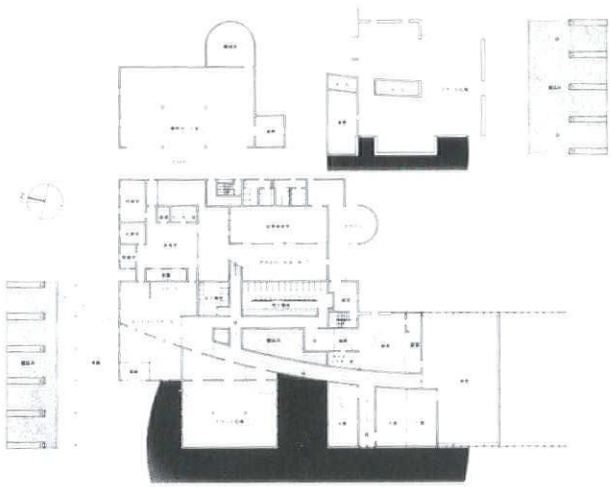
すずき・えどわーど
1947年埼玉県生まれ。鈴木エドワード建築設計事務所主宰

ささもり・のりつぐ
1954年北海道生まれ。応募当時鈴木エドワード建築設計事務所勤務。現在アトリエ斗人主宰

竹之内 一雄

坂径のあるクラブハウス





1・2階平面図

日本人社会では何でも金儲けが最優先する。ゴルフ場の開発も論外ではない。途中から交代した開発業者は、御多分にもれず「一流の建築家・一流の建設会社・一流の理事達」の名を連ね、ゴルファーの関心をひき、より高額の入会金を集めようという発想なのだ。そのような社会においては、僕のような無名の建築家でないほうが良いと思うのは当然だろう……。そんなわけで開発会社から断られた……。僕の代わりに設計を引き請けた建築家を恨む気持ちはないが、「礼節の欠如」に愚痴のひとつも言いたくなる。応募した作品〈坂径のあるクラブハウス〉は、「床・壁・天井で囲われた限られた室の集合」に、疑問を感じていた頃でもあったので、あのような表現になった。

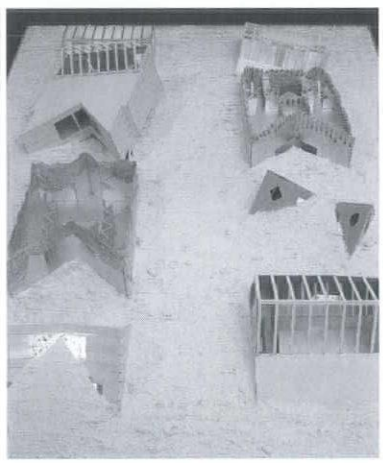
見せかけだけの名門ゴルフ場は倒産してしまった。

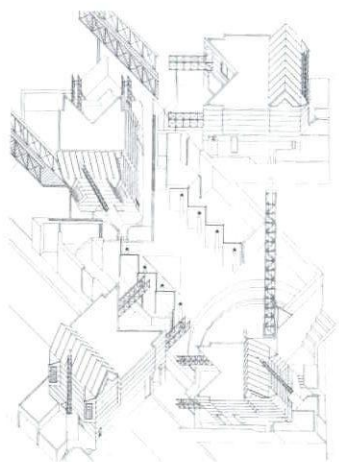
所在地：栃木県日光市
建築用途：専用住宅
共同設計者：遠藤剛+藤森裕治+石橋龍一
構造：西山正幸

たけのうち・かずお
1921年京都府生まれ。(株)竹ノ内一雄設計事務所代表

土井鷹雄

鎌倉の家





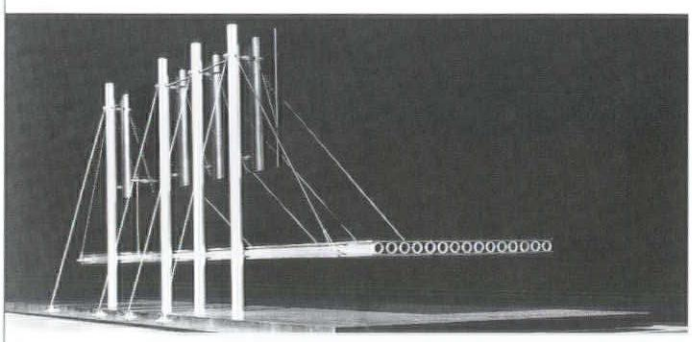
打ち合わせや、現場からの帰りがけに、由比ヶ浜の海岸に出てみる。そして、波打ち際に腰を下ろし、海と対座する。しばらくそうしていると、陽射しに露光されて頭の内側がからっぽになる。すると、アルベール・カミュの「わたしは海のなかに成長した。貧困はわたしにとっては豪奢であった。やがて、わたしは海をうしなった。すると、ありとある贅沢は灰色に見え、窮乏は堪え難いものに見えた。爾来、わたしは待っている。戻りの船、水辺の家、澄んだ日の光を……」といった言葉が脳裏を横切り、イメージを撹拌する。足許まで寄せては逃げてゆく波のように、定着しきれないイメージは白い泡をはじいて消滅しようとする。その瞬間にきらめく刹那的なイメージを掬いとって陽光にかざす。すると期待してもいなかったのに、イメージが波立ちはじめることがある。そんなとき、イメージに揺さぶられながら、イメージとは、強制的な自覚なのではないか、と痛感する。

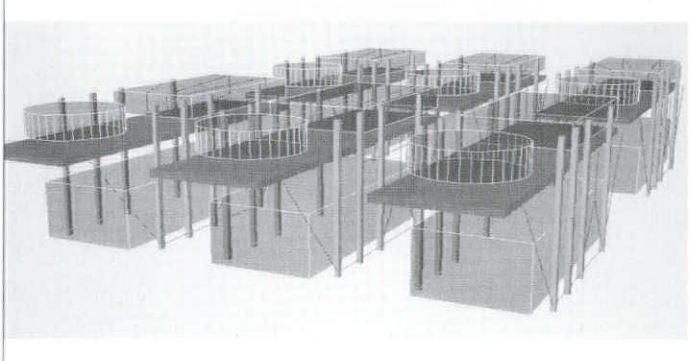
所在地：神奈川県鎌倉市
共同設計者：服部丈雄、依田メイコ、藤井洋一、斎藤誠
構造：木造
敷地面積：212.77m²
延床面積：140.63m²

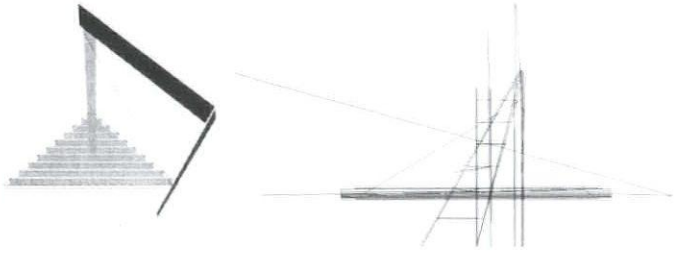
どい・たかお
1936年京都府生まれ。土井鷹雄＋アトリエ主宰

中込 清

K's Vacation House







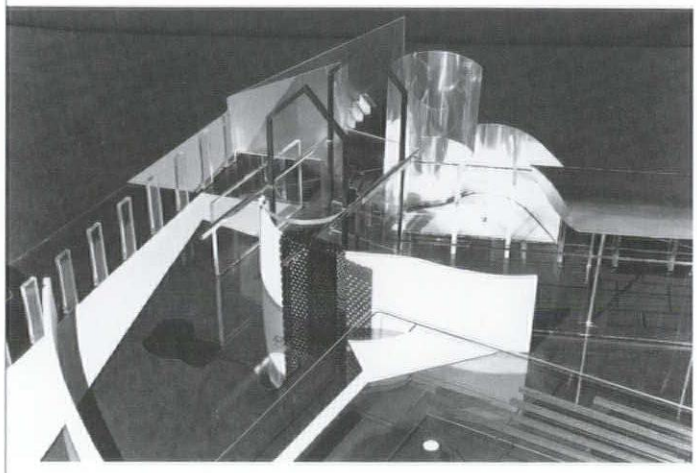
藤木川に沿ったゆるやかな南傾斜のサイトに対し、傾斜方向に水平に突き出したボイドスラブデッキを、約8本のGコラムで架構している。

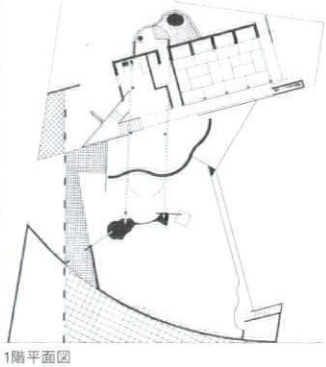
所在地：神奈川県足柄下郡
共同設計者：清原理
構造：S造、一部SRC造
敷地面積：1,167.53m²
延床面積：645.00m²

なかごめ・きよし
1947年千葉県生まれ。G Factory主宰。

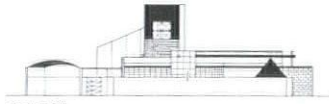
西岡 弘

杵築の住宅





1階平面図



北立面図



東立面図

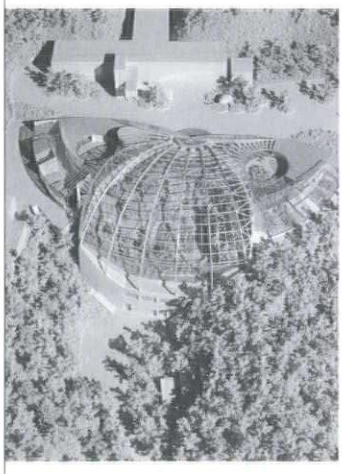
この計画は残念ながら、実現しなかった。理由は建築上の理由ではまったくなく、ご家族のご不幸による建設意志の喪失によるもので、なんともいたし難い理由である。自営されている産婦人科の病院を磯崎新氏に依頼する程の建築への理解のある方の住宅だっただけに、実現しなかったことは誠に残念であった。図面等古典的簡略的表現にもかかわらず、入選できたことは、それだけ計画そのものへの期待なり評価なりがあったのではないかと自負しているが、最近のレビューの表現力の多様性の中では、目立たない存在になっているのだろう。

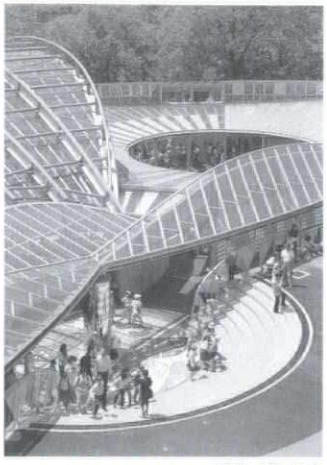
所在地：大分県杵築市
建築用途：住宅
共同設計者：増山幸雄
構造：木造一部S造
敷地面積：575.18m²
延床面積：138.15m²

にしおか・ひろし
1945年群馬県生まれ。(株)西岡弘建築工房主宰

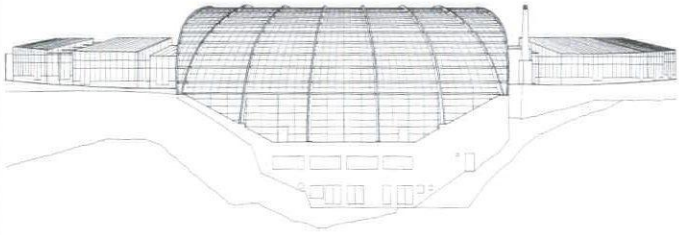
日本設計事務所

東京都多摩動物公園・インセクタリウム（昆虫生態園）





写真＝坂口裕康



「先生の家にはチョウチョウの孵化箱があって、ガやチョウチョウの幼虫をそこで孵化させてそれを部屋ぐらいの大きさの網でかこった、特別の花園にはなしてやるのです。その花園には、たくさんの草や花や、そのほか、チョウチョウの幸福のために必要なものが、全部備えられてありました」。ヒュー・ロフティング・ドリトル先生の一節だが、昆虫生態園は、これと同様に蝶の幸福のために必要な条件をすべて備えた、植物生態系を含めた自然を再現した博物館である。建物が完成し、大温室に百数十頭の蝶を飛ばした。これまでは約200m²の温室に百数十頭飛ばしていたので、大温室では全然目立たないのではないか、2000頭ぐらいは必要なのではないか、と皆考えていた。ところが蝶密度が低いにもかかわらず、個々の蝶がはっきり見え、小空間では飛べなかった大型の蝶も本来の飛翔をしだしたのである。これはこの仕事にかかわったすべての人達にとって新しい発見であった。（淺石優）

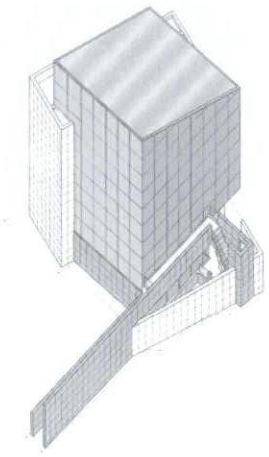
設計者：淺石優
所在地：東京都日野市
建築用途：昆虫生態園
共同設計者：愛植物設計事務所、鬼工房、プラントーク、白水社
構造：RC造+S造
敷地面積：52万3000m²
延床面積：2,486m²
竣工年：1987年12月

あさいし・まさる
1947年東京都生まれ。日本設計勤務

パルフィ・ジョージ

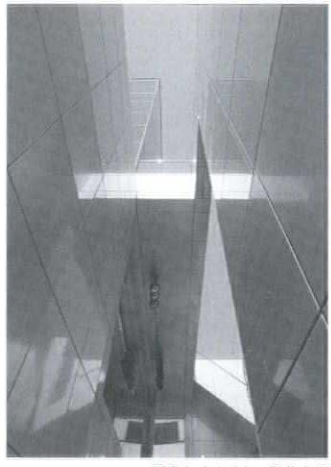
千歳ビルJ＆R　maison

朝倉賞









写真（3点とも）＝平井広行

千歳ビルは、私が事務所を始めてすぐに手掛けたビルで思い出深く、1988年に竣工した。

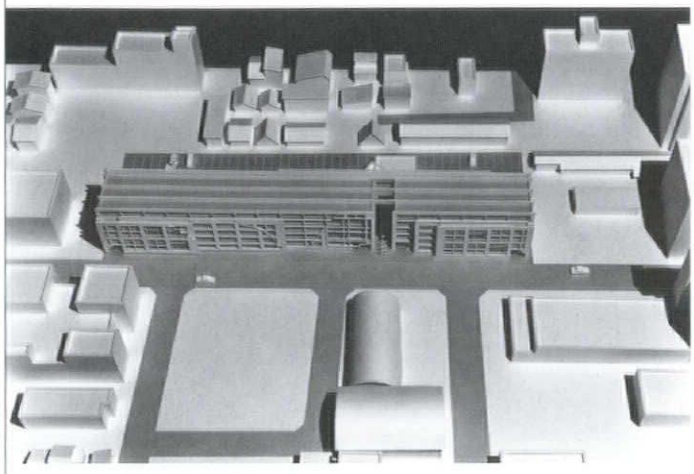
場所は、星条旗通りとそれと交差する細長い路地の角に位置する。この立地を生かしていくために、ふたつの軸にふたつの箱を沿わせるように置いた。ひとつの箱は石炭の箱と呼び、固く、重く、暗い箱だ。もう一つは、ダイヤの箱で柔らかく、軽く、明るい箱だ。このふたつの軸に、ふたつの異なる要素を組み合わせ、このビルを考えて進めていった。当初は、星条旗通りから石炭の箱がメインとして見えるファッションビルとなる予定であったが、予定は覆され、中身であるファッションビルとしての機能が変更され、それに伴いダイヤの箱が星条旗通りから顔を覗かせることになった。

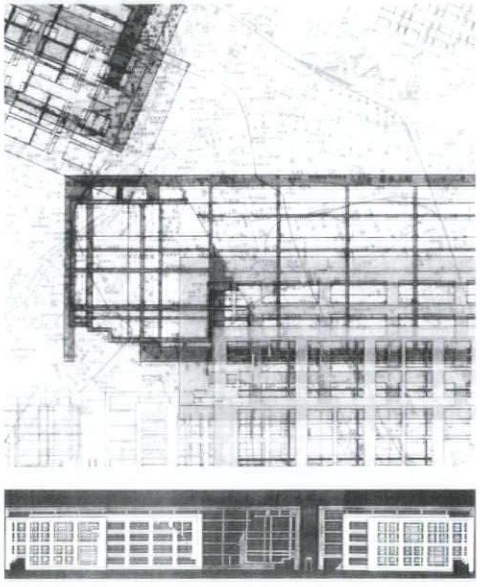
所在地：東京都港区
建築用途：商業施設
設計者：樋口久吾／ヒグチアソシエイツ、松岡豊彦／MAC設計コンサルタント
構造：S造
敷地面積：334.41m²
延床面積：1,049.88m²
竣工年：1988年9月

Pálffy György
1952年ハンガリー、エゲール市生まれ。応募当時（株）アーチ・ストラクチャー代表取締役。現在（株）パルフィ総合建築計画代表取締役

堀池秀人

札幌集合住宅





建築作品は一般に、出来上がると同時に設計者の手を離れ去っていく。完成した満足感や達成感と引き換えに、別れを想わせる何とも虚しい瞬間が訪れる。こうした作業を繰り返すことになる建築家にとって、自分の作品とは、手元に残っているドローイングや模型だけなのかもしれない……。そんなことを考えている頃にSDレビューが始められた。自分たちが普段アトリエで考えていることをかなり忠実に表現したもの（ドローイングや模型）を、実施の前に第三者の眼差しでレビューしてもらえるということに価値と意義を見出し、応募させてもらった。残念ながらこの作品は、同じ施主が近くに計画しようとした大規模店舗が違う場所に変更になったことの煽りを受け、無期延期のまま今日を迎えている。完了した実施設計図書が出陣を待ちながらアトリエの図面庫に眠っていることを思うときすがにえもいえぬ寂しさは払拭できないが、手塩にかけた愛娘を嫁がせる父親の心境のような、竣工時のあの別れを想うと、これもハッピーケースなのかしら、とも思う。

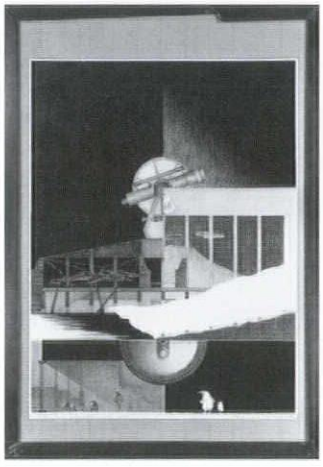
所在地：北海道札幌市
建築用途：集合住宅
共同設計者：吉田博、蔵島二三、山田達／(株)堀池秀人都市・建築研究所
構造：RC造
敷地面積：3,919.06m²
延床面積：7,074.26m²

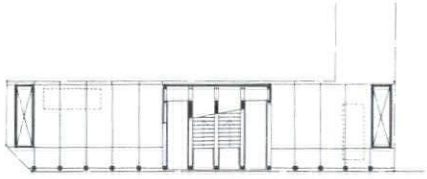
ほりいけ・ひでと
1949年長崎県生まれ。(株)堀池秀人都市・建築研究所主宰

吉田保夫

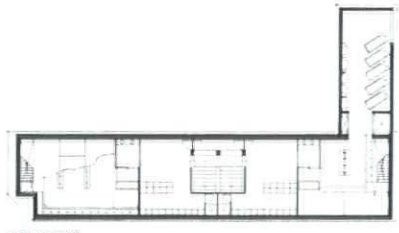
銭湯・カタコンベ——第2期工事

大阪賞

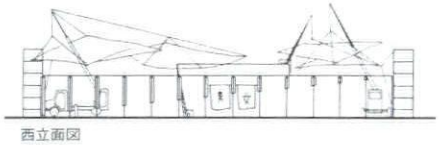




1F平面図



地階平面図



西立面図

かつてのパブリックバス計画の実例からは、なんとおそまつなものに見えるだろう。情報交替と称するシステムのかけらも設けていない。ここ大阪は今、銭湯の改築・改造・増築がいたる所で行われている。そのすべてがサウナや電気バス、ラドンバス、スチームバスと、それはそれは一見楽しいものである。そうしたバラエティー銭湯からは、なんとおそまつな銭湯だろうか。今までのものと少し違うのは、子供達が男・女ブロを行きき出来る通路にそった子供達だけの浴槽が計画されているのと、生理日の彼女達が1人1人の自己管理する5つの洋風バスタブが用意されているだけだ。ピロティーになっている1階部分（高さ6m）には、スクラップのクレーン3台が固定され、風でなびくシートが吊られその下に、10台の屋台（メキシコ、イタリア、インド料理等）がバラバラ置かれているだけだ。一生、銭湯通いする人達のためにこの銭湯は出来ている。

所在地：大阪市南区
共同設計者：末松利紀、岩下次幸、柳尾浩、河北みちる
構造：RC造
敷地面積：220.93m²
延床面積：441.86m²

よしだ・やすお
1947年佐賀県生まれ。吉田保夫建築研究所主宰

SDレビューの軌跡：1987–90年

飯島洋一

1987年から数年間、建築の世界では、あからさまなまでにポストモダニズムであった。しかも悪いことに、槇が82年の座談会で言っていた、「ずいぶんみじめなポストモダニスムの建物もありますから」という皮肉のこもった発言が、あたかも後年へさまざまな意味でのより鋭い予言とでもなったかのように、それは実際に拡がっていったのである。「SDレビュー」の出品作も、例外ではなかった。この時期には、確かに質の高い作品にも恵まれたが、いま見てみると、「ずいぶんみじめな」この時代のありさまを露呈したものもそこには含まれていたといわざるを得ない。

私がここでいう「ずいぶんみじめな」というのは、「バブル経済」に煽られたかたちで、せっかちにデザインされているものや、そうした波に歩調を合わせただけの作風を指している。比較的小規模な住宅などが多かった80年代当初に較べ、軒並みに大規模な作品が続々と出品され出したのも、ちょうどこの時期からである。「SDレビュー」に関心を寄せていた人は、確実に状況が変わってゆくのを肌身に感じたに違いない。

たとえば88年に〈かもめ荘増改築〉(89年竣工)でも入選する青島裕之の、87年の〈金竜音楽ホール〉は、いささか時流に乗りすぎたポストモダニズムという嫌いがある。デザインの、表層主義に走り過ぎているのである。しかしこの時代の特徴を鋭敏にとらえていたという意味では、このギリシア風の神殿を頭上にのせた装飾的なこの作品は、いま見ても興味を感じさせる部分がないわけではない。この表層主義は、後にポストモダニズムとバブルの終焉を見事に演じた、1991年の丹下健三の〈東京都庁舎〉を予感させるようなクラッシックなイメージを既に内包しているからだ。

いずれにしても、このバブル期を、一気に突き抜けた建築家は、ナイジェル・コーツをおいてほかにはいないだろう。コーツは87年に弾設計とともに〈ノアの方舟〉を、また88年にはブランソン・コーツ・アーキテクツ＋弾設計で、〈The Wall〉を出品した。これらは後に、〈ノアの方舟〉として88年に札幌で、〈ザ・ウォール〉として90年に東京の西麻布で、それぞれ完成している。

ナイジェル・コーツに触れる際には、二つほど指摘しておきたいことがある。一つはこの作品の両方を、シー・ユー・チェンがプロデュースしていたということであり、またもう一つは、この頃はナイジェル・コーツばかりでなく、実に多くの外国の建築家たちが日本で自作をつくり続けていた時代であったことだ。

この二つは、実はこの時代の特質といえるものである。前者はいわゆる空間プロデューサーが活躍したという意味であり、後者は日本が彼らの市場になり、同時にそれによって、日本の都市がイギリス、アメリカ、オランダ、スペイン、イタリアなど、さまざまな国の建築家たちが自在に自分たちのデザインの実験を勝手気ままにやってしまい、結果として日本の各都市が、「無国籍」なものになりつつあったことであった。とりわけ後者の例として、フィリップ・スタルクの1990年の〈アサヒビール吾妻橋ホール（スーパードライホール）〉を思い出さないわけにはいかない。

黒い台座の上に金色の「泡」がたなびくこの建物は、ビアホールという機能を持っていて、内部もビールの「泡」を模したような柱がデザインされている。これはまさにバブルという「泡」を、この上なくあからさまに表現した、バブル期を代表する建築なのである。ここに見られるナンセンスは、80年代の「虚構」のあり方を、これ以上にないほどに代表するものといっていいだろう。

さて、ナイジェル・コーツの作品だが、二つの作品は、「SDレビュー」当時のドローイングや模型を見る限りでは、ほぼ同じかたちで実現したようである。そしてそれらは、かたちは全く違うのだが、根本的な思想は、全くといっていいほどに同じ視点に基づいている。

まず〈ノアの方舟〉について、作者のコーツはSD誌上で、ある「物語」を提示し、それを建築化して見せたことを説明している。それはこんなふうな物語だ。

「約1万年前、1隻の船が岩の上に取り残されてしまった。幾年かの年月が過ぎ、この木の船は石化し、一つの大きな岩山となった。そして、その岩山の下部を掘って造られた部分が1階のカフェとなり、岩山の部分が2階のレストランとして構成されている。これがノ

第2章

疾走するイメージと表現

1987年 - 1990年



1987年会場　ヒルサイドプラザ



1989年会場　ヒルサイドプラザ



1988年会場　ヒルサイドプラザ

アの方舟のコンセプトである」。

つまり、コーツのこの建築は、旧約聖書という「物語」を建築化したものなのだ。しかもそれは、旧約聖書にかかわりながら、表層以外はそれとは何ら深い意味で結ばれていないという虚構性を演じている。コーツの建築は、いわば虚構の舞台ともいえ、そこで人々は、何かを演じる役者となる。日常が徹底して演劇になる。彼の作品はそのための舞台だと言ってもいい。

似たようなことは、〈The Wall〉にも別様に示されている。ここでもまず、「SD」誌上のコーツの説明を聞いてみよう。

「ビルのコンセプトは、記念碑的なバランスを持つ壁のまわりを循環している。ローマ時代の人々により造られたかもしれない壁、石の壁に巨大なアーチ、一つの都市をとり囲んでいたかもしれない壁。

しかし、ローマの廃墟とは異なり、この壁は時代を経ていながらも、現在もまだその建設は続けられている」。

ここでは「ローマ時代」が「物語」である。この建築は、完成作品を見るとよくわかるが、はじめから壁の一部が廃墟のように剥がれ落ちたデザインがなされているのである。完成したばかりなのに、既に多くの「時間」が過ぎ去ってしまったことが語られる。しかもそれを裏から強調するように、壁には、それぞれが別の時間を示した、大小7個の「時計」が取りつけられている。ここで演じられているのは、もはや明らかなことだが、時間の「虚構化」なのである。

つまりコーツの建築の前では、私たちは、日常というものをことごとく剥ぎ取られてしまうのだ。日常とは、「現実」の一つの現れである。いい換えれば、コーツの建築は、この「現実」を私たちの手元から、はるかかなたに追いやること、さらにはその代わりにつくりものの世界を提供することをそのデザインで実践しているのである。こうして彼の建築もまた「虚構」そのものとなり、「現実」との回路を切断する。もはや「理想」という言葉は、この段階では死語に近いといっていい。

そしてこうした虚構の建築がつくられたのと、まさに完全な虚構である〈東京ディズニーランド〉が既に1983年に浦安にオープンしていたことは、決して偶然の出来事ではない。「リアリティの『脱臭』」は、確実にいろいろなところで日本の都市を覆いつつあったのである。

一方、そのような「リアリティの『脱臭』」は、コーツとは別個の在り方で、「SDレビュー」の出品作に見ることができる。たとえば88年の〈Platform I, II〉(Iは88年、IIは90年に竣工)や、90年の〈再春館製薬所レディス・レジデンス計画〉(91年竣工)、それに91年の〈N邸〉(92年竣工)の、妹島和世の作品には、新鮮で軽やかな空間ばかりでなく、見田宗介のいう「リアリティの『脱臭』に向けて浮遊する『虚構』」が、コーツとは全く別様に実によく示されている。とりわけ、〈再春館製薬女子寮〉の室内に拡がる生活感の希薄さは、虚構が既に時代の中に奥深く浸透していることを、改めて感じさせる。

また88年の〈IN-EX〉、89年の〈ORE X〉、90年の〈Jelly Fish〉、91年の〈LAGOON〉と連続入選をした渡辺誠は、その最も強烈な機械の破片の集合体〈青山製図専門学校1号館〉を90年に完成させ、80年代の「虚構性」を徹底したかたちで表出することになる。

さらに87年の、隈研吾の〈伊豆の風呂小屋〉も、先のコーツの線上に一応は属する作品といえる。88年に篠原聡子と共に完成させたこの建築は、バンコクのスラム、数寄屋、桂離宮などを引用しながら、いわゆるポストモダニズムの建築の一つになり得ている。ただ隈の場合、コーツや他の建築家たちとは違って、この虚構の時代のナンセンスさに、かなりはっきりとした自覚を持って対していたことに注意を向けておく必要があろう。いまから思えば、隈はこの難しい時代とつかずはなれずといった離れ業をやってのけたのである。

隈研吾のポストモダニズムは、91年の〈ラスティック〉、〈ドーリック〉、〈M2〉などにより、拡大化したかたちで展開されることになるが、それはことデザインとして見れば、ほぼ同じ時期に完成した丹下健三の〈東京都庁舎〉とともに、バブル経済の終わりをも見事に示したものだった。

●いいじま・よういち／建築評論家、多摩美術大学助教授

「新しさ」への問いかけ

SDレビューチューリッヒ展：1988年

原 広司

1988年SDレビューの展覧会が、チューリッヒ工科大学(ETH)で、昨年の12月1日から開催された。東京、大阪、金沢についで行われたもので、SDレビューにとっては初めての海外展であり、意義深いものがあったと思う。

初の海外展が実現した背景には、多くの人々の尽力があったが、特にフグラー氏夫妻の力が大きかった。私もたまたま、フグラー氏夫妻に招かれてSDレビュー展の開催日にETHでレクチャーしたこともあって、SDレビュー展の印象などを簡単に報告してみたい。

チューリッヒ工科大学では、クラメール教授が受け入れの責任者になって下さり、留学している垂井洋蔵、石川高専助教授らに実際の作業を分担していただいた。会場は大学のロビーの一画で、たいへん美しいプレゼンテーションがなされていて感激した。ひとめで日本から来たデザインの展覧会とわかるしつらえで、準備にあたって下さった方々はたいへんだったと思う。レクチャーのあとで、学生たちを交えて簡単なパーティが、展覧会場で行われて、多少学生たちの意見を聞くこともできた。

ただ、私が聞くことができた意見や、私が観測した助手や学生たちの反応などは、極く短時間であるので、正確な反応をとらえるという意味では、垂井氏の感想を求めるのが妥当ではないかと思う。

チューリッヒでの反応を、ひと言で要約すれば次のようになるのではないだろうか。その第1は、日本からなにか不思議なデザインの一群がパッケージで配達されてきたという驚き。その第2はこれら一群のデザインは理解しがたいものである。展覧会のオープニングでの印象であるから、時間が経ってゆくにしたがって反応も変化していったにちがいないが、当初の学生たちの反応はそのようなものであった。

昨年度のSDレビューの作品群は、講評でも記したところであるが、ある平均的な水準を示してはいたが、飛び抜けて新しい作品は見あたらなかった。その意味では、「一群の」といった印象を強く残したことは否めない。ただ、ヨーロッパ、特にスイスのデザイン状況を理解しておく必要もある。

たとえば、チューリッヒを歩いても、ポスト・モダンのカテゴリーに入りそうな建物には出会わない。列車の窓から見る風景にしても、かつて私たちの年代の者が30年ほど前に憧れの目でみた近代建築が見出されるだけである。大学のキャンパスにしてもしかり。

私が受けた質問といっても、相も変わらぬ「日本の伝統はどうなったのか」という内容が多く、この種のディスカッションには加わる気にもなれないというのがいつわらざるところである。つまり、状況はまったく異なっているのである。したがって、なにか奇妙なエネルギーが送り届けられたというイベントとして、なかなかよかったのではないかと、個人的には感じている。ただ、一方において、いまや異なってしまったヨーロッパといえども、先鋭的な創意ある建築家たちが居て、日本の若い建築家たちもそうした指導的な建築家たちが生みだすイメージに依存している点は、忘れてはいけない。もし、そういったお手本がないとすれば、学生たちの反応も、もっと素直である筈だ。

何人かの学生たちと、2日にわたって話す機会を得たが、そうした意識的な学生たちにとっては、日本はかなり魅力的であるようだ。ただ、それもSDレビュー展がそのまま魅力をもっているということではない。

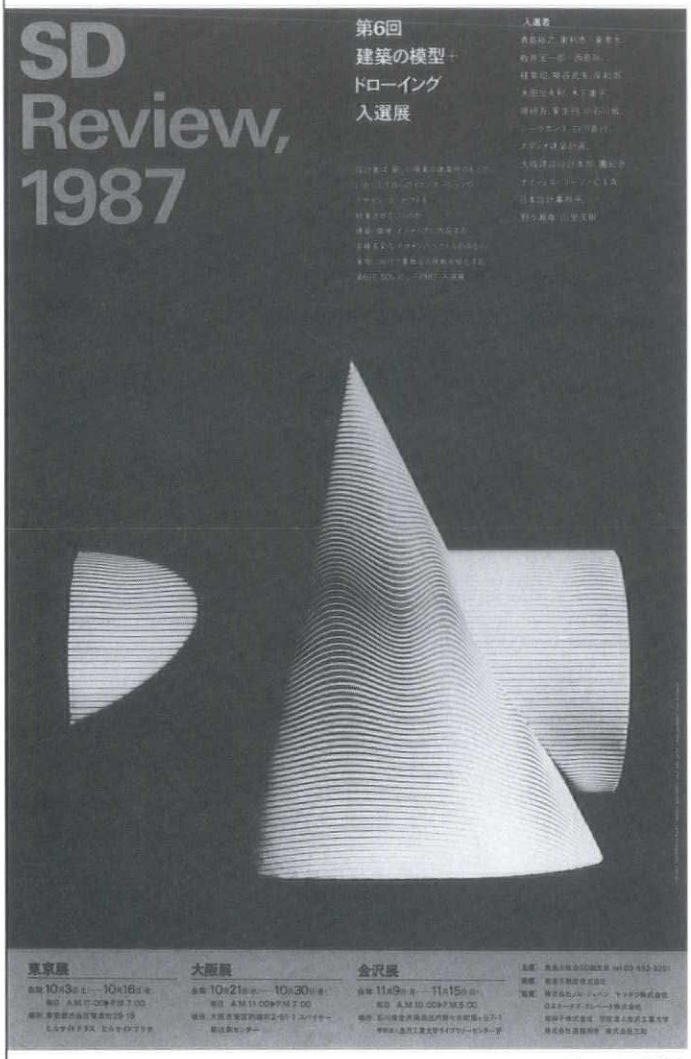
たまたま今回は、スイスの他スペイン、イタリア、ドイツで講演してきたので、改めて日本の建築家はめぐまれていると痛感した。やはり、これはまたとないチャンスなのである。ETHでも、若い建築家たちが機会にめぐまれていることに対する驚きを聞かされたし、これはアメリカでも常に聞かされる見解である。若い世代に限らず、このチャンスを最大限に活かすべく努力しなくてはいけないし、やはり独創性を一義におく価値観を身につけなければならないだろう。

いまはなかば引退のかたちのロート教授に学生たちとともに招かれて、彼の家を飾る数々のコルビュジエのスケッチを見てきたが、特に私が感動したのは、ワイゼンホーフのジードルンクの建物の色彩を指示するために現場のロート教授に送られてきたカラーサンプルのメモである。それは、1枚の絵画のようであった。やはり、あのようなメッセージを輸送しなくてはならないのかと、感嘆したり反省したりしたのだった。なにはともあれ、ひとつの交流がなされたが、海外の若い建築家たちの動きを迎え入れるような努力も欠かすことはできない。(SD1989年2月号より再録)

SDレビューの選出をお手伝いしていて感じたのは、新しい感性を持った人々が現われてきたことです。世代が新しくなるのを確認するための機会として、私自身にもたいへん意味があったと思います。SDレビューの意義が、「新しさ」を浮上させるところにあるとすれば、なぜ、どの点が新しいのか、いま少しその場で検討してみるべきだったかとの反省も残ります。私の場合は、直感的な「新しさ」についての判断が、その後のそれぞれの建築家の展開によって知ることができたと思われますから。若い建築家にとっては、具体的な設計の条件は、概して良好であるとは言えません。ですから、苦しさと「新しさ」が重なっています。その状態が魅力をもつのですが、「新しさ」を抽出し、それを言葉のレベルでもある程度表示できるようにすること。それが建築の設計活動をオープンにしてゆく道にもつながってゆくと思われます。ただ、建築家は自分でもよく理解していないことを、直感的判断のもとに実施しているのですから、現在の方式を継続することがもっとも意味深いと思われます。今日、いきいきとして活動している建築家たちのほとんどが、SDレビューを通過してきていることを考えますと、その存在理由は明らかなのですから。

●はら・ひろし／建築家

第6回　1987年



デザイン＝工藤強勝

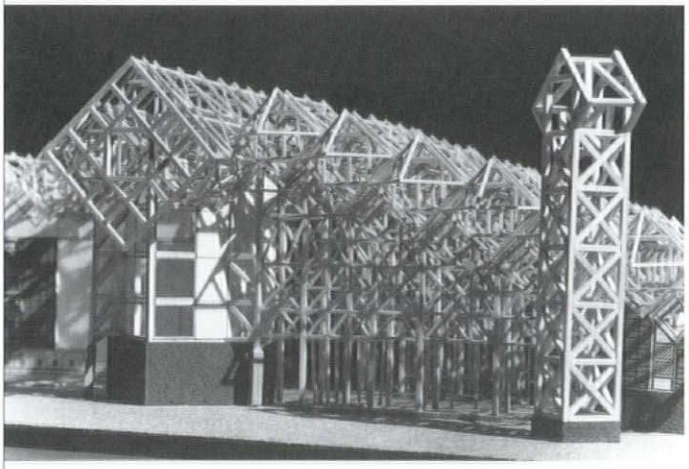
東京展：10月3日～10月16日
会場：ヒルサイドプラザ
大阪展：10月21日～10月30日
会場：都住創センター
金沢展：11月9日～11月15日
会場：金沢工業大学ライブラリーセンター
金沢展イベント：原 広司講演会
審査員：原 広司、木島安史、鈴木博之、竹山 聖
応募総数：132作品
入選数：20作品
受賞者：
栗生 明（鹿島賞）
桂 英昭（朝倉賞）
シーラカンス（SD賞）

青島裕之　金竜音楽ホール
東 利恵／東環境・建築研究所+東 孝光　大原のアトリエ
板井宝一郎+西島 裕　COMPLEX IN YOKOHAMA
桂 英昭　木魂館　MoCCON KWANN
神谷武夫　クロイスター［小川邸］
岸 和郎　世界歴史都市博イベント・ゾーン
木田加夫利　金谷邸
木下庸子　湖畔の住宅
隈 研吾　伊豆の風呂小屋
栗生 明　カーニバル・ショーケース
小石川 敏　もくちんあぱるとまん
ナイジェル・コーツ+弾設計　ノアの方舟 L'ARCA DI NOE'
シーラカンス　GIMMICK［共同計画ビル］
白川直行　金属の茶室
スタジオ建築計画　コスモ池上7
團 紀彦　SPACE J-5
日本設計事務所　成増駅北口再開発事業
野々瀬 徹　ジャストシステム本社屋
前田紀貞／大成建設設計本部　関屋ビル
山里茂樹　蜂塔［K邸］

桂 英昭

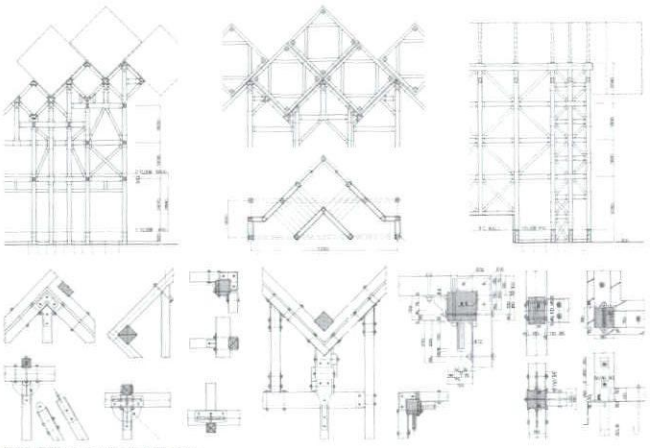
木魂館　MoCCON KWANN

朝倉賞

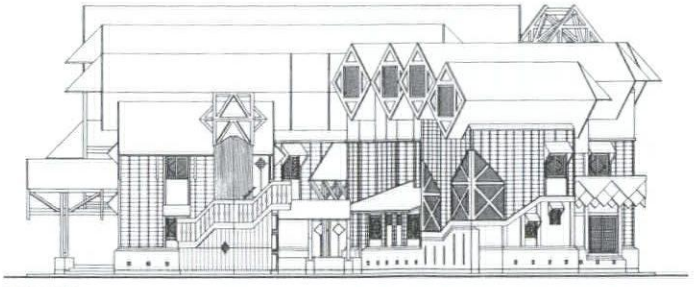




写真＝堀内広治



骨組構成取付け工法詳細概念図

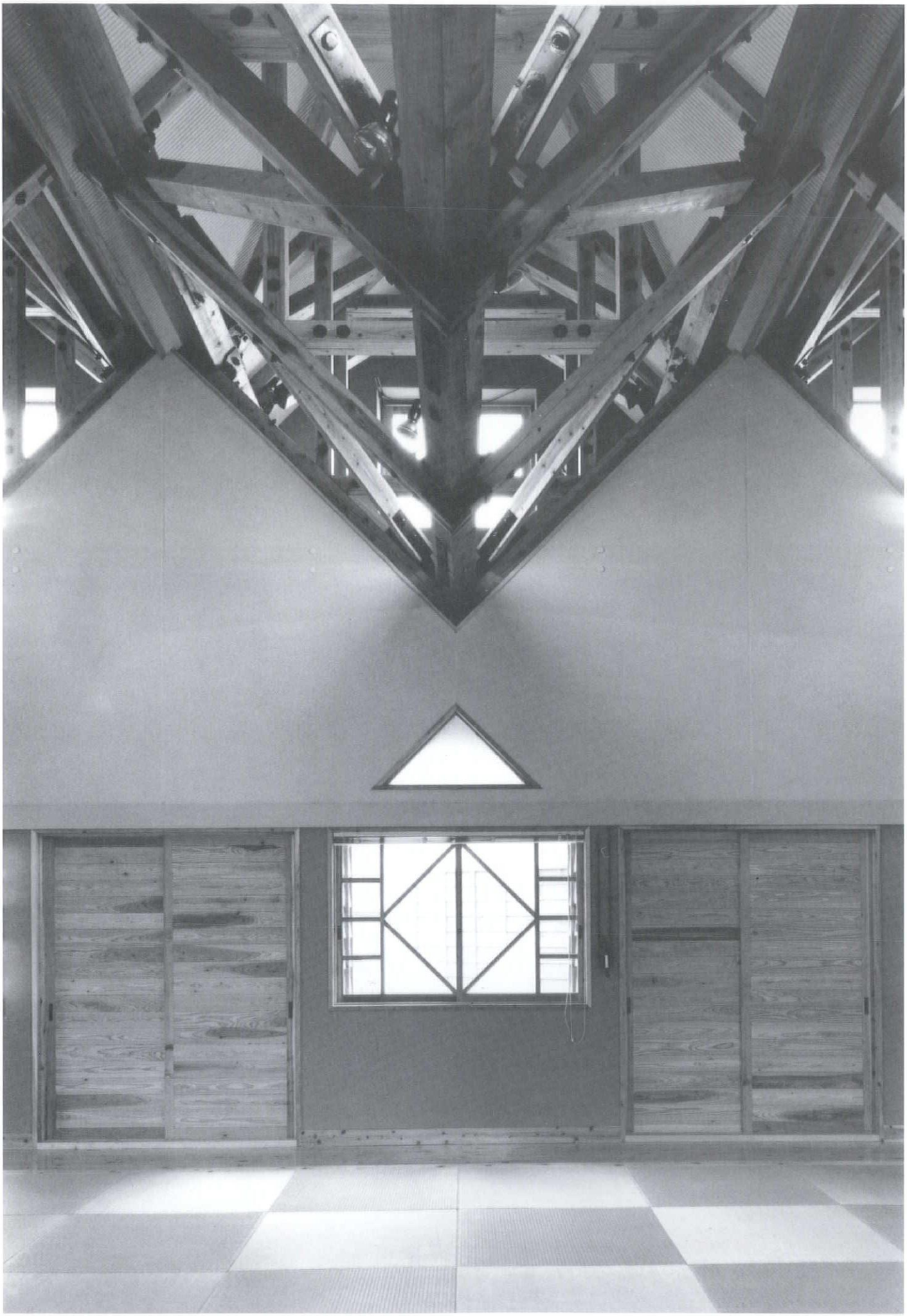


南東立面図

在来構法の延長上にありながら斬新な木造建築の可能性を追求し、伝統的な技術の継承と林業振興を目指すためのプロジェクトであった。新しく開発したBOX梁や自由な柱間を採用した列柱は、平面計画と各空間に豊かな変化を与えるだけでなく、施工法や技術開発において多くのチャレンジを求めるものとして考えられた。SDレビューの応募は、計画段階からの過程を視座の一つに加えて作品を評価するという、これまでにない新鮮な主旨と審査員の顔ぶれに賛同してである。結果的に朝倉賞をいただいたことは、その後の実施設計や施工において大きな励みになったことは言うまでもない。実施においては、予想を上回る課題が次々と生じたが、SDレビューの評価を実作としてクリアできるレベルを確保することができたのではないかと考えている。現在もこの木魂館を中心に、途切れることなく周辺のプロジェクトを手掛け続けることができるのはたいへん幸運なことである。

所在地：熊本県阿蘇郡
建築用途：簡易宿泊所付研修施設
共同設計者：設計計画石丸事務所、村橋久昭（構造）
敷地面積：1,974m²
延床面積：970m²
竣工年：1988年

かつら・ひであき
1952年福岡県北九州市生まれ。応募当時国立八代工業高等専門学校所属。現在熊本大学工学部環境システム工学科建築系所属

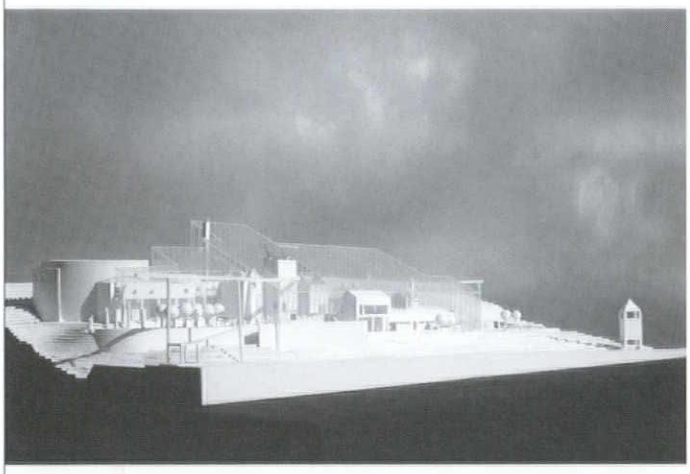


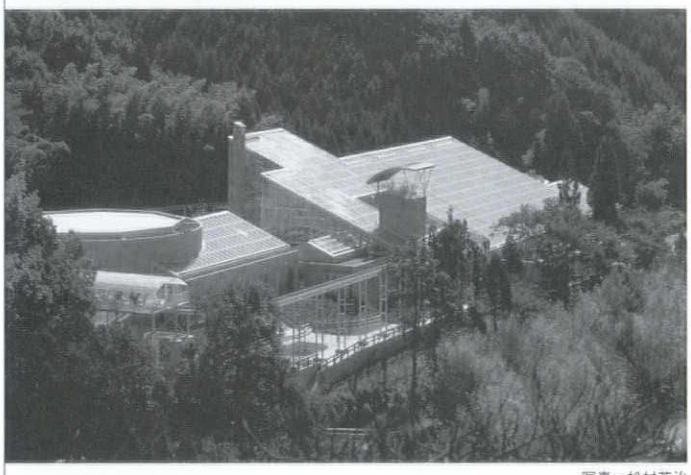
写真＝堀内広治

栗生 明

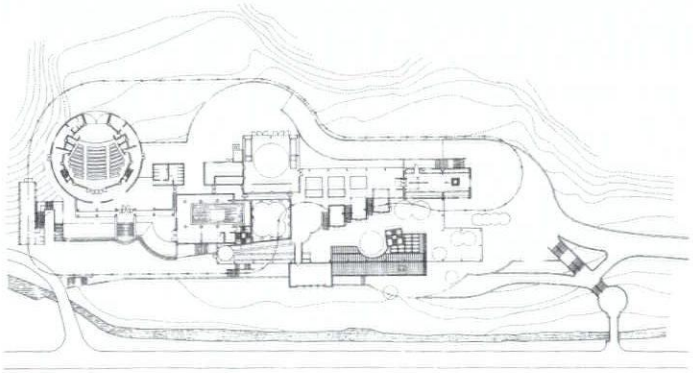
カーニバル・ショーケース

鹿島賞

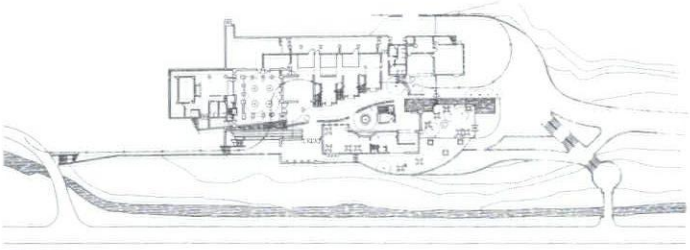




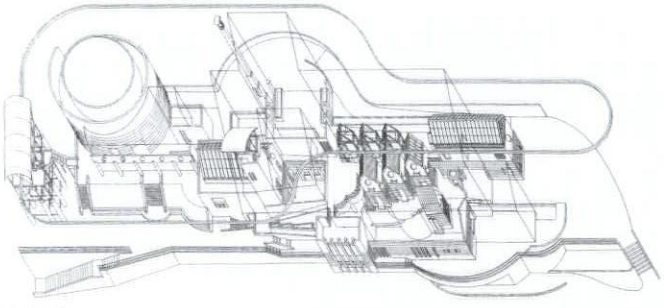
写真＝松村芳治



2階平面図



1階平面図



アクソメ図

丹波篠山にある休暇村に造られたこの施設は、既存のキャンプ場、宿泊施設、運動施設（テニスコート、グランド、プール）、研修施設などに付加され、冬季、雨天時、そして夜間の誘客装置として機能する。

植物展示を中心にさまざまな建物が塔や広場や川の流れとともに一つの中世的な「街」を作るよう計画されている。

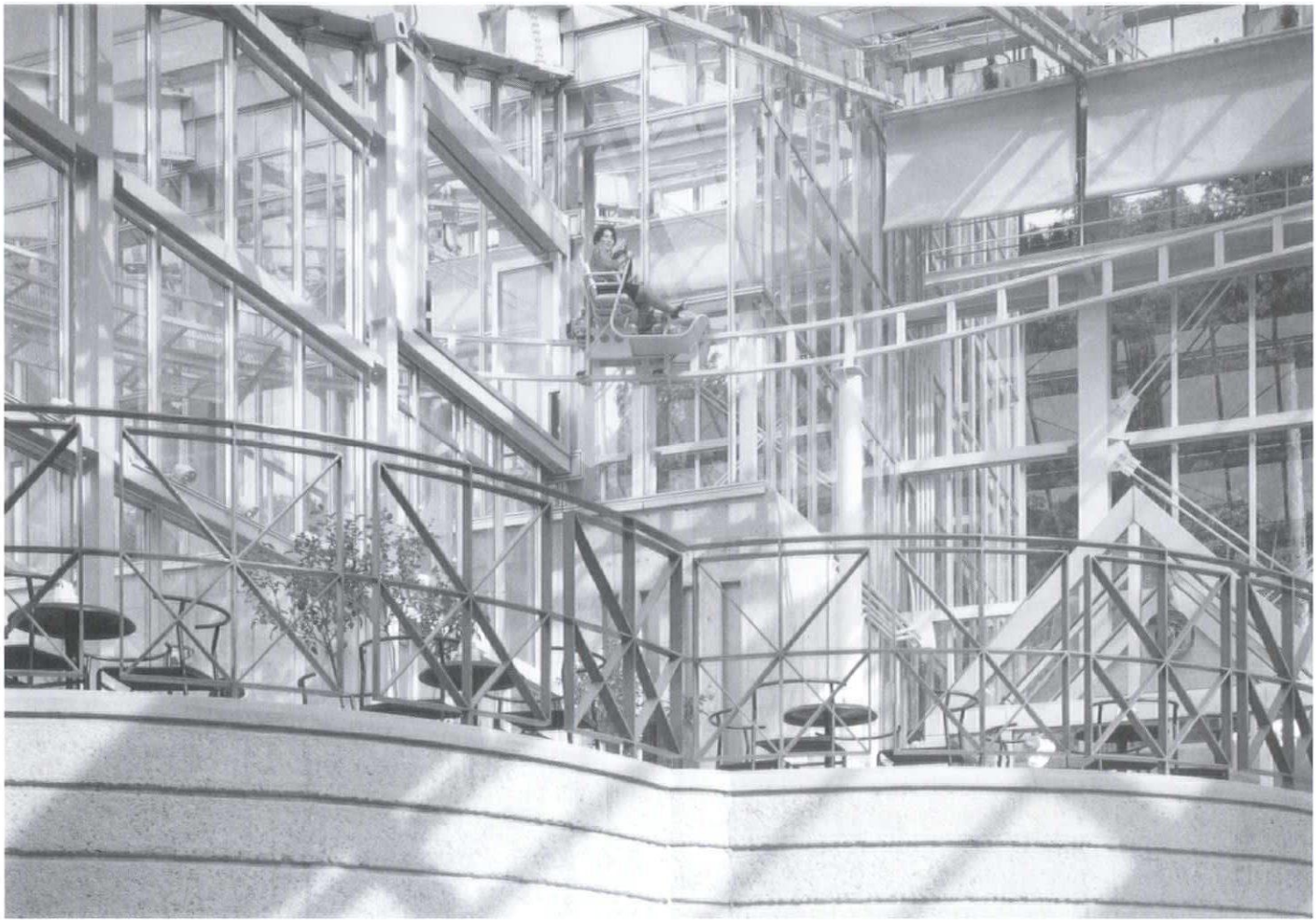
「街」全体は大きなガラスケースに覆われ、天候、季節に影響されない外部空間の内部化が意図されている。立体的で迷路的な空間を体感するため、地形に添い、街並みにより見え隠れする視点場が設けられた。空中自転車からは、鳥瞰的な視覚が獲得される。

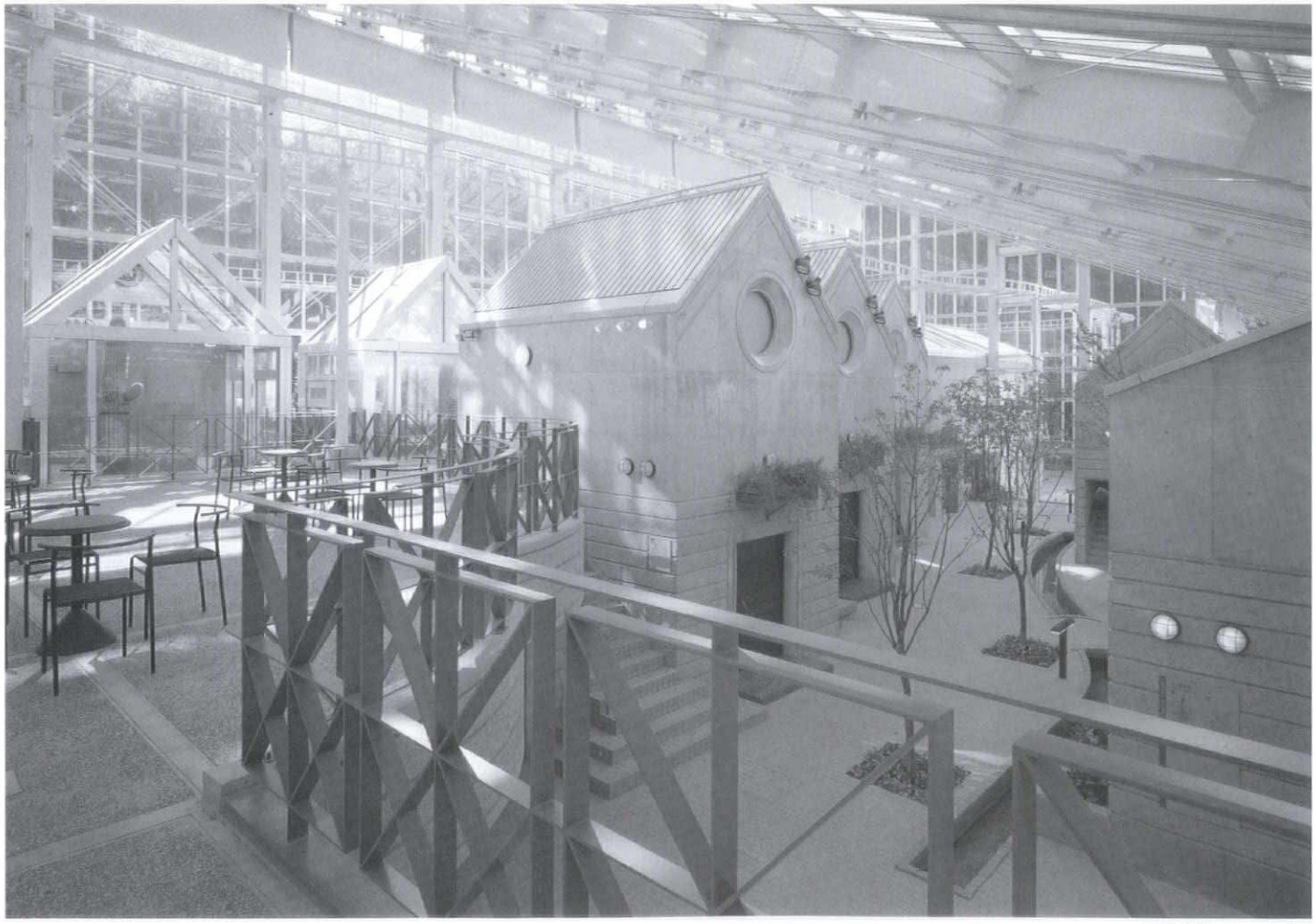
実現した施設は、プログラムの多少の差異はあるものの、応募案を踏襲したものとなっている。

SDレビュー応募の目的は、現実性と想像性の表現の両立と、具現化（実現化）する上での目標を反芻することであった。

所在地：兵庫県多紀郡
建築用途：展示場+劇場+店舗
総合プロデュース：エー・エー・ピー
共同設計者：ステム構造設計（構造）、総合設備計画（設備）
構造：RC造、S造
敷地面積：148,208m²
延床面積：2502.76m²
竣工年：1988年10月

くりゅう・あきら
1947年千葉県生まれ。応募当時（株）栗生総合計画事務所主宰。現在（株）栗生総合計画事務所主宰、千葉大学工学部教授

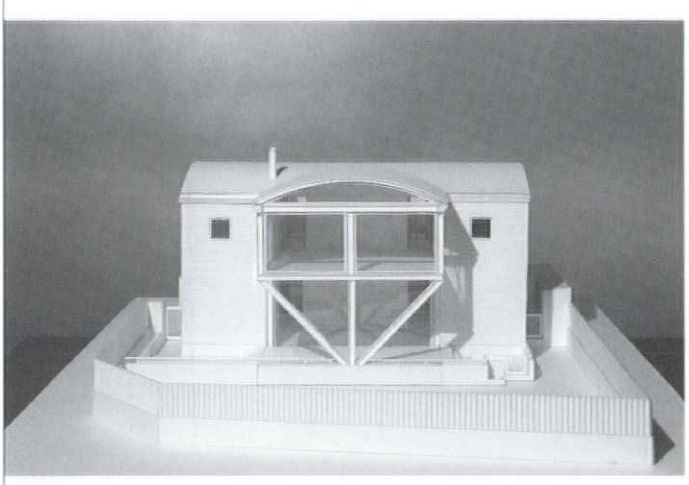




写真（2点とも）＝古館克明

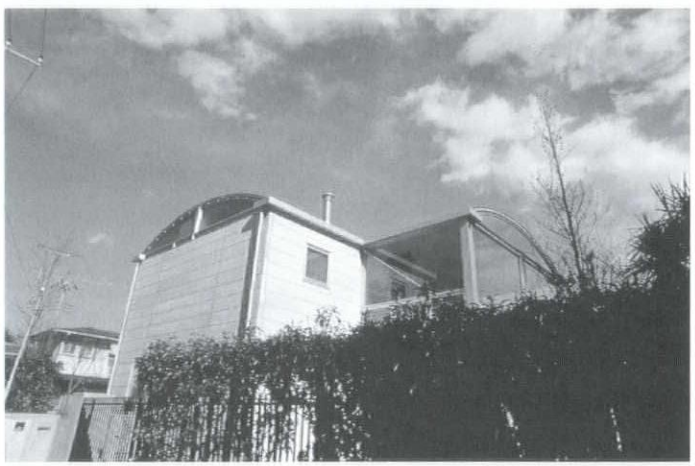
木下庸子

湖畔の住宅









写真（左下、右2点）＝古館克明

理想的なヴィラのためのプロトタイプ

上記のタイトルで1987年のSDレビューに入選したこの住宅は、私が独立して最初に手掛けた仕事であった。完成後、同じ作品で新建築の吉岡賞も受賞することができたのが大きな励みとなった。

この住宅は都市住宅に対する住まい方のひとつの提案である。典型的な郊外分譲地でありながらも、たまたま敷地の前面に残された自然環境といかに対峙するかが、設計のテーマであった。健全な精神のための健全な肉体のすみかとなりうる現代のヴィラのプロトタイプを発見したいという願いでデザインされた。

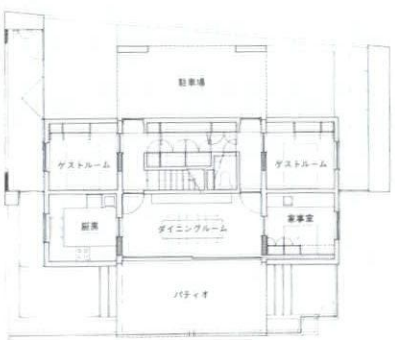
プランニングにおいては、ヴィラやバラッツオの空間構成の基本となっているピアノ・ノビレの考え方が用いられており、主室はすべて2階に設けられている。2階がリビングルームになったことで、前面道路の存在を意識させない空間が成立したばかりか、目前に広がる緑地を部屋の延長のごとく感じられる借景も可能となった。

所在地：東京都東大和市
建築用途：専用住宅
共同設計者：渡辺真理
構造：S造
敷地面積：347.61m²
延床面積：173.86m²
竣工年：1987年

きのした・ようこ
1956年東京都生まれ。応募当時木下庸子建築設計室代表。現在設計組織ADH代表



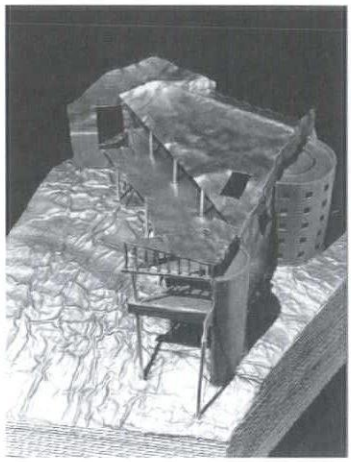
2階平面図

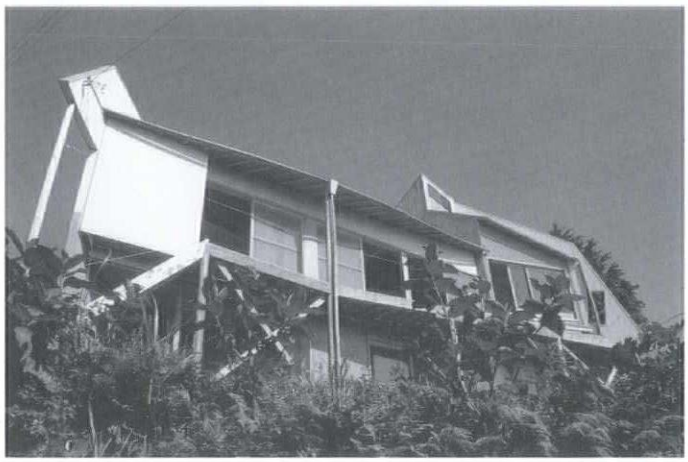


1階平面図

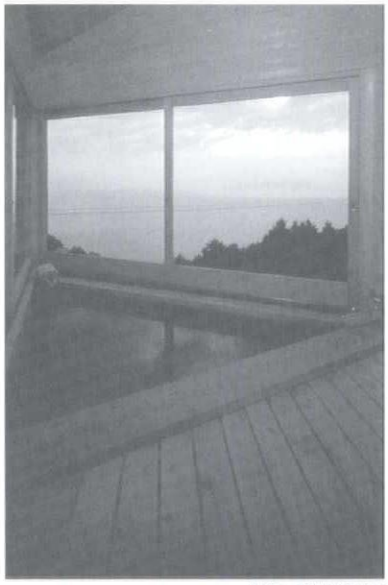
隈 研吾

伊豆の風呂小屋

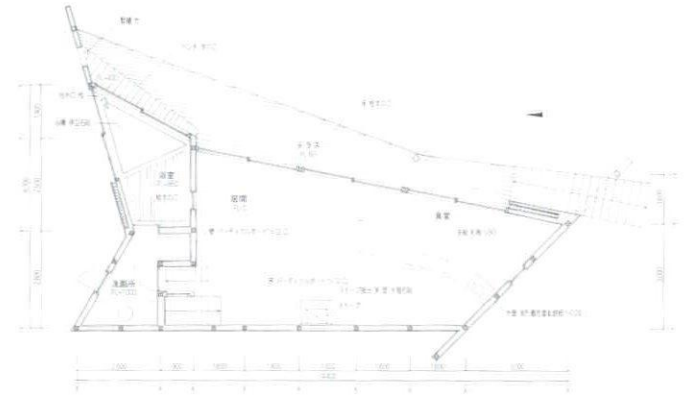




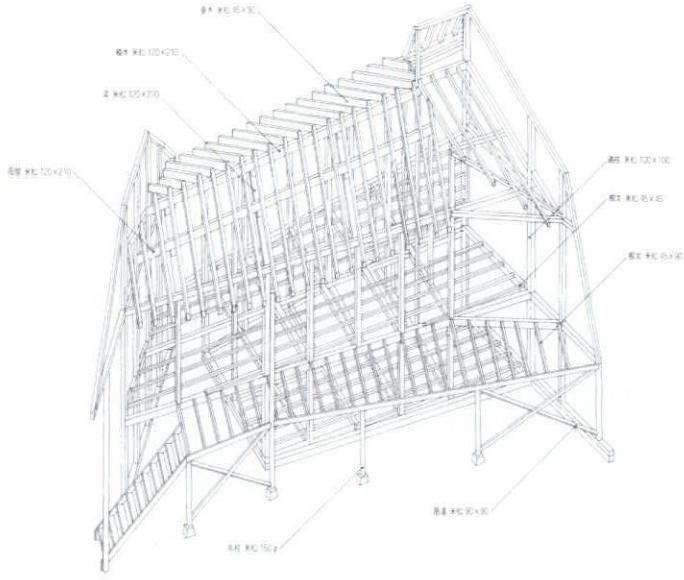
写真＝隈研吾



写真＝新建築写真部



1階平面図



アクソメ構造図

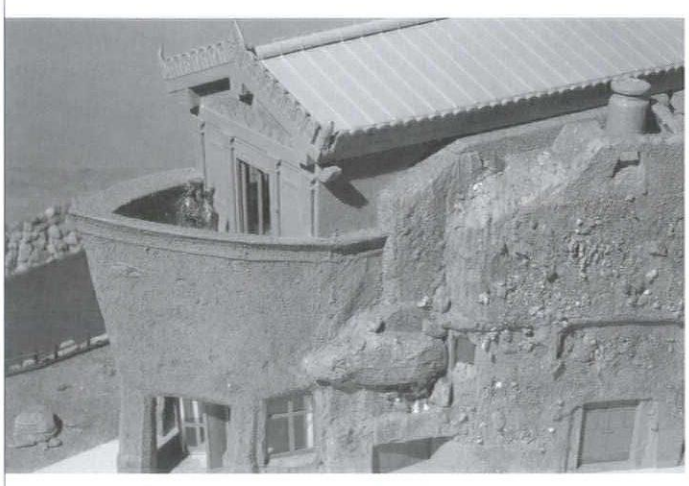
ローコストの小さな別荘である。デビュー作である。エレメントが離散的である事に興味があった。床、壁、天井などのビルディング・エレメントが離散的であると同時に、プランの上でも離散的なものを追求していた。特にこのプロジェクトは、浴室に対して特権的なポジションを与えたかったので、浴室という平面エレメントを切り離して、広々としたテラスの上に浮かせたいと考えた。テラスを水面に置換し、浴室のガラスの箱を楕円のガラス箱に置換すれば、〈水／ガラス〉（1995年）となる。太平洋を見おろす伊豆の高台というセッティングも同型である。残念ながら、実施案ではコストの制約のために、浴室の独立性は失われ、かつテラスの面積も縮小している。しかし、SDレビューのおかげで、自分の意図に沿った案を、プレゼンテーションできた事には意味があった。

所在地：静岡県加茂郡
建築用途：別荘
共同設計者：篠原聡子
構造：木造在来工法
敷地面積：355.92m²
延床面積：93.23m²
竣工年：1988年7月

くま・けんご
1954年神奈川県横浜市生まれ。応募当時空間研究所主宰。現在隈研吾建築都市設計事務所主宰

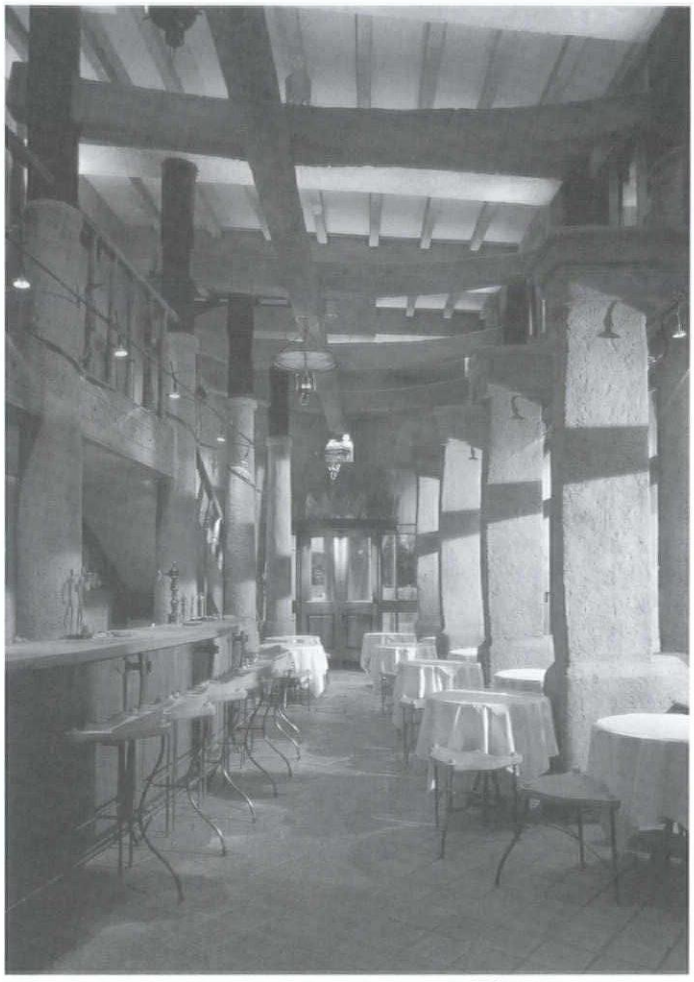
ナイジェル・コーツ+弾設計

ノアの方舟［L'ARCA DI NOE'］





写真＝編集部



写真＝Eddie Valentine-Hames

ノアの方舟は、レストラン、バー、パティセリが入った複合ビルである。

外壁は吹き付けコンクリートを用い、風雨にさらされた砂岩のように見せている。インテリア空間は複雑である。長円形のらせん階段が天窓からの明かりに照らされ、もう一つ、まっすぐ伸びた階段とぶつかっている。

全体の雰囲気は、バロック的なものが支配し、ピラネージ風の彫刻も採り入れた。内観も外観も、宇宙を意識したイコノグラフィやシンボリズムに彩られている。

これらのイメージが、幻想とエロティシズム、考古学と神秘主義を結びつけている。

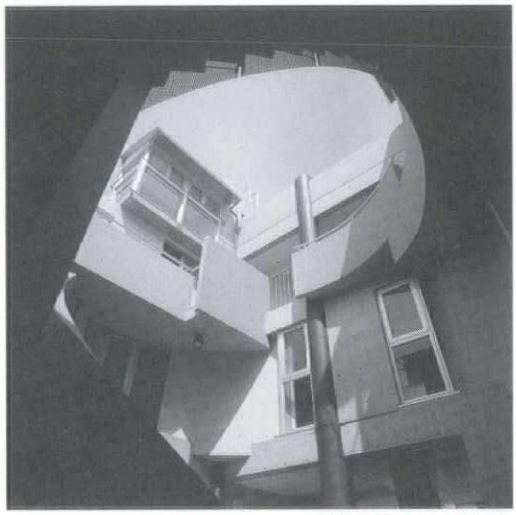
設計者：ナイジェル・コーツ、金子満／弾設計
所在地：北海道札幌市
建築用途：商業施設
プロデュース：シー・ユー・チェン／クリエイティブ・インテリジェンス・アソシエーツ
共同設計：K3建築研究所（構造）、JET企画設計（設備）
構造：RC造
敷地面積：230.09m²
延床面積：514.22m²
竣工年：1988年10月

Nigel Coates
1949年英国生まれ。ブランソン・コーツ・アーキテクツ主宰

かねこ・みつる
1942年東京都生まれ。弾設計主宰

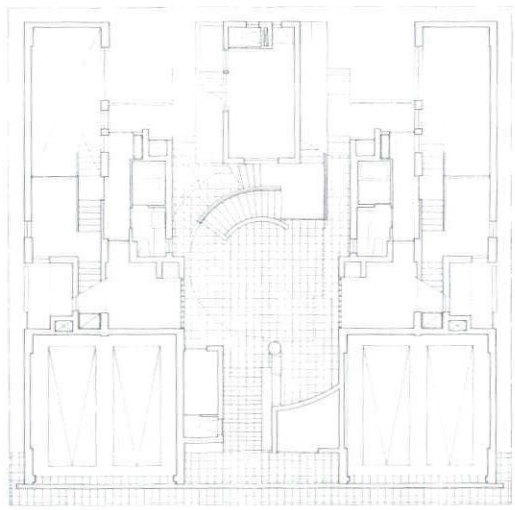
コスモ池上７（池上の集合住宅）



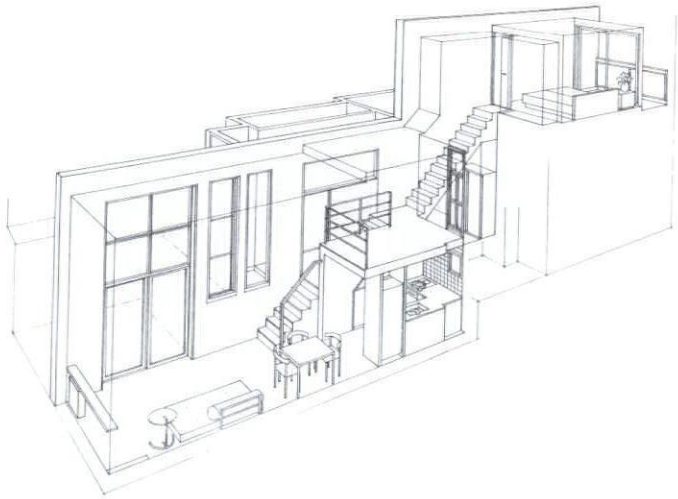


写真（左下、右上）＝堀内広治





1階平面図



このプロジェクトは都市の中に最小の単位の集合住宅の居住環境をつくろうとしたものである。住戸は中庭を中心に構成されているがこの中庭の空間は都市そのものとしてイメージされている。廊下や階段は表の通りと連続した都市の道として考えられ、各住戸へはその道を巡りながらアプローチする。住戸の入り口は道に対してちょっとした構えをもっている。またアネックスと名付けられたフリースペースは各住戸から独立して中庭空間にアクティブに参加している。その他様々な要素は各々自立的な表現を与えられ、全体でコラージュ的な小さな都市をつくろうとしている。

都市を再構築するのにはこの小さな都市という捉え方がとても有効ではないかと考え、反応を求めてSDレビューに参加した。

建築はねらい通りに実現することが出来たが管理上の問題で、中庭に入るところに門扉をつけざるを得なくなった。外の道との連続性が少し失われてしまったのが残念だ。

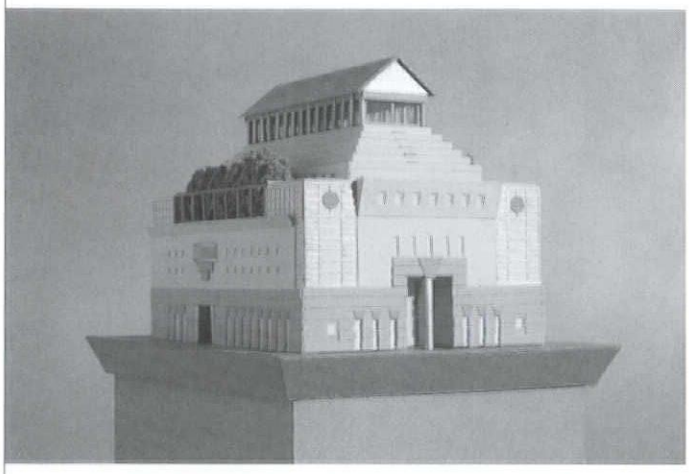
設計者：元倉眞琴+高橋真奈美
所在地：東京都大田区
建築用途：集合住宅
構造：RC造
敷地面積：370.46m²
延床面積：799.85m²
竣工年：1989年

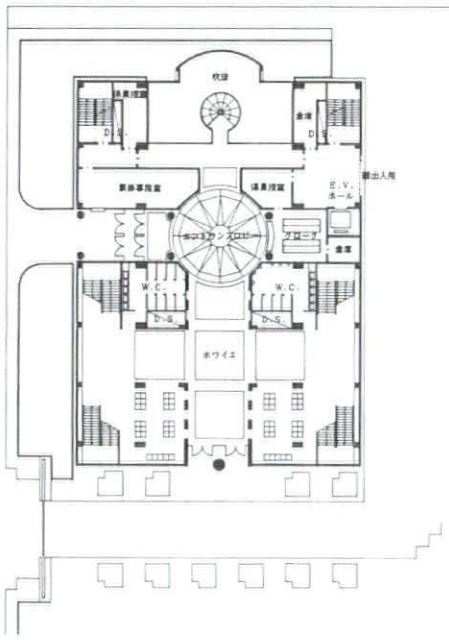
もとくら・まこと
1946年千葉県生まれ。スタジオ建築計画主宰

たかはし・まなみ
1959年東京都生まれ。応募当時スタジオ建築計画勤務。現在プラネットワークス共同主宰

青島裕之

金竜音楽ホール





1階平面図

ウィーンから帰国し、仕事を始めたばかりの頃の作品である。ウィーンと姉妹都市を結ぶ台東区の、当時の区長から計画を依頼されて作った。

ここにはニューヨーク時代の経験、たとえばコロンビア大学で学んだこと、師匠であるローバート・スターンのポストモダニズム、ケネス・フランプトンのラショナリズム、あるいはKPFでの実務、そしてウィーンに渡り、ハンス・ホラインのもとで感化された思想、そうした海外での様々な蓄積が素直に現れている。

こうした時代の流行をストレートに受けとめ過ぎたものは、時の流れと共にすぐに古ぼけた遺物のようなイメージしか残さない。10年近くたった今、こうしたデザインはもはや気恥ずかしくて描けないが、しかしここには確かに建築を作る上での基本が盛り込まれていた。

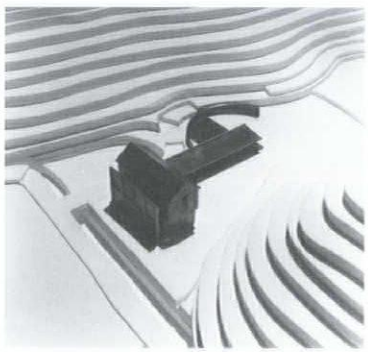
結局この計画は、予定していた小学校内の敷地が、公共の音楽ホールに使用できないということで比較的初期の段階で中止となった。

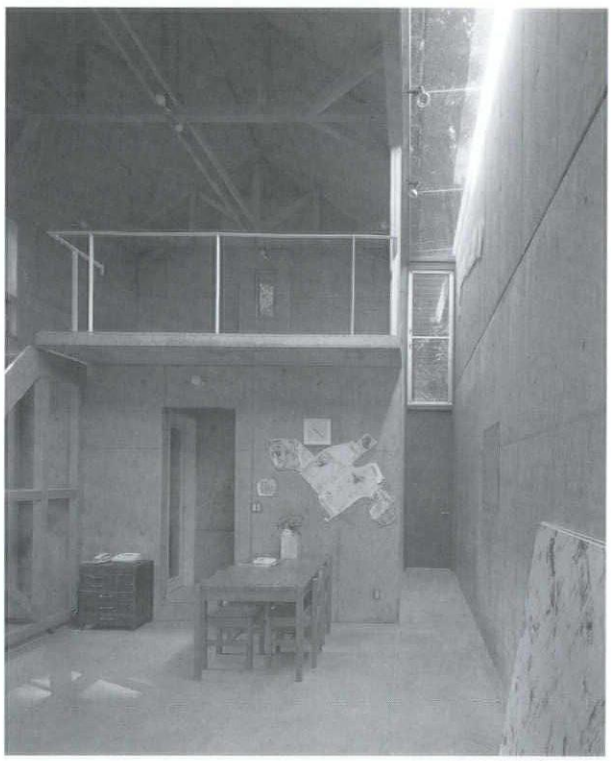
所在地：　東京都台東区
建築用途：ホール
構造：RC一部S造
敷地面積：897.75m²
延床面積：3,215.3m²

あおしま・ひろゆき
1956年静岡県生まれ。応募当時（株）圃・青島建築設計事務所主宰。現在（株）青島裕之建築設計室主宰

東 利恵／東環境・建築研究所+東 孝光

大原のアトリエ





写真＝栗原写真事務所

大原のアトリエは、東孝光とパートナーシップを組んでから私の初めての作品で、千葉県大原町の谷あいに建つ画家のためのアトリエである。大きな谷から分岐した小さな谷の入り口というコンテクストを生かそうということが、最初から私たちの共通の考えであった。小さな谷の領域を強調する5mの高さの壁、谷の奥へとのびる壁、カーブする山道に沿った壁、この3枚のコンクリートの壁が構成の基本要素となっている。その壁の作り出した領域に木造の屋根を乗せ、アトリエ空間とした。SDレビューに応募した時は確か実施設計が完了していたと思う。SDレビュー案と比べて、実現した建物も大きな変更はなく、建築の要素と環境との呼応という私たちのコンセプトも実現できたと考えている。（東利恵）

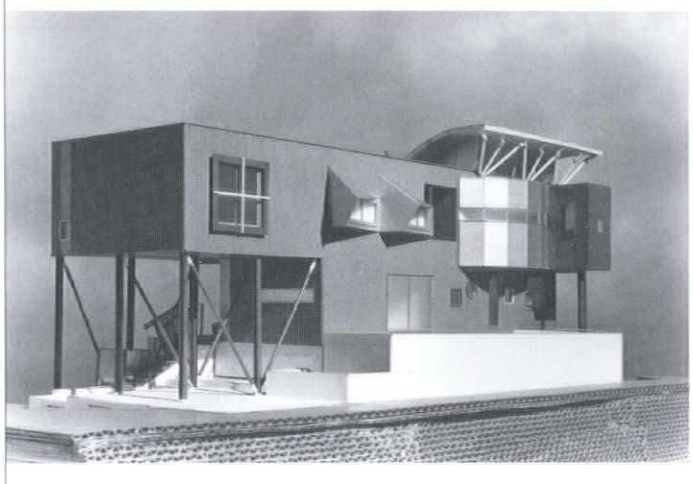
所在地：千葉県夷隅群大原町
建築用途：アトリエ
構造：RC造一部木造
敷地面積：637.0m²
延床面積：82.9m²
竣工年：1988年6月

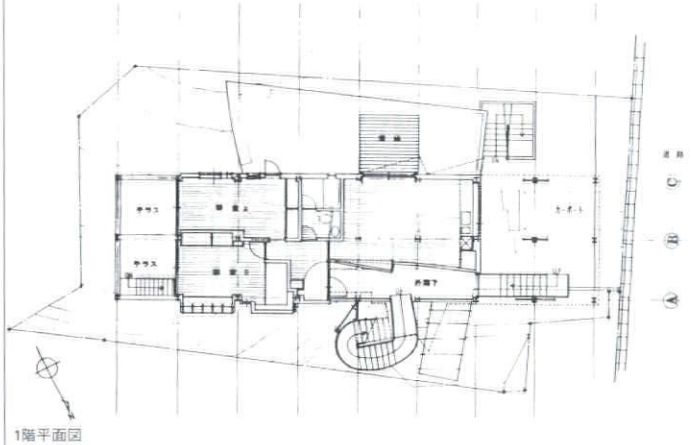
あずま・りえ
1959年大阪府生まれ。東環境・建築研究所主宰

あずま・たかみつ
1933年大阪府生まれ。応募当時東孝光建築研究所主宰。現在千葉工業大学工業デザイン学科教授、建築家

板井 宝一郎+西島 裕

COMPLEX IN YOKOHAMA





1階平面図

このプロジェクトでは、ふたつの住宅とスタジオの組み合わせを明確にあらわすため、コンクリート壁構造と鉄骨ラーメン構造の混構造が採用された。建物を構成するさまざまなエレメントにそれぞれ独自の「身振り」を与えるのが主要な作業となった。独自の「身振り」――特色ある形態と色彩――を与えられたエレメントは、均質な構造フレームに拘束されることなく自由に浮遊する。ある種インスタレーション的なエレメント達のセッションによって、楽しみに満ちた混成体を生み出すのがこの建築の主題となった。実施設計が完了した時点で、クライアントサイドの事情でこのプロジェクトは中断されることになった。

所在地：神奈川県横浜市
建築用途：住宅+スタジオ
共同設計者：西島 裕
構造：S造一部RC壁構造
敷地面積：309.20m²
延床面積：292.65m²

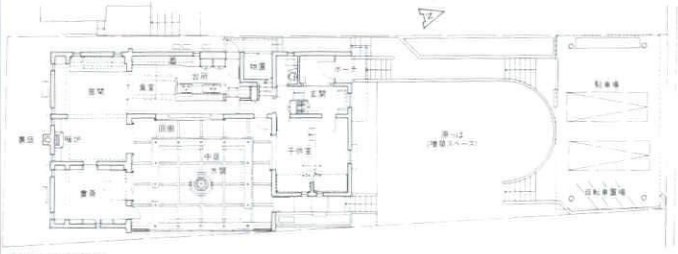
いたい・ほういちろう
1948年兵庫県生まれ。セクションアールアーキテクツ主宰

にしじま・ゆたか
1950年東京都生まれ。応募当時建築研究室セクションアール所属。現在CX建築設計室主宰

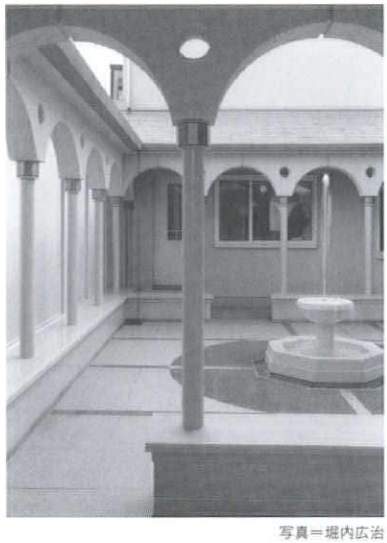
神谷武夫

クロイスター［小川邸］





配置1階平面図



写真＝堀内広治

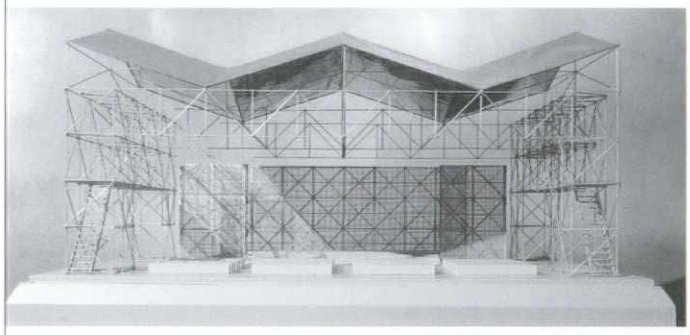
当時、ヨーロッパのロマネスク建築のたたえる深い精神性に感動し、そのような建物をつくりたいと願っていた。とりわけロマネスクの修道院の、回廊で囲まれた中庭（クロイスター）の美しさには、いつも心を洗われる思いがしていた。この住宅は、やや幅が狭かったがそうした中庭を作りうる広さの敷地をもっていたので、中庭を囲んでコの字型に部屋を並べ、中庭には回廊と水盤を設けた。一方でイスラム建築やインドの建築を研究していたので、中庭はモロッコのパティオのように、植物よりも石と水を主とする構成とした。この中庭は住居の中心をなす「広間」であり、家族が憩い、食事をし、思索にふける場所である。SDレビューには工事が始まってから応募したので、何の変更もなく、応募案どおりに竣工した。完成した住宅では、居間の暖炉の火と中庭の水、そして通り抜ける風とが、生活に潤いを与える自然の大きな要素となっている。

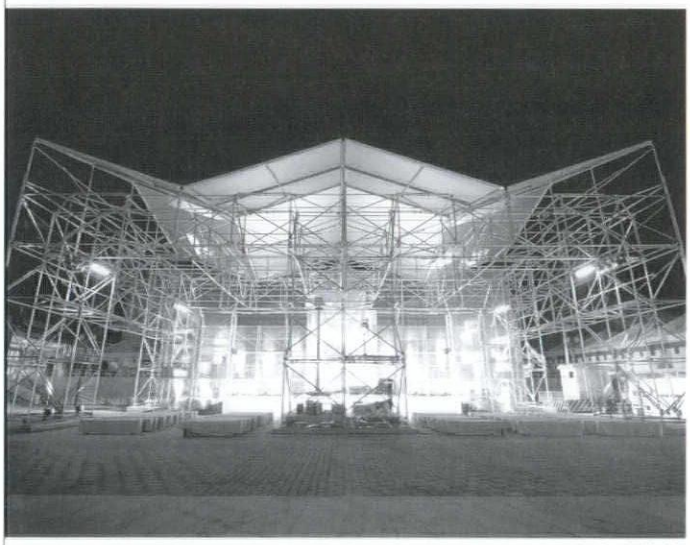
所在地：愛知県名古屋市
建築用途：住宅
構造：RC造
敷地面積：427m²
延床面積：229m²
竣工年：1987年

かみや・たけお
1946年東京都生まれ。神谷武夫設計事務所主宰

岸 和郎

世界歴史都市博イベント・ゾーン





写真＝平井広行

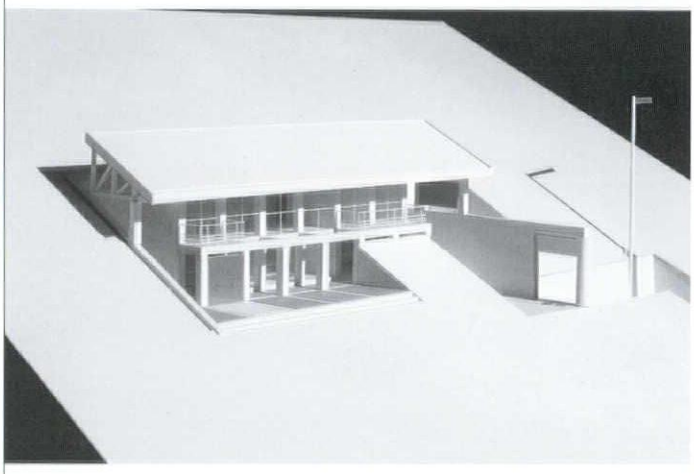
このプロジェクトは京都市で1987年11月8日から29日にかけて開催された歴史都市博覧会というイベントのためのメイン・ステージとして計画されたものである。アーキグラムのインスタント・シティやセドリック・プライスのファン・パレス、そしてマーク・フィッシャーのステージ・セットの仕事は知らない訳ではなかったし、それにたった3週間だけしか存在しない構築物が本当に建築と呼べるようなものになりうるのか、という興味もあった。「建築」がほとんど「イベント」や「出来事」のようなものに感じられていた時代の気分を反映していたのかもしれない。予算や工期の問題もあり、既使用の鋼管で、しかも長さも自由にならないという条件下ではあったのだが、足場用鋼管と銀色のテントだけの空間は実現した。その仮設構築物はほとんど盆踊りのやぐらのようにしか見えない一方で、足場用鋼管だけで組み上げられただけのトラスがスパン24mを軽々と飛ばしているのを見ると、その軽快さはちょっとしたものだと思ったりもした。それは本当にちょっとした「出来事」のようなものだったから、だれもそれを建築だと思って見てはいなかっただろう。でもそんなサーカスのテントのような建築、その場にいた人達の記憶の片隅にしか残らず、思い出してもう一度体験したいと思った時にはもう存在しないような建築、そんな建築も機会があればまたやってみたいと思っている。

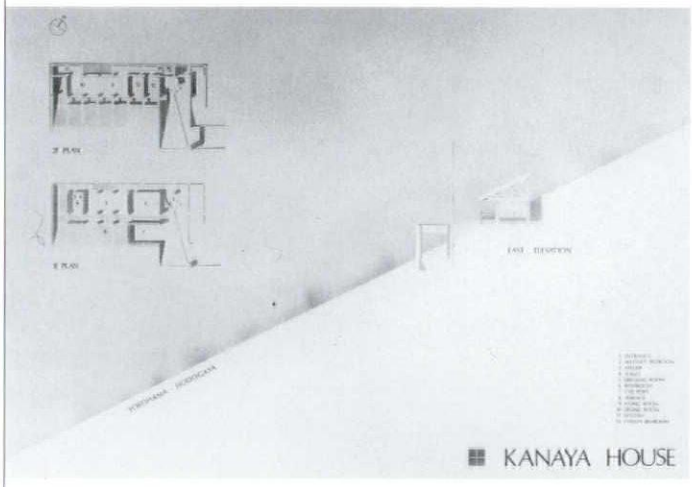
所在地：京都府京都市
建築用途：博覧会会場施設
構造：足場用鋼管によるスペース・フレーム
敷地面積：384.00m²
延床面積：432.00m²
竣工年：1987年11月

きし・わろう
1950年神奈川県生まれ。応募当時岸和郎建築設計事務所主宰。現在京都工芸繊維大学工芸学部造形工学科助教授

木田 加夫利

金谷邸





敷地に訪れた第一印象から、この計画においては南に面する斜面がすべてだと感じていました。斜面に浮遊する勾配屋根のイメージを、どこまで残せるかがポイントで、斜面にそった細長い形状に、平面をつくりこむ事に苦心しました。

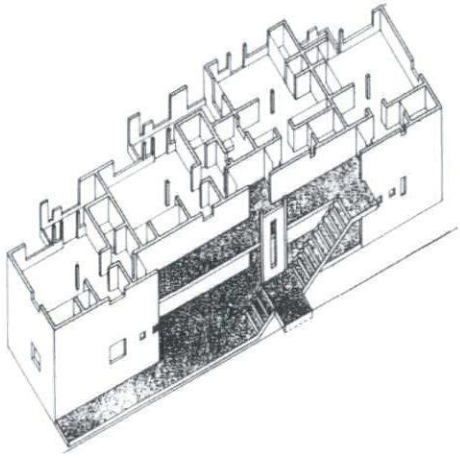
計画としては、実現しかけたのですが、施主の理由で残念ながら実現できませんでしたが、敷地の持つインパクトを、これほど感じたプロジェクトも、めずらしかったと思っています。

所在地：神奈川県横浜市
建築用途：住宅
構造：木造一部RC造
敷地面積：612m²
延床面積：194m²

きだ・かおり
1956年東京都生まれ。清水建設設計本部勤務

小石川 敏

もくちんあぱるとまん





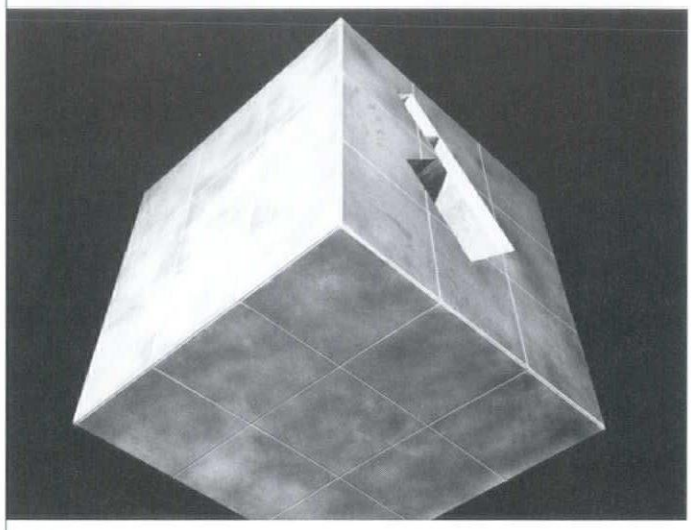
Exterior
—Complexity with tension
—Articulation of the two facades
—Utilization of the established building type: 木賃アパート
—Image of a gate as the entrance for the entire structure
—Contextual approach in a chaotic surrounding context
•Use of the banal materials
•Roof inclination
•Wall line on the street side
•Use of the level difference between the site and the street
Interior
—Sequential space
—Space with a symbolic column: 大黒柱
—Minimally indicated spatial domain

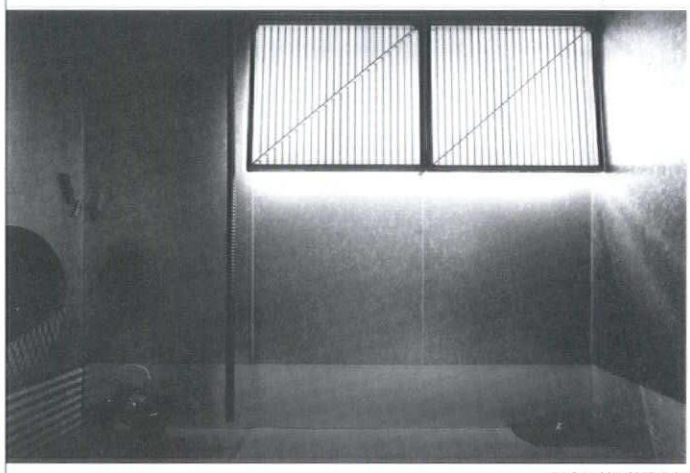
所在地：横浜市戸塚区
共同設計者：小石川貴代
構造：木造軸組構造、一部S造
敷地面積：362m²
延床面積：213.4m²

こいしかわ・さとし
1951年横浜市生まれ。

白川直行

金属の茶室





写真＝彰国社写真部

畳を除くすべての材料を金属で構成しようとする住宅付茶室のインテリアデザインである。茶室の平面は2,215×2,215mm、天井高は2,000と極限に近い。主要な仕上材は亜鉛鉄板の薄板で小口は切り放しのまま釘止めされる。言うまでもなく金属が必ずしもメタリックな表情を持つわけではない。薄板のもつ柔らかさ、頼りなさや鉄素地の素朴さ、不器用さなどは愛らしくさえある。既存の開口部からの光は極力抑制され、室内照明は客畳の隅にちいさなものが一点予定されているだけである。僅かな光のなかで亜鉛鉄板が鈍く光る。釘止めの頭は大半を平頭としているが、照明器具の上方から天井の対角線に沿っては丸頭として光の拾われ方の違いを出そうとしている。

つまり、図面や模型の上では金属がポジのように見えるが実現すべき空間はその逆なのである。

自由な遊び心と高い緊張感が同時に感じられれば当初の目的は達せられるのだが。

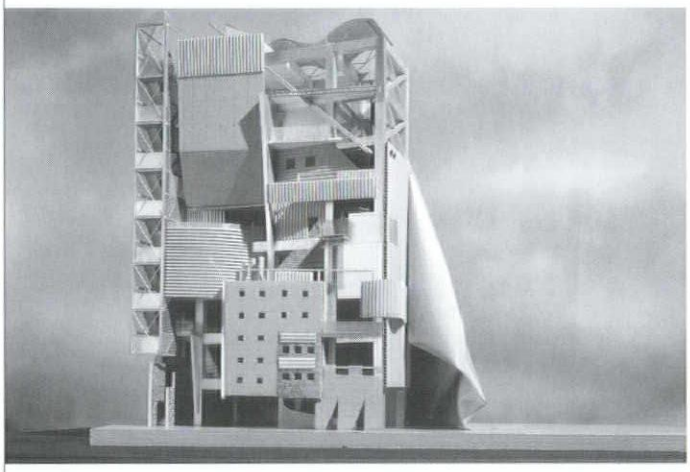
所在地：東京都港区
延床面積：8.60m²（茶室7.58m²、前室1.02m²）
竣工年：1988年10月

しらかわ・なおゆき
1951年福岡県生まれ。白川直行アトリエ主宰

シーラカンス

GIMMICK［共同計画ビル］

SD賞





断面図

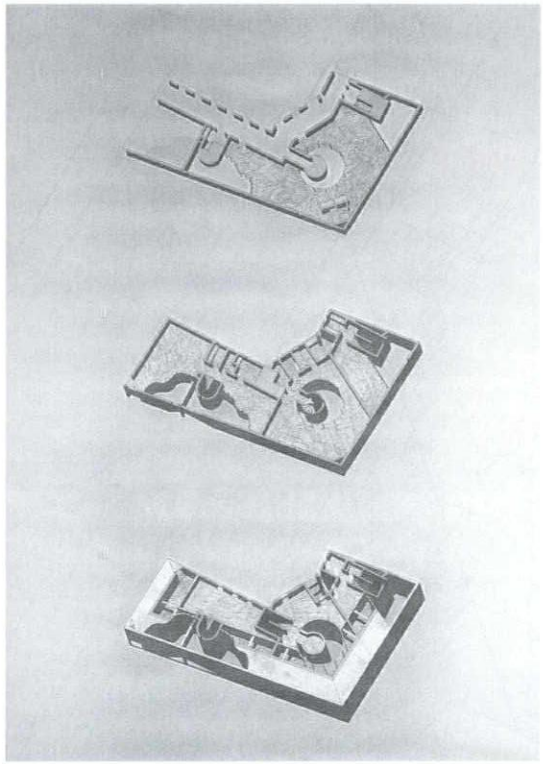
東京という都市の活気を映し出したような建築を実現しようとした作品。ランダムとしか見えない状況からいくつかの基準線を発見して、これらの交錯によって断片的なマイクロシーンを発生させようと試みた。初期段階での応募だったため、確定しないプログラムの中で建築の形態そのものよりも、その後の条件の変化に柔軟に対応できるデザインの方法を見つけ出すことが要求された。応募によってデザインは加速されたが、残念ながらデベロッパーである施主の事情で実現することはできなかった。しかし、このあとのシーラカンスの一連の集合住宅や大阪国際平和センターに至るプロジェクトや共同での設計方法そのものに大きな影響を与えた作品といえる。（堀場弘）

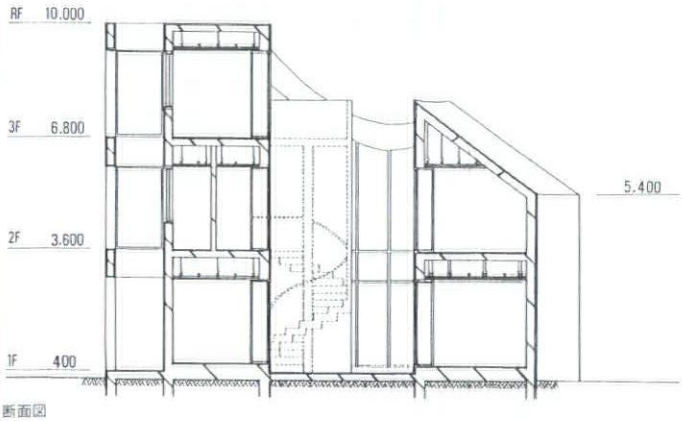
所在地：東京都新宿区
建築用途：事務所ビル
共同設計者：PHASE ASSOCIATES（監修）
T.I.S.＆PARTNERS、創設備設計事務所
構造：SRC造
敷地面積：184.65m²
延床面積：921.80m²

シーラカンス
6人のパートナーで1986年に東京で活動開始。現在8人のパートナーで活動中

團 紀彦

SPACE J-5





断面図

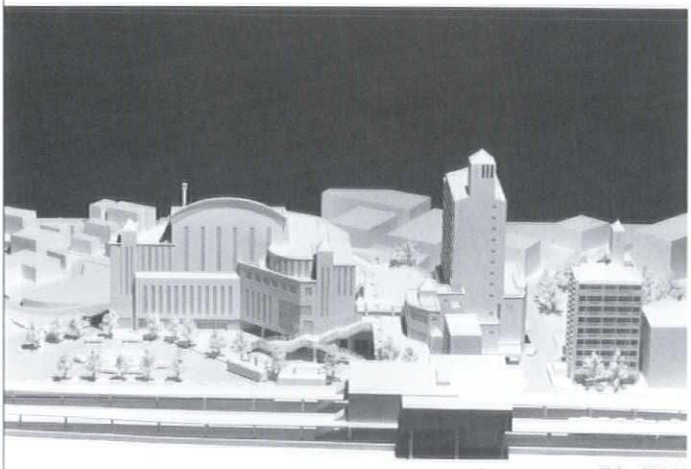
ちょうどバブル期が始まった頃、この土地にどんな建物が建つかちょっと先生絵をかいてくれませんか？　といった類の依頼が多かった。〈SPACE J-5〉もそうした時代の落とし子のような計画だ。依頼した人にも間に人を介しての話だったのでお会いした事もなく、結局この提案を見て土地を購入しなかったようだ。しかし、自分にとっては、重要な位置づけにある作品で、形態規制の厳しい都市の高密度地区における設計手法として、むしろ、法規そのものの形をしたヴォリュームの中から建ぺい率を60%にまで下げるヴォイドを穿っていくといった図と地の逆転した方法論を示している。

所在地：東京都渋谷区
建築用途：集合住宅
共同設計者：青島裕之、築慶幸、八木佐千子
構造：RC壁式構造
敷地面積：335.02m²
延床面積：498.18m²

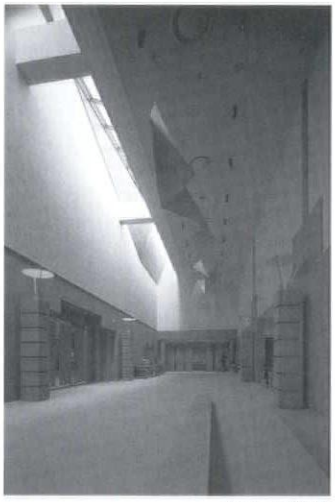
だん・のりひこ
1956年神奈川県生まれ。応募当時團・青島建築設計事務所主宰。現在團紀彦建築設計事務所主宰

日本設計事務所

成増駅北口再開発事業（成増アクト）



写真＝翠光社



写真＝坂口裕康

高低差が激しく虫食い状の敷地形態、多くの地権者による複雑な権利関係、公共施設、商業施設、住宅そして駅コンコースを含む多様な施設内容、都市計画上の規制、建築工事と土木工事との取り合い等、とてもやっかいなプログラムを持つ組合施工の再開発であった。そのやっかいさにめげないように、元気が持続するようにと思いながら応募した。

従来の再開発にありがちな巨大で四角いびかびかの箱を作るのではなく、街のスケールで分節された形や層や塊がさまざまに重なり合い、反応し合って街の雰囲気をつくることを考えた。特に高架駅舎から敷地裏側の既存市街に近道で抜けられる広場と階段のある道を拠り所にして群の集積を考えた。

紆余曲折はあったものの、大きなコンセプトは守り通して実現したと思っている。ただし反省する所も多い。サインの抑制のむずかしさ、土木工事との統一性や隣地再開発との連携の困難さなどを感じている。やれやれ。
（常岡稔）

設計者：常岡稔、淺石優、水尾豊
所在地：東京都板橋区
建築用途：店舗、公共施設（板橋区立成増区民センター）、共同住宅
共同設計者：都市再開発設計集団
構造：SRC造、RC造
敷地面積：4945.58m²
延床面積：29,015.54m²
竣工年：1990年10月

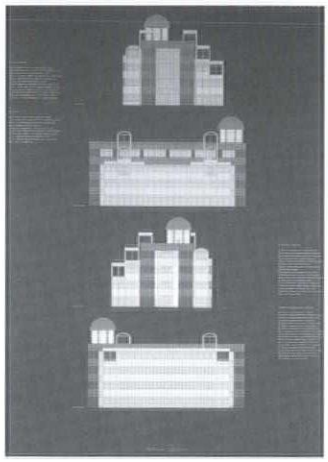
つねおか・みのる
1943年長崎県生まれ。応募当時日本設計事務所勤務。現在日本設計九州支社取締役支社長

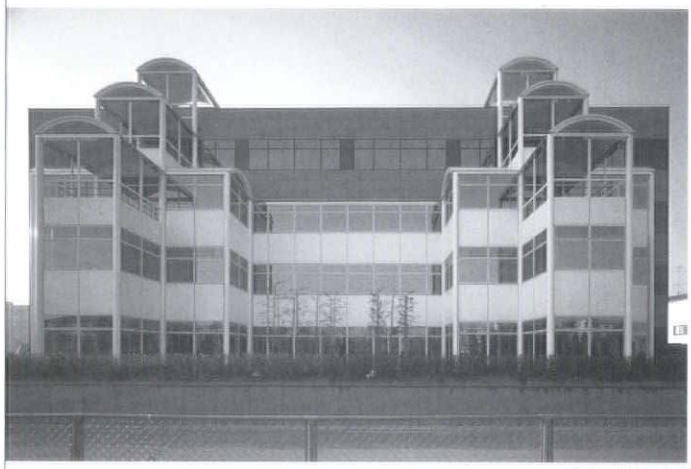
あさいし・まさる
1947年東京都生まれ。日本設計事務所勤務

みずお・ゆたか
1947年生まれ。日本設計事務所勤務

野々瀬 徹

ジャストシステム本社屋（ジャストシステム沖浜オフィス）





写真＝大竹静市郎

ワープロソフト「一太郎」の研究開発販売で急成長中の（株）ジャストシステムの事業拠点としての社屋の計画。インテリジェントビル機能、ソフト開発研究のためのプランニングに加えて、情報化時代の建築の審美性を追求することが基本コンセプトでした。

設備機能及び空間仕様については発注者と共同で検討研究しスペックを決め計画した。

審美性に関しては深く考えた。情報化時代は人工頭脳が文化に大きく関与する。人工頭脳は人間の脳の機械化。脳は自然そのものである。従って、農業や宗教や工業生産産業の時代とは異なり、自然そのものをデザイン対象とし、自然を抽象化し表現する建築が生まれるだろうと直観した。

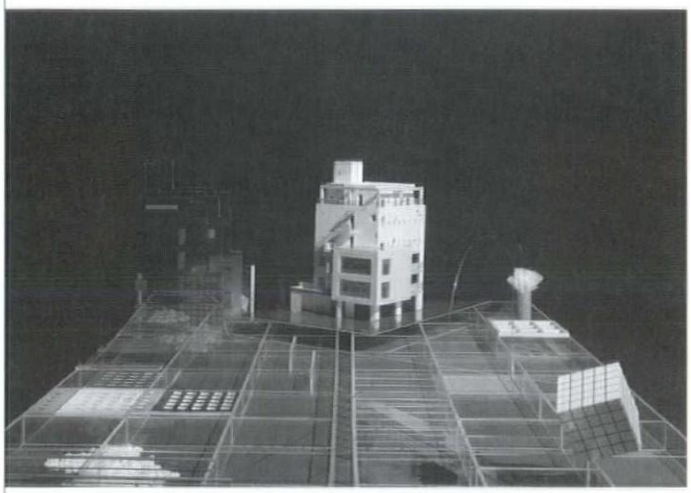
オフィス部分の花崗岩の直方体に沿って、打ち合わせやリフレッシュの部分の白アルミパネルの水平垂直両面凸型空間が取り付き、入道雲のように天空に湧きあがる造形をし、大地の息吹を抽象化する表現とした。SDレビューに応募した案のままに竣工した。

所在地：徳島県徳島市
建築用途：研究所、事務所
構造：SRC造
敷地面積：1,951.92m²
延床面積：2,704.46m²
竣工年：1987年

ののせ・とおる
1950年徳島県生まれ。応募当時野々瀬建築設計事務所主宰。現在（株）野々瀬建築都市設計事務所主宰

前田紀貞／大成建設設計本部

関屋ビル





写真＝篠沢写真事務所

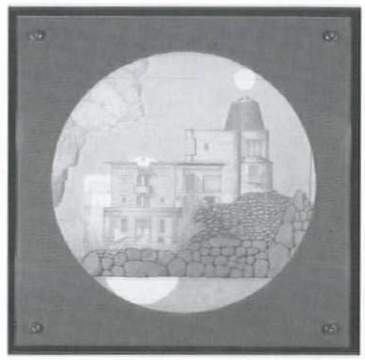
平面的／断面的にはかなり制約／形骸化された経緯のなかで扱うことのできた唯一の相手は形態であった。この敷地はちょうどその脇に遊歩道と鉄道が高架で通過する場所を備えていたため、通常の静的な観測者の速度／高さとは異なった地点から形態操作への接近が可能であった。さらには、プログラムが事務所・ホテル・飲食店舗といった雑居的なものであったため、モダニズム建築への憧憬の念も相俟って、それらをそのまま直截的に破綻無く外観に表示することを意図していた。雑居的な「多」を点、線、面で構成された「一」に置き換えた外観に如何に観測者が関わりを持つかということに主眼点があったように思える。

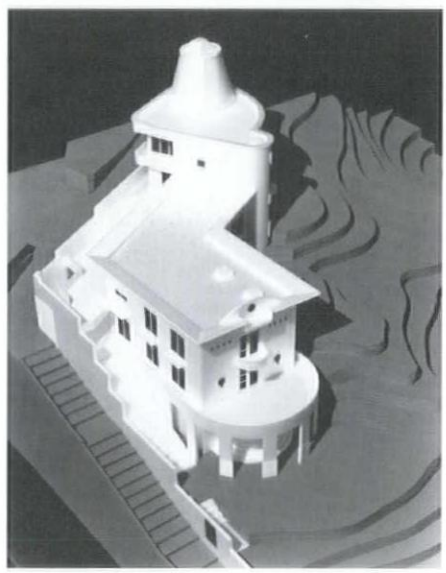
所在地：千葉県茂原市
建築用途：ビジネスホテル+事務所+飲食店舗
共同設計者：大成建設設計本部
構造：RC造
敷地面積：447.68m²
延床面積：888.68m²
竣工年：1988年6月

まえだ・のりさだ
1960年東京都生まれ。応募当時大成建設設計本部勤務。現在前田紀貞アトリエ主宰

山里茂樹

蟻塔［K邸］





巨大な石が敷きつめられた、広い敷地。この隅に、3層半の住宅が計画された。2世帯住宅であり、石のためともいえる空間を上層に設けている。

敷地の現状をできるだけくずさないという前提が、約8mのレベル差の、いろんなポイントからのアプローチを可能にした。

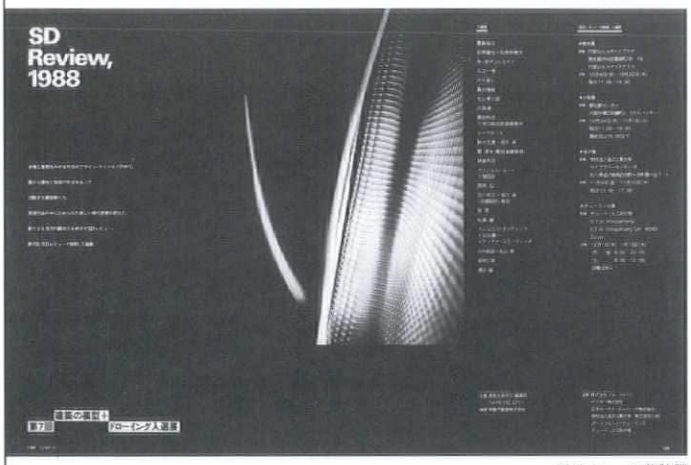
一番下の半円テラスから、一番高い広間までを結ぶ通路は、蟻への連想を呼びおこすとともに、仮想のブリッジとして3次元的に入り組みながら、建物の骨格をつくっている。

広間は円筒状の吹抜けを持ち、ガラス屋根が架けられる。この部分の外装には石が積まれる予定である。下の道路から建物をながめる時、ファサードともいえる立面の大半は、木の緑にかくれるよう、高さはおさえてある。

所在地：福岡市南区
建築用途：
共同設計者：坂本瓦、山本為康
構造：RC造
敷地面積：3,312m²
延床面積：480.55m²

やまざと・しげき
1947年埼玉県生まれ。

第7回　1988年



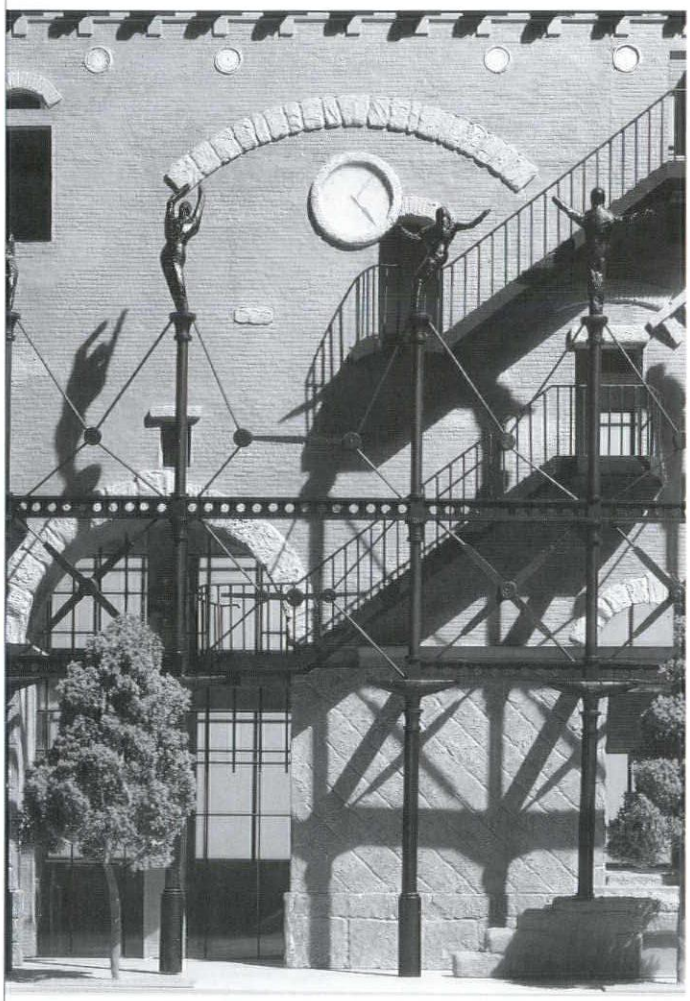
デザイン＝工藤強勝

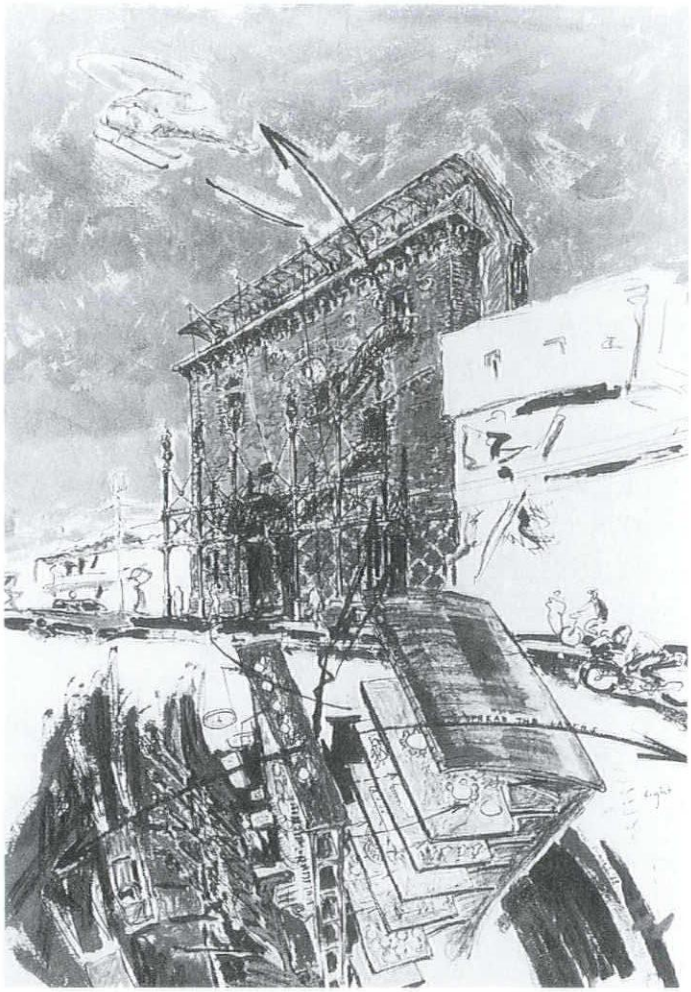
東京展：10月9日～10月20日
会場：ヒルサイドプラザ
大阪展：10月24日～11月1日
会場：都住創センター
金沢展：11月4日～11月10日
会場：金沢工業大学ライブラリーセンター
チューリヒ展：12月1日～1月19日
会場：チューリッヒ工科大学（ETH）
チューリッヒ展イベント：原 広司講演会
審査員：原 広司、安藤忠雄、鈴木了二、竹山 聖
応募総数：234作品
入選数：22作品
受賞者：
妹島和世（鹿島賞）
西岡 弘（朝倉賞）
北山孝二郎（SD賞）
M.タルディッツ+石田壽一+D.ユラノヴィッチ（SD賞）

青島裕之　かもめ荘増改築
石原健也+石原奈穂子　雪ヶ谷運送城南島本社屋
今・井アソシエイツ　ベセル大濠
入江一央　「内」と「外」の間MA
沖中高行　嶺北21世紀センター
貴志雅樹　ラトゥール［LATOUR］
北山孝二郎　成城プロジェクト
久保清一　密柑花の家
黒田和司+NEU総合計画事務所　中和田小学校水泳プール
ブランソン・コーツ・アーキテクツ+弾設計　THE WALL
シーラカンス　TRANS［光の変換装置］
鈴木文章+坂牛 卓　河口湖T計画
妹島和世　PLATFORM I・II
玉川和正+坂牛 卓／日建設計　横浜博覧会住友館
西岡 弘　シーサイドももち地行区コートハウス
坂 茂　PTS実験パビリオン
松島 健　BANK
山中知彦+丸山 恭　宮代町の巨峰広場
M.タルディッツ+石田壽一+D.ユラノヴィッチ　Boogie Fuji Duck House
郵政省建築部（関 淳夫）　可搬型自動化臨時郵便局庁舎
若林広幸　1919×1989
渡辺 誠／アーキテクツ オフィス　IN-EX

ブランソン・コーツ・アーキテクチュア+弾設計

THE WALL





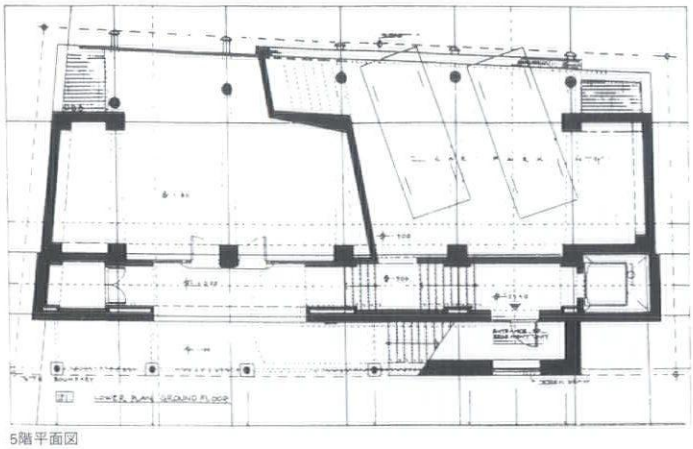
レストラン、バーなどの入った5階建ての商業ビルである。「永久に残る建築を」と、設計を依頼された当初は、気乗りがしなかった。というのも、私たちにしてみればそのようなモニュメント的建築は、現代的な感覚、行き交う情報網のなかでは最悪のものである。だが、ともかくその立場に立って、ところどころ20世の産業廃棄物を入れた、パッチワークのような「ローマ時代の壁」をつくることに決めた。

建物の彫刻的な核となっているこの壁は、各層によってひとつに括られている。通りに面しては鋳造鉄にブロンズ像を頂いたスクリーンがあり、壁の内外を縫うようにらせん階段が配置されている。エッチング・ガラスに、建物全体を統合する銅屋根がのっている。その屋根のすぐ下で、客はコーニスの真上にあるバーに陣取り、最先端の街「Tokyo」を一望できる。

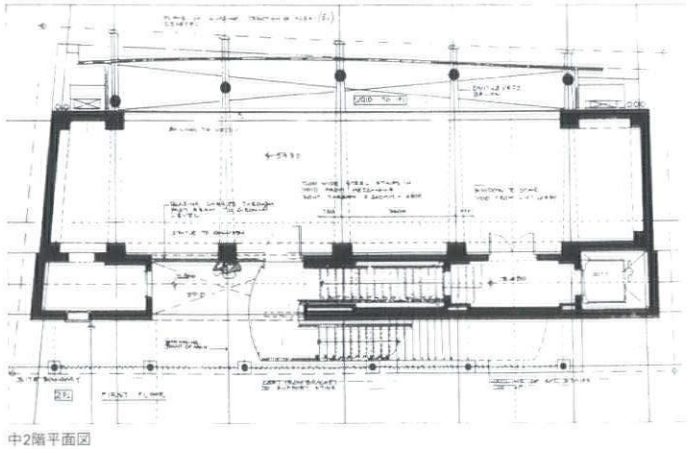
設計者：ナイジェル・コーツ、金子満／弾設計
所在地：東京都港区
建築用途：商業施設
プロデュース：シー・ユー・チェン／クリエイティブ・インテリジェンス・アソシエーツ
共同設計：K3建築研究所（構造）、JET企画設計（設備）
構造：RC造
敷地面積：213.96m²
延床面積：885.64m²
竣工年：1990年4月

Nigel Coates
1949年英国生まれ。ブランソン・コーツ・アーキテクツ主宰

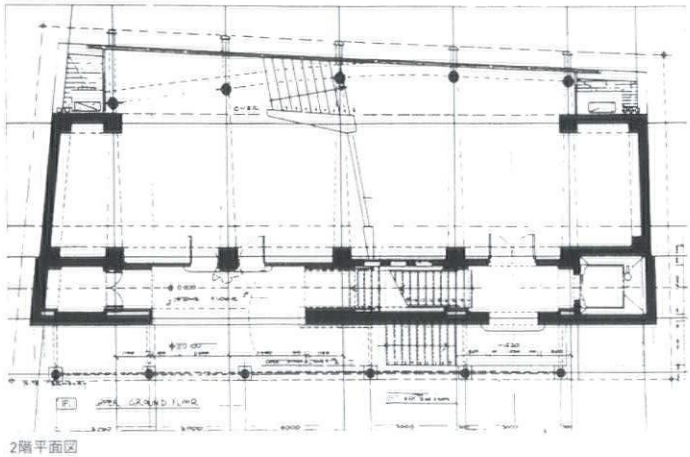
かねこ・みつる
1942年東京都生まれ。弾設計主宰



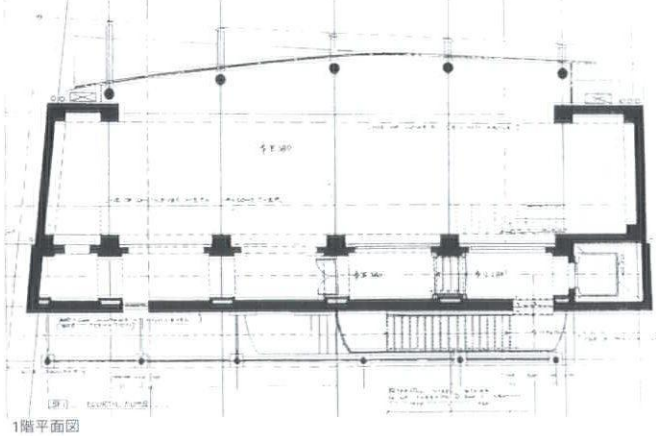
5階平面図



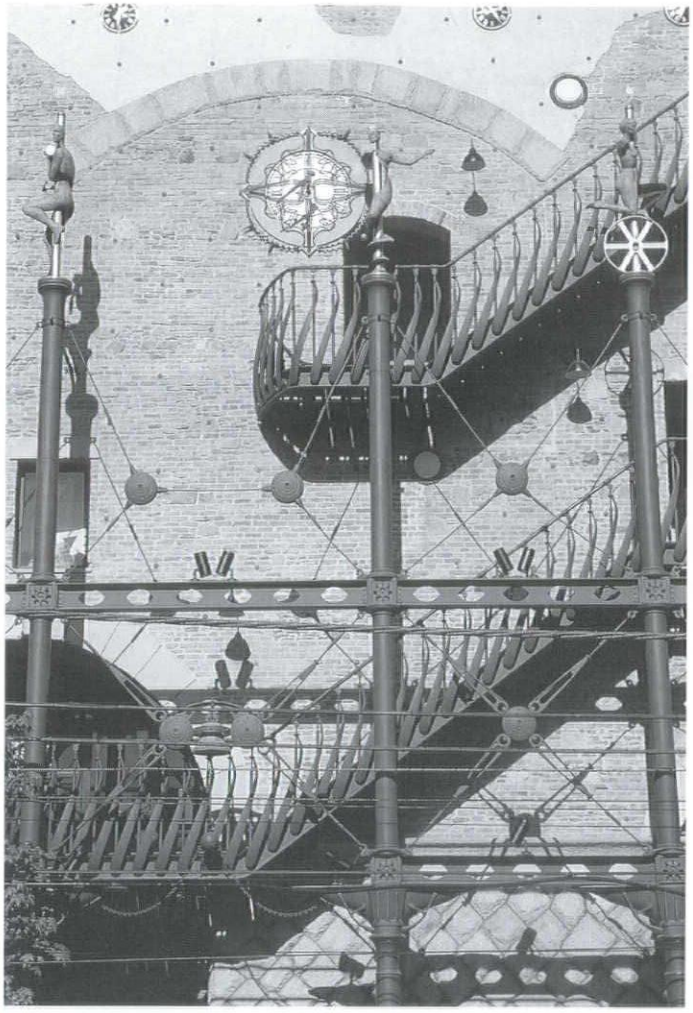
中2階平面図

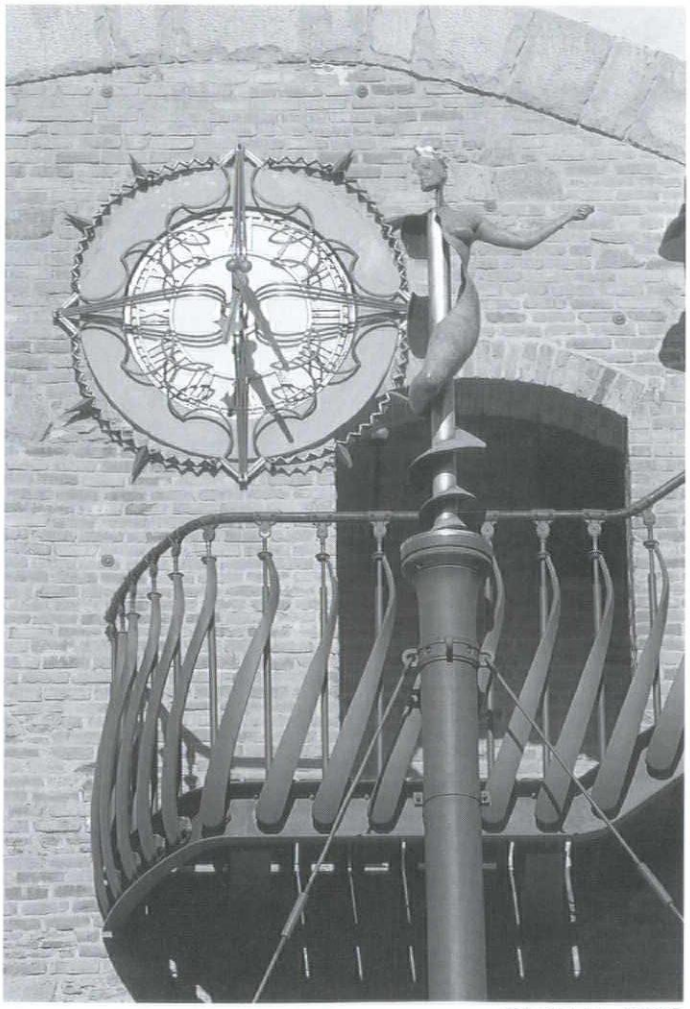


2階平面図

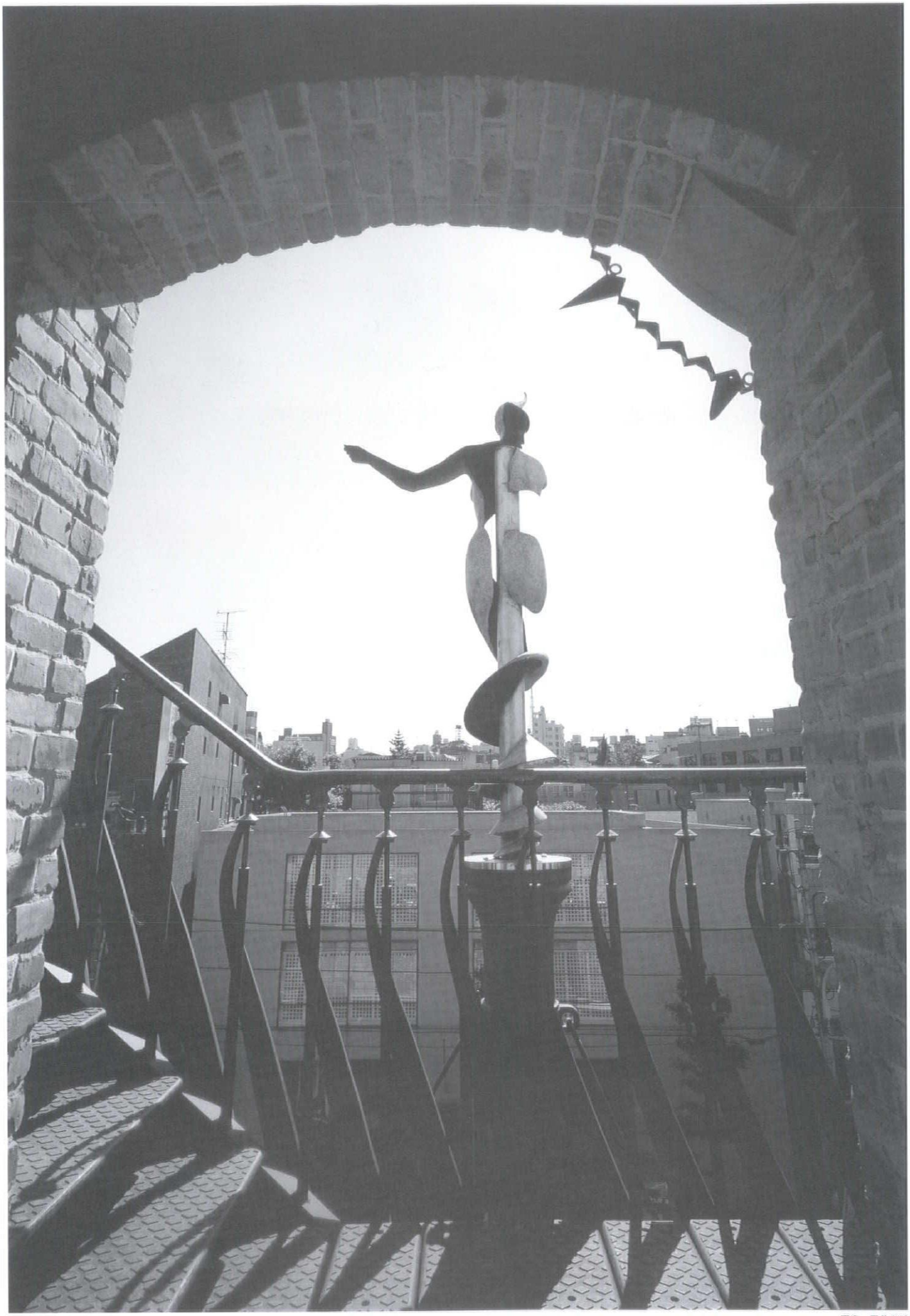


1階平面図





写真（2点とも）＝平井広行

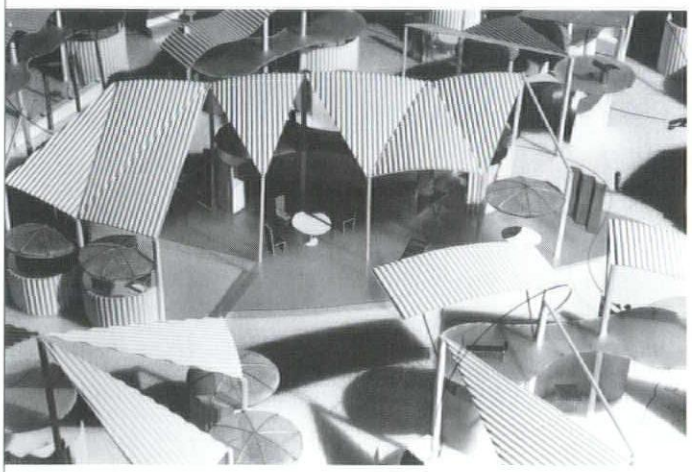


写真＝平井広行

妹島和世

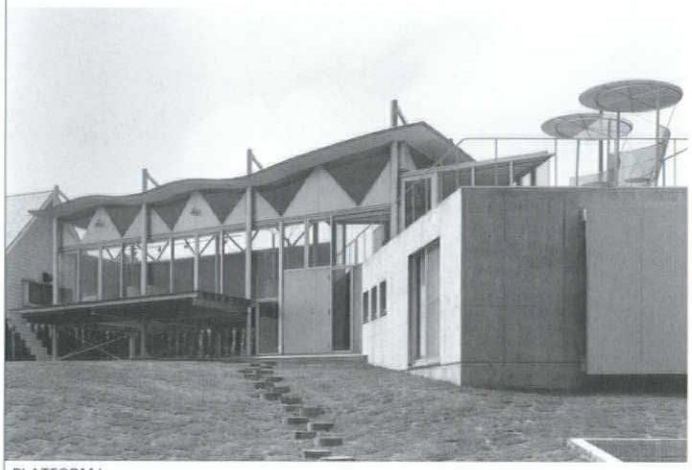
PLATFORM I、II

鹿島賞





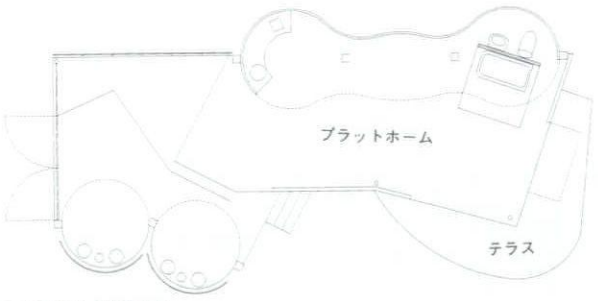
PLATFORM II　　写真（左下、右）＝新建築写真部



PLATFORM I



PLATFORM I　1階平面図

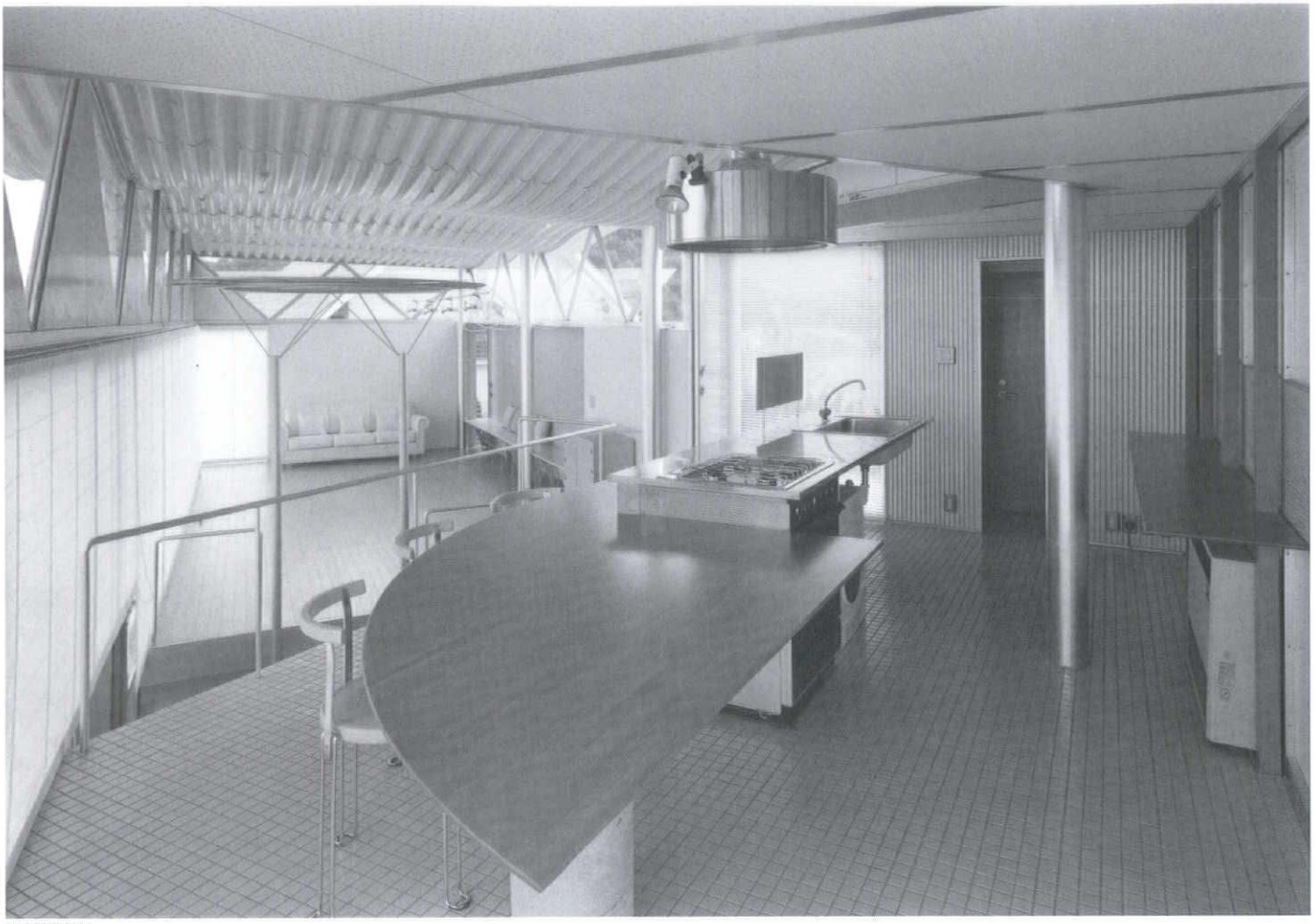


PLATFORM II　1階平面図

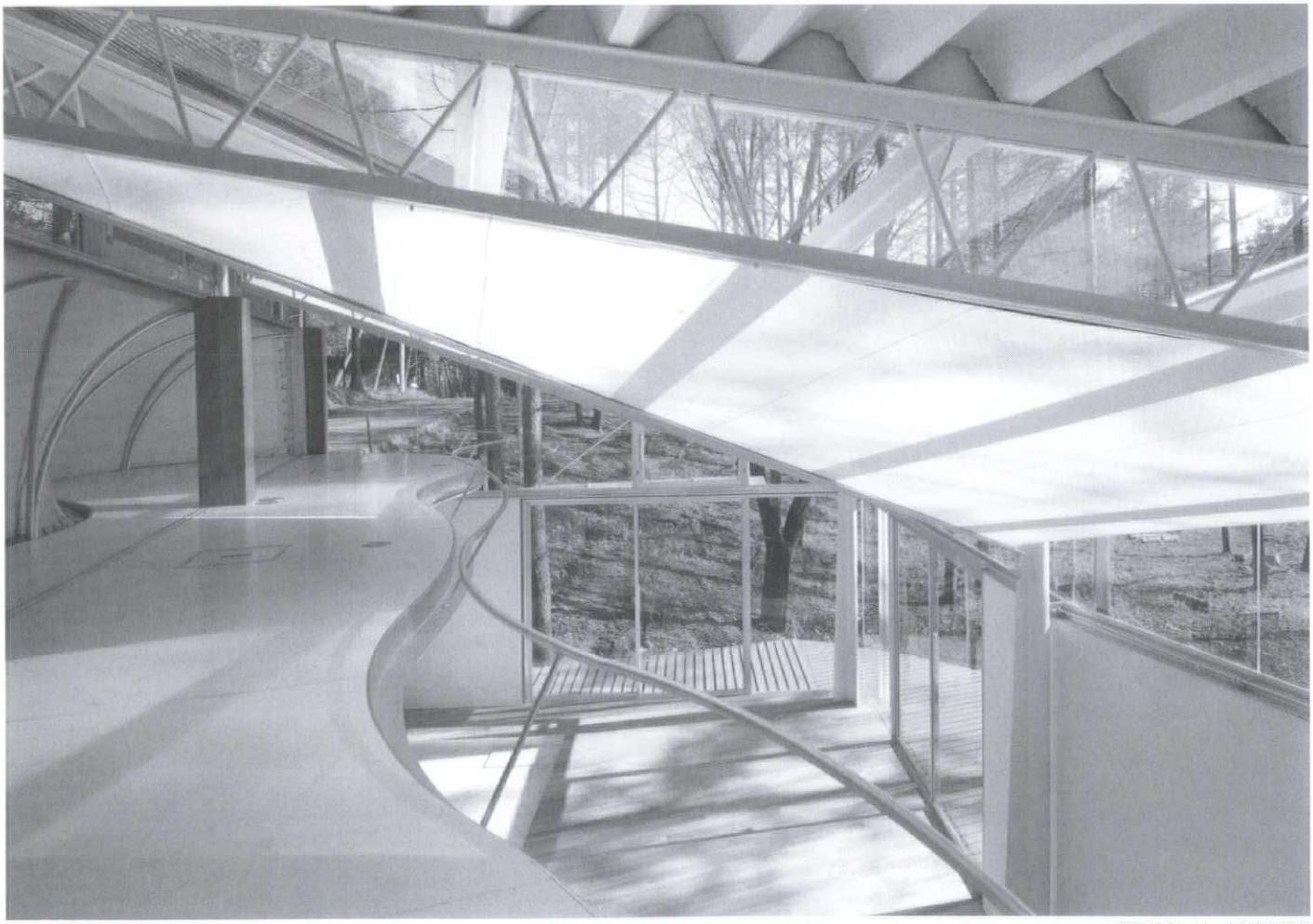
プラットフォームは自分で設計した初めての建物で、さらに、その時のSDレビューは自分で参加した初めての展覧会であったので、いろいろなことを今でも非常に良く覚えています。ちょうど事務所を始めてから1年ほどたった頃で、Iの現場が進み、IIの設計をまとめているときで、ふたつの建物で同じ様なことを思考していたのでセットで応募しました。鹿島賞を頂けたことが本当にうれしかったし、その後の励みになりました。当時はまだ事務所をひとりでやっておりましたから、何かもう少しパブリックなスペースに参加したいというのが応募の理由だったと思います。初めての展覧会でのプレゼンテーションだったので参加するだけで精一杯でしたが、今思えば、あの模型を作ったことから、ああいう建物が出来上がってきたように思います。

所在地：I：千葉県勝浦市　II：山梨県北巨摩郡
建築用途：I：週末住宅　II：アトリエ
構造：I：RC造＋S造　II：木造＋S造
敷地面積：I：541.45m²　II：661m²
延床面積：I：120.47m²　II：66.94m²
竣工年：I：1988年7月　II：1990年4月

せじま・かずよ
1956年茨城県生まれ。妹島和世建築設計事務所主宰



PLATFORM I

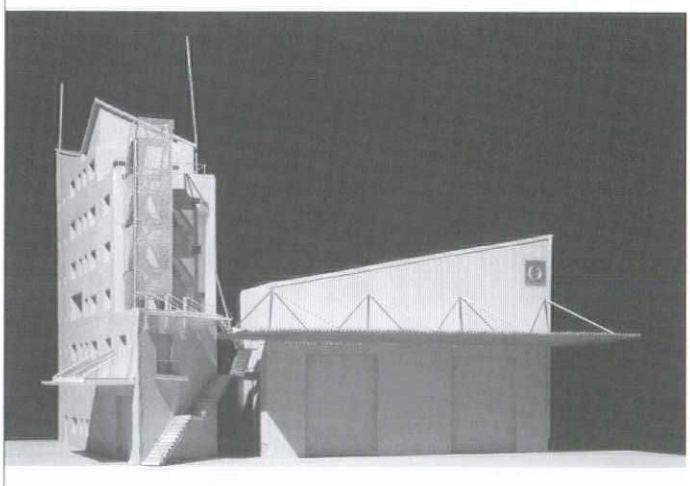


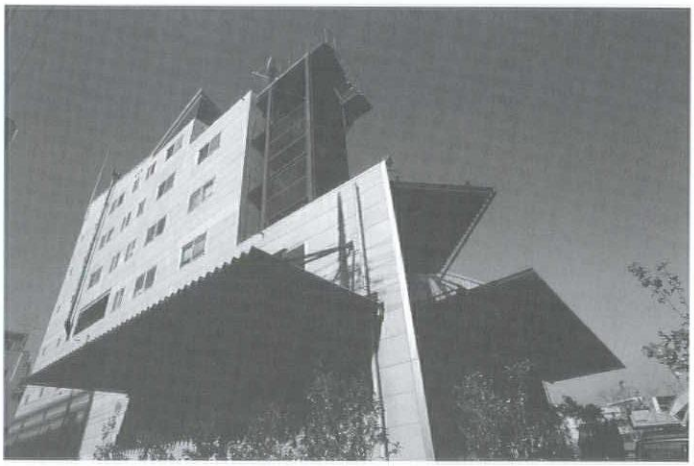
PLATFORM II

写真（2点とも）＝新建築写真部

石原健也+石原奈穂子

雪ヶ谷運送城南島本社屋









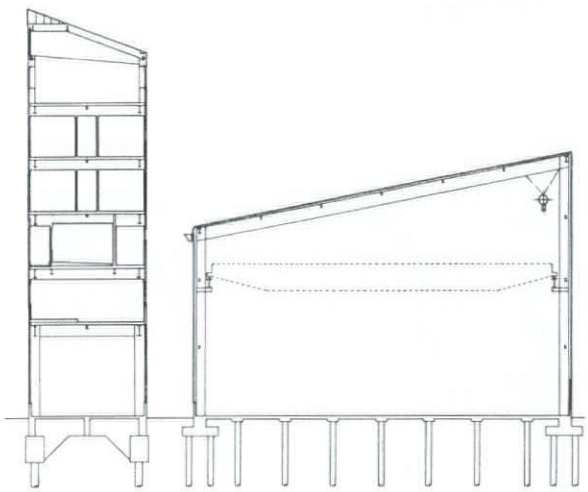
写真（左下、右2点）＝藤塚光政

このプロジェクトは私たちにとって初めての仕事であり、私個人にとっては20代最後の現実化したプロジェクトとなりました。あの時期は建築に「個の表現」が強く求められていましたが、埋め立て地の倉庫群に囲まれた敷地を前にして、私たちは対岸にあったコンクリートプラントの強さにあこがれました。機能を担うエレメントがザッハリッヒに出会うなかに、「都市」が浮かび上がるのではないかと思いました。こうした考えに共感を得られるのかどうか試したくて応募したと記憶しています。当時としては大変にローコストでしたので大きな期待もありませんでしたから、出来上がってからの落胆も大きくはありませんでした。ただ、周囲の建物との距離が離れすぎていて批判力に欠けると感じました。夜間、投光器に照らされるトラックヤードの背景としてこの建物を見た時に、構想が現実化したと一瞬感じたこともありました。（石原健也）

所在地：東京都大田区
建築用途：運送会社本社屋・倉庫
共同設計者：齋藤欽弥／団設計同人（構造）、田島一宏／UDA ENGINEERS（設備）
三浦昭次／アース設計（電気）
構造：S造
敷地面積：4347.78m²
延床面積：1384.52m²
竣工年：1989年

いしはら・けんや
1959年山梨県生まれ。応募当時SUMMARY STUDIO主宰。現在デネフェス計画研究所主宰

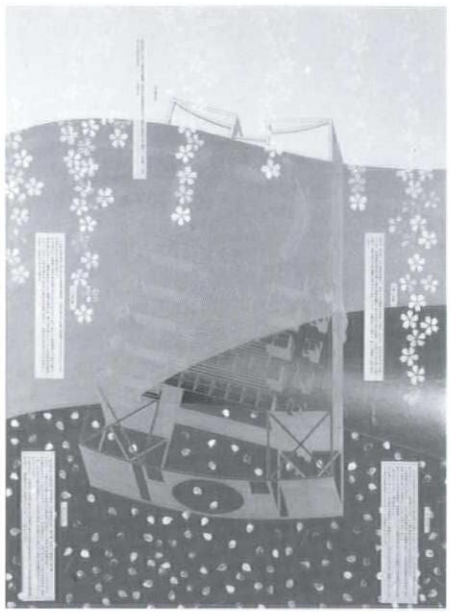
いしはら・なおこ
1963年東京都生まれ。応募当時SUMMARY STUDIO主宰。現在デネフェス計画研究所主宰

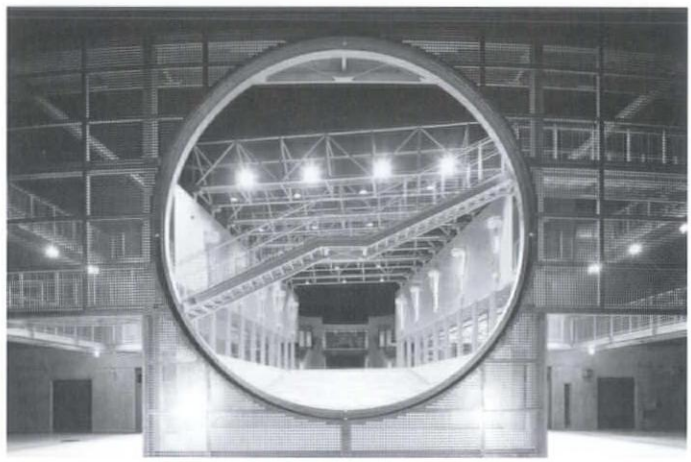


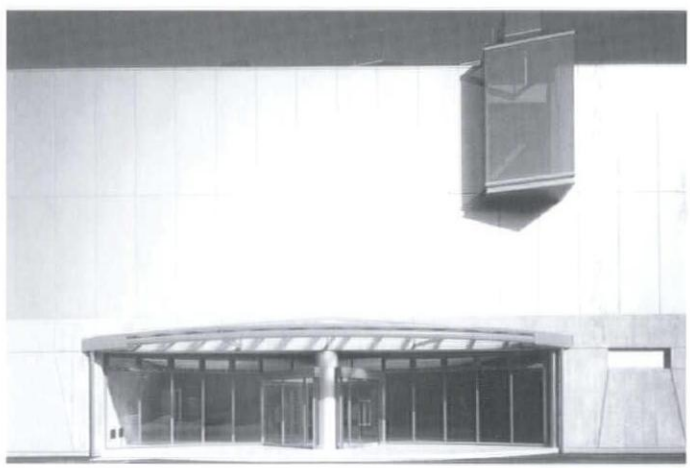
断面図

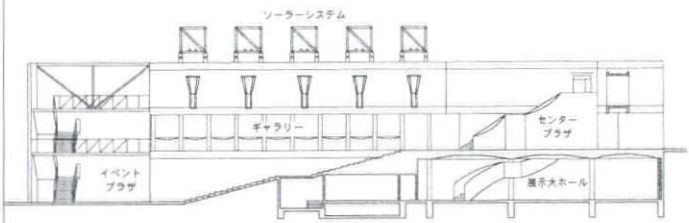
沖中高行

嶺北21世紀センター（アルティ21）









断面図

写真（右2点）＝川添寛

「SDレビュー」についてはあこがれていました。実現するため多くの障害や問題を乗り越えて尚、新しい境地を開いている点で入選作には深い敬意と強い興味をもっていました。

そのうちに私にも地方の町村から設計の仕事が巡ってきました。協議会を何回か重ねながら設計をまとめてゆくのですが、何ら強い制約を受けることなく設計できた記憶があります。「SDレビュー」には、その実施設計案をそのまま提出したと思います。その後これが実現できるかどうかという危機に直面したのは、工事入札の時でした。好景気で工事費が高騰していた社会的背景もあり、予算との大幅な開きが生じて町の役場では大騒ぎになりました。地方で設計がなされる場合、入札価格と予算がピタリと一致するものだったからです。私も県に予算増額をお願いしたり、折衝を重ねるうちに建設会社が超過分をのむかたちで設計変更することもなく着工できるようになりました。今でも建設会社には感謝の気持を忘れることができません。

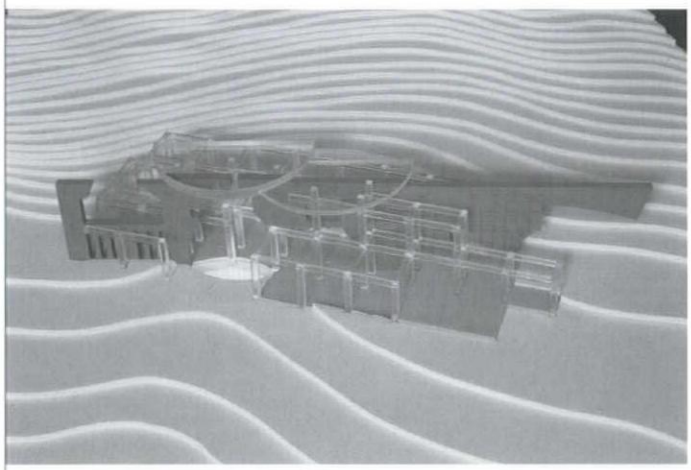
デザイン的には、要求された機能だけでなく第三のスペースを創り出したいと考え、建物をふたつに割り真中にゆるい階段を設けそれが屋外劇場の客席になっています。ステージの背景になるスクリーンの丸窓をとおして雲間に連なる山脈には印象深いものがあるようで、ある自動車メーカーのパンフレットにも登場しました。1本の柱の柱頭に猫の彫刻を置くことでまた騒動になりましたが、今は静かに真中の広場を見つめて猫は佇んでいます。こういった施設が山間部の風景になじむのかと自問すればやはりむつかしいところがあり、自然との対立、調和、表現と抑制といった課題としてその後考え続けています。

所在地：高知県大豊町
建築用途：地域交流センター
構造：RC+S造
敷地面積：12,511m²
延床面積：2,414m²
竣工年：1990年3月

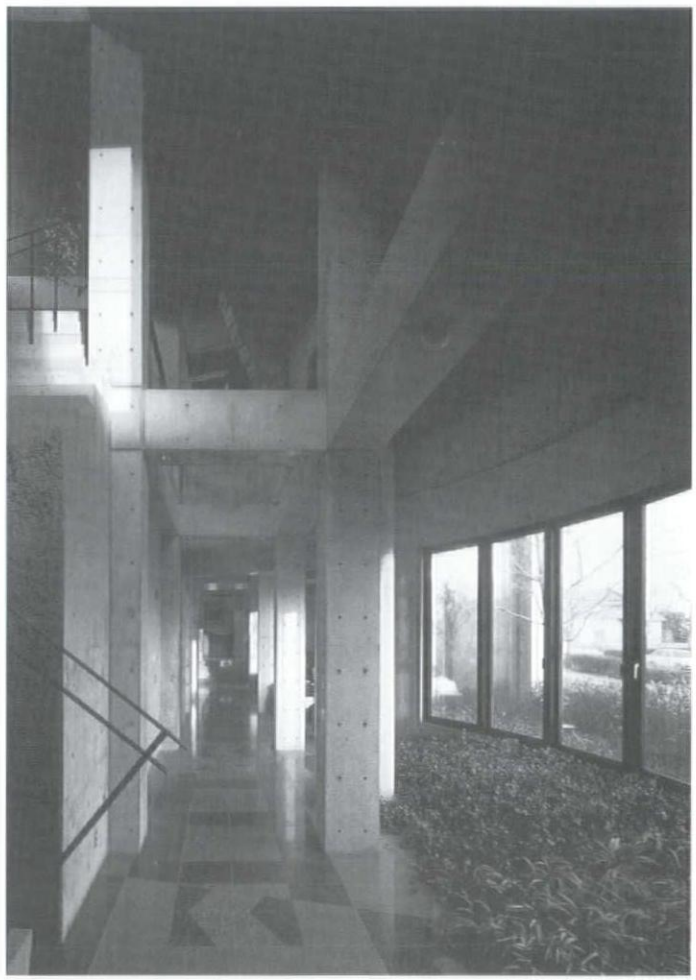
おきなか・たかゆき
1947年兵庫県神戸市生まれ。（株）日本総合計画研究所代表取締役

貴志雅樹

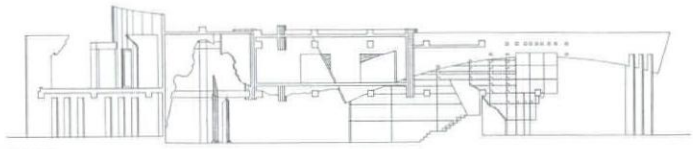
ラトゥール［LATOUR］



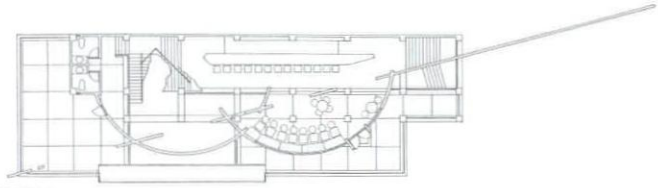




写真（左下、右）＝松村芳治



断面図



2階平面図

この建物は大阪の北部郊外にある。計画当初はスプロール化する都市のエッジ部分にあたり、都市と集落の接点のような場所であった。当時を振り返ってみると、都市、集落、自然、人間の営みなど、各要素の接点のような建築を考えていて、それが応募の動機であったと思う。

建物の大きな構成は、展覧会のモデルで表現したような透明のグリッド（デジタル化してゆく都市の象徴）と、斜めに挿入した壁（集落の神社に向かう軸線に合わせたモノ）である。実際、応募時には着工していたためにプロジェクトの変更はなかったが、この透明性と不透明性を実作においていかに表現するかが問題であった。

素材は両者ともコンクリート打放しなのだが、グリッドの方は壁との間にスリットを入れ光による透明性を持たせ、斜めの壁は目地棒による表面の刻印と斫り仕上げを交えて不透明性を表現した。

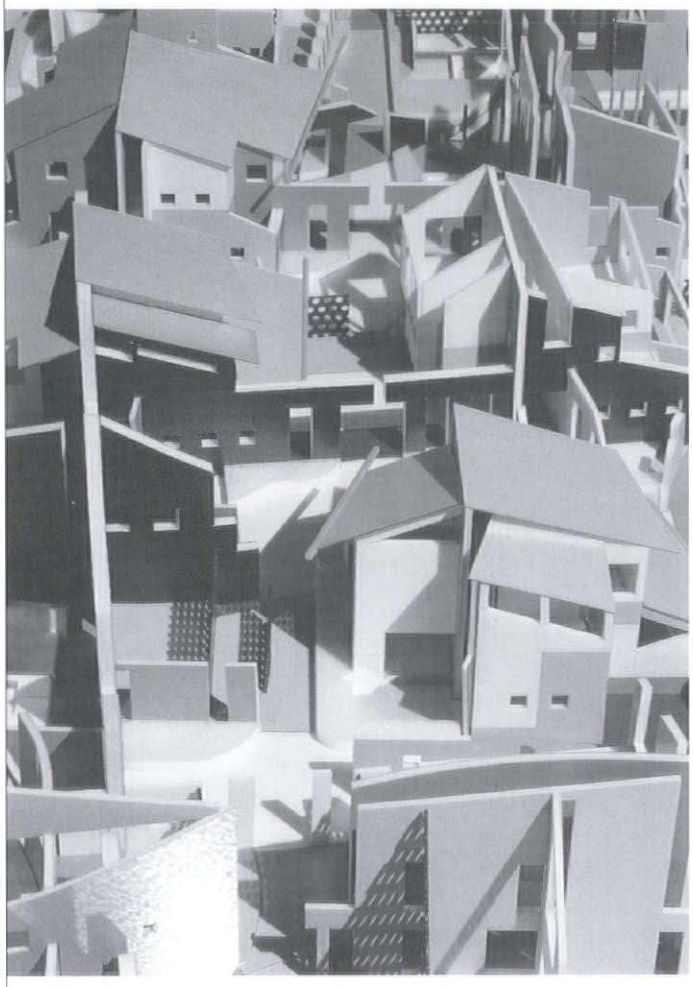
所在地：大阪府箕面市
建築用途：レストラン+ギャラリー
構造：RC造
敷地面積：873.09m²
延床面積：434.53m²
竣工年：1988年12月

きし・まさき
1949年和歌山県生まれ。貴志雅樹+環境企画室主宰

西岡 弘

シーサイドももち地行地区コートハウス

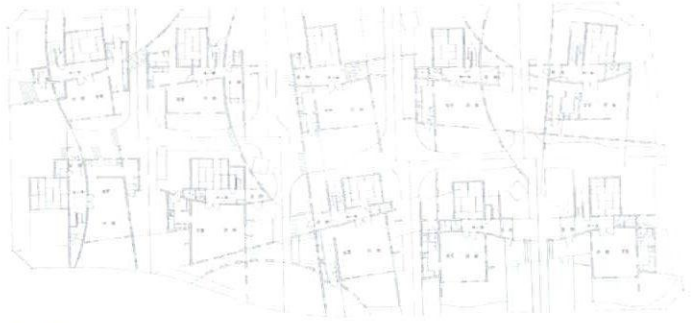
朝倉賞







写真（右2点）＝堀内広治



1階平面図

未だにコートハウスと最初の港湾局の発注時の名称が続いている、現実はまったく逆の発想で行った計画である。

バブル期に万国博覧会場跡地利用計画の一環として、周辺埋め立て地に続々と大型施設が建設される中で、片隅でつつましく計画実施されたものである。

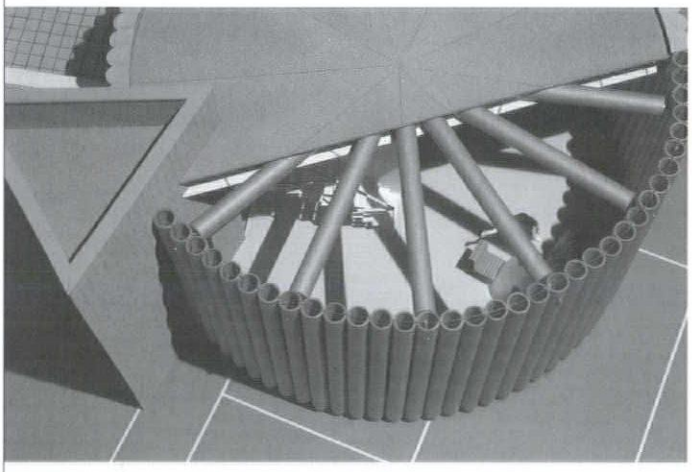
一般的には、事あるごとに原則論によって執拗に関与する行政だが、この計画については違っていたようだ。コートハウスを逆転した発想を面白いと理解してくれたのか、大型物件の中で歯牙にもかけず、無視されたのか今となっては知る由もない。

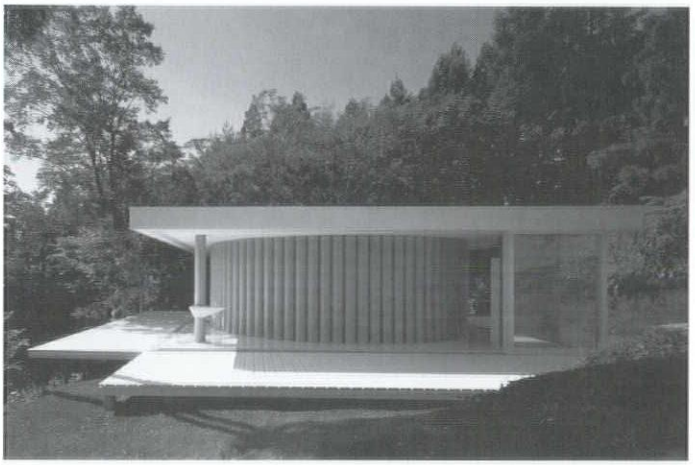
所在地：福岡市中央区
建築用途：住宅（全10戸）
設計者：増山幸雄、伊藤宗明、掛江一也、林洋子
構造：RC造一部木造
敷地面積：222.79m²～306.15m²（10戸）
延床面積：146.00m²～158.82m²（10戸）
竣工年：1989年2月

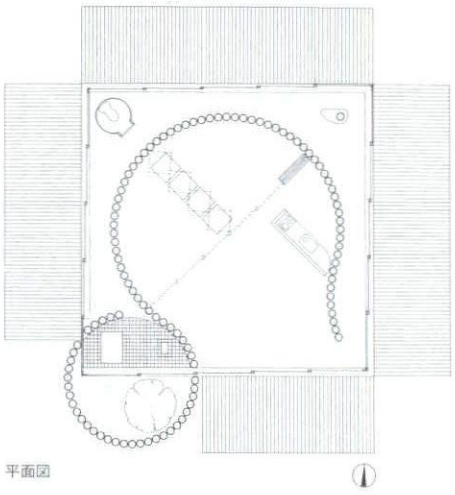
にしおか・ひろし
1945年群馬県生まれ。（株）西岡弘建築工房主宰

坂茂

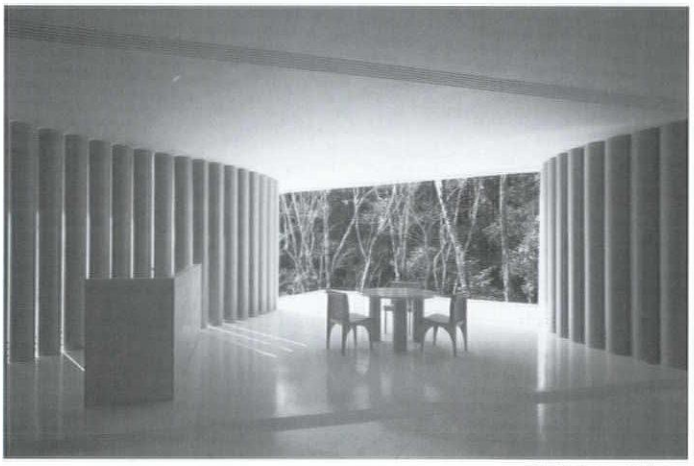
PTS実験パビリオン（紙の家）



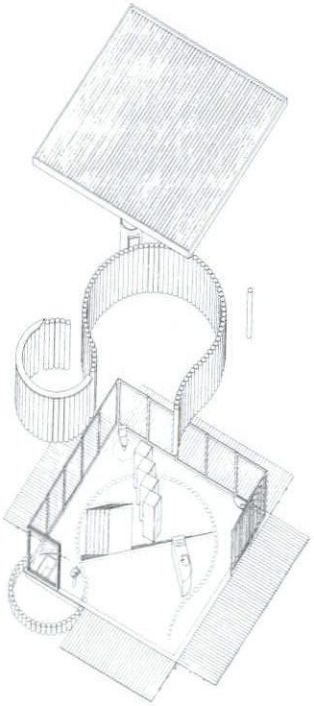




平面図



写真（右2点）＝平井広行



再生紙の筒「紙管」を建築の主体構造として使う「紙の建築」の開発は、1986年にアルヴァ・アアルト展の会場構成にて紙管を内装に使用したのがきっかけとなった。その後いくつかの実現しなかった計画案を経て、建築基準法の第38条の評定を取るため、この「紙の家」の設計にとりかかった。

平面的には床に110本の紙管をS字状に並べ、正方形と円弧の内外にさまざまな空間を形成した。外部の紙管は非構造の目隠しスクリーンとして自立し、構造として使われる80本の紙管により大きな円形を構成し、内部に居住空間と外部に回廊空間を構成している。

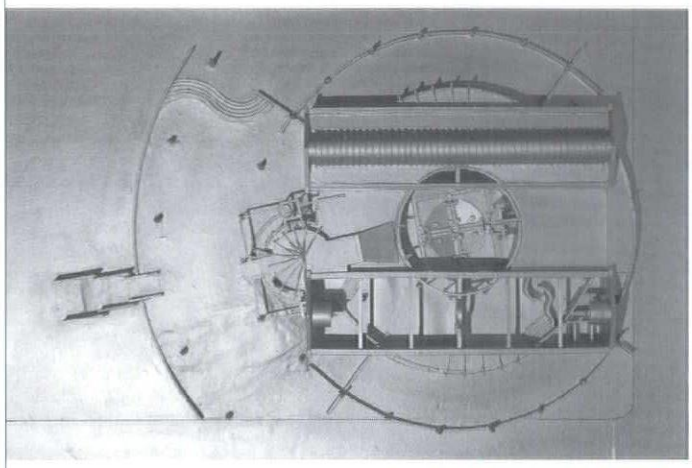
12年前、大学を卒業後日本に帰国し事務所を始めた時、このSDレビューに入賞することが建築家の登竜門的憧れでした。この素晴らしいチャンスがこれからも継続していくことを願っています。

所在地：山梨県南都留郡
建築用途：別荘
構造：PTS（紙管構造）
敷地面積：499.11m²
延床面積：100.00m²
竣工年：1995年

ばん・しげる
1957年東京都生まれ。（株）坂茂建築設計主宰

若林広幸

1919×1989（美食三昧菜館　エスカミューズ）







写真（左下、右）＝藤原弘

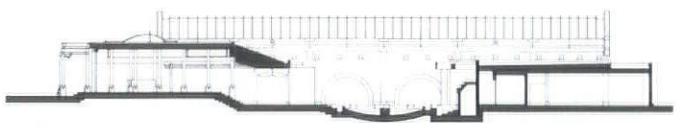
大正時代に造られたレンガ造りの原綿倉庫を中華レストランに改築するというプロジェクト。ここでは従来からよく行われてきた古い建物の時代色を残しながらリニューアルする、といった手法とは異なった建築を提案している。並列する2本の倉庫とは全く関係のないドーナツ状のプランを重ねることにより、そこに空間の歪みを創り出そうとしたものである。古いレンガというクラフトで柔らかな質感に対し、新しいプランにはスチールという硬質な素材を組み込んだのもそのためである。

SDレビューに応募した当時は設計完了間際であったが、ほとんど当初のコンセプト通りの建築が完成した。大きく変わった部分は、料理内容の変更から厨房が大きくなりトイレの位置が変わったくらいである。

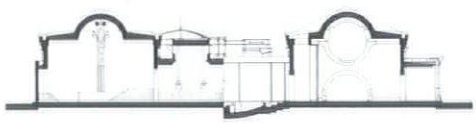
来年で竣工後9年になるが、料理内容の充実と共にこの空間のファンも確実に定着してきている。このエスカミューズは、クライアントによって単なる商業空間ではなく、作品としてきちっと管理していただいている。そういった意味においても私にとって大変やりがいのある仕事のひとつであった。

所在地：大阪府吹田市
建築用途：飲食店
設計協力：竹中工務店（構造）、
リサーチ・アンド・デザイン（設備）
構造：レンガ組石造（既存部分）、S造（新築部分）
敷地面積：5,904.12m²
延床面積：1,025.49m²
竣工年：1989年4月

わかばやし・ひろゆき
若林広幸建築研究所主宰



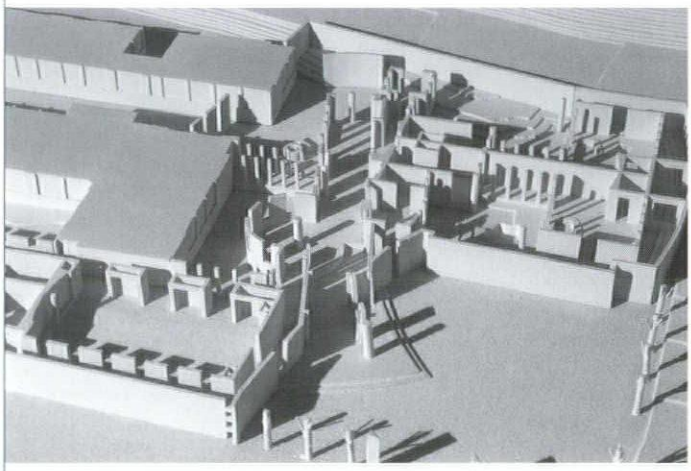
長手断面図

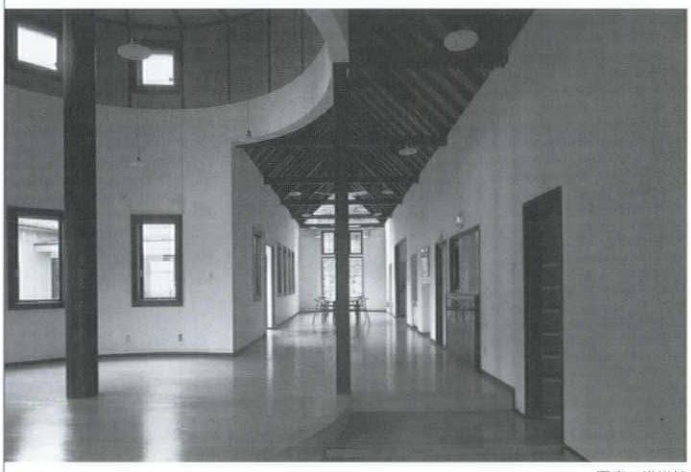


短手断面図

青島裕之

かもめ荘増改築





写真＝淺川敏

佐渡の小木町の温泉旅館の増改築である。計画当時から遡って10年ほど前に、火災で消失したこの温泉旅館は、その後急遽建てた木造平屋の簡単な建物で営業をしていた。この計画はその既存の建物を補強、再生しながら全く新しい空間とイメージを生み出そうというプロジェクトであった。

木造ではあるが、当時盛んに議論されたタイポロジーといったことを意識してか、自立したエレメントが集合した群としての建築、全体が様々な空間を内包する都市的な集合体となるような計画となっている。

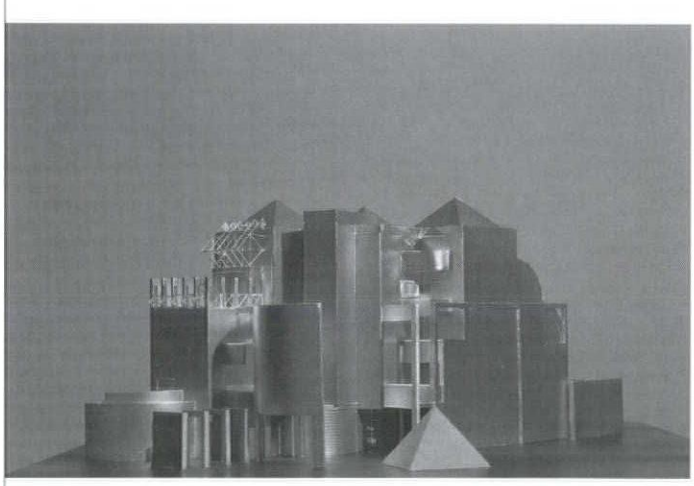
自由で複雑なコンポジションの造形は、佐渡の大工の高度な技によってほぼ当初の計画どおり実現された。実際の建物は計画で表現された以上に豊かで、密度のある空間を生み出していて、10年近くたつ現在でも、新鮮な感動を覚えさせる。事務所を始めたばかりの頃のエネルギーや勢いが、木造を知らない無知さとあいまって、この不思議な味わいのある建築を生み出したのであろう。

所在地：新潟県佐渡郡
建築用途：旅館
構造：木造
敷地面積：2946.84m²
延床面積：1287.76m²
竣工年：1989年8月

あおしま・ひろゆき
1956年静岡県生まれ。応募当時（株）槻・青島建築設計事務所主宰。現在（株）青島裕之建築設計室主宰

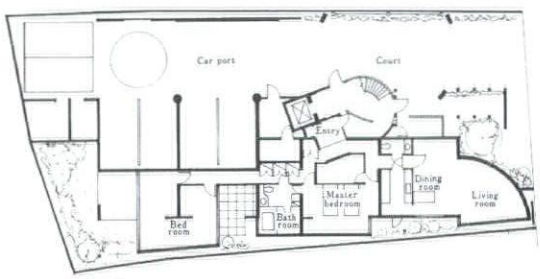
今・井アソシエイツ

ベセル大濠





4階平面図



1階平面図

福岡市で最も高級住宅地と言われる大濠の、しかもアメリカ領事館前という好立地条件の集合住宅として計画された。施主は、近くのマンションに住む個人であった。しかしバブル初期に計画されたこの建物は、着工がバブル絶頂期にあたり（1988年6月建築確認申請合格）、当時の異常な地価、建築費の高騰の状態の中で着工延期になった。その後施主は、集合住宅計画を変更してこの土地に大手住宅メーカーによる自邸を建設して、この計画は中止となる。

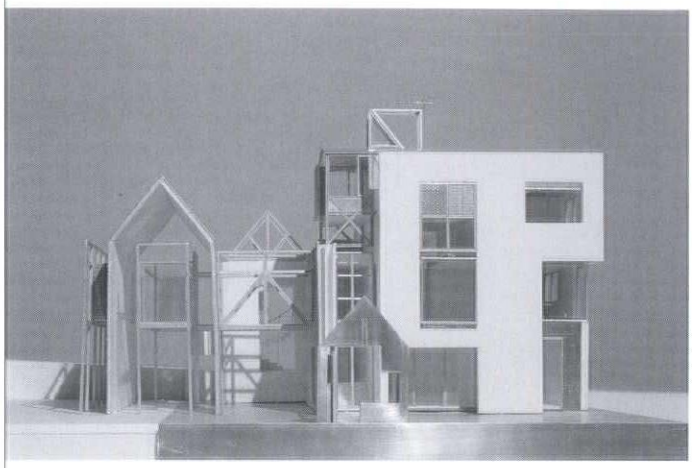
設計者：井本重美、今村敏幸
所在地：福岡市中央区
建築用途：集合住宅（全7戸）
構造：RC造5階建
敷地面積：622.33m²
延床面積：1,153.81m²

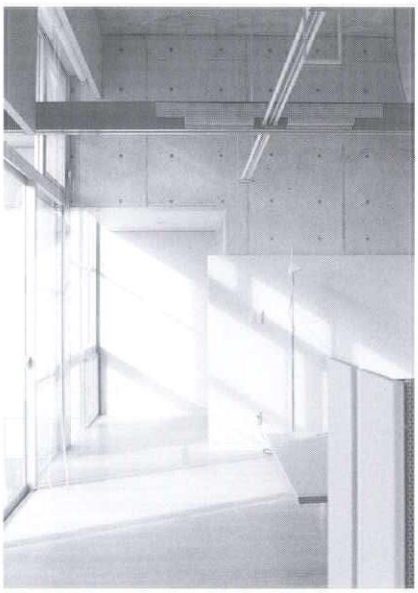
いもと・しげみ
1953年宮崎県生まれ。応募当時今・井アソシエイツ主宰。現在IMOTOアーキテクツ主宰

いまむら・としゆき
1957年宮崎県生まれ。応募当時今・井アソシエイツ主宰。現在環アソシエイツ主宰

入江一央

「内」と「外」の間MA（「内」と「外」の間I／K邸）





写真＝新建築写真部

コンセプト

〈「内」と「外」の間MA〉プロジェクトは、切り裂かれたコンクリートの箱を「外」の殻・形態として「内」の空間を内包する。この「外」の殻に「小さな生きた機能」を担ったさまざまなユニット装置・フレームを挿入することによって、この「外」の殻は道路・アプローチに対応するファサード・ウォール、南側に面して開放されたテラス・ウォール、西側増築部を表示するメタル・ウォールの構成に変容する。そしてこの「内」と「外」の間に介在する各ファサードを通して、また「小さな生きた機能」を担ったさまざまなユニット装置・フレームを通して、「内」の空間が生まれる表情が「外」へと滲み出ていく。

応募の動機

大学の研究教育の一貫として

出展作品のコンセプトを実際の作品の中でディテール、素材、色などを考慮しながら深めることができる。

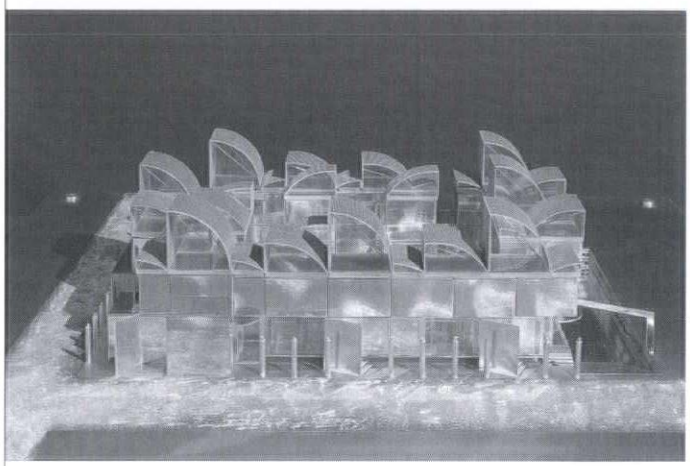
所在地：静岡県浜松市
建築用途：住宅
共同設計者：入江高世
構造：RC一部S造
敷地面積：330.5m²
延床面積：215.9m²

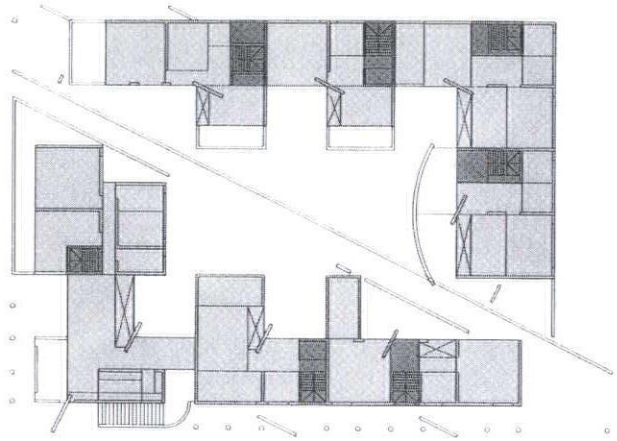
いりえ・いちお
1946年生まれ。応募当時室蘭工業大学工学部助教授。現在早稲田大学理工学部建築学科教授

北山 孝二郎

成城プロジェクト

SD賞





2階平面図

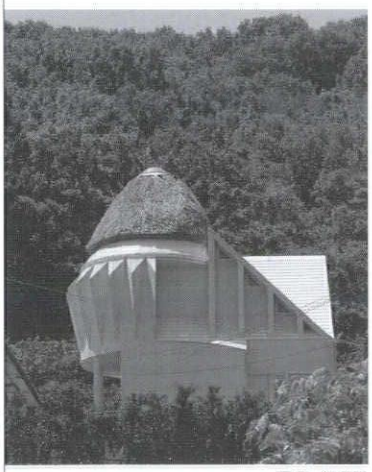
8戸の集合住宅からなるこの計画の敷地は、世田谷区成城の閑静な住宅街にあり各々8m、6mの道路に面している。周辺の閑静なたたずまいも最近の開発によって細分化され、以前からある生垣のリズムは、少しずつ崩れつつある。景観を守り新しい居住空間を生み出すために、コート形式を採用して敷地全体に一体感を持たせつつ、ゆとりある街並を回復させようとした。軽いシェルターをイメージさせるヴォールト状の屋根の重なりは、連続する流れを作り街並に新しいシルエットを投影する。光、風を感じながら時間とともに変化する空間を、街並の中に創り出そうとした。実施設計に入りすべてのディテールが決定し、建設会社の最終コストを提示した数日後、クライアントが突然倒れられた。相続対策の一環として行われたこのプロジェクトは、この事件であっけなく消え去った。

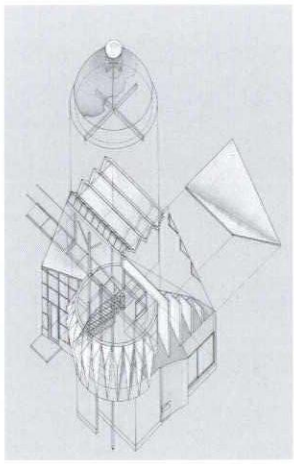
所在地：東京都世田谷区成城
建築用途：集合住宅
構造：RC造
敷地面積：1342.25m²
延床面積：1288.34m²

きたやま・こうじろう
1947年京都府京都市生まれ。北山孝二郎+K計画事務所主宰

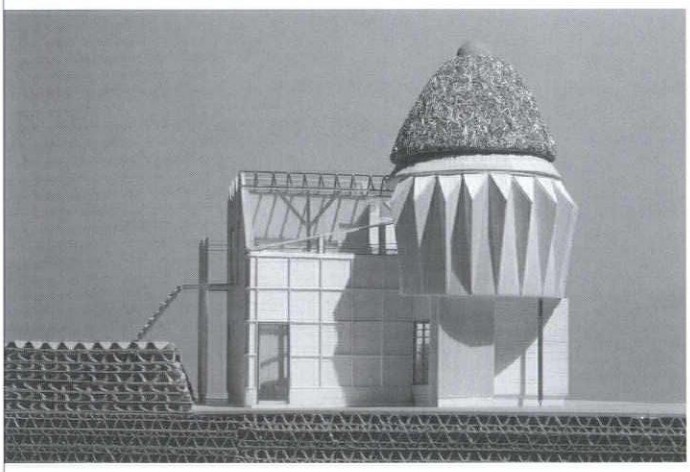
久保清一

蜜柑花の家





写真＝絹巻豊



蜜柑花の家は、施主の祖父（当時84歳）のために快適な住居を提供しようと、その子や孫ら親族が協力して建てた農家の離れ家である。場所は、壺井栄の小説『二十四の瞳』で有名な小豆島・内海町で、海に面した斜面地に位置している。蜜柑の甘酸っぱい香りに誘われて敷地に立てば、眼下に瀬戸内の静かな海が広がっている。SDレビュー出展後、設計変更もなく建物は完成したが、現場の作業は思いのほか大変であった。斜面地の人力による資材運搬、また、文化財保存協会を通して岡山より入手した芽材料は、島でひとりの芽葺き職人である佐伯さんと工務店、設計事務所、施主の祖父が協力して葺いたものとなった。さまざまな困難が生じたが、納屋に寝泊まりする常駐管理体制で現場を乗り切った。

今年、竣工より8年が経過して、元気に暮らしていた施主の祖父（92歳）が調子をくずし夏に他界された。蜜柑花の家は、その記念碑のごとくいまなお静かにたたずんでいる。

所在地：香川県小豆郡
建築用途：専用住宅
構造：木造
敷地面積：989.29m²
延床面積：75.93m²
竣工年：1988年

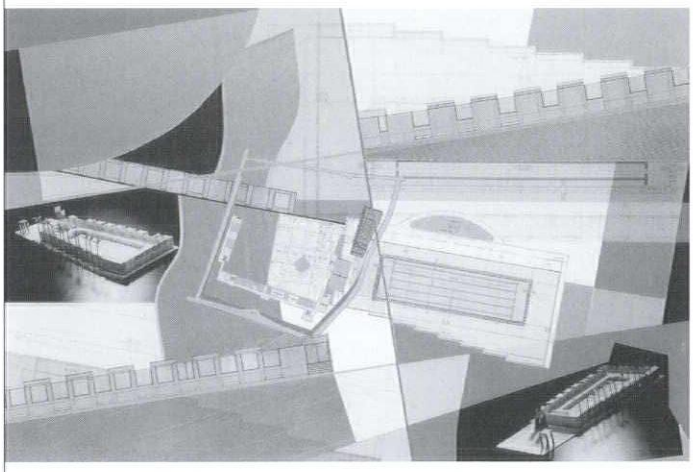
くぼ・せいいち
1953年静岡県生まれ。アルキービ総合計画事務所代表、大阪芸術大学助教授

黒田和司+NEU総合計画事務所

中和田小学校水泳プール



写真＝黒田和司



公共施設には多種多様なあり方が考えられるが、政令都市規模の組織となると、固定したプログラムの中での一般解を求めてくる。その中で個別解となり得る要素を見出すことが計画の主眼となった。

一方、プール平面自体の空間化には制約があり周囲の環境を取り込んでの計画となった。しかし当初のオブジェ広場の提案は途中、他校にはないとの理由から実現はされず、その補遺としてSDレビューでの巨大なオブジェとなった。

この計画では付加的な要素に個別解を求めたことが、それがなくても成立するという一般解の論理の前には有効ではなかったといえる。

最近竣工したプールでは傾斜地に立地する特性を環境化し、プログラムにない展望ギャラリーの実現に至った。これは個別な敷地要件を他の部分の成立に不可欠な要素として構成し、一般解の上に新たな関係性を開いた結果と考えられる。

社会の求める趨勢は一般解の変種である方向が強い今日、固定されたものを少しずつズラすことが残されたテーマとも言える。

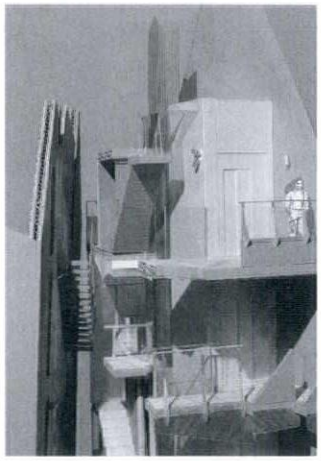
SDレビューもある意味でそのことを浮き彫りにする機能を担っているように思われる。

所在地：神奈川県横浜市
建築用途：小学校プール
共同設計者：黒田英美
構造：RC壁式構造
敷地面積：23,354m²
延床面積：548m²
竣工年：1989年3月

くろだ・かずし
1949年神奈川県横浜市生まれ。NEU総合計画事務所主宰

シーラカンス

TRANS［光の変換装置］





写真＝新建築写真部

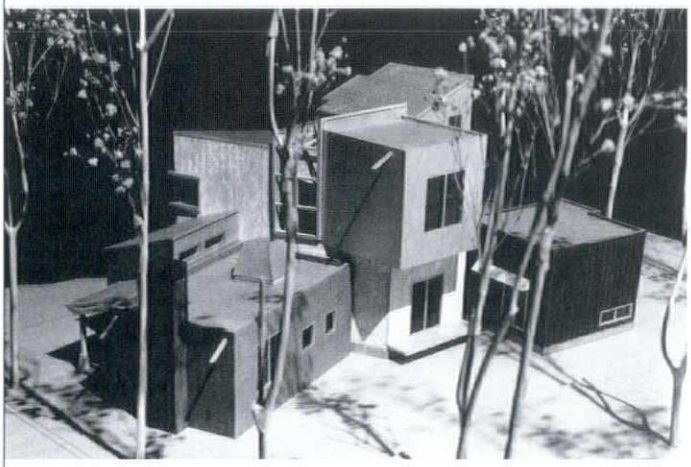
都心の家をビルに建て替え、人は郊外へ住み替わるという社会的状況のただ中で、都市で生活することを決めたクライアントが、もっと楽しい生活を実現できるようにと設計がスタートした。周囲の環境の悪化や変化に対し、最上階での生活を設定し、第2の道として階段部分を開放することと、最上階からの光が建物全体をつなぐ柔らかいスパインになるように提案した。ビルの階段というのは普通は佇む場所にはなりにくいが、ここでは光のTRANSを感じる気持ち良い場所になっている。光をテーマに取り組み始めた頃で、展覧会のドローイングで考えていた程にはさまざまな効果を得たとは言えないかもしれないが、時を経ても訪れる度にその日の天気によって、何かいつも異なる不思議な空気が漂っているのを感じる。「くもり」の状態に関して今でもこだわっているが、なかなか捉えることの難しいテーマである。（工藤和美）

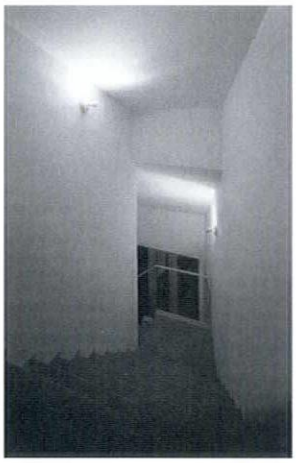
所在地：東京都台東区台東
建築用途：事務所+住宅
共同設計者：石本建築事務所（監修）
構造：RC薄肉壁床構造
敷地面積：95.75m²
延床面積：366.96m²
竣工年：1989年5月

シーラカンス
6人のパートナーで1986年に東京にて活動開始。現在8人のパートナーで活動中

鈴木文章+坂牛 卓／日建設計

河口湖T計画





写真＝本木誠一

分譲別荘地に建つこの建物は、東京で代々ふぐ屋を経営する若旦那とその両親のための週末住宅である。週末住宅であり別荘ではない。日常性から逸脱した住まい方をしたいのではなく、あくまで日常の住まい方の延長をここで繰り広げたいというのが要望だった（リニアモーターカーができればここから通いたいというのが彼らの願いであった）。分譲別荘地の敷地とは一区画500m²程度の広さで、都市的スケールでみれば広いとはいえども森の中の土地としてみれば小さく、きのこがごろごろ生えるように別荘がひしめいている。先ほどのリニアモーターカー通勤の話と併せ考えれば、その昔ウィリアム・モリスが郊外住宅の典型としてのレッドハウスを作ったように新たなマストラの出現を期待した（今のところまだそのようなものは現実のものとなっていないが）新たな郊外住宅の典型がこんな所にできあがってもおかしくはないと思った。郊外という都市的とも田舎的とも言い難い曖昧な場所における住まい方とはやはりそうした曖昧さの中にあるであろう。一方そうした曖昧な生活を包む箱は5人家族+おじいさんおばあさんのすべての趣向や生活様式の羅列がそうしたあいまいさの表現として自然であろうと考えた。何かひとつの支配的な趣向で全体を貫くことはこうした曖昧な場所と生活の器としては適していない。だから各人の要望をそのまま形にしそれらを直接的につなぎ合わせるという手法をここではとった。

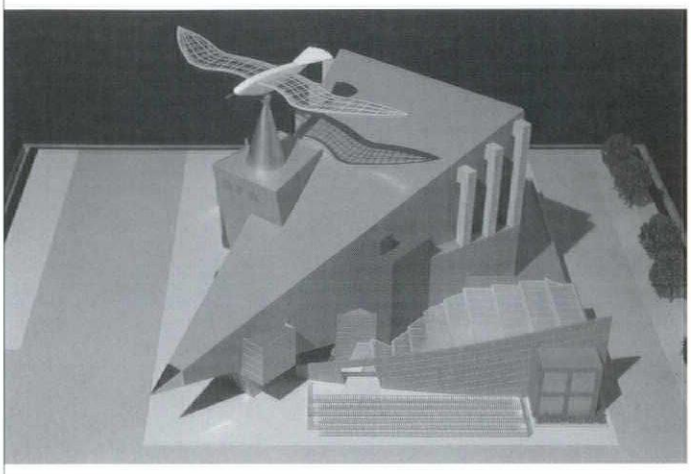
所在地：山梨県南都留郡
建築用途：週末住宅
構造：木造一部レンガブロック造
敷地面積：672.70m²
延床面積：203.26m²
竣工年：1989年2月

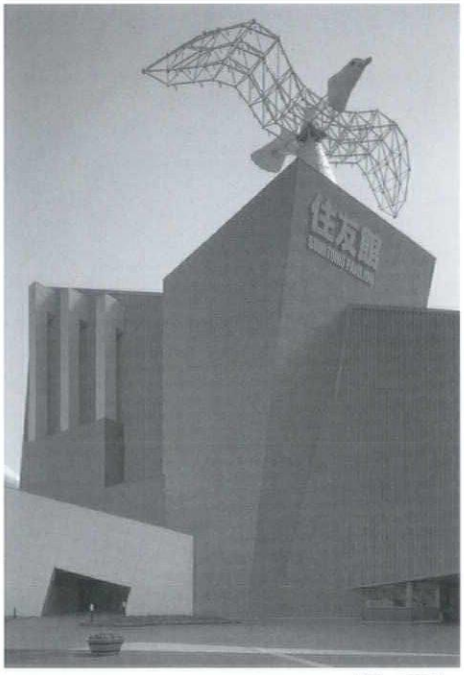
すずき・ふみあき
1955年宮城県生まれ。TAC88主宰

さかうし・たく
1959年東京都生まれ。日建設計勤務

玉川和正+坂牛 卓／日建設計・東京

横浜博覧会住友館





写真＝本木誠一

この建物は1989年横浜みなとみらい地区で行われた横浜博覧会における住友グループのパビリオンである。全体テーマは「宇宙と子供たち」であった。宇宙よりもむしろ子供に力点を置いて子供の持つ色彩への感覚を鼓舞することをこの建物の主眼とした。そのために一形態一色という原則と色がさまざまな角度から光を浴びるように外壁の角度設定を行った。この当時設計していた河口湖T計画同様、形態的にも色彩的にもあるひとつの趣向が全体を支配しない発散的な雰囲気を目指した。そうした雰囲気の延長としてキッチュの象徴をカモメという形で唐突に建物の頂部に据えることとした。

所在地：神奈川県横浜市
建築用途：パビリオン
共同設計者：小堀徹（カモメ構造）
構造：S造
敷地面積：2800m²
延床面積：1780.75m²
竣工年：1989年1月

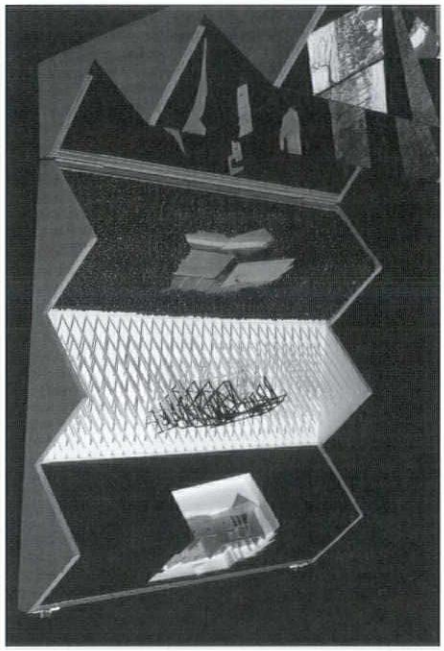
たまがわ・かずまさ
1957年山梨県生まれ。応募当時日建設計勤務。現在アートランダム主宰

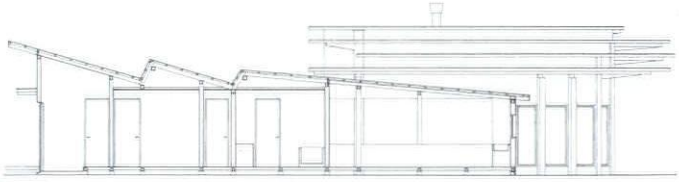
さかうし・たく
1959年東京都生まれ。日建設計勤務

M.タルディッツ+石田壽一+D.ユラノヴィッチ

Boogie Fuji Duck House

SD賞





断面図

これは、山梨県河口湖畔の別荘計画であった。老夫婦とその家族が少なくとも5人以上集まって一時を過ごすための住宅としてデザインされたが、残念ながら予算の都合で実現を見ることはなかった。この住宅の3つの主なコンセプトとは、自然との関係（象徴および物理的両面）、コミュニティースペースの考え方（ホワイエ）、そして住むための機械（単純に並べられたベッドルーム）ということであった。そしてデザインの過程、その変遷が、SDに応募したドローイングのイメージを引き出すものとなった。

富士山に面した森の斜面に立つ、華奢な木造のシェルターは、地球の原型のような荒々しい火山岩の石垣の上に建つ。暖炉を中心に展開された内部空間からは、日本の季節の典型の姿としての富士山がそびえて見える。設計中に思いがけず鴨の形が現れた。その意味のない形跡が音楽のカウンターポイントの様に浮沈し、想像の可能性を広げている。（マニュエル・タルディッツ）

所在地：山梨県南都留郡
建築用途：住宅
構造：木造一部S造
敷地面積：1,494m²
延床面積：126.5m²

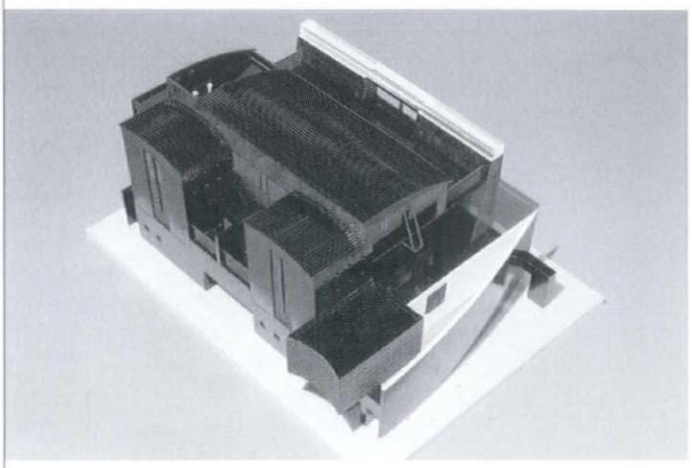
Manuel Tardits
1959年フランス生まれ。応募当時東京大学大学院博士課程在籍。現在みかん組主宰

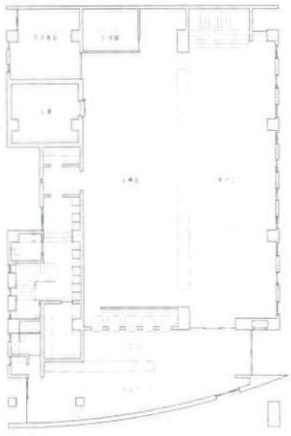
いしだ・としかず
1958年東京都生まれ。応募当時東京大学大学院博士課程在籍。現在九州芸術工業大学助教授

Diana Juranovic
1961年ヴェネズエラ生まれ。応募当時北川原温＋ILCD勤務。

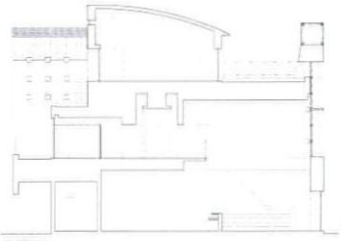
松島 健

BANK





1階平面図



断面図

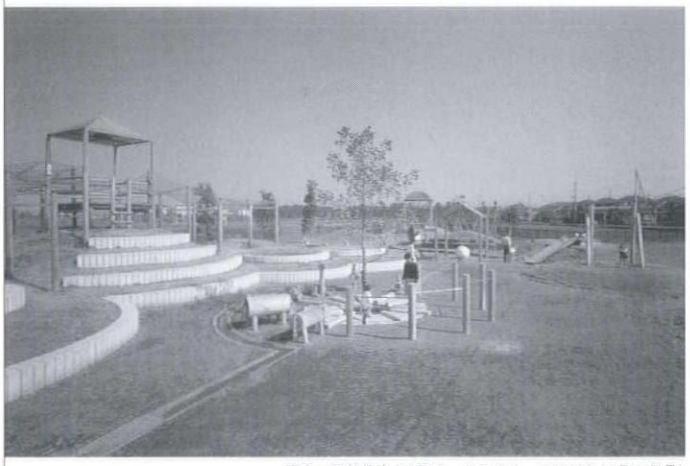
1988年、金沢にある地方銀行の支店の改築計画を依頼された。1960年代の磯崎新による福岡相互銀行や、1970年代の菊竹清訓のコミュニティバンクの実践を経て、当時の銀行は巨大な金庫的建築から脱皮し、身近でやわらかな企業へと変わろうとしていた。本計画においても地域に根差した銀行の姿を要求された。敷地は近代化された大通りに面していたが、一歩裏道にはいるとそこには昔ながらの庶民的生活と小さなスケールの街並が隣接していて、そうした表と裏との境界を建築的に考えることを主題とした。表は建築が大きく見えるように、一方裏においては背後の木造の街並にスケールをなじませるよう全体を小さな形に分解している。SDレビューでは計画段階でありながら多くの方々から意見をいただくことができ、たいへんありがたかったのだが、その後発注者の方針が既存建築の部分的改修へと大幅に変更したため、この改築計画は実現へ至っていない。

所在地：石川県金沢市
建築用途：銀行
構造：RC造
敷地面積：754.00m²
延床面積：793.58m²

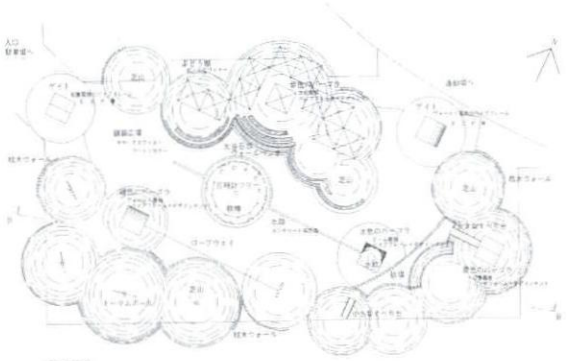
まつしま・けん
1955年石川県生まれ。松島健建築設計事務所主宰

山中知彦+丸山恭

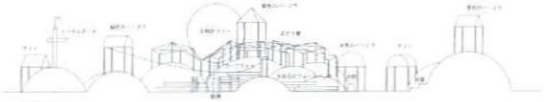
宮代町の巨峰広場



写真＝阿部伸治（日経アーキテクチュア1989年11月27日号）



平面図



断面図

応募時のイメージと竣工作品とのギャップは、共同設計者の適切なフォローもあってほとんど生じていない。また、竣工直後と竣工後5年位に立ち寄った時の使われ方を観た印象としては、小さな子供達に遊んだ記憶の残る固有の場所をプレゼントしたいという当初のねらいはまずまず実現できたと思う。しかし、技術的には未熟な時代で、盛土への芝生の養生や遊具に使った木架構のその後の経年変化が心配ではある。意匠的には今思うと、もう少しさりげなさが欲しかった。ほんのささやかな広場の設計ではあったものの、このような日常的な場所の大切さに対する意識は今でも変わっていない。また、その後の外部空間の仕事の原点として個人的には思い出深い。

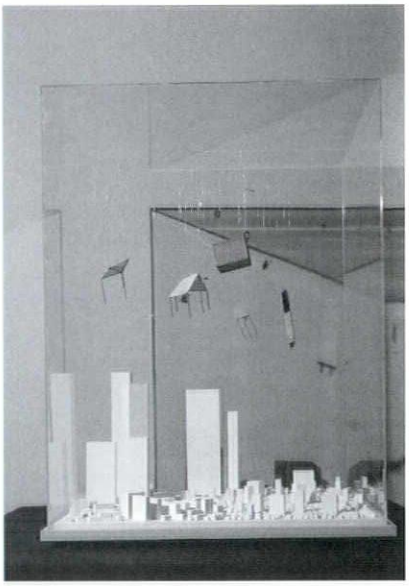
所在地：埼玉県宮代町
建築用途：公園
共同設計者：(財)埼玉県都市整備公社、グラウンド・アート(株)
構造：盛土
敷地面積：1250m²
竣工年：1989年3月

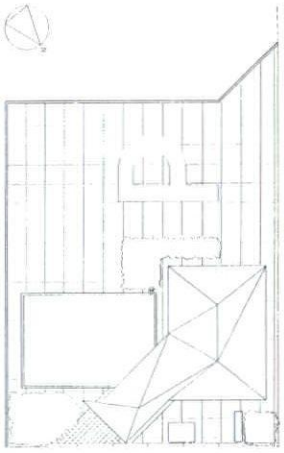
やまなか・ともひこ
1952年東京都生まれ。(株)都市建築研究所主宰

まるやま・きょう
1963年長野県生まれ。応募当時(株)都市建築研究所主宰。現在丸山恭建築設計事務所主宰

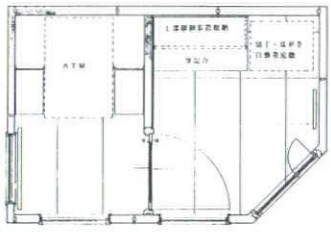
郵政省建築部

可搬型自動化臨時郵便局庁舎





配置図



平面図

仮設性とは、他の様式と同様に同時多発する諸事象の、あるカテゴリーを可視化する手法のひとつであり、単なる現実の要求に対する解答ではない。

ここで重要なのは、プログラムを解決しつつ新たにそれに問い返す行為によって生じる多義性であり、情況から発する多様性と拮抗可能なリアリティを求める努力である。

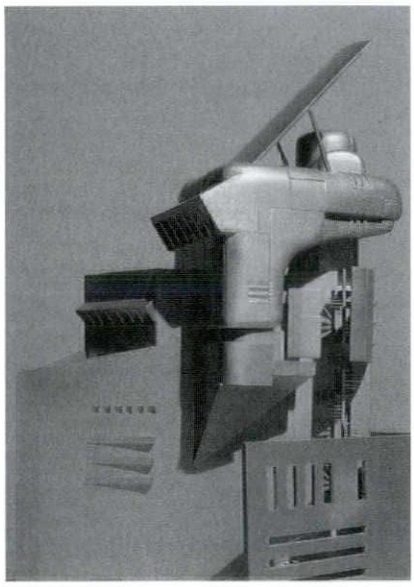
このプロジェクトは、本来郵便局庁舎改築工事中におけるサービスダウン防止が目的であった。しかし、テレコミュニケーション装置としての郵便システム端末に、ひさしを拡張したテントを付加し、地域コミュニティ活性化の装置とすることによって、空間のポテンシャルを高めることが、新たなプログラムとなった。8m²弱の室内には、ATMおよび切手、はがき自動発売機が納められ、照明、空調のコントロール、扉の施解鍵とともに自動運行される予定である。

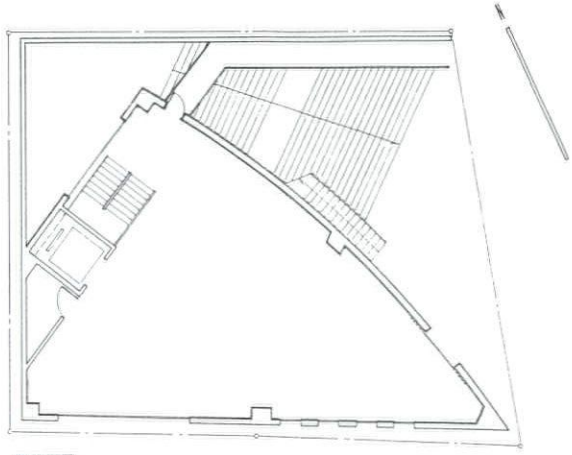
設計者：関淳夫
所在地：札幌市西区
建築用途：臨時郵便局
構造：スチール製フラッシュパネル組立構法
敷地面積：63.85m²
延床面積：7.52m²

せき・あつお
1958年東京都生まれ。郵政省建築部

渡辺 誠／アーキテクツ オフィス

IN-EX





1階平面図

古典的な意味のカオスをそのまま提示しても、なんの解決にもならない。それは当然です。必要なのは、もういちど綴り合わせることでしょう。ではどうやって綴るのか、それが問題。そのとき、建築をシングルパッケージに包み込むのもいいけれど、建築をイベントに代えてしまうのもいいけれど、それ以外の道も探してみよう。なぜって、建築は、いやでも物理的な実体として出現してしまうのだから。というわけで、試行が始まった。

SDレビューに登場させた4体のプロジェクトは、いずれも実現しなかった（会場の模型の前でクライアントが記念写真を撮っていたのに！）。しかし、それらのプロジェクトで試行されたテーマは相互に関わり合い、そしていくつかの建築として現実化した。

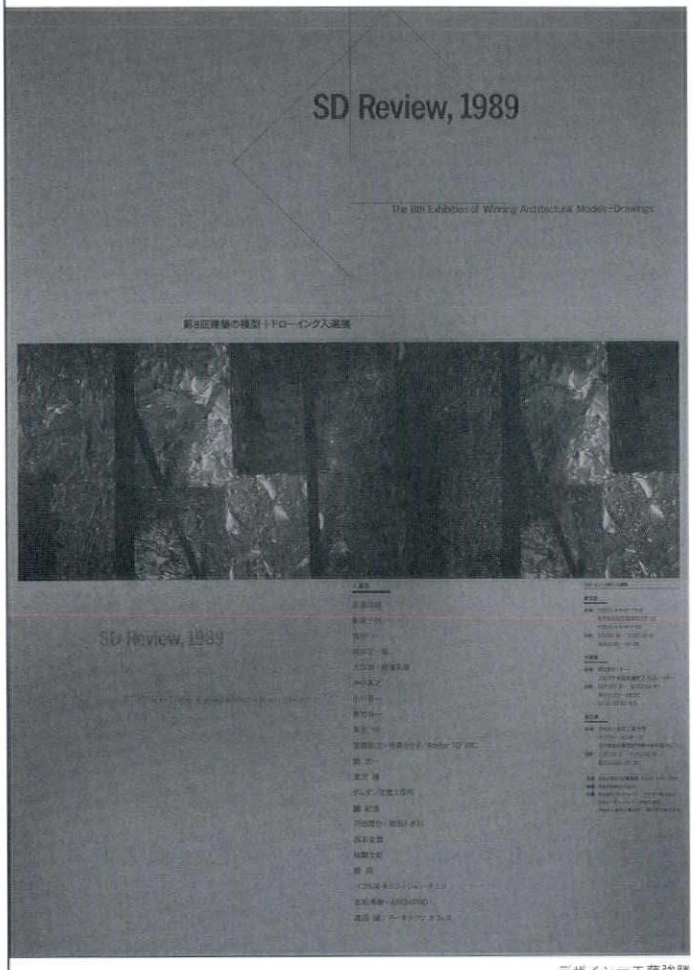
その最初になるIN-EXでは、部分と全体との関係が模索されている。

ここでの成果は、後に実作、青山製図専門学校一号館に続くことになる。
To be continued→〈ORE X〉1989

設計者：渡辺誠
所在地：東京都渋谷区富ヶ谷
建築用途：オフィス
構造：RC造
敷地面積：290.19m²
延床面積：1,353.20m²

わたなべ・まこと
1952年神奈川県横浜市生まれ。渡辺誠／アーキテクツ オフィス主宰

第8回　1989年



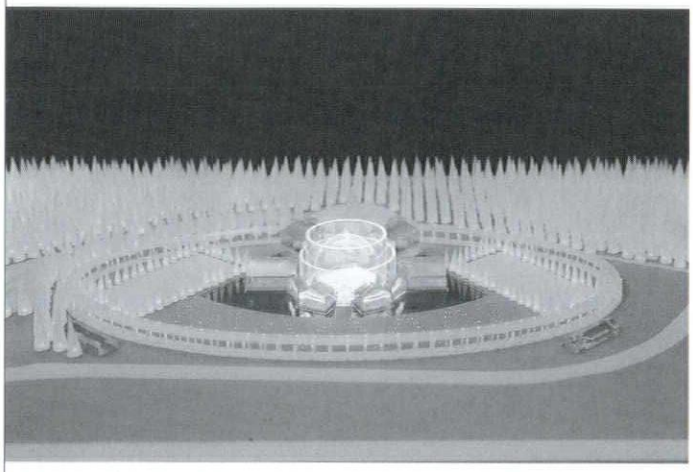
デザイン＝工藤強勝

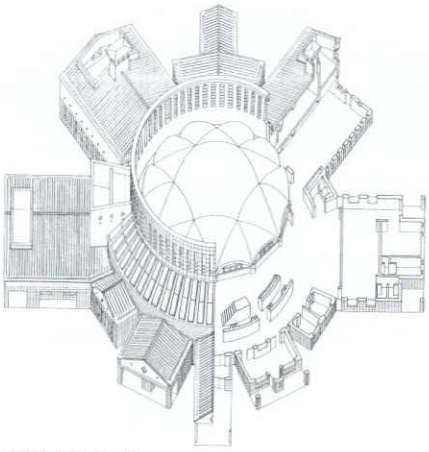
東京展：9月29日～10月11日
会場：ヒルサイドプラザ
大阪展：10月16日～10月26日
会場：都住創センター
金沢展：11月11日～11月15日
会場：金沢工業大学ライブラリーセンター
審査員：原 広司、安藤忠雄、鈴木了二、三宅理一
応募総数：190作品
入選数：21作品
受賞者：
沖中高行（鹿島賞）
渡辺 誠／アーキテクツ オフィス（朝倉賞）
吉松秀樹+アーキプロ（SD賞）

安達治雄　いっぺき舎
新居千秋　（仮称）M市文化公園・図書館・体育施設
猪狩 一　COR
板井宝一郎　C.P.M.スタジオ・アネックス
大塚 聡／**UNITZ D.F.+相場克彦**　T·D HOUSE
小川晋一　キュビストの家
沖中高行　大川村スポーツ・コミュニティ・センター
寒竹伸一　城南石油新井給油所
栗生 明　ギャザホール
笹森則次+笹森るり子／**Atelier TO²**　キラー通りのショップ&オフィス
関 太一　KAP
滝澤 隆　A邸［自由を主題とする家］
ダムダン空間工作所　富士学校［Mə］
團 紀彦　CASA ROCA
戸田潤也+細田みぎわ　Nビル
西本圭敦　高麗（こま）の家
林 賢次郎　光のシャワー
原 尚　な・ん・じゃ・も・ん・じゃ
ベフルズ·チニジ+ジャン·チニジ　議員会館付属施設
吉松秀樹+**ARCHIPRO**　太田邸アネックス
渡辺 誠／アーキテクツ オフィス　ORE X

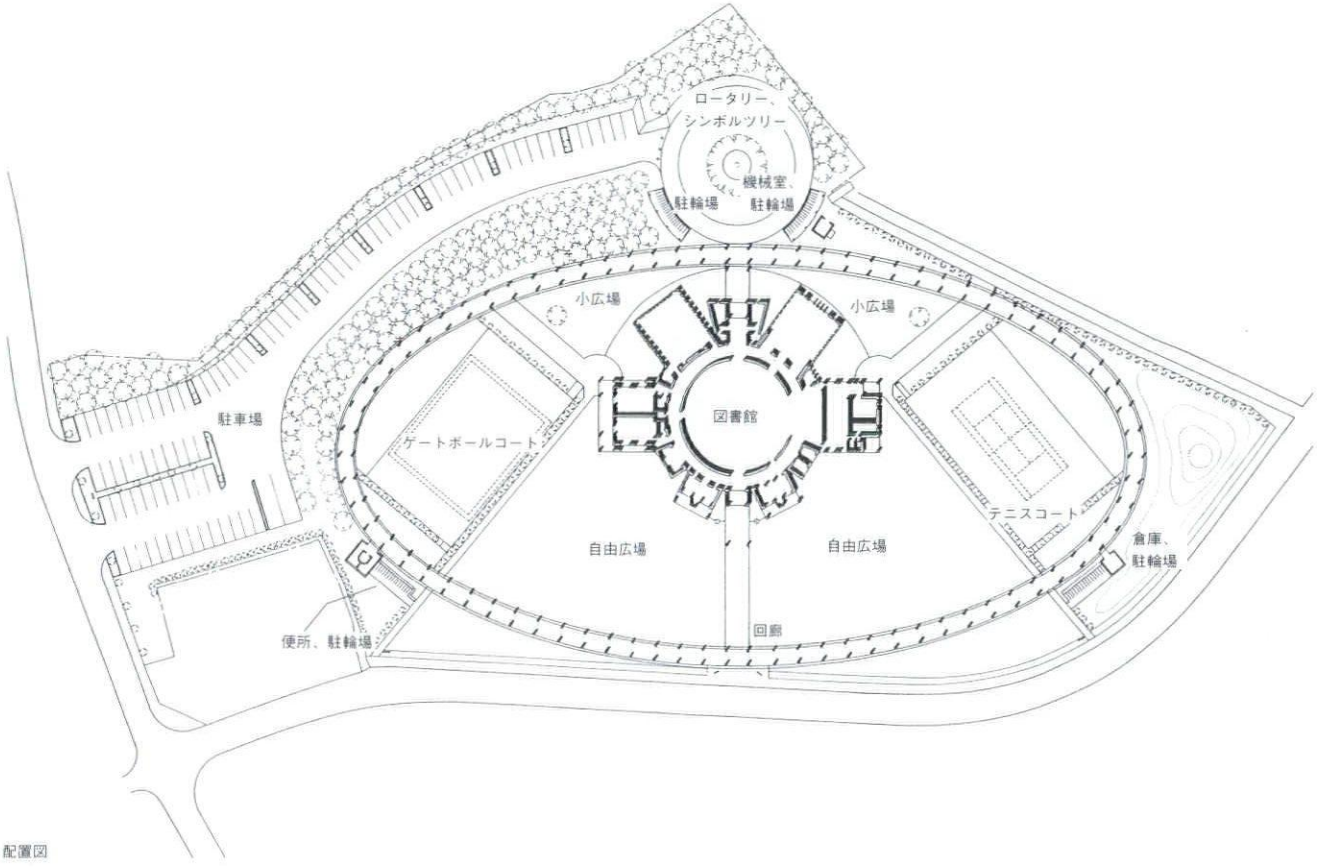
新居千秋

（仮称）M市文化公園・図書館・体育施設
（水戸市立西部図書館）





アクソノメトリック

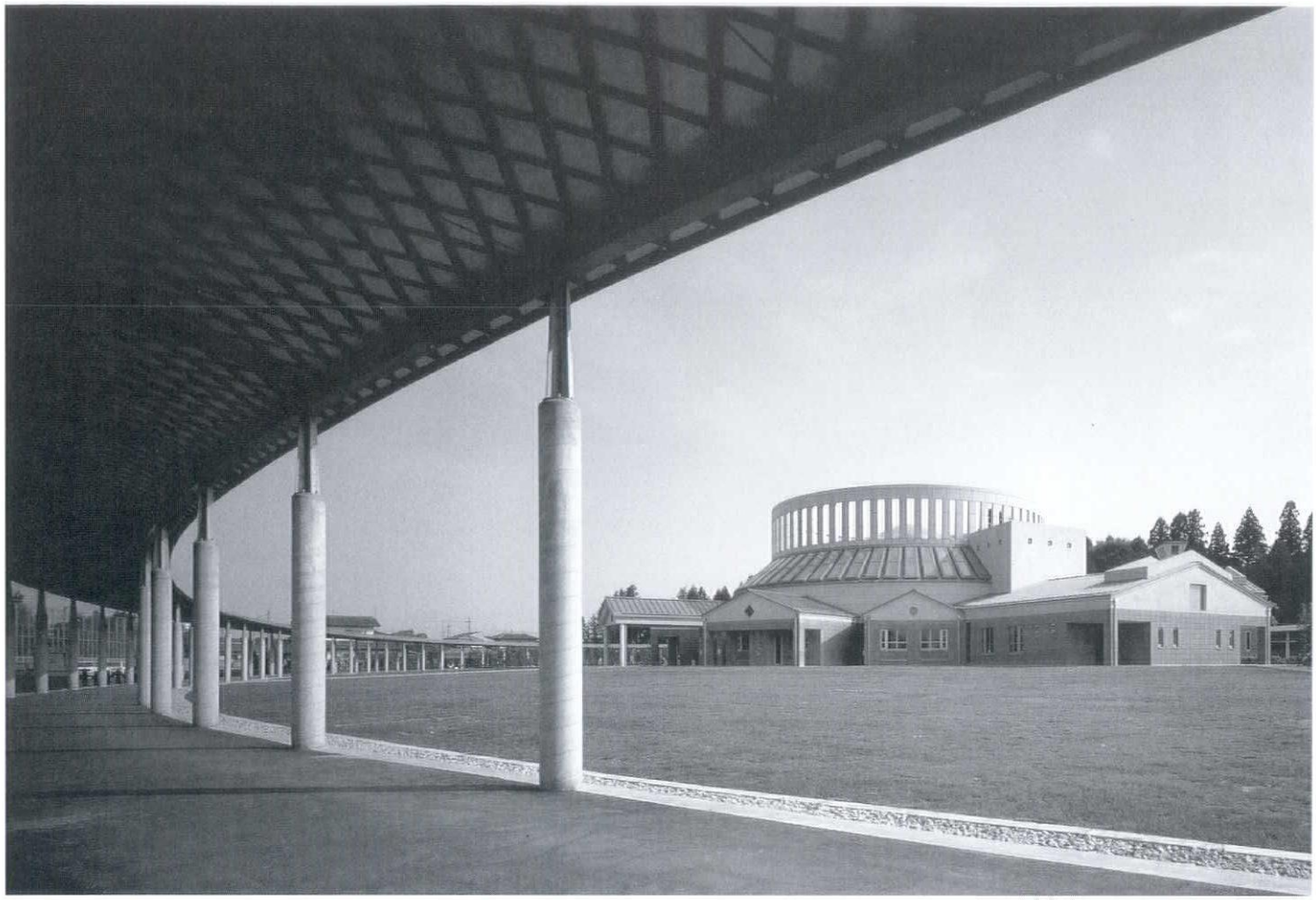


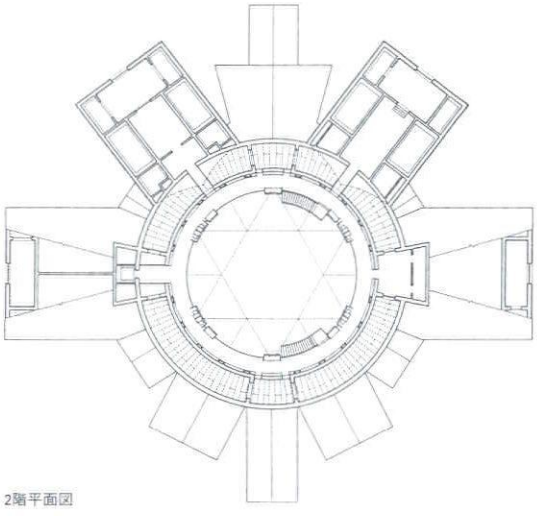
配置図

GIRO（水戸西部地区図書館）の構成は、ダイヤゴナルな軸と中心に向かうA Roomによって構成されている。中心の空間の構成は、ブレー、ルドゥ、アスプルンドと続く幾何学の流れの中に位置付けられる。図書館の歴史は17世紀に始まり、学問や芸術のパトロンである個人が自分の図書室を一般の人に公開したものであった。その天井はドーム等で覆われ、壁には本棚があり、ソファー等が用意されたある種のサロンのようなものだった。時代を経るにつれ、図書館が特殊化され、アットホームな部分が消え、本の倉庫と化してしまった。近年、図書館の開放が叫ばれ、ソフトの部分では色々な使い方が提案されて来ているが、形＝空間としては旧来の倉庫的空間がほとんどだ。そこで今度の図書館計画では原点に立ち戻り、書斎やサロンの延長として、中心性の強い花びら型の図書館とし、アート・ギャラリーや談話室、AVホール等を設けた。中心の空間には鉄筋と、真鍮ボルトによるラチス・シェルのCiboriumがあり、6000個のボルトによる星空の間を形成している。

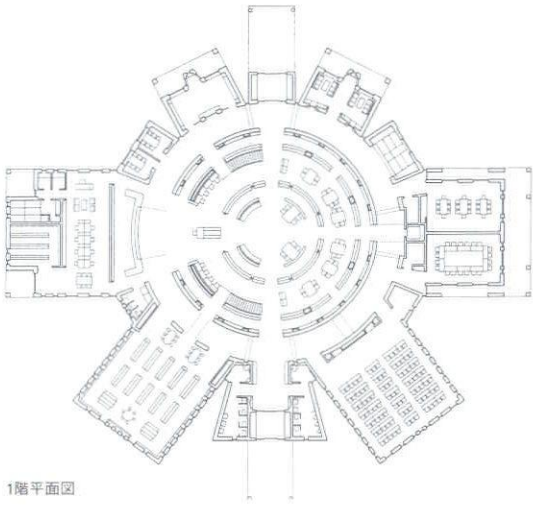
所在地：茨城県水戸市
建築用途：図書館
共同設計者：TIS＆PARTNERS（構造）、愛住設計（設備）
構造：図書館（RC造、屋根部分：RCシェル構造）、回廊（RC＋鉄骨独立柱構造、屋根部分：RCシェル構造）
敷地面積：21,283.66m²
延床面積：3,389.26m²
竣工年：1992年3月

あらい・ちあき
1948年島根県生まれ。新居千秋都市建築設計主宰

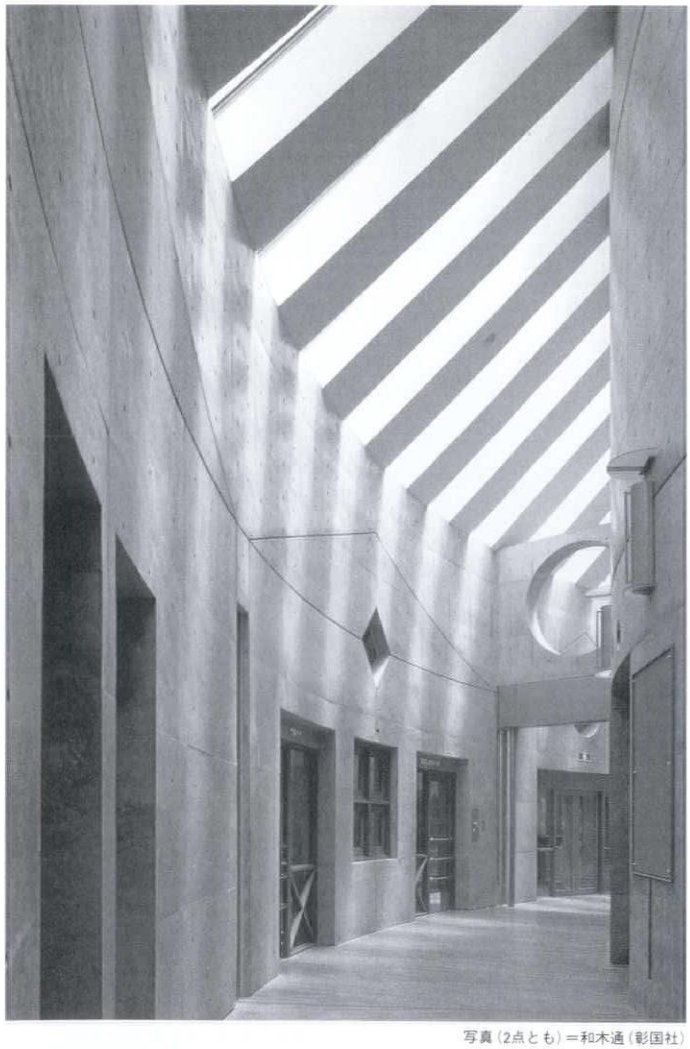




2階平面図



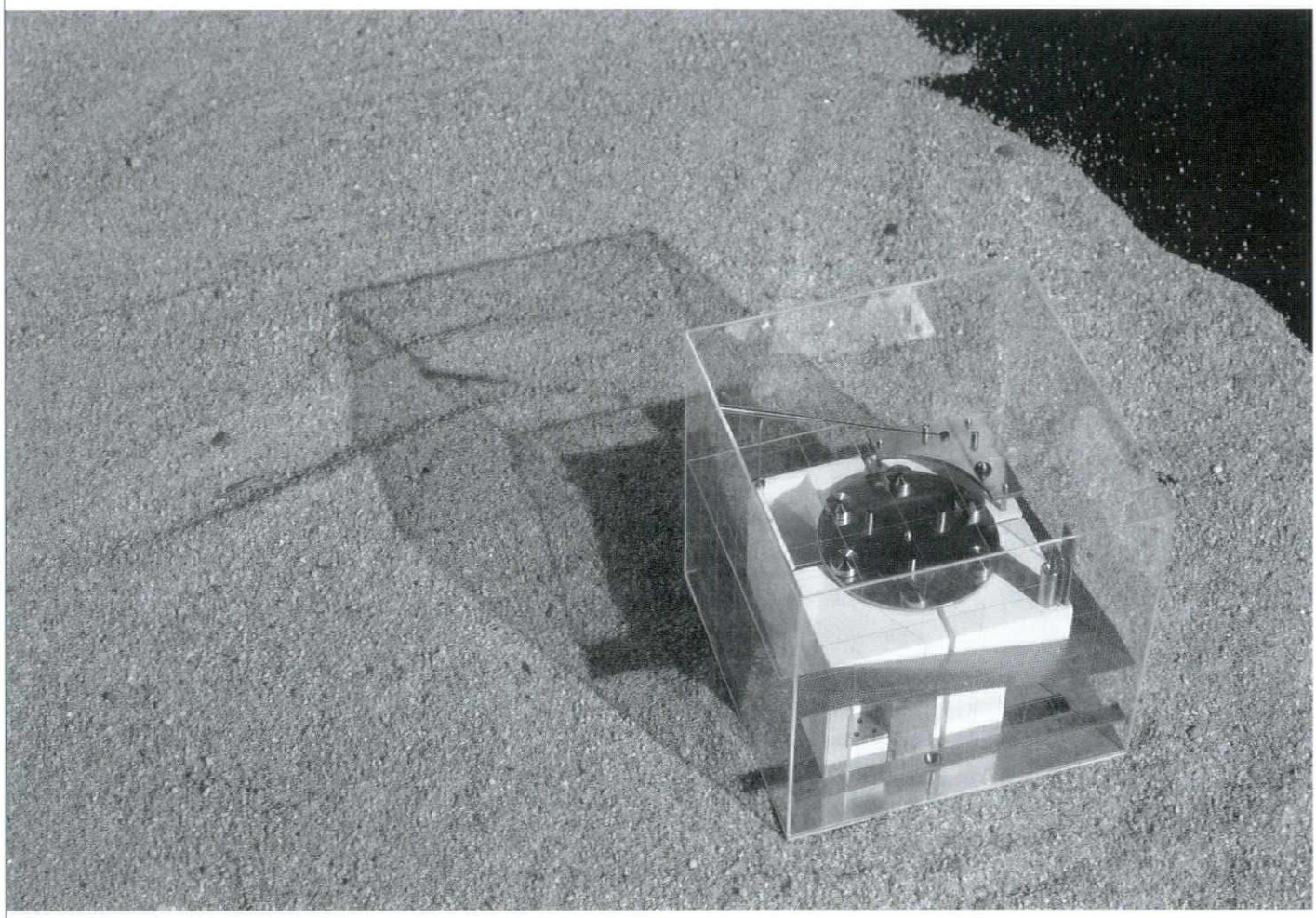
1階平面図



写真（2点とも）＝和木通（彰国社）

小川晋一

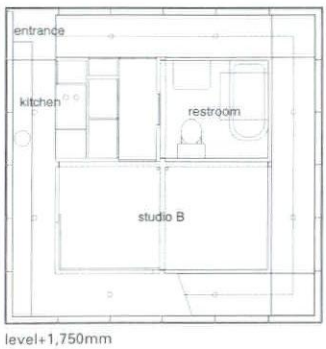
キュビストの家



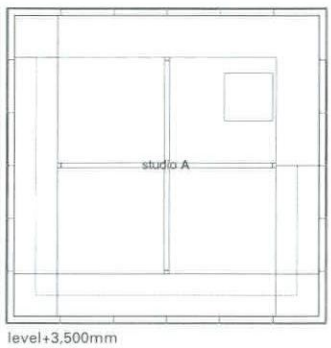
この建物は、立体芸術家のための住機能を含んだ仕事場である。建物の外観は6m×6m×6mのガラスのキューブとなっている。内部には4つの立方体が存在し、透明性のあるスロープ（ステンレス有孔板）と床（ポリカーボネート）が上階へと回転しながら立ち上がっている。この立方体には、分節と連結により各空間機能が組み込まれている。光のスリットは、昼夜、光を取り入れ、放ち、自然現象と交感する。平面プランや立面、断面は全てが同一の6mの正方形からなっている。空間はXYZ方向1mの正方形グリッドで構成され、構造的、機能的、経済的意図が内包されている。H型鋼のガラス・マリオンは受け材であると同時に構造材としての柱、梁である。柱、梁は力を分散させることにより、断面を同一にしている。構造グリッドには断熱およびスクリーンのための白い正方形の発泡スチロールがはめ込まれる。この建築はガラスのCubeである。

所在地：山口県山口市
建築用途：仕事場+住宅
共同設計者：野邑譲治、塚田哲也
構造：S造
敷地面積：141.71m²
延床面積：72m²
竣工年：1990年12月

おがわ・しんいち
1955年山口県生まれ。応募当時小川晋一アトリエ主宰。現在小川晋一都市建築設計事務所主宰、近畿大学工学部助教授



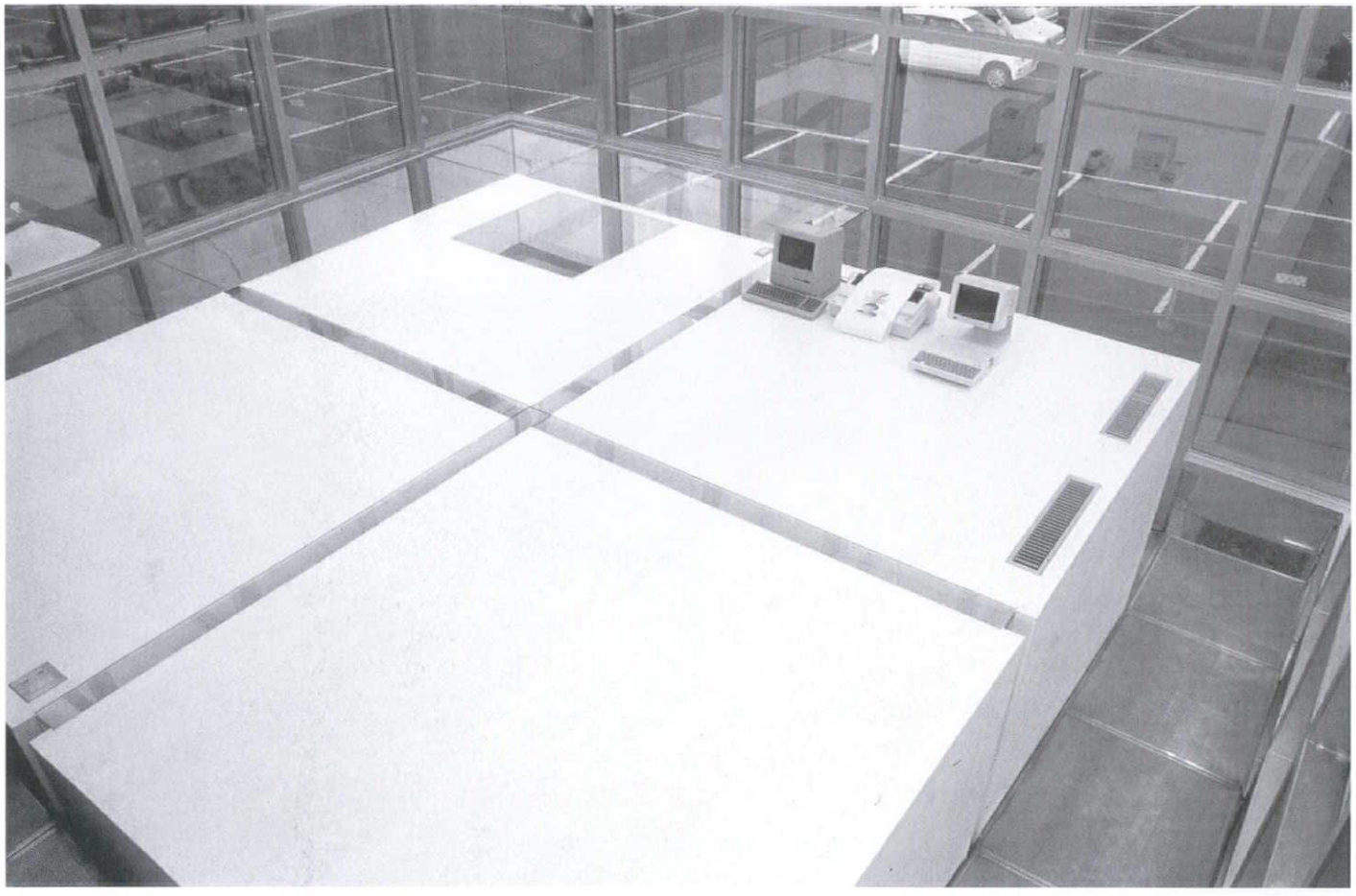
level+1,750mm



level+3,500mm



断面図



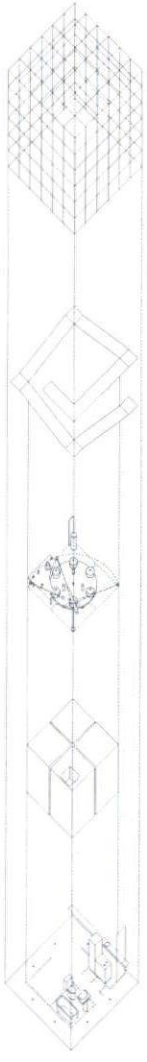
6 x 6 x 6 glass cube

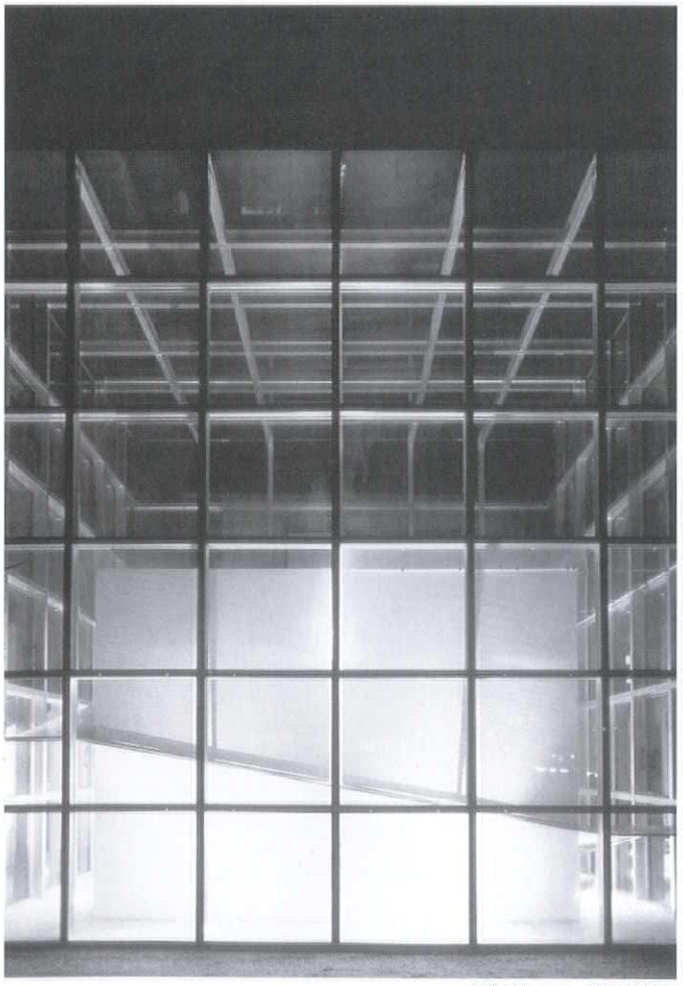
transparent slope (stainless)
transparent floor (glass)

industrial furniture

big furniture (4 boxes)

functional geometry



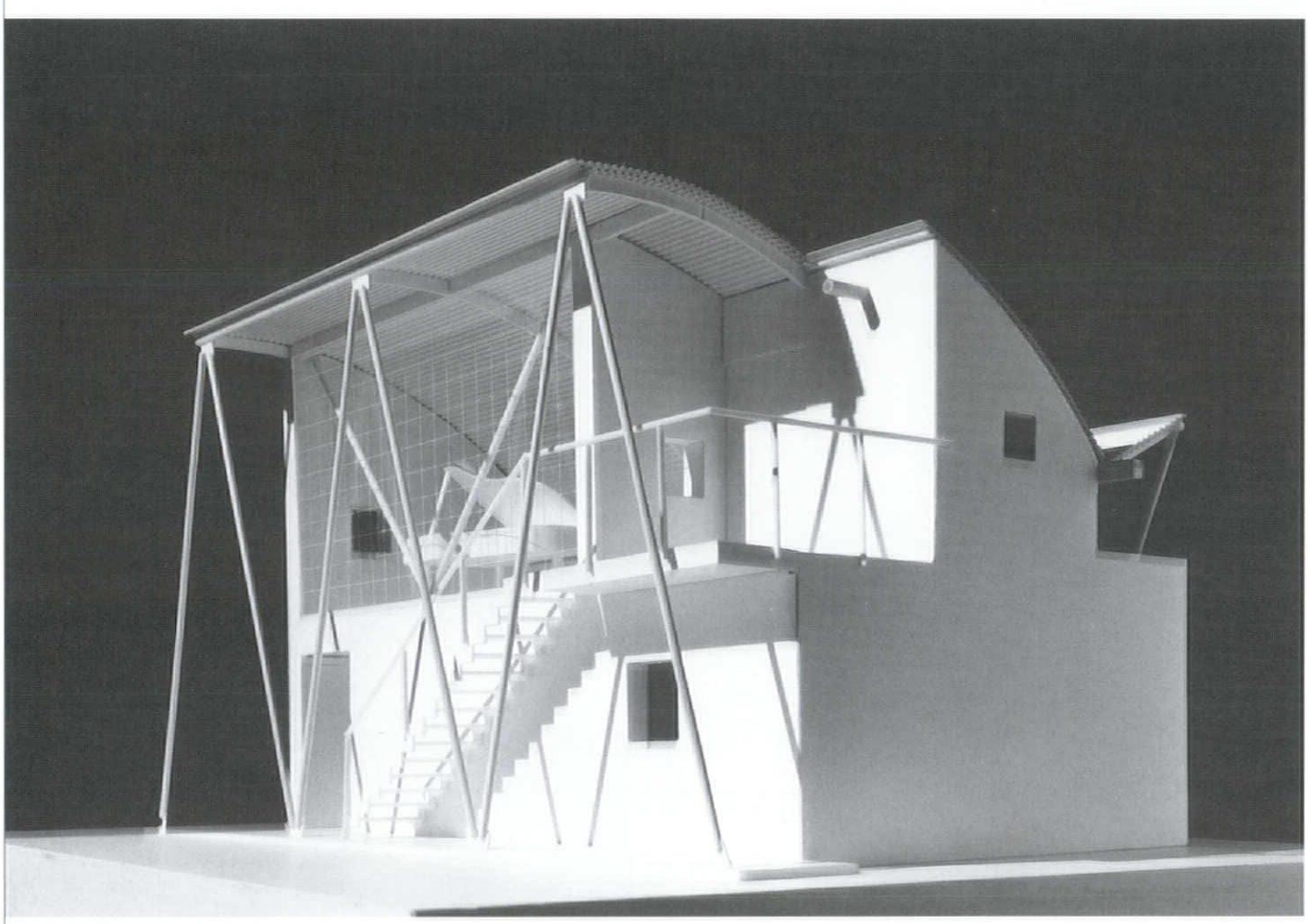


写真（2点とも）＝新建築写真部

吉松秀樹+ARCHIPRO

太田邸アネックス

SD賞



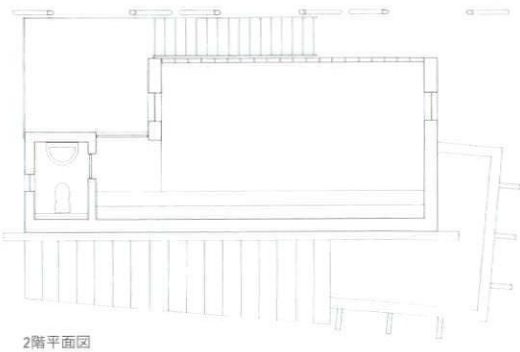
処女作を設計するにあたって、意識上から形態を消し去るにはどうすればよいかを考えていた。その糸口として「退屈」「希薄」「ズレ」といった概念を設計へと持ち込もうとした。それは、自分自身の持つ建築的規範をどうすれば崩すことができ、かつ建築のフレームのなかで成立するかを探り、そのあやうさを立体化してみたかったからである。自らの意識をほんの少しずらしならが組み立てることで、3D映画を裸眼で見たような感覚（意識の立体化）をねらった作品である。

バブル期にあたったため施工的にはなかなかこちらの思うようには進まず、完成までに2年近くかかったが、ほぼSDレビュー応募案と変わらない空間が完成した。

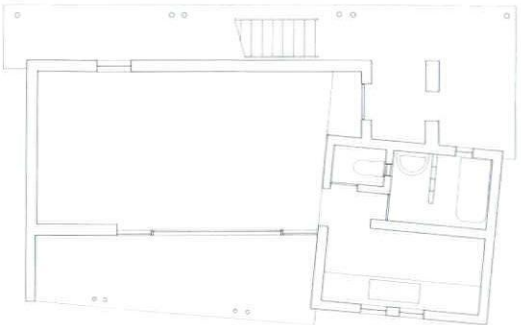
面積的には小さな建築だが、実際には大きくのびやかに見えるようである。離れとして現在も使われており、敷地奥に建つ母屋はその後〈太田邸コンプレックス〉として、1996年に竣工した。

所在地：東京都杉並区
建築用途：住宅+ピアノ練習室
共同設計者：大喜多美名子、村上和子／アーキプロ設計事務所、松本年史／松本構造設計室（構造）、田中啓介（設備）
構造：RC造+S造
敷地面積：122.46m²
延床面積：79.62m²
竣工年：1990年9月

よしまつ・ひでき
1958年神戸市生まれ。応募当時東京芸術大学助手。現在アーキプロ主宰



2階平面図



1階平面図

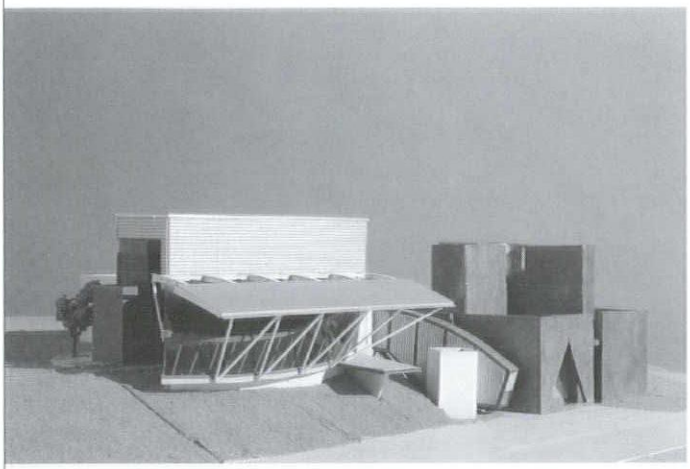


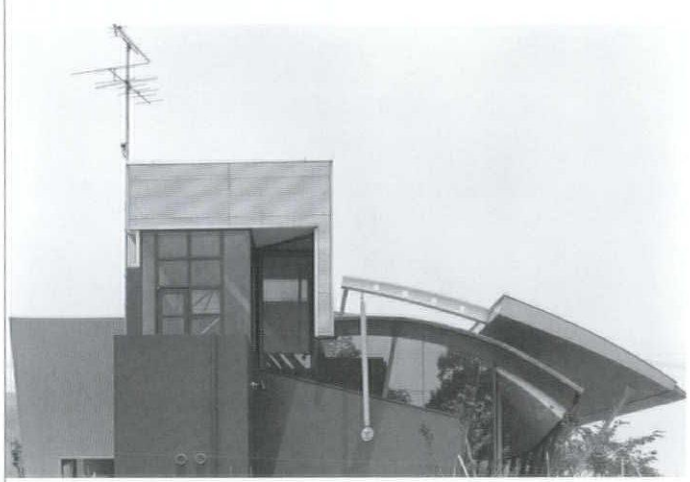


写真（2点とも）＝大野繁

板井宝一郎

C.P.M.スタジオ・アネックス







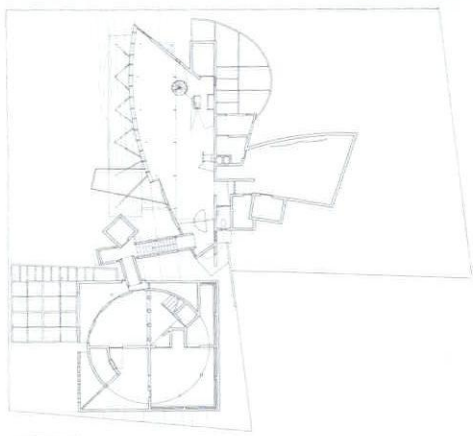
写真（左下、右）＝新建築写真部

この建築は、デジタル処理によるビデオの編集スタジオとサロンからなっている。SDレビュー1983に出品したC.P.Mスタジオの5年後の増築である。両者ともに、幾何学的構成が計画の共通原理となっている。ただ既存部が、それを初元的な幾何学形態に求めたのに対し、増築部は幾何学的なコントロールのもとで、より恣意的な形態を目指すことになった。

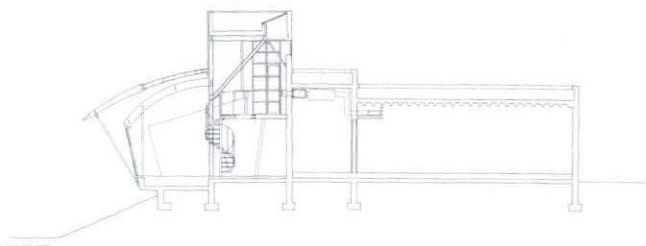
このことは素材の選択あるいは色彩の構成にも反映しており、既存の禁欲性に対し、その快楽的なジェスチュアを増幅している。ふたつの建物は共通の構成原理に基づきながら、視覚的には対比的な関係を取り結ぶことになった。この異質な接合が、ひとつの複合体として、内外部空間にあらたな意味を生みだしてくれてるように思える。

所在地：石川県小松市
建築用途：ビデオ編集スタジオ・サロン
共同設計者：セクションアールアーキテクツ
構造：S造+RC壁構造
敷地面積：1,046.06m²
延床面積：246.75m²
竣工年：1989年

いたい・ほういちろう
1948年兵庫県生まれ。セクションアールアーキテクツ主宰



1階平面図



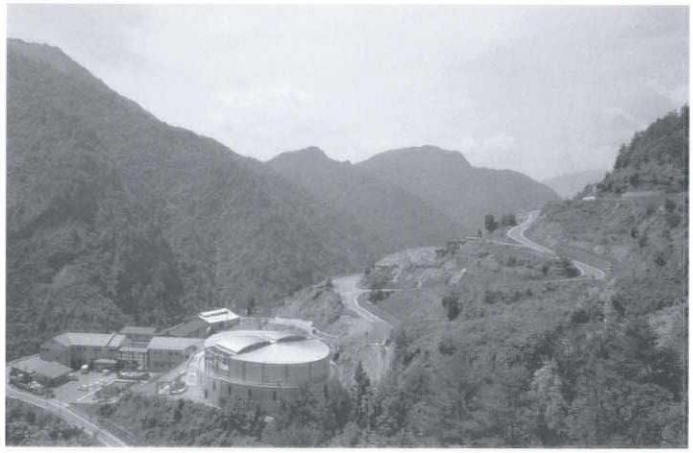
断面図

沖中高行

大川村スポーツ・コミュニティ・センター（白滝スポーツ・コミュニティ・センター）

鹿島賞





写真（左、右上）＝坂口裕康

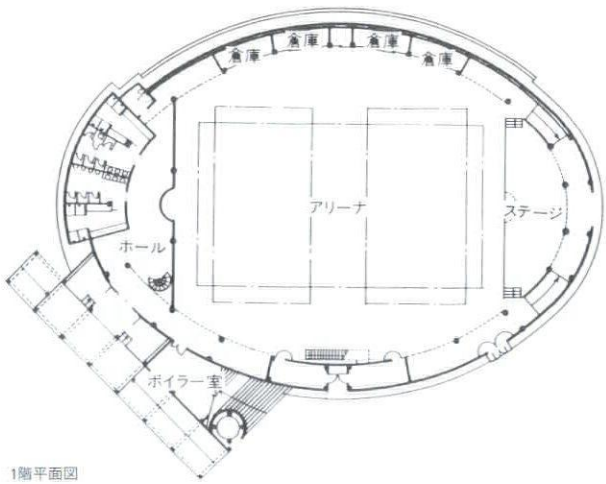


SDレビュー応募の動機は、その前年にもSDレビューに入選してましたが、当時は無名の私にもこのような設計をする機会が続いてめぐってきていました。それまでの空白の時を埋めるように一気に設計のエネルギーが満ちていた時期でした。

人口600人ほどの山村での体育館ですが、企画設計段階での村からの要求は、都会の我々から考える以上に新しい建築、斬新なものに対する強い要求がありました。「間伐材を使ったものや、カマボコ屋根の体育館は絶対やめてくれ」。今は亡くなられた村長からは「この小さな山村に建つ小さな体育館であっても世界に誇れるものを創れ」と檄を飛ばされた想い出があります。

プランの楕円形は、雨の多い地方なので雨天のランニング・トラックの要求が出てきました。バスケットコートを真ん中に、廻りをランニング・トラックで囲むと楕円が一番シックリしたのです。当時としては楕円のプランは、建築メディアではあまり見かけませんでしたが、その後楕円が大流行してビックリ。

デザイン的には架構を視覚的にも魅力あるものにすることでした。外壁はコンクリートで基壇部分を、その上部はヒバの厚板をステンレスビスで横貼りする設計でした。SDレビュー応募時はそうだったのですが、雨漏り、木材への耐久力への不安などから、色々な意見が私の方にも伝わってきました。外壁を変更するかどうか悩みましたがガルバリウム鋼板に変更ということにしました。完成した建築を前にして思うのは、廻りの風景との調和からいえば、やはりヒバの厚板でやっておけば良かったということで、この点については悔いが残っています。



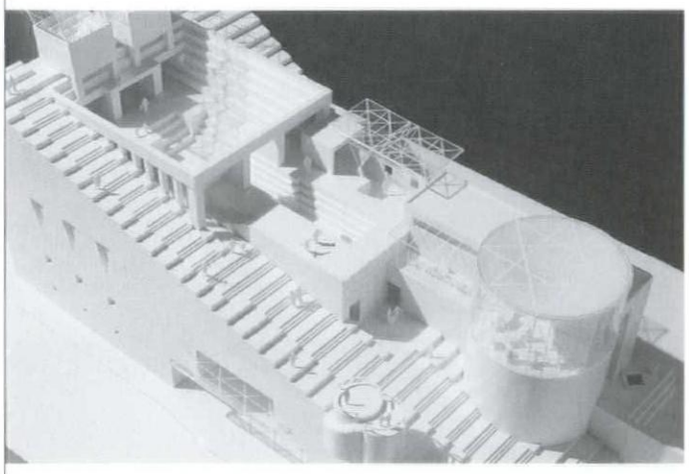
1階平面図

所在地：高知県土佐郡
建築用途：体育館
構造：RC造+S造
敷地面積：2,292m²
延床面積：1,430m²
竣工年：1990年4月

おきなか・たかゆき
1947年神戸市生まれ。（株）日本総合計画研究所
代表取締役

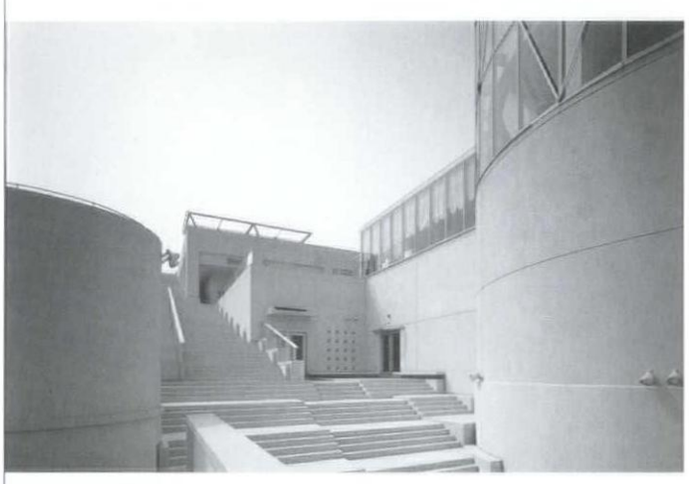
栗生 明

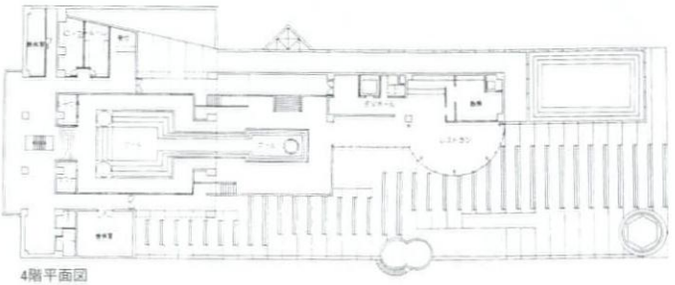
ギャザホール



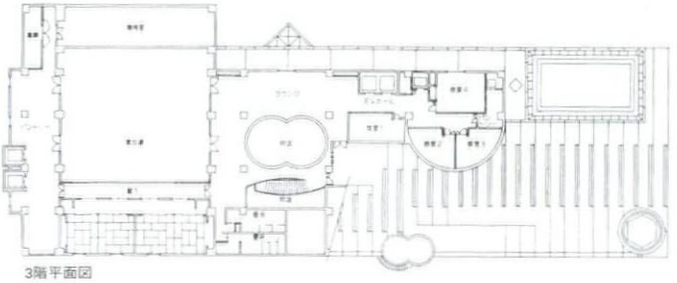


写真（左下、右）＝古館克明





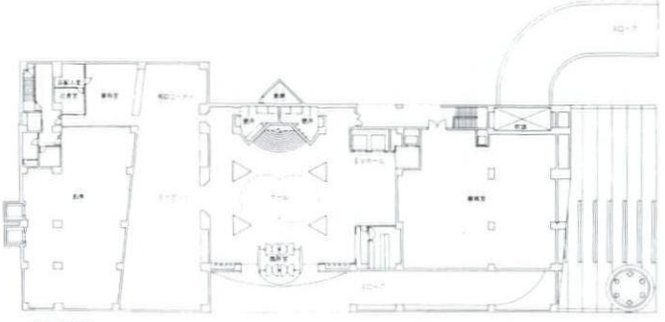
4階平面図



3階平面図



2階平面図



1階平面図

都市近郊の結婚式場であるギャザホールは、人々を集め、コミュニケーションを促す様々な仕掛けのある、公共的な性格を持った集人施設として計画された。結婚式、宴会場とそれに付属する諸機能を分解し、一般の人々にもオープンに施設利用が可能となるよう再構成されている。

また、交通量の多い地方幹線道路の交点にあることから、都市のランドマークとなる形態とヴォリュームを意図した。東側には豊かな桜並木が連なる一級河川が流れており、これらを借景にして、眺める、眺められるといった相互関係を計画の重要なテーマとした。

SDレビュー応募時のコンセプト、プログラム、形態とも大きな差異はなく完成された。

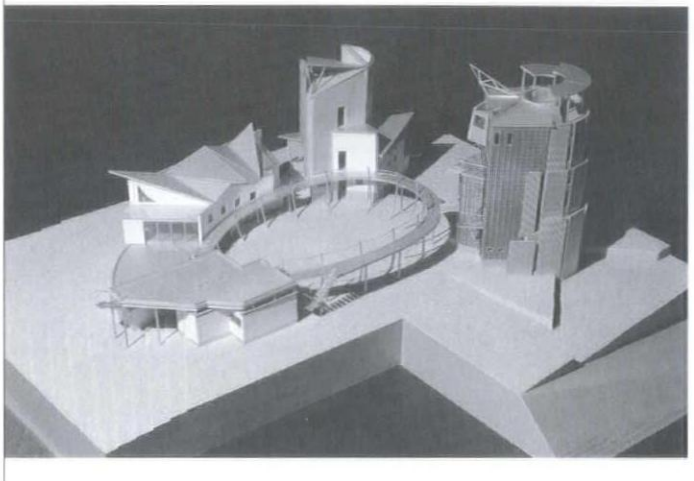
しかし、大きなテーマであった大屋根階段の一般の人々の日常的利用は、現在、運営管理上の問題から当初の計画に反して制限されており、残念である。

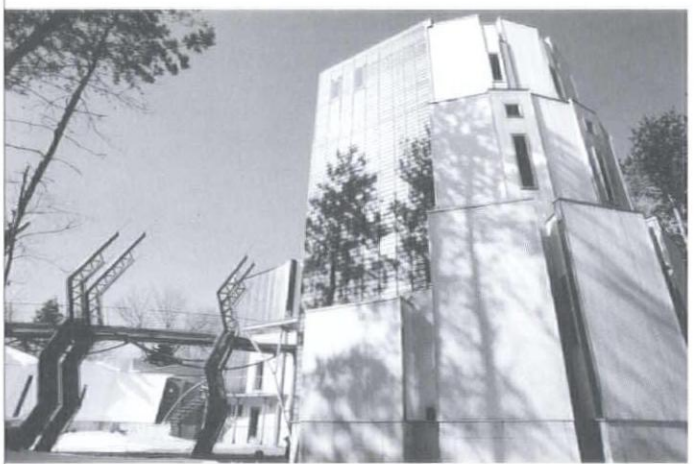
所在地：埼玉県越谷市
建築用途：結婚式場
共同設計者：レン構造設計（構造）、総合設備計画（設備）
構造：SRC造
敷地面積：2,964m²
延床面積：6,286m²
竣工年：1992年5月

くりゅう・あきら
1947年千葉県生まれ。（株）栗生総合計画事務所主宰、千葉大学工学部教授

ダムダン空間工作所

富士学校［Mə］（rings）





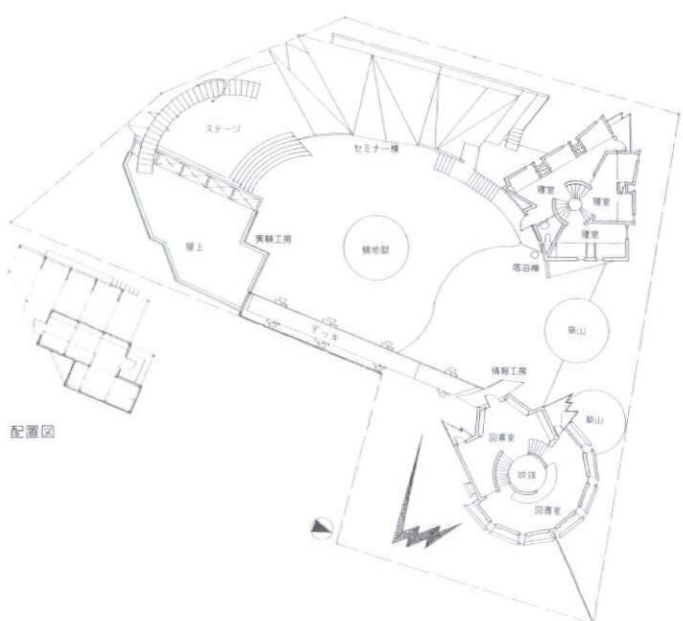


写真（左下、右）＝新建築写真部

応募時のタイトルが富士学校［Mə］であるように、当初は建築を志す人々のための学校として計画が進められた。SDレビューに応募した理由も、この学校をPRするためと言った方が良い。建築行為に携わる人々が富士山の麓に集まり、お互いを磨き合う場としての空間づくり。応募時から実施設計までの間にブリッジのデザイン等に変更が加えられているが、全体の構成には変化がなく、ほぼ同一のイメージで竣工している。設計監理を行いながら、学校のあり方や運営について、施主と共に知恵を絞ったが、結果としては学校を開校するには至らず、より現実的にアトリエとして、また研修施設として使用されている。当初意図していた映画のような空間づくり、ひとつ一つのシーンが連続して完結したストーリーを作り出すという目標は、床面積が470m²と狭小でありながら、スケール観の大きな施設として実現することができたと考えている。

設計者：竹居正武／ダムダン空間工作所
所在地：山梨県南都留郡鳴沢村
建築用途：アトリエ+研修施設
構造：RC造+S造+木造
敷地面積：908m²
延床面積：470m²
竣工年：1990年11月

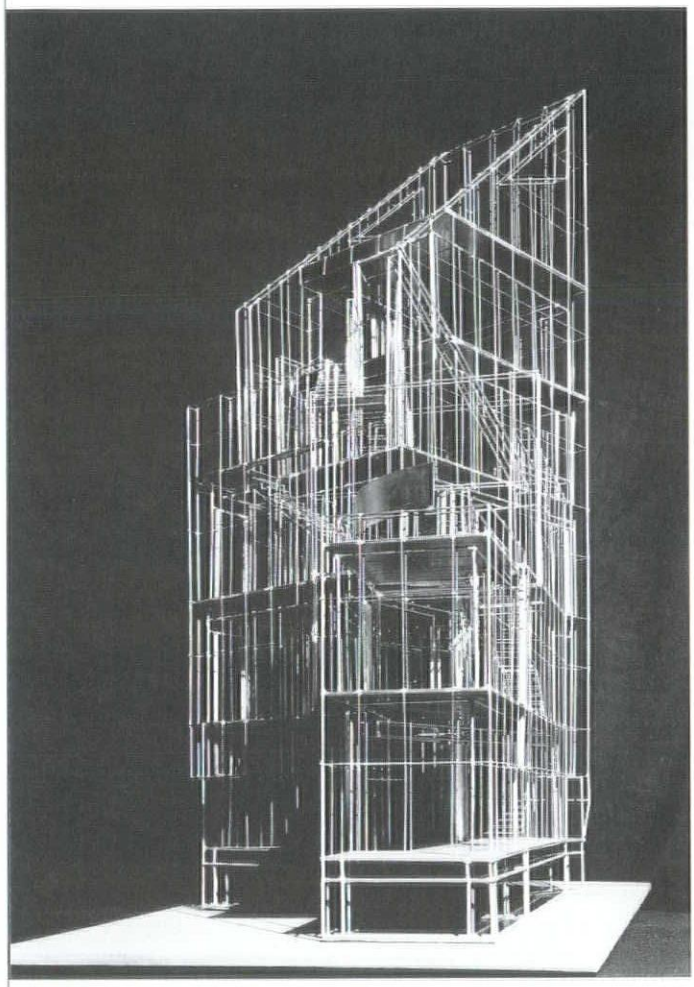
たけい・まさたけ
1943年東京都生まれ。ダムダン空間工作所代表取締役



配置図

戸田潤也+細田みぎわ

Nビル（下鴨セクション）

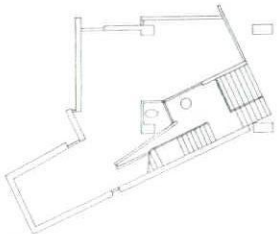




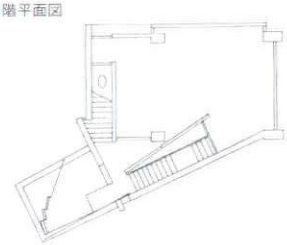
写真＝藤原弘

都市的条件によって決まる建築の最大ヴォリュームを単純な形態で表し、内部に人を誘導しながら上昇する複雑で迷路的な空間をつくろうとした。そのことは、不十分ながらある程度表現できたと思う。しかし、微細な形態の変化に対応させるには、コンクリートという素材はやや重すぎた。幾何形態とは異なる観点や構成のための論理が必要だったと今は思う。

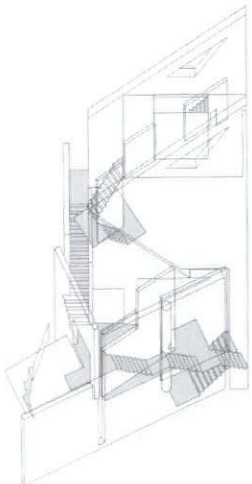
所在地：京都市左京区
建築用途：商業ビル
構造：RC造
敷地面積：113.40m²
延床面積：294.44m²
竣工年：1990年5月



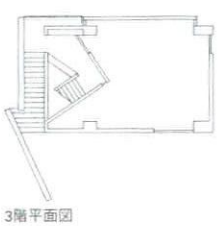
1階平面図



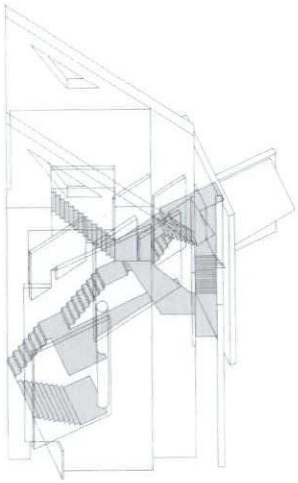
2階平面図

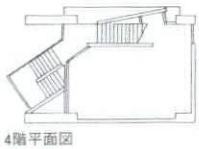


アクソノメトリック



3階平面図





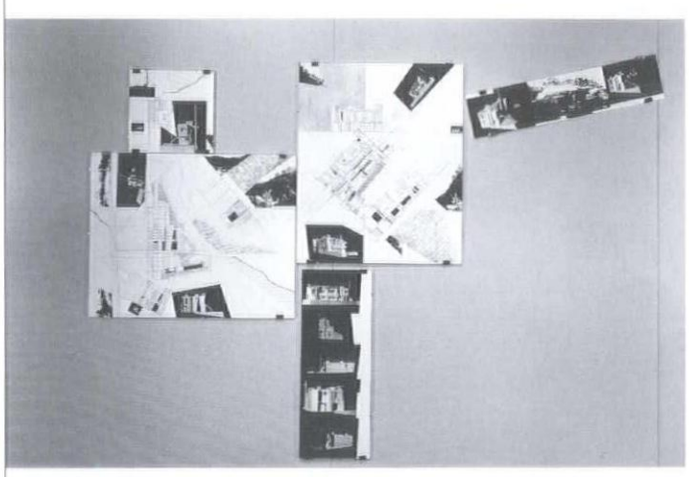
4階平面図

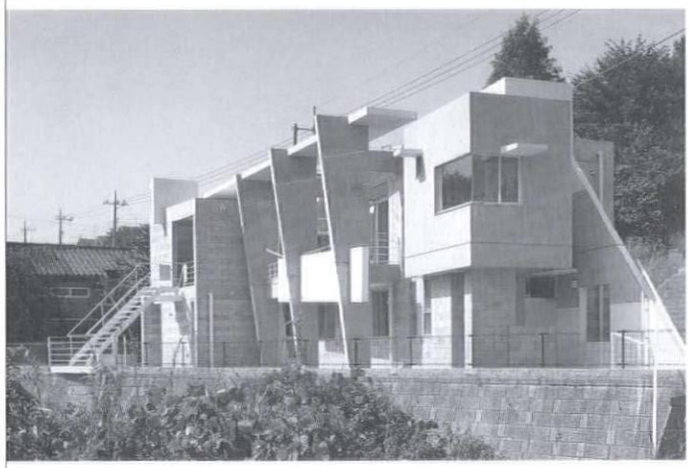
とだ・じゅんや
1956年新潟県生まれ。戸田潤也建築設計工房

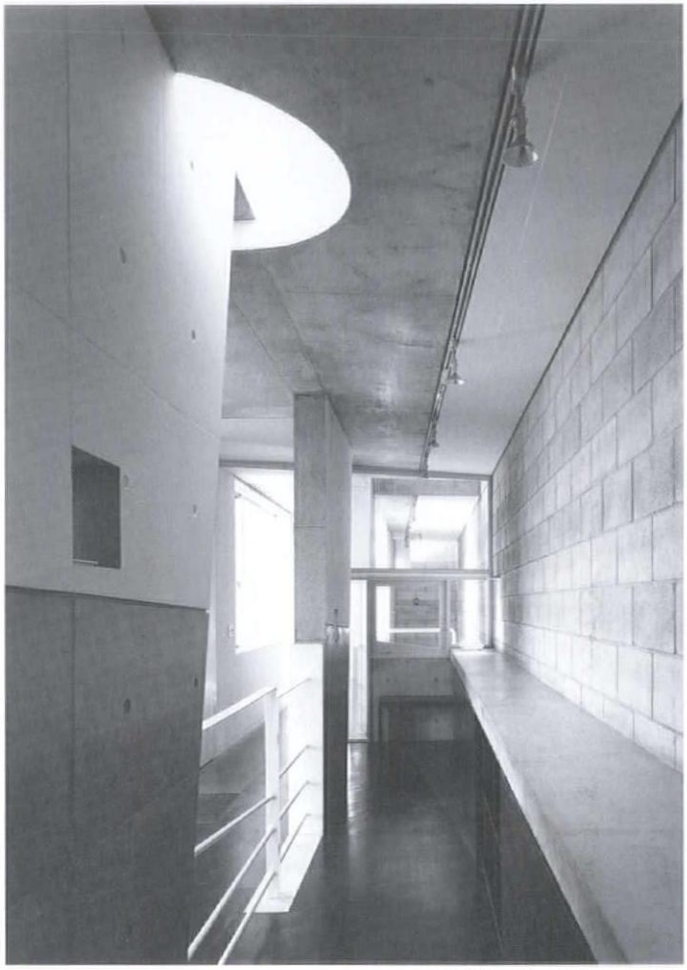
ほそだ・みぎわ
1958年大阪府生まれ。応募当時戸田潤也建築設計工房勤務。現在細田みぎわArchi-Studio主宰

西本圭敦

高麗の家





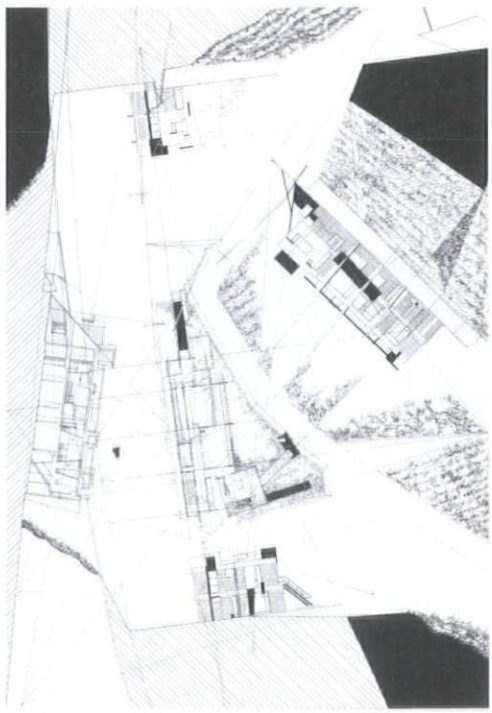


写真（左下、右）＝GA Photographers

この建物における最大の関心事は、ひと言でいうと、空間構成の幾何学的操作と、それによって生まれる空間の現象学的な知覚の関係を追求するということですが、時間の経緯の中にこの建物を置いて今考えますと、建築における材料とか構法といった物理的、現象的なプログラムの設定（空間）と、生活とか動線といった叙述的なプログラムの設定（時間）が、本質的に、ふたつの異なった次元の問題であるということが、私自身の中で明らかになっていった、過程的な作品であると言えると思います。

所在地：埼玉県日高市
建築用途：専用住宅
共同設計社者：百田構造設計（構造）
構造：RC造補強コンクリートブロック混構造
敷地面積：339m²
延床面積：176m²
竣工年：1990年

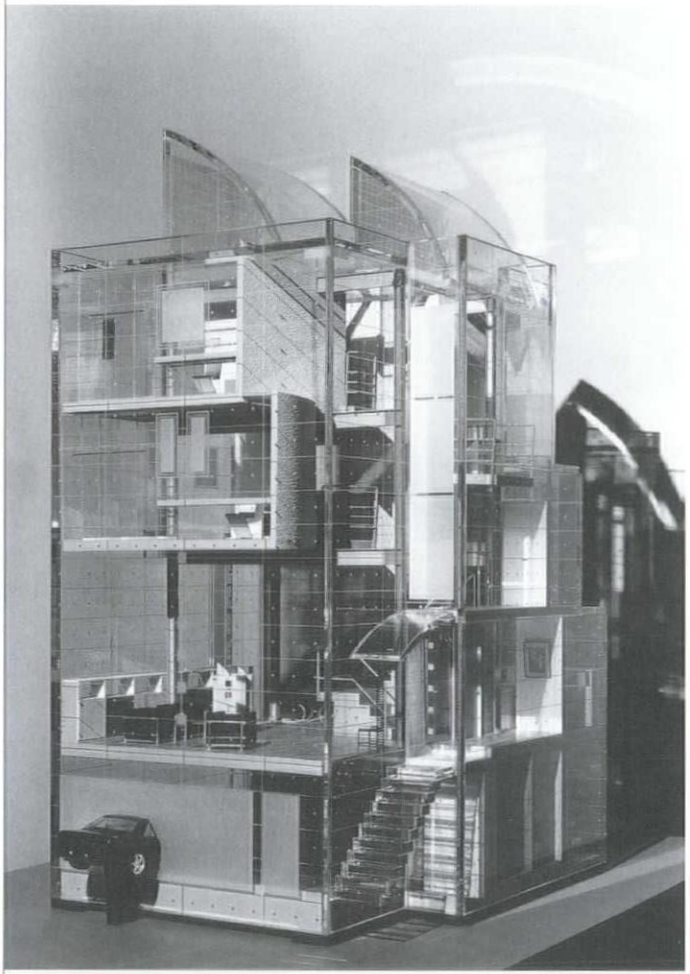
にしもと・よしのぶ
1955年大阪府生まれ。
TAEG NISHIMOTO+ALLIED ARCHITECTS主宰、プラット・インスティチュート助教授、コロンビア大学準教授



Spatial relationship composite drawing

林賢次郎

光のシャワー







堪え難い騒音と排気ガスの環七際に建つことから、コンクリート壁の内部に異空間を得、天上からは光りがシャワーのごとく降り注ぐかのような空間を造りたいと考えた。この時、空間を創るということは「空気を彫刻する」というような気がしていた。触ることも視ることもできていて、できない「空気」の塊に、面と対峙って鎬を奮うわけだ。掴みどころのない空気を、ある種の枠に嵌めて封印する。そんな感じだった。

応募の時点で、設計はほとんど終わっていたので縮尺1/20の模型がすでにできていた。その模型を展覧会に出そうとも考えたが、肝心の内部に封印された空気を視ることが難しいので、枠を透明なガラスで作ってはどうかと思い作り直した。その透明性が良かったのだろうか、この硝子の模型はひとり歩きをしたようだ。

応募時の模型の通りにできたこの建築を、今度のことで訪ねたが、留守だったので外で挨拶だけして帰った。

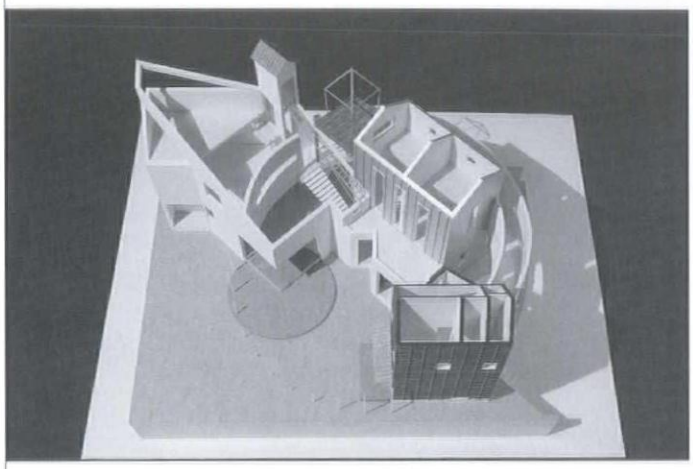
所在地：杉並区堀ノ内
建築用途：住宅
共同設計者：南舘浩夫（建築）、
梅沢良三（構造）、添田正人、
斉藤秀一（模型）
構造：RC造独立耐震壁構造
敷地面積：84.88m²
延床面積：203.57m²
竣工年：1989年8月

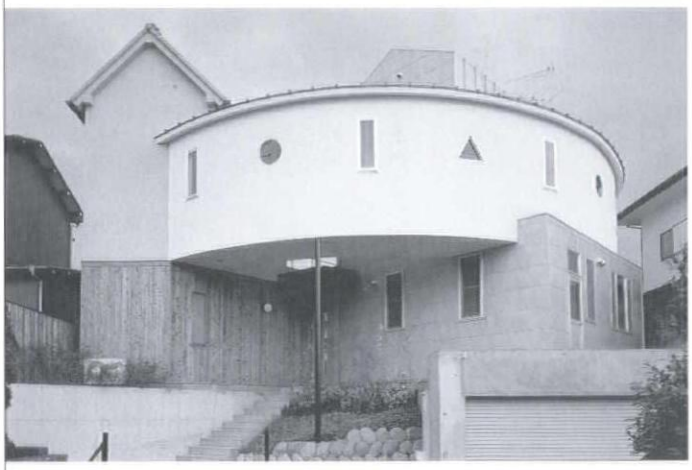
はやし・けんじろう
1942年東京都生まれ。林賢次郎・建築設計事務所主宰

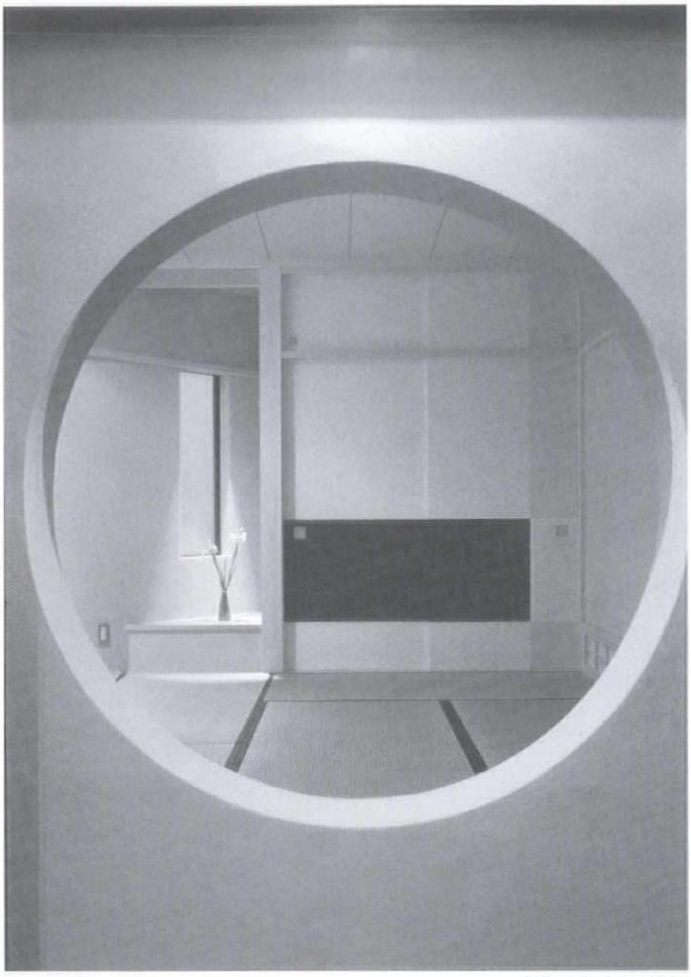
写真（右2点）＝堀内広治

原 尚

な・ん・じゃ・も・ん・じゃ







写真（左下、右）＝斎部功

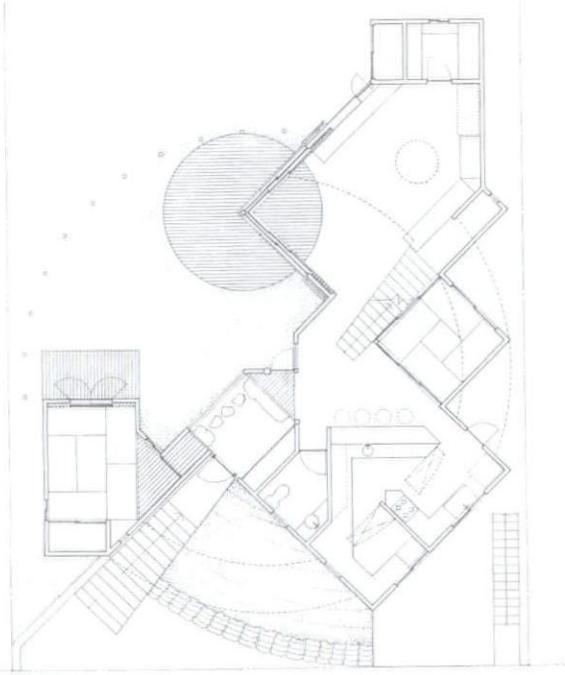
4人家族のそれぞれの意見をなるべく多く取り上げ構成したものである。中心には軸として通る階段があり、家全体は円型の廊下でまとめている。全体はバラバラの表現のようにも見えるが、ひとつの村の様な感じに仕上げた、和風と洋風が共在している家である。

SDレビュー案のと実施案はそれほど差がない。当時としては珍しいCGアニメ等も作ってみた。

応募の動機としては、若手の登龍門的であるSDレビューに是非出してみたいと思ったからであるが、最近は若手とは言えない歳になってしまったので、出品をしていない。

所在地：東京都日野市
建築用途：住宅
構造：木造、一部地下RC造
敷地面積：298.5m²
延床面積：116.6m²
竣工年：1990年

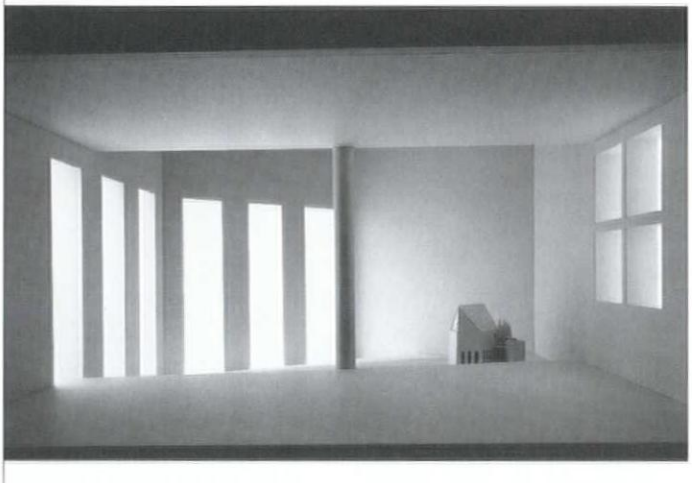
はら・ひさし
1949年神奈川県生まれ。(株)原尚建築設計事務所主宰

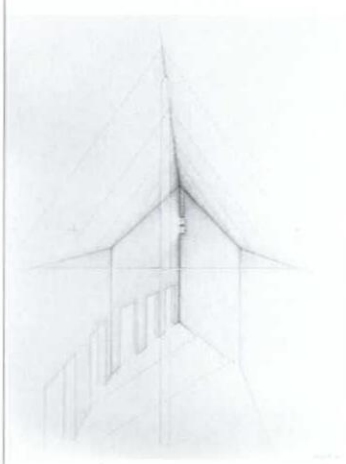


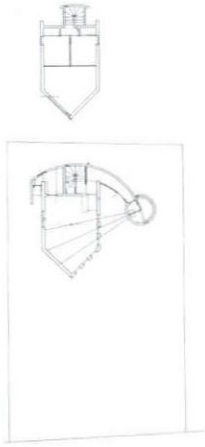
1階平面図

安達治雄

いっぺき舎







1、2階平面図

建築家のみならず、人のなすこと、その時代と環境の影響から全く自由ということはあり得ない反面、個別条件を超えて「普遍」に到達しようという意図そのものは、時空を問わず共感され共有され得るはずである。

一方、時代精神を建築が（時には傑出して）表現してきたという過去があり、SDレビューはこちらの線上にて、計画中というフェーズにこそ、時代の動きが敏感に見られるという仮定で成立していると思われた。

が、意図的に先端たることを動機とした表現は、単に消費されるに終わるであろうし、そもそも今や建築を含めアート全体がネオフィリア（先端嗜好）の無効性を知っている。そうした普遍への設問を、応募という形で自らに投げかけてみたつもりではあった。

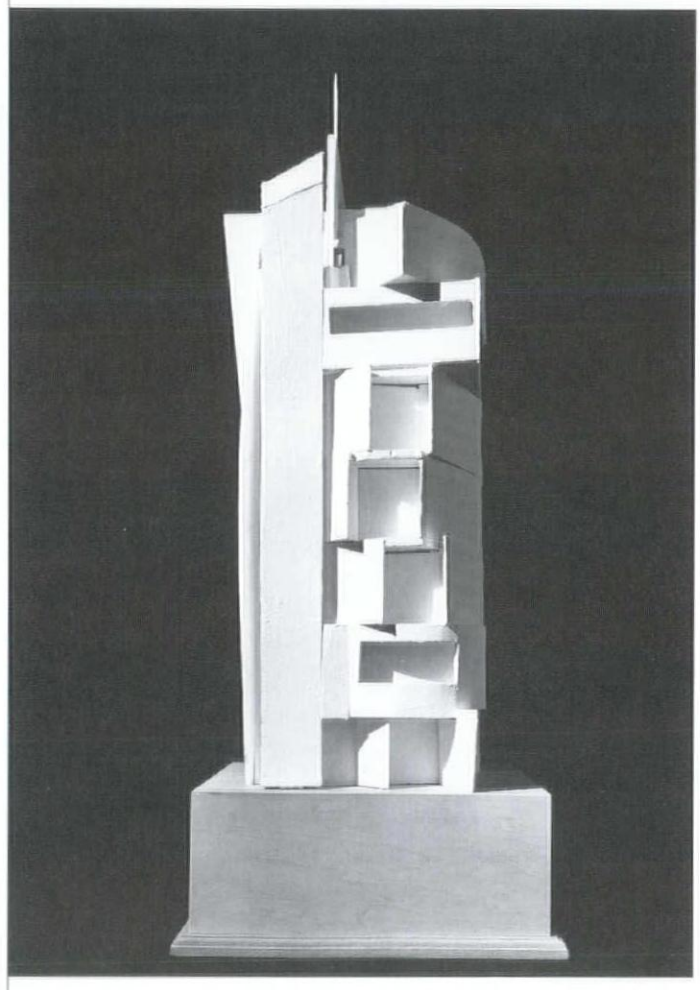
審査員から頂いた誌上コメントのうち、原氏と安藤氏の対極的な視座の距離が、印象に残っている。

所在地：神奈川県伊東市
建築用途：週末住居
構造：RC造
敷地面積：516.96m²
延床面積：90.73m²

あだち・はるお
1952年東京都生まれ。ASCO partners共同主宰

猪狩 一

COR



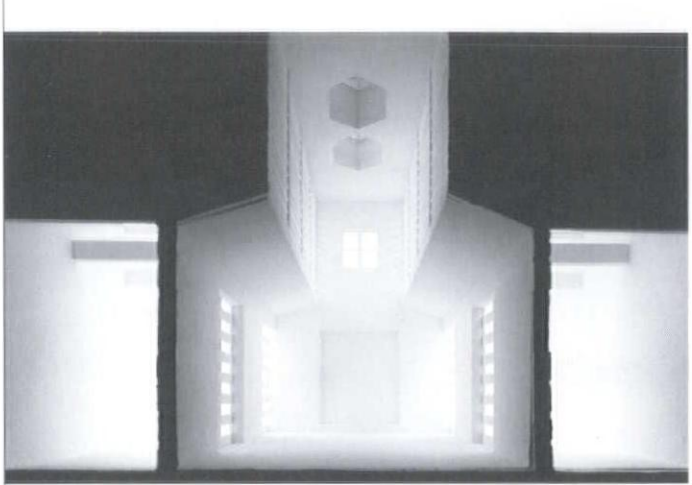
この建物は、当初オーナーサイドで5階建てで計画されていたものを、事業収支などさまざまなシミュレーションを繰り返し、地下1階、地上7階建という企画を提案したところから計画が始まった。各階が単独の機能をもつため、スカイスクレーパーのミニチュア版と見立て、ベース／ボディ／ピナクルという古典的な三層構成のプロポーションを採用し、自立性を高めた。オーナーは写真家である。「光は形を浮かび出し、形は感情を動かす力をもつ。鍵は光である」（ロンシャン礼拝堂――覚書き）「直角の詩」――ロンシャンにおけるコルビュジエのピューリスムからの転向、不透明な闇の探求、錬金術などを、エレメンタルな言語を意識し、アンユージャルな形でこの建物を出現させた。尚、摩天楼に関しては、小林克弘氏1985年度東京大学学位論文「アールデコ・スカイスクレーパーの造形に関する研究」に依拠した。

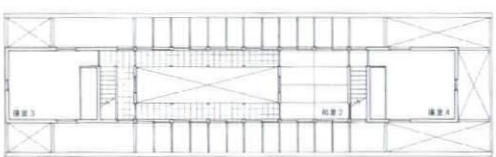
所在地：神奈川県平塚市
建築用途：店舗、住居
共同設計者：本江正茂、張復合
構造：S造、一部RC造
敷地面積：87.4m²
延床面積：462.8m²

いがり・はじめ
1957年福島県生まれ。応募当時（株）アーキデヴァイス主宰、東京大学生産技術研究所藤森研究室所属、現在（株）アーキデヴァイス主宰

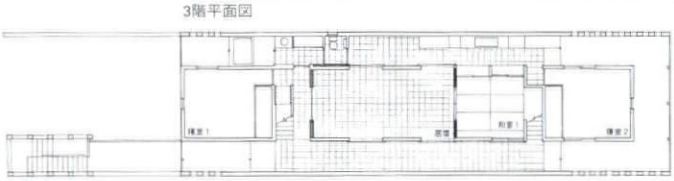
大塚 聡／UNITZ D.F.+相場克彦

T・D HOUSE





3階平面図



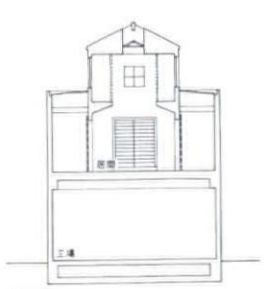
2階平面図



1階平面図



立面図



断面図

間口7.68m、奥行33.50mという細長い敷地に計画された、工場併用住宅である。1階に家業の製本工場、2、3階に4人家族のための住居という構成になっている。

1階の騒音や振動から居住環境を守るため、2階スラブおよび壁までをRC造にして、そのなかに木造で居住スペースを計画した。全体の構成については住まい手の同意を得られたが、実施設計において、開口部の設け方や光の採り入れ方などいくつかの部分で調整がつかず、計画から離れることとなった。

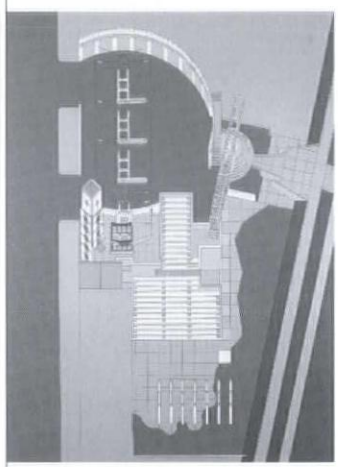
所在地：埼玉県戸田市
建築用途：住宅+工場
構造：RC造+木造
敷地面積：257.099m²
延床面積：361.365m²

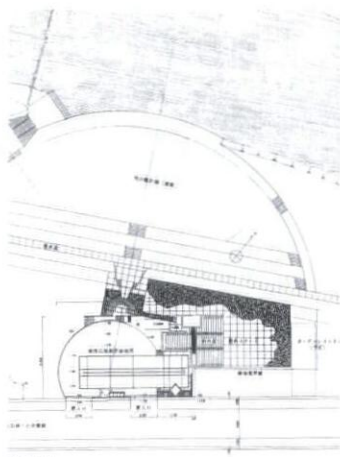
おおつか・さとし
1956年東京都生まれ。応募当時ユニッツ・デザイン・ファクトリー勤務。現在大塚聡アトリエ主宰

あいば・かつひこ
1963年埼玉県生まれ。応募当時ユニッツ・デザイン・ファクトリー勤務

寒竹伸一

城南石油新井給油所





配置図



写真＝堀内広治

新井市の代表的景観のひとつである矢代川湖畔に立地する給油所である。地域特性を生かした新しい給油所として色々な人々に利用されること、周囲の環境や風景を建築の一部に取り込むことを目的とした計画であった。

給油所として必要な機能を仕分けし、それぞれの機能に独立した形と空間を対応させ、地域に開かれるように配置している。さらにその関係性がランドマーク化するように集合させて全体としている。ランドマーク化したことが多くの利用者を呼び、開かれた構成にしたことが利用者を再来させている。

また、雪庇がえしのキャノピーと風雪がえしの円形壁が豪雪時の除雪作業を軽減している。

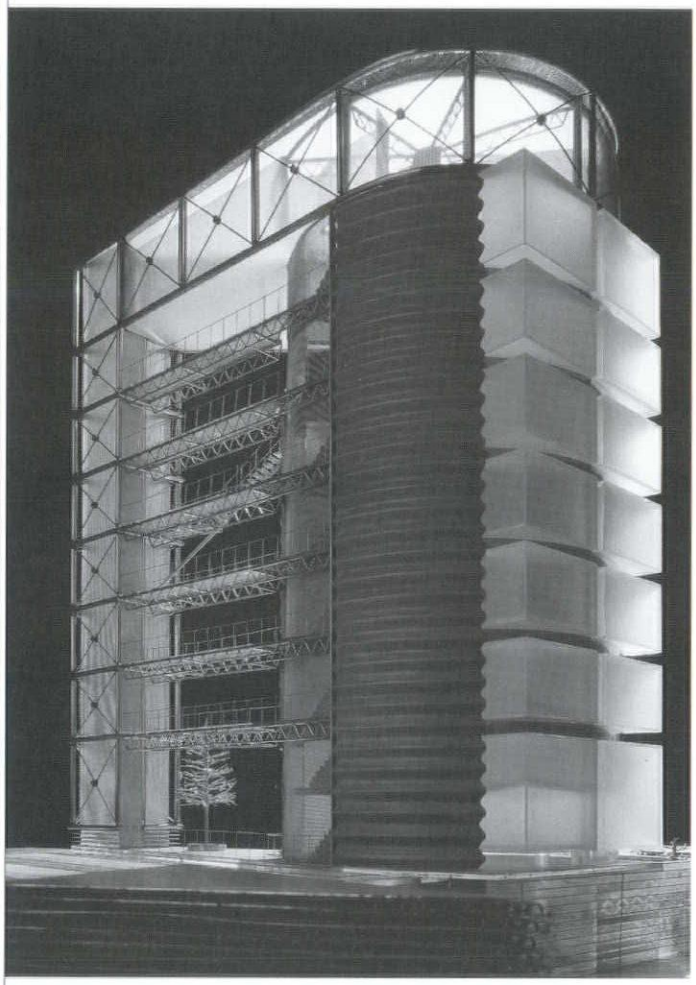
着工直前に、1期、2期と分けて竣工することになり、その後二期工事が中断されたままであることが非常に残念である。しかし、矢代川下流域での地域景観に大きく関わる数々のプロジェクトへの参加の道を開いてくれた作品であり、SDレビュー入選であったことに感謝している。

所在地：新潟県新井市
建築用途：ガソリンスタンド
共同設計者：西田徹、重田真弓
構造：RC壁式構造、一部S造
敷地面積：3,542.4m²
延床面積：369.7m²
竣工年：1989年

かんたけ・しんいち
1955年新潟県上越市生まれ。(株)プラハマ・アソシエイツ主宰

笹森則次+笹森るり子／Atelier TO²

キラー通りのショップ＆オフィス



このプロジェクトは、キラー通りに面して計画されたショップとオフィスのビルである。

都市の無秩序な浸食によって刻まれた、鋭角的な敷地に対して機能的にも、形態的にも、できるだけ明解であることを我々はコンセプトの基本に置いた。

それは、必然的にソリッドなシリンダーとヴォイドなストラクチュア・フレームによって内なる領域と外なる領域を明確に視覚化し、街に向かって積極的な形態を形づくることに挑戦したのである。

近い将来、これが魑魅魍魎（ちみもうりょう）たるコミュニケーション・ベース、東京の交信搭のひとつになるに違いないと確信している。

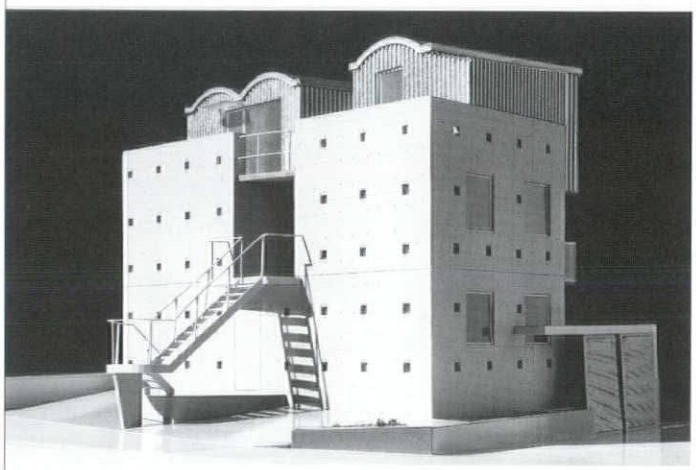
所在地：東京都港区青山
建築用途：オフィス・ショップ
構造：SRC造、一部S造
敷地面積：248.50m²
延床面積：955.35m²

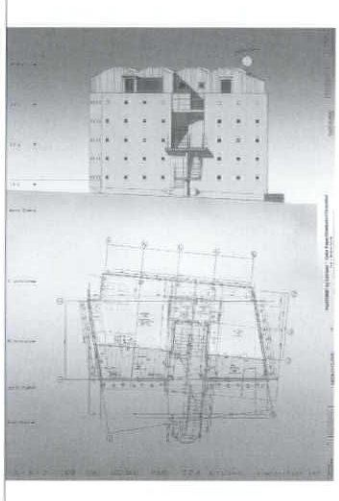
ささもり・のりつぐ
1954年札幌市生まれ。Atelier TO 主宰、東海大学講師

ささもり・るりこ
1960年大阪市生まれ。Atelier TO 主宰

関 太一

KAP





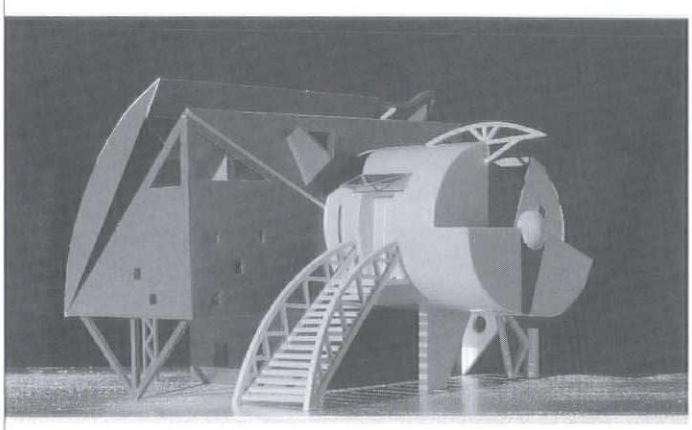
敷地は、早稲田通りより30m程入った住宅地の中にある。この計画は、収支計画により駐車場付の集合住宅として概略が決定された。我々の提案は、内、外部を含めたトータルな「場づくり」を主題とする。それは、住み手の自由を確保した上で、とかく放任になりがちな共用空間を共通意識を持つためのメディアとして成立させることを意図する。外壁のコンクリートに空いた200角の開口は、内部の用途により、ガラスブロック、ルーバーなどに決定され、夜間には、RCのマッスを軽い照明体へと変える。デザイン上のひとつのテーマである階段は、街路に対してステージの役割を果たす。道路に面する壁には、とりわけ内部が持つ「個」の表出をさけた。その結果、主な開口部はすべて南に向かってとられた。また、低層部RC造の上にS造の軸組を載せる構成は、アルミとコンクリートによる素材の対比とともに、近景ではコンクリートの量感を、遠景では形態の軽快さを表すことになる。

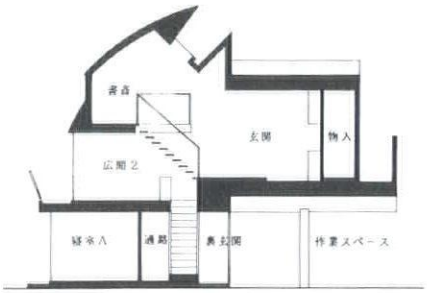
所在地：東京都杉並区
建築用途：集合住宅
共同設計者：久下本啓子、山岸淳子
構造：RC造、一部S造
敷地面積：197.40m²
延床面積：239.06m²

せき・たいち
1961年北海道函館市生まれ。応募当時竹山実建築綜合研究所勤務

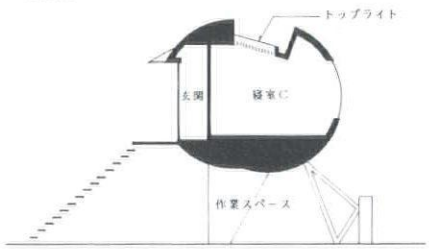
滝澤 隆

A邸［自由を主題とする家］





断面図



断面図

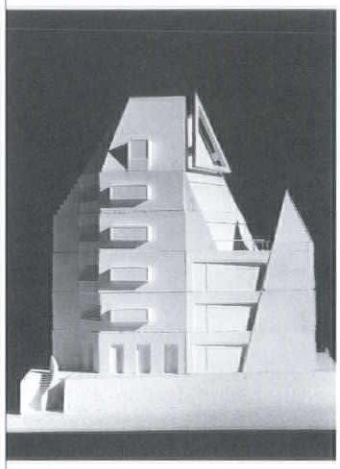
知人に頼まれて、住宅らしきものを構想した。日頃の仕事とは断絶したものを是非実現したいと、その当時、いろいろと描きためていたスケッチ類を洗い出し、使えそうなものを抽出して数案を作った。その中から、知人が選んでくれたものを原案として、設計作業を進めた。いろんな条件に絡めとられ、自由とは逆に、不自由を表現してしまったかも知れない。本当は、鳥かごの中に建物の模型を入れて、自由という名の鳥が捕らえられ、鳥かごの中に転がっているというプレゼンテーションを考えていた。実施設計がほぼ終わった段階で、知人の都合により、一時延期となり、そのまま中断となった。まったく「不自由を主題とする家」となり、私の現実を表現してしまった。結局、現実をブレークスルーする「力」が、結果として、「自由」を表出するということであろうか。流産した「自由」。合掌。

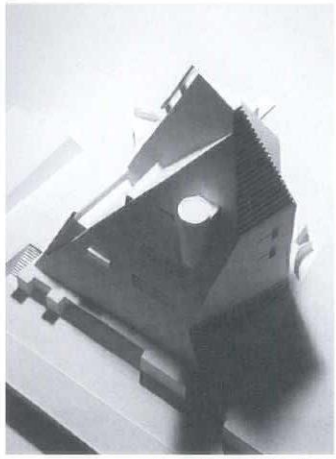
所在地：千葉県市原市
建築用途：住宅
構造：RC+S造
敷地面積：223m²
延床面積：201m²

たきざわ・たかし
1951年東京都生まれ。東急設計コンサルタント勤務

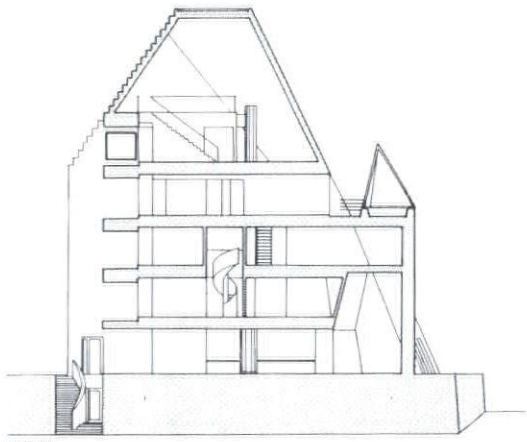
團 紀彦

CASA ROCA





写真＝團紀彦建築設計事務所


断面図

1987年度入選の〈SPACE J-5〉はあえなくバブルの露と消えたが、この作品は、そうした美学と方法論の延長線上にあってかなり実現に近いところまではいった計画である。

敷地は神奈川県葉山町の海浜に面した場所で、そこに、日影規制および斜線制限等によって立ち上げられた岩状の量塊の中に、5ユニットのコンドミニアムとホールを穿ち抜く計画であった。　外形の決定要因と内部の論理とは、始めからかけ離れており、それらをインプロビゼーショナルな歩みよりによって合体しようとするもので、いわば機能と形態を調停しようとする試みであった。

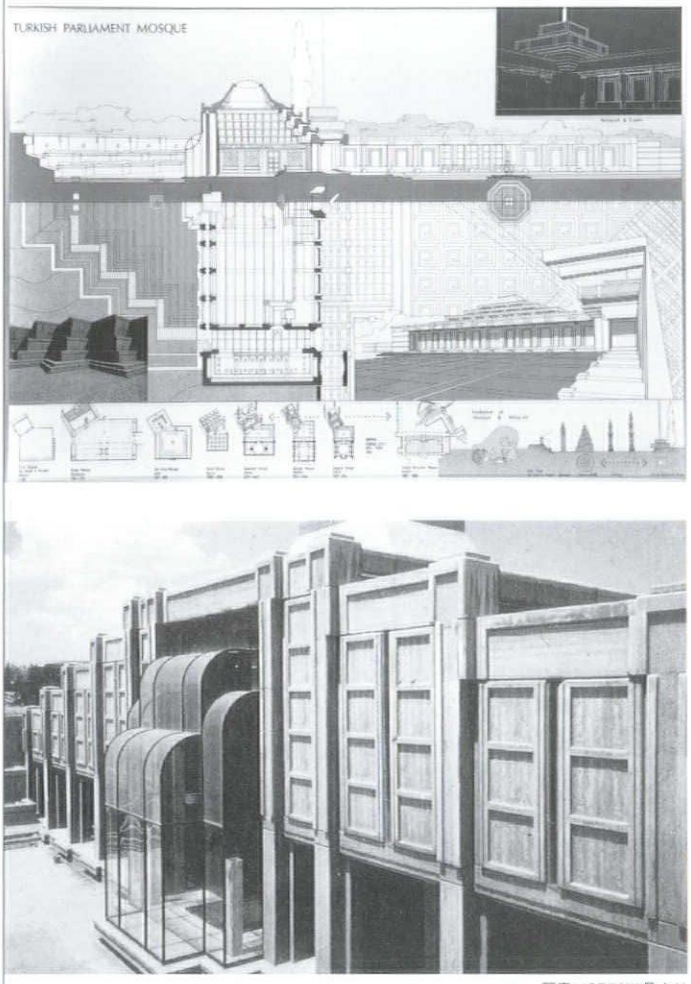
確認申請、住民説明会にまで進んだが、周囲の建物の階数よりも高いという理由で反対され、やがてバブルの崩壊とともに事業計画そのものも消滅した。

所在地：神奈川県三浦郡
建築用途：コンドミニアム
共同設計者：東森香織、田中英一
構造：SRC造
敷地面積：695.38m²
延床面積：1,669.85m²

だん・のりひこ
1956年神奈川県生まれ。応募当時團・青島建築設計事務所主宰。現在團紀彦建築設計事務所主宰

ベフルズ・チニジ+ジャン・チニジ

議員会館付属施設



写真＝SD9307号より

この施設はふたつのL字形の議員会館（設計：ベフルズ・チニジ）の後方に位置する。16世紀の建築家ミマル・シナンによって確立された古典、集中式平面に対し、それ以前の形式である短形平面を採用している。ミヒラブを有する壁面がより長くなっている。この壁面にガラスがはめられることにより、ミヒラブは壁から離れ、メッカの方向へ池として広がる。時を告げる機能を有したミナレットもその役目を今日では失っている。そこでミナレットも地面に降りたふたつのバルコニーにより、その存在のみを象徴するに留めた。全体計画としては、広場・礼拝場・図書館を一体化させる形で計画することにより、トルコ建築の伝統である複合共同体を繰り返すように務めた。

所在地：トルコ共和国国会敷地内
建築用途：議員会館施設（広場、礼拝堂、図書館）
共同設計者：オルハン・ベルク、ピエル・アンドレ・レバスクゥエ、山本達也（ドローイング）
構造：RC造
敷地面積：6,400m²
延床面積：950m²
竣工年：不明

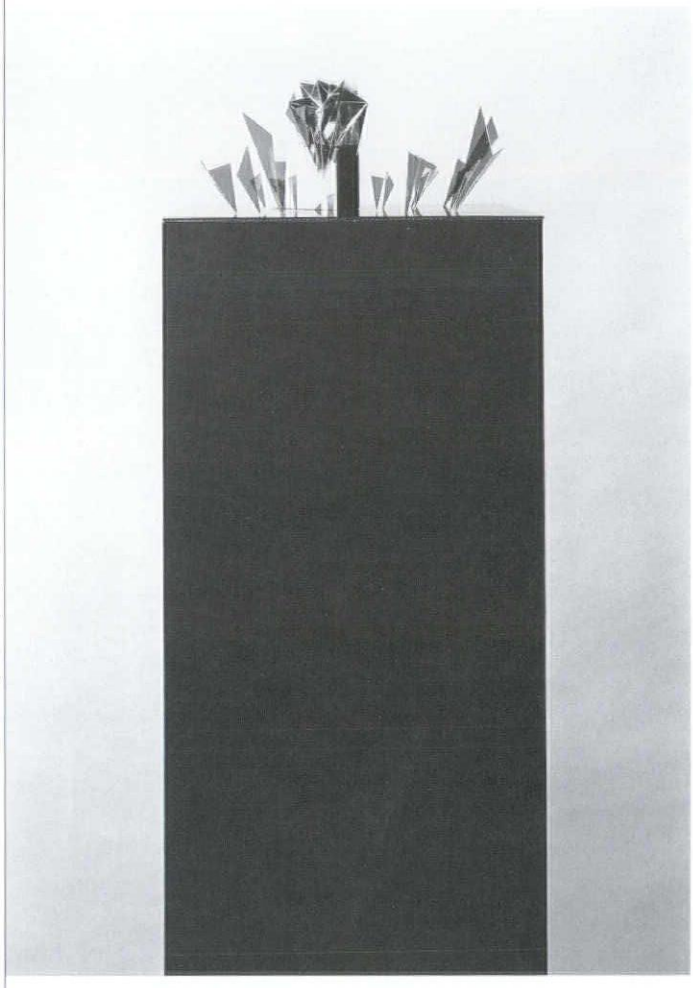
Behruz Çinici
1954年イスタンブール工科大学卒業。1955年イスタンブール工科大学で教職

Can Çinici
1984年アンカラ中東工科大学卒業。1986年アンカラ中東工科大学助手。応募当時ロンドンAAスクールに留学

渡辺 誠／アーキテクツ オフィス

ORE X

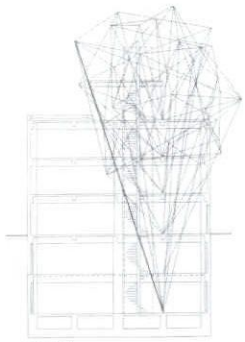
朝倉賞



箱をふたつ用意します。同じ大きさの、矩形の箱がいいでしょう。そのひとつをバラバラにして、空中に放り投げる。舞い散る無数のチップ。きらきらと光を反射するそのかけらを集めて、再び全体をつくる。そう、これはジグソーパズル。しかし、もう、元には戻らない。変化は、非可逆的なのだ。元に戻らないなら、新しい組み立て方が必要だ。こうした試みは、壊そうとしているのではないのです。壊すのではなく、もちろん断片をそのまま投げ出すのでもなく、もう一度全体をつくろうとしている。部分から、全体へ。再構築のための方法。

ランダムでもなく、限られた箱でもなく、データの流れでもない、新しい秩序を持つ全体。それは一見、秩序に見えない秩序。

カオス（科学用語の方、ね）に潜む、表向きは現れない、しかし確かに存在する秩序。破壊の後の復興計画。どうせつくるなら、新しい秩序を、というわけで、同じ箱から生まれた、別の姿。



断面図

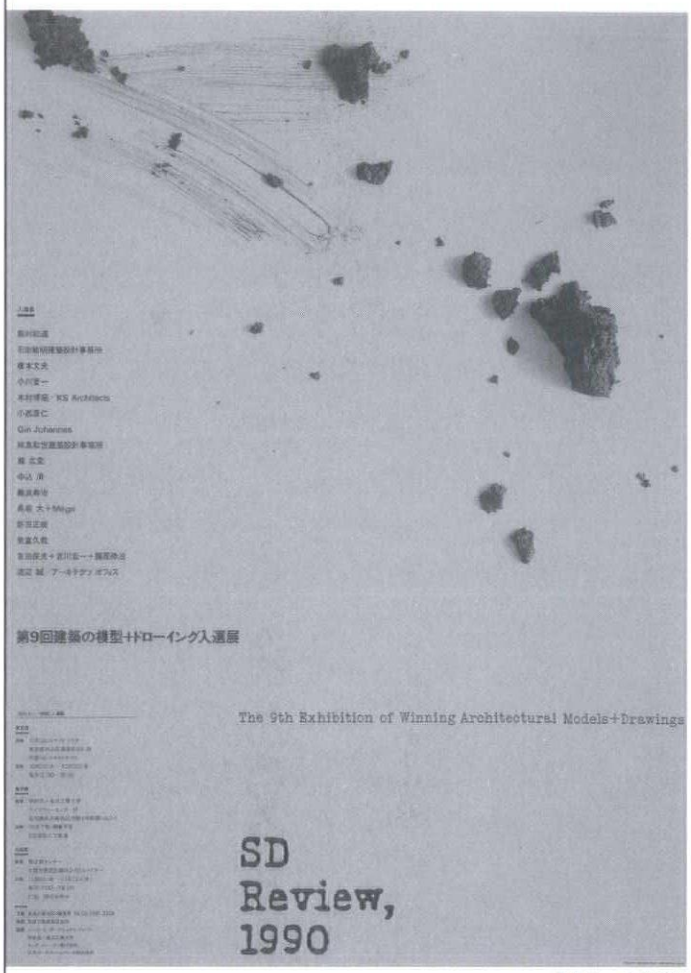
ここでは、光がその触媒になった。

To be continued→〈Jelly Fish〉、1990

所在地：東京都渋谷区富ヶ谷
建築用途：オフィス
構造：RC造、S造
敷地面積：116.2m²
延床面積：416.5m²

わたなべ・まこと
1952年横浜市生まれ。渡辺誠／アーキテクツ オフィス主宰

第9回　1990年



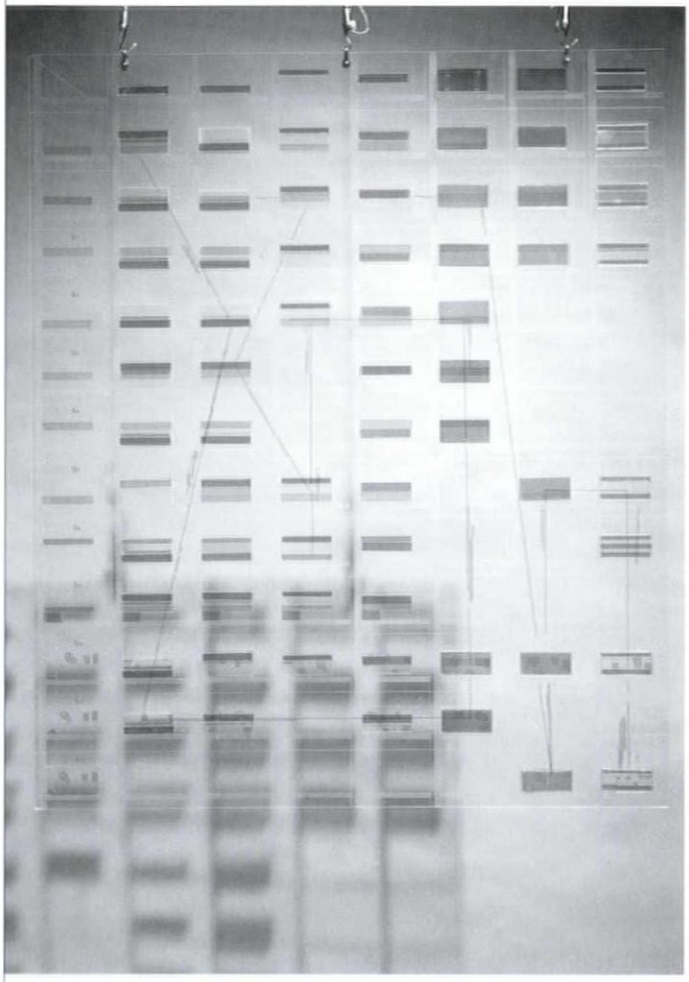
デザイン＝工藤強勝

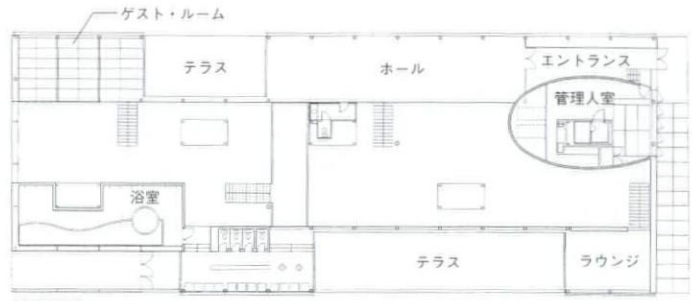
東京展：10月2日～10月12日
会場：ヒルサイドプラザ
金沢展：10月30日～11月6日
会場：金沢工業大学ライブラリーセンター
大阪展：11月9日～11月22日
会場：都住創センター
審査員：原 広司、早川邦彦、六角鬼丈、三宅理一
応募総数：206作品
入選数：16作品
受賞者：
長坂 大+Méga（鹿島賞）
小川晋一（朝倉賞）
ジン・ヨハネス（SD賞）
妹島和世建築設計事務所（SD賞）
乗富久哉（SD賞）

飯村和道／ダンス　SY岡山店新築工事
石田敏明建築設計事務所　Overlap
榎本文夫　NビルAプロジェクト
小川晋一　ミニマリストの家
木村博昭／Ks Architects　星田西団地住民施設
小西彦仁　OKUIX PROJECT
ジン・ヨハネス　CRICKET—regulation
妹島和世建築設計事務所　（株）再春館製薬所レディス・レジデンス計画
瀧 広空　仙舎（せんしゃ）
中込 清　S-Project［B-Zone］
長坂 大+Méga　神戸北町CPプロジェクト
難波寿治　Malibu International Kobe Club House
新田正樹　栄照寺本堂新築工事
乗富久哉　街の換気口［GALERIE STURM］
吉田保夫+吉川宏一+藤原伸治　今池カラーズ Fractured Symphony 1990
渡辺 誠／アーキテクツ オフィス　Jelly Fish

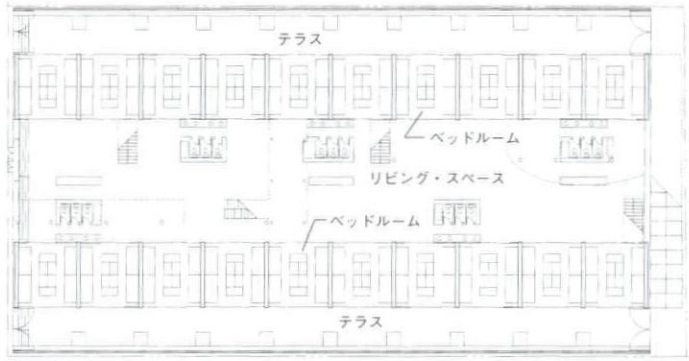
(株)再春館製薬所レディス・レジデンス計画（再春館製薬女子寮）

SD賞

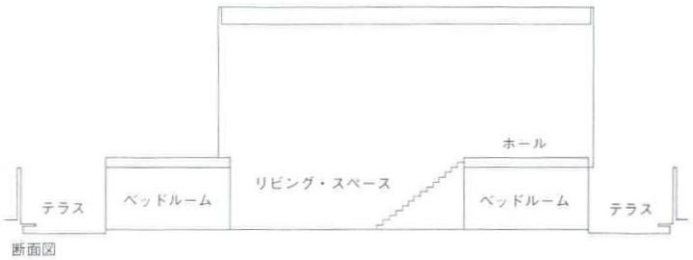




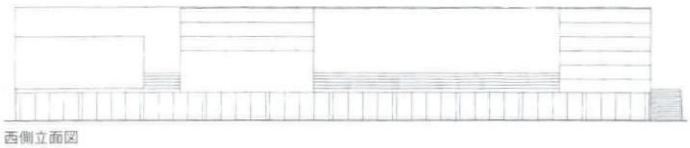
2階平面図

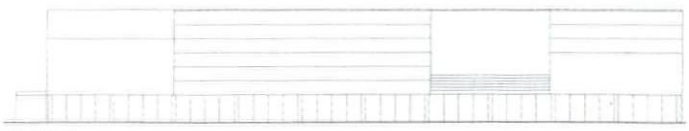


1階平面図



断面図


西側立面図

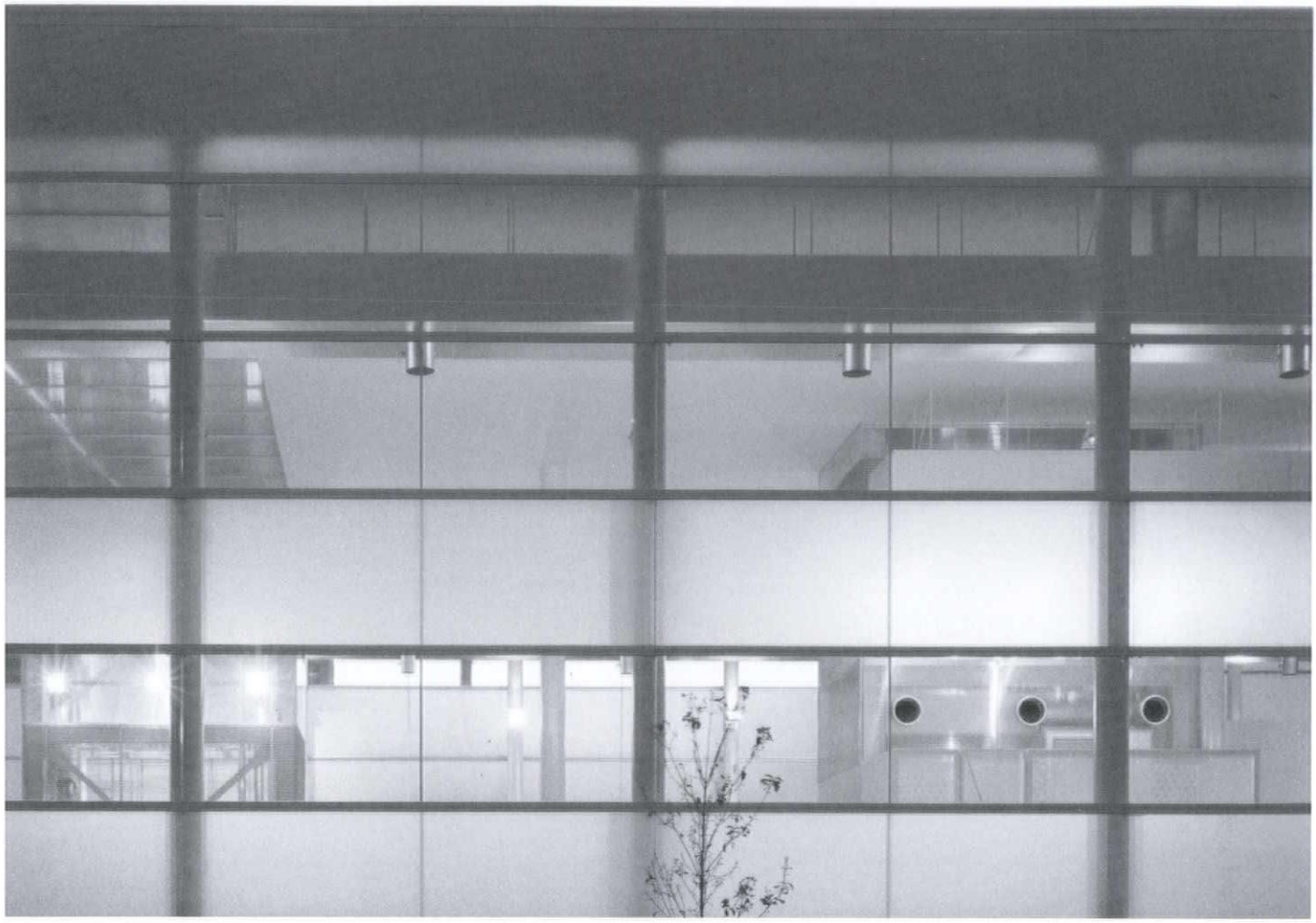

東側立面図

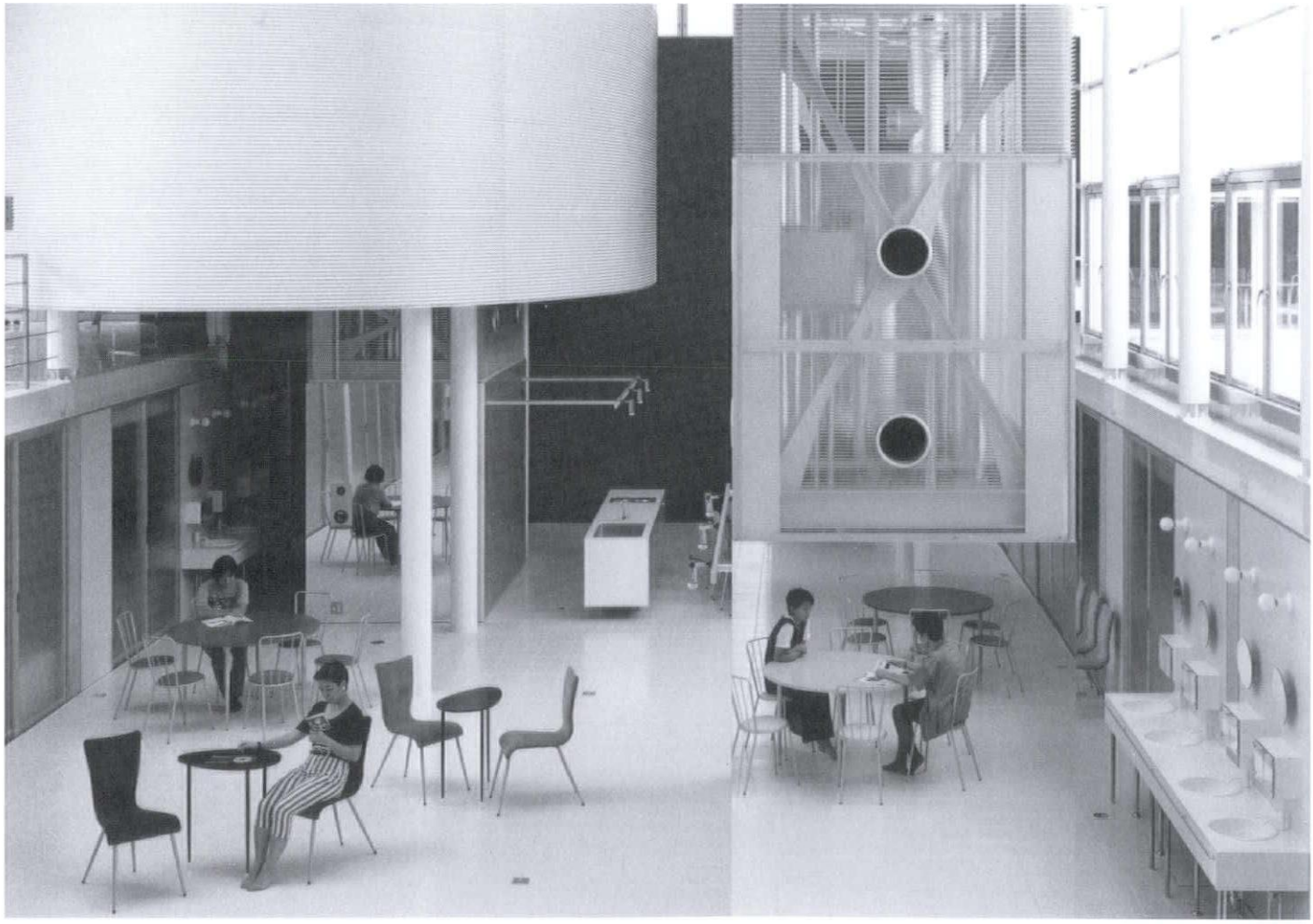
建つ前にいろいろな方の目に触れいろいろな方の御意見、あるいは反応を受けることができるというのが非常に貴重であったことと、建つ前にもう一度自分が考えていることを考え直してみるのに良い機会であったことで参加したように思います。

建築について考えていることと、模型を作ることの間に何か大きなギャップを感じていて、プレゼンテーションに相当悩みました。それは今でも感じるのですが、どうも模型では、自分の考えている建築の内部と外部を同時に同等には示すことができないと感じるからです。展覧会では建物をそのまま再現することはできないので、どのように抽象化するのがその建物を説明するのに一番ふさわしいかということを考えなくてはならないわけですが、そのことは、その後実際の現場で具体的なものができ上がってくる過程をコントロールするのに大変有効なように思います。

所在地：熊本県熊本市
建築用途：社員寮
共同設計者：西沢立衛
構造：RC造+S造
敷地面積：851.69m²
延床面積：1,254.66m²
竣工年：1991年7月

せじま・かずよ
1956年茨城県生まれ。妹島和世建築設計事務所主宰



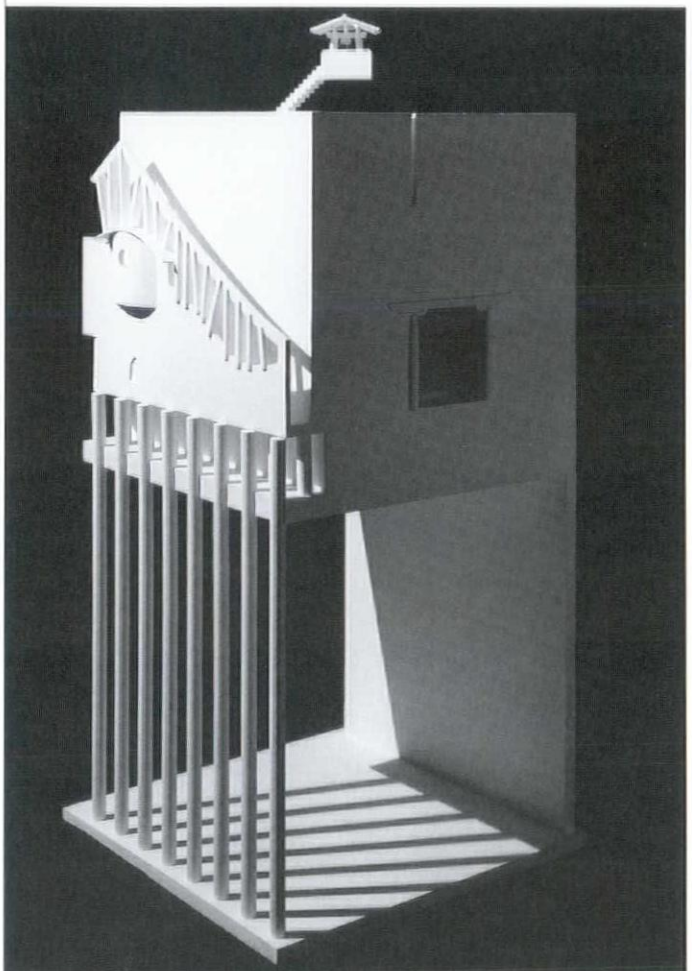


写真（2点とも）＝新建築写真部

写真＝新建築写真部

新田正樹

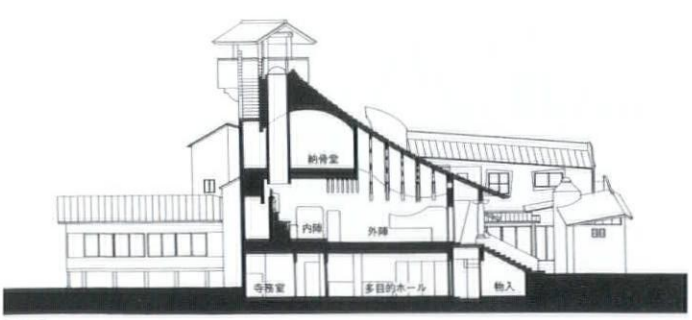
栄照寺本堂新築工事（栄照寺）





写真＝新田正樹建築空間アトリエ





断面図

埋没する聖域としての生き様が問われる……。消滅から半世紀を経てようやく再建の日を迎えた。しかしこれからの半世紀は、より激しい変化の波にさらされる。周囲が高層都市化していく中で、間違いなくこの空間はヴォリューム的に取り残されたものになる。その言わばヴォイド空間にあって、しなやかで力強い存在感を維持していかなければならない。その意思表示の象徴が屋根の上に押し上げられた鐘楼である。

展覧会にはそのコンセプト模型を出展したが、実作が周囲からあまり見えない過酷な環境にあるため、余計に展覧会の模型の印象が際立っているようである。

所在地：大阪府大阪市城東区
建築用途：寺院
構造：RC壁式構造、一部木造
敷地面積：790.56m²
延床面積：640.88m²
竣工年：1992年

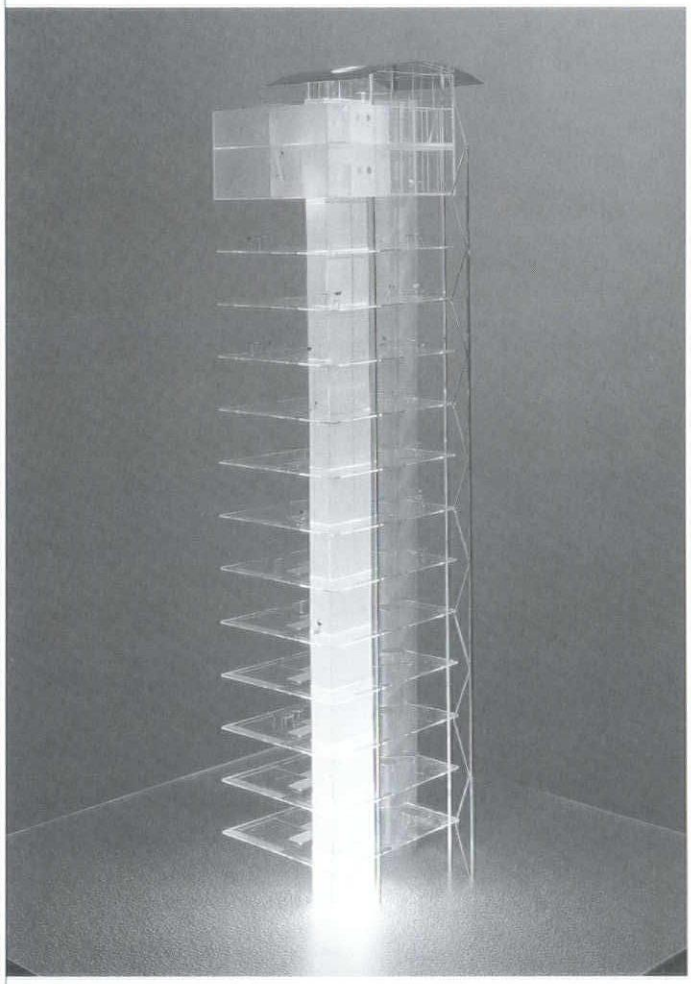
にった・まさき
1953年広島県生まれ。新田正樹建築空間アトリエ主宰

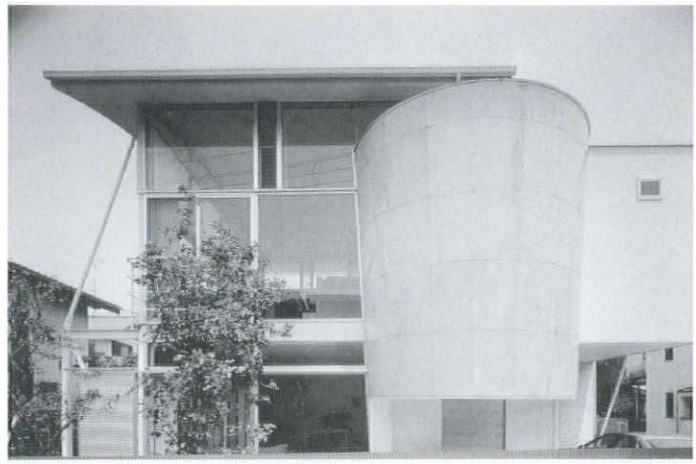


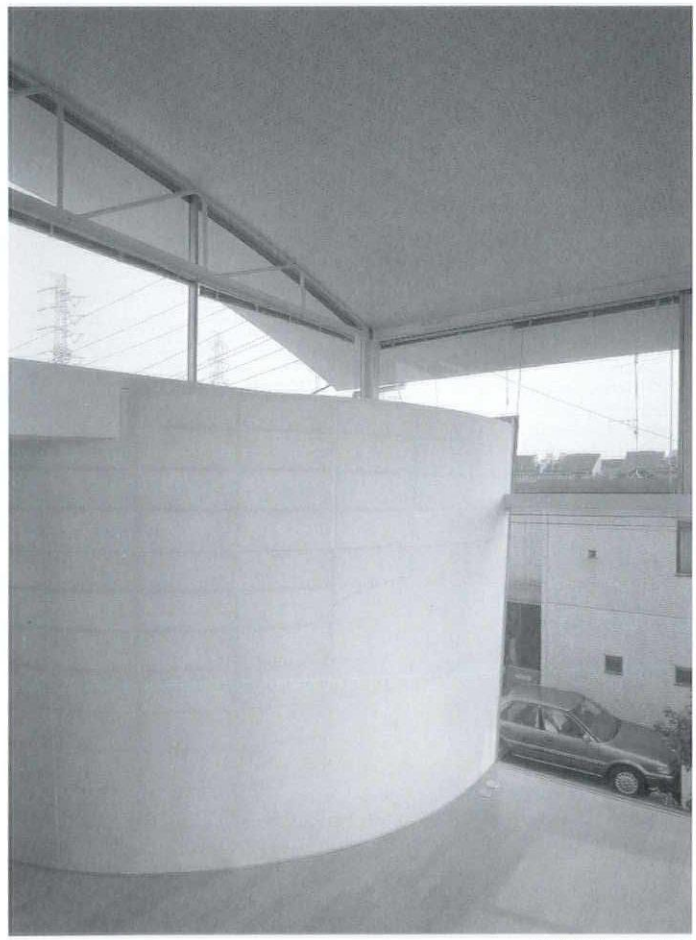
写真＝新田正樹建築空間アトリエ

石田敏明

Overlap（網島の家）





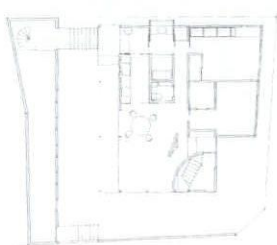


写真（右2点）＝平井広行

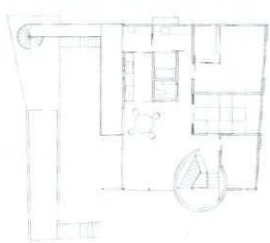
グリッド・プランで平面計画されているが、線材で構成された架構は抽象的な面に還元されている。見えないグリッド上には特定の機能をもったシリンダー状や直方体の形態を伴ったヴォリュームが意図的に挿入され、それらを1枚の薄い屋根で覆った空間構成になっている。これらのヴォリュームの配列によって、流動的でニュートラルな質をもった経路をつくり、人の行為や行動によって領域や空間密度、さらにはスペース相互の関係が絶えず変化しようとする空間を意図した。

所在地：神奈川県横浜市
建築用途：専用住宅
構造：S造+木造+RC造
敷地面積：242.01m²
延床面積：190.99m²
竣工年：1991年

いしだ・としあき
1950年広島県生まれ。応募当時石田敏明建築設計事務所主宰。現在前橋工科大学教授



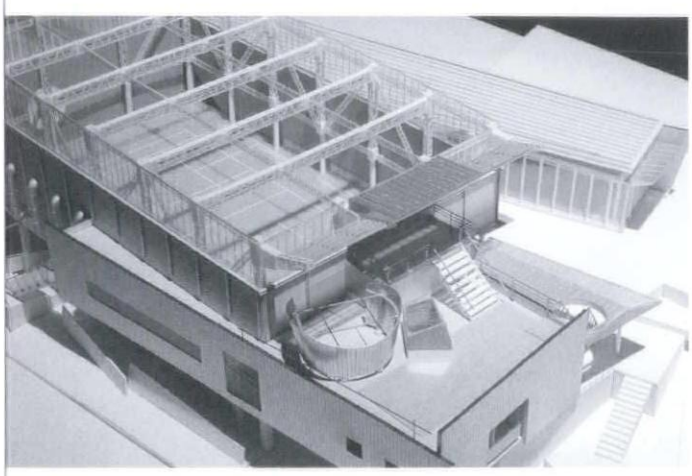
1階平面図



2階平面図

木村博昭／Ks Architects

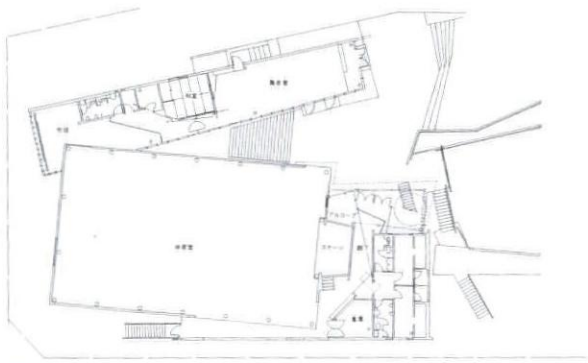
星田西団地住民施設



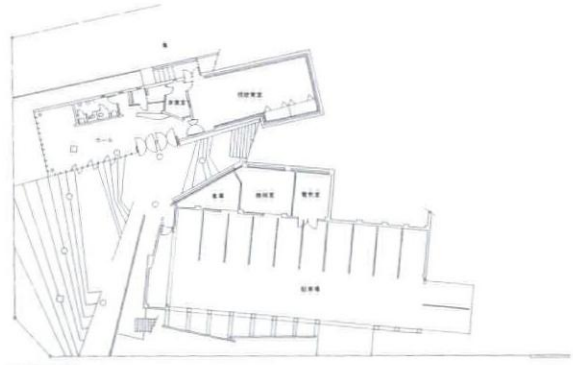


写真（左下、右）＝植田三代治

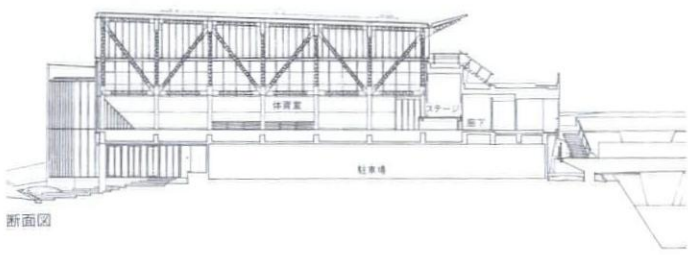




2階平面図



1階平面図



断面図

〈コモンシティ星田〉は、大阪府住宅供給公社による戸建と中低層の集合住宅、約1000戸の団地である。この住民施設は、そのほぼ中心にある池に接する敷地に建ち、体育館と集会施設機能を合わせもった中核施設である。敷地のコンテクストから、建築の足元はリニアパークと連続する、段状の外部空間として開放し、コンクリートの構造体を半ば埋もれさせて、下層部をアースワーク的に処理している。この外部空間は、建物内部との関係よりむしろ、リニアパーク内の庭園構築物として独自に作用し、上層部は、この下層部の上に置かれたような集会棟と体育館からなる。2棟は重なりながらもそれぞれ独立したプログラムに基づいて機能している。

各独立した機能の上に、混成したプログラムを与え、合理性を前提としながら、非合理な価値を内包させるといった構築の方法に、多様性や曖昧性を求める現代の多元的な価値観に答える可能性を見出せるのではないかと考えた。

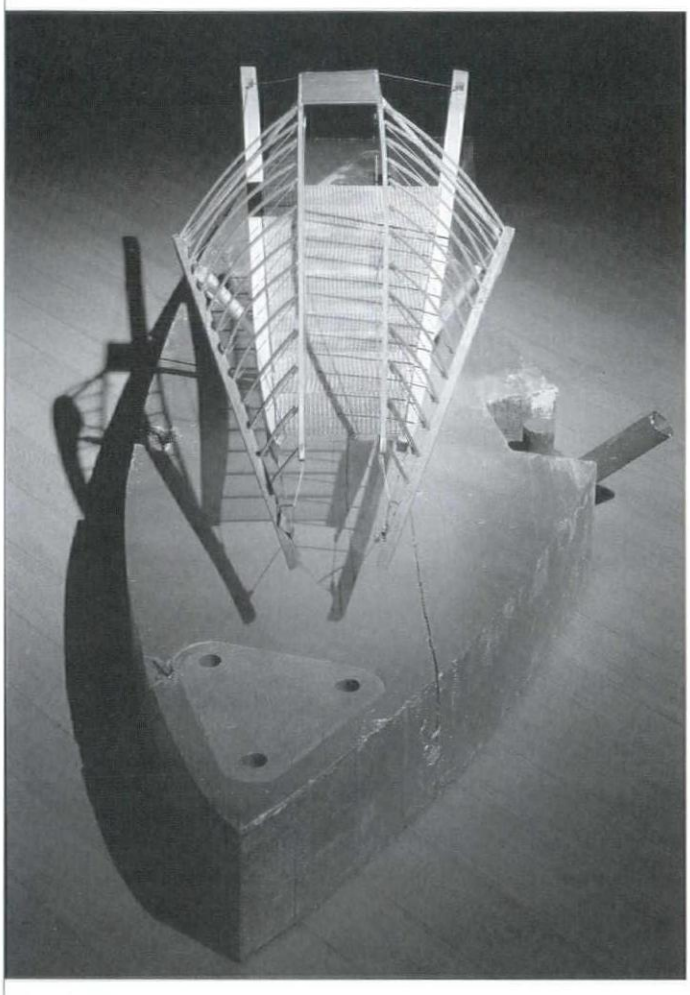
所在地：大阪府交野市
建築用途：体育館、集会所
共同設計者：米原慶子、松浦裕二、山下喜明、小笠原絵里、秋葉謙介
構造：RC造+S造（体育館：ラチス梁・柱）
敷地面積：1,375.68m²
延床面積：1,215.98m²
竣工年：1991年

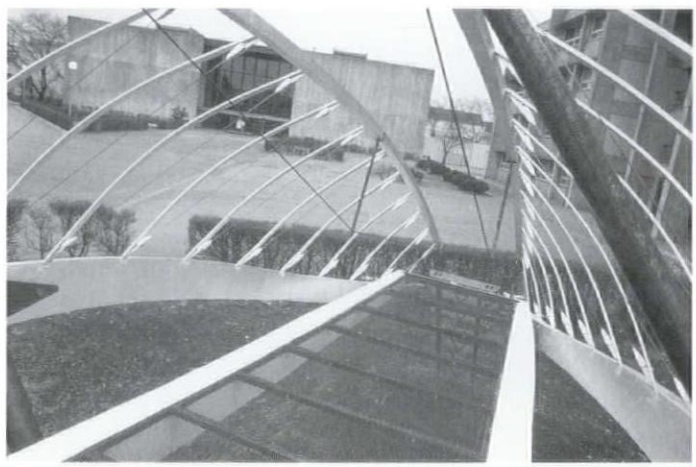
きむら・ひろあき
1952年大阪府生まれ。木村博昭／Ks Architects主宰

ジン・ヨハネス

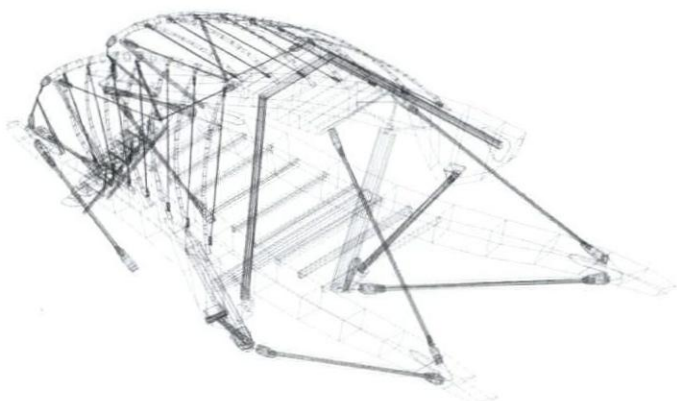
CRICKET－regulation（浮遊する曲面状の半透明フロアを持つヒーリング・プレイス）

SD賞

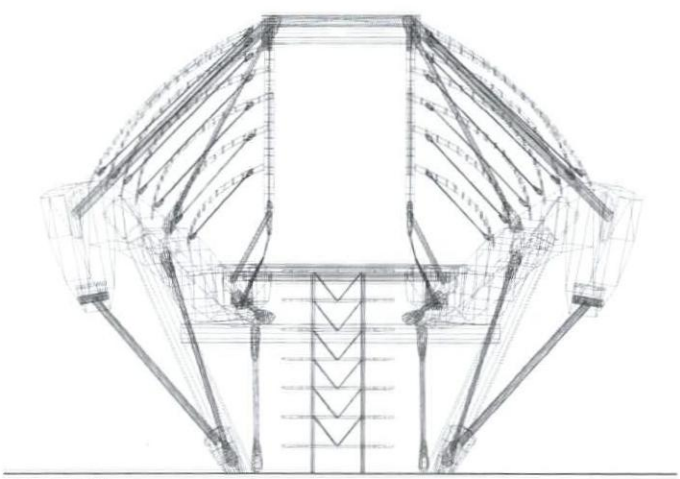




写真提供＝ジン・ヨハネス



アイソノメトリック



立面図（正面側）

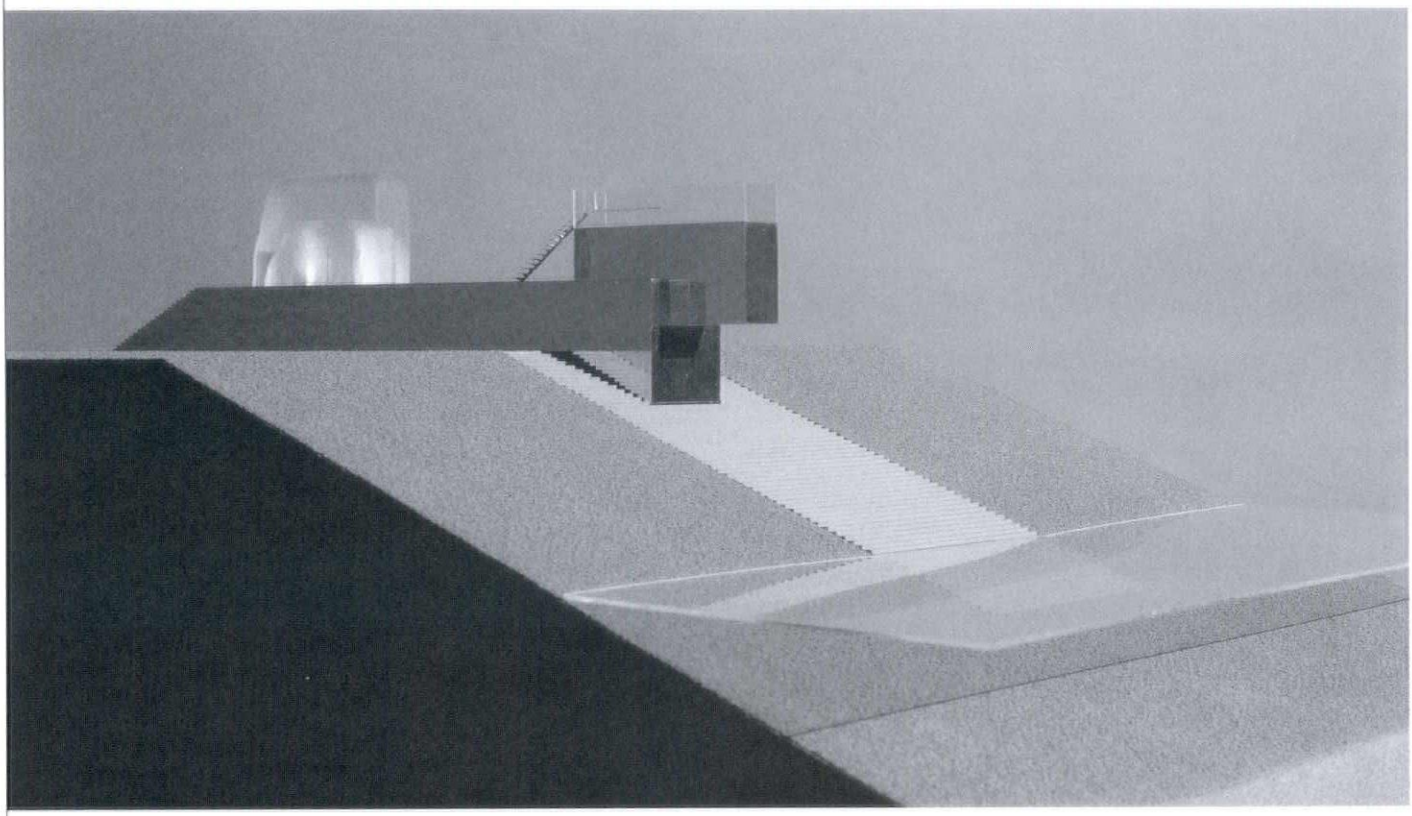
時代が進むにつれ新たな解釈が付加された。イメージの暴走、増殖等を当時主張したが、最近執筆した「ミレニアム・フラーの予言――ジオデシック球からのモーフィング」(SD海外建築情報1997年10月号)において、その関連性がさらに拡張している。つまり、形態変異を伴うイメージ論はコンピュータ上でのモーフィングに代用されたということである。これまでプロセスにおけるイメージ論はコミュニケーション手段としては理解不能や誤解を招くことになりかねなかったが、コンピュータの進歩は、マテリアルの希薄化を促し、と同時に今度はマテリアル化するための前段階的ツールとしての役割を担った。もちろんここには形態変異を伴うイメージ論、あるいは表現主義がすでに含まれているのだ。形態変異（モーフィング）イメージを思い描けない奴は現時点では無用だ。そしてそれは身体性との関連、すなわちイッテン的浣腸直後の脳内・身体混成覚醒作用が威力を発揮するのである。

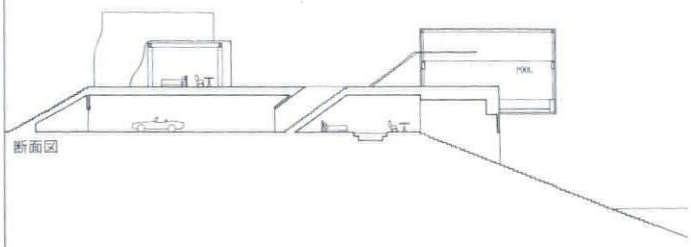
所在地：静岡県奥石廊崎大根
建築用途：住宅
構造：サスペンション・ハイブリッド構造
敷地面積：10,000m²
延床面積：30m²
竣工年：1990年

Gin Johannes
1968年生まれ。応募当時武蔵野美術大学造形学部建築学科所属。現在Gin Johannes Studio主宰

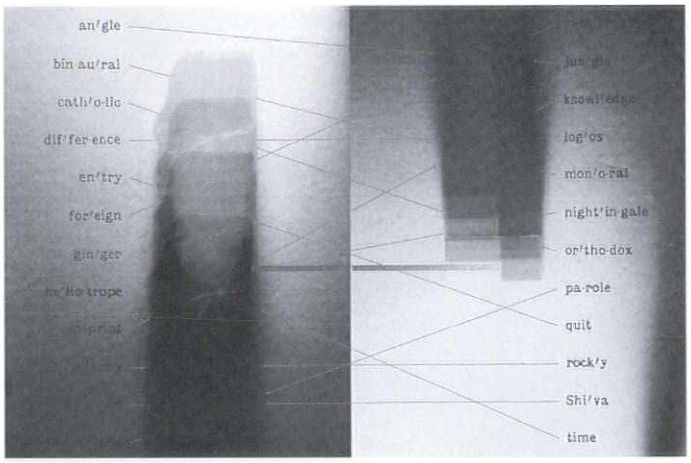
渡辺 誠／アーキテクツ オフィス

Jelly Fish





断面図



今回も、まず、箱を用意します。少し長めの箱がいいでしょう。住宅に必要な機能は、みんなこの箱の中に入れてしまいます。来るときに使った車も、そのまま乗りいれてしまう。全部片づけてすっきりしたら、箱の上の両端に、ふたつの重りをそっと置く。一種の天秤ですね。そして重りの一方には水を入れ、もう一方には光を注ぎます。これでで き上がり。

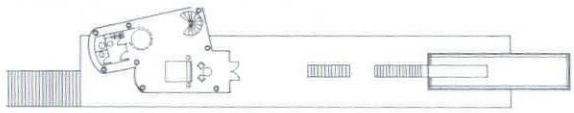
天秤の重りは対称に置かれているので、性格も対照的。一方はスクエアな立体、他方は融けかけた氷のように冷たくも柔らかい。一方は空間のなかを漂う（つまり、泳ぐ）ための場所で、他方は時間の中を浮かぶ（寝る）ための部屋。一方では空間が手で触れられるものになり、他方の空間はフィルターに過ぎない。この天秤で計られるのは、もちろん重力である。

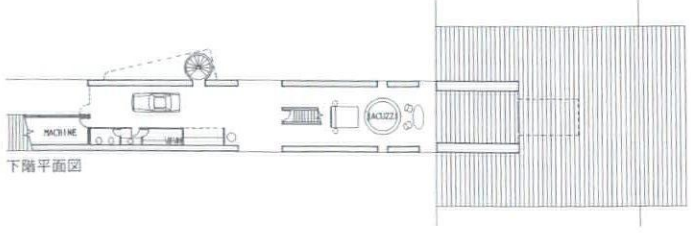
そしてこの後、Jelly Fishは〈Jelly Fish 2〉、〈Jelly Fish 3〉と続くことになり、透明で軟らかな立体は、やがて〈K-MUSEUM '96〉で実体となった。

To be continued→〈LAGOON〉1991

所在地：千葉県
建築用途：住宅
構造：RC造、S造
敷地面積：1,221.0m²
延床面積：294.6m²

わたなべ・まこと
1952年横浜市生まれ。渡辺誠／アーキテクツ オフィス主宰

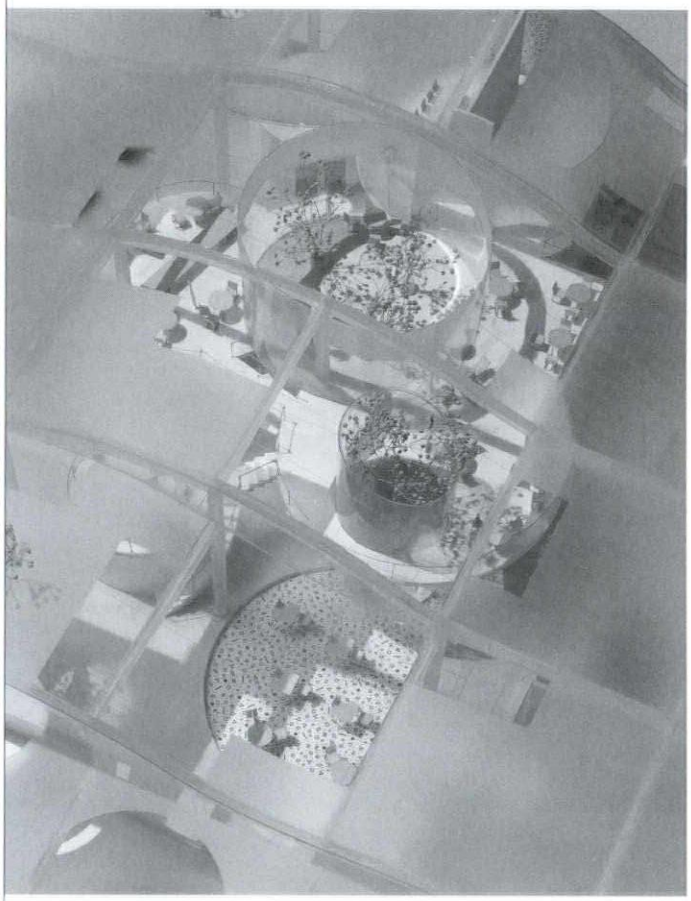

上階平面図

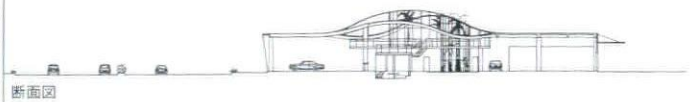


下階平面図

飯村和道／ダンス

SY岡山店新築工事





断面図

この施設は全国展開を予定していた輸入車のショールームのデザイン・マニュアルを作成するプロジェクトの一環としての計画でしたが、後にクライアントの都合によりプロジェクト自体がなくなって実現しませんでした。

地方都市の郊外の国道に面して建つという立地の周辺環境と建物の関係、そしてショールームという建物の機能を総合的に読み直し、外部との関係を切らずに建物としての機能を組み立て直し、どこまで透明感のある空間がつくれるかということで提案をしました。

囲い込むのではない、開放された一体感のある建築という、当時考えていたことが表現できていたので非常に残念でした。

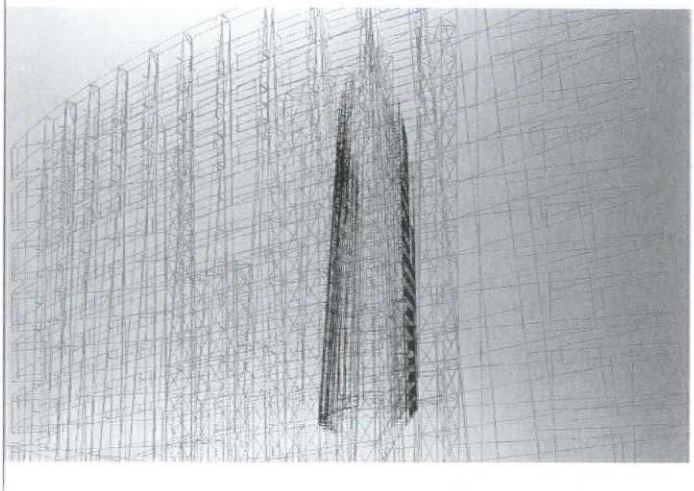
しかし、ここで考えていた基本的なことは、1991年に応募発表した〈K邸〉に表現されました。

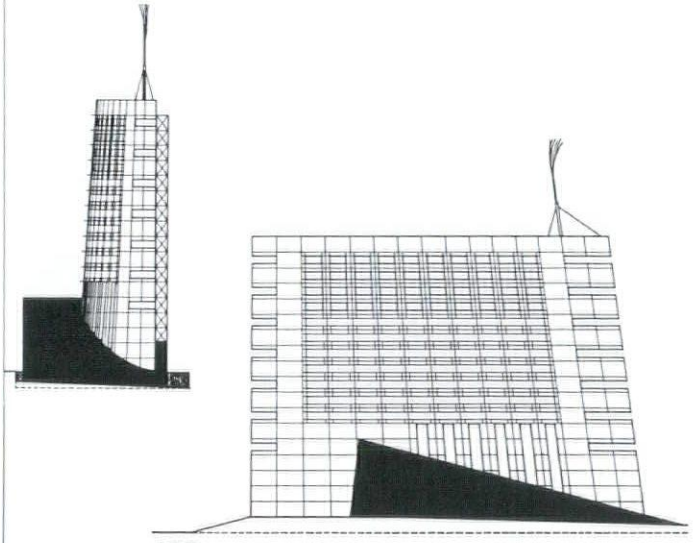
所在地：岡山県岡山市
建築用途：展示場
構造：S造
敷地面積：3107.97m²
延床面積：1,666.99m²

いいむら・かずみち
1953年東京都生まれ。一級建築士事務所ダンス主宰

榎本文夫

NビルAプロジェクト





立面図

あの計画は、臨界副都心の再開発の一環として南有明地区に計画されていた、通信設備と低層部に商業施設、中層部にオフィス、高層部に住宅が入る予定の複合ビルであった。最高高さが100mあり、地区全体のランドマークと成るべく、外観の意匠が重視された。円錐の曲面の一部を持った正面に対し、裏側はこのビルの構成を表現するため利用階の異なるシースルー・エレベーターが露出し、それを意匠としている。

バブル経済の崩壊による東京都の大幅な再開発見直しの影響により、この計画は中止となり現在敷地にはクライアント社内の設計による箱形の通信施設が入った低層の建物が建っている。

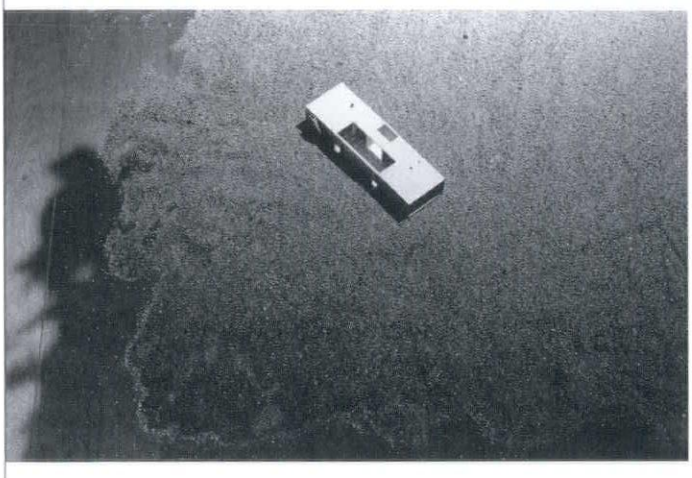
所在地：東京都
建築用途：複合ビル
共同設計者：エヌティティ建築総合研究所
構造：RC造、S造
敷地面積：6,000m²
延床面積：30,000m²

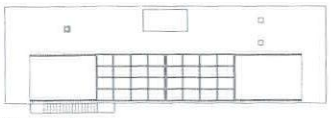
えのもと・ふみお
1957年東京都生まれ。榎本文夫アトリエ主宰

小川晋一

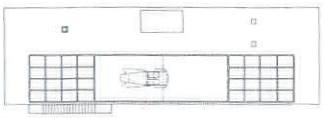
ミニマリストの家

朝倉賞





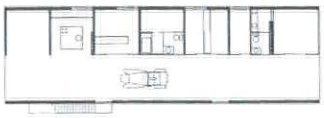
Skyroof Closed



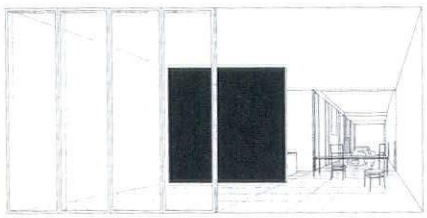
Skyroof Open



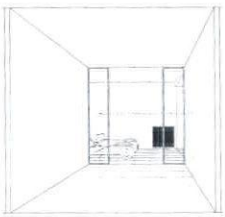
Window & Door Closed



Window & Door Open



Living room to Court Gallery



Master bedroom to Court Gallery

これは閑静な住宅地の一角、南北に細長い敷地に建つ専用住宅である。空間はXYZ方向ともに3.6mのグリッドで分割され、そこに生まれる正方形と立方体の反復と連続によって全体が構成されている。25.5mのヴォイドなボックスカルバートの中に正方形の垂直平面が連立し、その中に各個室機能が組み込まれている。ポジティブな正方形の壁の反復は立方体に空間を分節し、ネガティブな正方形の連立は空間をトンネルとして連結していく。クライアントの愛蔵してきた2台のクラッシック・カーのあるギャラリーは各室から透明なガラス・スクリーンで仕切られ、スカイルーフは車のサンルーフのように開かれる。

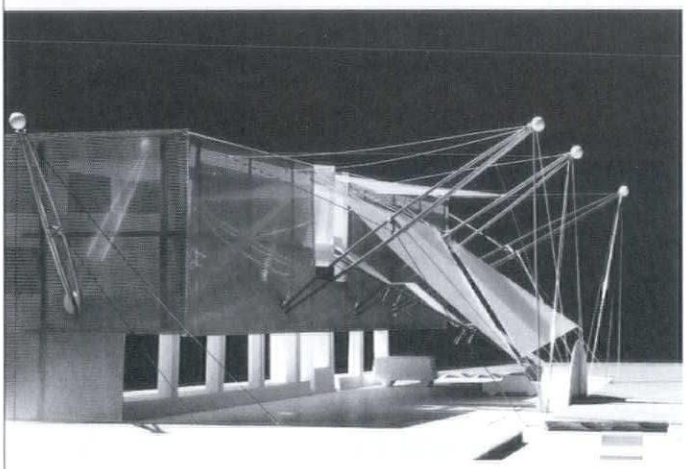
この計画は実施設計が完了し、施工者も決定した段階で、施主のいくつかの事情により実現されなかった。計画段階で得られたいくつかのコンセプトはその後の作品に生かされているが、是非完成させたかった作品である。

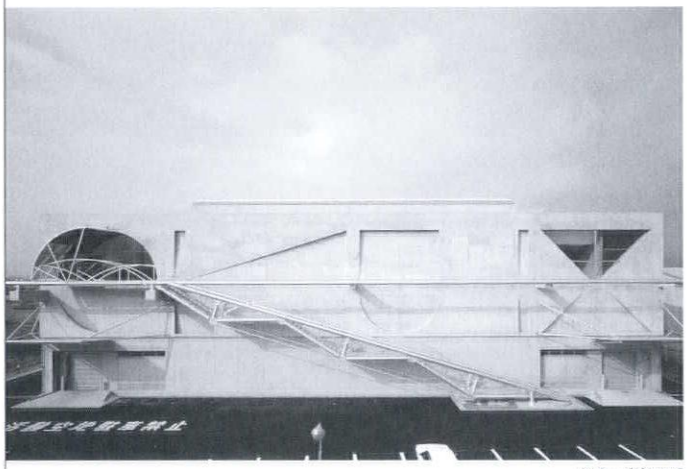
所在地：山口県徳山市
建築用途：専用住宅
共同設計者：塚田哲也
構造：RC造
敷地面積：249.57m²
延床面積：123.95m²

おがわ・しんいち
1955年山口県生まれ。応募当時小川晋一アトリエ主宰。現在小川晋一都市建築設計事務所主宰、近畿大学工学部助教授

小西彦仁

OKUIX PROJECT（OKUIX奈良工場）





写真＝古館克明

奈良県天理市、奈良盆地のほぼ中央、田園地帯に位置するコンピュータ・チップを包むテープの生産工場である。

奈良という日本で最も歴史的でなおかついまだ自然が豊かな地域に対極的なハイ・テクノロジー分野の工場と、大変興味深くスタートした。

リニアな動線を必要とする工場は数秒の流れの誤差が生産効率に影響するため、基本的には無抵抗平面計画となった。このなかでダイナミックで生き生きとした企業活動の拠点としていかに人々に活力を生み出すような設計をするかがテーマだった。

外からこの建物に入ることは、日常から非日常への転換である。この非日常空間への導入部トランジション・スペースとして、1階から3階オフィス・ゲストスペースに一気に導くための直通外階段と3階エントランスからの吹き抜けを通して下を見下ろしながら渡れるブリッジをしつらえた。これは結果的に平面的になりがちな工場を立体的な動きのある構築物にしてくれた。

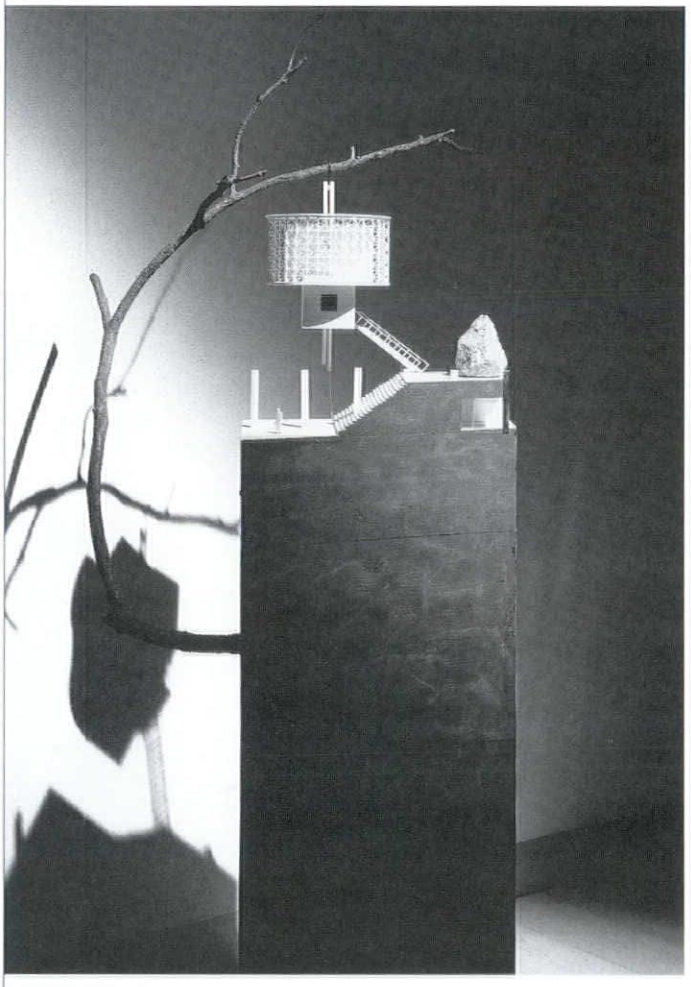
無表情なコンクリート打ち放しの外壁前面ファサードには、企業CIロゴをレリーフとして彫り込み、企業としての顔と建物の表情をつくる役割を担わせた。バブル経済の真っ只中に始まり、途中その崩壊を目撃しながら、さまざまなプログラム、またデザイン段階を経てようやく実現できた、ある意味で贅肉をそいだ時代を象徴するかのようなプロジェクトである。

所在地：奈良県天理市
建築用途：工場
構造：RC造
敷地面積：3,829.51m²
延床面積：3,924.76m²
竣工年：1993年2月
実施設計者：鈴木エドワード建築設計事務所

こにし・ひこひと
1964年北海道生まれ。応募当時鈴木エドワード建築設計事務所（株）勤務。現在ヒココニシ設計事務所主宰

瀧 広空

仙舎（せんしゃ）



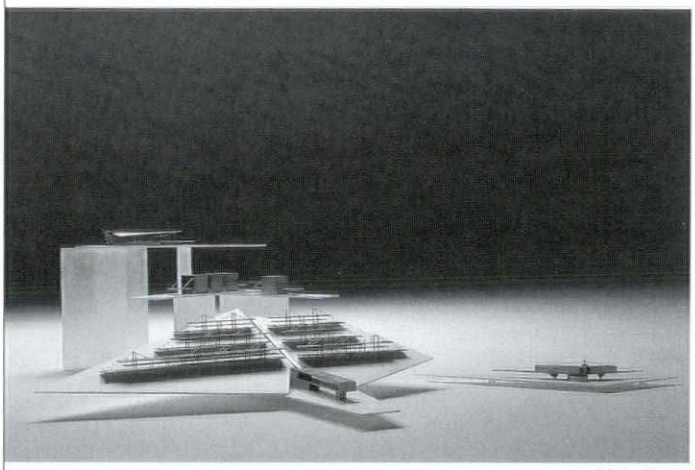
Phase A：「主題」
「建築は眼に見えるものをあらためて提示するのではない。見えないものを見えるようにするのだ」
　ミニマルな形態の並置のみによる、メタレベルにおける多義的形象の獲得。それは無意味な拡散（分割）を促進し続けるこの情報支配社会に対する叛旗であると同時に、「真実の追求」などという啓蒙的で盲目的な姿勢に対する批判でもある。
Phase B：「伏線」
・構造と造形要素の符合による全体の「オーナメント化」
・要素の相互貫入による部位の「意味の転倒」
・スパイラル状のサーキュレーションが演出する「迷宮性」
・異レベル間の視線の交錯により生み出される「舞台性」
・明解な採光方法により性格づけられた各空間間の「断絶」
・光と影に満たされた中心の「空白」
・パースペクティブなアプローチ等ピッチの列柱の重層による「ゆがみ」
・軸線より振られた階段のシークエンスが強調する「浮遊感」
・列柱と階段の断片が暗示する「時間の停止＝廃墟」
・廃墟に浮かぶ「かげろう」

所在地：静岡県伊東市
建築用途：住宅
構造：S造、一部RC造
敷地面積：911.03m²
延床面積：94.27m²

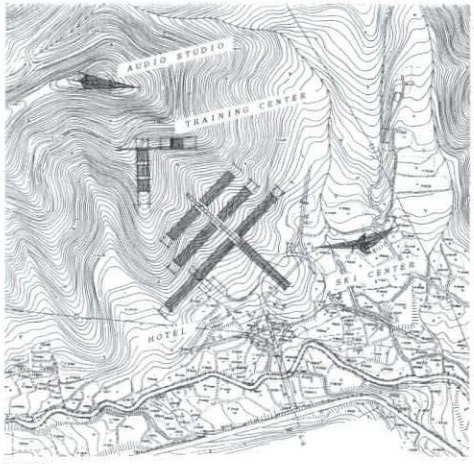
たき・ひろあき
1965年東京生まれ。応募当時類設計室東京事務所勤務、アトリエ空主宰

中込 清

S-Project [B-Zone]



写真＝淺川敏



配置図

この〈S-Project〉は、スポーツ諸施設やミュージアム等の文化的施設も含んだ、総合的リゾート施設の開発建設であり、5つのZoneにより構成される。
　このB-Zoneはそのうちのひとつであり、スキー・リゾートとしての性格をメインに、山頂のオーディオ・スタジオから斜面にそったトレーニング・センター、ホテル、そして裾野に位置するSki Center等の建築物により形成される。

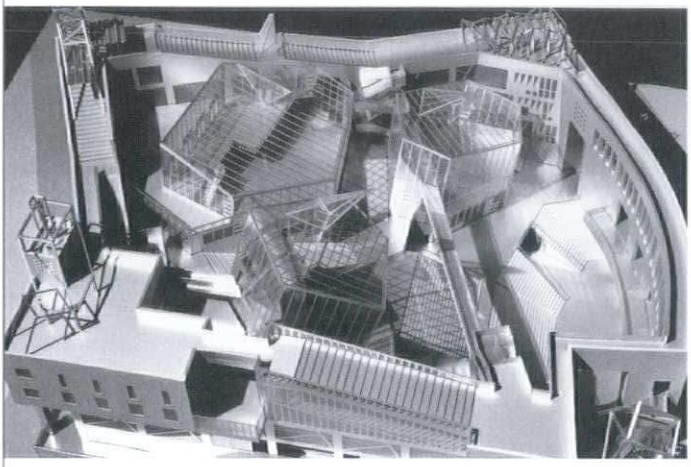
所在地：長野県上伊那郡
建築用途：リゾート施設
構造：S造、一部RC、SRC造
敷地面積：3,144,000m²
延床面積：20.780m²

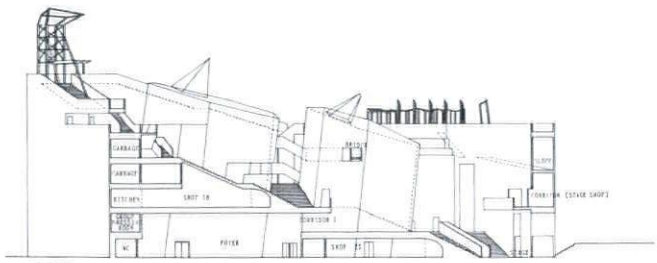
なかごめ・きよし
1947年千葉県生まれ。G FACTORY主宰

長坂大+Méga

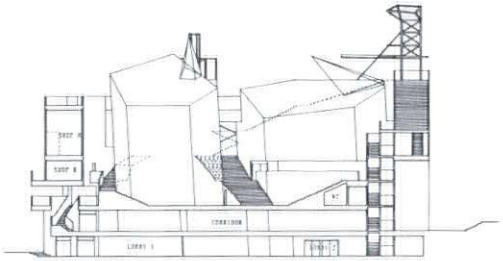
神戸北町CPプロジェクト

鹿島賞





断面図



断面図

1989年、この計画に参加し始めた時私は20代、プロジェクトの会議室では他の人々との年齢差が目立ち、戦略的な不利は覚悟していた。まだバブルという言葉は，本来の意味以外誰も知らなかった時代である。事業主は大手の商社で、このプロジェクトが建設される予定だったニュータウン以外にも各地で同様の開発を行なっていた。

この計画が実現しなかった本当の理由は知らない。レンタブル比は意外に悪くないことが評価されていたし、予算についても、ほぼ設定ラインまで来ていた、その設定ラインそのものも検討対象だったのであろうが。

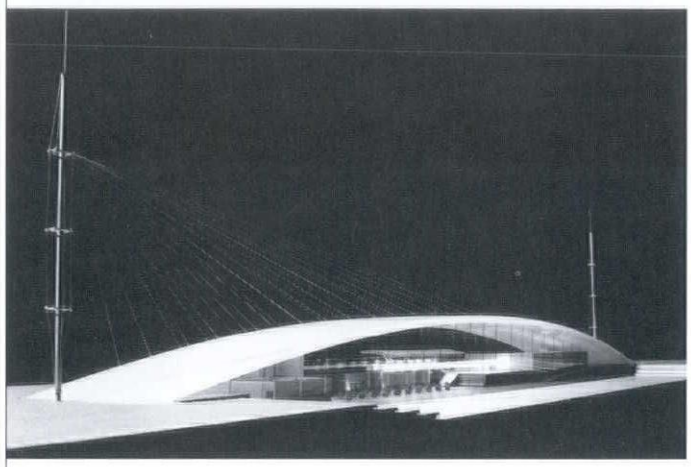
私が聞かされた理由は，計画が前衛的すぎるということ、ここでこれをやってしまっては他のニュータウンとのバランスが悪い。ひいては今後のニュータウン建設の方針が異なってしまう恐れがある、というような内容だった。

所在地：兵庫県神戸市
建築用途：複合ビル
共同設計者：今谷秀和／IKS株式会社、大谷郁朗
門脇哲也、長坂喜代子、堀井義博、松本睦
構造：RC造、一部S造
敷地面積：2,884.5m²
延床面積：6,974.8m²

ながさか・だい
1960年神奈川県生まれ。京都工芸繊維大学造形工学科助手

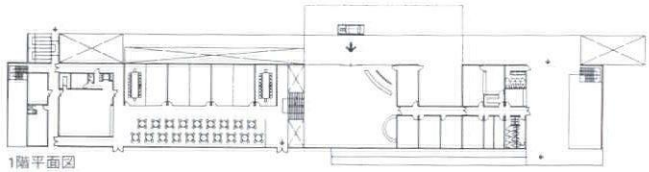
難波寿治

Malibu International Kobe Club house





2階平面図



1階平面図



地下1階平面図

ゴルフ発祥の地、神戸。六甲の山並みが見え隠れするこの地を見てコース・デザイナーは自然を生かし自然から生まれた素材を使いコースを造ろうと考えた。

与えられた敷地に合わせたひょろ長いサイトプラン、自然の地形を利用したセクション、建物の機能、人の動線から考えられたプラン。山々に見え隠れするやわらかな屋根のカーブは、内外の世界をほどよく分ける薄い膜で、空の青さや太陽のあたたかさ、明るさという自然を十分満喫できる空間を創っている。この空間を構成する柔らかな素材としての竹を使った立体トラスと、ダイナミックに支える吊構造は、今までにない表情を見せてくれることだろう。アプローチ・レベルの建物越しに見るパノラマは、その存在すら忘れさせ、山々や芝の緑でこれから始まるプレーに人の心をはずませてくれるものとなり、また、夕暮れには満足感を与えてくれるものとなるであろう。

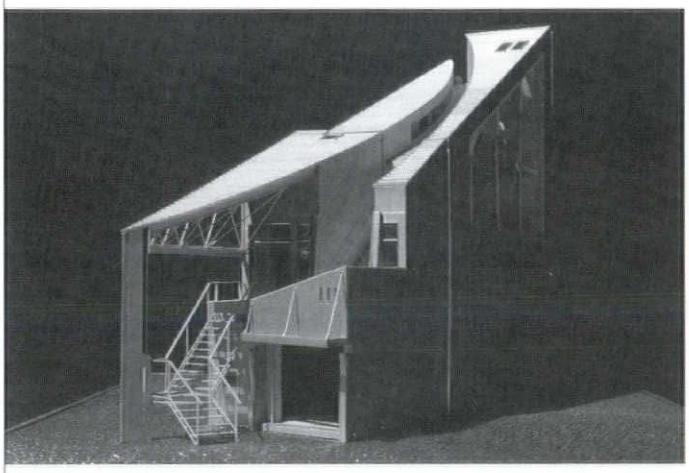
所在地：兵庫県神戸市西区
建築用途：ゴルフクラブ・ハウス
構造：RC造、一部S造、（屋根：竹）
敷地面積：11,737.22m²
延床面積：2,659.99m²

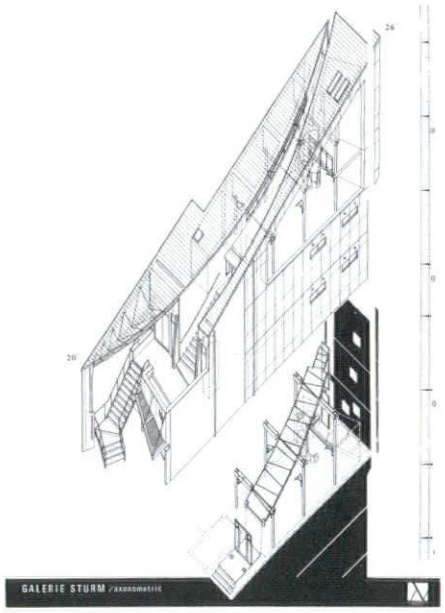
なんば・としはる
1957年山形県生まれ。鈴木エドワード建築設計事務所（株）勤務

乗富久哉

街の換気口［Galerie Sturm］

SD賞





アクソノメトリック

ある地方都市に計画された駅前の店舗とギャラリー。

応募当時、「起点は街並み、収束点を遥かなる天空と想定した視覚運動の補足機関、否、ダイナミズム（経過、状況、感覚）そのものの表現……」などと記している。振り返ると、私が設計しようとしているテーマそのものは今日までまったく変化がないことに気づく。「未知の世界に導いてくれる道、あるいは流れ」という空間イメージは、実は幼少の頃から抱き続けたものだ。これが肥大化した自我の産物ではなく多くの人々に共有可能な「何か」であることを願って活動を続けている。

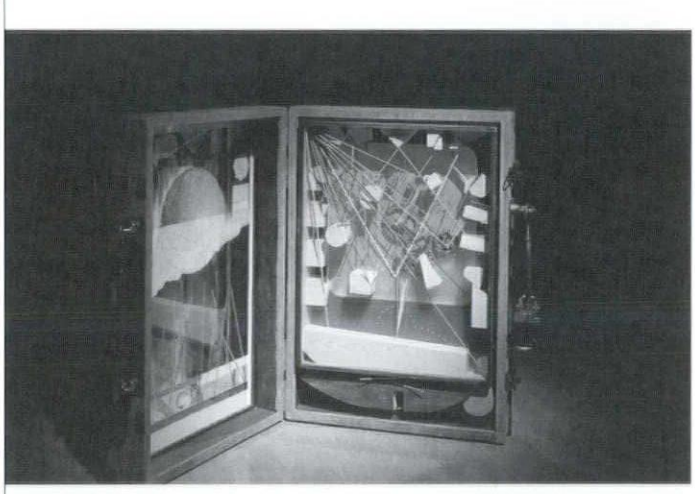
さて、実現したか、やりきれたのかという問題だが、その点については過去に遡ってあれこれ語るよりも、独立後8年を経て完成した新作をご覧いただきたい。

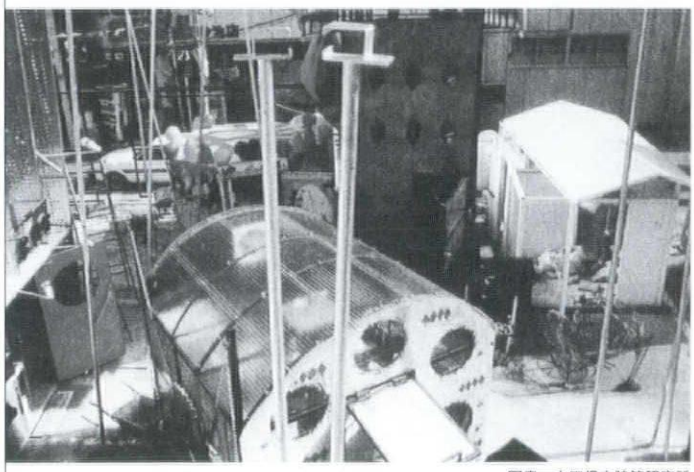
所在地：福岡県行橋市
建築用途：店舗+ギャラリー
構造：RC造、一部S造
敷地面積：131.5m²
延床面積：212.2m²

のりとみ・ひさや
1962年福岡生まれ。乗富久哉建築設計事務所主宰

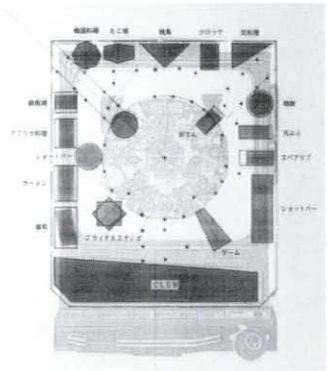
吉田保夫+吉川宏一+藤原伸治

今池カラーズ Fractured Symphony 1990（今池カラーズ）





写真＝吉田保夫建築研究所



名古屋が生んだパチンコ文化。

その光とノイズは、日本中いや東南アジアへと広がってゆく。

玉がクギにあたり円をえがき落ちる。
そのあり様は、「ノイズのダイヤグラム」と見える。

私達は、それを〈Fractured Symphony 1990〉と名づけ、300坪の敷地、入口から中央に向かって、巨大なクギをさした。

所在地：名古屋市千種区
構造：S造
敷地面積：945.31m²
延床面積：190.65m²
竣工年：1990年7月

よしだ・やすお
1947年佐賀県生まれ。吉田保夫建築研究所主宰

よしかわ・こういち
1951年大阪生まれ。（株）ノモス設立主宰

ふじわら・しんじ
1965年大阪生まれ。マルフジ建築研究所主宰

は、ガラス張りの、透明感あふれる美しい作品である。小川の代表作といっていいし、彼の持っているミニマルな感覚を、最もよくあらわしたものともいえる。ガラスの箱の中に白い箱が収められたこの建築は、一個のオブジェのような虚構の世界を、現実の中につくり出すことが可能なことを、改めて教えてくれる。

91年に出品した〈Restore Station〉は、91年に〈リストアステーション〉として広島県に竣工しているが、それは国道沿いに連続して置かれた白い箱に、映像を投影してみせる新しい実験性があり、センスのよさを十分に感じさせる。さらに92年に出品した〈X3〉も、彼のミニマリズムの作風を明確に示したものなのである。ただ、「SDレビュー」の出品作ではないが、87年の広島県の〈アラベスク〉という作品に明らかなように、小川の思考の根本にはル・コルビュジエのモダニズムの影響が強い。そのためどうしても、それらの作品は、終わったはずのモダニズム（理想）の延長にいまだあるミニマリズム（すなわちネオ・モダン）に見えてしまうきらいがある。ただミニマリズムといっても、彼は一貫してそれをやっているわけだから、決してバブル以後の時代の反動に迎合してではないことは、はっきりと言っておこう。

94年の展覧会では、ユストス・ピザル＋ペーター・ルーゲの〈ハッケシュホーフ・ベルリン（Hackesche Höfe Berlin）〉が、多くの出品作の中でも目をひいた。それはかつての歴史的な都市風景を、今日的な素材と感覚で再生しようとするものであるが、そうした歴史の継承それ自体には意義は認めるし、そこでのデザインの良質さもプレゼンテーションから察知することは可能である。けれども、いざそれが何か新しい空間の発見につながっているのかと問われると、そうでもないのではないかと考えてしまう。わるい言い方をすれば、それも単なる、「伝統主義」の現れの一つに見えないこともない。また同じ二人組の作品は、96年にも〈Haus Sonne〉が出品されたのだが、そこでは省エネルギーをテーマにしている。環境問題にからめる格好で、いかにも今風といえるアプローチである。しかし先の景観保護が、今度は環境保護になったようで、新しさは真にあるのだろうかという疑問は解けない。それにしても、このあたりの作品が連続して入選するのは、選ぶほうの感覚もよほど保守主義的なのか、それとも保守回帰している、ということだろうか。

一方、94年出品の城戸崎和佐の〈K邸〉は、卵型が二つ連なって浮かんだような、その形態そのものはユニークな魅力を強く抱かせる。しかしどこか、80年代の妹島和世の一連の作品の持っていた「虚構性」に、一脈通じる地点から抜け出ていないともいえる。そこにも何かの、新たなイメージを感じ取ることは難しい。そしてこれと同じ印象を、やはり94年の、石黒由紀＋田堀繁の出品作〈計画O〉には感じる。そのプレゼンテーションの美しさは十分認めたいのだが、私にはその空に向けて抜けてゆく空間性が、妹島の作品とダブって見えてしまうのである。結果として、80年代的な「虚構」の中に、この作家がいまだにいるように思われて残念なのだ。また95年の出品作の由田徹＋岡本美樹の〈プラスティックハウス〉の屋根の浮遊感や、彼らの96年の〈スクリイン〉の浮遊感、95年の西沢大良の〈小平のハウス〉の軽快感、さらに〈小平のハウス〉の発展形態である96年の出品作の〈立川のハウス〉（97年に竣工）のあっけらかんとした感覚にも、似たようなことを思わせるところがある。

断っておくが、私はそれらが妹島に似ているからいけないと言いたいのではない。そうではなく、妹島が80年代にやっていたような、あの「リアリティの『脱臭』に向けて浮遊する『虚構』」は、もはや終わっているのだと指摘したいだけなのである。そしてそこから先のビジョンが、それらの作品にはほとんど見えてこないことが不満なのだ。

冒頭でもいったように、「SDレビュー」は80年代を象徴するようにして始まった。いってみれば、この企画は「理想」でなく「虚構」とともに、多くの時間を歩んできたのである。しかしその「虚構」も終わった現在、「SDレビュー」は新しい方向を、作家とともに見つけ出さねばならないところにきている。これからの展覧会を通しながら、果たしてその新しい方向を見つけ出せるかどうか、「SDレビュー」の今後の意味は、そこにこそ深くかかわっていると私は考える。

●いいじま・よういち／建築評論家、多摩美術大学助教授

＊1：磯崎新『理念なき時代の建築　上』夕刊　読売新聞1996年7月10日付

SDレビュー大阪展の10年

SDレビュー大阪展：1985～1994年

中筋 修

もう十数年前のことになるが、都住創仲間の広告会社にのせられて外資系のエレベーター会社、OTIS社のCI作戦に関わることになった。僕達が考えたことは、日本の若手建築家達にOTISの世界的イメージを認識してもらおうというものであった。ひとつ目の作戦は『a+u』誌と組んで、毎回異なったテーマでアメリカあるいはヨーロッパ諸都市を巡る建築ツアーを催し、その成果を出版したり、大型のカレンダーを制作し、配布しようとすることだった。

ふたつ目の作戦がこのSDレビューに関わる企画であった。実は当初僕の考えたことはアメリカの建築雑誌『Progressive Architecture』誌の類似企画、"PA Award"（SDレビューはこれにヒントを得ている）と提携することであった。SDレビューをニューヨークに、"PA Award"を東京、大阪に招待するスポンサーをOTIS社が引き受けてはどうだろうかと考えたのである。鹿島出版会の長谷川女史に相談したところ、大変乗り気になっていただいたのだが、肝心のスポンサーの理解を得ることが困難で断念したのである。そのお詫びの気持ちもあって我々の〈都住創センター〉での大阪展をヘキサが引き受けることになったというのが真相である。

動機はともかく、こういう展覧会の機会が比較的少ない大阪での企画は、とかく欲求不満に陥りがちな関西の若手建築家達には好意的に受け入れられ、いつのまにか10年間が経過したわけだ。毎回のオープニングには入選した作家をはじめ、多くの建築家達が会場に駆け付け、展示の作品を肴に大いに議論が弾んだ。しかし、バブルが弾けてからは展覧会を続けるための協賛を得ることもそう簡単ではなく、ヘキサのスタッフ達の負担も無視できなくなったところでちょうど10年が経過し、一区切りつけさせてもらうこととした。

幸い大阪芸術大学の久保清一氏が後を引き受けて下さることとなり、大阪展が継続されているのは喜ばしいことである。近い将来我々がお世話できる機会にまた恵まれたいと念じている。

●なかすじ・おさむ／建築家、ヘキサ

金沢展からの感謝

SDレビュー金沢展：1987～1991年

水野一郎

学生達の協力を得て会場内に配され、ライトを浴びた開場前日の模型作品群は、出番を待つ役者のような強い息使いを感じさせて印象的であった。そこから、若い建築家達の創造の喜びの高揚した気持ちが伝わってきたからである。こうしたエネルギーを引き出せたSDレビュー展は、企画内容や高い目利きの審査委員会に支えられたことが成功の主因であろう。さらに言えば、モダニズムの教則が反省期に入って、自律的な建築美学が胎動し始めていることや、若手にも建築の機会がある日本の恵まれた社会経済状況なども反映している。

また「実現」という枠を架けたことが密度ある模型の展覧会を維持継続できたことのように思える。「実現」の枠は模型にコンセプトだけでも、リアリティだけでもない緊張感を与え続けており、観る者に実体化した時の姿を想像し評価することと、模型自身を知的ストーリーを抱えたオブジェとして鑑賞するというふたつの楽しみを与えてくれる。

金沢での展覧会は1987～91年の5回、金沢工業大学ライブラリーセンター展示室にて催され、毎回北陸の学生や若手建築家に大人気であった。若い彼らにとって、身近に吹いてきた時代の新しい風を味わえると共に、自らその風にならんと喚起されているようでもあった。こういう種類の展覧会は、VTRや印刷などの媒体情報ではなく、ナマ情報として接することで若者の刺激剤たり得るのであって、金沢という一地方で開催できたことは幸いであった。

5年間の開催は堀江硝子（株）の力添えに支えられたが、休会している現在、学生達から「なぜ」という要求も出ている。また今の学生達が神田などの古本屋でSDレビュー展掲載のバックナンバーを探してきて人気を博しているのに出会うと、再開できれば良いのだがと立ち上がりを迫られる気持ちにさせられている。

●みずの・いちろう／建築家、金沢工業大学教授

新しい建築教育の可能性

SDレビュー大阪展：1996～1997年

奥保多聞

1996年、97年と大阪芸術大学で開催された2回のSDレビュー大阪展が、盛況のうちに一応無事終了した。展覧会オープニングには、関西の若手建築家や大阪芸大スタッフをはじめ各大学の教員、評論家やジャーナリズム関係者など多くの人々が集まり、それは賑やかであった。入場者は限られた会期にもかかわらず、各年とも千名を超え、北九州、四国より足を運ばれる方々や、ある専門学校などは団体バスで名古屋より来観されたりで、SDレビューへの期待が強く感じられた。芸術情報センター（大阪芸術大学名誉教授高橋靚一設計）の展示ホールにディスプレイされた入選作はゆったりと見ることができ、時折聴こえるパイプオルガンの響きがBGMとなって見る者に心地良さを提供する。真剣に作品を見入る学生たちの姿がいつもと違って見えるのが不思議なくらいであった。

ところで、SDレビューの最大の特徴といえば現代建築の最前線のデザイン情報を発見できることだと思う。出展作品を通して現代社会の諸問題や変貌する都市状況、そして建築に何が求められているかを学びとることができる。そういう意味で、大阪展の開催は重要なことと認識している。建築文化に対する社会貢献や建築家の活動支援にとどまらず、一般の人々にも広く建築を知ってもらい、他分野の人たちとも一緒に様々な感動を味わい、そして創作の道をコラボレートしていきたいと考えている。大阪芸大を会場として大阪展を開催することは、その目的を達成するに十分な環境をもっていると思うし、学生たちにはこうした機会を正面から受け止め、自らを向上させて欲しいと思っている。

大阪芸大でSDレビューを開催することは、21世紀の大学教育、新しい建築教育を見つめる上で、重要な課題を提示していると捉えている。地域に開かれた、そして社会に密接につながる自由で新しい建築教育の可能性を広げる意味で、この展覧会を今後とも継続し、様々な思いをさらに大きく飛躍させていければと願っている。

●おくぼ・たもん／建築家、大阪芸術大学教授

第10回　1991年



デザイン＝矢萩喜従郎

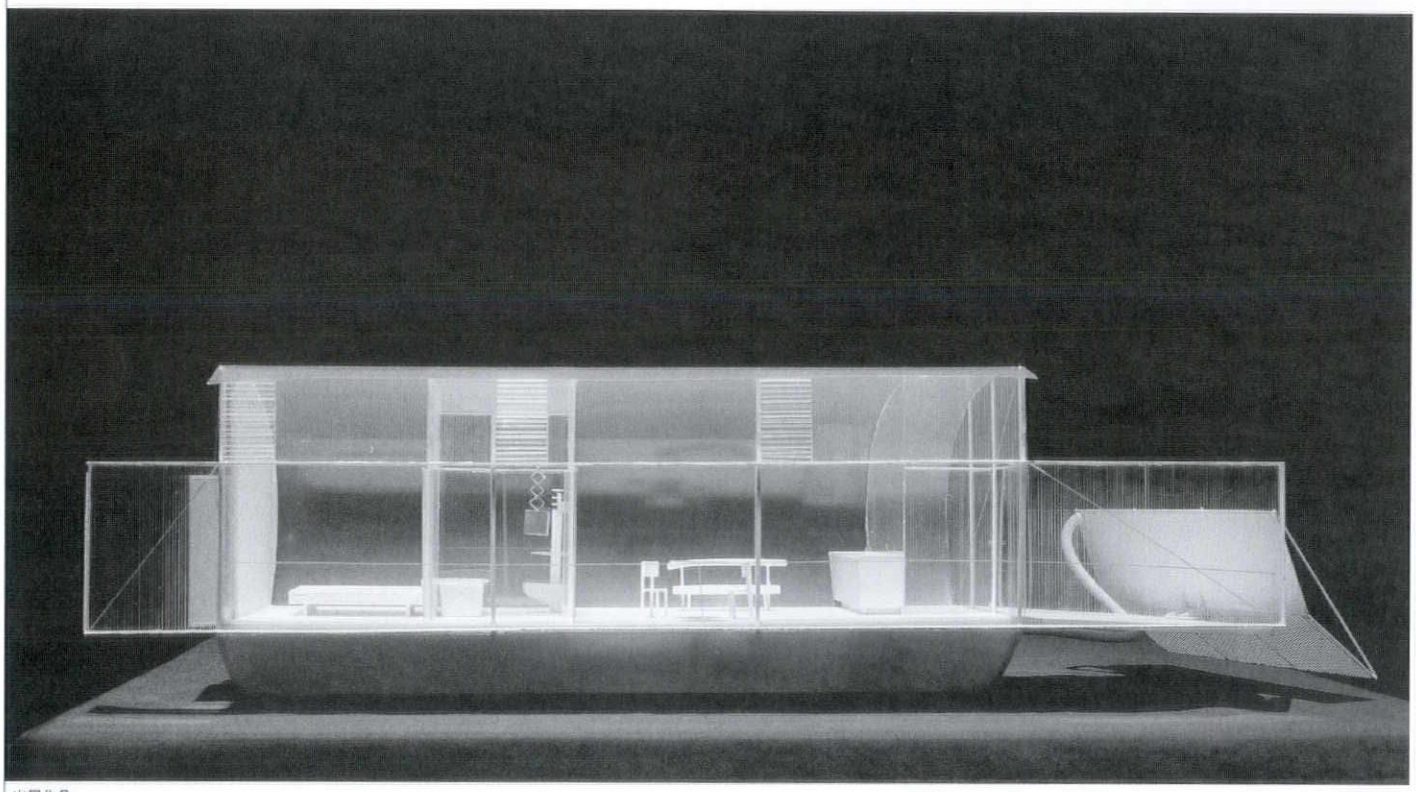
東京展：9月20日～10月3日
会場：ヒルサイドプラザ
東京展イベント：槇文彦×原広司　対談
大阪展：10月5日～10月18日
会場：都住創センター
金沢展：10月28日～10月31日
会場：金沢工業大学ライブラリーセンター
審査員：原 広司、早川邦彦、小林克弘、飯島洋一
応募総数：214作品
入選数：20作品
受賞者：
石田敏明建築設計事務所（鹿島賞）
新井清一+岡崎泰之／アライアーキテクツ（朝倉賞）
白川直行アトリエ（SD賞）

新井清一+岡崎泰之／アライ・アーキテクツ　塚本邸
飯村和道／ダンス　K邸
石田敏明建築設計事務所　Aプロジェクト
石原健也／デネフェス計画研究所　甲府の2世帯住宅
牛田英作+キャサリン・フィンドレイ　Vertical Horizon
大塚 聡アトリエ　POC
小川晋一　Restore Station
川口とし子／アーキスタジオオゾン　中野区上高田の十坪住宅
小松清路／小松清路建築研究所　MOVING WAVES
佐田野剛／竹中工務店　空中楼閣
白川直行アトリエ　立方体の風
妹島和世建築設計事務所　N邸
A.T.System+竹内申一　神宮前プロジェクト
長島孝一+AUR建築・都市・研究コンサルタント　中村冒険パーク
中村勇大　上鳥羽の家
中村 勉　炎彩画美術館
前田紀貞アトリエ　横浜K幼稚園
増田 実+米田 有／Archadia Architects Office　MAZE［新本牧商業施設］
宮本佳明／アトリエ第5建築界　雨につつまれる地下室
渡辺 誠／アーキテクツ オフィス　LAGOON

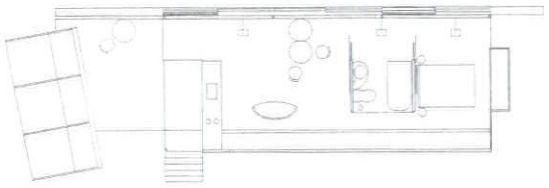
石田敏明建築設計事務所

Aプロジェクト

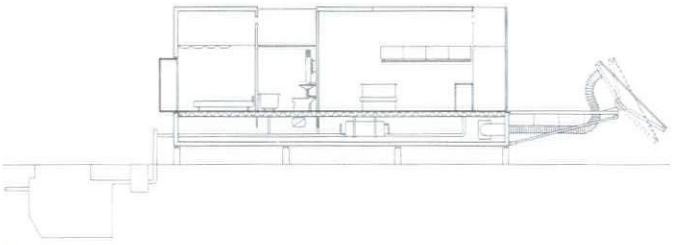
鹿島賞



出展作品



平面図

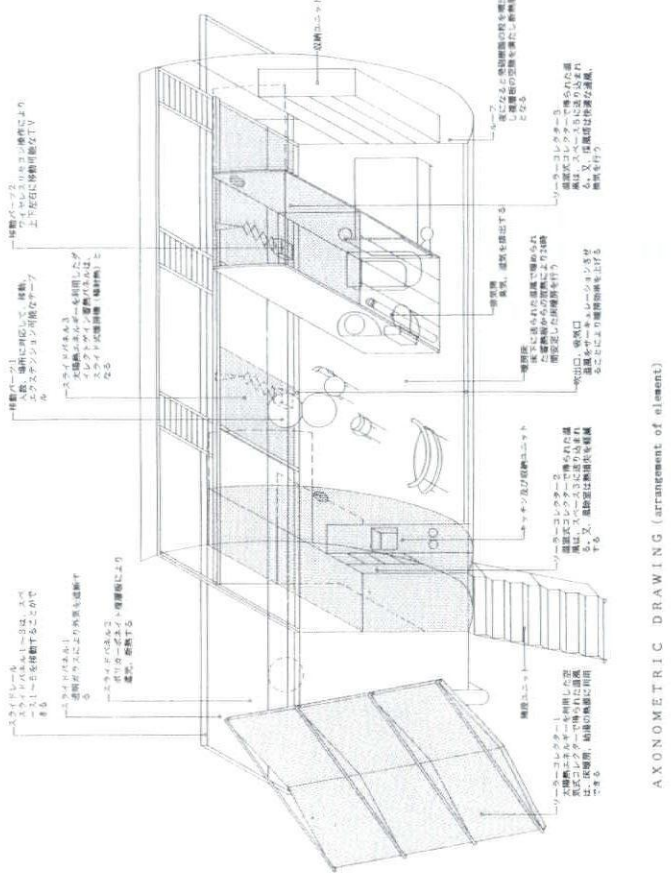


断面図

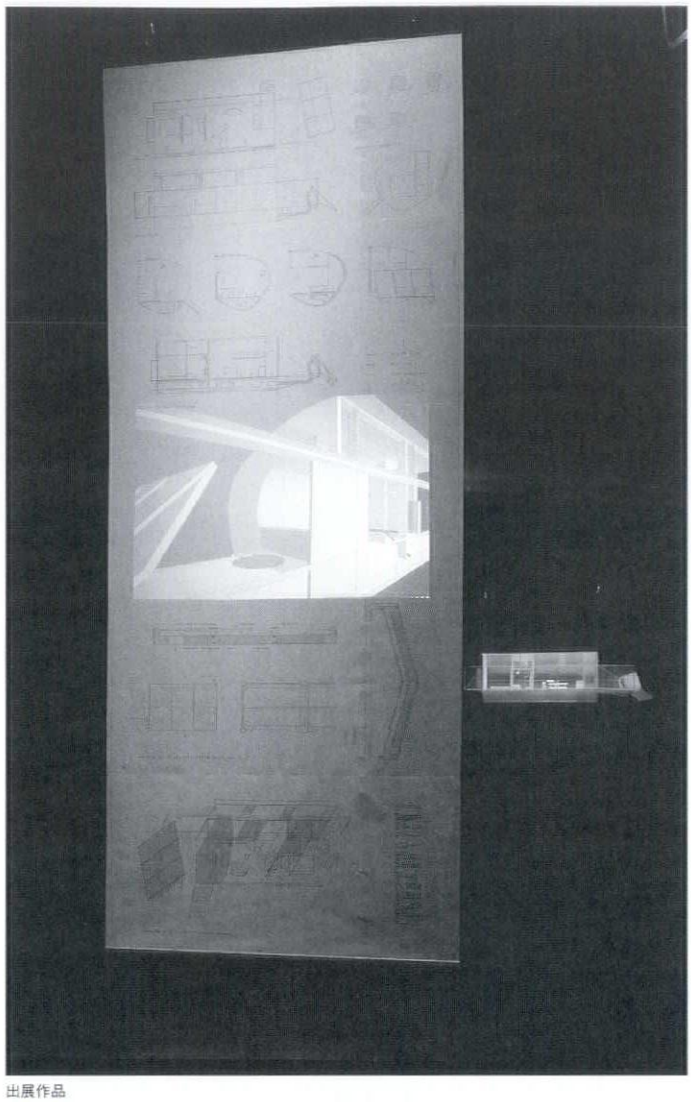
このプロジェクトは主にソーラーエネルギーを利用したエコロジカルな視点に立って計画されたリゾートエリア内に設置することを前提にしたゲストハウスである。ただ設計に当たってはプレハブ化することで、性能や精度を維持した状態であらゆる場所に、しかも短期間に建築を供給できるシステムとした。行為と空間との関係が身体の延長として機能するように様々な装置を媒体として様々な生活シーンを成立させようとしている。実際にこのプロジェクトに先立って計画エリア内に古民家を移築し、これに本プロジェクトで開発したパッシブソーラーシステムを導入し、その性能データを収集し実現化に向かっていた。リゾート開発自体が中止になったため、実現できなかったが、このプロジェクトを契機に「建築と環境」、「行為と場」の関係を考える契機になった。このコンセプトは1991年に竣工した〈富士裾野の山荘〉に引き継がれた。

所在地：山梨県北巨摩郡
建築用途：ゲストハウス
構造：S造
延床面積：36.72m²

いしだ・としあき
1950年広島県福山市生まれ。応募当時、石田敏明建築設計事務所主宰。現在、同上主宰、前橋工科大学教授

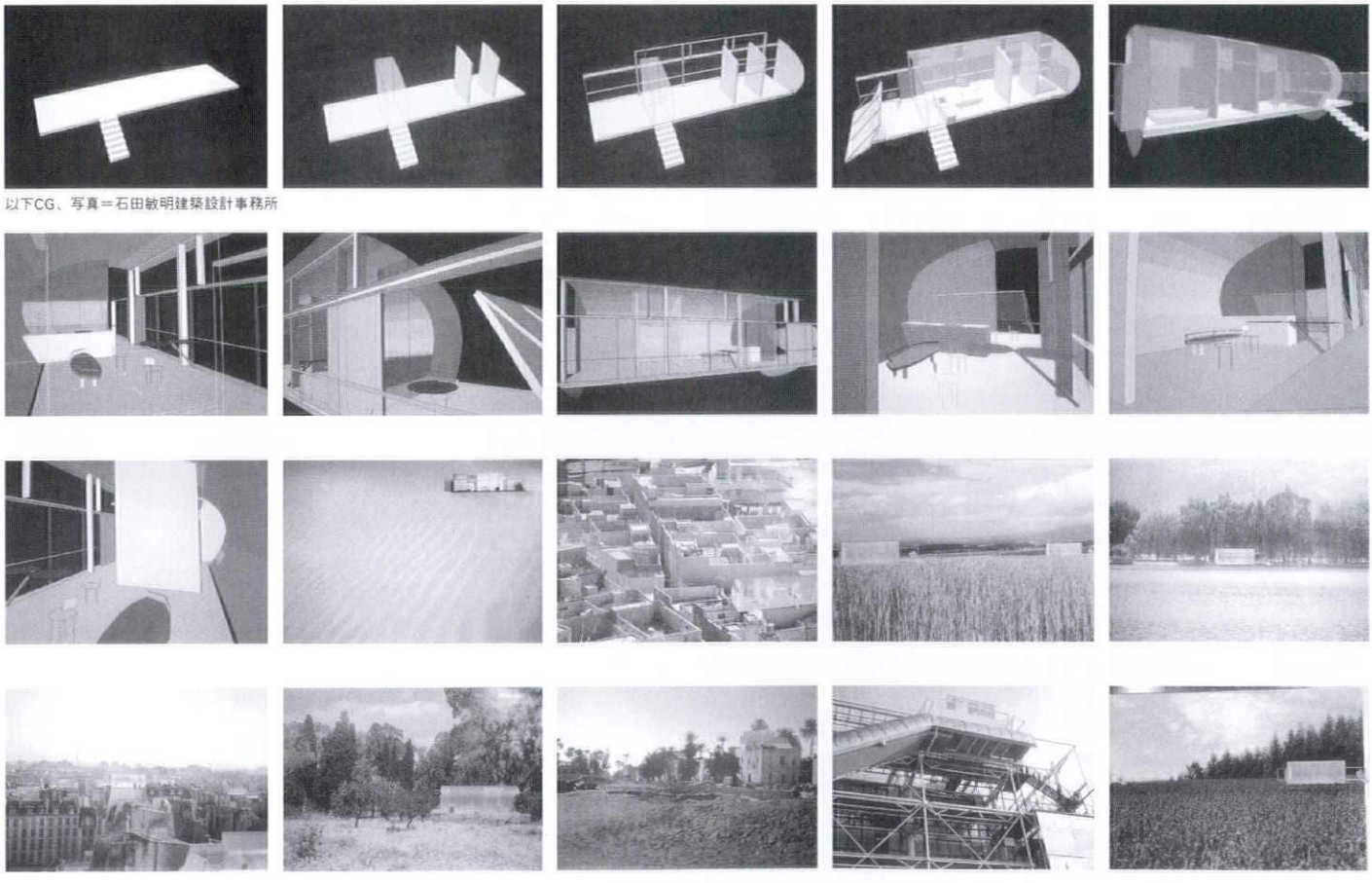


AXONOMETRIC DRAWING (arrangement of element)



出展作品

以下CG、写真＝石田敏明建築設計事務所

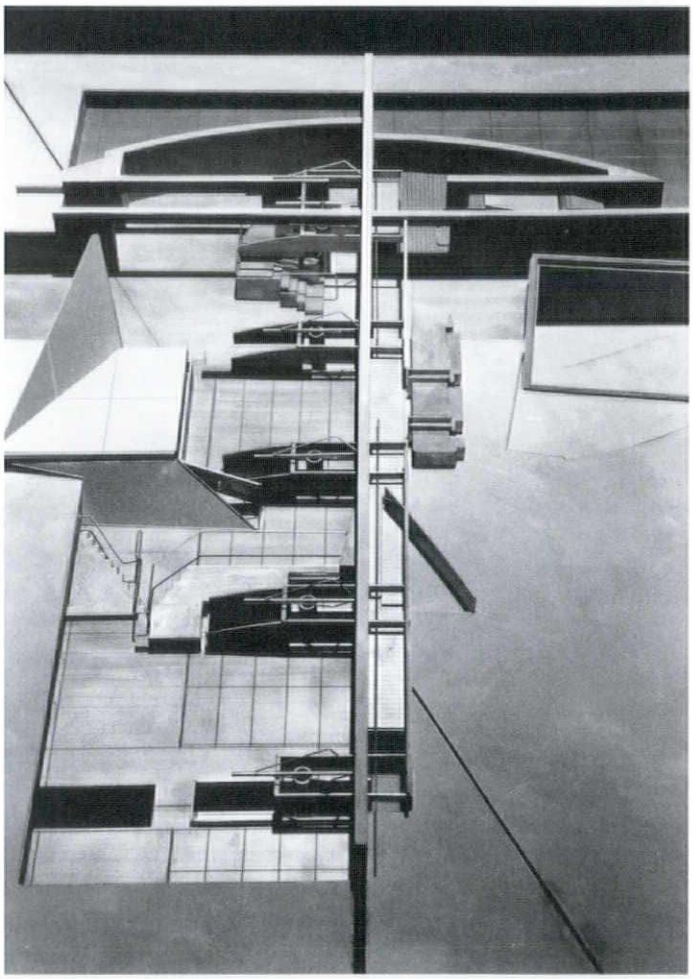


新井清一+岡崎泰之／アライ・アーキテクツ

塚本邸

朝倉賞





写真＝平剛

オブジェ、スキン、バックボーンフレームと数百に及ぶ線材と画材から組み立てられた建築。

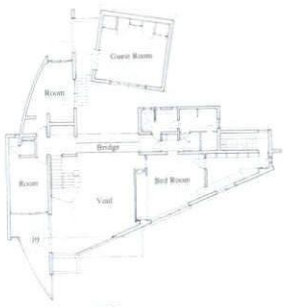
周到な動線計画と、オーダーの操作により形態と空間を構成する。庭先へと延長する巨大なリビングダイニング空間はコートヤードへも延長し、2階への階段がオブジェクティブに存在する。上部を貫通するブリッジはこの空間の広さを知らしめるビューポイントである。

伸びやかな空間、ゆったりとくつろげる空間、小さなパーツの作り込みと大きなオーダーとの相関関係による効果がこの建築の存在を決定付ける。

所在地：千葉県君津市
建築用途：住宅
共同設計者：岡崎泰之（計画／旧所員）、大藤淳哉（実施・管理／旧所員）
構造：RC造
敷地面積：684.53m²
延床面積：258.26m²
竣工年：1992年10月

あらい・きよかず
1950年横浜市生まれ。アライ・アーキテクツ代表、京都精華大学美術学部助教授

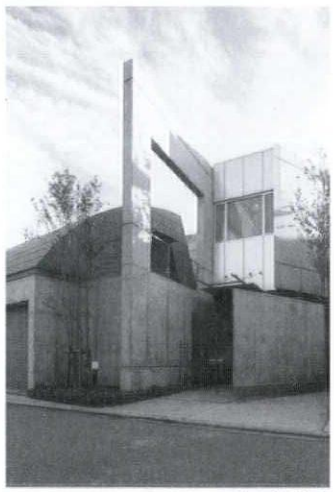
おかざき・やすゆき
1963年千葉市生まれ。応募当時アライ・アーキテクツ所属。現在慶應大学政策メディア研究科在籍



2階平面図



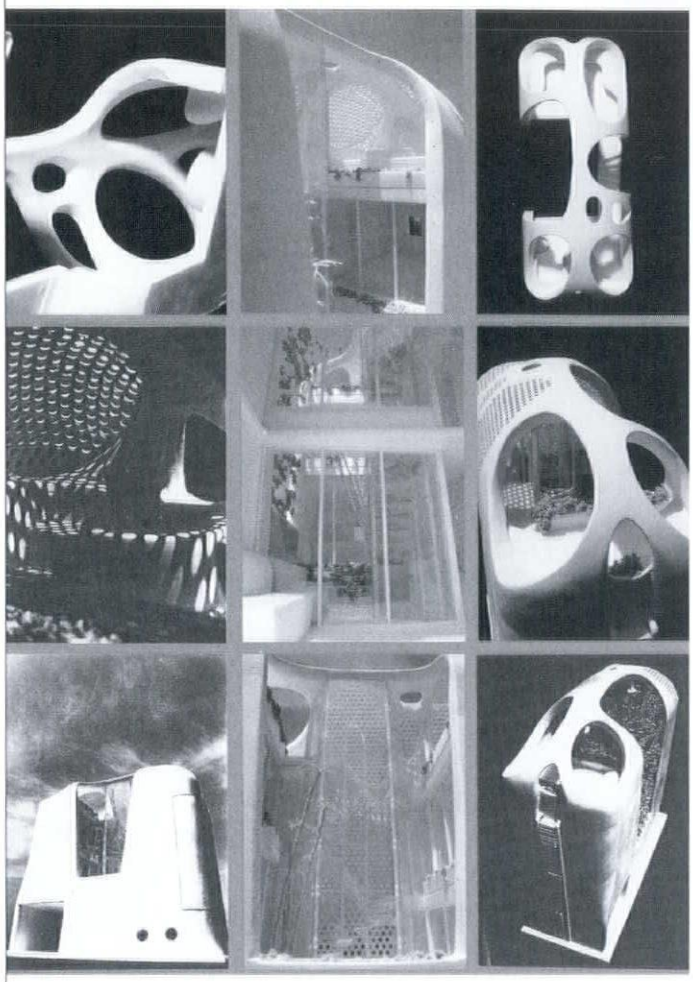
1階平面図

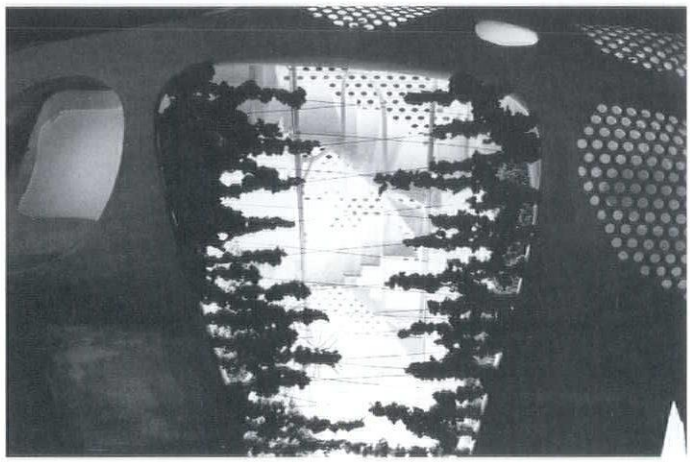


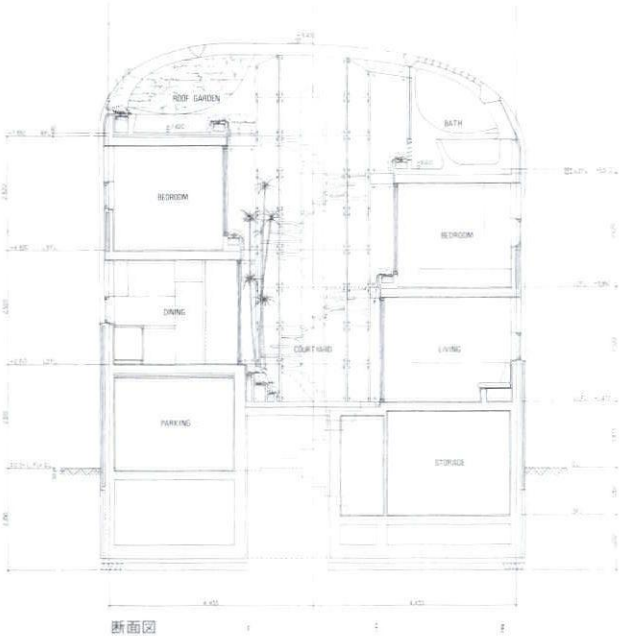
写真＝今村壽博

牛田英作+キャサリン・フィンドレイ

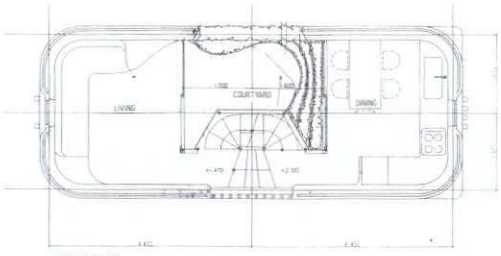
Vertical Horizon



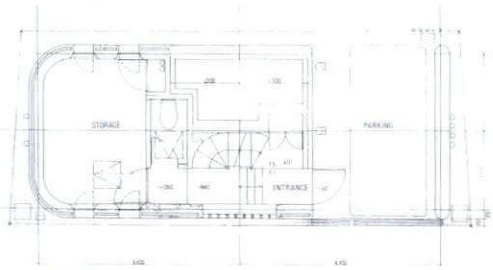




断面図



2階平面図



1階平面図

接道長さ10m×奥行4.3m という珍しい敷地に計画された住宅。狭隘な敷地にもかかわらず中庭を取り、階段なりにスキップする最小単位の機能空間を中庭の周りに垂直方向にはりつけた、視覚的にはひと繋がりのスペースが、この住宅のほぼすべてである。各室は中庭に対して開き、垂直方向に伸びる庭園が、この住宅の各空間を自然／天へと結びつける。屋上には庭園と、ガラスブロックをはめ込んだ浴室が配置されている。

曲面コンクリートの実験住宅であり、建て売り住宅として計画されたこの住宅は、バブルの崩壊とともに計画がストップされ、実現に至らなかった。ここでのデザインのいくつかの要素は他のプロジェクトでも生かされている。

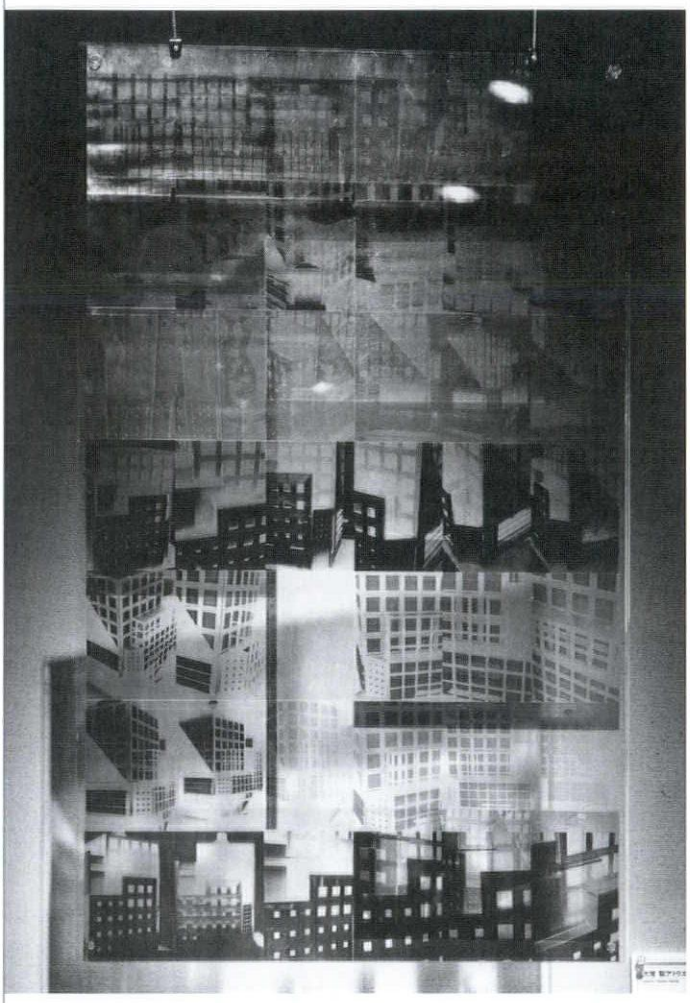
所在地：東京都世田谷区
建築用途：専用住宅
共同設計者：土屋博文、
Anthony Manzo
構造：RC造
敷地面積：42.33m²
延床面積：70.90m²

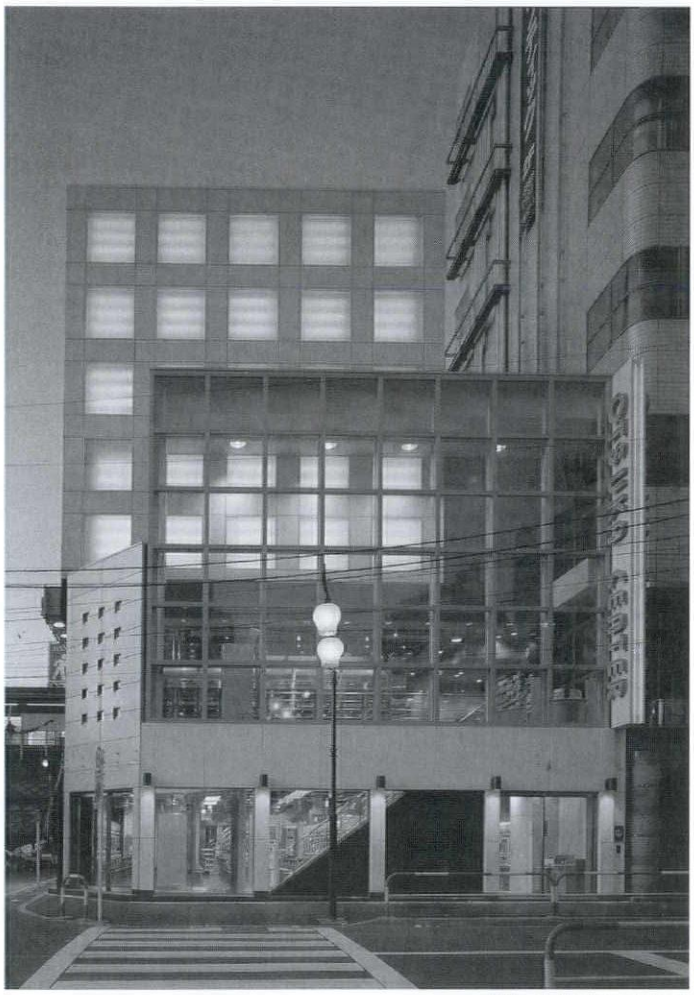
うしだ・えいさく
1954年東京生まれ。ウシダ・フィンドレイ・パートナーシップ 共同主宰

Kathryn Findlay
スコットランド生まれ。ウシダ・フィンドレイ・パートナーシップ 共同主宰

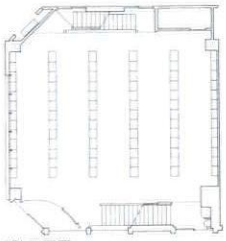
大塚聡アトリエ

POC（大塚センター）

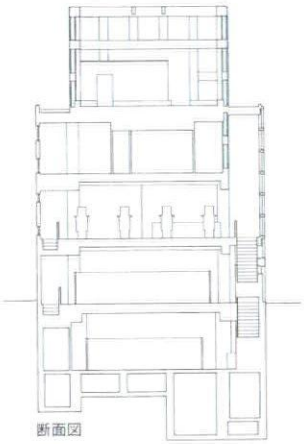




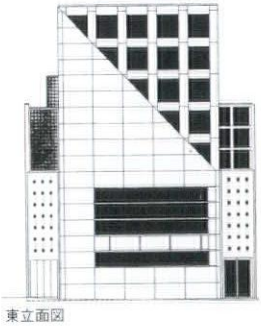
写真＝ナカサ＆パートナーズ



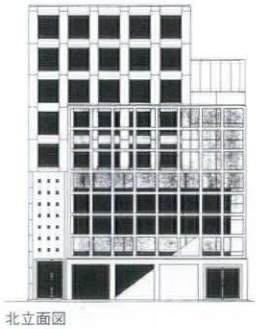
1階平面図



断面図



東立面図



北立面図

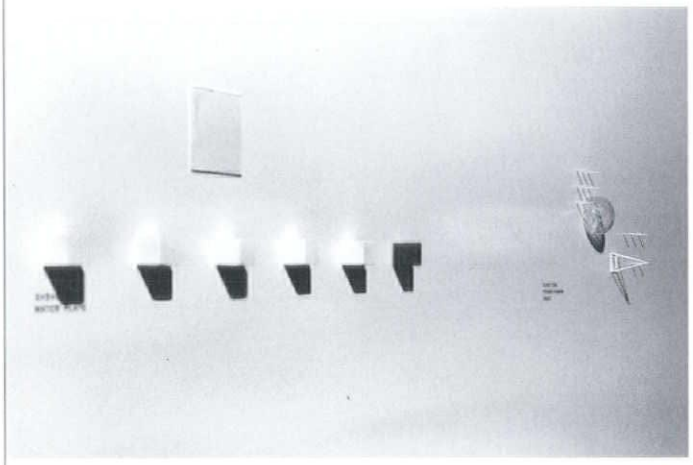
山の手線大塚駅に隣接した、三方を道路に囲まれた土地に建つパチンコ店である。計画には、一台でも多く台を並べられる効率と、大塚というどこかアジア的雰囲気の漂う町の中での存在感が要求された。付加的な装飾でその存在をアピールしていたそれまでのパチンコ店のやり方に対し、建物全てを広告塔にすることを試みた。さまざまなピッチのグリッドを重ねて構成したファサードは、夜になると光を発する。パチンコ店らしからぬ外観は、その頃経営者側のひとつのテーマでもあった女性の集客にも一役買ったようである。その後のパチンコ・ブームやプリペイドカードにまつわる報道、さまざまな事故、事件を思うと、竣工してまだ5年だが隔世の感がある。

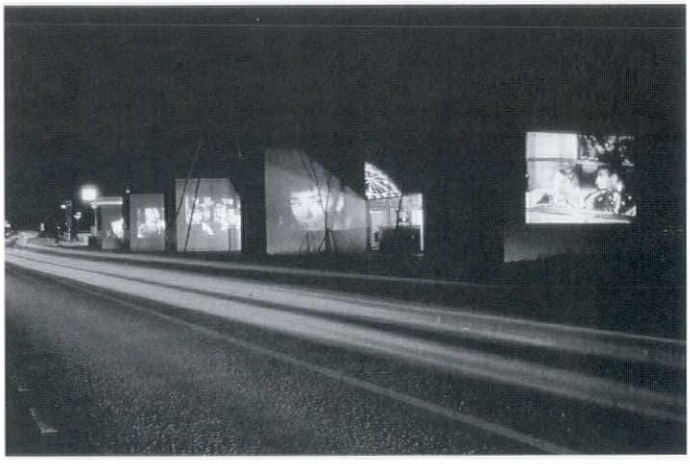
所在地：東京都豊島区
建築用途：パチンコ店
構造：S造、一部RC造（地下）
敷地面積：171.10m²
延床面積：654.09m²
竣工年：1992年

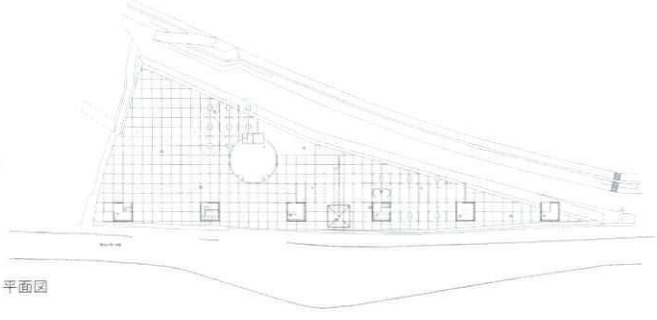
おおつか・さとし
1956年東京都生まれ。大塚聡アトリエ主宰

小川晋一

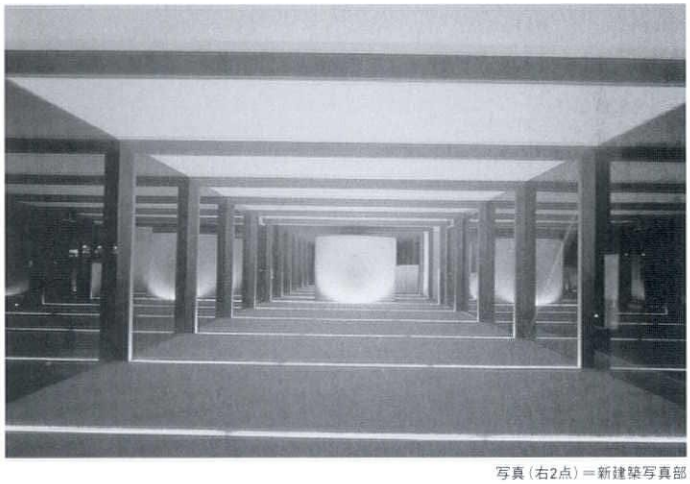
Restore Station







平面図



写真（右2点）＝新建築写真部

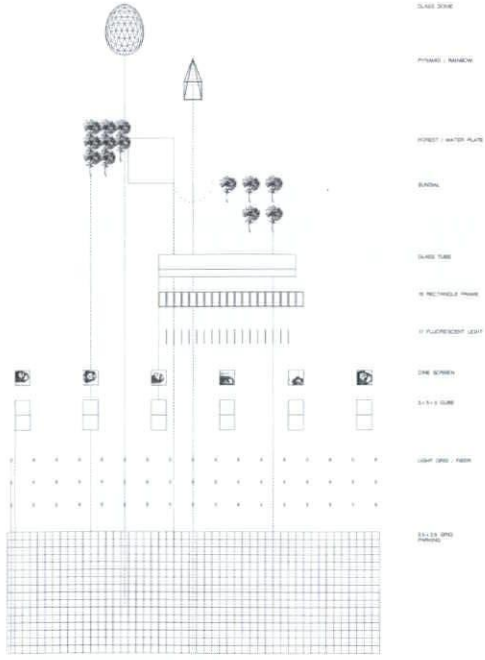
この施設は、自然環境の山あい、川と国道に挟まれた延長約140mの三角形の敷地に建つ複合施設である。

この道の駅は、地元と外部の人々に開かれた新たな交流と出会いを生むための装置として「甦る駅」と名付けられた。

敷地全体は、2.5m×2.5mの幾何学で線分され、透明性、光、時間が空間の中にコンポジションされている。全体エレメントは、2グリッド分の駐車区画線、5m×5m×5mキューブの空間機能、連続した映像の壁、□型構造フレームと床の蛍光管の連続、ガラスのチューブ、重力を失った1枚の屋根、水の板、ガラスのドーム、光ファイバーによる7.5m×7.5m間隔の床照明など、機能を組み込んだ各空間は、自然に対するインスタレーションとして語らいの場を提供する。

映像の連続は道路とレストランに同時間を共有させる。

所在地：広島県総領町
建築用途：複合施設
共同設計者：塚田哲也／鳥羽知夫
構造：S造+RC造
敷地面積：3,094.28m²
延床面積：405.9m²
竣工年：1991年12月

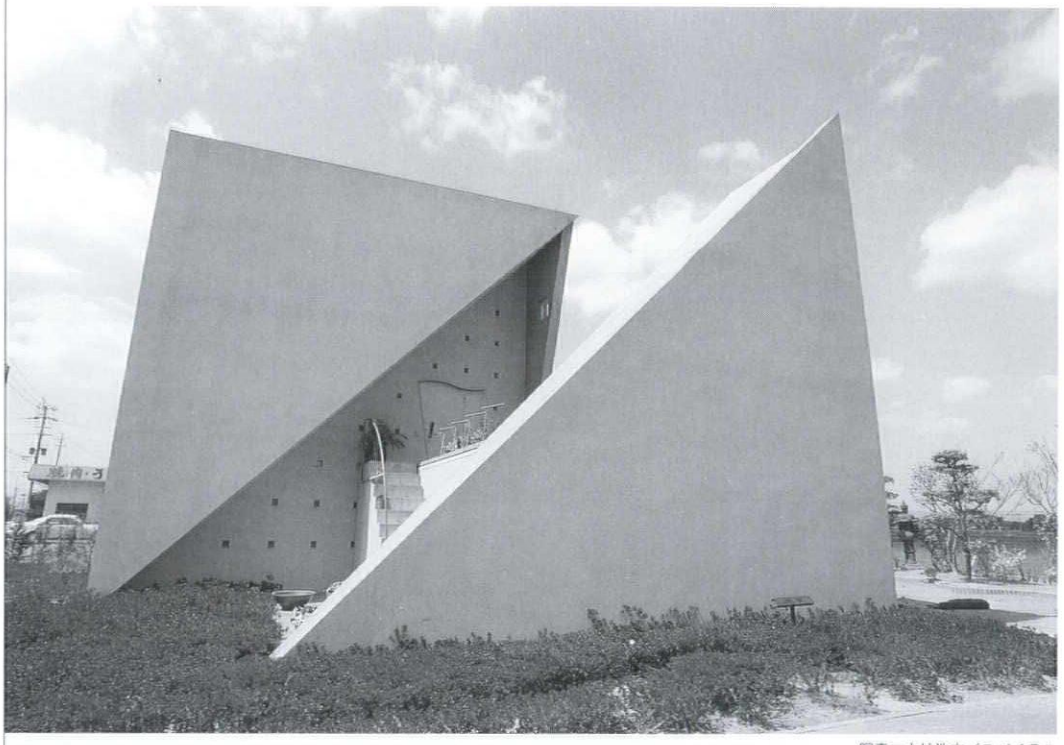


おがわ・しんいち
1955年山口県生まれ。応募当時小川晋一アトリエ主宰。現在小川晋一都市建築設計事務所主宰、近畿大学工学部助教授

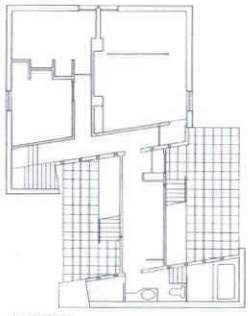
白川直行アトリエ

立方体の風

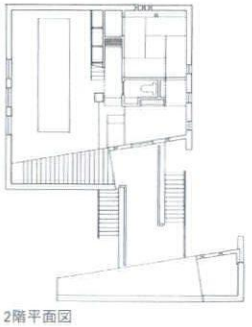
SD賞



写真＝小林浩志／スパイラル



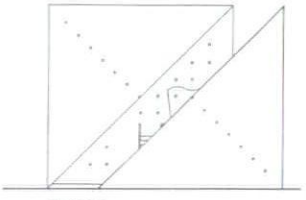
1階平面図



2階平面図



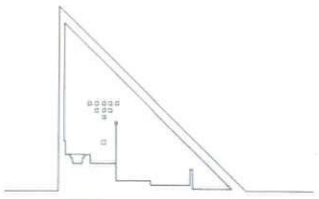
北立面図



東立面図



断面図



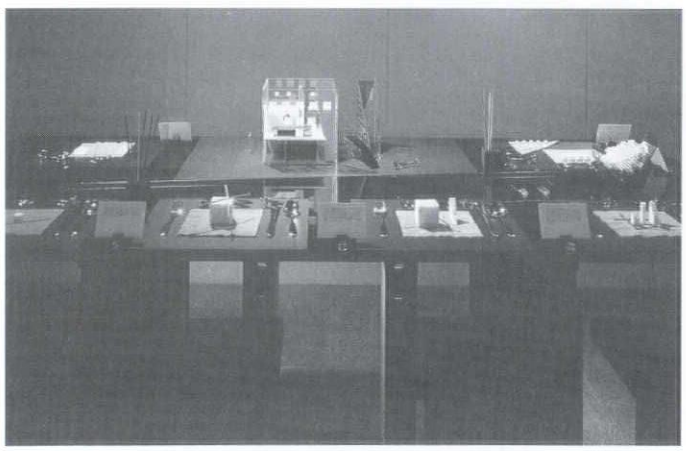
断面図

住宅は立方体というプライマリーな形態に、最小限の操作を加えることで獲得された空間によって構成されている。

しかし、その操作の関心は、住宅の日常との整合性でもなければ、またそれを可能にするキャパシティに興味があるのでもなく、むしろその操作によって得られる日常との整合性と非整合性との奇妙な混在、全体に対する部分の突出や増幅、あるいは空間や形態によって引き起こされる機能の誘発、そういったものに関心があった。

隣接する診療所を開業し、激務の続く脳神経外科医、およびその家族のための計画で、敷地の南側には山並みを遠望することができ、さらに北には麦畑が続く開放的な環境に位置する。

所在地：福岡県久留米市
建築用途：専用住宅
共同設計者：鹿野安司・池之上小百合（旧所員）、福田豊／T.R.A.
構造：RC造
敷地面積：2571.10m²
延床面積：156.72m²
竣工年：1992年



しらかわ・なおゆき
1951年福岡県生まれ。白川直行アトリエ主宰

長島孝一+AUR建築・都市・研究コンサルタント

中村冒険パーク

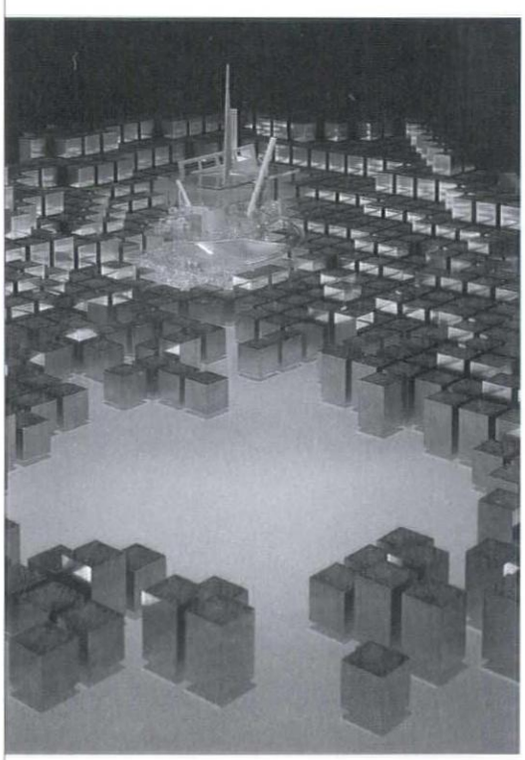


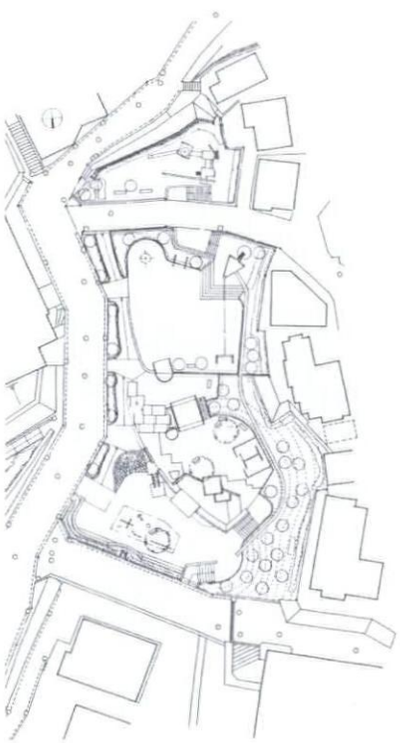
写真＝堀内広治

この公園計画は、住民、行政、設計者の三者が「ワークショップ」を通して共に考え、作業して実現した計画例である。住民が求める公園のイメージは「ワークショップ」により明らかになるが、相反する意見や局部に固執した提案も多数あった。これをひとつの「場」としてまとめるために全体を貫くデザインストーリーを複数提案し、それを住民にフィードバックし、その結果、選ばれたのが「難破船」のシナリオである。このシナリオを3次元的に表現したのがこの公園である。

計画地には、遠くに港が見える丘の上の4段のひな段傾斜地であり、それまで使い道の見つからぬまま放置されていた土地である。そこに船としての形を擁壁や鉄骨製の艦橋や遊具で構成している。また、「日本丸」などから本物の船具や部品を譲り受けて使用し、フィクションとリアリティの間を揺れ動く子供らしい夢の世界を創ることを意図している。

所在地：横浜市南区中村町
建築用途：公園
構造：RC造、S造、木造
敷地面積：1,719m²
竣工年：1992年4月

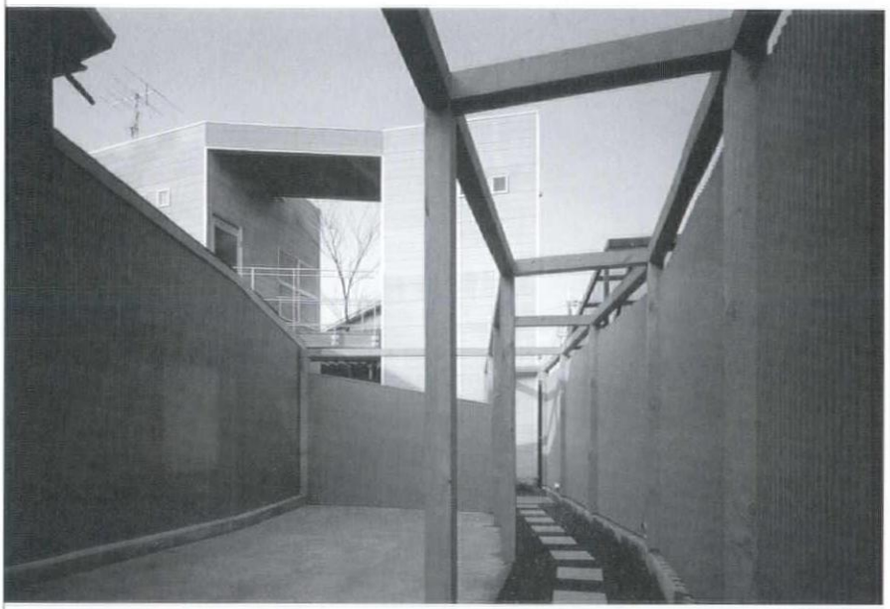




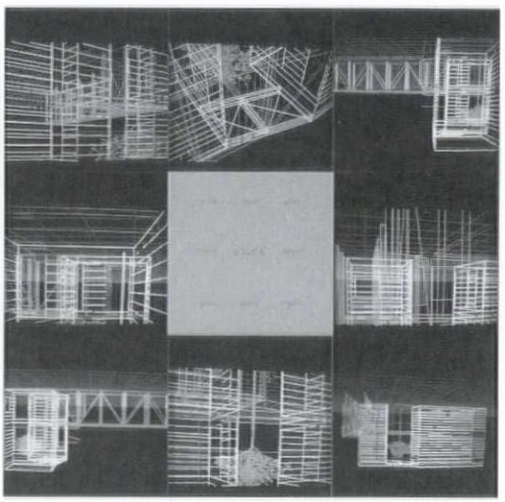
ながしま・こういち
1936年東京生まれ。AUR建築・都市・研究コンサルタント代表

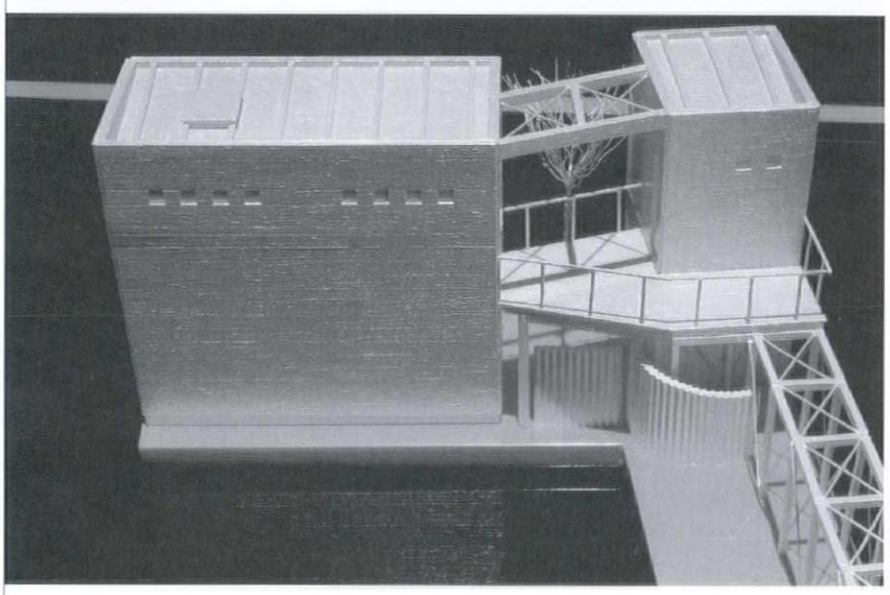
中村勇大

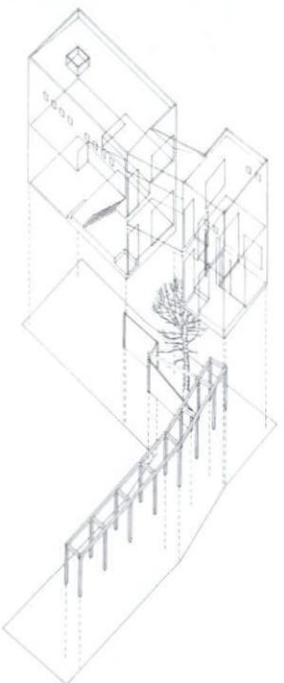
上鳥羽の家

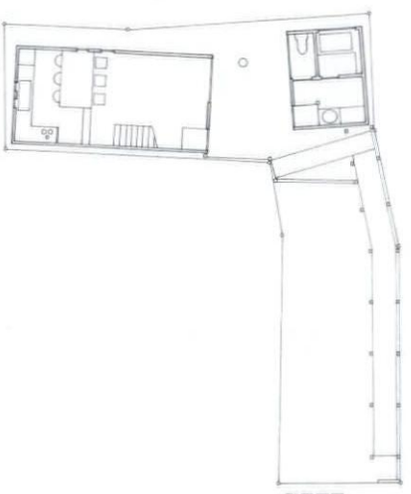


写真＝彰国社写真部









1階平面図

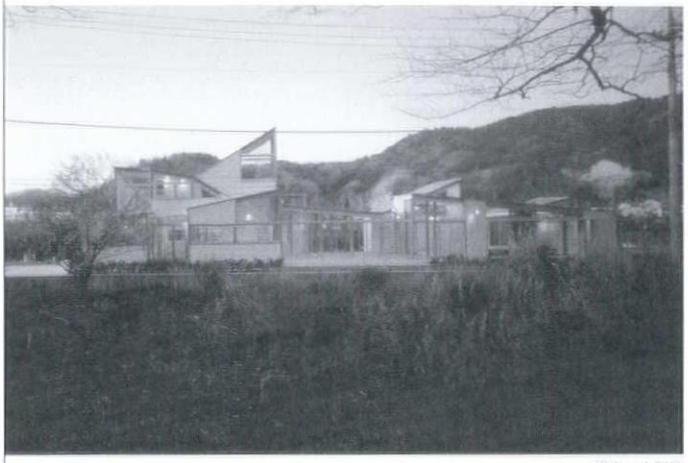
もともと家族3人の住居として計画を進めていましたが、工事も大詰めに近づいた頃、子供がひとり増えることになり、吹き抜け部分に床の増設の必要性が生じました。そこで、当初のコンセプトを崩さないように、2階床レベルから450持ち上げた床（パレット）を設置することで、解決を得ることができました。今から思い返してみますと、ひとりの子供の誕生が、私の設計活動に大きな影響力を及ぼしたことになります。

所在地：京都市南区
建築用途：専用住宅
構造：木造
敷地面積：125.15m²
延床面積：71.28m²
竣工年：1991年

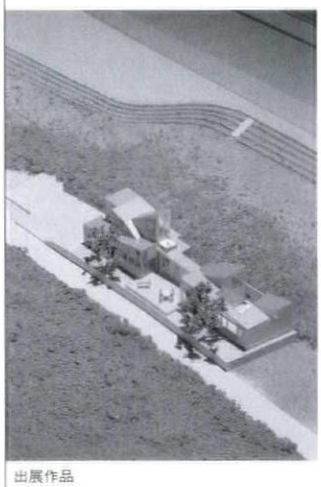
なかむら・いさむ
1959年京都市生まれ。応募当時中村勇大アトリエ主宰。現在同上主宰、京都芸術短期大学専任講師

飯村和道／ダンス

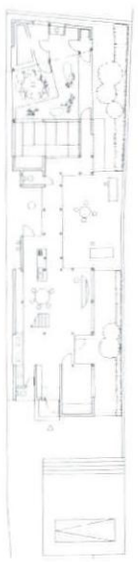
K邸



写真＝大野繁



出展作品



応募時には、すでに実施設計が終わっていましたので、展示のプレゼンテーションは現実的な表現を用い、竣工作品に近いものとなりました。

現況は山に囲まれ周りには多くの緑を残す恵まれた自然環境ですが、将来的には宅地化が予想される、道路に沿った東西に細長い敷地、さらにはクライアントの要求規模が大きいということもあって、計画は周辺からのプライバシーを配慮しながら敷地一杯を回遊し、山々を遠景として楽しめる空間をつくることを意図しました。

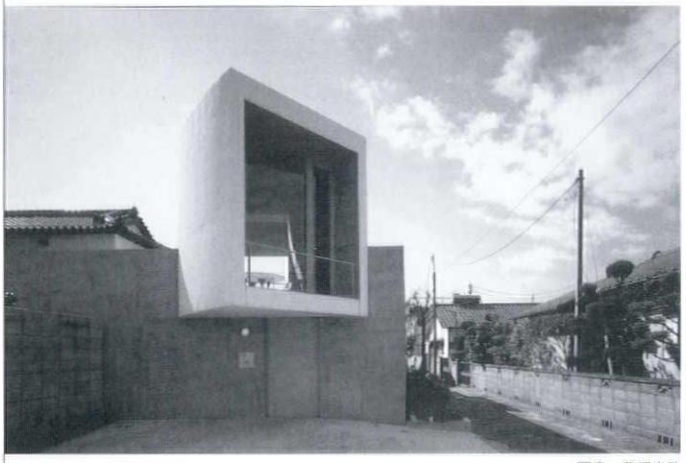
東西に配置した各々のスペースは、間仕切きらずに連続させ、建物に入り込んだ形の外部空間を含めて敷地内を楽しく回遊できるように計画しました。また実際に日照・通風・周囲の眺望のために設けた開口部と、平面に沿った形の屋根が透明感のある空間をつくり、自然につつまれている実感を快楽的に体験できます。

所在地：静岡県賀茂郡
建築用途：週末住宅
敷地面積：460.95m²
延床面積：121.12m²
竣工年：1991年10月

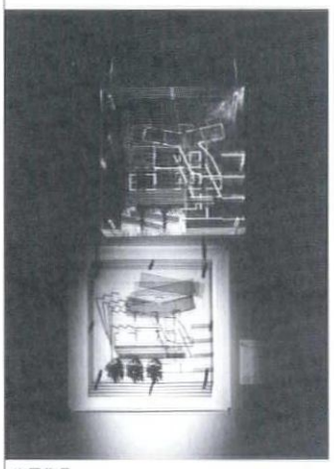
いいむら・かずみち
1953年東京生まれ。一級建築士事務所ダンス主宰

石原健也／デネフェス計画研究所

甲府の2世帯住宅（甲府の家）



写真＝藤塚光政



出展作品



建て主（＝設計者）の経済的事情から下層の親世帯のみ先行して建設することになり、計画を全面的に見直すことにしました。その際にあえて上層まで設計してしまうのではなく、増築可能性だけを担保して全体像を留保する方針としました。現実に建ち上がった下層部分は応募案よりリジットなものに変化していますが、上層に向けて自由な構成となる当初イメージは今も持ち続けています。そうした予兆らしきものは、感じられるかと思います。今もスタディは断続的に行っていますが、この時間的ズレのなかで自由な構成という意味合いにも変化が出てきていることを感じます。

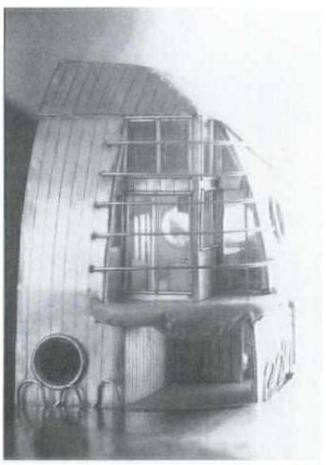
所在地：山梨県甲府市青葉町
建築用途：専用住宅
共同設計者：良川奈穂子／デネフェス計画研究所
構造：RC造
敷地面積：176m²
延床面積：100m²
竣工年：1994年

いしはら・けんや
1959年山梨県生まれ。デネフェス計画研究所主宰

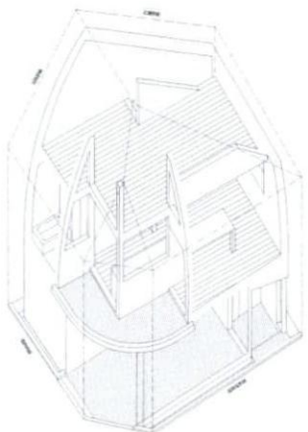
川口とし子／アーキスタジオオゾン

中野区上高田の十坪住宅——地形を失った都市の第二の地形





写真＝長岡緑



「第二の地形」から「第三の皮膚へ」

「この小さなプロジェクトでは、地形（→地動→地霊→）を失った都市を生きる共稼ぎ夫婦と彼らの一太郎がさらにバイタルであるための〈鼓動する住宅〉が目指されている」幸か不幸かこのプロジェクトは実現しなかった。SDレビュー入選と同時にポシャってしまった……事ほど斯様にハッピーとアンハッピーは表裏一体。このアクシデントを弾みにアーキスタジオ（オゾン改称）川口の設計活動は続いてきている。

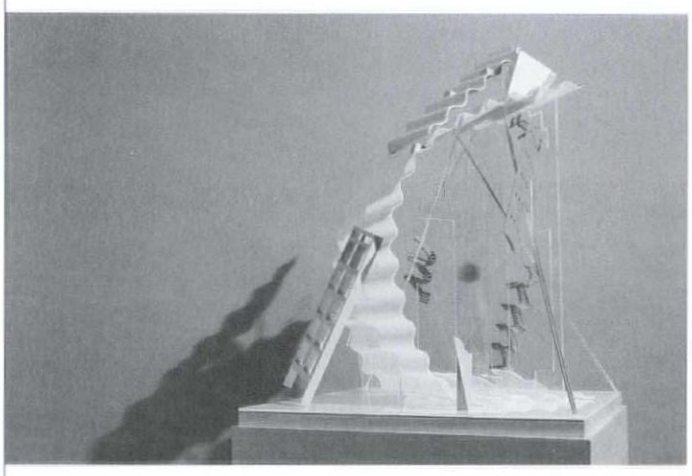
地球環境や健康の問題が深刻に取沙汰される今日、建築は衣服に次いで「第三の皮膚」とも言われ、人間の身体の延長としての意味が大きい。モダニズムの建築からポストモダニズム、そしてその崩壊の戦後50年余り、建築の変遷は錯覚（illusion）ででもあったかのように感じらる。経済システムや電子メデアのカオスにではなく、「……汗や涙や体や現場……」といった大地を建築という行為を通して横断していきたい。

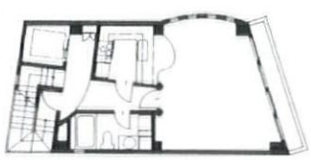
所在地：東京都中野区
建築用途：住宅
共同設計者：有賀 久美子
構造：木造
敷地面積：38.207m²
延床面積：26.65m²

かわぐち・としこ
1956年新潟県加茂市生まれ。応募当時アーキスタジオオゾン所属。現在アーキスタジオ川口代表

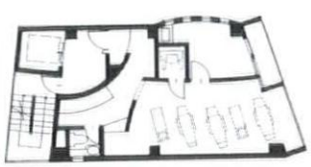
小松清路／小松清路建築研究所

Moving Waves——移動する波［山本ビル計画］

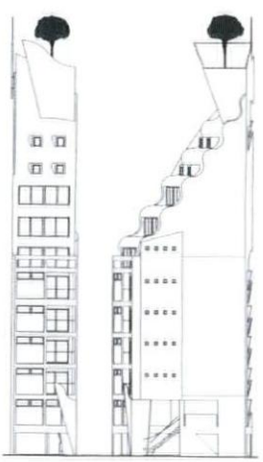




7階平面図



6階平面図



立面図

敷地、筋書、表現
この3つの局面から建築を考えることを試みた

敷地は
物理的広さとは関係ないその場の記憶と
内在する軌跡とを同時に包み込んでいるしたがって
敷地には何かを起こす可能性があり
動的なものとなりえる
筋書きは小説のようなもの
ストーリーが組み込まれ
それぞれの部分（人間）が
分離されたり統合されたりして進行する
筋書き通りの終結が到来し
表現が終わる
その表現は
虚構と現実の始まりと終わりを否定している

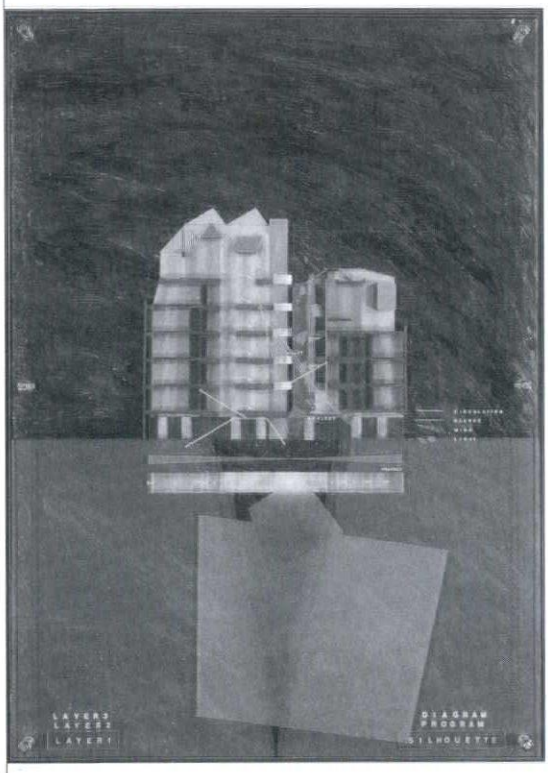
移動する波のように

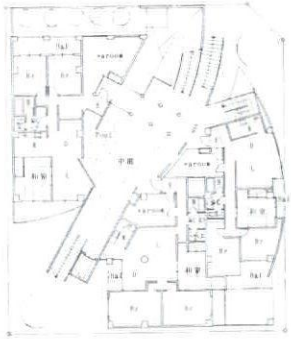
所在地：東京都大田区蒲田
建築用途：住宅、共同住宅、事務所
構造：S造+RC造
敷地面積：75.00m²
延床面積：511.11m²

こまつ・せいじ
1952年長野県生まれ。（有）小松清路建築研究所代表

佐田野 剛／竹中工務店

空中楼閣





このプロジェクトは7階建ての集合住宅である。1階を駐車場とし、自動車等の喧騒を避けて2階にエントランスを設けた。また最上階にはオーナー用のメゾネットを持つ。

一般的に中層の住宅では避難上の用途としてしか用いることのない屋外階段を住人共有の経路空間として積極的に採り入れ、狭い敷地の中でその長さが最大限感じられる様に敷地の対角線上に設けられた2階の中庭から、6、7階のペントハウスまで、垂直に伸び上がる峡谷の様な共有空間を計画した。

この経路空間は階段による行き来が容易な低層部、エレベーターによるアクセスが主となる中層部、そしてオーナー住居として唯一上部からの光を得ることのできるペントハウスを動線的かつ視覚的に結びつけると共に、全ての階の住居に互いの視線を遮りながら光や風の抜けていく空隙を創り出している。

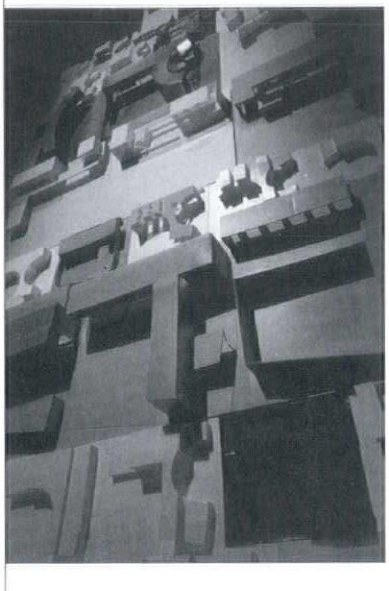
残念ながら実現はしなかったが、高密な都市の中で人々が集まって住むという事について、考えることのできたプロジェクトであった。

所在地：福岡県
建築用途：集合住宅
構造：SRC造、一部RC造
敷地面積：872.92m²
延べ床面積：1745.85m²

さだの・つよし
1965年岡山県生まれ。(株)竹中工務店設計部所属

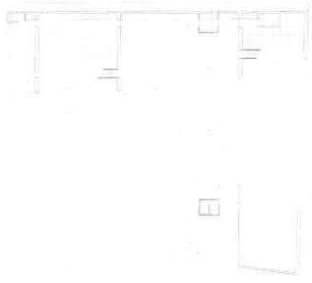
妹島和世建築設計事務所

N邸（N-House）





写真＝妹島和世建築設計事務所



1階平面図

2階平面図

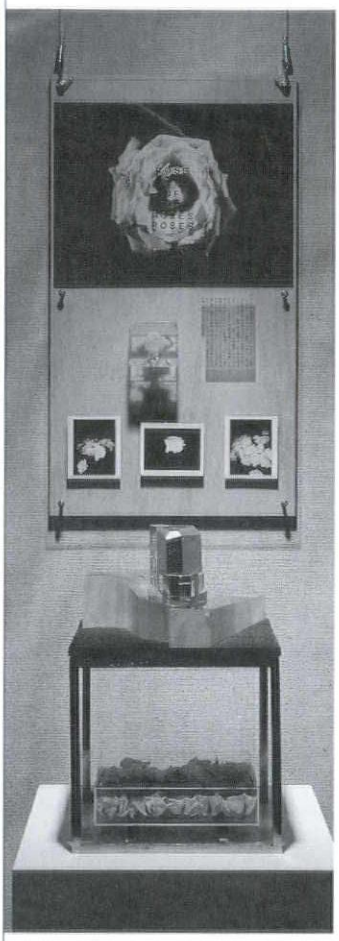
この建物は、敷地面積約1000m²、延べ床面積約600m²の、いわば豪邸です。豪邸というジャンルでは建物を考える際無限のバリエーションを生み出してしまう、ということがエスキースを繰り返せば繰り返すほど明らかになってきてしまって、その結果、この建物では、いかに普通のつまり一般的な住宅が持つスペースからだけ豪邸を作ることができるか、特殊なスペースから考えるのでなくどうやって建物を考えることができるか、そういうことがテーマになっていたと思います。そのことをプレゼンテーションしようとして、エスキース模型を合体して大きなパネルを作りました。パネル自体だけでもひとつの自立したものになっていたいと考え、夜中にみんなで共用廊下に出て、ものすごくたくさんのエスキース模型にカラースプレーを吹きまくりました。

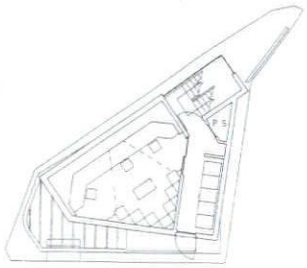
所在地：熊本県熊本市
建築用途：専用住宅
共同設計者：西澤立衛+長尾亜子
構造：RC造+S造
敷地面積：1,000m²
延床面積：580m²

せじま・かずよ
1956年茨城県生まれ。妹島和世建築設計事務所主宰

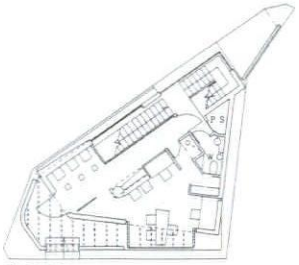
A.T.System+竹内申一

神宮前プロジェクト





2階平面図



1階平面図



配置図

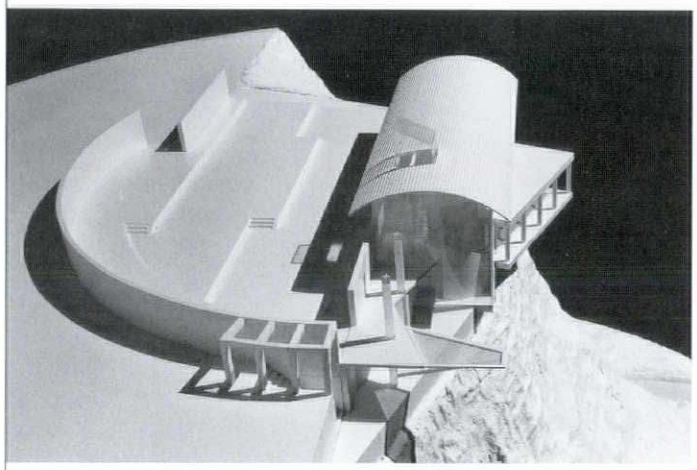
とても小規模なビデオの編集用のスタジオである。敷地がとても狭いため、建物は鉛直方向に積まれている。それぞれの層は、ビデオ編集における機能別になっており、地下階で撮影されたものが上層へ上がって行くに従って加工が施される。つまり、未処理な物が加工された情報へと移行してゆくわけである。この計画では、建築をニュートラルでスケールレスなブラックボックス的なヴォリュームとしてつくり、物としての彫刻的な建築とビデオボックスという記号的な情報としての建築という二面性を持たせることで、内部で行われる物から記号への流れの中間にある、物と記号の間の振幅体として建築を表現したいと考えた。展示においては、模型そのものも、リアルな物であり計画を説明する記号であるようにするために金属の鋳造により作成したが、経済的な要因によってこの計画は中止となり、最終的には小さな金属のオブジェが建築として残ることとなった。

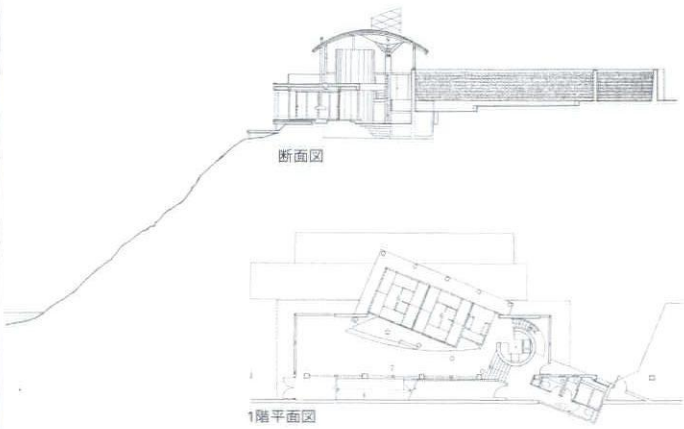
所在地：渋谷区神宮前
建築用途：ビデオスタジオ
共同設計者：建築構造企画（構造）、ユニ設備設計（設備）、アールアンドアール（装置）
構造：RC造
敷地面積：74.63m²
延床面積：164.14m²

たけうち・しんいち
1968年愛知県生まれ。伊東豊雄建築設計事務所所属

中村 勉

炎彩画美術館





断面図

1階平面図

「炎彩画美術館」は、桂川上流の川魚旅館がゲストハウスを企画した機会に、常連客であった炎彩画作家が作品を寄付して、美術などの文化的環境をもった施設にしようとしたものである。SDレビューに応募した時点は基本計画が終了し、資金計画を考え始めた時であり、時間という概念を設計の主なコンセプトとしたことが新鮮であったと思う。

しかし、その秋の台風による洪水で釣り場が大打撃を受け、その修復に約2年あまりかかったこと、さらに追い打ちのようにようにバブル後の不況に見舞われ、レジャー客が激減し、しばらく様子をみるということになったためこの計画は残念ながら実行されなかった。

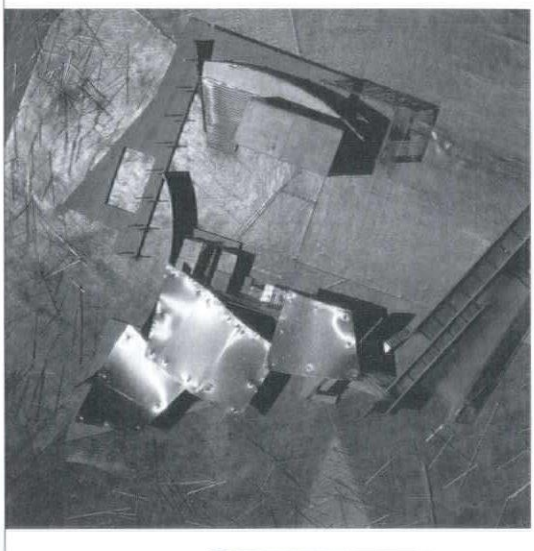
しかし、炎彩画美術館の「時間を楽しむ空間」自然の中の「透明な空間」、「木造のそなやかさを表現した空間」という基本的な考えはその後の他の作品づくりに強く影響を与えていると思われる。

所在地：山梨県大月市
建築用途：美術館、ゲストハウス、パーティハウス
構造：RC造、一部木造
敷地面積：3,252.96m²
延床面積：244.12m²

なかむら・べん
1946年東京生まれ。(株)中村勉総合計画事務所代表

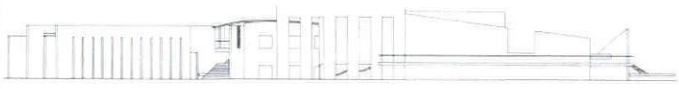
前田紀貞アトリエ

横浜K幼稚園

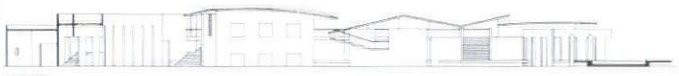




平面図



立面図



断面図

いまだ「教育という名の飼育」をされていない子供たちが、毎日どういった場所や時間と溶解してゆくべきであるかということについて提案をした。ここでは、園の様々な場所を分散配置してゆくことで、裏／透き間／余りの空間を子供たちの生活の場として再解釈しながら、彼らが世界と関わる仕方、記憶の蓄積などを大切に扱っている。そこには素材感やスケール、空間領域の規定の提案などを盛り込み、園の教育理念にも近い「世界を明確に規定し過ぎないこと（教え過ぎることは世界を痩せさせてゆく）」をクライアントとの共有できるキーワードにしていた。

こうした意図は、当然ながら園の管理的側面とは相反するものであるにもかかわらず、幸いにもこの点でクライアントの大きな理解は得られたものの、もうひとつの大きな障壁である経済的な理由により現在計画は凍結状態にある。

所在地：神奈川県横浜市
建築用途：幼稚園
構造：RC造、一部S造
敷地面積：5,987.26m²
延床面積：1,677.44m²

まえだ・のりさだ
1960年東京都生まれ。前田紀貞アトリエ主宰

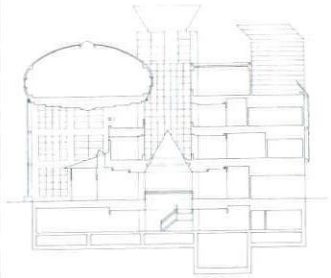
増田実+米田有／Archadia Architects Office

Maze［新本牧商業施設］（ASTY館）

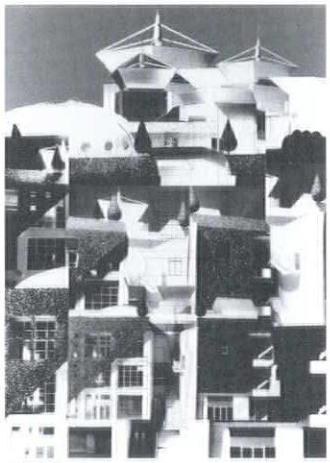




写真（上、左下）＝（株）三輪写真事務所



断面図



出展作品

SDレビュー応募時は実施設計終了後であったので、出展作品と竣工建物は同じです。施主もコンセプトをよく理解し、竣工当初は「緑の壁」のメインテナンス等にも気を配っていましたが、その後の経済情勢の変化や、建物所有者とテナントの力関係の逆転により、一部の無理解なテナントが原因で、一部「緑の壁」の月1回の定期メインテナンスすらできない状態になり、植物が枯れ、残念ながら今年に入って一部プランターやメッシュが撤去されました。商業施設における、メインテナンスおよびコンディション維持管理の難しさと、コンセプトとそれを実現する時のギャップの厳しさを改めて痛感しました。

金属メッシュで「緑の壁・面」を作るアイデアはその後も改良しつつ適宜使用しております。（米田有）

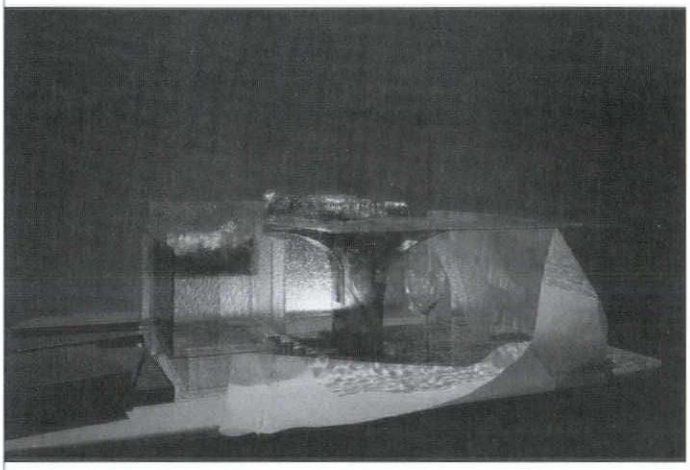
所在地：横浜市中区
建築用途：商業ビル
構造：RC造
敷地面積：1,408.59m²
延床面積：4,844.30m²
竣工年：1993年

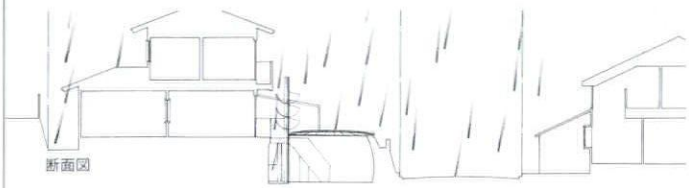
ますだ・みのる
1955年横浜生まれ。応募当時（有）アルカディア・アルキテクツ・オフィス代表取締役。現在（株）増田実建築研究所代表取締役

よねだ・たもつ
1956年横浜生まれ。応募当時（有）アルカディア・アルキテクツ・オフィス代表取締役。現在（有）建築都市環境設計代表取締役

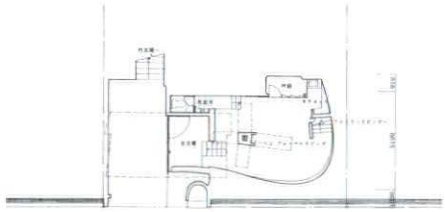
宮本佳明／アトリエ第5建築界

雨につつまれる地下室

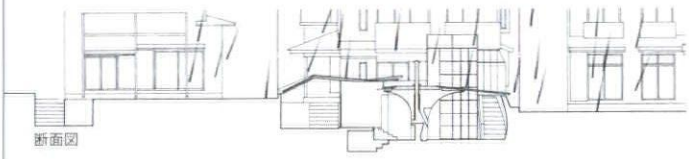




断面図



平面図



断面図

ありふれた木造2階建住宅の庭先を浅く掘ってプール状にし、そこにガラスの屋根を架けてパーティールームを増築するというプロジェクト。もとの居間をよりカジュアルなしつらえとすることで、「ハレ」の玄関⇆フォーマルリビング（パーティールーム）⇆ファミリーリビング⇆内玄関という引き込みによって接客が調整されると目論んだ。同時に、雨は薄い膜となってガラスの屋根を流れるはずであった。

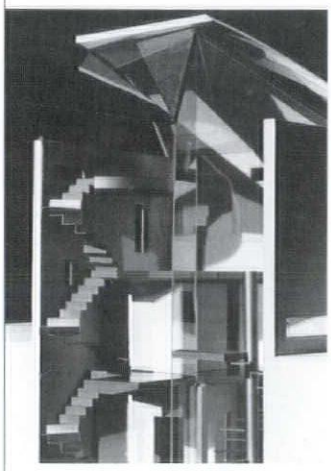
施主の予算が、「いくらでも好きなだけ」から「3000万ぐらいでしょうか」になり、やがて「設計料込みで1800万以内でなんとか」を経て、なんかおかしいなと思っているうちに「必ずやりますから」「お隣がどうも」となって、結局ペンディング。絵に描いたようなバブルの末期であった。関西に帰るきっかけとなったプロジェクト。

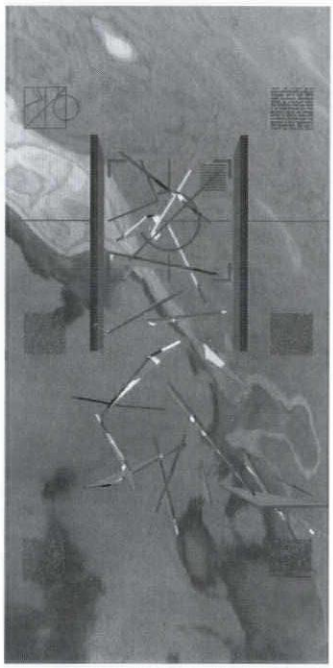
所在地：横浜市緑区（敷地）
建築用途：パーティールーム
共同設計者：安田博道（元所員）
構造：RC+S造
敷地面積：226.9m²
延床面積：54.1m²（増築部分）

みやもと・かつひろ
1961年兵庫県宝塚市生まれ。アトリエ第5建築界主宰

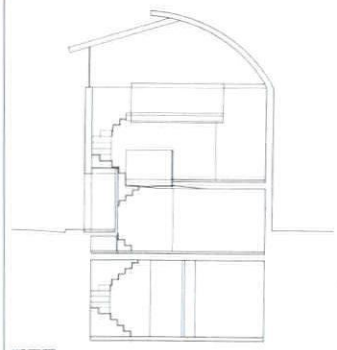
渡辺 誠／アーキテクツ オフィス

LAGOON

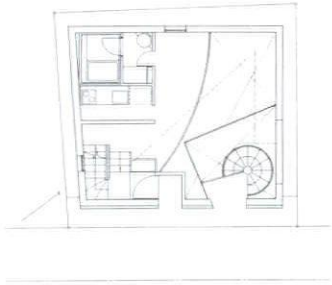




CG＝渡辺誠／アーキテクツオフィス



断面図



平面図

ふたのない箱を、地面に半分埋めてみます。その中にORE-Xの破片チップをいくつか浮かばせます。上のほうに浮かんできたチップの何枚かが屋根となって、出来上がりです。
今回は、建て込んだ都心の、とても狭い敷地にたつ住宅に、最適解を求めたのです。
高さが法的に押さえられているので上には伸びられない。周囲は境界まで隣戸が迫っているのでどちらにも開くことができない。そこで、上がだめなら下へ、と、地下をカットしてそこから地上へ壁を立ち上げる。四周の壁にはほとんど開口はない。光は上から降り込み、外気は上下に抜ける。切れ切れに漂うチップの床の、間隙を抜けて、空間は連続する。
この構成は南の海の環礁に似ている。周囲を残し、中心部が沈んだ、ラグーン。
一番上の床からダイブすると、やがて底に届く。
底から見上げると、ゆらゆらと揺れる水面が、きっと見えることでしょう。
To be continued→〈Jelly Fish 3〉
1998

所在地：東京都渋谷区
建築用途：住宅
構造：RC造
敷地面積：71.87m²
延床面積：107.01m²

わたなべ・まこと
1952年横浜市生まれ。渡辺誠／アーキテクツ オフィス主宰

第11回　1992年



デザイン＝矢萩喜従郎

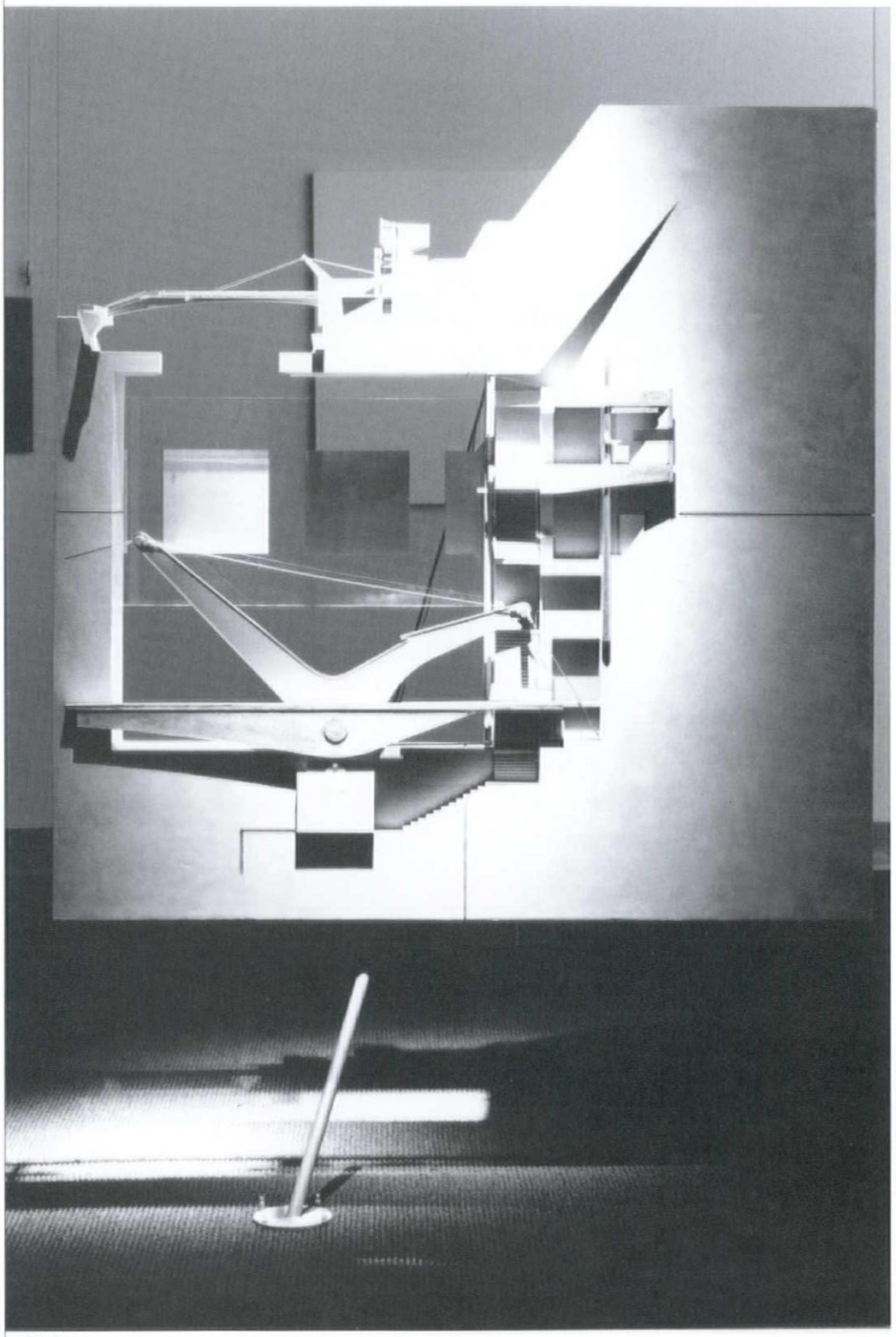
東京展：10月2日～10月14日
ヒルサイドテラスF棟ヒルサイドフォーラム
大阪展：10月17日～10月31日
会場：都住創センター
審査員：穂積信夫、伊東豊雄、小林克弘、飯島洋一
応募総数：202作品
入選数：16作品
受賞者：
隈 研吾／隈研吾建築都市設計事務所（鹿島賞）
新井清一+大藤淳哉／アライ・アーキテクツ（朝倉賞）
井坂幸恵（SD賞）
松岡恭子+王 大君（SD賞）

新井清一+大藤淳哉／アライ・アーキテクツ　杖立橋
井坂幸恵　I邸
石原健也／デネフェス計画研究所　梅園病院在宅介護支援センター
小川晋一　X3
ジョージ国広　Koseisha Flame Tree Resort
隈 研吾／隈研吾建築都市設計事務所　亀老山展望台
近藤裕之／システム シーツー　The Eaves
高橋晶子+高橋 寛／ワークステーション　Project IKD
戸田潤也　美山村の住宅
中尾 寛　N邸
乗富久哉　新気流――チャイナタウンの風三態
松岡恭子+王 大君　Housing for Agoraphobia
三栖邦博+浜田明彦／日建設計　敦煌石窟文化財保存研究・展示センター
村井 正+山口 賢／**Beam Studio**　Na House
室伏次郎／アルテック建築研究所　岡村スタジオ計画
吉松秀樹／アーキプロ　小野デンタルオフィス

新井清一+大藤淳哉／アライ・アーキテクツ

杖立橋（杖立橋+杖立多目的ホール［P-HALL］）

朝倉賞



出展作品

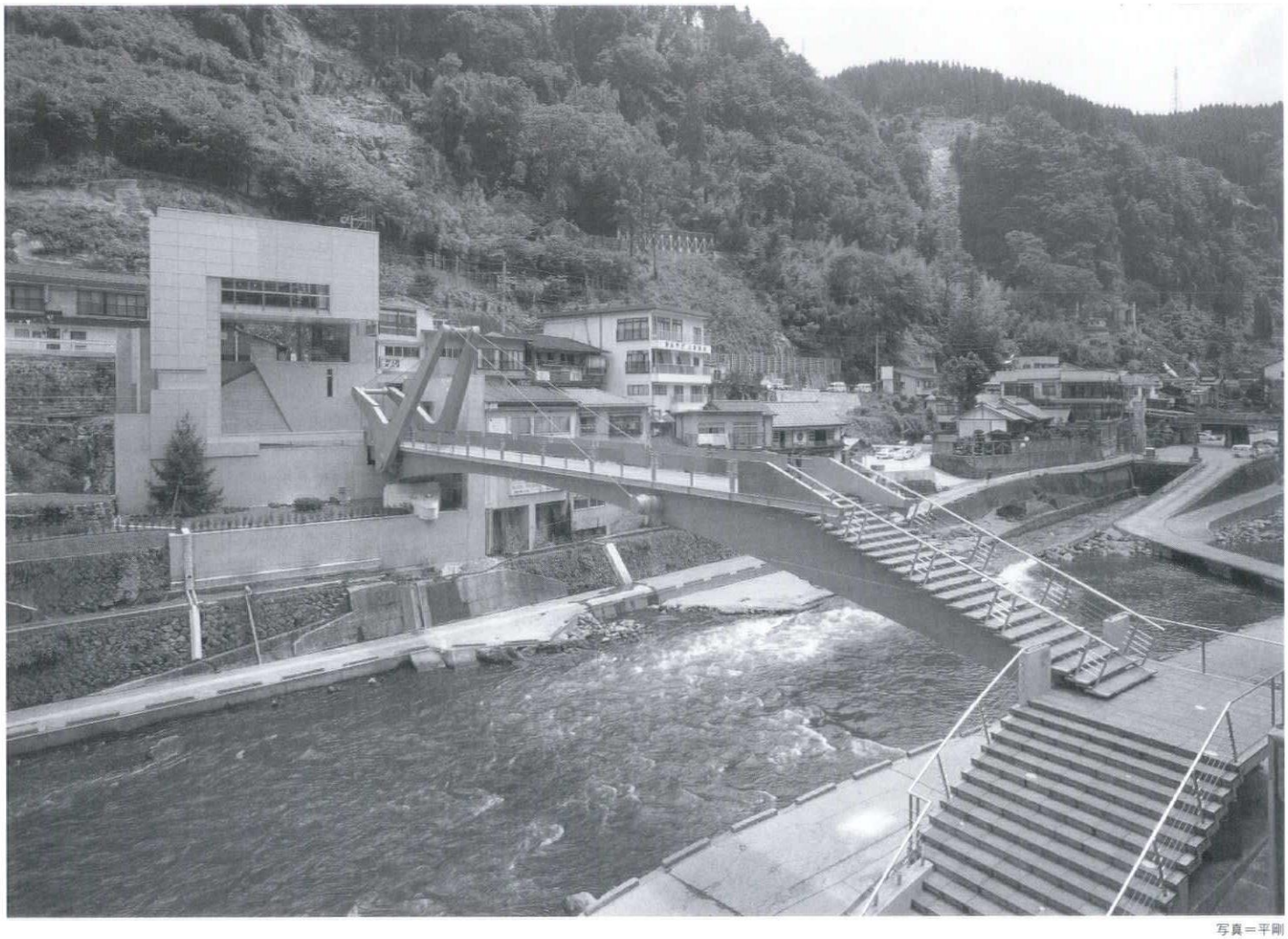
熊本県小国町の再北部。温泉街である杖立を流れる筑後川（杖立川）は町を真っ二つに分割している。この流れに唯一直行するのが「橋」の存在である。この橋は背後に迫る崖の斜面から突き出すように配慮され、その先端を対岸のピアーに載せるだけというイメージで計画されている。

街並みは、対岸からの眺めのイメージが強く、建物は直感的に「面」として視界に入り込む。床から天井へと曲げられた1枚のスラブで包まれた空間（ホール）は、3本の斜材（小国杉の丸太）で宙に支えられている。ホール下のピロティーにはガラス箱のエントランスと、高低差のある両岸を結ぶ階段を備える。ホールは市民や観光客に開かれたスペースであり、普段はカフェとして利用している。

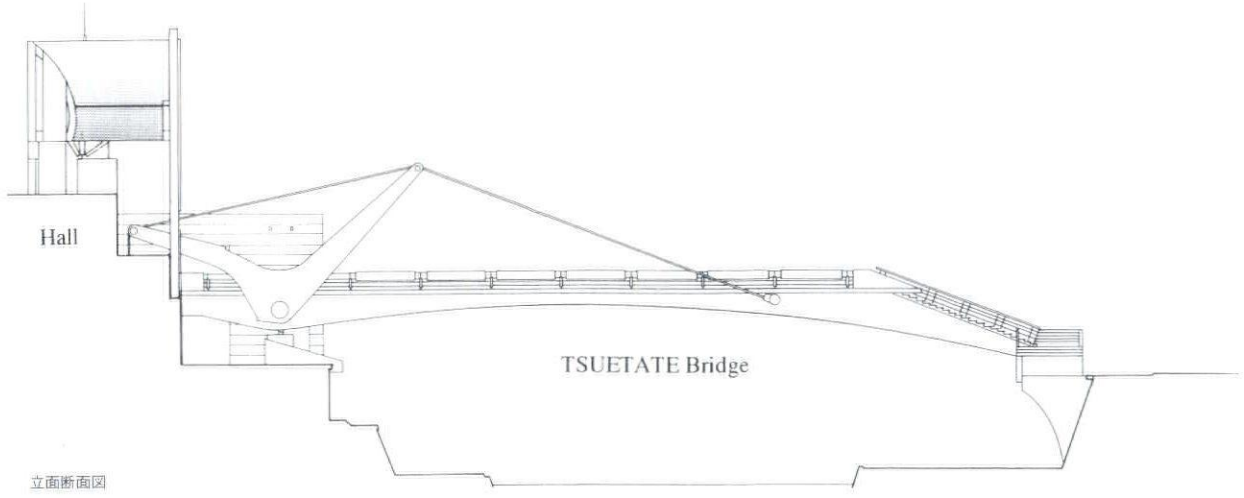
所在地：熊本県阿蘇郡小国町
建築用途：歩道橋+多目的ホール
共同設計者：
杖立橋／計画設計；大藤淳哉（旧所員）、実施設計；長田哲征（旧所員）、実施・監理；今村壽博、構造設計；至田利夫、照明コンサルタント；豊久将三（キルトプランニングオフィス）
杖立多目的ホール／計画設計・実施設計・監理；今村壽博、構造設計；T.I.S.& Partners（担当：松井晃一）、家具（スタッキング・テーブル）協力；Cassina Japan
構造：
橋／2径間連続鋼斜張橋
ホール／S造、一部RC造、木造
敷地面積（ホール）：156.66m²
延床面積（ホール）：130.60m²
橋長：53.45m
橋幅：3.2m
竣工年：1996年3月

あらい・きよかず
1950年横浜市生まれ。アライ・アーキテクツ代表、京都精華大学美術学部助教授

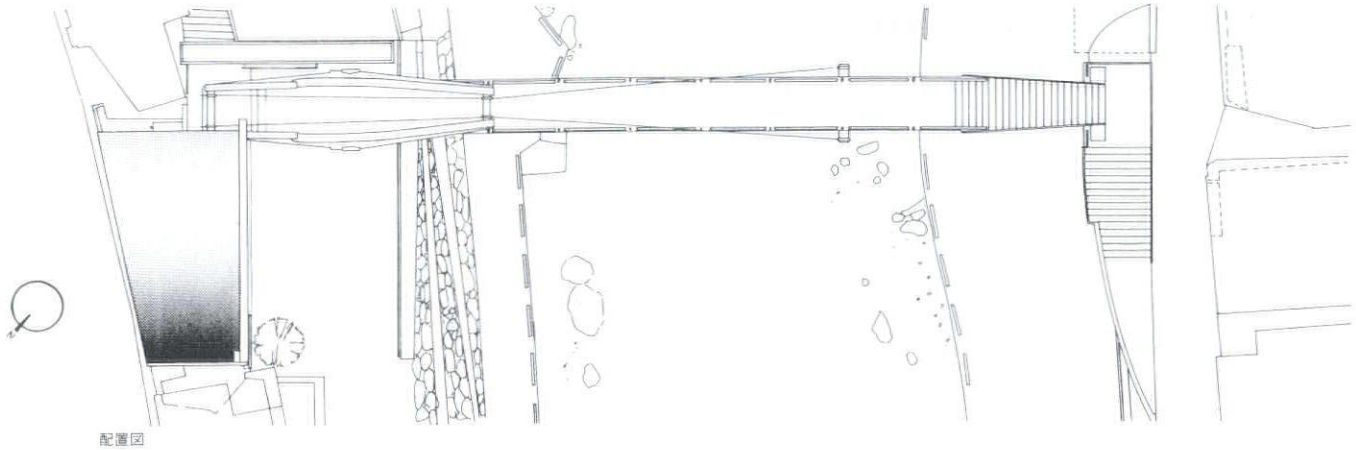
おおふじ・じゅんや
1967年東京都生まれ。応募当時アライ・アーキテクツ所属。現在荻津郁夫建築設計事務所所属



写真＝平剛



立面断面図

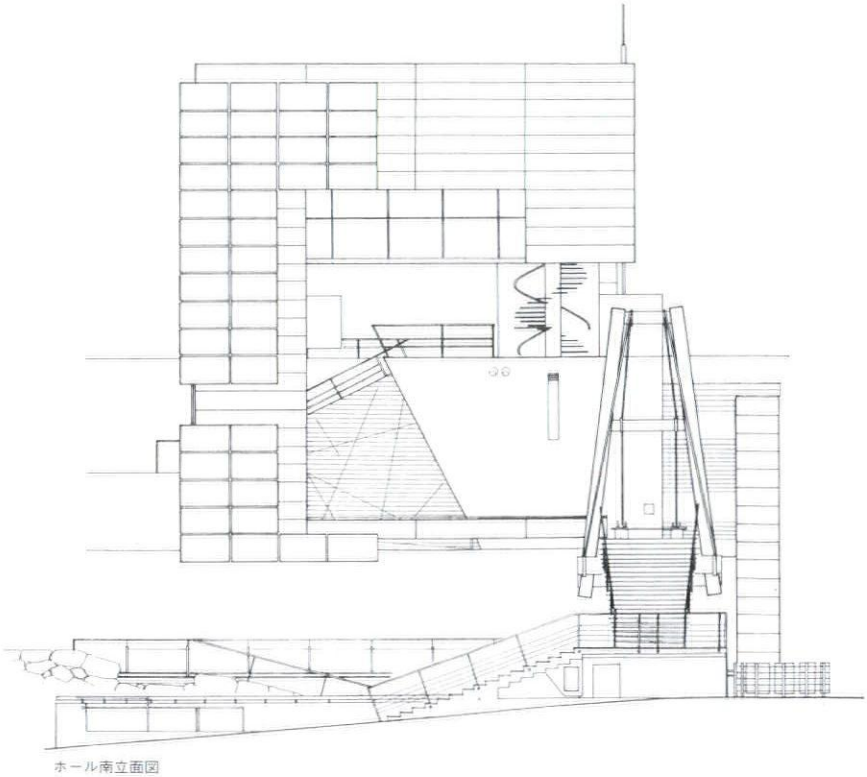


配置図

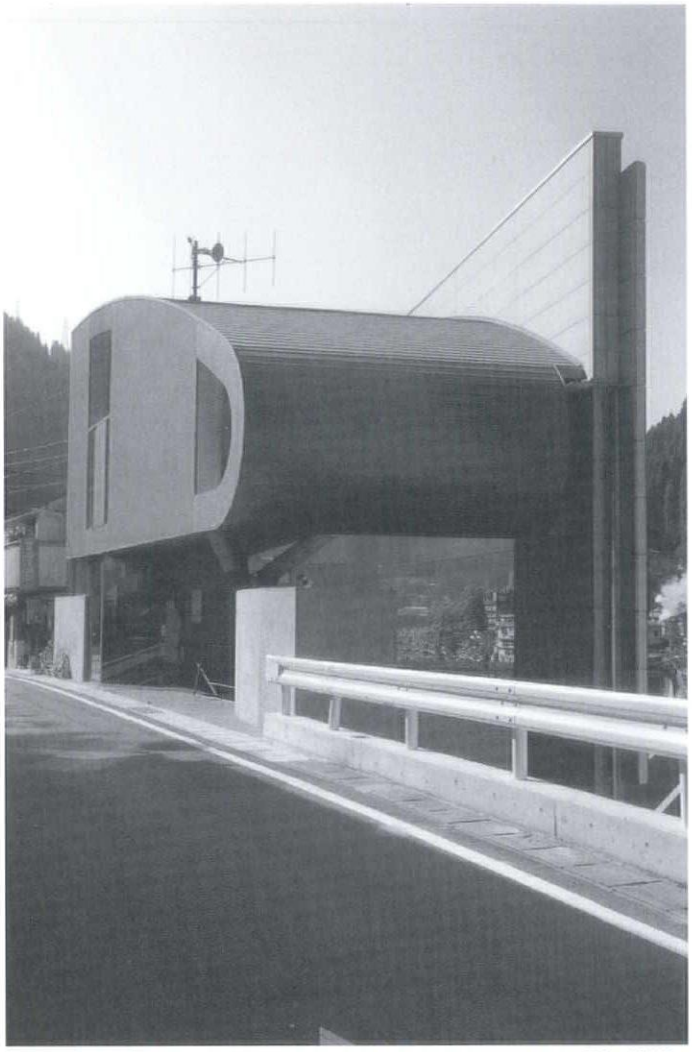


杖立多目的ホール2階

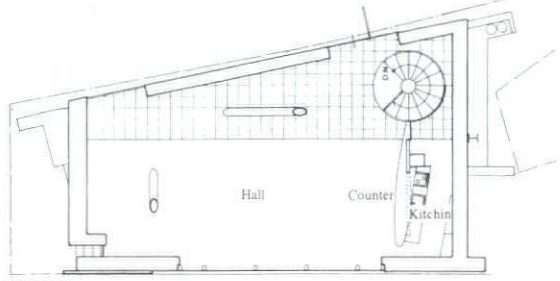
写真＝新井清一



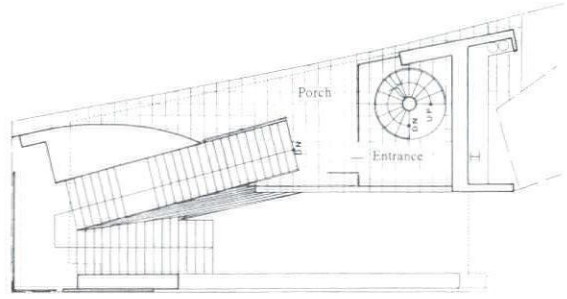
ホール南立面図



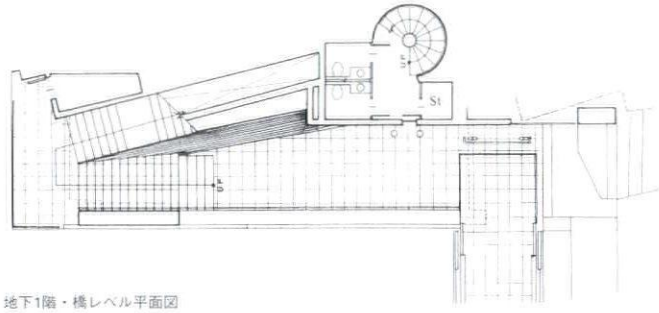
杖立多目的ホール　　写真＝新井清一



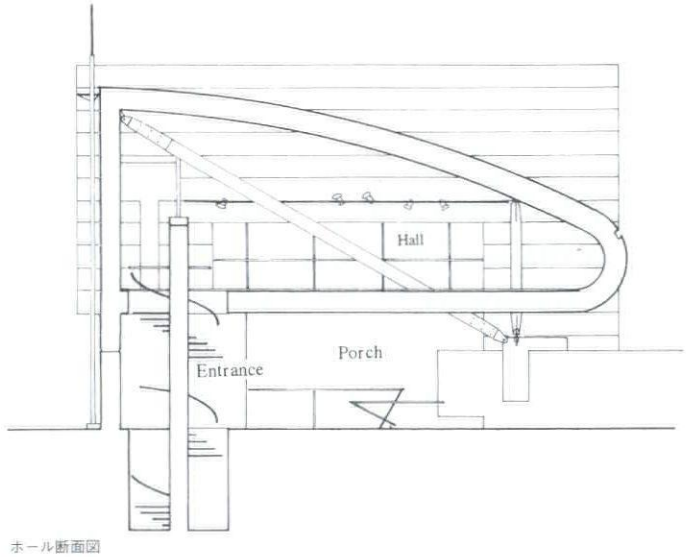
2階平面図



1階平面図



地下1階・橋レベル平面図

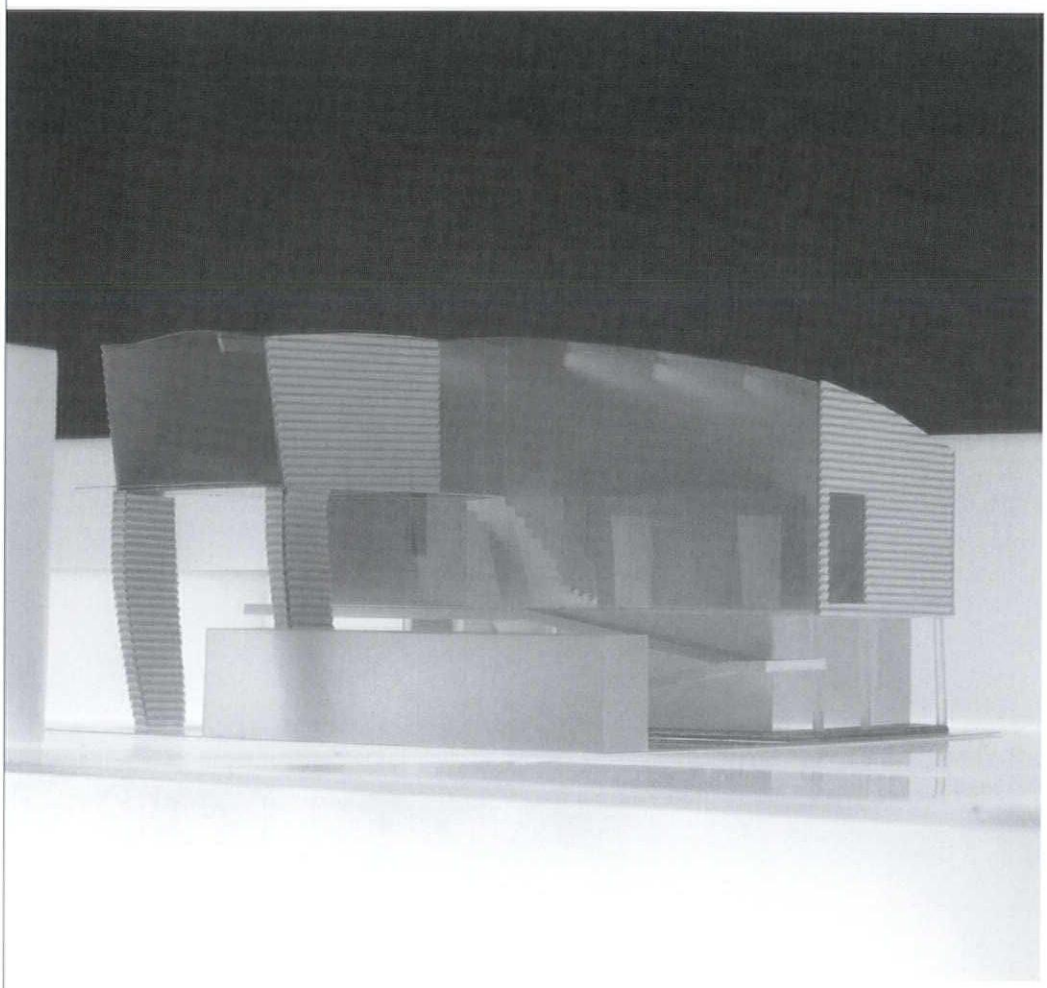


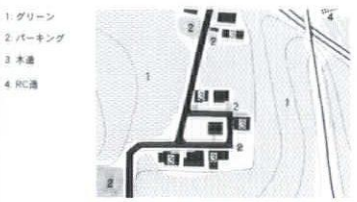
ホール断面図

井坂幸恵

I邸

SD賞

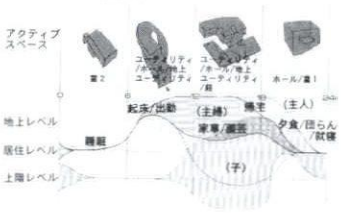




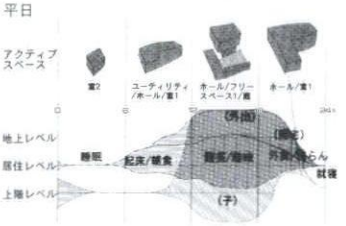
1982年



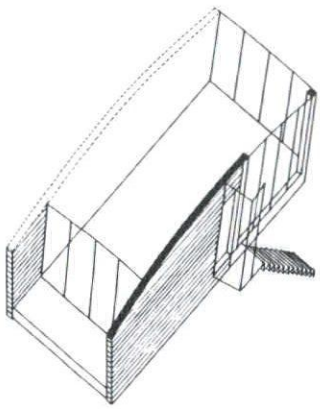
1992年

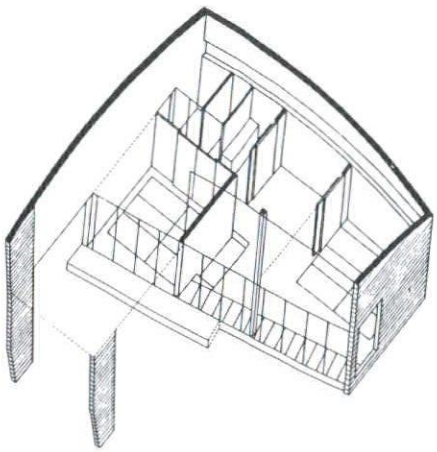


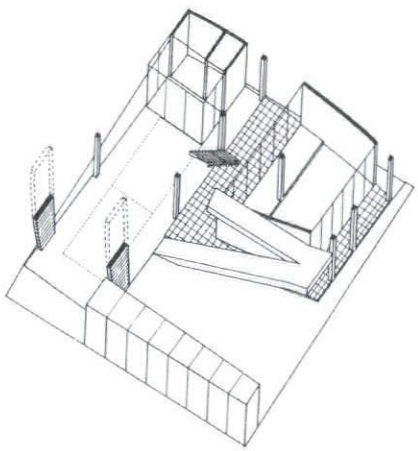
平日



休日







この作品は、私の両親宅の改築計画です。

しかし基本設計直後、父の健康上の理由で頓挫したままになりました。幸い現在は回復に向かい、改築の希望は継続しているようです。ただその時点で計画していた規模や使用状況は自ずと変化していくでしょう。したがって設計者としてはこれらを踏まえ、現在の問題としてもう一度向き合う必要があると考えています。

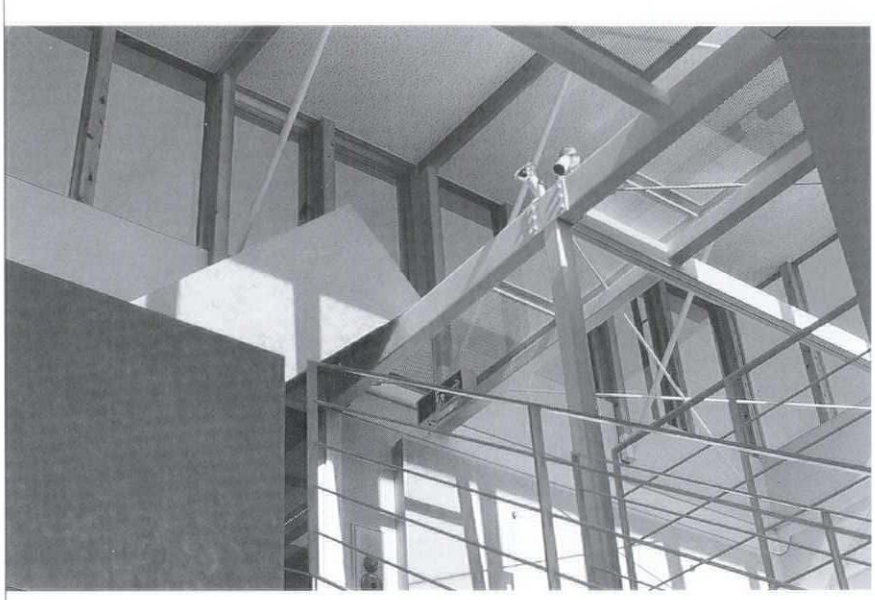
建築になるまでに通常よりゆっくりしたタイム・スパンで、プロセスとともに成長するプロジェクトになりそうです。

所在地：茨城県日立市森山町
建築用途：専用住宅
敷地面積：175.6m²
延床面積：122.3m²

いさか・さちえ
1965年茨城県生まれ。応募当時芝浦工業大学工学研究所研究員。現在Building Environment Workshop主宰

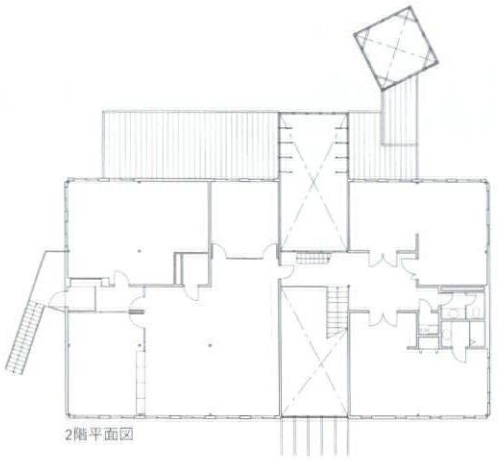
石原健也／デネフェス計画研究所

梅園病院在宅介護支援センター（梅園病院新館）

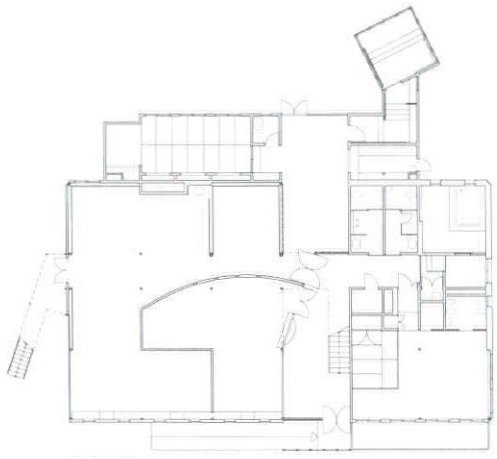




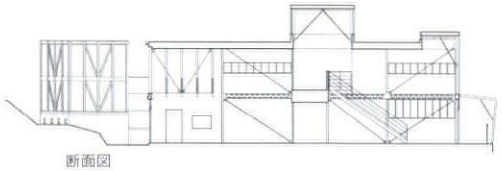
写真（左2点）＝藤塚光政



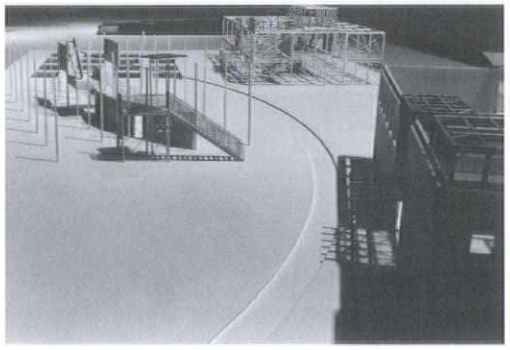
2階平面図



1階平面図



断面図



出展作品

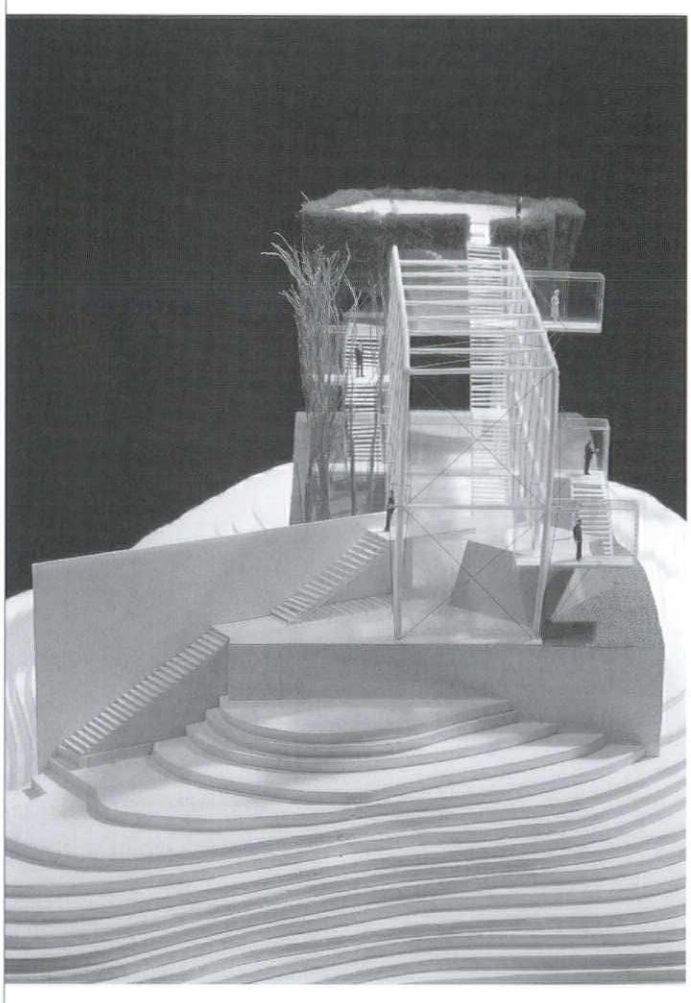
構造フレームとその他のビルディングエレメントを分離して重ね合わせる。その際に構造も軽いものとして考え突出した存在としては認定しない。そんな方針でスタディを始めたのですが、現実的な条件のなかでエレメント間のズレは一体化する方向に向かいました。もともと活動内容に試行錯誤的なところのある建物でしたので、竣工して半年後には増改築が決定されました。時間の経過とともに人間の活動というものは不透明な部分を増大させていきます。そんな現実的な力に対して、弱い構築という概念は無力でした。逆に採光システムや空洞のように、用途から自由な部分にはある種の強さがあることも感じました。

所在地：東京都青梅市
建築用途：デイケアセンター、老人訪問看護ステーション、在宅介護支援センター、保育所、病院管理部門
共同設計者：田中耕二・良川奈穂子／デネフェス計画研究所
構造：軽量S造、一部木造
敷地面積：1,610m²
延床面積：718m²
竣工年：1994年

いしはら・けんや
1959年山梨県生まれ。デネフェス計画研究所主宰

亀老山展望台

鹿島賞





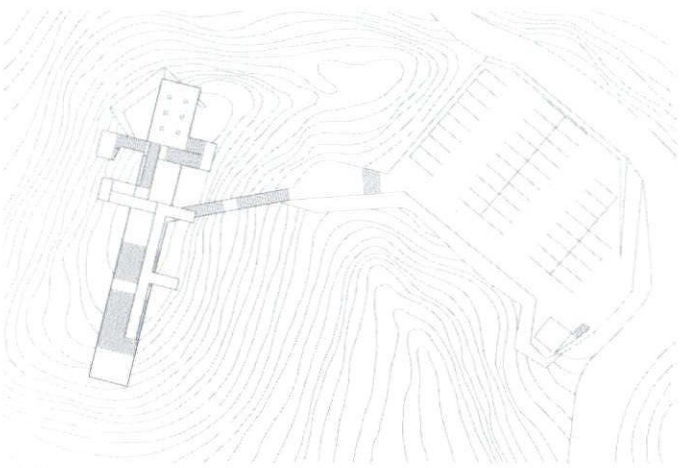


写真（右2点）＝藤塚光政

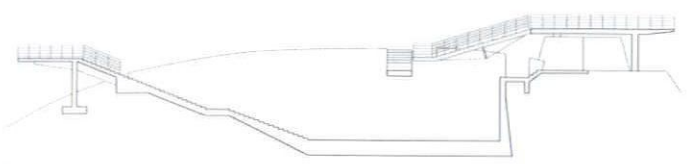
転機となった作品である。〈M2〉までの作品群を第I期とすれば、この展望台以降が第II期であると、勝手に分類している。案は二転、三転した。幾何学的オブジェを作る案がまずあり、次にグリーンで覆われたオブジェを作る案に変わって、この案は第3案となる。ステンレスのエキスパンドメタルで作った透明のボックスの中に、経路を配列し、経路の折り返し点に、植栽のヴォリュームを、空中に浮かせた形で配置するという案である。自分では大変気に入っていたが、国立公園内の規制にかかって実現せず、最終案（第4案）への変更を余儀なくされた。この第3案を地中に埋設して不可視なものとしたのが最終案である。どちらの案も気に入っていて、いまだに優劣つけがたい。透明か埋蔵かというプロブレマティックは、この後も、プロジェクトの度に顔を出すプロブレマティックであり、今後もまだまだこのプロブレマティックを引きずっていきそうである。

所在地：愛媛県越智郡
建築用途：展望台
共同設計者：押尾章治
構造：RC造
敷地面積：4,193.63m²
延床面積：473.83m²
竣工年：1994年3月

くま・けんご
1954年横浜生まれ。隈研吾建築都市設計事務所代表



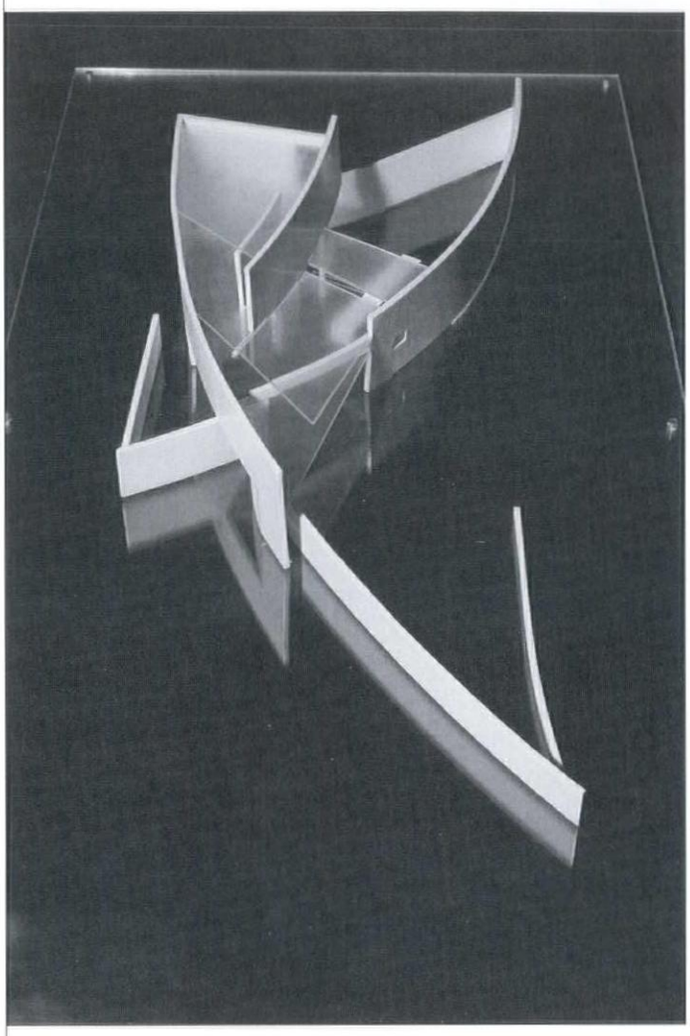
平面図



断面図

戸田潤也

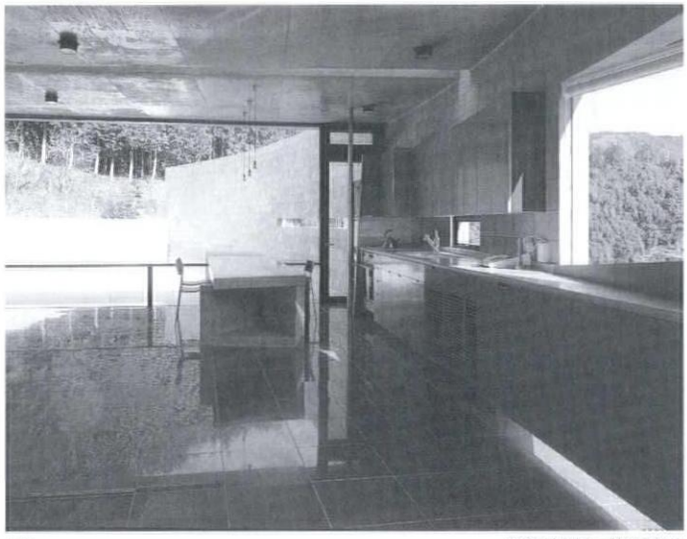
美山村の住宅







階段付近から玄関を望む



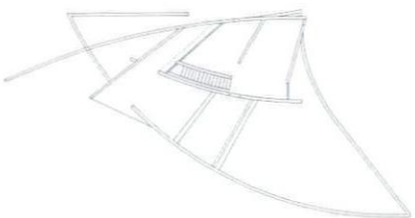
LDK

写真（右3点）＝植田三代治

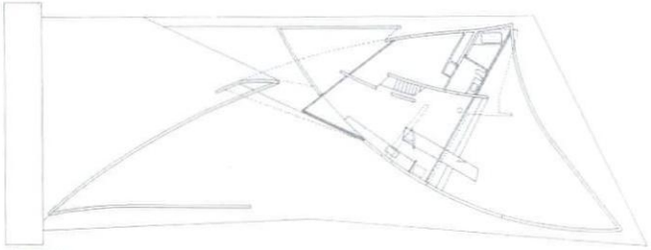
曲面の壁には、身体を包み込む働きがある。その壁の曲率を変化させて敷地を覆い、全体を場所化しようとした。同時にあちこちに生まれる壁相互の隙間から、周辺の美しい自然の風景を取り込むことがねらいだった。それらのことは十分に表現できたし、この空間に入ると、身体があちこちから自然の中へと拡がっていく感覚を今でももつことができる。しかし、平面的な構成とは違って、このような身体的反応を伴う形態を用いた構成を映し出すには、写真というメディアでは限界があったかもしれない。

所在地：和歌山県日高郡美山村
建築用途：住宅
構造：型枠コンクリートブロック造、RC造
敷地面積：567.20m²
延床面積：119.86m²
竣工年：1993年9月

とだ・じゅんや
1956年新潟県生まれ。戸田潤也建築設計工房主宰、京都精華大学・近畿大学・芸屋芸術情報専門学校講師



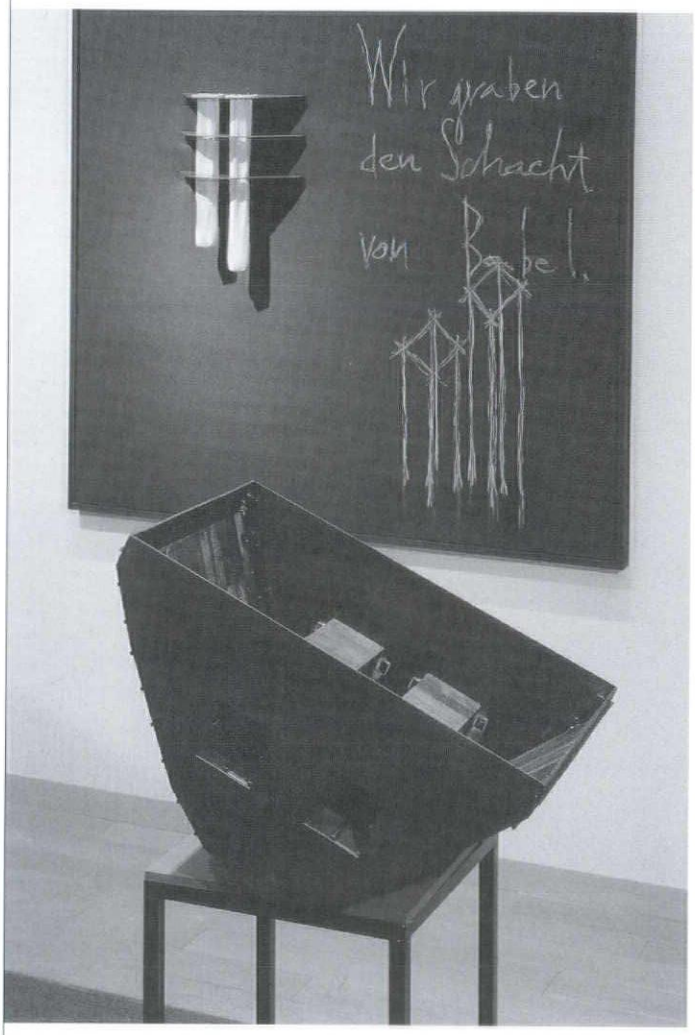
2階平面図

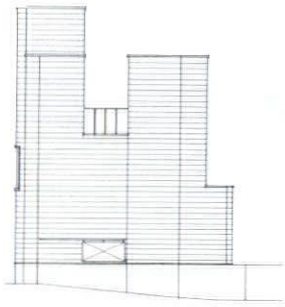


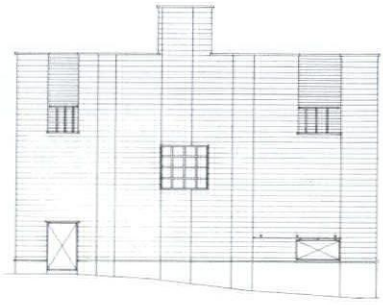
1階平面図

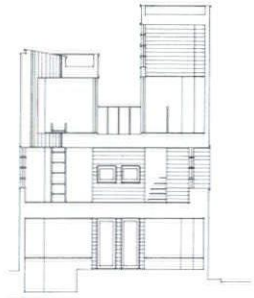
中尾 寛

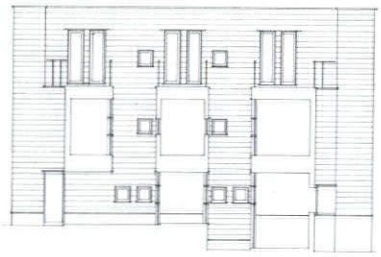
N邸

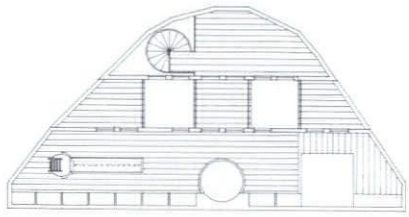


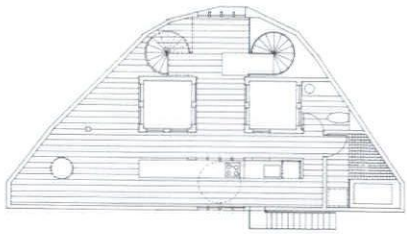

南立面図

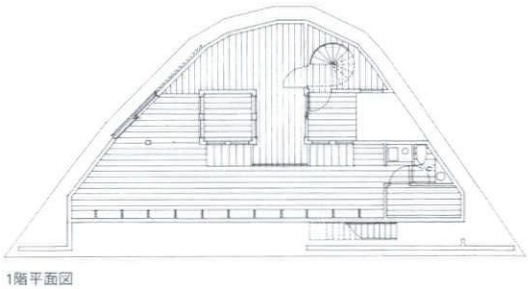

西立面図


断面図


断面図


3階平面図


2階平面図


1階平面図

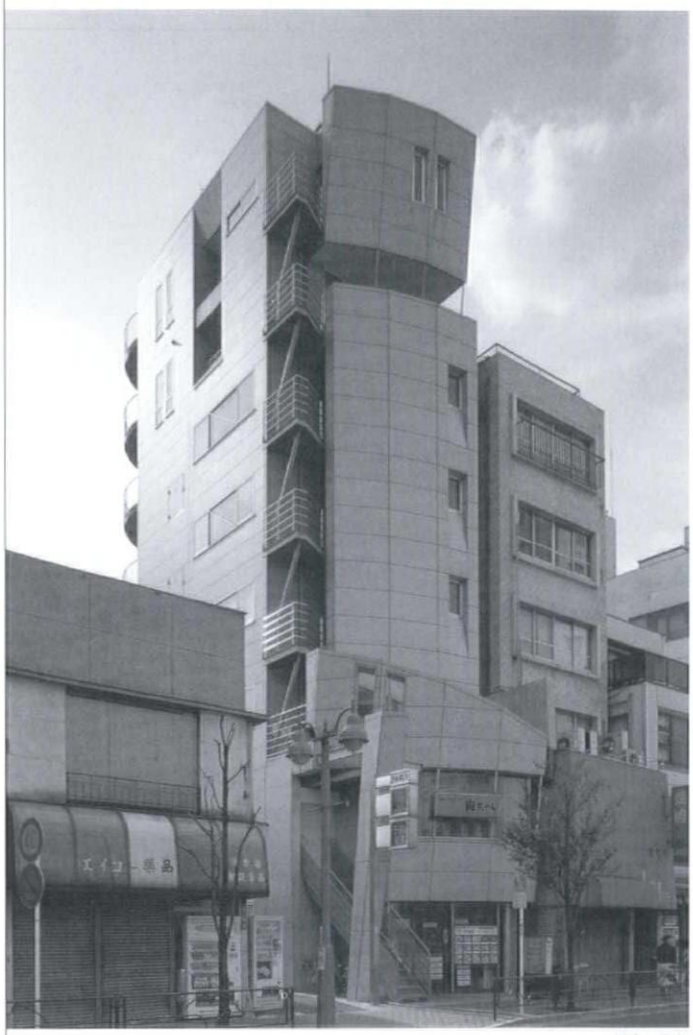
老夫婦のために仕事場と住居を提供する計画であるが、諸事情によりいまだ実現されていない。

所在地：神戸市
建築用途：住宅+事務所
共同設計者：芹沢浩子
構造：木造
敷地面積：115.29m²
延床面積：194.24m²

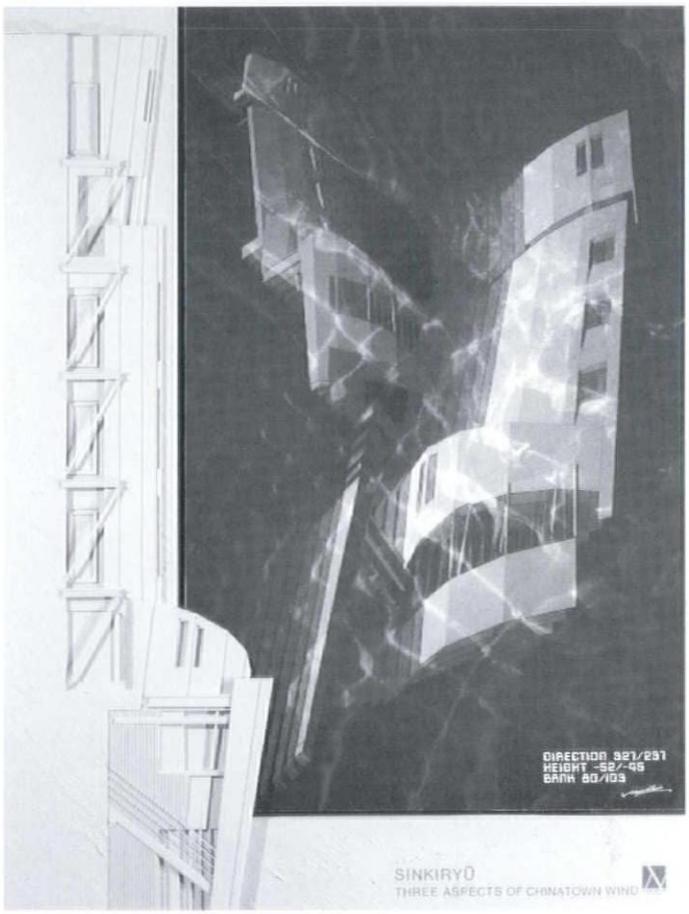
なかお・ひろし
1961年神戸市生まれ。筑波大学大学院芸術研究科中退

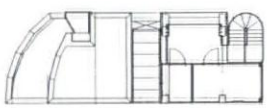
乗富久哉

新気流——チャイナタウンの風三態

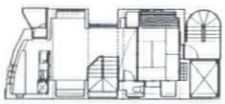


写真＝平剛

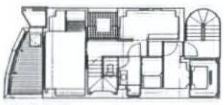




9階平面図



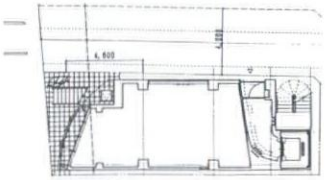
8階平面図



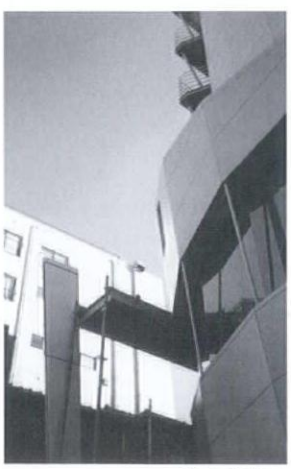
7階平面図



3階平面図



1階平面図



写真＝乗富久哉

新大久保に建つ雑居ビル。

応募当時、「三様の壁は与えられた軌跡を閉じることなく、かといって拡散するでもなく、ただ天空へと向かう固有の波動の内に身をゆだねてたゆたう。混沌の街の様相をかすかに記す靄気楼のように……」などと記している。振り返ると、私が設計しようとしているテーマそのものは今日までまったく変化がないことに気づく。「未知の世界に導いてくれる道、あるいは流れ」という空間イメージは、実は幼少の頃から抱き続けたものだ。これが肥大化した自我の産物ではなく多くの人々に共有可能な「なにか」であることを願って活動を続けている。

さて、実現したか、やりきれたのかという問題だが、その点については過去にさかのぼってあれこれ語るよりも、独立後8年を経て完成した新作をご覧いただきたい。

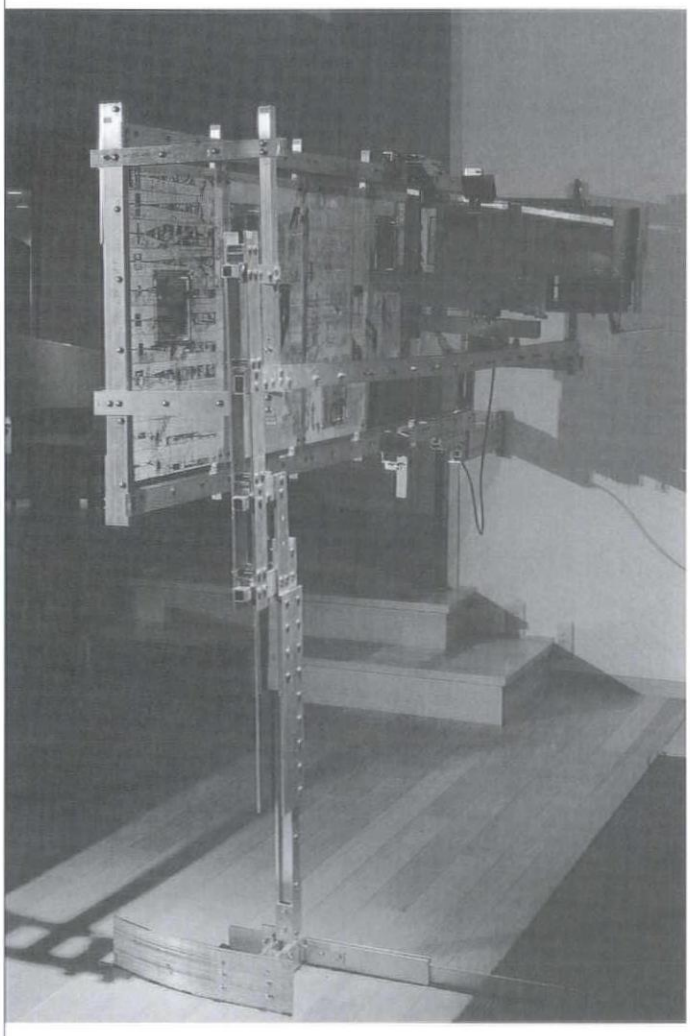
所在地：東京都新宿区
建築用途：店舗、事務所、住居
共同設計者：太陽建設
敷地面積：99.9m²
延床面積：498.9m²
竣工年：1992年

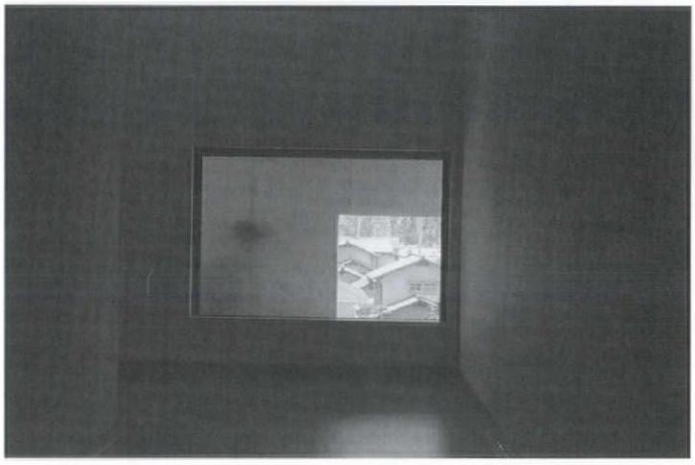
のりとみ・ひさや
1962年福岡市生まれ。(有)乗富久哉建築設計事務所主宰

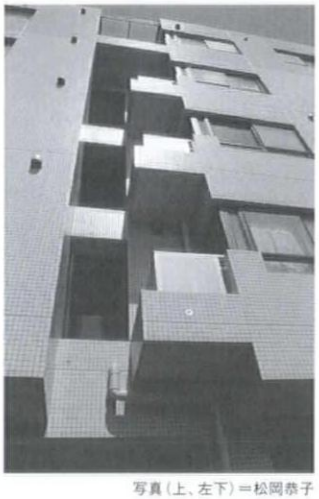
松岡恭子+王大君

Housing for Agoraphobia（N・ユーフォリア）

SD賞









写真（上、左下）＝松岡恭子

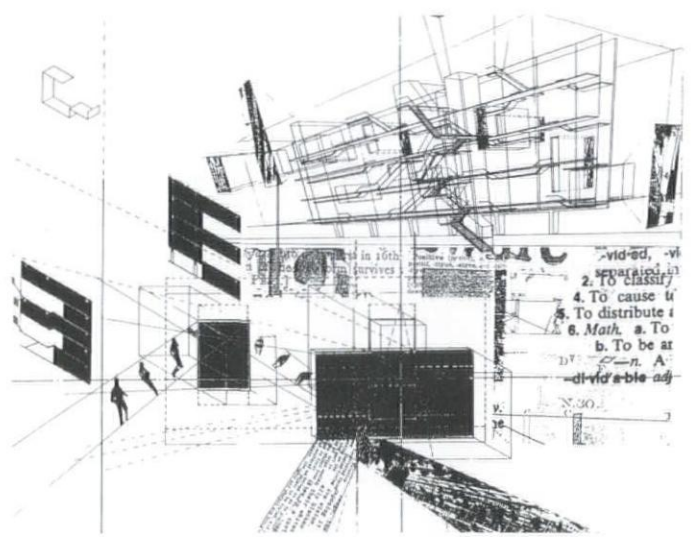
写真＝井上俊字

1992年に設計を開始した〈Housing for Agoraphobia〉は、いわゆるゲタ箱式の平面を手にしていた施主がその計画に不安を感じ、私達に基本設計を依頼した経緯を持つ。最初の提案を提出した時に、施主や設計施工を担当するゼネコンの関係者は大層困惑したようであった。19戸のユニットのそれぞれ異なる平面が立体的に組み合わさった複雑さに加え、共用部分とも専有部分ともとれる空間が箱体の中を交錯していたからである。しかし勇気ある施主は基本的に私達の提案を受け入れてくれたのであった。法的な問題や予算と向き合って多くの変更が余儀なくされたが、当初考えていた仕掛けは、かなり絞られたとはいえ、小さなものとなって点在している。それは、居住者間にナマの交流は無くとも、この建築の中を移動する際に自らの身体の一部がフレームのなかに断片化してシーンとして投影され、それをお互いに認知し合いながら生活するという、間接的な関わりをつくるものであった。

所在地：福岡市早良区
建築用途：集合住宅
構造：RC造
敷地面積：979.9m²
延床面積：2023.33m²
竣工年：1994年

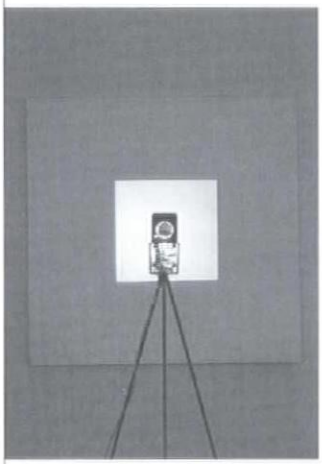
まつおか・きょうこ
1964年福岡市生まれ。マツオカ・ワン・アーキテクツ代表

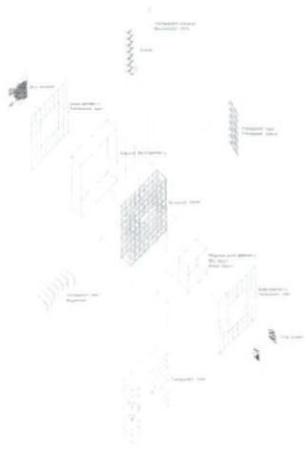
ワン・ターチュン
1961年台北市生まれ。マツオカ・ワン・アーキテクツ代表

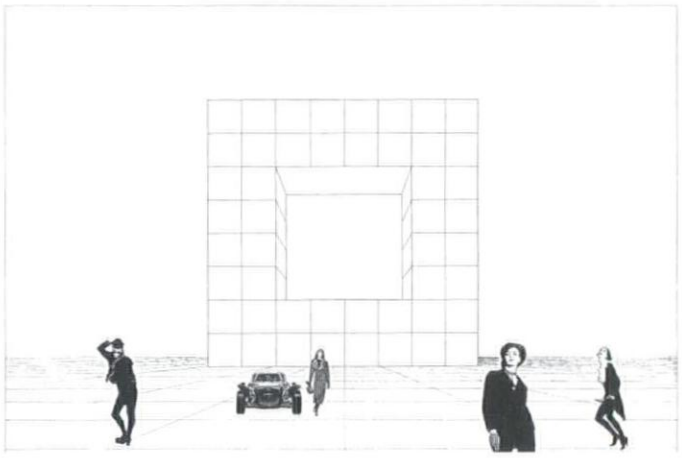


小川晋一

X3







これは、北側に国道2号、南側に山陽新幹線が走る2平行線に挟まれた敷地に建つS社本社屋ビルの計画である。空間は3.6mの3次元グリッドで構成されている。28.8m×28.8mのソリッドな正方形の中に、14.4m×14.4mのヴォイドな正方形が存在し、空と水が断面として切り取られる。ストラクチュアフレームの中にはトランスペアレントな垂直平面と水平平面、階段、EV、設備コア、映像壁、各機能が幾何学のオーダーの中で組み込まれている。形態は、人間の記憶により抽象化され、幾何学として記号化される。空間は、理念の形象化として人間の内部に現象する。この計画はクライアントの諸事情により完成に至らなかったが、国道と新幹線の両方向から見える地方都市のランドマークとして期待されていた。

所在地：山口県防府市
建築用途：事務所
共同設計者：塚田哲也、鳥羽知夫、三分一博志
構造：S造
敷地面積：10,000m²
延床面積：1,036.8m²

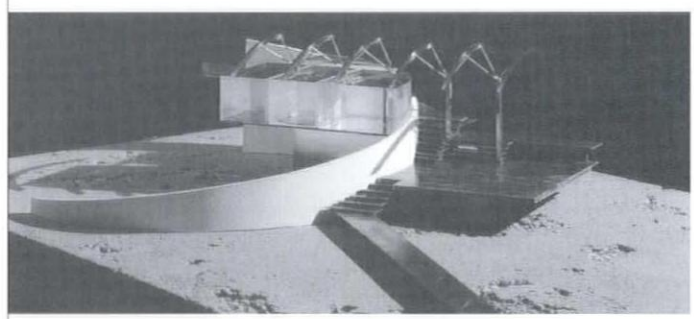
おがわ・しんいち
1955年山口県生まれ。応募当時小川晋一アトリエ主宰。現在小川晋一都市建築設計事務所主宰、近畿大学工学部助教授

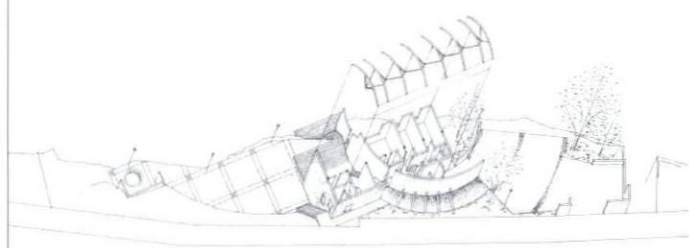
近藤裕之／システム シーツー

THE EAVES



写真＝大野繁





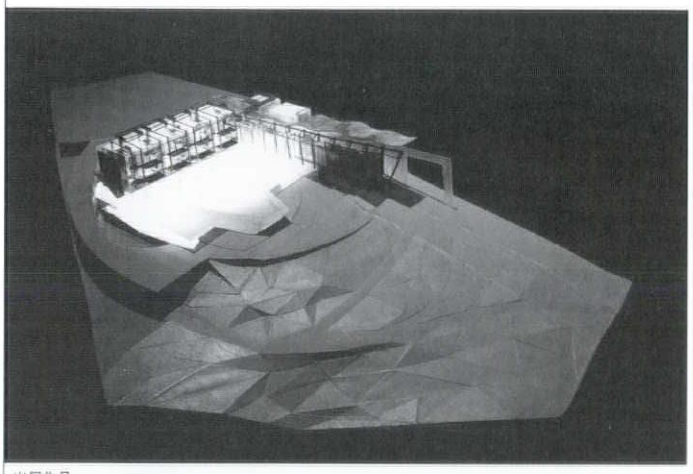
ゲストハウスの在り方として、変化に富んだ豊かな自然を存分に味わえる空間を指向してたどりついたのがeaves（庇）の概念でした。建物すなわちeavesと捉えることにより、内外の壁を越えた空間の広がりが実現され、安らぎと豊かさをもたらす。SDレビューの応募はこのコンセプトを確認し、プロジェクト・メンバーと共通のイメージを深める機会となった。実施設計進行中に入選案をプレゼンテーションすることとなったが、この時点で周辺の環境から建築本体やストラクチュアに焦点がしぼられてしまい、展覧会時に審査員の方々からこの点を指摘され、目が覚める思いであった。このSDレビューが設計から竣工迄同時に進行していったことで、度々計画の基本に立ち返り試行錯誤できたことは結果的に周辺を回遊する動線や点在する照明の在り方などを考え直すこととなり、当初のイメージを表現するための原動力となった。

所在地：群馬県桐生市
建築用途：ゲストハウス
共同設計者：石黒正範、住吉剛彰、山中新太郎、森山孝治（構造）、山中良子（インテリア）、村田稔、河合里佳（アートワーク）
構造：木造、S造
敷地面積：767.26m²
延床面積：180.2m²
竣工年：1993年

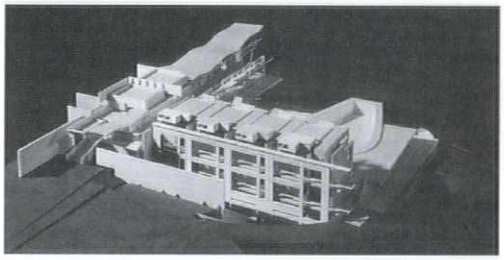
こんどう・ひろゆき
1958年東京都生まれ。システム シーツー主宰

ジョージ国広

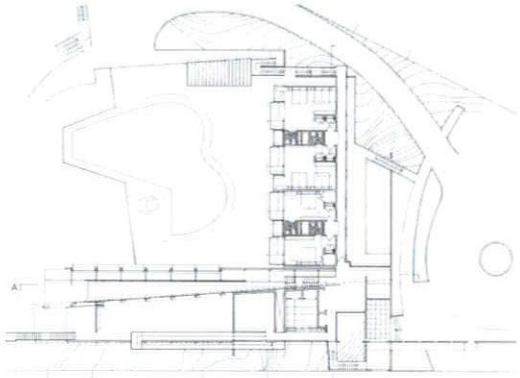
Koseisha Flame Tree Resort



出展作品



写真＝ジョージ国広



1階平面図

この計画は、当時施主であった某社会福祉法人の設立25周年記念プロジェクトとして進められた。それ故に、夢のある作品が期待された。

基本設計が完了し、地元の設計事務所と実施設計を進めているその頃に、島内ではある種の不動産借地権転売疑惑の問題が生じた。調べによると、施主の敷地もそれに関連しているかもしれないとの情報が我々のもとに入った。

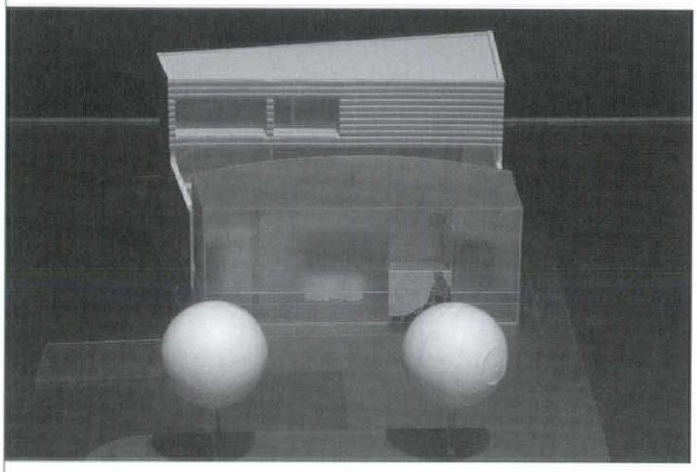
そしてこの計画は中止され、施主は島の反対側に既存する同スケールの建物を購入することとなった。このようなことは設計事務所を営む建築家にはよくあるあることであろうが、あの太平洋に浮かぶ楽園空間にこの作品を実現したかったと今も思うことことがある。

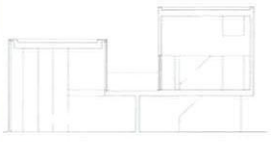
所在地：Capital Hill, Saipan
建築用途：社員保養施設
共同設計者：多田満
構造：RC造+S造
敷地面積：5310m²
延床面積：999.5m²

ジョージ・くにひろ
1951年東京都生まれ。応募当時、ジョージ国広アーキテクト・ニューヨーク主宰。現在、ジョージ国広アーキテクト・東京主宰

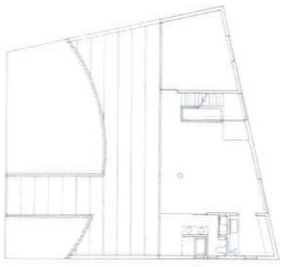
高橋晶子+高橋 寛／ワークステーション

Project IKD

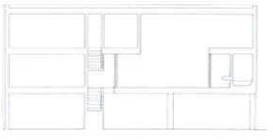




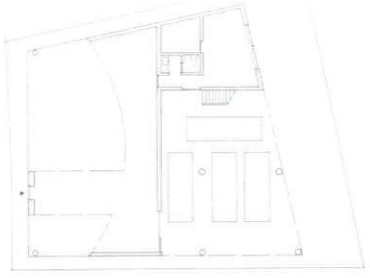
断面図



2階平面図



断面図



1階平面図

この計画では、店舗とその建築主の住宅の関係そのものを、デザインのテーマとしてとらえた。南側道路に対して、店舗、外部庭、住宅の順に帯状の配置をした。同時に、プライベート空間である外部庭の一部を、店舗の内部に貫入させて道路まで突き出し、単純なゾーニングによる分節を横断する場所を作っている。建築主の経済上の事情で、基本設計の段階で仕事は中断し、実現には至らなかった。

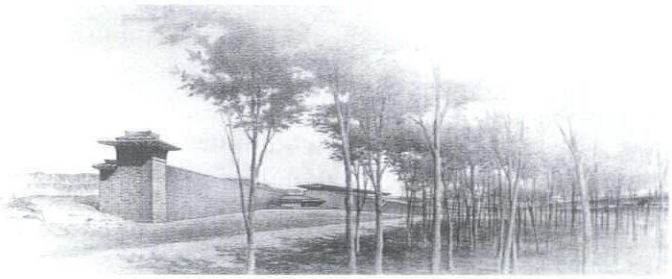
所在地：静岡県富士市
建築用途：店舗+住宅
共同設計者：安田博道
構造：RC+S造
敷地面積：366.1m²
延床面積：282.1m²

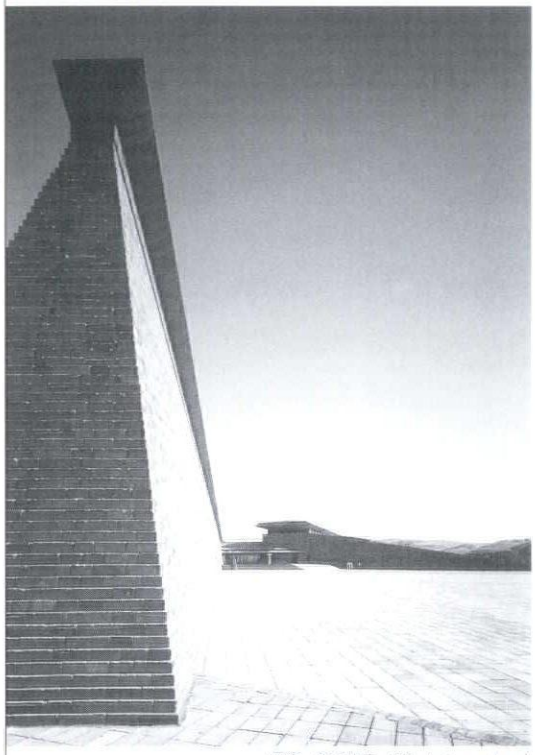
たかはし・あきこ
1958年静岡県生まれ。ワークステーション所属

たかはし・ひろし
1953年東京生まれ。ワークステーション所属

三栖邦博+浜田明彦／日建設計

敦煌石窟文化財保存研究・展示センター





写真＝高瀬良夫（GA photographers）

北京を離れること1,800km。タクラマカン砂漠の果て、はるかなる西域の地、敦煌。鳴砂山と三危山に囲まれた莫高窟は、4世紀から約1,700年間の歴史を刻む一大仏教遺跡である。この、時間と空間の一隅に展示センターは、あたかも景観の一部であるようにたたずんでいる。ポプラの並木をぬけると「闕」がこの莫高窟全体の入口空間を象徴するかの様にそびえる。闕及び外壁は敦煌の土で焼いた青磚（大型レンガ）を用い、ビシャン仕上とすることで風合を出し建築を敦煌の土の一部とした。また、苛酷な気象条件に対する二重屋根、水の気化潜熱を利用した展示ロビーの流水による補助冷房、オンドル式床暖房等、この地域で生まれ、はぐくまれた知恵を踏襲しながら、環境と地域に溶けこんだ展示センターとなった。SDレビューでは、極めて抽象的な展示としたが、実現したのは日本製の概念模型とは異なり、敦煌製の建築となって満足している。

所在地：中華人民共和国甘粛省敦煌市莫高窟
建築用途：博物館
構造：RC造
敷地面積：約28,000m²
延床面積：5,050.8m²
竣工年：1994年3月

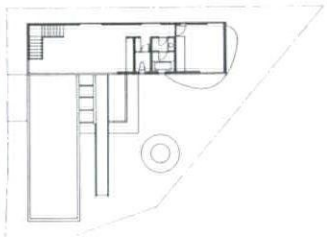
みす・くにひろ
1941年神奈川県生まれ。日建設計東京本社勤務

はまだ・あきひこ
1953年東京都生まれ。日建設計東京本社勤務

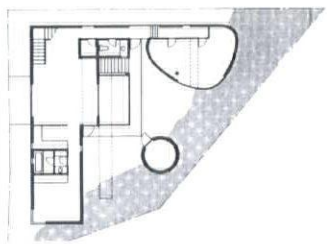
村井 正+山口 賢／Beam Studio

Na House

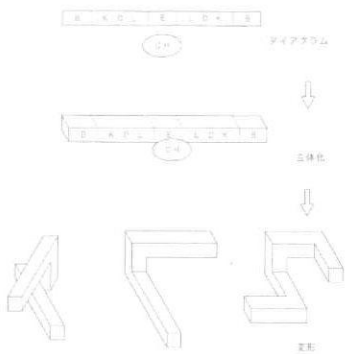




4階平面図



2階平面図



2世帯住宅のコミッションでした。敷地の形状、レベル差が面白く、いろいろなアイディアを検討しました。どれも面白いのですが決定的ではなく、最後に全てのスタディを捨てて選んだのが図のようなとてもシンプルな設計プロセスでした。「初めにエントランスを起点に左右に部屋がつながる2世帯住宅の有り様を図式化する、次にそのダイアグラムをそのまま立体化し、最後に敷地形状などに合わせフォームを変形する。」という単純なものでした。

出展では変形のバリエーションを黒いモデルで展示しましたが、最終形よりこのプロセスに可能性を見いだしていました。当時この立体をPassing Tubeなどと呼んでいました。線状で有りながら横につなげると面にもなり、前後をつなげると巡回空間にもなる点など面白く、複数のプロジェクトに採用しましたがいずれも実現しませんでした。後に同様なアイディアのいくつかの実現案を見るようになりましたが、数年後のSDレビューで、Na Houseの時手伝ってくれた山口くんが、ダイアグラムをあえて立体化せず、平面のままクルクルと「トイレットペーパー」のように丸めたオソロシイ案を出展してます。このアイディアを聞いたときには思わず吹き出してしまいましたが、案を見てみるとどうやらこれが一番遠くまで行ってるようです。

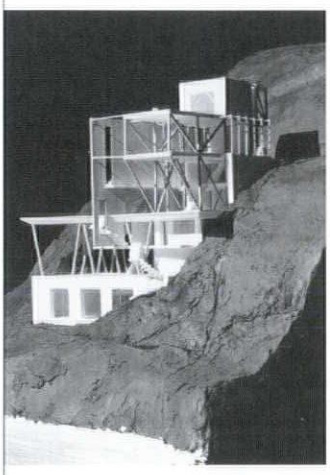
所在地：東京都八王子市緑町
建築用途：2世帯住宅
構造：RC造、S造

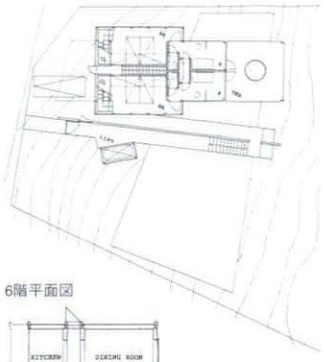
むらい・ただし
1953年札幌市生まれ。応募当時BEAM STUDIO所属。現在X. ARC ARCHITECTS所属

やまぐち・けん
1968年神奈川県生まれ。応募当時芝浦工業大学大学院。現在iq architects主宰

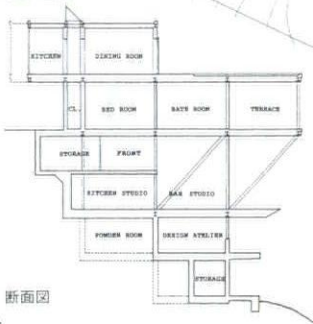
室伏次郎／アルテック建築研究所

岡村スタジオ計画

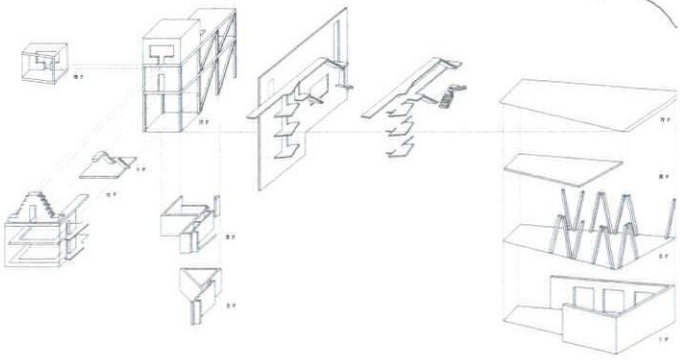




6階平面図



断面図



敷地は、相模湖上流の桂川の緩やかな湾曲部を受け止める斜度45度近い崖状の林地である。崖上の道から見降ろすと、木々の向こうに反射する川面の光が遥か前方に続き、川をはさむ両岸の峰のシルエットが林間にくっきりと望むことができるという、強い場所感覚に満ちたものであった。そこに、写真スタジオと彫刻アトリエおよび週末住宅を計画する。

川面と崖上の道に関係を与え、視覚的につなぐ1枚の浮いた床（川面を背景とした野外舞台）、斜面に対峙する1枚の壁（長く重層する動線を整理し、ふたつの領域を分け、かつ結びつける膜としての壁）、流れる水の風景と対峙される静止した1枚の鏡としての水面、崖内に埋め込まれた大地の延長としての場。想定されたこれらの「場」の存在が前述の強い場所性を顕在化するものであり、崖上から川面に至る空間のシークエンスは「時間」の経過の中で、その場所性を「身体的」に感じさせるものである。またそのすべては写真のための多様な場を提供するものとなる。

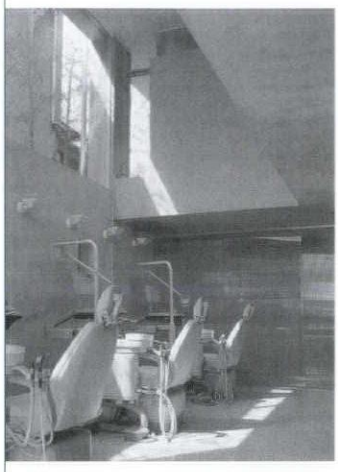
施主の事業計画の変更により着工はしていないが、再開されることを期待している。（宮晶子）

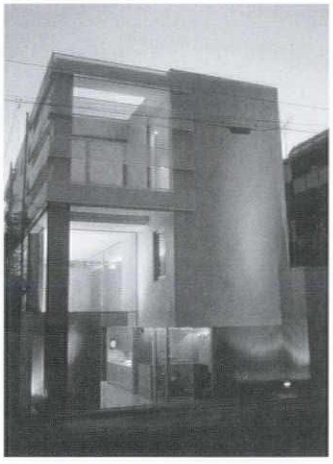
所在地：山梨県北都留郡上野原町
建築用途：写真スタジオ+彫刻アトリエ+週末住宅
共同設計者：福田則子、宮晶子
構造：RC造、S造
敷地面積：499m²
延床面積：328.1m²

むろふし・じろう
1940年東京都生まれ。スタジオアルテック主宰、神奈川大学教授

吉松秀樹／アーキプロ

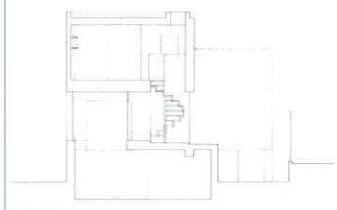
小野デンタルオフィス



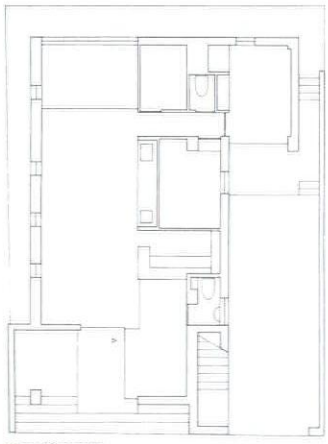




写真（3点とも）＝吉松秀樹



断面図



地下1階平面図

設計者の意識の上で一体となった建築モデルではなく、知覚的に分散している（バラバラである）建築モデルをつくりだせないものかと考えていた。それは建築モデルでありながら、形態モデルとならない建築であり、むしろ設計のシステムに近いものである。

実作では個性をより稀薄にするために3層のヴォリュームの中にばらまかれたパック立体にテクスチュアや色のレイヤーが重ねられたが、これはパック立体の視認性を高める役割を担っているとともに、建築の全体像をより稀薄にしていくことを目的としたものである。結果として、医院スペースにおいても住居スペースにおいても屋外のような雰囲気をもつ空間ができあがった。空中に浮かぶパック立体をゆるやかに建築へとまとめるはずであった外周部のスリット状のスクリーンは、パンチングメタルの帯に変わり、しかも部分的にしか実現できなかったが、考えていた希薄さを少しは達成できたように思う。

所在地：東京都世田谷区賀
建築用途：歯科医院+住宅
共同設計者：村上和子／アーキプロ、松本年史・松本珠美／松本構造設計室（構造）、南井克夫（設備）
構造：RC造
敷地面積：157.27m²
延床面積：156.65m²
竣工年：1993年4月

よしまつ・ひでき
1958年神戸市生まれ。アーキプロ主宰

第12回　1993年



デザイン＝工藤強勝

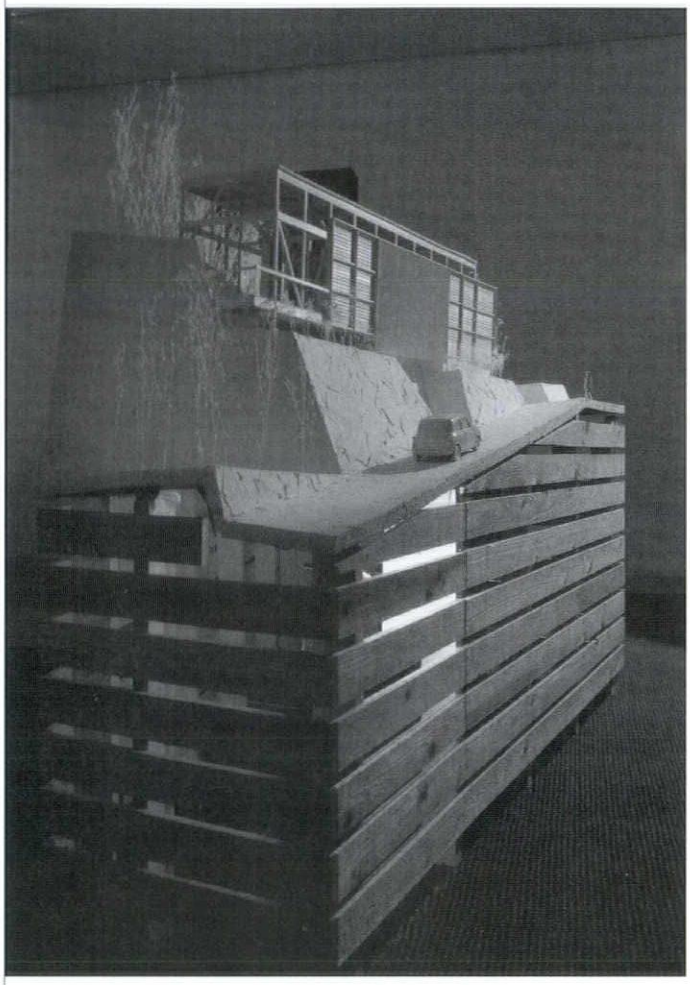
東京展：9月22日～10月3日
ヒルサイドテラスF棟ヒルサイドフォーラム
大阪展：10月12日～10月22日
会場：都住創センター
審査員：穂積信夫、伊東豊雄、栗生 明、隈 研吾
応募総数：237作品
入選数：15作品
受賞者：
クライン ダイサムアーキテクツ（鹿島賞）
和田克明（朝倉賞）
片木 篤+有馬立郎／計画意匠研究所（SD賞）
吉本 剛／吉本剛建築研究室（SD賞）

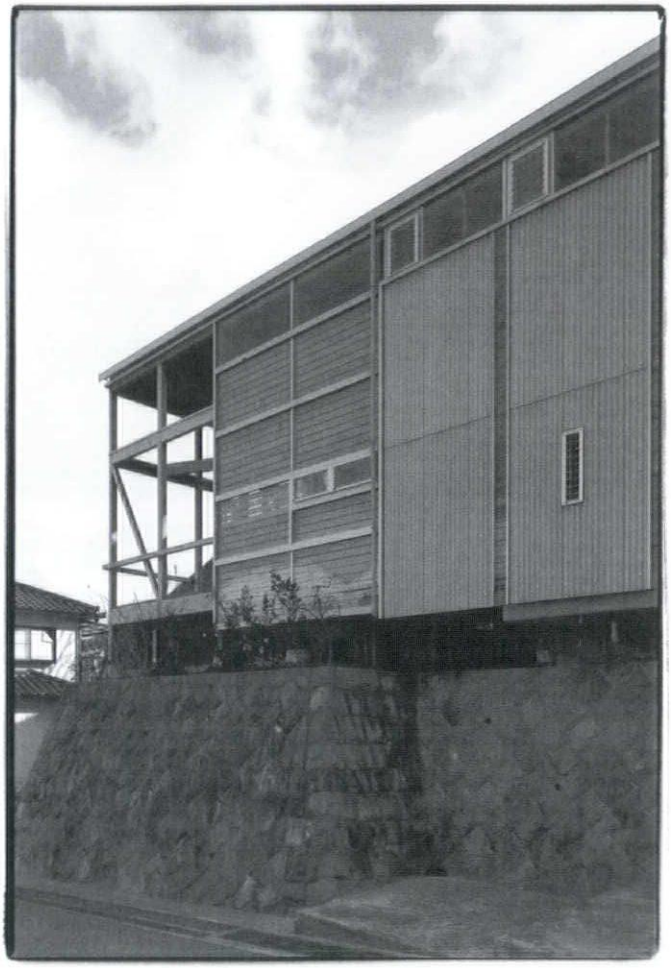
片木 篤+有馬立郎／計画意匠研究所　GLASS FLATS II
河西立雄　厚い壁の家
北村修一／キタムラ・アソシエイツ　A町N派出所
クライン ダイサム アーキテクツ　ビデオ銭湯
齊藤正 轂工房　こもりく［M邸］
白川直行アトリエ　Stadium House
杉本洋文／計画・環境建築　秋川ファーマーズ・センター
照井信三／照井信三建築研究所　八幡の家
戸田潤也　奥須磨の住宅
中村 勉　浪合フォーラム
宮元健次+東京コミュニケーションアート専門学校スペースデザインコース　Primitive
森 徹+若松久男+植野 糾　Museum in Metro
安田幸一+中屋敷公一／日建設計　警視庁丸の内警察署桜田門警備派出所
吉本 剛／吉本剛建築研究室　O邸
和田克明　農村の家

吉本 剛／吉本 剛建築研究室

O邸（Barn-3）

SD賞





写真＝宮本隆司

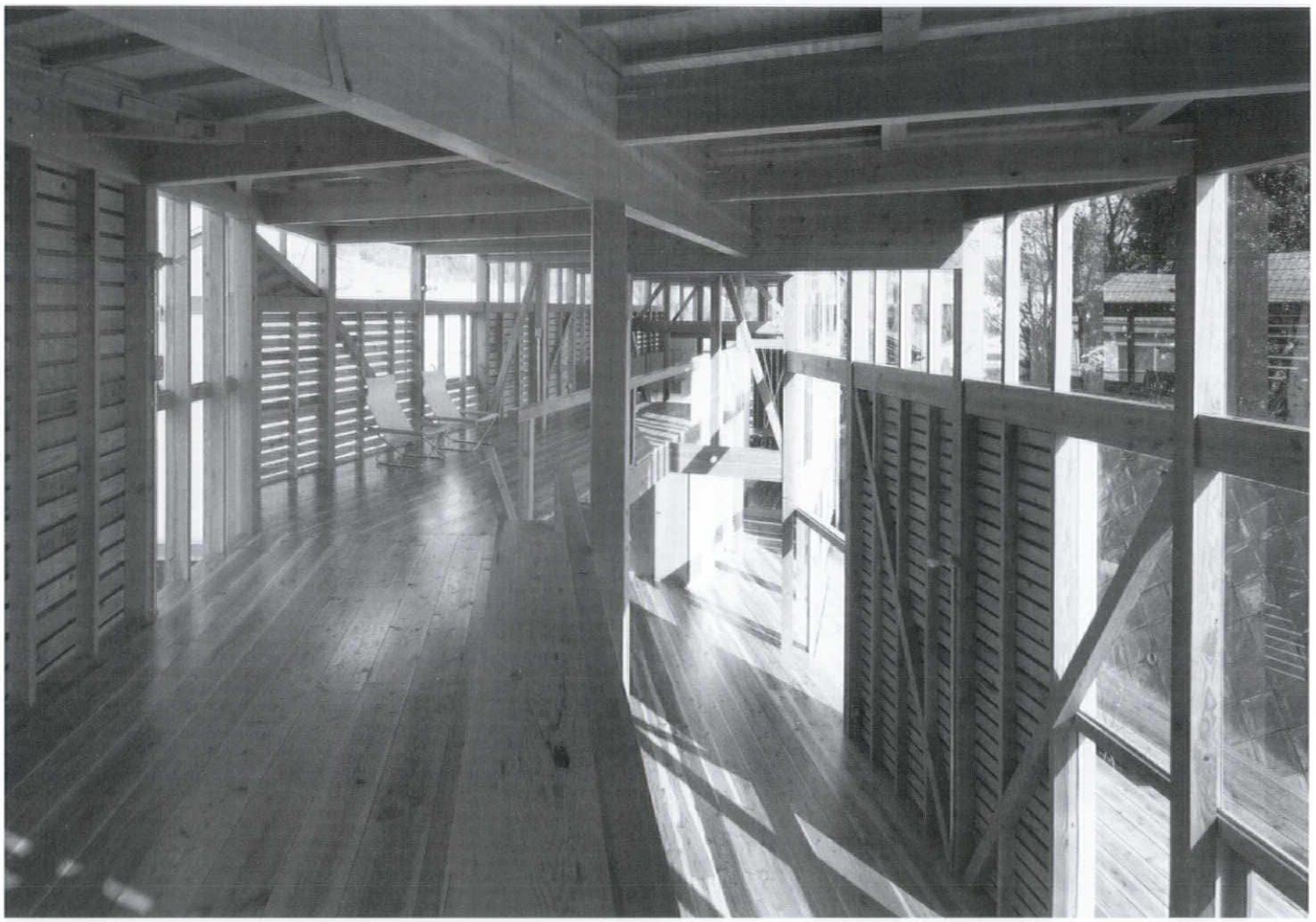
SDレビュー応募の時から4年が経ちます。入選の連絡を受けた頃は実施設計も終盤で、レビュー展の出展物は実施設計の確認作業を目的として製作しました。入選、入賞の通知や当時の審査員の方々の激励の言葉はクライアントと私を勇気づけるのに充分な出来事でした。これらの経過の後、建築物はほぼ出展物通りに完成しました。この建物に関わるすべての体験の中で最も緊張した瞬間は、「初めて敷地を見た時のあの何とも説明のしようのない感覚」と「現場でクライアントに竣工が間近であることを知らせる瞬間」のふたつの場面でした。特に後者は、通常の工事完了を感じさせない内部環境を目の前にしてのクライアントへの現場説明でした。緊張した状態で説明を加えようとする私を察し、こちらが話し出す前に「これでできあがりですね」と笑顔で話された時は脱帽する思いがしました。もしプランに使用状態を示す平面的な記号を与えなければ、それぞれのスペースは床面の展開にすぎないのかもしれません。ただ、竣工後4年になるこの建築の内部空間は、生活者の手によりいきいきと機能しています。

所在地：神戸市須磨区
建築用途：専用住宅+アトリエ
構造：木造
敷地面積：336.93m²
延床面積：138.24m²
竣工年：1993年

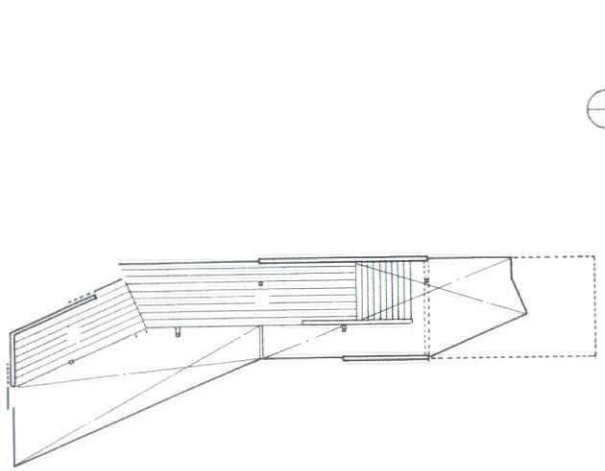
よしもと・つよし
1961年徳島県生まれ。吉本剛建築研究室主宰



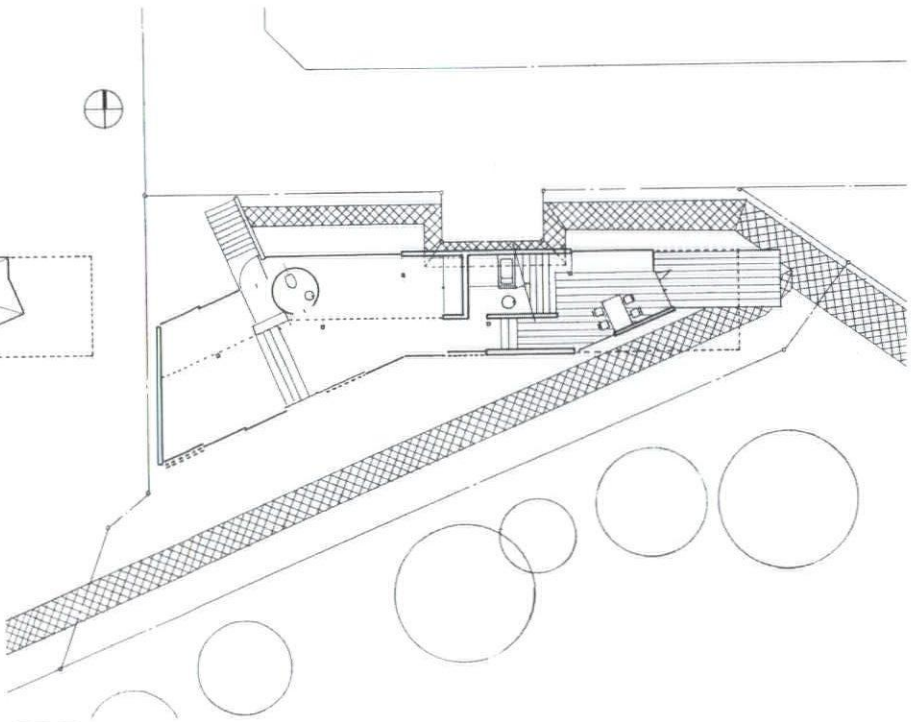
写真＝宮本隆司



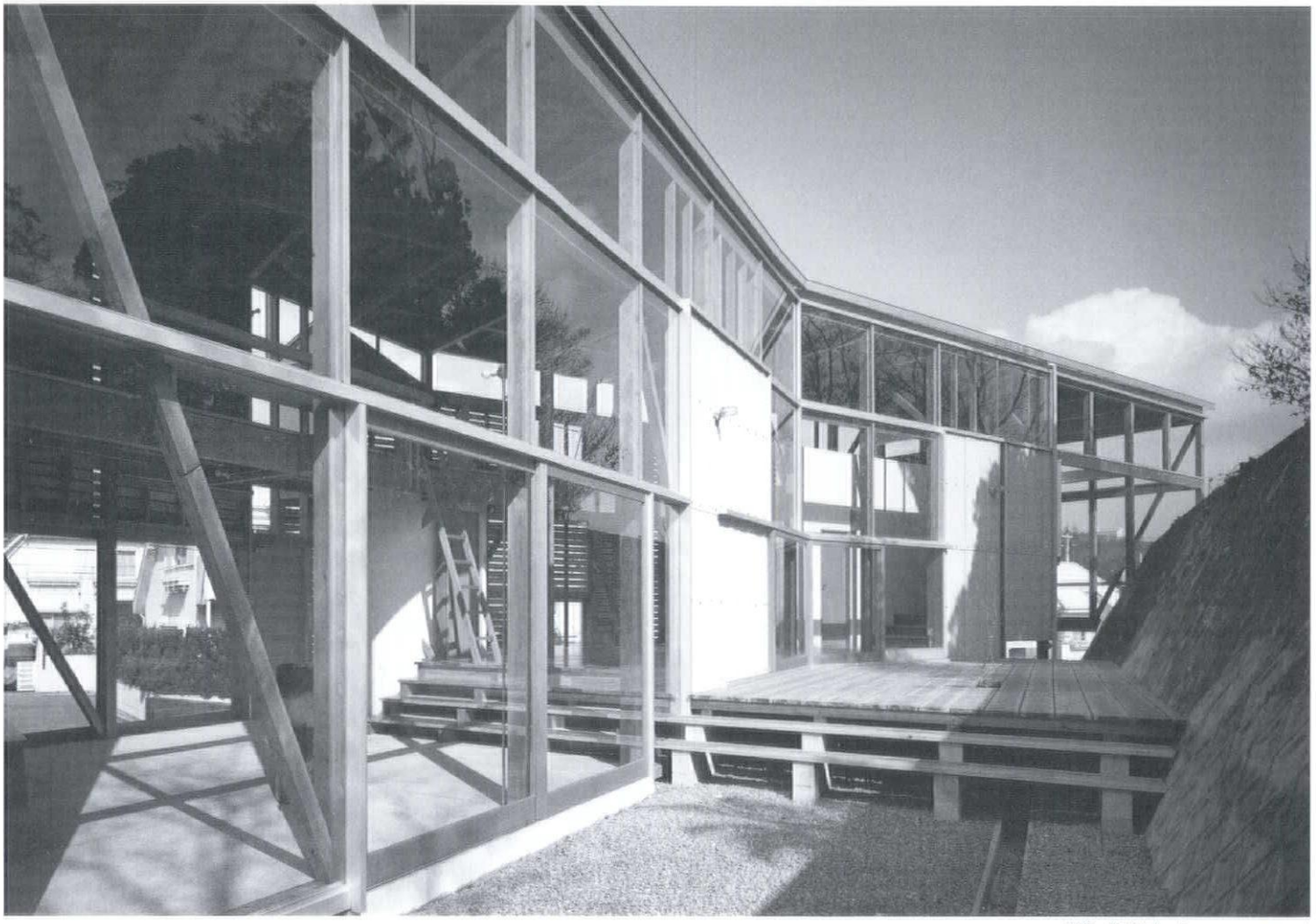
写真＝高瀬良夫（GA photographers）



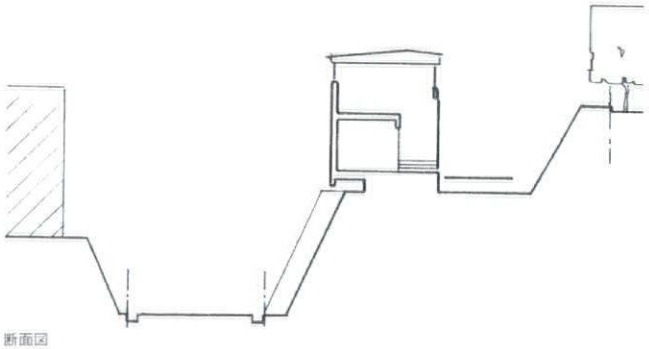
2階平面図



1階平面図



写真＝高瀬良夫（GA photographers）

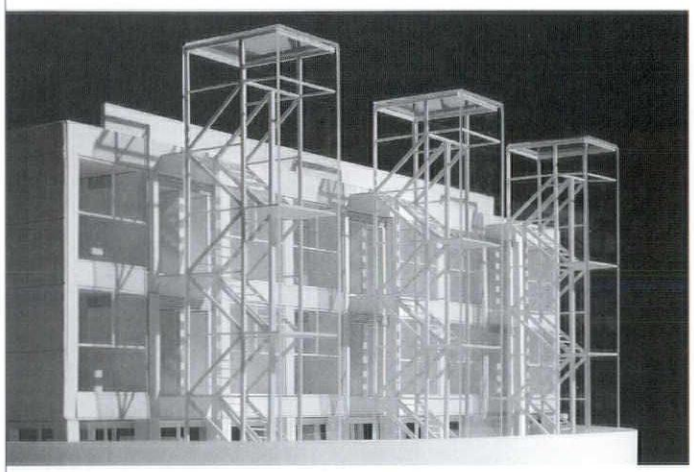


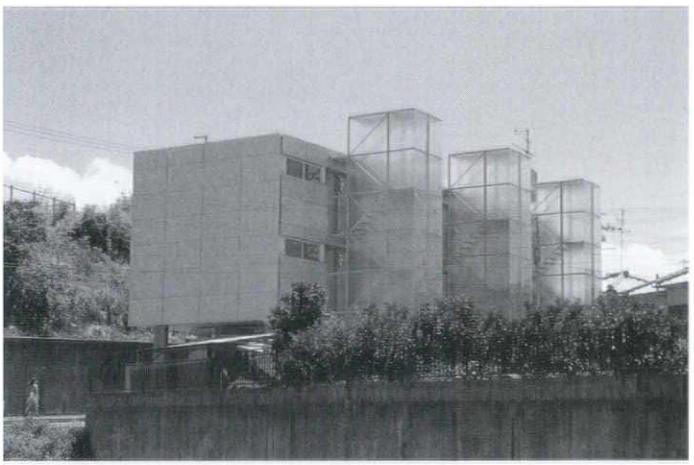
断面図

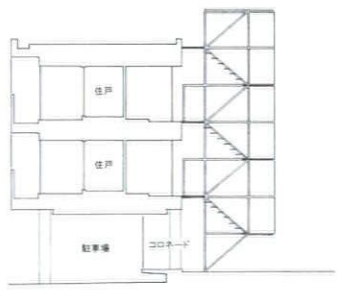
片木篤+有馬立郎／計画意匠研究所

GLASS FLATS II（GLASS FLATS）

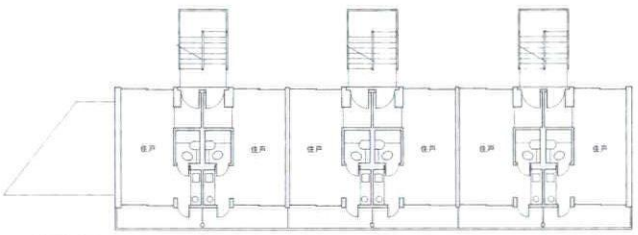
SD賞



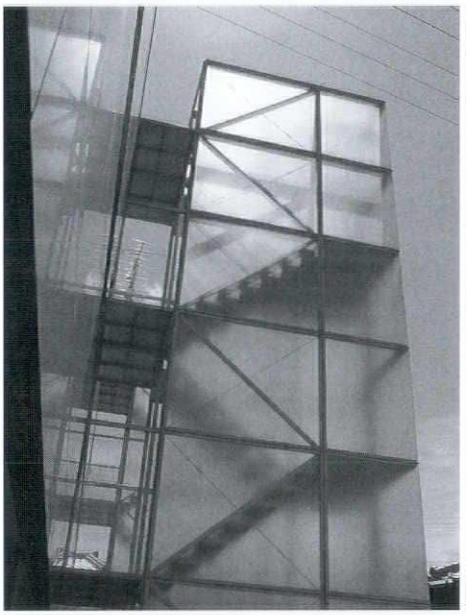


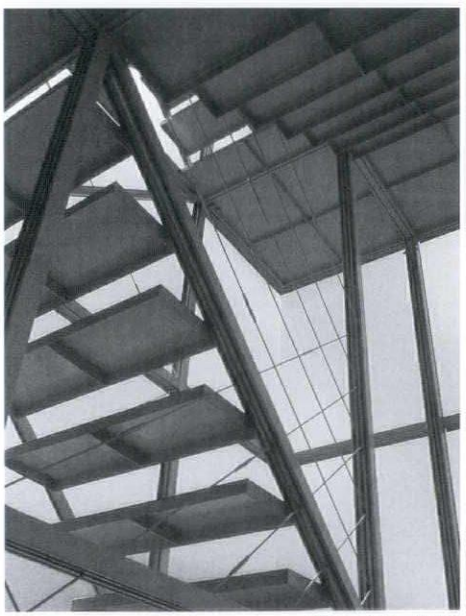


断面図



2、3階平面図





写真（右3点）＝片木篤

都市化が進む郊外に建つ鉄骨造3階建の単身者用共同住宅。1階の公共空間、2、3階の居住空間という公私の分節を、ピロティに支えられた直方体のマスとして表現し、両者を透明な塔状階段で連結している。階段は、前面道路の対面に聳える電線鉄塔を参照した軽快な構造体として構想し、それは近隣対応で高さを減ぜられた以外は、ほぼ当初のイメージ通りに実現した。各住戸では、階段幅に入口や水廻りを収めて、眺望や通風が表から裏に抜ける居室を作り出そうとした。が、予算の都合で表側のルーバーをパンチング・メタルに変更し、またプライヴァシー確保のために裏側に腰壁を付加した結果、当初考えていた「実の透明性」が弱められることになった。また外壁のアルミ・パネルを自立したスキンとして浮かせて取付けたが、その単純なディテールが描くシャープな輪郭線は階段の「即物性」と感応し合って、建物を周囲のフラットスケープから際立たせている。

所在地：大阪府泉南郡熊取町
建築用途：共同住宅
構造：S造
敷地面積：328.788m²
延床面積：388.688m²
竣工年：1995年5月

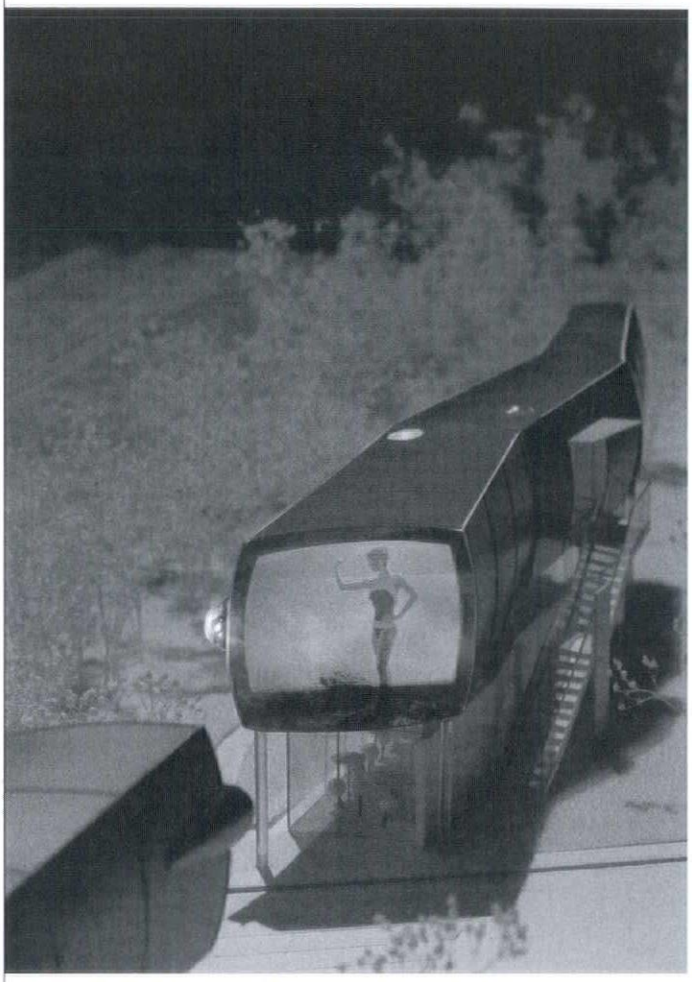
かたぎ・あつし
1954年大阪府生まれ。応募当時名古屋大学工学部建築学科講師。現在名古屋大学工学研究科建築学専攻教授

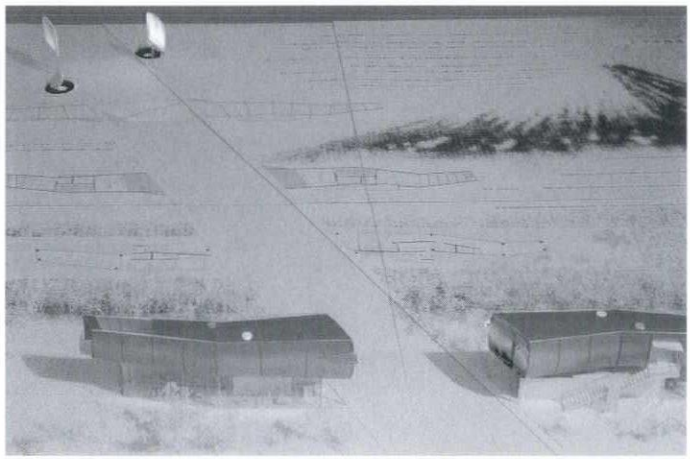
ありま・たつお
1953年鹿児島県生まれ。（株）計画意匠研究所所長

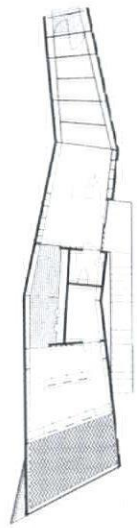
クライン ダイサム アーキテクツ

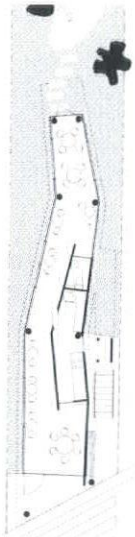
ビデオ銭湯

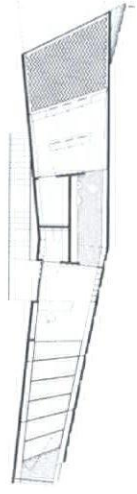
鹿島賞













若い建築家の完成した作品ではなく自分たちの持っている概念やアイディアを発表できるチャンスがフェアに与えられることにチャレンジしたい心をくすぐられ応募した。私たちの提案したビデオ銭湯もいろいろな意味でチャレンジのある作品になるように考えた。

一階に公園と一体化したカフェとアスレチックジムを持ちその上に男湯と女湯が浮かぶ構成。本来ひとつづきのボリュームで考えていたものが敷地に道路が横断するためふたつに分断されたが分節面に映像が互いに映し出されることでボリュームとしての連続性はイメージの中で結び付けられる。映像は銭湯の中からも見ることができ富士山壁画の現代版。

このプロジェクトは敷地にクライアントの倉庫と事務所がありこれらを移転するための土地を探していたのだがなかなか見つからないことと経済的な状況が重なって長い期間保留となり残念ながら最終的にキャンセルということになってしまった。

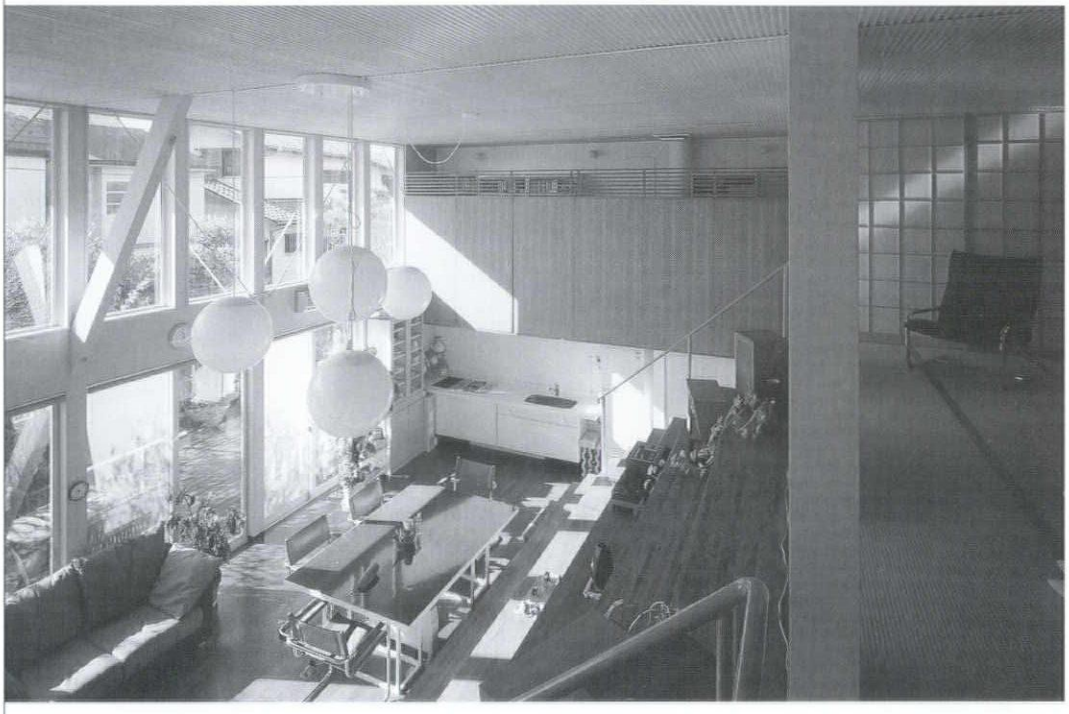
設計者：アストリッド・クライン、
マーク・ダイサム
所在地：神奈川県横浜市大倉山
建築用途：銭湯+アスレチックジム+カフェ
構造：S造
敷地面積：286.85m²
延床面積：211.16m²

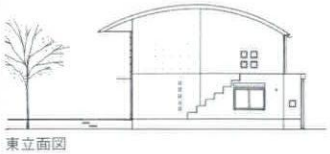
Astrid Klein
1962年イタリア生まれ。クライン ダイサム アーキテクツ共同主宰

Mark Dytham
1964年イギリス生まれ。クライン ダイサム アーキテクツ共同主宰

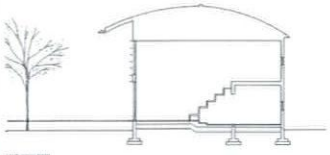
白川直行アトリエ

STADIUM HOUSE





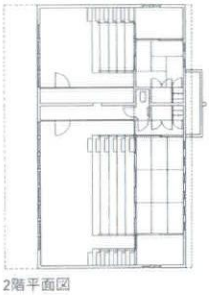
東立面図



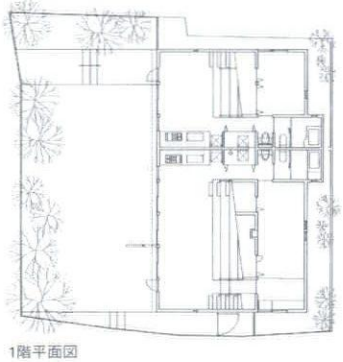
断面図



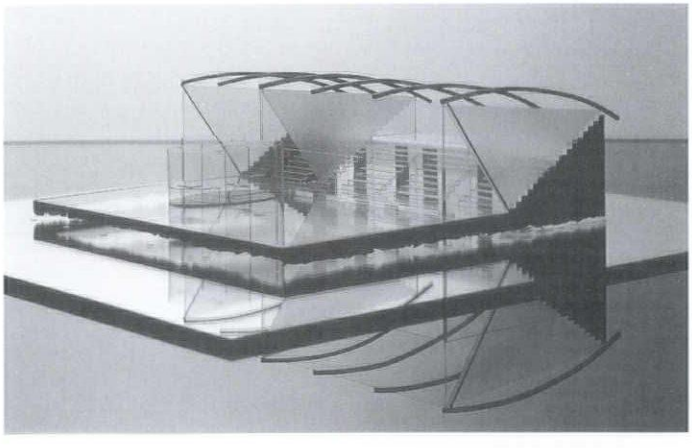
写真（左2点）＝堀内広治



2階平面図



1階平面図



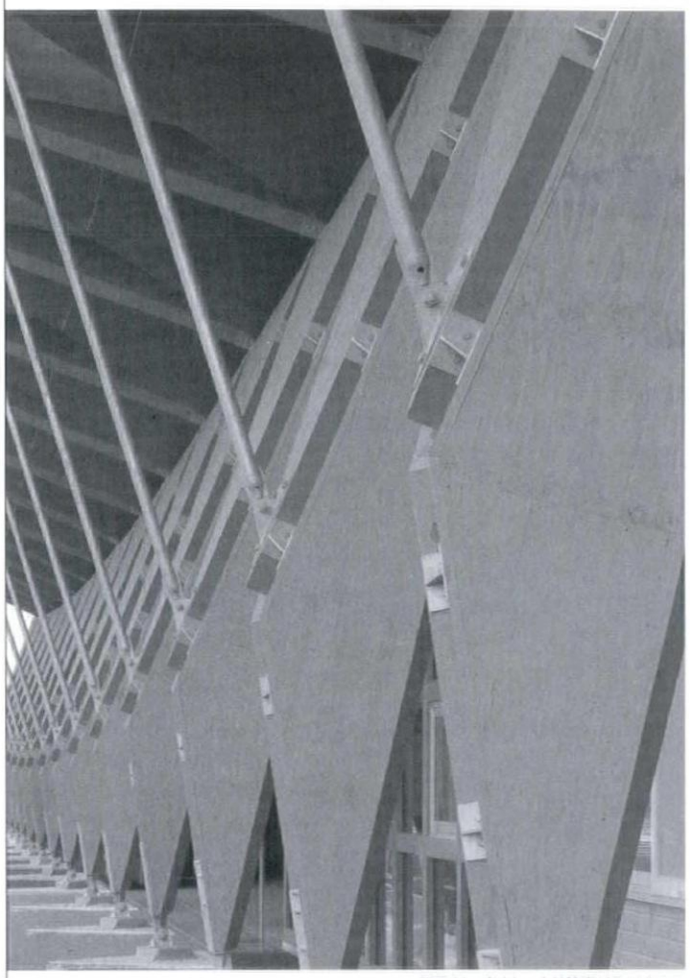
設計に当たり示された条件は「簡素で豊かな家」「一日の時の移り変わりがわかる家」「遠い空が見える家」「開放的な多目的空間に人々が集う家」という4つの条件だった。Jリーグのスタートとほぼ同時に設計がスタートしたせいだろうか、ふと「stadium」というモチーフがそれらの統合を可能にしないかと考えた。言いかえれば「stadium」という非住居形式が、住まいを誘発するのではないかということに興味が湧いた時期の仕事であった。

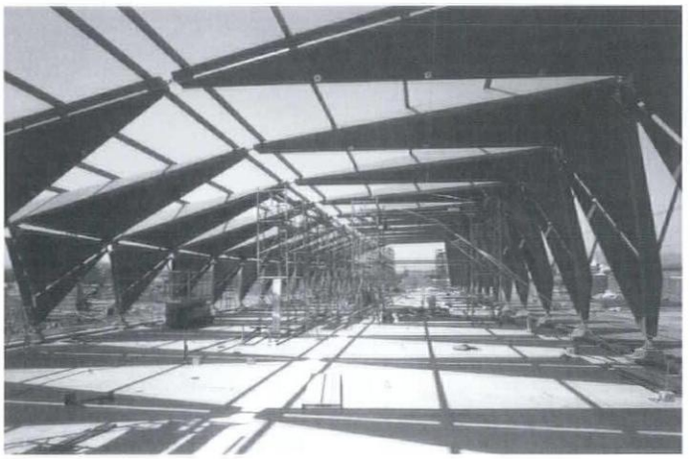
所在地：神奈川県鎌倉市
建築用途：二世帯住宅
共同設計者：福田豊／ティー・アール・エー（構造）
構造：木造
敷地面積：278.83m²
延床面積：164.03m²
竣工年：1994年

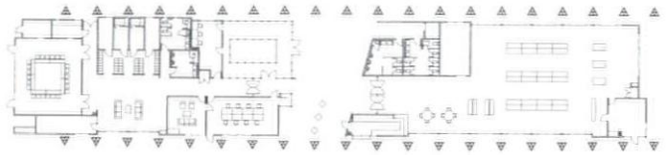
しらかわ・なおゆき
1951年福岡県生まれ。白川直行アトリエ主宰

杉本洋文／計画・環境建築

秋川ファーマーズ・センター







平面図



立面図

写真（左、右上）＝小林浩志／スパイラル

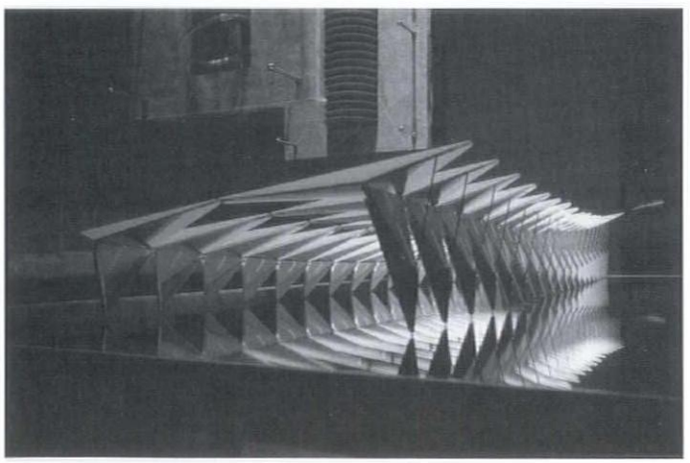
秋川ファーマーズ・センターは、都市近郊農業とグリーンツーリズムの共存を図り、農産物の直売と農業体験を通じて、都市住民と農業者との出会いの場を創出するための交流施設である。日本の田園には、風景に調和する新たな農業建築の姿が求められている。

この建築は、木製大型パネルシステムを使った新しい木造建築で、構造システムは、折板を応用した複合板構造である。この建築のフォルムとシステムは、テクスチャーとスケールが与えられるにしたがって存在感が強くなり、当初の空間イメージがからかけ離れてしまった。

そこで、パネルの独立性と連続性を考慮しながら、分節ユニットが流動性のある大屋根空間をつくるように、パネル相互の間隔や接合金物を露出させるなど、部材間の関係性とシステム全体の流れを空間に反映させるようにした。これによって、田園を駆け抜ける風に呼応した、躍動感のある空間が実現できたと考えている。

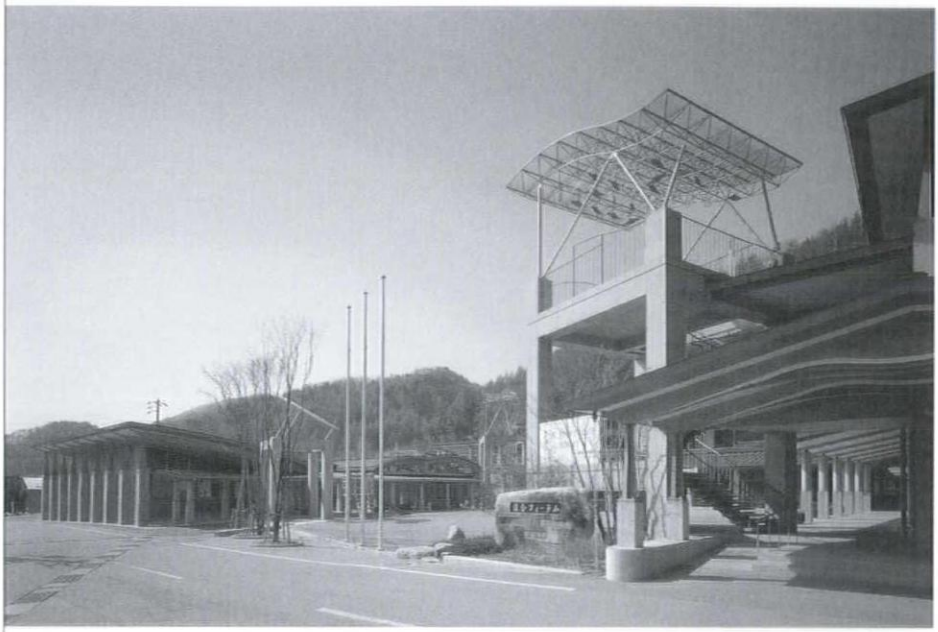
所在地：東京都秋留野市
建築用途：店舗、事務所
共同設計者：秋岡龍一朗／電通（総括）、建築：花島伸幸・富永哲史／計画・環境建築、大串純／フリー、渡辺邦夫・岡村仁／構造設計集団（構造）、浜島輝明／開発設備計画（設備）、菅原龍二／ME設計（電気）、佐藤博久／BAKU建築研究室（設計協力・サインデザイン）
構造：複合板構造+軸組木構造
敷地面積：5,841m²
延床面積：827m²
竣工年：1993年7月

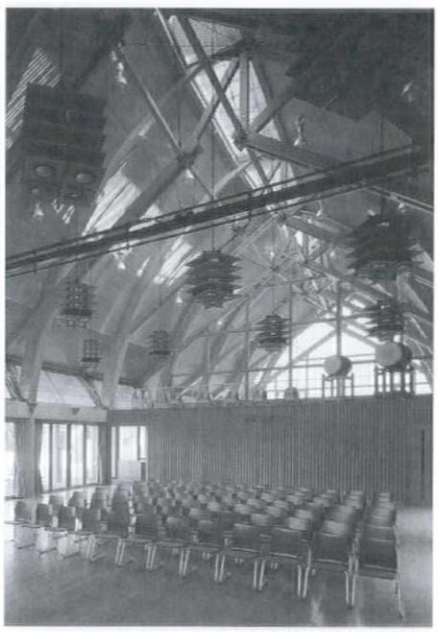
すぎもと・ひろふみ
1952年神奈川県生まれ。必暮当時計画・環境建築代表取締役東京事務所長。現在計画・環境建築代表取締役社長



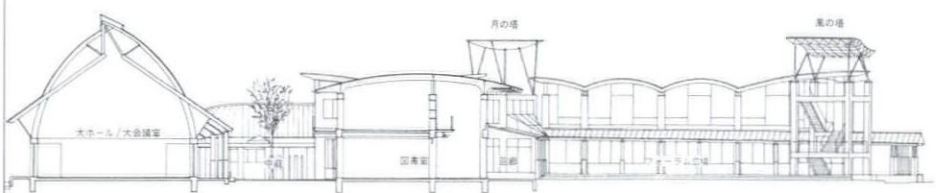
中村 勉

浪合フォーラム

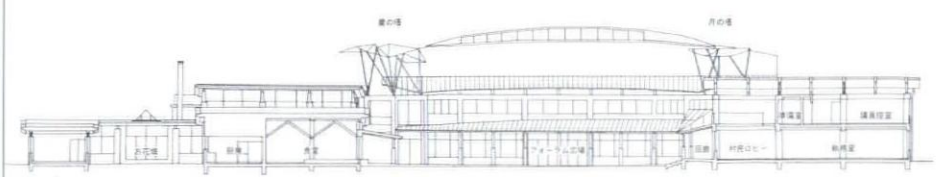




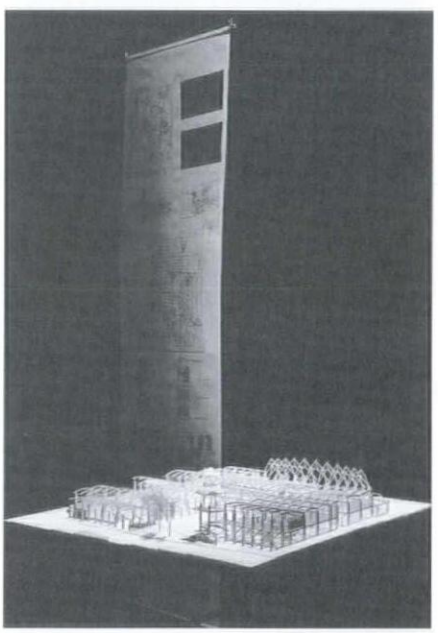
写真（左、右上）＝堀内広治



断面図



断面図

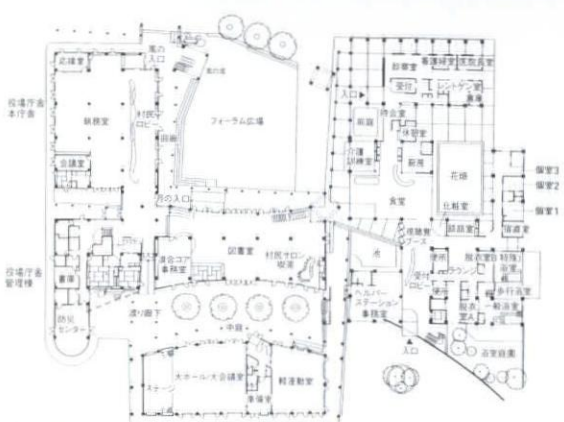


「浪合フォーラム」は88年の新しい村づくりに始まり9年後の97年3月に完成した。SDレビュー応募は第1、2期の実施設計完了時であり、村づくりの対話から生まれた個人を尊重するプログラムと、将来へのフレキシビリティに対応する、空間の平行配置と中庭による空間構造が提案の大きなテーマだった。

その後の第3期の診療・福祉部門のうち福祉については、さらに議論を続けて大きく変更された。第2期の工事中から始まった村の基本計画「新しい村づくりその2」を策定する中で、福祉部会はさらに視察を行い、この小さな村でB型のデイサービスができるだろうかという不安を乗り越えていった。続く運営検討委員会では親しみやすい施設のあり方が検討された。財政状況、福祉サービスの必要性、新村長の意向などから規模を少し縮小し、居住施設を将来に回して浴室を充実した案となった。平行な空間構造と中庭のシステムはその後の変更に充分に対応したと思われる。

所在地：長野県下伊那郡浪合村
建築用途：役場庁舎、公民館、健康福祉施設、診療所
構造：RC造、一部木造
敷地面積：9,796.67m²
延床面積：3,988.25m²
竣工年：1997年4月

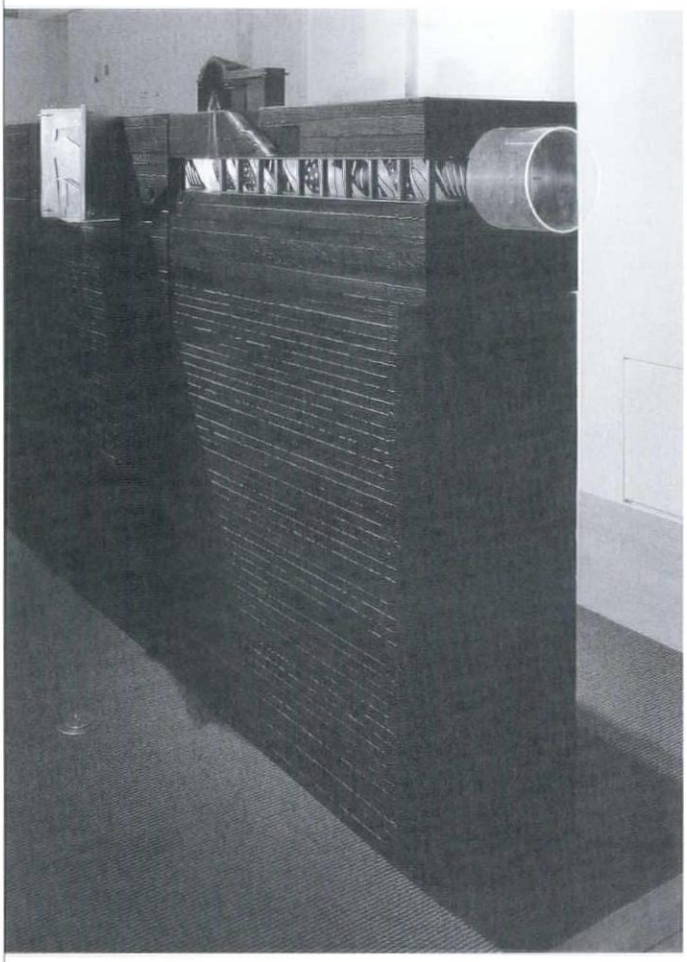
なかむら・べん
1946年東京生まれ。（株）中村勉総合計画事務所主宰

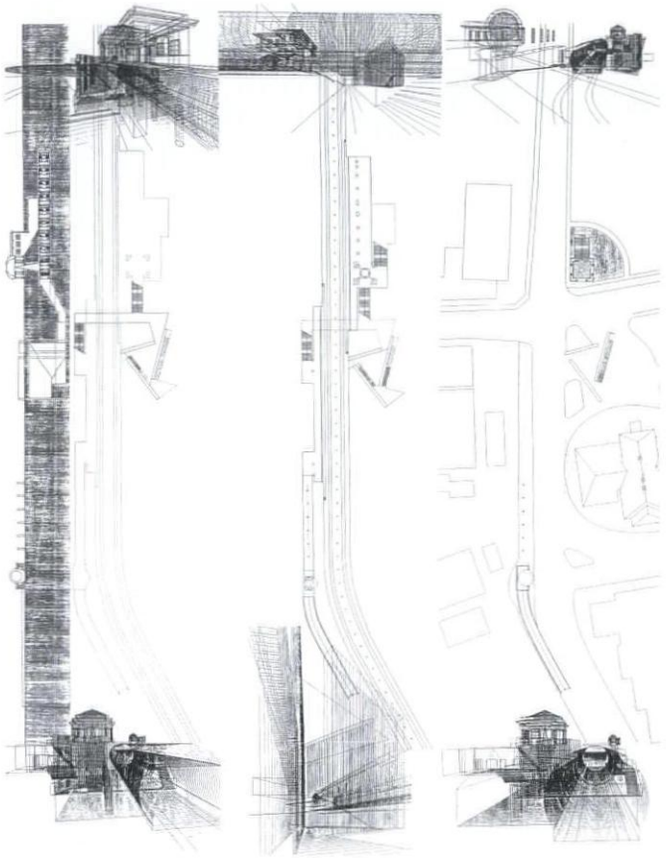


1階平面図

森 徹+若松久男+植野 糾

Museum in Metro





地下鉄（Metro）の中を、美術館（Museum）にするという事から、M in Mプロジェクトと名付けている。

〈上野の杜芸術フォーラム〉という市民グループを作り、この休止駅の保存と再生のボランティア活動を7年間続けてきた。この間、関連分野のオーソリティーと意見交換するシンポジウムは9回、駅の再生の意義を訴える展示会は10回を数える。

ここ3年は、鉄道会社の協力を得、実際に駅舎とプラットホームを使って、現代アートの展示とパフォーマンスの実験を行っている。SDレビューに応募した、リニューアル提案（プリズム、エッグ、コーンなど）も現地で重ねてきたパフォーマンスのモチーフとして、その空間イメージを確認してきた。

列車が通り抜ける現代の息吹の只中での、アート体験の場の提案は、ボランティア協力者の増加を含め、徐々に広がりを見せ、実現への営みは、熱く継続されている。

所在地：東京都台東区上野公園内
建築用途：駅舎、美術館
構造：RC造
敷地面積：7,200m²
延床面積：2,300m²
竣工年：2000年（予定）

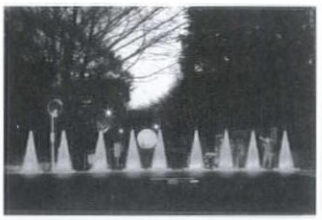
もり・とおる
1950年茨城県生まれ。KAJIMA DESIGN勤務

わかまつ・ひさお
1949年東京都生まれ。KAJIMA DESIGN勤務

うえの・おさむ
1954年東京都生まれ。KAJIMA DESIGN勤務



(1) 博物館側入口のインスタレーション（'97）



(2) エッグのモチーフによるインスタレーション（'95）
写真＝岡田貢



(3) 博物館側に設けられたコーン（'96）



(4) プリズムのモチーフによるパフォーマンス（'97）
写真（1）、（3）、（4）＝若松久男

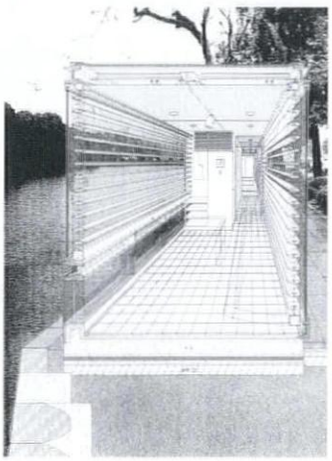
安田幸一+中屋敷公一／日建設計

警視庁丸の内警察署桜田門警備派出所
（桜田門の交番／警視庁丸の内警察署桜田門警備派出所）



出展作品





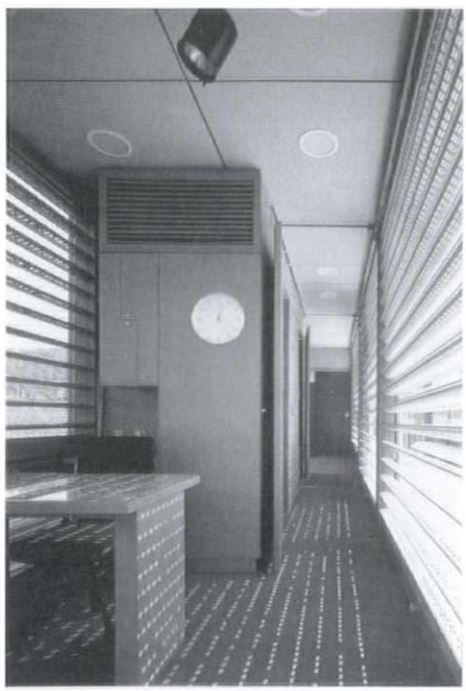
敷地は桜田門橋のふもと、皇居の内堀端に位置する。雄大なる桜田門や城郭の歴史的景観を保全するため、透明で極小ヴォリュームの単純形態にすることを意図した。内部の事務室、休憩室等の性格の異なる諸室を包括し、かつなるべくミニマルな外装システムを模索した。合せガラスとパンチングアルミの可動ルーバーの組み合わせによって光と視界をコントロールするスキンを提案し、実現に至った。

93年夏の応募時点では、すでに実施設計を終了していた。応募した図書には、設計図の矩計図をそのままコピーして添付したのを記憶している。ガラスとルーバーで構成されたスキンの効果を表現するため、時間と共に変化する立面をカラーコピーを駆使してSDレビュー提出前日の夜作成した。今の時代ならばDTPでもっときれいに仕上がるのかも知れないが、結果的には手の痕跡の残った表現に満足している。展覧会時には、工事段階に入っていてモックアップで作成したアルミルーバーを模型と共に展示した。〈安田幸一〉

所在地：東京都千代田区
建築用途：派出所
構造：S造+RC造
敷地面積：24.24m²
延床面積：19.01m²
竣工年：1994年

やすだ・こういち
1958年神奈川県生まれ。日建設計設計部所属

なかやしき・こういち
1966年兵庫県生まれ。日建設計設計部所属

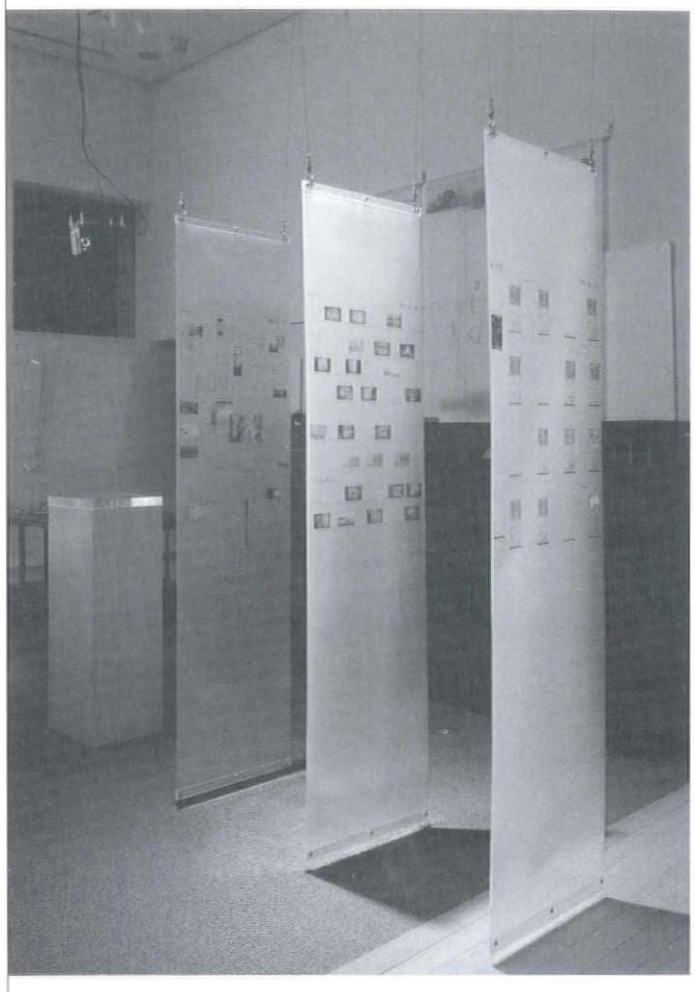


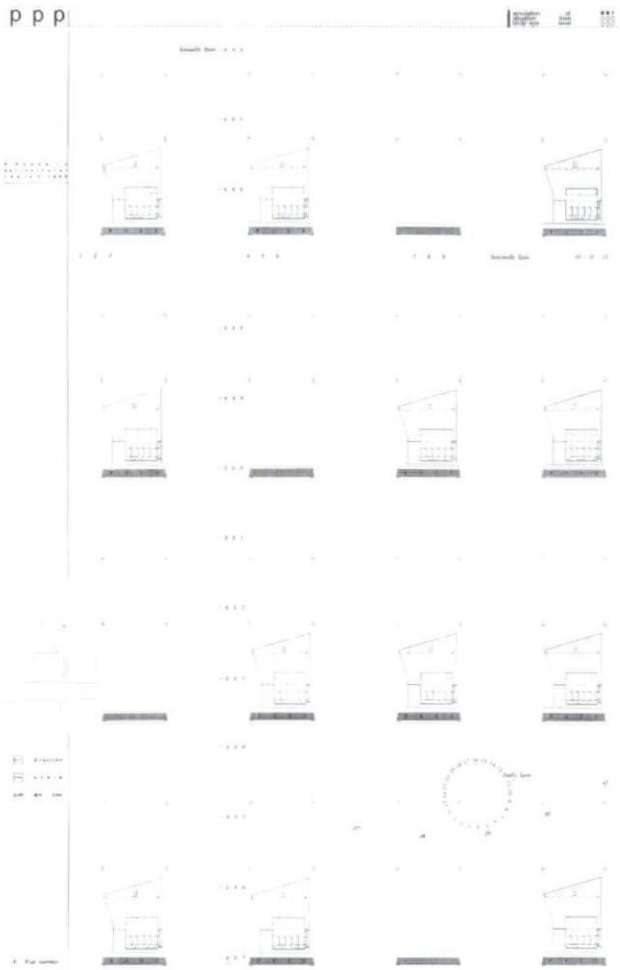
写真（右上、右下）＝石黒守（GA photgraphers）

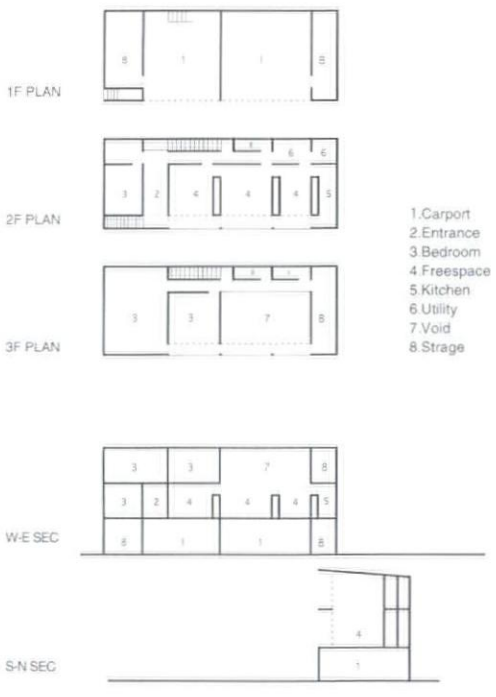
和田克明

農村の家

朝倉賞







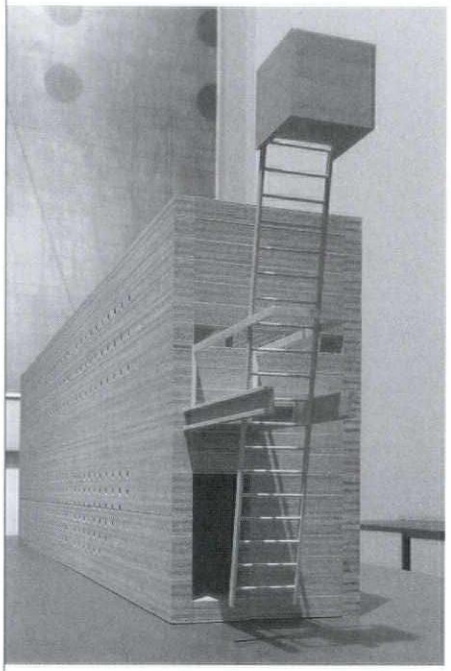
完成に至るまで、実に様々な条件・状況を乗り越えてゆかねばならないのはどのプロジェクトも同じことであるが、このプロジェクトは、施主側のあるアクシデントによる予算半減化に徹底的に苦しむこととなった。あらゆる変更検討を試みたのは言うまでもないが、最終的にはコスト上から建築面積を縮小し、縦積みのヴォリュームとすることが前提となったため、メイン・コンセプトは断念し、結果としては出展案とは違うかたちで3年前に完成となった。現在、しかしながら、このプロジェクトにおける農業という生産形式を住居に持ち込むこと、そしてその時間的変化をトポロジカルに住居に内在させるといったスタイルは、近代の住居の形式に新たな体系を持ち込み得るひとつの解答として、社会的実効性を持つのではないかと考えられる。その意味で、これはまだ継続中のものであり、他への展開を含め発展中と考えている。

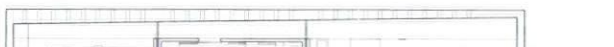
所在地：長野県市
建築用途：専用住宅
構造：RC造+木造
敷地面積：1,018.5m²
延床面積：174.4m²
竣工年：1994年

わだ・かつあき
1968年長野県生まれ。大林組所属

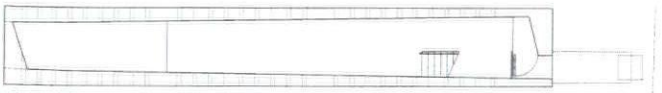
河西立雄

厚い壁の家

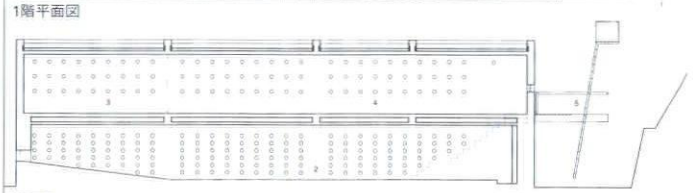




2階平面図



1階平面図



断面図

この家は、兵庫県郊外の住宅地に計画されている。一方を道路に面し、奥まった他方は造成された山の傾斜面に向いている。家族が日常的に音楽鑑賞をするということから、音の抽象と機能という意味において、十分な質量をこの家に与える必要があった。家は3mの厚い壁である。計画は3をモデュールとし、壁体を切り取るようにして重い空間が生成される。周囲には多数の小さな窓がめぐり、その深い穴に、点在する風景と音の収束をもたらす。また傾斜面に向けてデッキが突き出し、天秤のように山の質量と呼応する。家族は壁に住む。通り過ぎながら留まるという両義性を指向すること、つまりここは建築であり空間である。家族はこの家で音楽を楽しむであろうし、音は外へと拡散していくであろう。

所在地：兵庫県加西市（計画予定地）
建築用途：住宅
共同設計者：桃李舎（構造）
構造：RC+S造（主要仕上げ材料：合板型枠コンクリート・プレキャストコンクリート板・土・樹脂・スティール・ガラス）
敷地面積：382.33 m²
建築面積：55.89 m²
延床面積：108.45 m²
竣工年：2002年（工事予定期間）

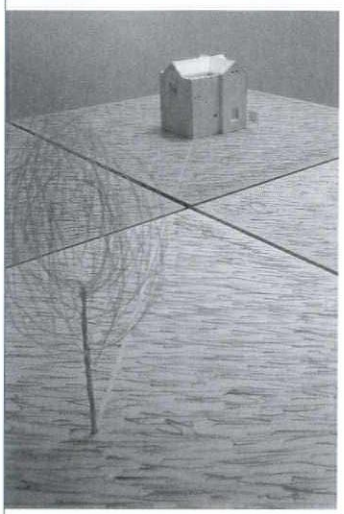
かわにし・たつお
1959年大阪府生まれ。ヴォイス・オブ・アーキテクチュア主宰、京都府立大学助教授

北村修一／キタムラ・アソシエイツ

A町N派出所



写真＝堀内広治





南立面図

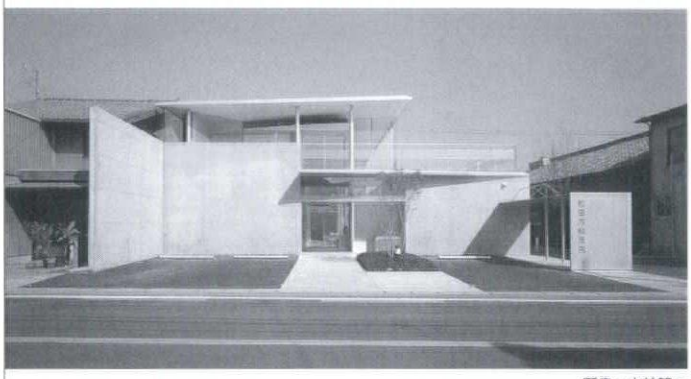
A町N派出所（交番）は、小さな町の小さな児童公園の一角に建つ。一般に交番建築の面白さは、そのスケールの小つぶさにある。この交番は、与えられた敷地の特性からその愛らしさをさらに愛らしく見せるために全体を小さな単位に分節してこれに家型を与え、それをさらに複合化した形のデザインとしている。すなわち、この建築は「市民に親しまれる交番」をメインのコンセプトにしたものである。SDレビューでは、淡いパステルカラーを用い、大草原の上の小さなお家のように夢のある表現をした。しかし、実際の公園はいまだ未整備で、SDレビューの時のイメージとは程遠い環境と言って良い。公園の早期の整備が望まれるところであるが、未整備の今でも子供達がここに集い、おまわりさん達がその子供達を笑顔で見守っているのをみると、SDレビュー時の願いはとりあえず成功したと言って良いだろう。

所在地：神奈川県愛甲郡
建築用途：交番
共同設計者：忠地治英
構造：RC造
敷地面積：103.98m²
延床面積：55.4m²
竣工年：1994年

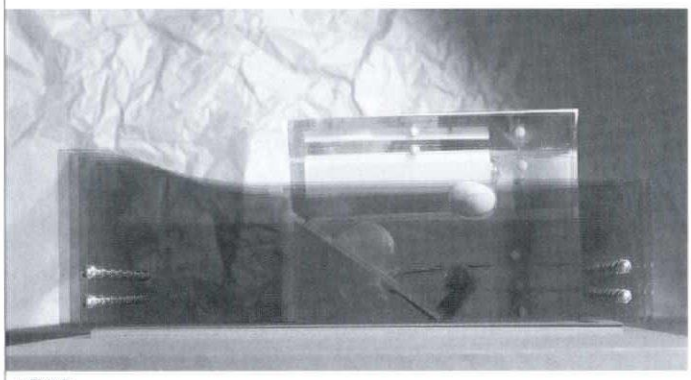
きたむら・しゅういち
1949年神奈川県生まれ。(株)キタムラ・アソシエイツ主宰

齊藤正 毅工房

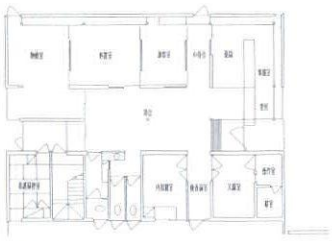
こもりく［M邸］（馬指の医院）



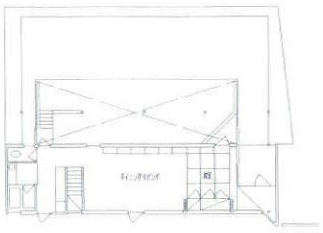
写真＝小林研二



出展作品



1階平面図



2階平面図

このプロジェクトは、ワンルームの住宅を併設する、接骨院を建築したいという要望から始まりました。コンセプトは、開放的な待合室を持ち、さもゲル状に見えるように、インテリアを配置することと、プランを図形的に整理することでした。私にとって事務所開設後初の物件であったため、SDレビューに応募する等、力も入っていましたが、残念なことに、実施が延期になってしまいました。

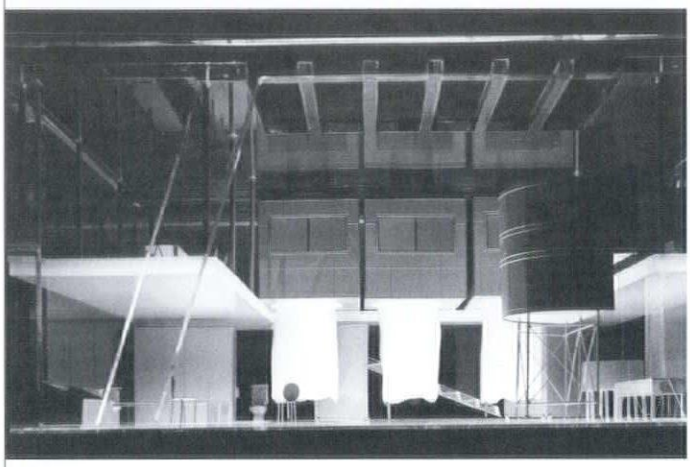
ところがその頃、SDレビューの噂を聞きつけて、ワンルームの当直用の住宅を持つ、内科医院を建築したいというクライアントが、あらわれました。もちろん、用途も施主も敷地も違う建築であるため、コンセプトをそのままという具合にはいきませんが、開放的な待合室を実現することができました。また、待合空間の通り抜けや、機能のブロック化等の新たなコンセプトも付加することができました。

所在地：香川県綾歌郡
建築用途：医院+住宅
敷地面積：599.47m²
延床面積：282.3m²
竣工年：1997年3月

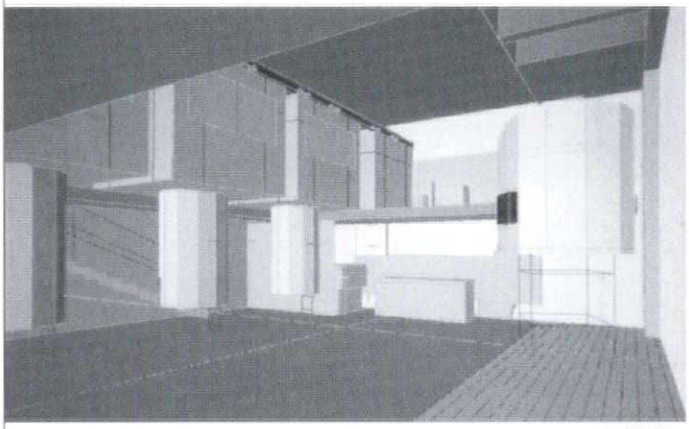
さいとう・ただし
1965年香川県生まれ。齋藤正 毅工房主宰

照井信三／照井信三建築研究所

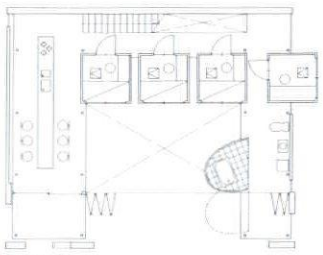
八幡の家



出展作品



CG＝照井信三



2階平面図

展覧会後、入選した他の建築家のことがやたらと気になった。展示会場の自分のスペースの隣のクライン ダイサムの建物はできただろうか？模型がやたらと大きかった吉本剛の建物は実物を見る機会を得た。中村勉さんの〈浪合フォーラム〉は完成し、見学会のファックスが届いた。和田克明はその後、どういう活動をしているのか。白川直行さんの〈Stadium House〉は是非、見せて頂きたい。

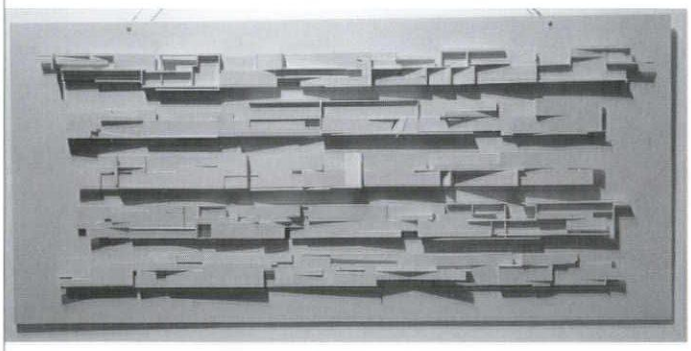
自分の作品に対する各審査員の評はボロクソで、とことん打ちのめされた気がしたが、鈴木明さんの文章に励まされた。そして、まだ自分の作品は実現におよんでいないものの、未だその実現のチャンスを狙っている。そして、何よりも展示会場で穂積信夫先生や伊藤豊雄先生に直接、生の批評を頂けたことはその後の建築活動において大きな励みとなっている。

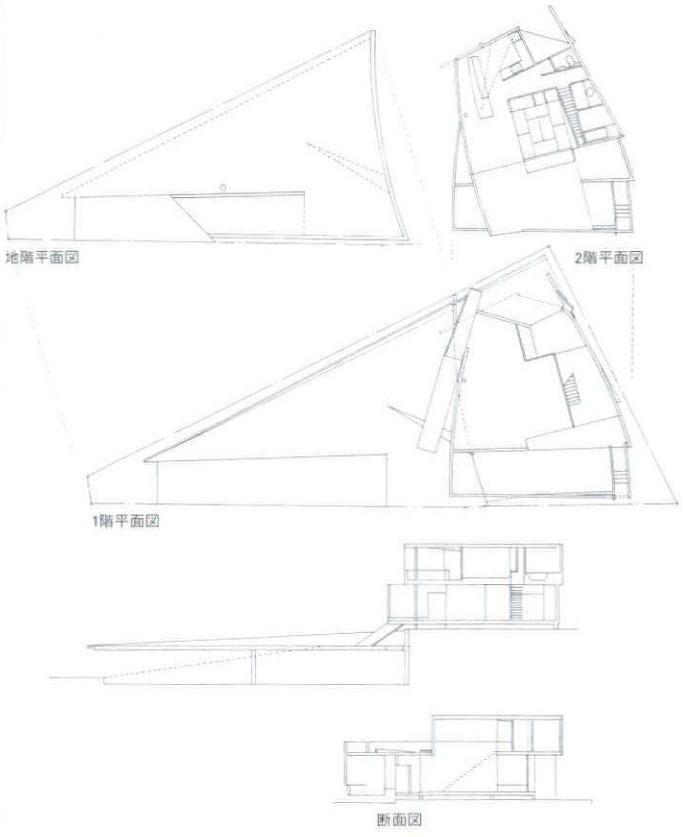
所在地：埼玉県比企郡
建築用途：専用住宅
構造：RC+S造
敷地面積：181m²
延床面積：140.12m²

てるい・しんぞう
1961年秋田県生まれ。照井信三建築研究所主宰

戸田潤也

奥須磨の住宅





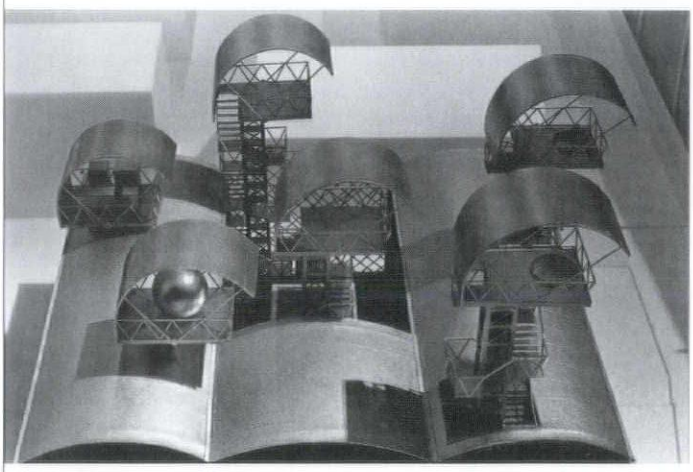
曲面の壁を層ごとに分けてつくりそのまま空中に浮き上がらせること、そして、ぶれて輪郭の曖昧になった建築の外周から、様々な空気の流れを引き込むことを意図した。実現に向けて、これから表現を抑制していこうと考えていたが、バブル崩壊の影響による予算の削減と、エスカレートしていた形態操作とのギャップが最大となり、実現に至らなかった。しかし機会があれば、このようなものをつくってみたいと思っている。

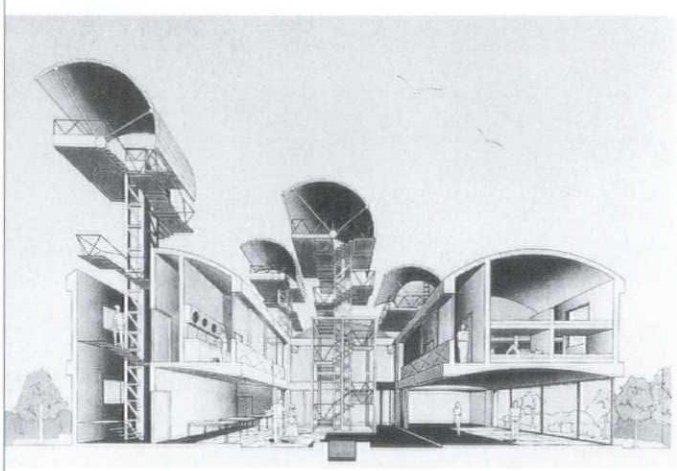
所在地：兵庫県神戸市須磨区
建築用途：住宅十事務所
構造：S造、一部RC造
敷地面積：450.55m²
延床面積：402.06m²

とだ・じゅんや
1956年新潟県生まれ。戸田潤也建築設計工房主宰。京都精華大学・近畿大学・芦屋芸術情報専門学校講師

宮元健次+東京コミュニケーションアート専門学校スペースデザインコース

Primitive





本計画は次の条件をクリアする必要があった。
1.専門学校の研修施設であり、当校の建築系学生の授業の一環として学生と教員によって設計すること。
2.バブル崩壊後のリゾートのあり方や環境問題を意識し、ダウンサイジング、エコロジーについて考慮すること。
3.学園のイメージアップとなるようなシンボリックな造形となること。
4.敷地海側の高さ10mのグランドネットに著しく妨害されている、海への眺望を回復すること。

以上の条件から、中庭を囲む最小限の空間とし、1階は開口部を開け放つことによって、中庭と一体のフレキシブルな使用を可能とした。また海への視界を妨害するネットを逆手に取り、制限の許す限りの高さに空中露天風呂、潮見台、月見台等を配して海を一望できるようにした。さらにその造形自体が海、風と呼応し、学園のシンボルとなるよう考慮した。

所在地：千葉県館山市
建築用途：専門学校研修施設
構造：RC+S造
敷地面積：514m²
延床面積：731m²

みやもと・けんじ
1962年生まれ。応募当時、(株)宮元建築研究所代表取締役、東京コミュニケーションアート専門学校講師

第13回　1994年



デザイン＝工藤強勝

東京展：9月21日～10月2日
ヒルサイドテラスF棟ヒルサイドフォーラム
大阪展：10月7日～10月20日
会場：都住創センター
審査員：高橋靚一、坂本一成、栗生 明、隈 研吾
応募総数：209作品
入選数：17作品
受賞者：
荒木正彦設計事務所（鹿島賞）
ユストス・ピザル+ペーター・ルーゲ（朝倉賞）
石黒由紀+田堀 繁（SD賞）
吉松秀樹／アーキプロ（SD賞）

荒木正彦設計事務所　新京橋交流施設
有泉秀明+グリニス・**M.**ベリー／**Studio a/b**　House on North Fork
石黒由紀+田堀 繁　計画O
遠藤秀平／遠藤秀平建築設計事務所　Cycle Station Maihara
荻津郁夫　O-town Intercommunication Stage
加茂紀和子+マニュエル・タルディッツ　KANBAN KOBAN
城戸崎和佐建築設計事務所　K邸
鈴木敏彦　Aluminum-products Promenade
中村勇大／中村勇大アトリエ　西陣の家
花田勝敬+大西直子／ウイング建築事務所　H邸
細田みぎわ　Generation Cage
堀池秀人+益田滋子／堀池秀人都市・建築研究所　STREAM［白石市北保育園］
前田紀貞アトリエ　FUNES
丸谷勝也／アーク ユニット スタジオ　LODGING
三栖邦博+浜田明彦+安田幸一+持田英明／日建設計　POSCO 21 Pohang Project
ユストス・ピザル+ペーター・ルーゲ　ハッケシュホーフ・ベルリン［Hackeshe Höfe Berlin］
吉松秀樹／アーキプロ　G.Y.プロジェクト

ユストス・ピザル+ペーター・ルーゲ

ハッケシュホーフ・ベルリン［Hackesche Höfe Berlin］

朝倉賞



1999年9月、ベルリンは再び首都として起動する。今、ベルリンが工事現場と化しているのは周知のところである。私たちのこのプロジェクトもこんな中で計画された。

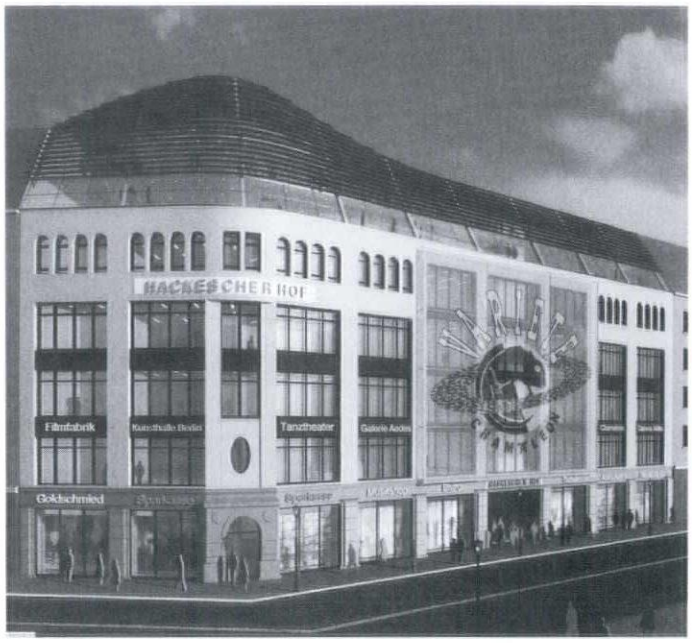
ハッケシュホーフ・ベルリンは、第二次世界大戦で壊され、東欧時代に放置されていた古き良き時代の建物に、再び昔の賑わいを取り戻し、新しい光を灯そうというコンセプトで始まった。昔の屋根のフォルムを描いた曲線の屋根にはガラスとアルミルーバーを用い、光と影を取り入れた。またファサードには夜になるとメッセージを発信するガラススクリーンを使った。しかし最終段階で、この提案は斬新すぎて馴染まないという理由で、銅の屋根に変更されることになった。もはや、そこには私たちのコンセプトは存在しなかった。興味も消えていた。

日本での評価を実現できなくてとても残念である。Femme Fatale（妖婦）は目を覚まさなかった。

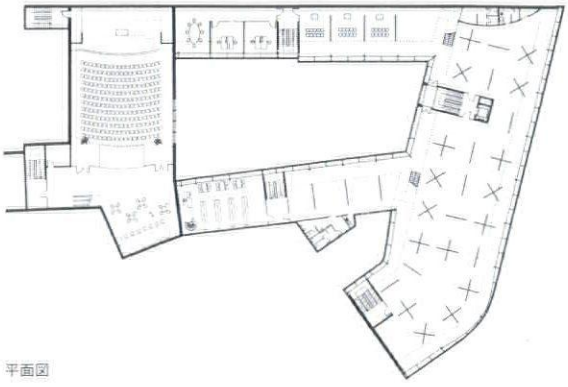
所在地：Rosenthaler Strasse, Berlin
建築用途：ギャラリー、事務所
構造：S造、プレファブ・コンクリート
敷地面積：9,200m²
延床面積：改築部分1,740m²、既存部分31,300m²

Justus Pysall
1961年ドイツ、ブラウンシュワイヴ生まれ。ブラウンシュワイヴ大学卒業。Pysall・Ruge Architekten共同主宰

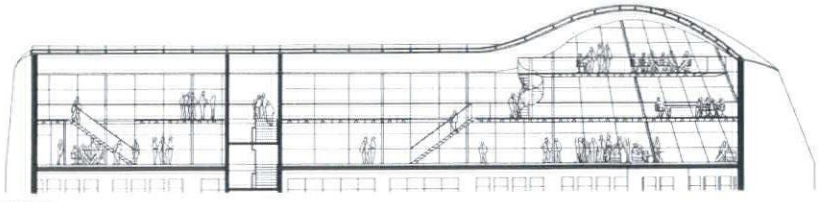
Peter Ruge
1959年ドイツ、デュッセルドルフ生まれ。ブラウンシュワイブ大学卒業。Pysall・Ruge Architekten共同主宰



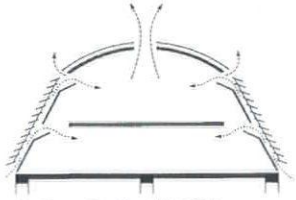




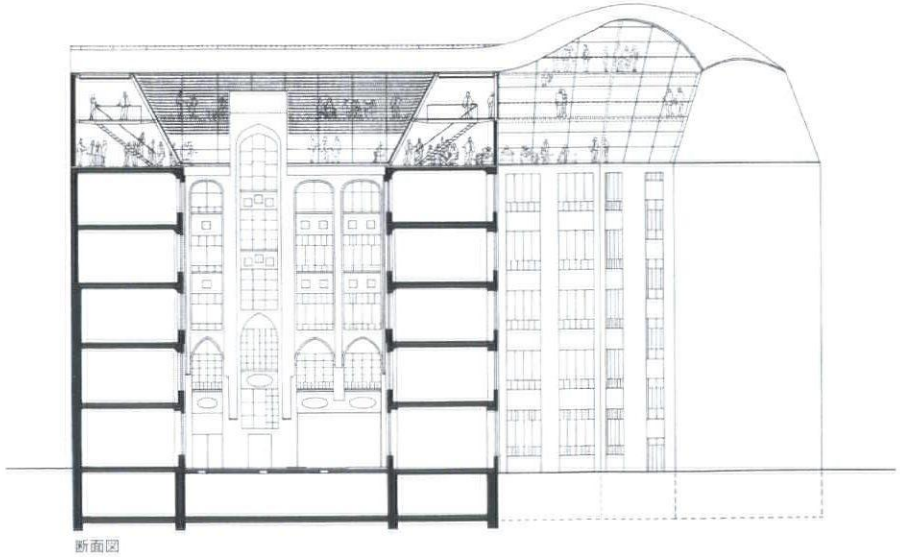
平面図



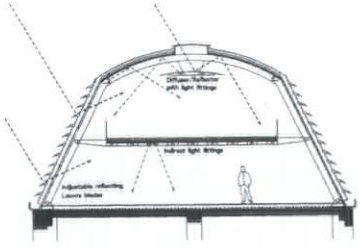
断面図



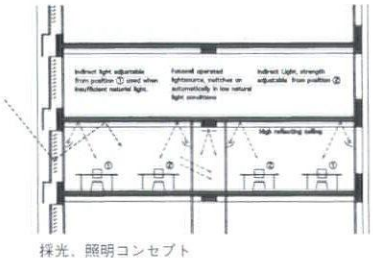
バッファ・ファサードシステム



断面図



採光、照明コンセプト

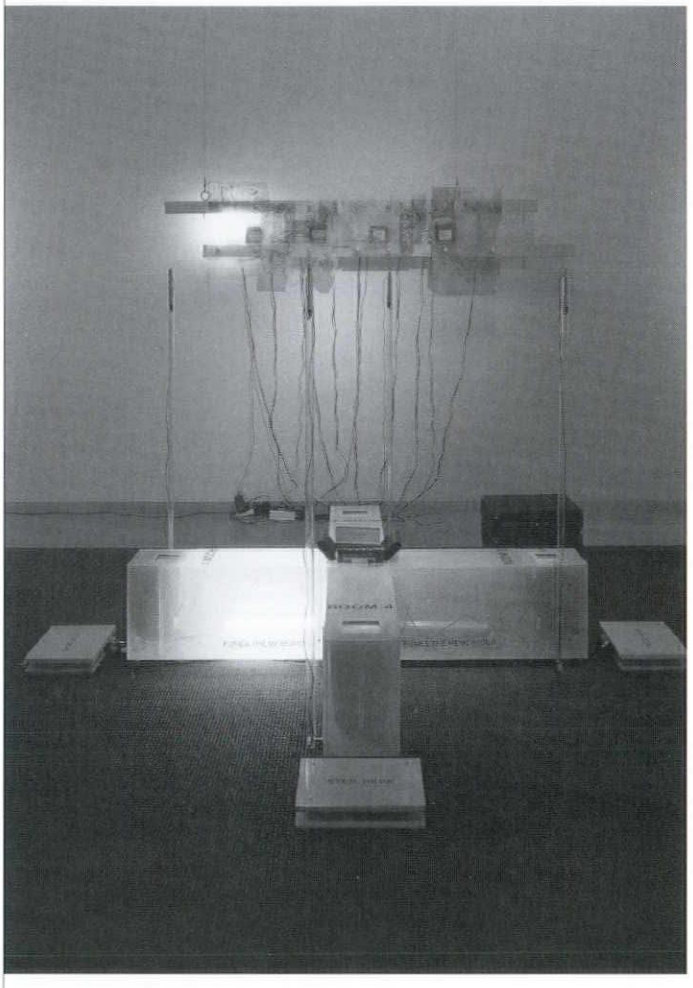


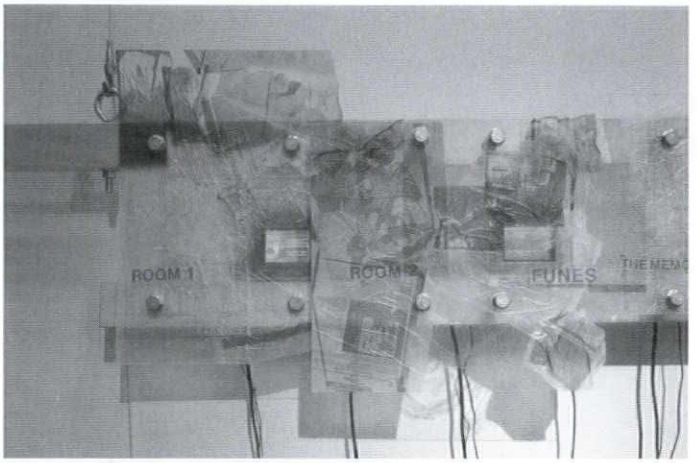
採光、照明コンセプト

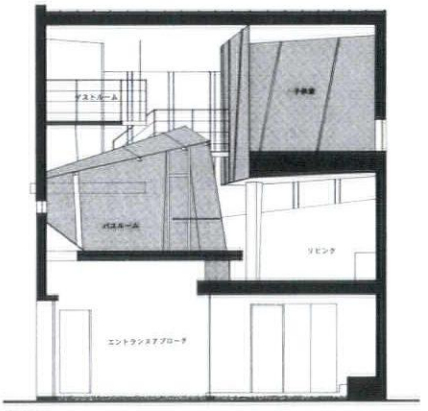
1994

前田紀貞アトリエ

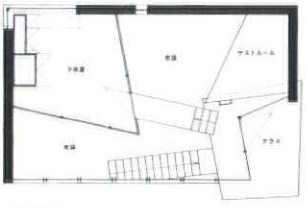
Funes



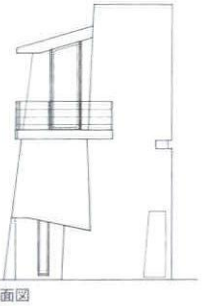




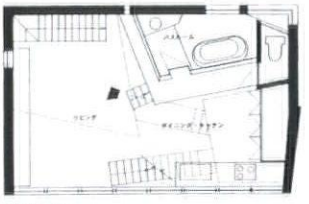
断面図



3階平面図



南立面図



2階平面図



1階平面図



西立面図

3層になった「ガラスの入れ子」によって空間の境界面とそれらの包接関係について考えていた。また、展覧会用の模型では敢えて再現前的な表現を取らず、建築空間を電子装置に翻訳することで、「聴覚空間」という異なった断面で切断しながら、同様な空間表出のプロセスを示そうとした。つまり、この表出のプロセスこそが「Funes」であったのであり、必ずしもフィジカルな建築空間への興味だけからこのプロジェクトを実施したのではないことを主張したかった。工事最終段階で近隣住民からの要望によって再外部のガラス面が透明から半透明に変更になったが、このことは外部から「ガラスの入れ子」が意識されにくくなった反面、室内側でキャッチされる光の質が「透過光」になったことで、逆により豊かな光の情報（表情）を捕獲することができるようになったのではいかと考えている。

所在地：千葉県船橋市湊町
建築用途：専用住宅+事務所
構造：RC壁式構造
敷地面積：79.21m²
延床面積：136.38m²
竣工年：1994年12月

まえだ・のりさだ
1960年東京都生まれ。前田紀貞アトリエ主宰



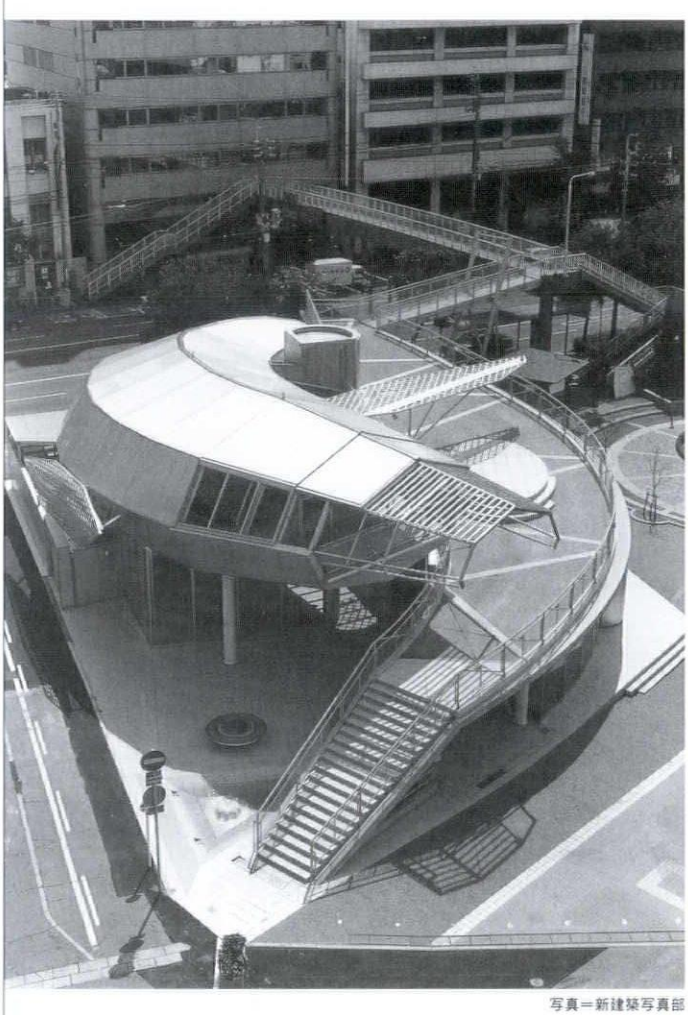


写真（2点とも）＝篠澤建築写真事務所

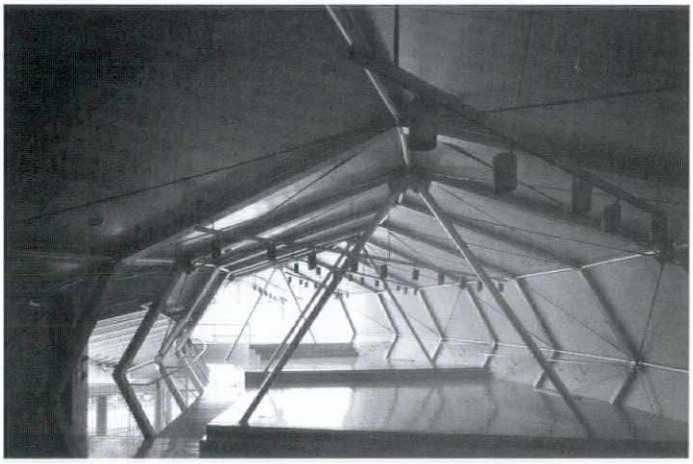
荒木正彦設計事務所

新京橋交流施設

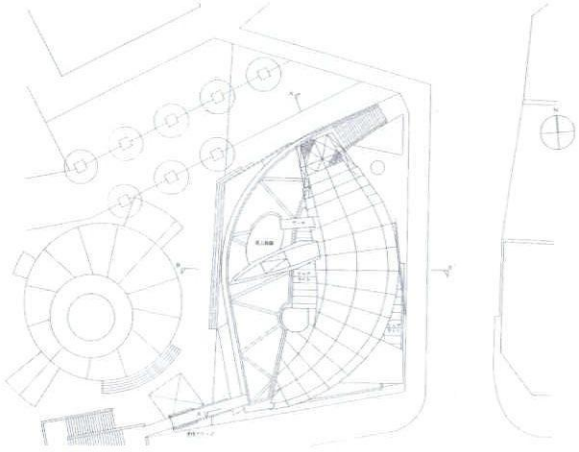
鹿島賞



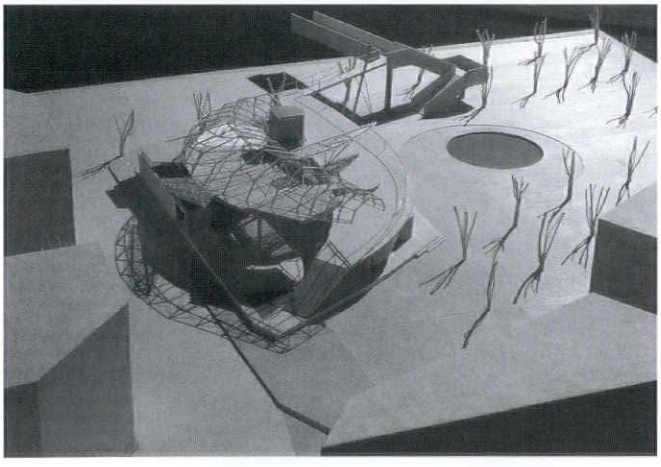
写真＝新建築写真部



写真＝高瀬良夫（GA photographers）



配置図



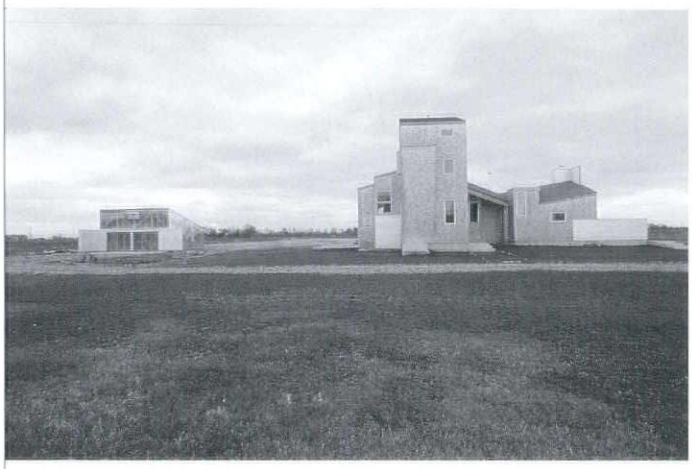
商業と公園のリンクする場所に立地するこの建物は、周辺エリアのノイズに同化し人々に親しまれ易い施設となるように計画された。出展時には計画の概要はほぼ固まった状態にあり、内部の造作を加えた程度で大きな変更もなく竣工することができた。竣工直後、人々はこの建物に多少の違和感も覚えたようであるが、周辺エリアのノイズに同化しながらもここが空間として自立することができたことで、施設を運営する人々の努力によって人々に頻繁に利用され、中心地の気軽な市民サービス施設としての役割を十二分に果たしているとのことである。

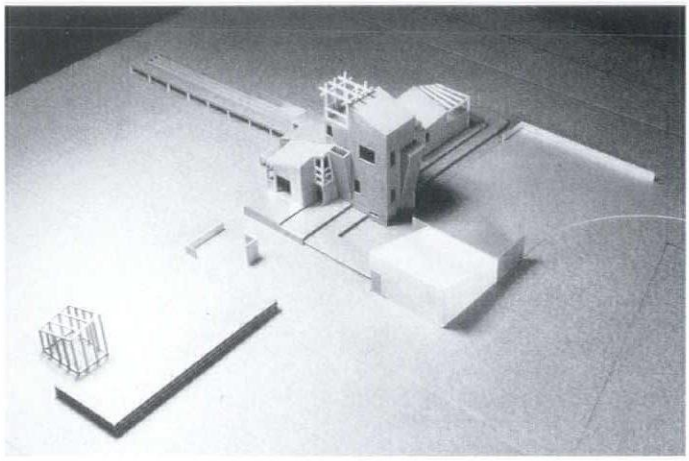
所在地：高知県高知市
建築用途：コミュニティ施設（展示集会等を中心とする市民の交流施設）
共同設計者：城所昭子、伊藤雅信
構造：S造、SRC造
敷地面積：720m²
延床面積：1,387.2m²
竣工年：1995年

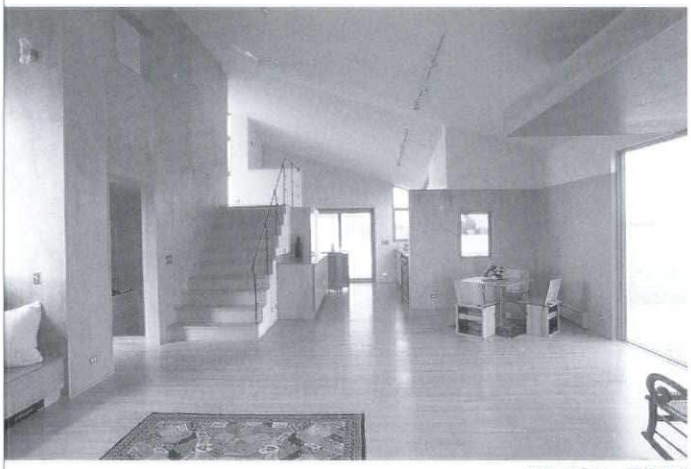
あらき・まさひこ
1946年高知県生まれ。荒木正彦設計事務所主宰

有泉秀明+グリニス・M・ベリー／Studio a/b

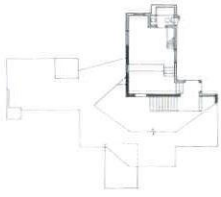
House on North Fork







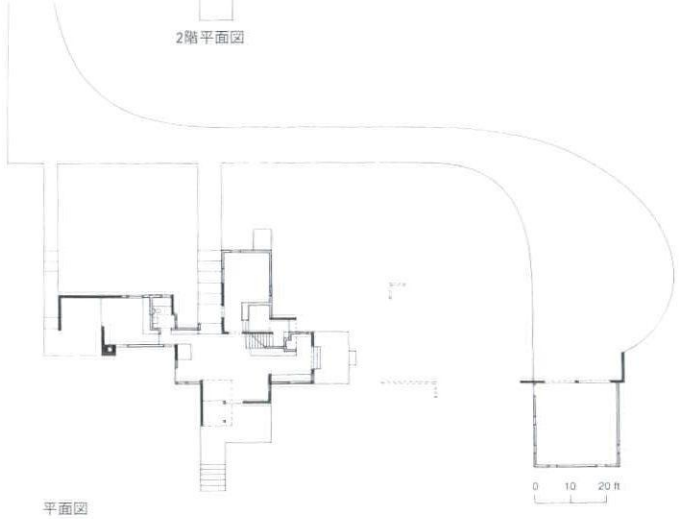
写真（左2点）＝有泉秀明



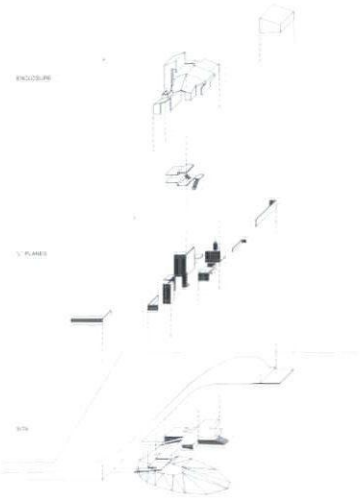
2階平面図



屋根裏階平面図



平面図



ロング・アイランドの北東端は野菜とワイン作りを主とする農業地帯で文字どおり細長い島であり、湿地帯の自然と英国から移住以来の家族の続く歴史、漁業や木造船、そしてインディアンの歴史などが混在する地域である。ここの敷地の木一本もない平坦な、しかしよく見ると変化をもつ広がりとの対応が全ての始まりである。「L」という幾何形体がそれに手掛を与えるのにさしたる時間はかからなかった。それは展望台的パノラマスクリーンを作る方向とはまったく別の方法を可能とした。それは風景のカケラを切り取ったり、虫眼鏡のように焦点を与えたり、うねる流れに沿って二点を繋いだりする。一方、箱のように一角を閉じたり保護したりして、内部の深度を与えたりもする。これらの様々な空間経験を発生させる「L」の働きを仮想することから出発し、計画実現へと進んだ今回の進行そのものが、「経験的空間」へのひとつの実験として、たいへん貴重な体験となった。

所在地：Orient, New York
建築用途：住宅
構造：2×6プラットホームシステム
敷地面積：3.65エーカー
延床面積：1,750ft²
竣工年：1996年

ありいずみ・ひであき
1949年東京生まれ。Studio a/b共同主宰

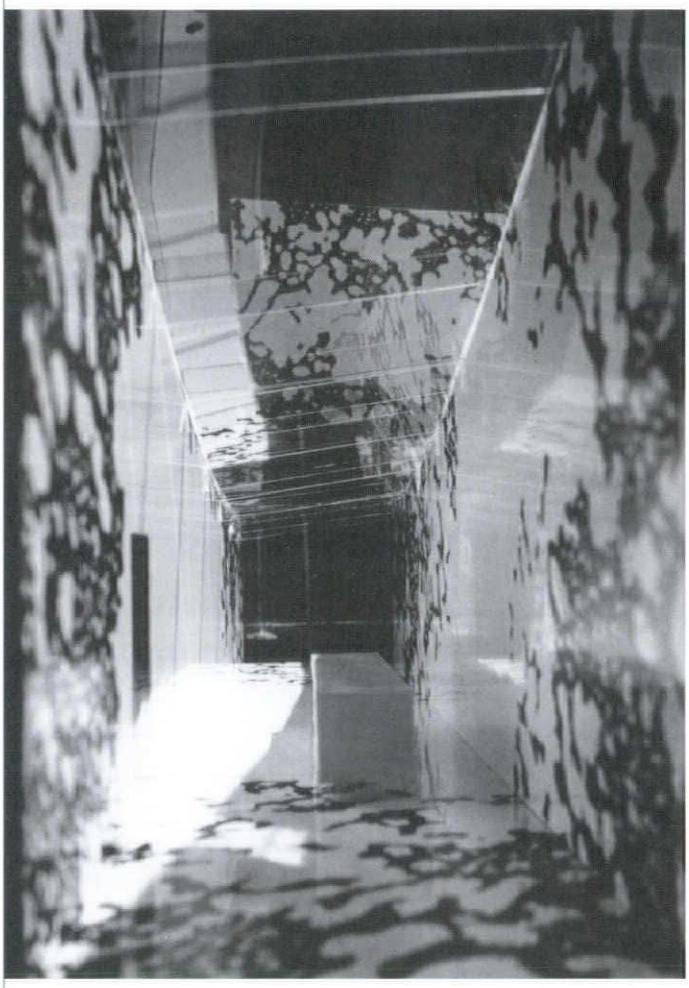
Glynis M. Berry
1952年ロードアイランド（アメリカ）生まれ。
Studio a/b共同主宰

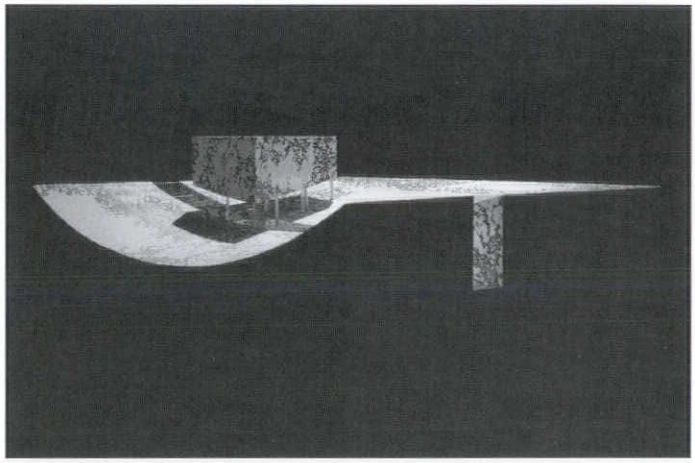
1994

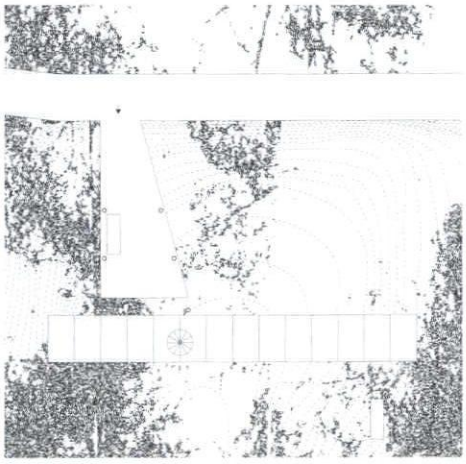
石黒由紀+田堀繁

計画O

SD賞







配置図

本計画の敷地は、前面道路と両隣から敷地中心に向けて下り勾配がついたすり鉢状になっている。別荘分譲地のため隣家が境界から2、3m程に迫った位置に建っており、水平方向の眺望はあまり期待ができない。また高い木立に覆われているため、方位を感じさせない柔らかな拡散光が得られる。

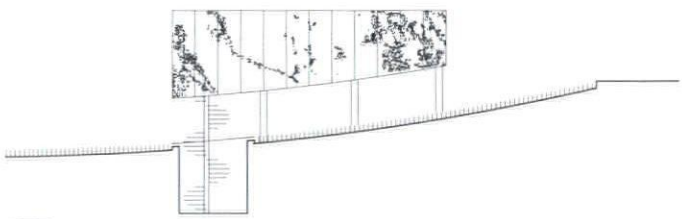
これらの環境条件に融合するように、要求されている3つのホールを配置した。ホールAは前面道路のレベル−5500に埋め、等高線なりに複層ガラスの覆いをかけて上方向にのみ開放し、木陰の落ちる内部空間とした。ハーフミラーガラスに映り込む木陰を外壁とするホールBを、等高線＋2200に持ち上げ、Bを規定しているスラブの上下にホールC、ポーチを配置した。

1997年11月現在、地権関係上の都合等により、本計画は未だ建設に至っていない。当時のSD誌の掲載記事を見直してみると、解説文中の「こういった場所での建築の一つのあり方」とは、「木陰、等高線、上方向、ガラス、スラブを同じ水準のものとして扱いうるコンテクストにおいて、建築に固有の属性である『敷地』と『形態』が上記のものと同じ水準のものになりうる可能性」のことを考えていたのであろう。

所在地：長野県北佐久郡
建築用途：保養所
敷地面積：721m²
延床面積：183.2m²

いしぐろ・ゆき
1968年東京都生まれ。応募当時（株）石田敏明建築設計事務所所属。現在石黒由紀建築設計事務所主宰

たほり・しげる
1967年岐阜県生まれ。応募当時（株）石田敏明建築設計事務所所属。現在田堀繁建築設計事務所主宰



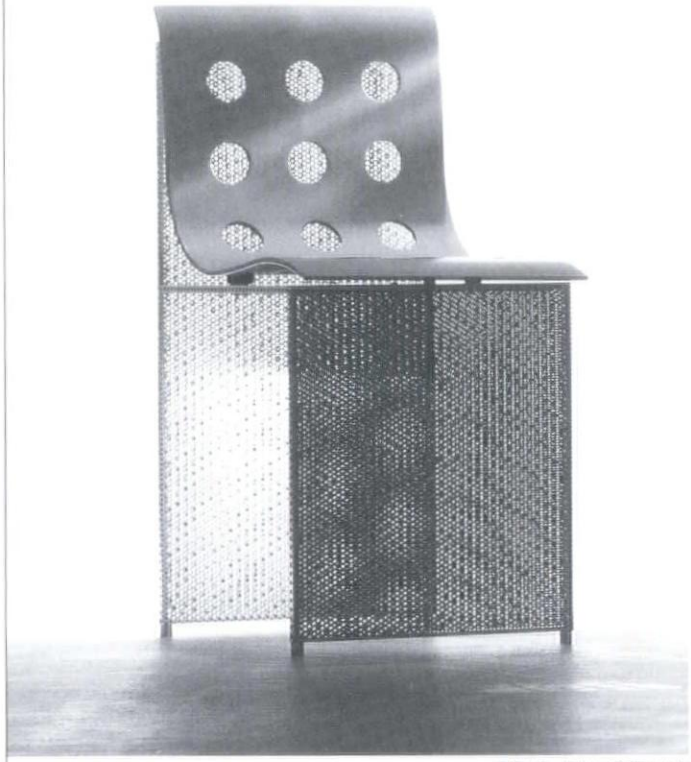
断面図



断面図

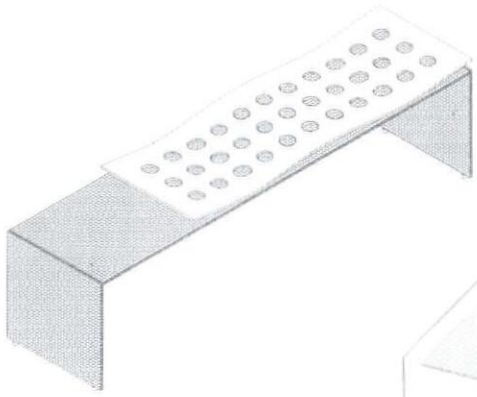
鈴木敏彦

Aluminum-products Promenade——単位空間当たりの構造部材の自重を劇的に減らすこと、あるいは「より少しからより多くを」への挑戦（アルミハニカム家具）











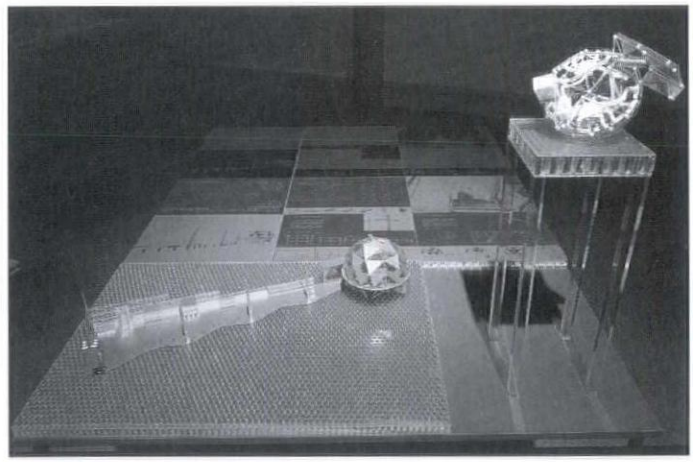
写真（左、右上）＝斉藤さだむ

SDレビュー1994で発表した「Aluminum-products Promenade pj.」はアルミハニカムパネルという軽量素材を用いた家具、建築そして環境への提案であった。残念ながらプロジェクトはペンディングとなったが、家具への提案、Aluminum-honeycomb Furniture Systemについては北海道、旭川の家具メーカーから共同開発の要請があり、平成8年度の「特定中小企業集積の活性化に関する臨時措置法に基ずく補助事業」における新商品・新技術開発事業として実施されることとなった。このようにしてアルミハニカムは旭川の木と複合しアルミハニカム家具として実現した。そして1997年2月に第45回旭川新作展にて発表され、5月には新宿リビングデザインセンターOZONEにて開催された「配管家具×アルミハニカム家具展」にさらに改良、軽量化された作品として出展された。

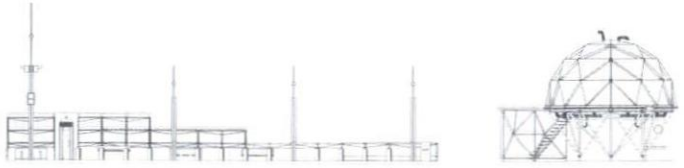
「Aluminum-products Promenade pj.」はまた、アンビルド・プロジェクトとしてThe Academy of Architecture Arts and Sciences（建築・芸術＆科学アカデミー）主催による「39歳以下の39人の建築家賞」を受賞している。

製造者：丸一木工株式会社、モリシン工業株式会社
サイズ：W360×D420×H740×SH420 (mm)
原材料：シナベニア メープル積層合板 t=7　パンチング・アルミハニカムパネル t=10
仕上げ：ウレタンクリア塗装、アルミ素地
発表年月：1997年2月

すずき・としひこ
1958年東京生まれ。応募当時鈴木敏彦一級建築士事務所主宰、Urban Design Inc研究員。現在鈴木敏彦一級建築士事務所主宰



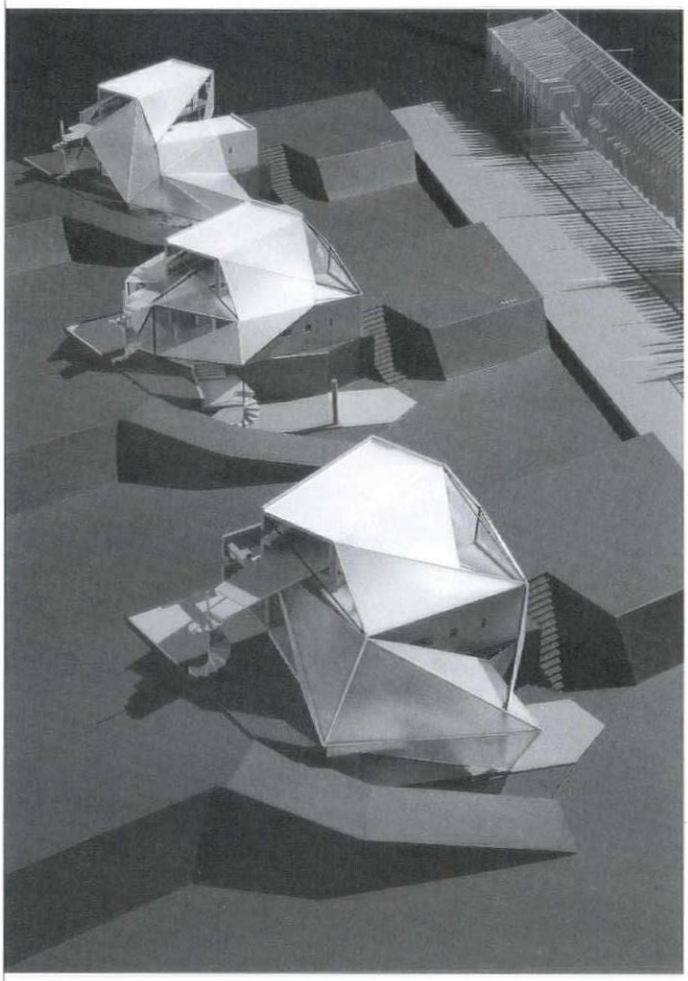
出展作品



出展作品立面図

細田みぎわ

Generation Cage





都市の中で、美しく必然的にダンスし続ける建築を見たかった。建築が風化していく速度と、三世代の各住人の生活の変化の速度を、そのまま建築に刻み込むことを考えた。——コンクリートのBOX（各世代のプライベートスペース）と、住人を持つBOXのみの輪郭を結んだ軽い屋根（世代間のコミュニケーションスペース）——生活は様々なレベルのレイヤの重なりであり、建築化できるレイヤとそうでないものがある。建築化できない要素でも偶然に幾重にもレイヤが重なると、建築的変化が求められる。生活の変化は、人と人・人と建築の要素との距離の調整・変更に置き換えられるからである。

——娘が大学に入学した。

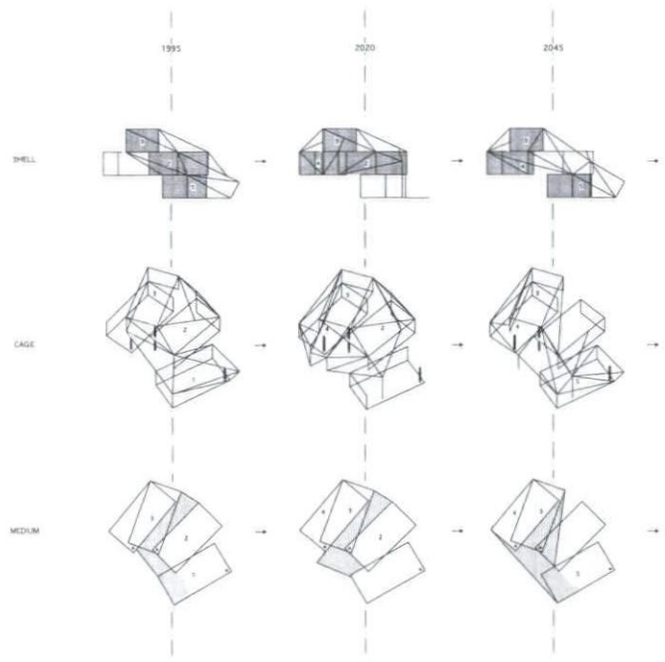
——毎週水曜日はお花のお稽古日。

——母が入院した。

——犬の散歩に出かけよう。……

長年にわたる施主との交流の中で生まれたコンセプトであり、それを建築に変換できた。しかし、実現化には至っていない。

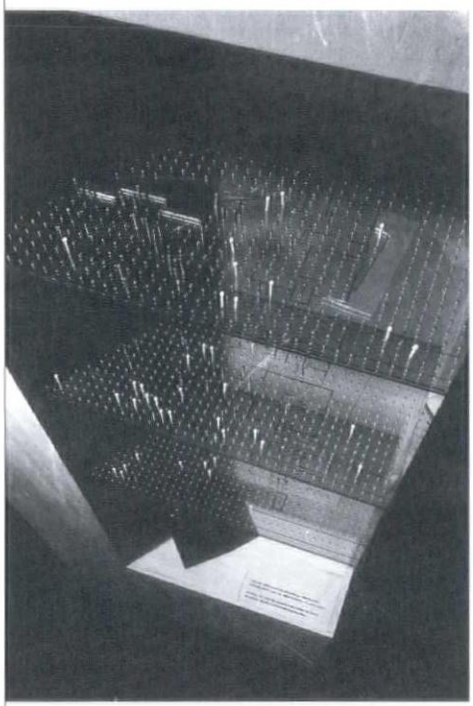
所在地：大阪府泉南郡
建築用途：三世代住宅
構造：RC造、S造
敷地面積：339.8m²
延床面積：270.8m²



ほそだ・みぎわ
1958年大阪府生まれ。細田みぎわArchi-Studio主宰

丸谷勝也／アーク ユニット スタジオ

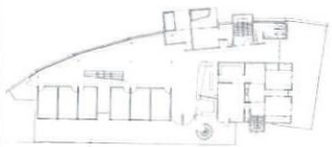
Lodging（Lodging02/Herbel Heart）



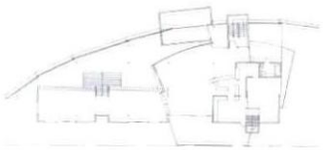




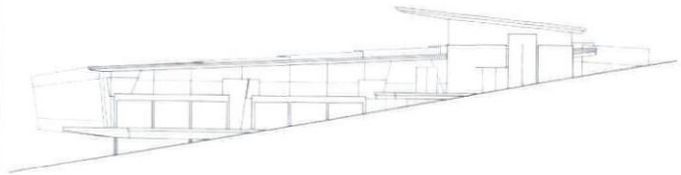
写真（右2点）＝絹巻豊



1階平面図



2階平面図



断面図

「もの」から「こと」へ

群馬県、老神温泉に計画された宿泊施設である。併設の予定が、全面新設となり当初より勘案されていた要件を引き継ぎ、「公共的」性格を拡張する方法を考えた。具体的には、敷地内通路を全体に横断するように誘導するだけではなく、施設の内外部をくぐり抜けたり通り抜けたりできることを念頭に置いた。そこでは「ずっといる人」「訪れる人」「迎える人」は、各々自分たちで自由に居場所を確保し、容易に接触の濃度を調整することができる。ちょうど大人と子供がする「かくれんぼ」のような状態で、お互いの意思でどこまでも関係を拡大することが可能なものをイメージした。つまり、施設としては積極的に「こと」を誘発できる「もの」とは何かを考えた結果である。

所在地：群馬県利根郡
建築用途：宿泊施設
共同設計者：井上泰子、高井直哉、吉村由美、奥村泰行
構造：S造
敷地面積：1,605.37m²
延床面積：599.04m²
竣工年：1997年

まるたに・かつや
1960年大阪市生まれ。アークユニットスタジオ主宰。京都府立大学非常勤講師、平安女学院短期大学非常勤講師



2階平面図

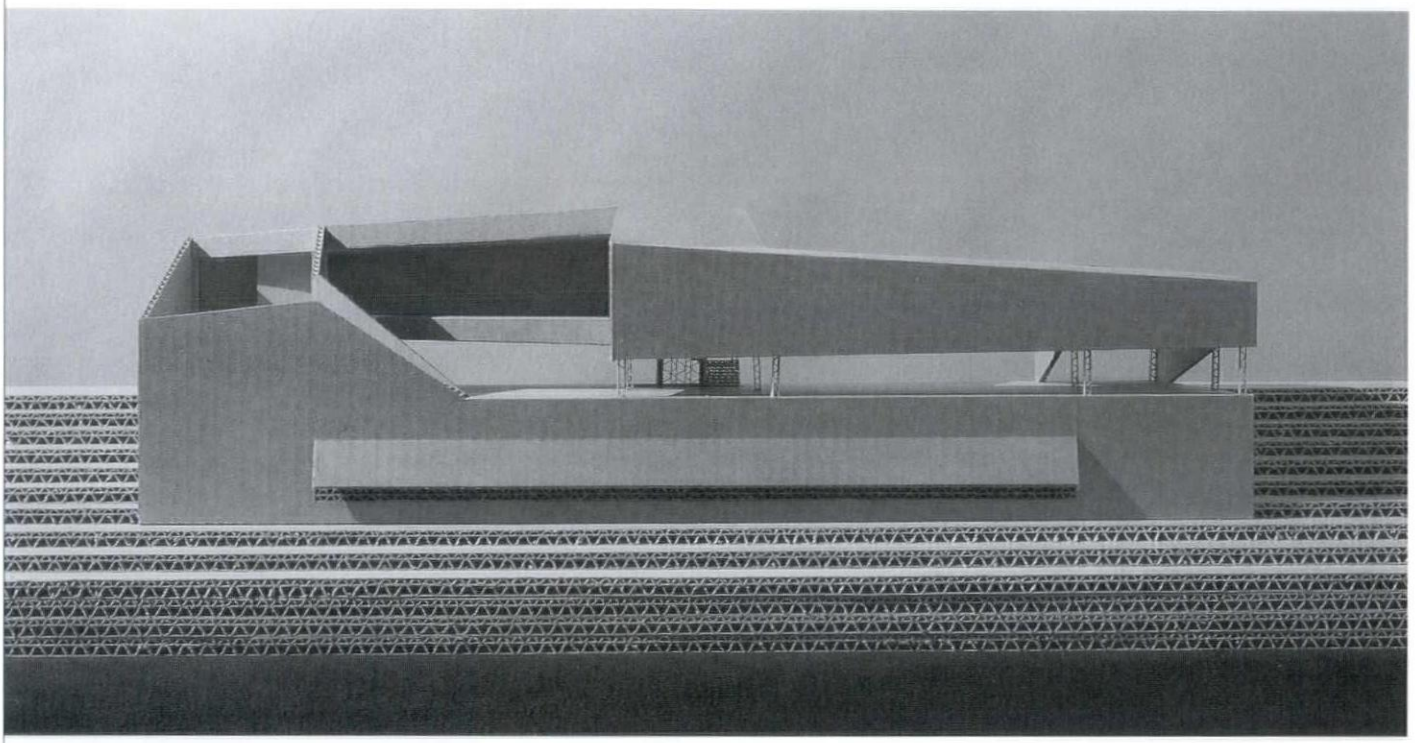


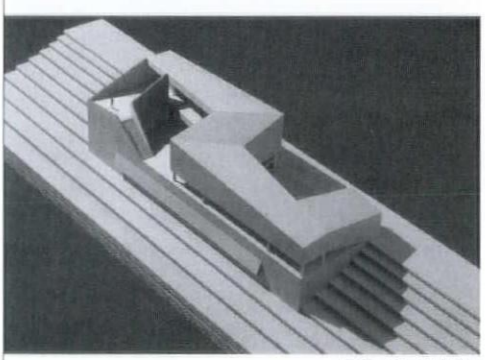
1階平面図

吉松秀樹／アーキプロ

G.Y.プロジェクト

SD賞





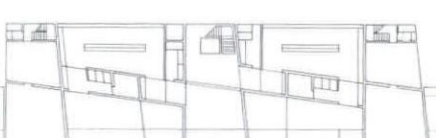
写真・CG＝吉松秀樹



2階平面図



1階平面図



地下1階平面図



東西断面図

大規模保養基地の施設再整備計画の一端として温泉を利用した保養施設を新設し、施設内の新しい核として機能させる計画である。

ここではプライベートな機能部分に閉鎖的な表情を持たせ、それらを「連続体」としてモデリングしていくことを試みている。これは建築として知覚させる要素を幾何に還元することによって建築の意味性を稀薄にさせながらも、「連続体」とすることによって「建築」としての記号性を確保しようとしたものである。また、環境に埋没させることが望ましいと思われるこの種のリゾート施設において、視認性と消去性という背反する要求を施設の形状として正確に記述することを目指した結果でもある。

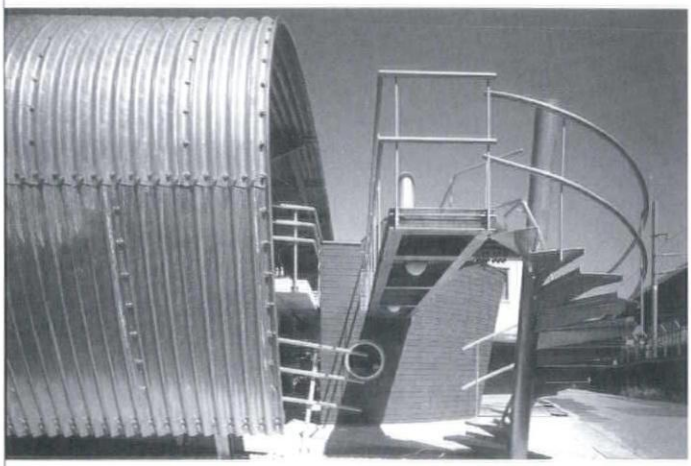
新設されるコテージのプロトタイプ案（G-Cottage/GA Japan11)等も同時に提案していたが、具体的な開発に進む段階で次のステップに進むことができなかったため、実現に至っていない。個人的には気に入っていた案だっただけに残念であった。

所在地：福岡県八女郡
建築用途：温泉保養施設
共同設計者：小林賢司、川畠武宜
構造：RC造、S造
敷地面積：258.7ha
延床面積：1,393.24m²

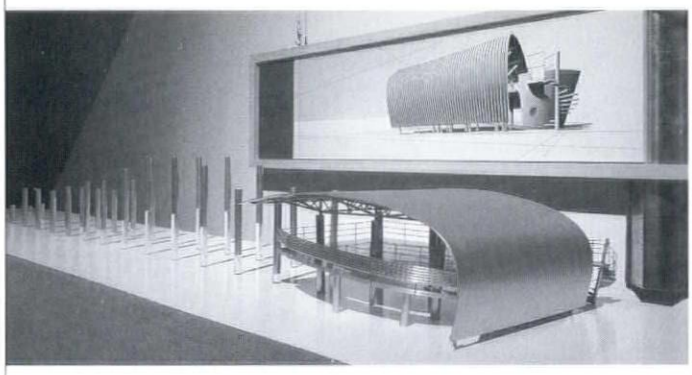
よしまつ・ひでき
1958年神戸市生まれ。アーキプロ主宰

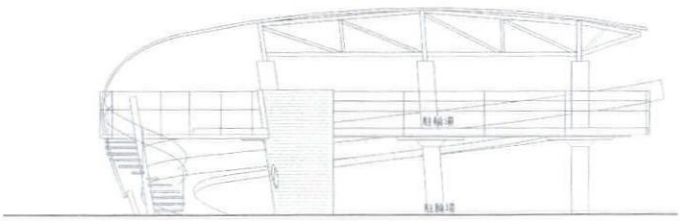
遠藤秀平／遠藤修平建築設計事務所

Cycle Station Maihara ——加速から減速へ
(Cycle Station 米原)



写真＝松村芳治





接触機構体

この計画は速度変化の可能性に関わるのもである。ここでの速度変化は、自転車による身体的速度と新幹線に代表される人工エネルギー速度により引き起こされる。この速度変化地点における特異性による加速と減速に触発され、変速器としての駐輪施設を設定した。

単なる駐輪施設であるが都市的状況を示す接触と循環の場所である。

速度変化の可能性は加速にあるのではなく、接触により生み出される減速に見出される。地表に対する大きな抵抗である接触を固定する建築行為も、動的関係ではないが減速を目的とするコミュニケーション行為である。また循環する日常的接触の場として、閉鎖的な状況となりがちな施設であるが側面を全面的に開放し、道路をはさみ隣り合う新幹線のプラットフォームと2階を同レベルとし視線が向き合う関係としている。

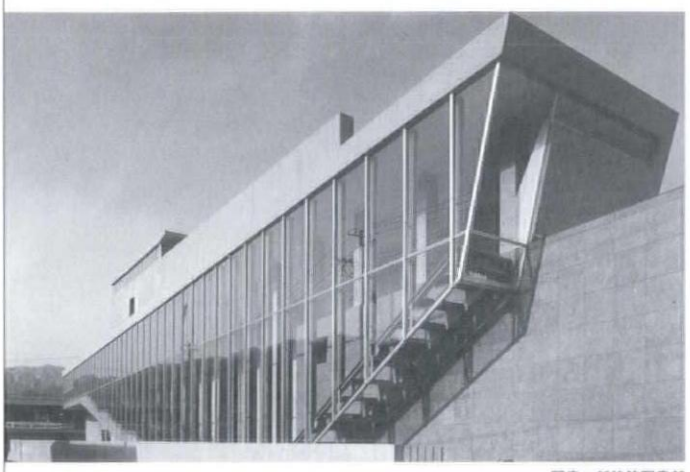
屋根・壁の一体化による連続性は、等質な要素の展開による還元性に対抗する希少な可能性を有している。

所在地：滋賀県坂田郡
建築用途：駐輪施設
共同設計者：清貞建築構造事務所
構造：RC造、S造
敷地面積：219m²
延床面積：325m²
竣工年：1994年

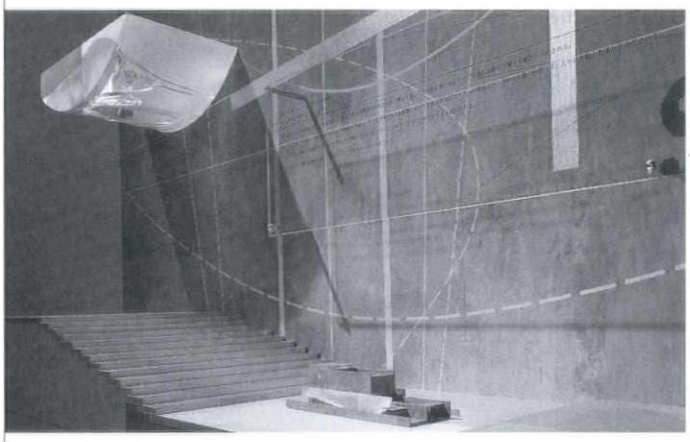
えんどう・しゅうへい
1960年滋賀県生まれ。遠藤秀平建築研究所主宰

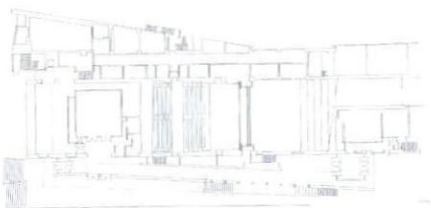
荻津郁夫

O-town Intercommunication Stage
(雄勝町総合文化会館)



写真＝新建築写真部





1階平面図

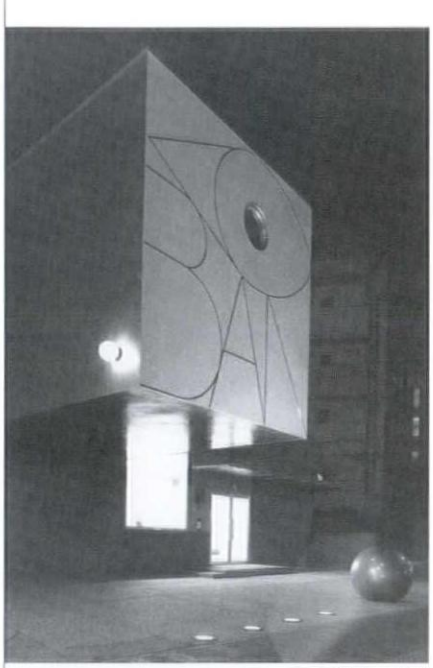
町の総合文化会館として、コンサートホール、図書館、公民館の機能が複合するプログラム。施設全体を、敷地を貫くひとつの「町のstage(intercommunication stage)」と捉えて、限られた敷地に、日常的に親しみやすい開かれた空間の実現を意図した。舞台の背面を開放可能として、平行する壁の間に、ホワイエ、客席、舞台、舞台背面のバティオ、段状テラスを連続させ、内部と外部とを一体化できる空間構成とする。壁に並行するガラスのアプローチ・コリドールも、町道から町役場へ通り抜けられる開かれた場とする。そして、日々の利用者が多い図書館をあえて最上階とし、ホワイエやギャラリーやコリドールがそこに至る経路となり、ホールでの催しのない日にも全館に活気がいき亘る計画とした。基本設計完了時が応募の時期で、その後設計・施工とも短期間で進められ、ほぼ当初のコンセプト通りに実現した。

所在地：秋田県雄勝郡
建築用途：コンサートホール（多用途利用）、図書館、公民館
共同設計者：村田弘建築設計事務所
構造：SRC造
敷地面積：3,790.68m²
延床面積：6,286m²
竣工年：1996年

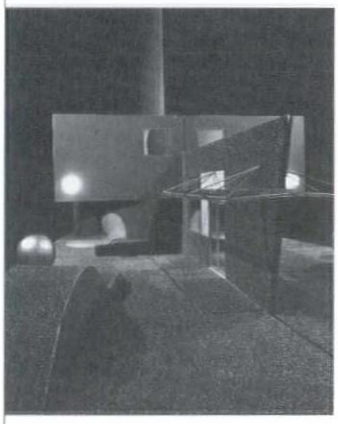
おぎつ・いくお
1954年秋田県生まれ。荻津郁夫建築設計事務所主宰

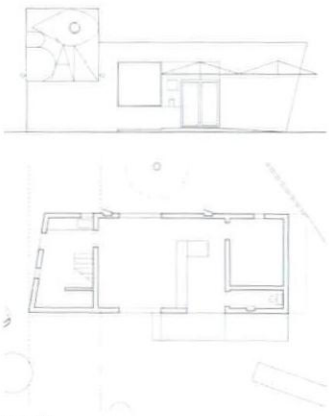
加茂紀和子+マニュエル・タルディッツ

KANBAN KOBAN（坪井交番）



写真＝大野繁





平面図

この建物は95年3月に竣工した。SDレビューに応募させていただいたのが、実施設計完了直前であったこともあって、ほぼそのイメージ通りに実現したと感じている。

交番という建物の所在を明示すること、パブリックスペースとしての都市空間をデザインすることがコンセプトであった。竣工後、この坪井交番は人々の間で目玉交番とか、ポッポちゃん交番の愛称で親しまれているという。建物は、ふたつの細長い筒状の箱が直交して積み重ねられ、かなり彫刻的な要素を持っているのだが、人々の認識はファサードに現れるいろいろな要素によるイメージによっている。商業的な手法を意図的に取り入れて、抽象的な形態に俗っぽい色彩や、材質を付加させ、半人工半自然のオブジェクトを置いた。夜景は、ライトアップされたKOBAN面、赤色灯、執務室の窓明かりによって、ますますビルボードとしての役割が強調される。

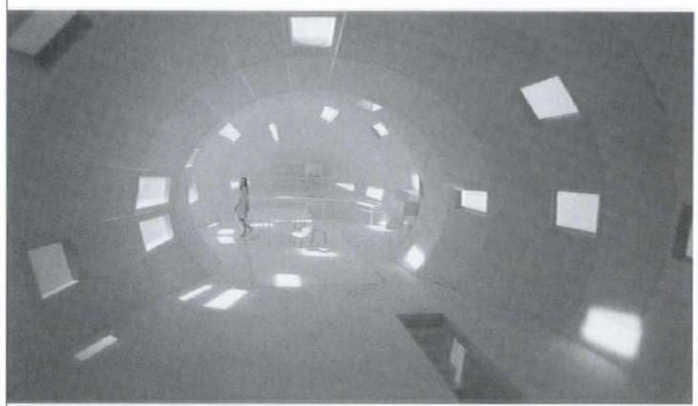
所在地：熊本市坪井町
建築用途：交番庁舎+倉庫
構造：RC造+S造
敷地面積：647.4m²
延床面積：183.7m²
竣工年：1995年3月

かも・きわこ
1962年福岡県生まれ。応募当時セラヴィ・アソシエイツ代表。現在みかんぐみ共同主宰

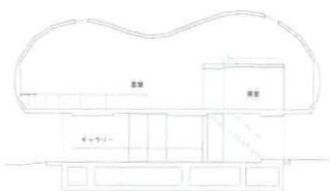
Manuel Tardits
1959年パリ生まれ。応募当時セラヴィ・アソシエイツ代表。現在みかんぐみ共同主宰、筑波大学外国人講師、（専）ICSカレッジオブアーツ講師

城戸崎和佐建築設計事務所

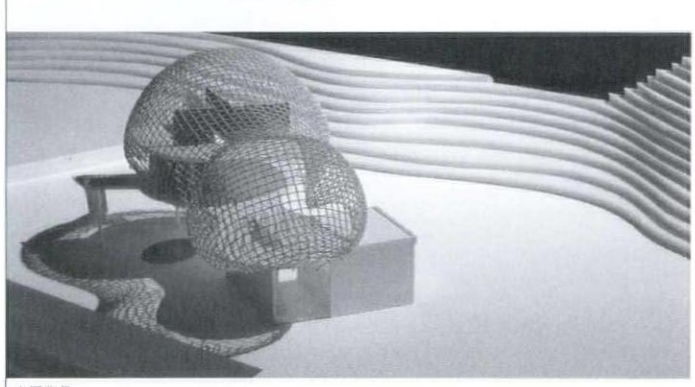
K邸（ピーナツハウス）







写真（上2点）＝淺川敏



出展作品

浮遊する空気

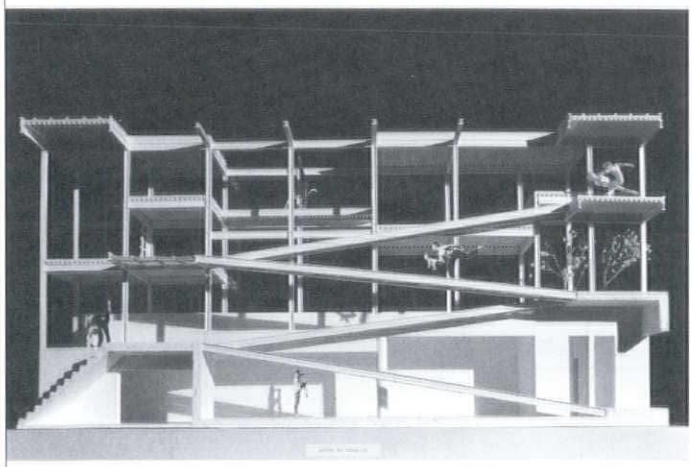
枚方市郊外の住宅である。かろうじて自然林の残る斜面と川にはさまれた谷間の敷地に、ぽかんと浮かぶ雲のようなヴォリュームを生活空間にしようと思った。ピーナツの構造は、当初、木格子シェルのようなものを想像していたが、表面を覆う四辺形のパネルそのものを構造化する提案から、リブのない内部空間の実現が可能になった。1mピッチに立てた相似形の楕円の、周長をそれぞれ24等分した点をつないでできる四辺形をひとつのパネルの単位とし、木枠に12mmの合板を両面貼りしたフラッシュパネルを相互に接合する。ここでは構造がフレームの痕跡を残さず、ヴォリュームの表面となり、ピーナツ型の空気だけがそこに存在することになる。2回にわたる予算調整で、ピーナツのヴォリュームは2割ほど小さくなり、1階は玄関を兼ねたギャラリーの単純なボックスになった。このことによって、1階と2階の空間の対比と、補完しあう生活のイメージはより明確になった。

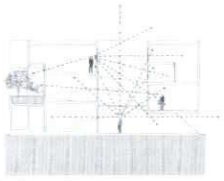
所在地：大阪府枚方市
建築用途：住宅
共同設計者：姜美華（旧所員）、飯田恵美（旧所員）
構造：RC造、木造
敷地面積：1,415.38m²
延床面積：150.70m²

きどさき・なぎさ
1960年東京生まれ。城戸崎和佐建築設計事務所代表

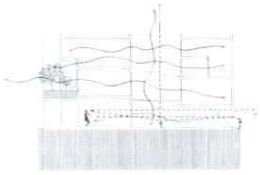
中村勇大／中村勇大アトリエ

西陣の家

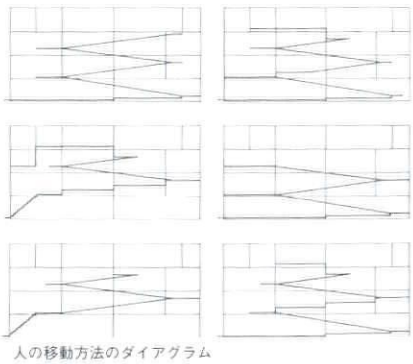




視線の抜け方ダイアグラム



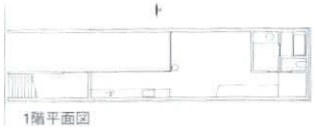
風の抜け方ダイアグラム



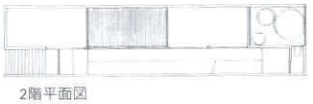
人の移動方法のダイアグラム

家に対する考えが、クライアントとなかなか合わないまま、計画が中断された状態で現在に至っています。

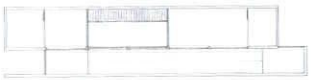
所在地：京都市上京区
建築用途：専用住宅
敷地面積：99m²
延床面積：197.64m²



1階平面図



2階平面図

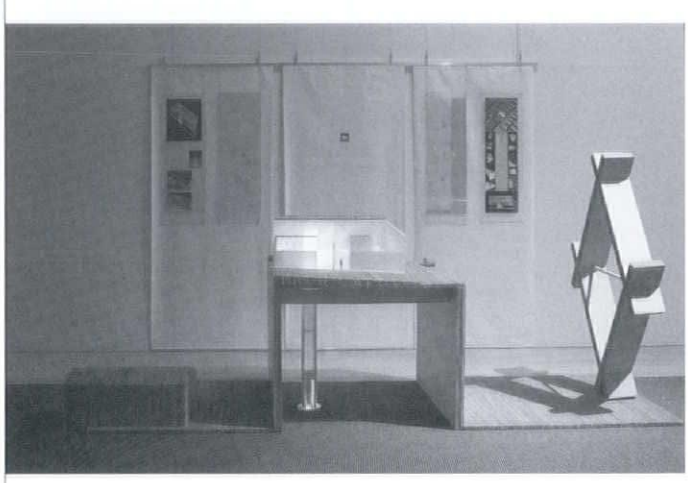


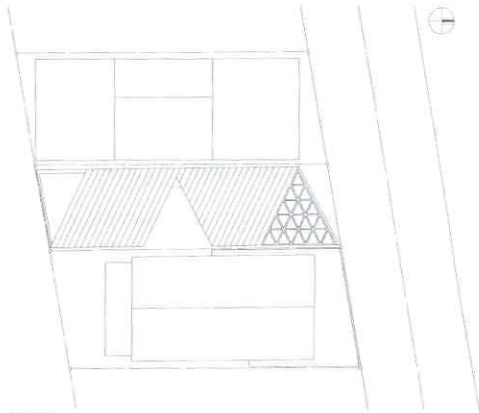
3階平面図

なかむら・いさむ
1959年京都市生まれ。中村勇大アトリエ主宰。京都芸術短期大学専任講師

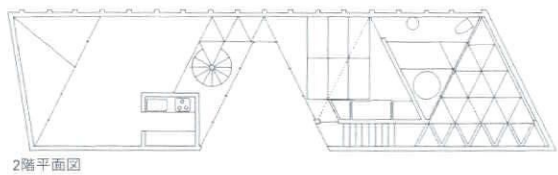
花田勝敬+大西直子／ウイング建築事務所

H邸

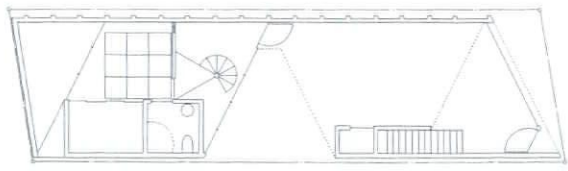




配置図



2階平面図



1階平面図

ディテールまで練り込まれたシンプルな緊張感の中に、豊かな空間性の実現を私たちは楽しみにしていたのですが、建築確認申請認可を終え、工事請負契約を目前にして、土地の問題から中断のやむなきに至り、とても残念な気持ちでおります。

所在地：東京都世田谷区
建築用途：週末住宅兼ゲストハウス
構造：RC造+木造
敷地面積：124.47m²
延床面積：89.63m²
竣工年：1995年8月

はなだ・かつのり
1945年東京都生まれ。応募当時ウイング建築事務所所長。現在HAN環境・建築設計事務所所長

おおにし・なおこ
1966年愛知県生まれ。応募当時ウイング建築事務所所属。現在内藤廣建築設計事務所所属

三栖邦博+浜田明彦+安田幸一+持田英明／日建設計

POSCO 21 Pohang Project





平面図

韓国の東海岸の街、浦項の丘陵地帯がロケーションであったこの「フライング・チューブ」も、基本設計が終了した後、その実現が見送られた。その理由は、「クライアントの内部事情」という一言に尽きるが、韓国を代表する企業がある種の軋轢に巻きこまれた余波である様に聞いているが、定かではない。韓国のグローバルな経済基盤を築きあげた原動力となった製鉄メーカーのポスコ。このポスコ発祥の地の丘陵で、「鉄のフレーム」が宙を飛び、未来への躍動感を象徴する。と同時に、建設に伴う自然破壊を最小限に抑え、光・風といった自然エネルギーを利用しライフサイクル・コスト、CO^2を最小限におさえたこのプロジェクトは、今で言うエコロジー・ビルの先駆となるものであり、5年前の時点で世に問うのは、やや早すぎたという感もある。（浜田明彦）

所在地：韓国浦項市
建築用途：事務所ビル（本社ビル）
構造：RC造
敷地面積：約8ha
延床面積：120,140m²

みす・くにひろ
1941年神奈川県生まれ。日建設計所属

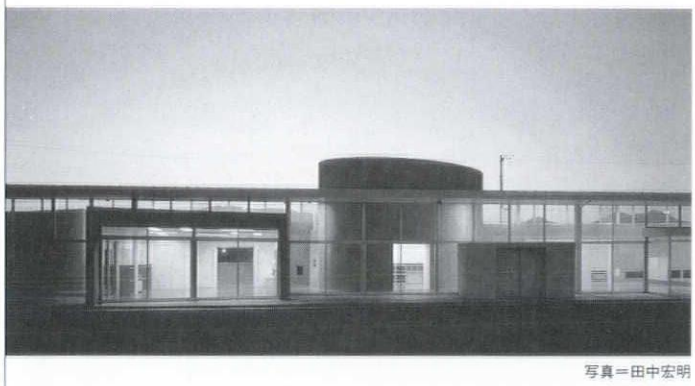
はまだ・あきひこ
1953年東京都生まれ。日建設計所属

やすだ・こういち
1958年東京都生まれ。日建設計所属

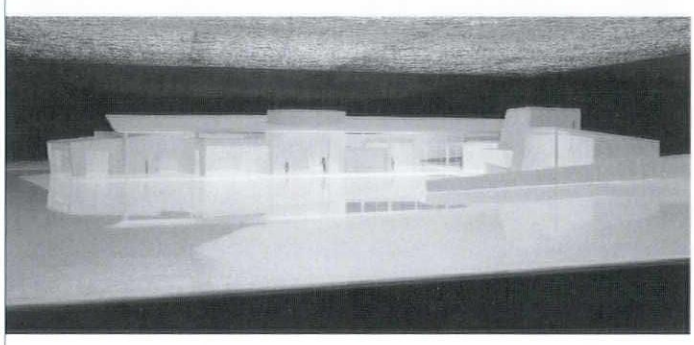
もちだ・ひであき
1964年山梨県生まれ。日建設計所属

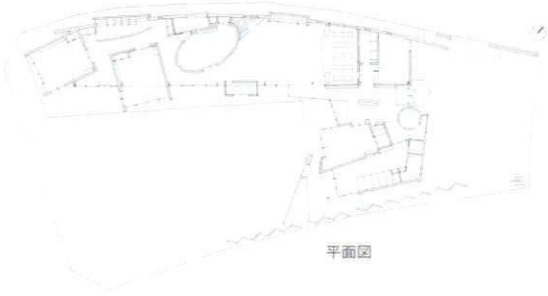
堀池秀人+益田滋子／堀池秀人都市・建築研究所

STREAM（白石市北保育園）



写真＝田中宏明





平面図

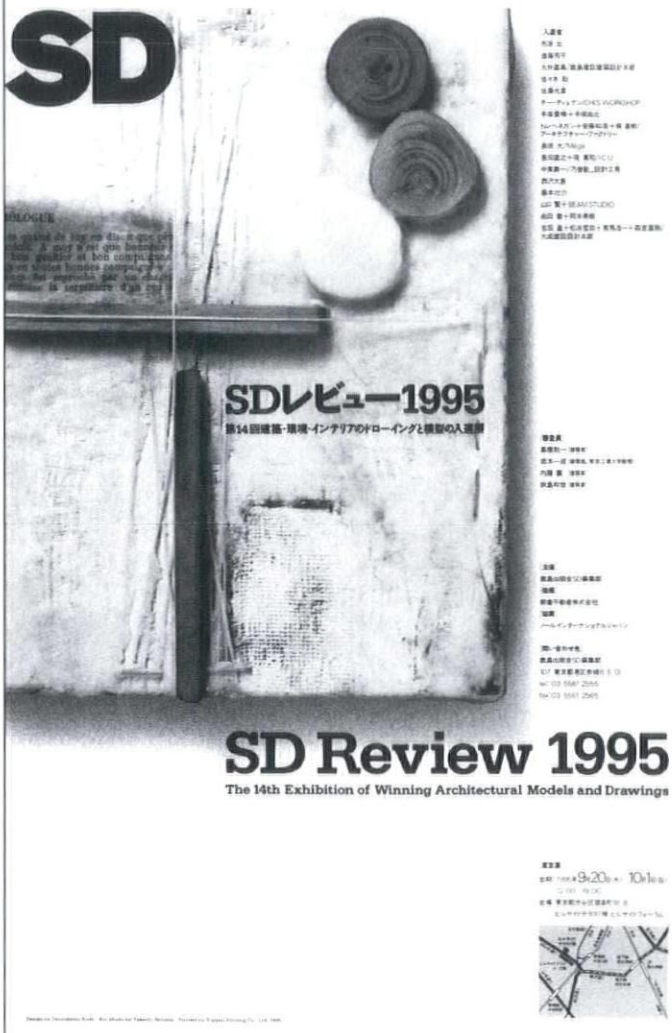
この頃から審査員の寸評を掲載してくれるようになり、審査員の目の付け所や考え方などが公表されることで読者や応募者にとって親切な内容となった。我々も、目利きの審査員のコメントをつつましく受け止め、既に着工後のことではあったが、再度模型で検証する作業を行ったことを覚えている。結果的にほとんど修正・変更はなされなかったが、屋根を浮かせた表現にしていたことで、ストリーム＝気流の存在を感じさせるといった、当初の我々の狙いはかなりのレベルで完遂できたようには自負している。今でも楽しみに時折のぞきに行かせていただき、子供達がのびやかに動き回る姿に充分に手応えを感じてはおりますが、ご指摘のようにプラン形がエンドで止まっている点について、平面状でも文字通り抜くべきだったのかは、もうしばらく時間をかけて観察する中から帰納してみたいと考えているところです。いずれにしても、こうしたやりとりが、とかくアトリエ内の密室的な作業に終始しがちな設計行為に新たな可能性の一面を拓いていこうとしていることは間違いないでしょう。

所在地：宮城県白石市
建築用途：保育園
共同設計者：益田滋子
協力：鈴木義一、船橋弘平、山崎勝己、柳沼昌弘、春原秀貴、長谷部勉／(株)堀池秀人都市建築研究所
構造：RC造、S造
敷地面積：1,770.24m²
延床面積：580.40m²
竣工年：1995年7月

ほりいけ・ひでと
1949年長崎県生まれ。(株)堀池秀人都市・建築研究所代表

ますだ・しげこ
1956年和歌山県生まれ。(株)堀池秀人都市・建築研究所所属

第14回　1995年



デザイン＝工藤強勝

東京展：9月20日～10月1日

ヒルサイドテラスF棟ヒルサイドフォーラム+朝倉ギャラリー

審査員：高橋靗一、坂本一成、内藤 廣、妹島和世

応募総数：186作品

入選数：16作品

受賞者：

由 田徹+岡本美樹（鹿島賞）

季鐵男／CHI'S WORKSHOP（朝倉賞）

トム・ヘネガン+安藤和浩+梶 直樹／アーキテクチャー・ファクトリー（SD賞）

市原 出　IC2

遠藤秀平　TRANSTATION大関

大林直高／**KAJIMA DESIGN**　S Building Project

佐々木聡+中村宏美　本宮の家：ひとつ屋根の下設計MEMO

佐藤光彦　Mホテル計画

季 鐵男／**CHI'S WORK SHOP**　Z邸

手塚貴晴+手塚由比　副島病院

トム・ヘネガン+安藤和浩+梶 直樹／アーキテクチャー・ファクトリー　灰塚ダム湖畔の森：三良坂町キャビン

長坂 大／**Méga**　MANSION 26

長田直之+筏 真司／**I.C.U.**　HIYOKO HOUSE

中東壽一／乃普創..設計工房　木屋舎

西沢大良　小平のハウス

藤本壮介　S病院作業療法棟

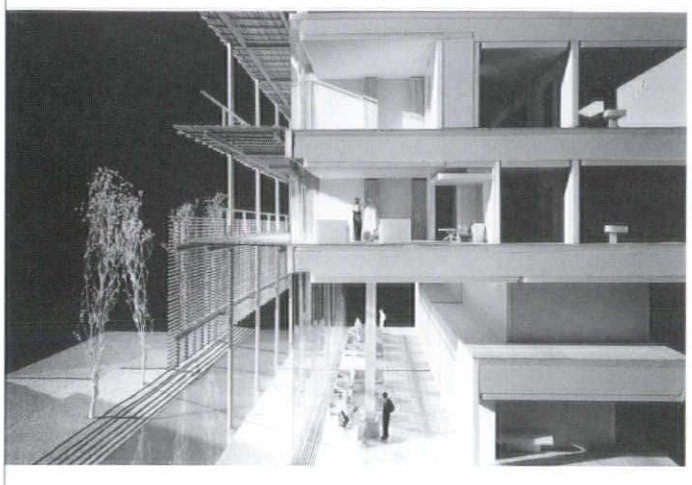
山口 賢+**BEAM STUDIO**　OnO HOUSE

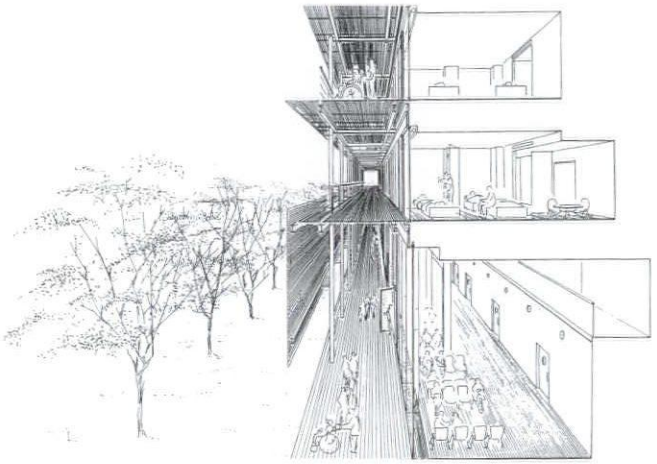
吉田 進+松本哲弥+有馬浩一+森吉直剛／大成建設設計本部　Project Q

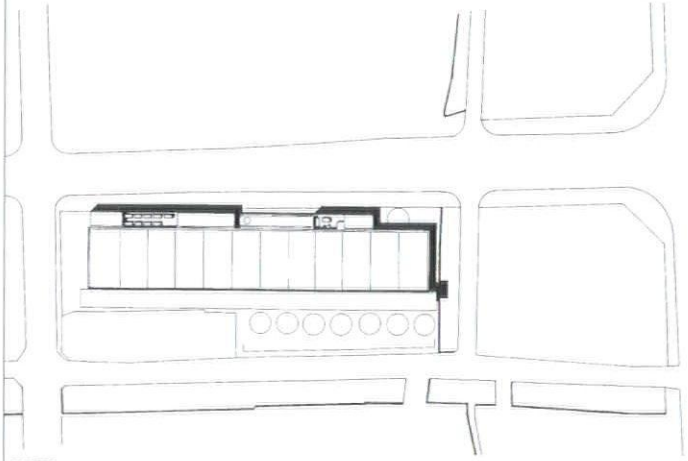
由田 徹+岡本美樹　プラスチックハウス

手塚貴晴+手塚由比

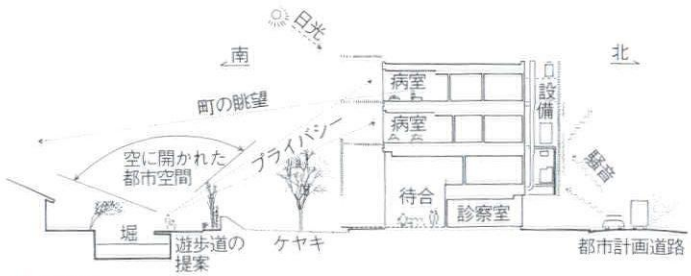
副島病院







配置図



コンセプト図

この作品は独立第1作である。すべてを捨て、ロンドンからスーツケースひとつで裸一貫帰国した我々にとって、SDレビューに入選できたことの意義は計り知れない。入選から1年後、完成した実作はSDレビューで展示した模型そのまま。コンセプトも全く失われていない。病院は患者に好評である。強いて設計変更した点を上げれば、コンセプト上重要度の低かった北側のルーバーが廃止になったことぐらいであろうか。

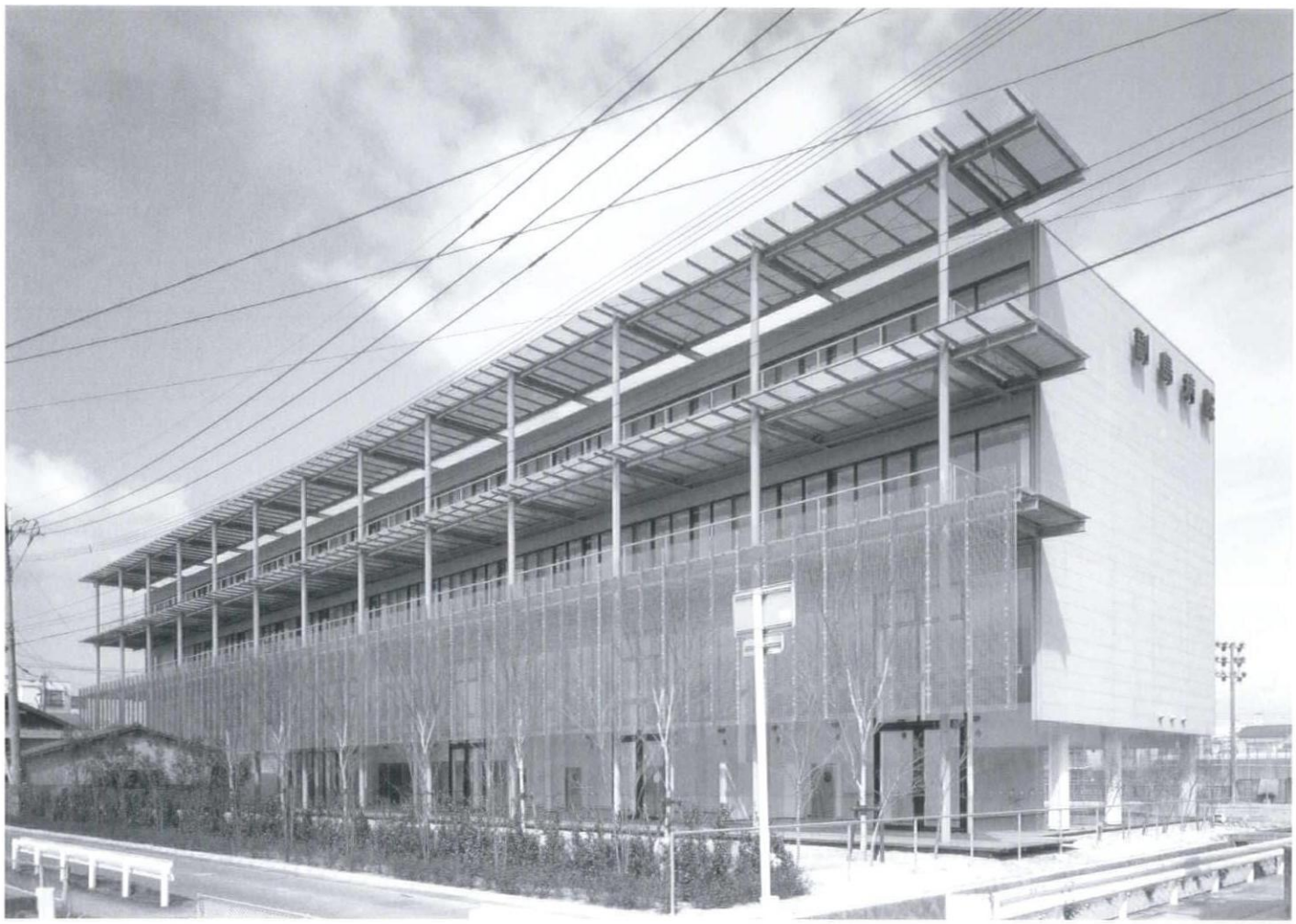
副島病院は敷地北側に寄せた横長の建物で、病室はすべて堀に面した南側に並んでいる。長さ78m、幅4mのルーバーバルコニーが直射日光を制御し、プライバシーを確保する。このルーバーがあるために、寝ている患者の街への視線を遮っていた腰壁が不要となった。

1階の待合いホールはルーバーに包まれた明るいコロネードと平行し、診察を待つ人びとの心を和ませる。

所在地：佐賀県佐賀市
建築用途：病院
共同設計者：鹿島建設九州支店（構造・設備）
構造：S造
敷地面積：2,227.01m²
延床面積：4,079.48m²
竣工年：1996年3月

てづか・たかはる
1964年東京都生まれ。応募当時手塚建築企画主宰。現在武蔵工業大学講師、手塚建築研究所主宰

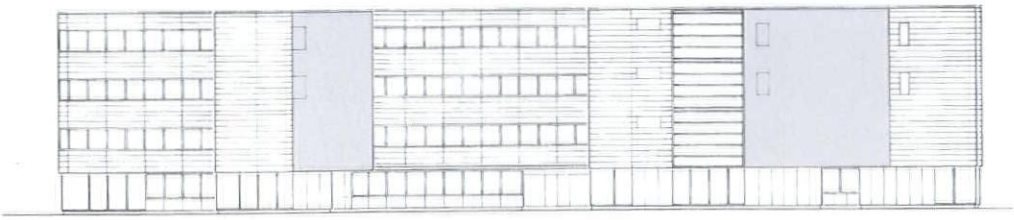
てづか・ゆい
1969年神奈川県生まれ。応募当時手塚建築企画主宰。現在手塚建築研究所主宰



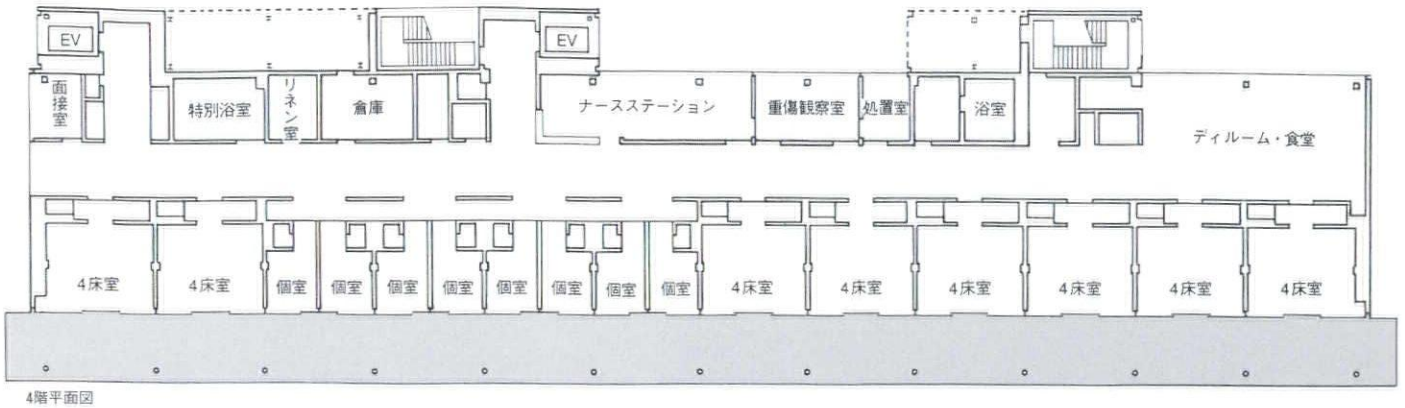
写真＝木田勝久



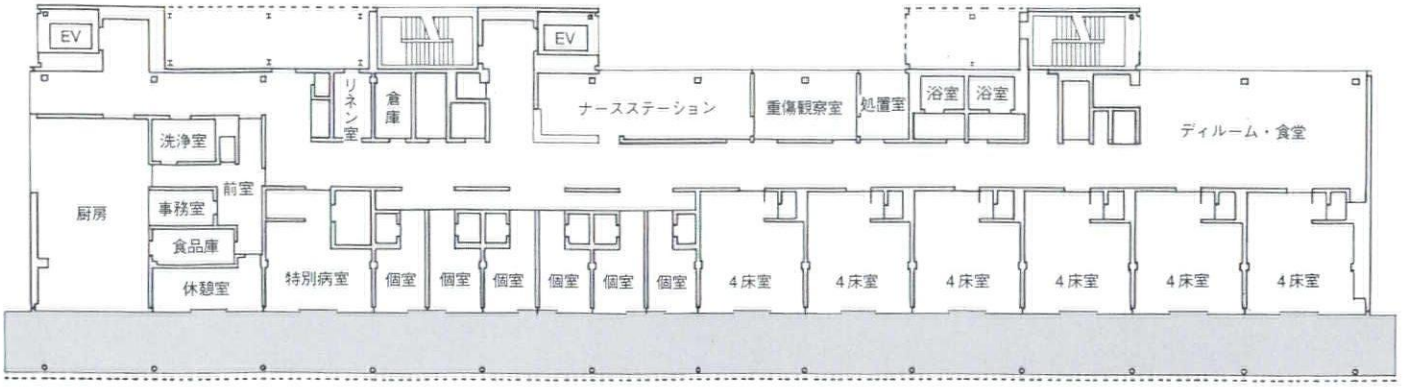
南側立面図



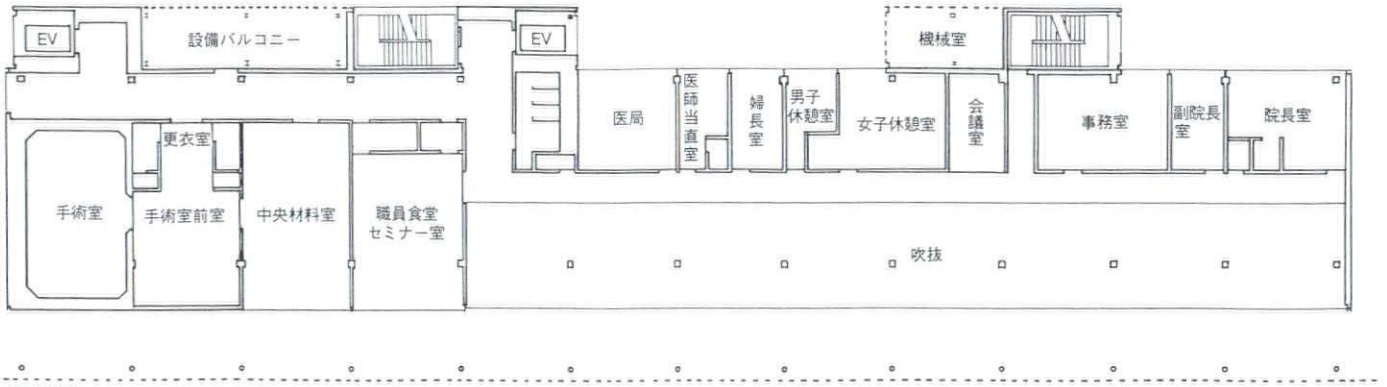
北側立面図



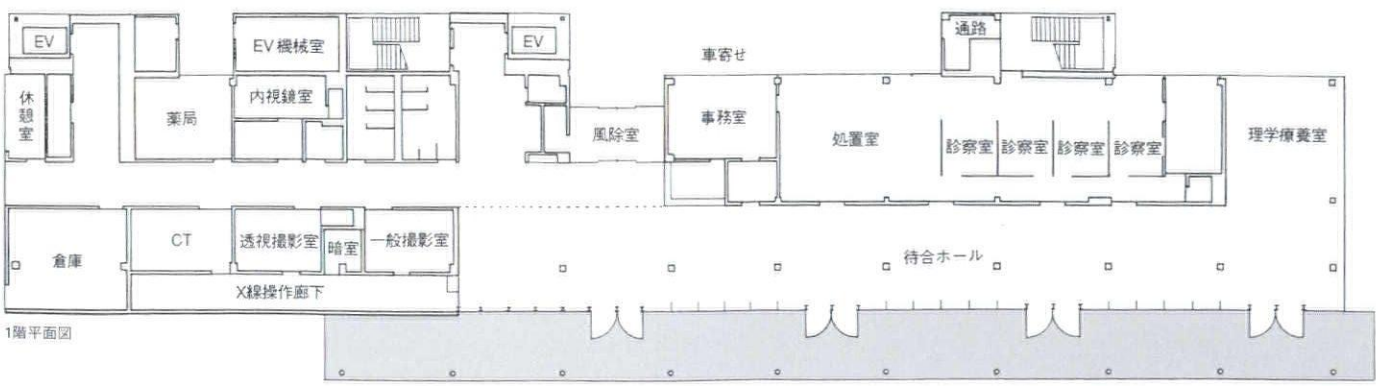
4階平面図



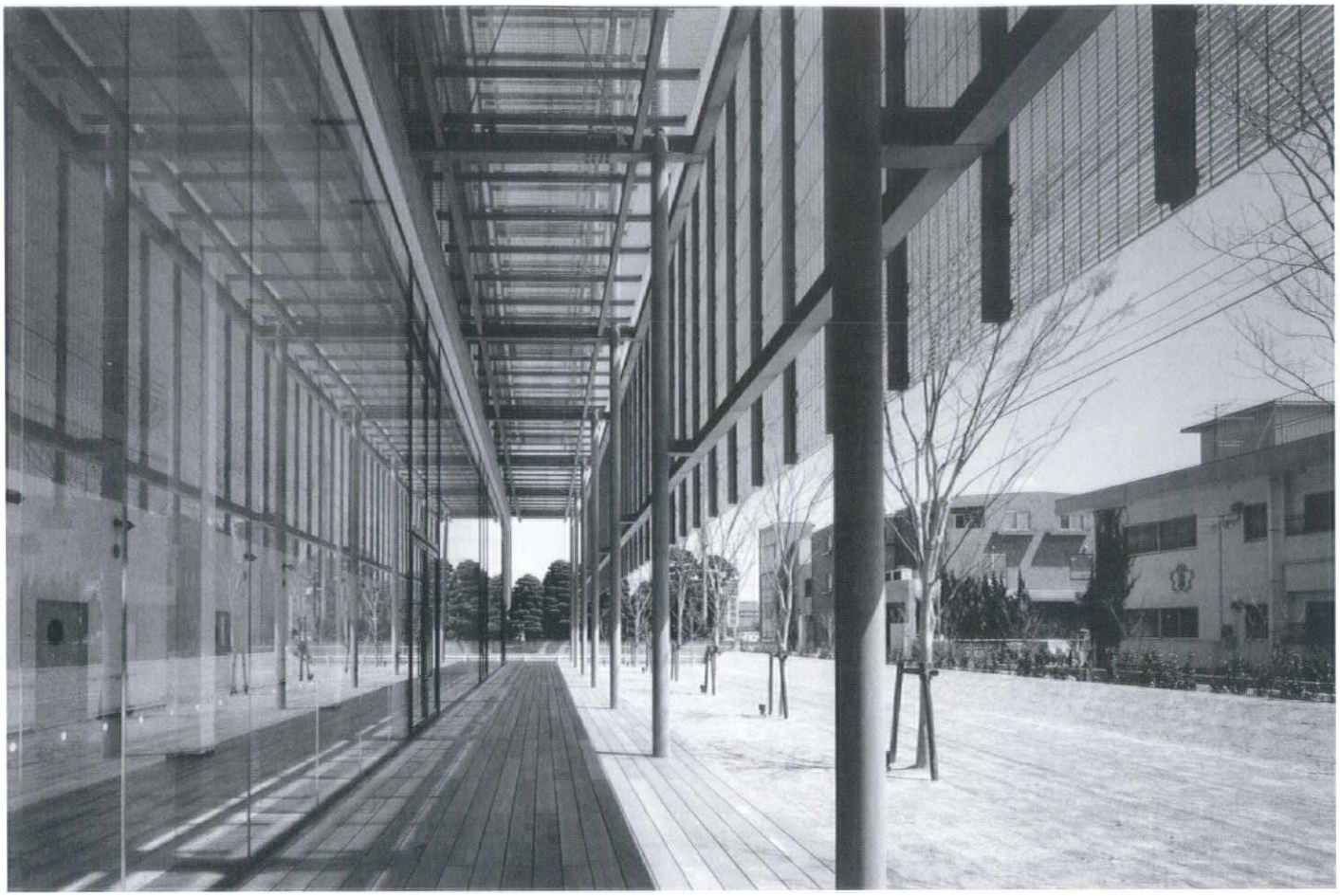
3階平面図

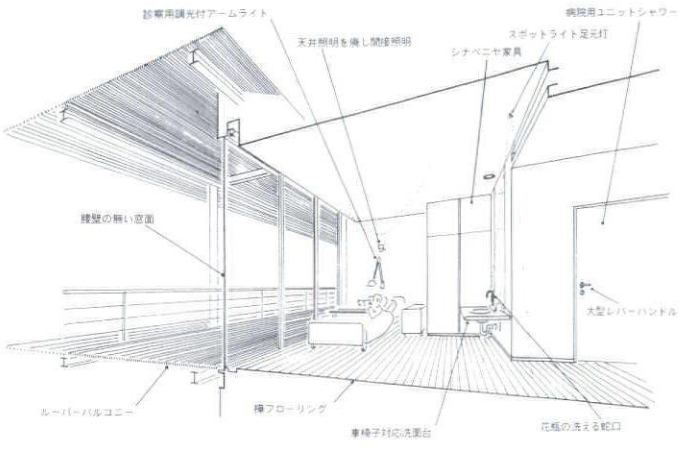


2階平面図



1階平面図





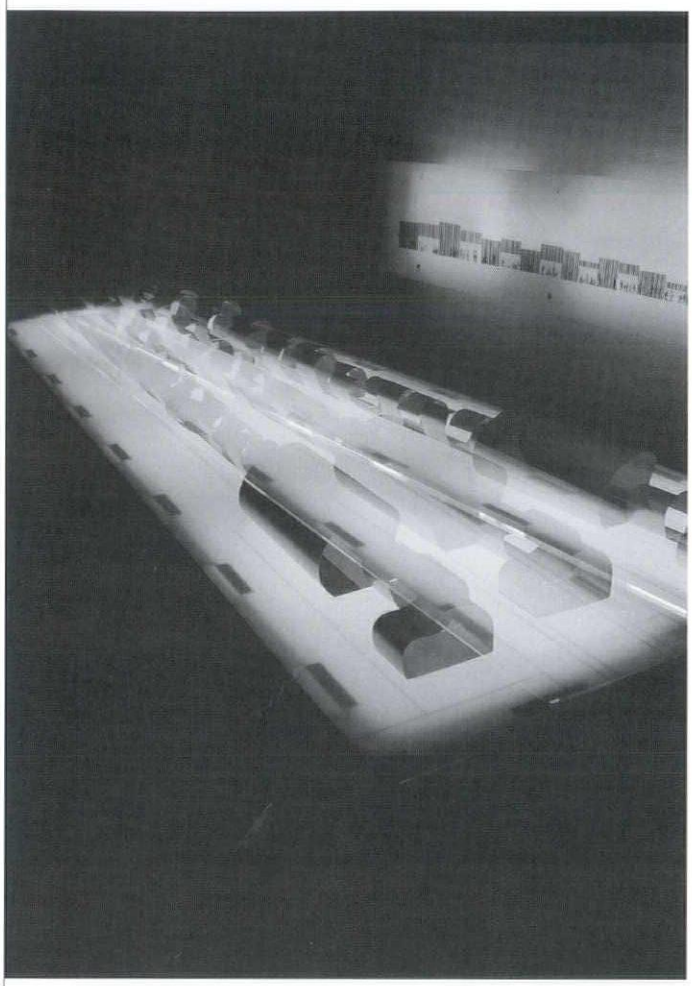


病室内観

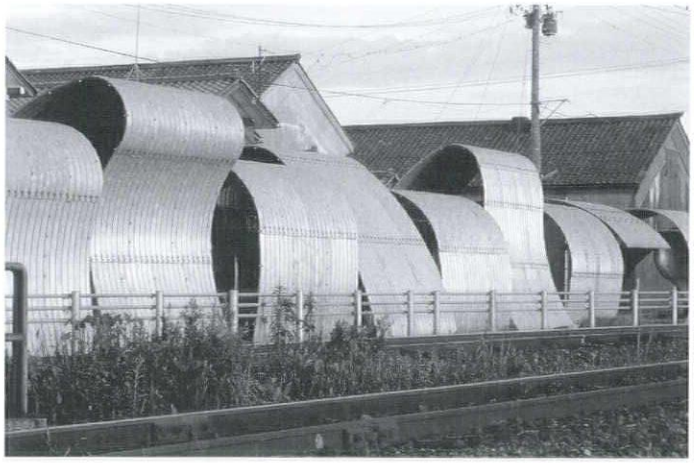
写真（2点とも）＝新建築写真部

遠藤秀平

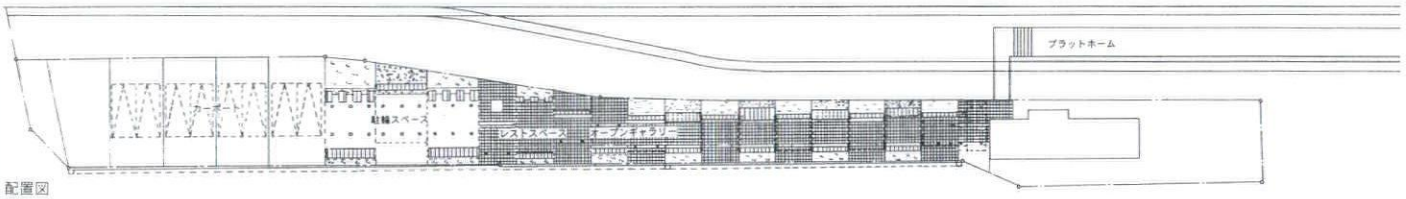
TRANSTATION大関（TRANSTATION大関［京福電気鉄道大関駅］）







写真（右2点）＝北嶋俊治



配置図

不連続共有体

この計画は地方の無人駅の機能拡張への関与である。極端な利用者の減少への対策と地域の活性化とを目的に推進された。無人駅の機能は単純であるが、新たな介入を設定することによる地域の人達の接点としての状況づくりが望まれた。駅が有する「定刻の制度」と、多数の人々の「離散集合」とに触発され「接触による共有意識」の発生を試みた。

敷地は線路に平行し線的特質を強く有しており、電車の運行により持続される均質な連続性と共に目的遂行による快感を生産し、関与するものを振り払う排除と加速への誘惑が増殖している。そこで、多くの分節化された壁面による不連続体とし、間隙により生み出される接触による減速機構へと変換した。ここに発生する不連続な接触の共有が新たな公共性を生み出してくれる。

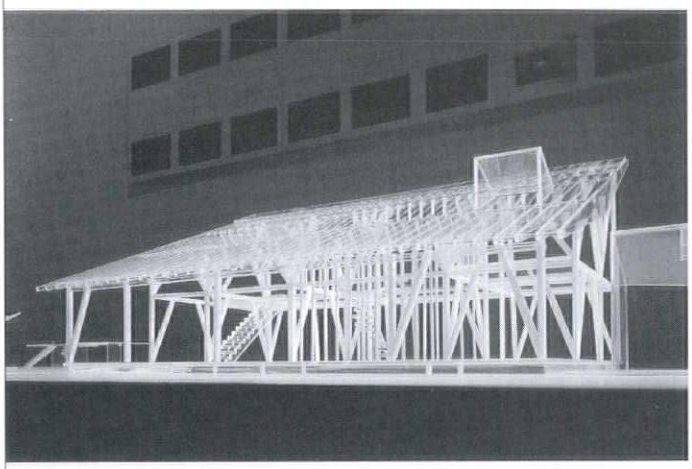
コルゲート鋼板による屋根壁一体型の設定は過剰な形態の選択ではあるが、展開可能な状況設定こそ、プログラムとしての共有されるべき可能性と強度を示している。

所在地：福井県坂井郡
建築用途：駅舎
共同設計者：清貞建築構造事務所、第一技術開発
構造：波形鋼板構造
敷地面積：825m²
延床面積：365m²
竣工年：1996年12月

えんどう・しゅうへい
1960年滋賀県生まれ。遠藤秀平建築研究所主宰

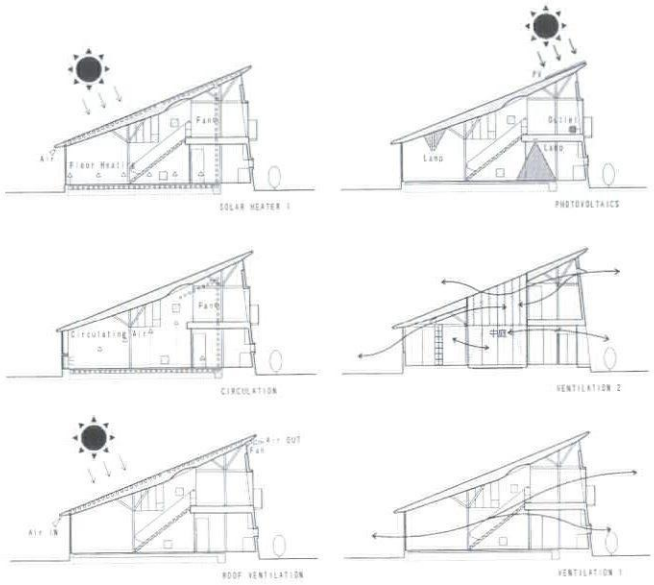
佐々木 聡+中村宏美

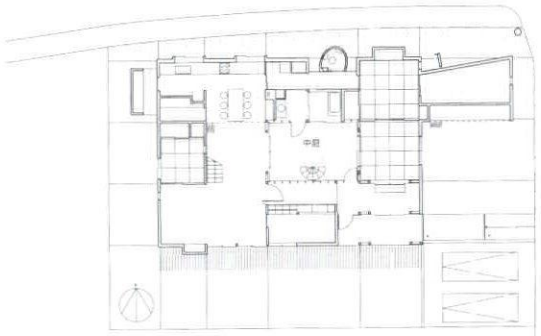
本宮の家：ひとつ屋根の下設計MEMO（本宮の家）





写真＝SGM環境建築研究所





1階平面図

勾配屋根が条件のひとつである建築協定に対し、この家の屋根は自然エネルギーを取得し、生活エネルギーへと変換する環境装置として捉えている。そのエネルギーは電気（太陽電池）、温熱利用（空気式床暖房）などにより、寒冷地での良好な熱環境を保持するオープンスペースを構成し、住み手の生活に展開を与えている。さらに協定で塀などの囲いをつくれない設定にプライベートな外部＝中庭をつくり、生活動線や視界に広がりをもたせた。ガラス張りのこの庭が、自然採光、通風に大きな役割を果たしていることは言うまでもない。

景観的デザインを優先するあまり個別の生活を制御したり、逆に個別性をうたう事で社会的ルールに違反するなどの矛盾を、自然エネルギーの確保を軸とした「ひとつ屋根の下」で一体的に捉えた意識を表現したかった。レビューの出展時には設計から工事へと向かう段階にあり、予算的に削除された太陽電池を最終的には設置するにこぎつけたことは意義があったと思う。

所在地：福島県安達郡
建築用途：住宅
構造：木造
敷地面積：433.66m²
延床面積：234.09m²
竣工年：1996年5月

ささき・さとし
1959年茨城県生まれ。SGM環境建築研究所主宰

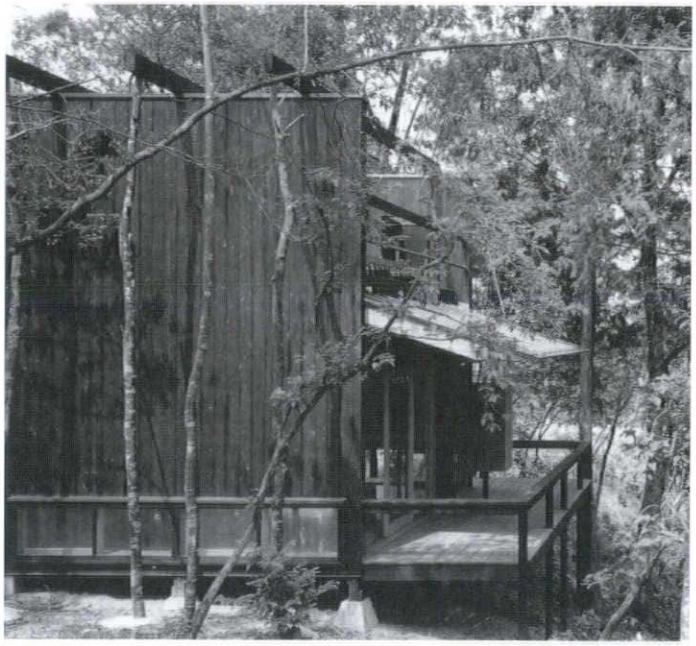
なかむら・ひろみ
1961年神奈川県生まれ。ファーストコミュニケーションズ所属

トム・ヘネガン+安藤和浩+梶 直樹／アーキテクチャー・ファクトリー

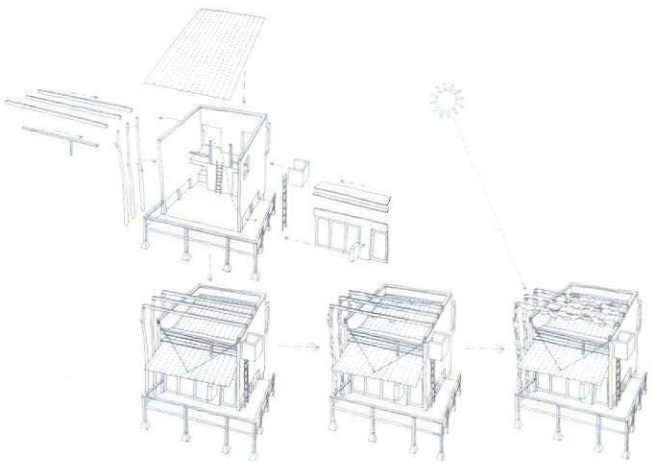
灰塚ダム湖畔の森：三良坂町キャビン（三良坂町コテージ）

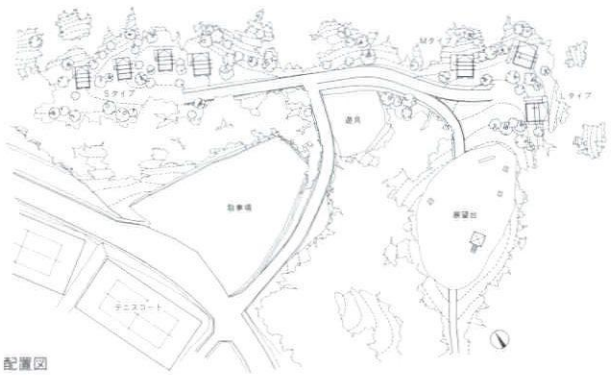
SD賞





写真＝新建築写真部





配置図

馬洗川の渓谷を望む、美しい森のなかにあるこのキャビンは、子供達のための夏期宿泊施設である。アカマツとアシビの原生林に見え隠れする小さな建物は、キュービックな形態を与えられ、周辺と建築の対比を作りだすことでアイデンティティを得ている。その上で建物が提供する経験を通じて、このキューブと周辺環境を縫合していくことを試みている。

建物は、天井の高い主室とロフトから成りたっている。主室の地窓は、周辺の森と、室内空間を視覚的につなげるものであり、かつ、上部ロフトの窓へ風を抜く自然換気を行なうために計画された。また、谷川に向かって傾斜する屋根面と、その上に影を落とす外壁は日射による輻射熱を避けるためのしくみである。

テラスからはしごで屋根の上に登った子供達は、周囲の木々と同じ高さに座り、谷を見下ろし、そして夜には星を見上げる。ベンチの上の3本の梁はキューブの横に立てられた3本のアシビの木につながれている。その根元に植えられたツタはやがて梁に到達するまでに成長し、夏の強い日差しから子供達を守る「パーゴラ」となるだろう。その時このツタは、小さなキューブを森の中に溶け込ませる建物の一部となる。

私達は、この小さくシンプルなキャビンが、訪れた子供達にさまざまな予期せぬ体験を与えると同時に、風土や気候に敏感に反応する機能を持つ、ファンタシー・ボックスとして計画した。

このコテージの建設は1995年SDレビュー展が開催される数日前に完了し、完成した建物は展示されたドローイング通りのものとなった。数カ月の後に、三良坂町よりさらに4戸の設計依頼があり、Sタイプに隣接してLタイプ2戸、Mタイプ2戸が建設された。それらはオリジナルのSタイプをもとにしたバリエーションとなっている。

所在地：広島県双三郡
建築用途：青少年宿泊施設
共同設計者：一条 典／構造設計舎
構造：木造在来工法
敷地面積：6,040m²
延床面積：28.35m²
（1階22.275m²、ロフト6.025m²）
竣工年：1995年7月

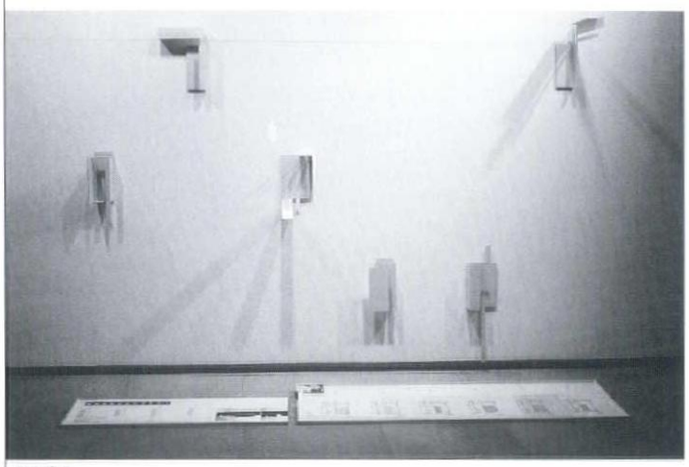
Tom Heneghan
1951年イギリス・ロンドン生まれ。アーキテクチャー・ファクトリー主宰

あんどう・かずひろ
1962年東京都生まれ。アーキテクチャー・ファクトリー主宰

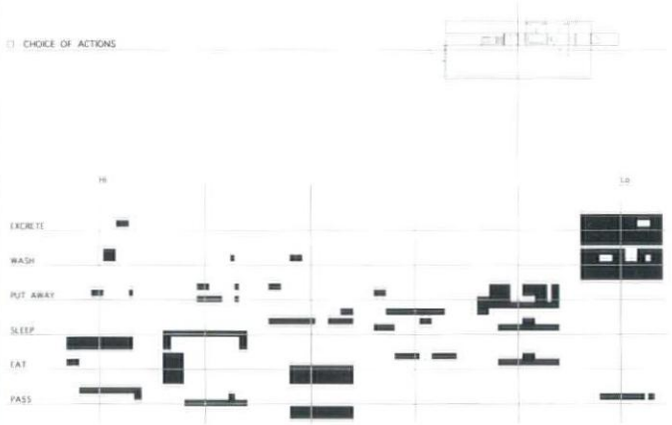
かじ・なおき
1965年神奈川県生まれ。アーキテクチャー・ファクトリー勤務

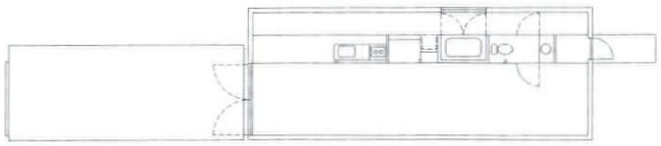
長田直之+筏 真司／I.C.U.

HIYOCO HOUSE

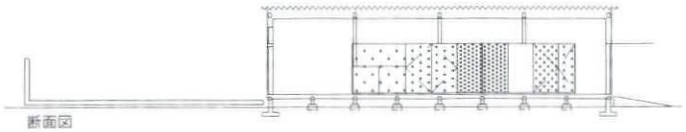


展示風景

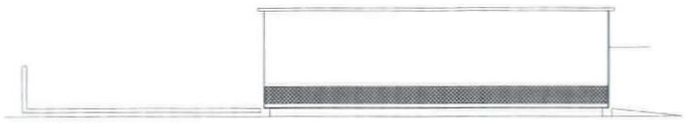




平面図



断面図



南東立面図



南西立面図　北東立面図

HIYOCO HOUSEは、八ヶ岳を望む別荘地に計画された週末住宅です。

我々は、ここで生活する人が、ある場所にある機能を固定してしまうような契機ができるだけ少なく、多様な行為が重層するような空間を作りたいと思いました。建築はある場所にある時間ある状態で存在しますが、それはさまざまな可能性のひとつにすぎません。空間の使用についてもそうです。ここが寝室であるのか廊下であるのかは、その行為の後でそう呼ぶことが初めてできるのです。通常の設計は行為と空間に一定の対応関係を想定しながら計画します。全く計画を排除することはできませんが、アルゴリズミックな方法によって、このような部分を可能な限り少なくしようとしたのが、このプロジェクトです。

残念ながらこのプロジェクトは、クライアントや工務店の充分な理解を得ることができず、全く異なった形で作られました。

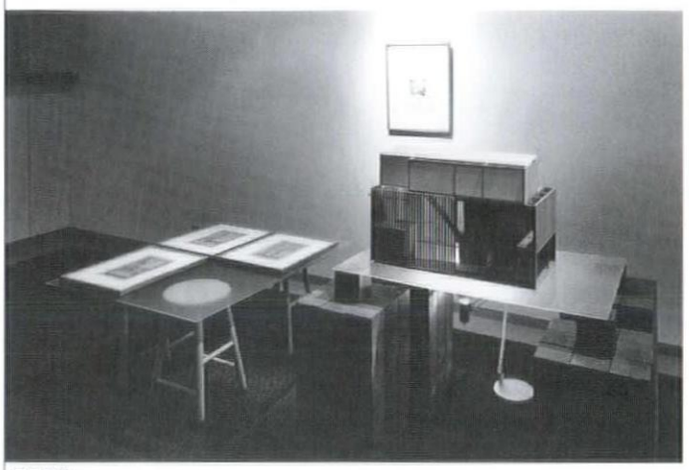
所在地：長野県南佐久郡
建築用途：週末住宅
構造：木造平屋建
敷地面積：1,095.1m²
延床面積：55.8m²

ながた・なおゆき
1968年名古屋市生まれ。I.C.U.主宰

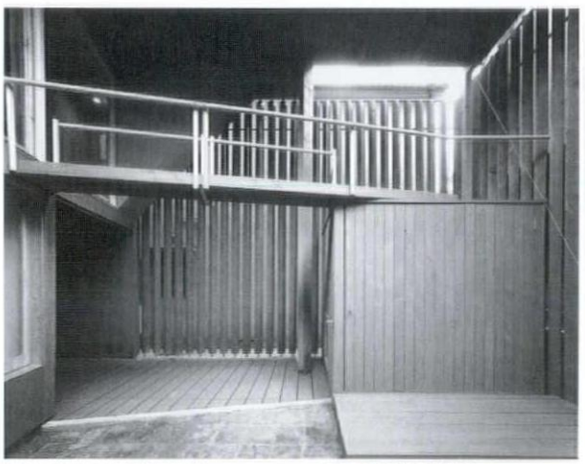
いかだ・しんじ
1967年富山県生まれ。応募当時I.C.U.主宰。現在atelier[ia:]主宰

中東壽一／乃普創..設計工房

木屋舎



展示風景



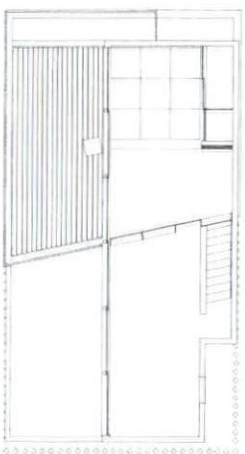
1階コート部、右手の扉は茶室　　写真＝高瀬良夫（GA Photographers）



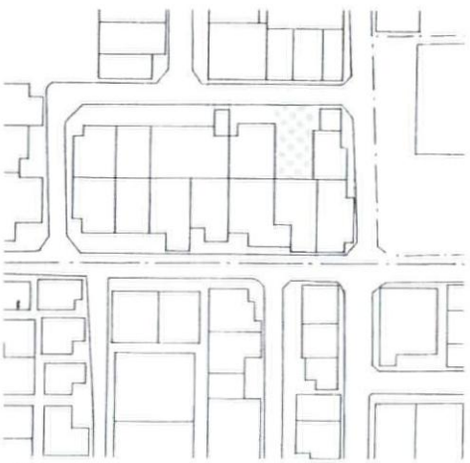
1階平面図



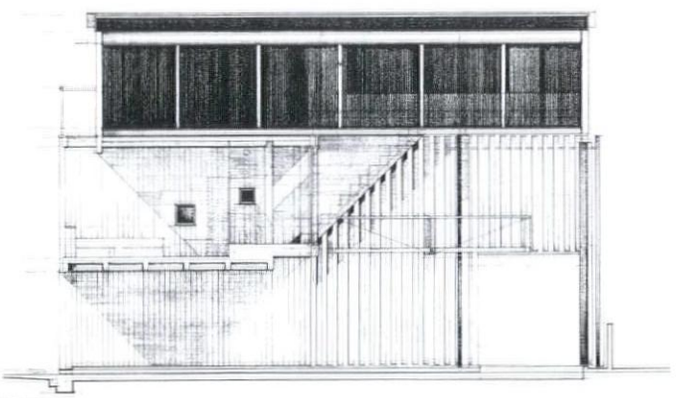
2階平面図



3階平面図



配置図



断面図

敷地は住宅密集地。南、東、西には隣家が近接している。北には幅4mの道路と対面する住宅がある。

面としての家々の甍からは、深さ6m、間口7m、奥行14mの直方体のくぼみが、この計画の敷地となる。
周辺の家々の甍レベルを地上と地下の境とし、重層する建物が地下に埋まっている。

そのヴォリュームは、地上に向かって各層ごとに拡大し、自然と対話する。架空のグランドレベルを設定し、隣家の壁面を土留めの壁としてドライエリアに舞い降りた限られた自然の粒子を外なる空間と内なる空間に同化させ、場のもつ固有の世界に導こうとした。

柱材を連続させて構成した、とざされた壁と、45度に振った柱材による連鎖スクリーンのすきまのある壁で囲まれた箱に、3層目の箱が周辺の甍から顔をのぞかせる。都市のくぼみに埋め込まれたこの箱には、密集地の間隙を縫って風が通り抜け、雨、光を取り込む。都市という劣悪な自然環境の中で、場所の持つ力を読みとり、造形化することで快適な居住空間を確保する。
それは都市に棲まい続ける決意を誘発し、楽しさに変わっていく。

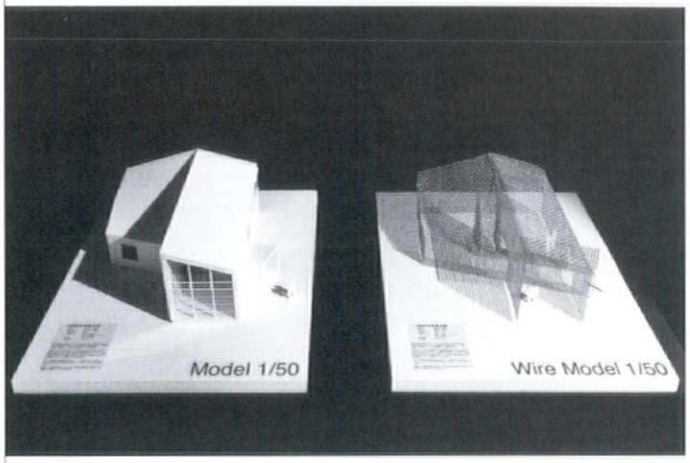
この建築は都市型住宅の特異解ではあるが、都市の中で場と自然が共存するひとつの方法として、実証できたと思う。

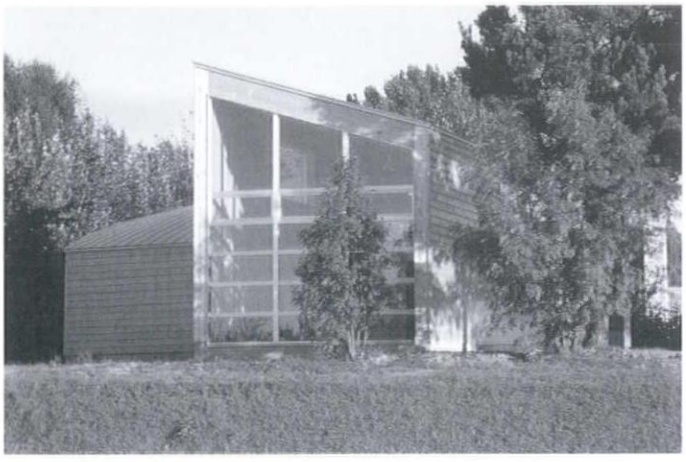
所在地：大阪府寝屋川市
建築用途：専用住宅
共同設計者：芦田行宏
構造：木造
敷地面積：96.24m²
延床面積：120.21m²
竣工年：1995年12月

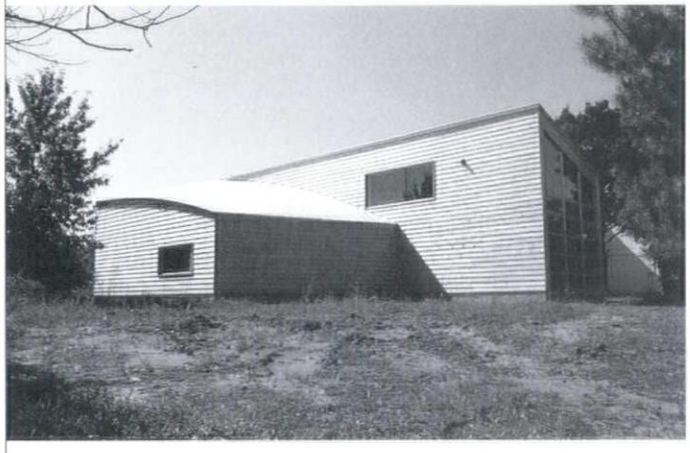
なかひがし・ひさかず
1951年大阪府生まれ。乃普創..設計工房主宰。
大阪工業短期大学非常勤講師

藤本壮介

S病院作業療法棟（聖台病院作業療法棟）









写真（左下、右2点）＝藤本壮介

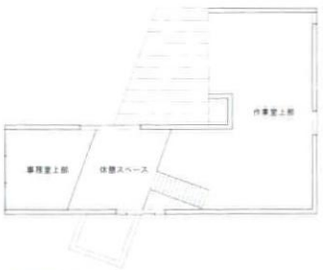
精神病院における作業療法のためのアトリエ的施設。

設計の主眼は、精神病院に特有の「管理者から患者へという方向性を持ったパノプティコン的空間」という悪習から脱し、精神病院空間の新しいあり方を模索することだった。

ここでは、ひとつの空間による非対称な環状空間構成、とでもいうもので応えている。ひとつの空間による構成は、ある種の共有感と建築的単純性を獲得する。また中心のない非対称な環状空間は、個々の場所に特徴を与え、動き回ることを誘発し、この小さな建物に大きさ以上の多様性を獲得する。この考えはSDレビュー1997に出展した〈D-HOSPITAL〉へと展開する（SD1997年12月号参照）。実施では、RCの躯体に外断熱を施し外壁は木で仕上げた。断熱にRCの蓄熱性を有効に利用すると同時に、木張りの素朴な外観が、変形切妻の形態とあわせて、田園の中の納屋のようなたたずまいで周辺の風景にうまく溶け込んでいる。

所在地：北海道上川郡
建築用途：精神病院作業療法棟
構造：RC壁構造
敷地面積：16,559m²
延床面積：181m²
竣工年：1996年9月

ふじもと・そうすけ
1971年北海道生まれ。フリーのアーキテクトとして活動中



2階平面図

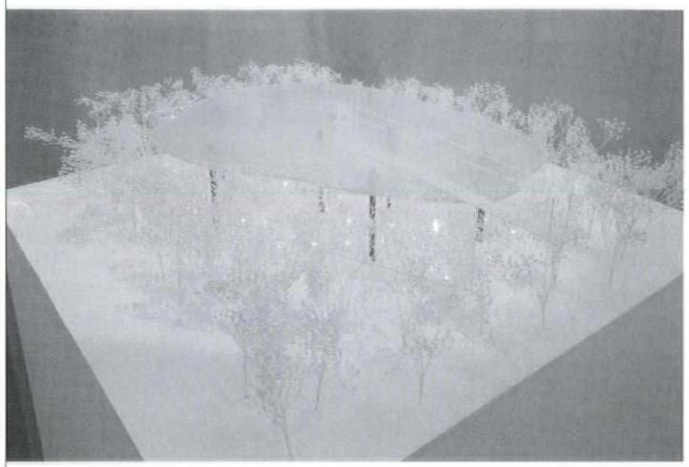


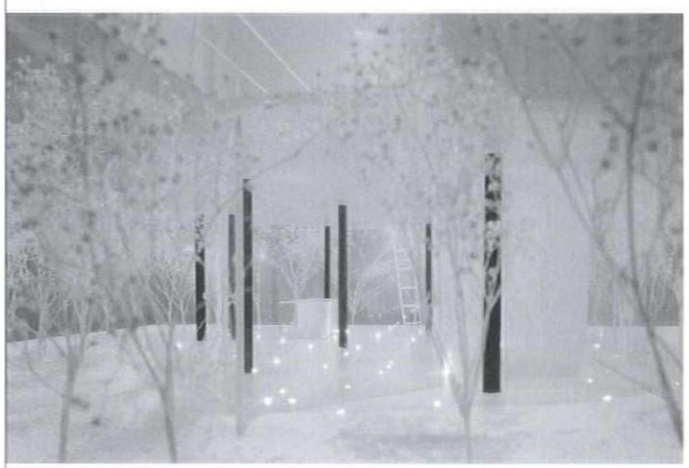
1階平面図

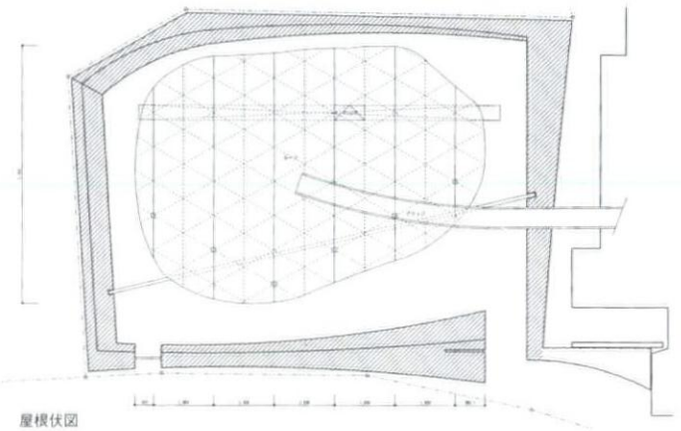
由田 徹+岡本美樹

プラスティック・ハウス

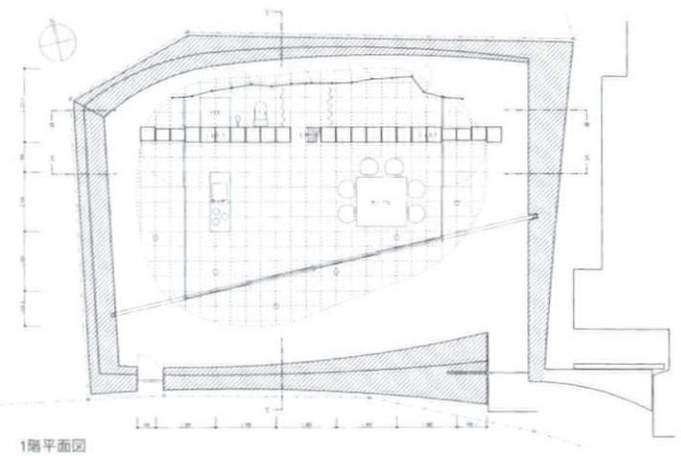
鹿島賞







屋根伏図



1階平面図

この住居は、小規模で最小限の設備が付いた住居の離れ屋として依頼されたが、敢えてこの中で完結した生活を営める様に計画した。建築的なあらゆる要素（構造、素材、プロセス）からできるだけ回避しながら、どの辺から「建築らしく」見えてくるのか、といったことに興味を持ちながら設計を進めた。実施設計の段階では、この計画に関わる人達にとって初めての仕様が多く、まったくの手探りで計画を進めたが、ひとつひとつの問題を解決してゆけば必ず実現すると確信していた。特に構造計算の相談をした時には、鉄柱にして更に屋根をワイヤーで周囲から吊らないと屋根が吹き飛ばされる可能性があると解答されたが、ワイヤーを使うのにはどうしても抵抗があり、構造事務所からソフトをお借りして自ら構造計算を行った。しかし材料発注というときになって、施主の都合によって計画が中断してしまった。この場所では実現できなかったが、いつかチャンスが在れば是非実現したいと思っている。そう言った意味でも、この計画からは建築家のスタンス、建築を作ることについて、さまざまなことを学んだ。

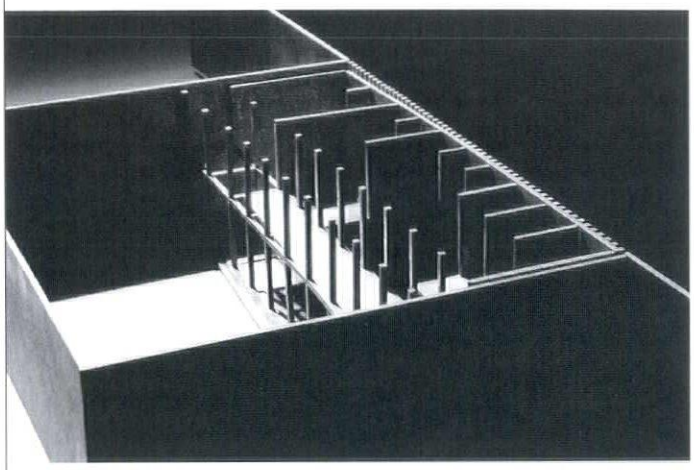
所在地：石川県能美郡
用途：専用住宅
構造：コンクリート土間スラブ+FRP
敷地面積：143.2m²
延床面積：62.3m²

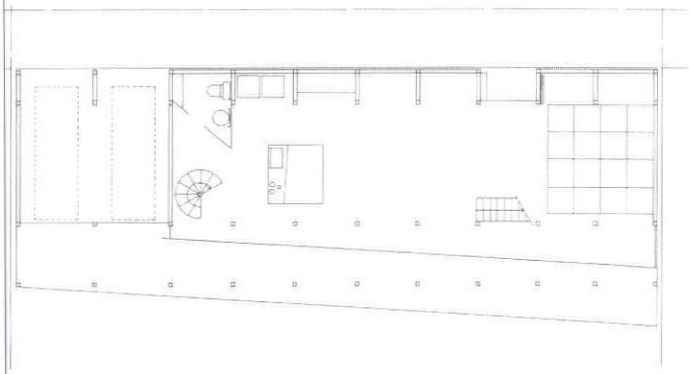
よしだ・とおる
1965年石川県生まれ。応募当時TXT建築研究所勤務。現在(株)不二設計勤務

おかもと・みき
1966年徳島県生まれ。TXT建築研究所主宰。東京都立大学大学院博士課程

市原 出

IC2





1階平面図

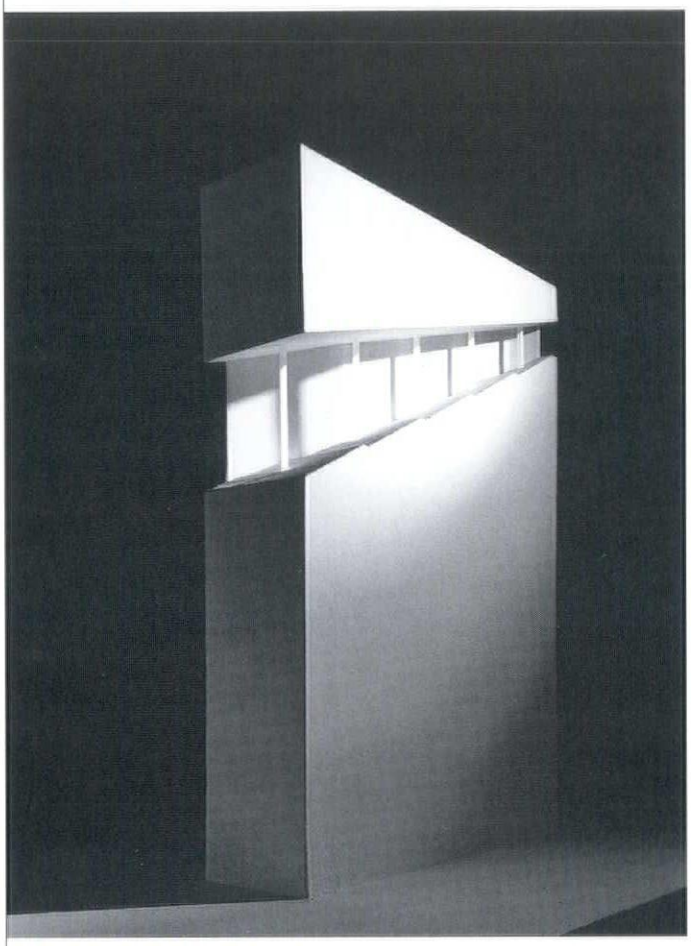
当該敷地は農協が農地を宅地に変更して売りに出したものでした。制度上、建築条件付きにはできないそうで、実際にそうではありませんでした。しかし、建築主にこの土地を斡旋したのは某大手ハウスメーカーで、自社の住宅とセットで売りたいという意向だったようです。結果として、仲介した不動産会社も含め、地元との関係を考慮した建築主の判断で、現在この土地には大和ハウスが建っています。中立の、あるいは正義の味方としての建築家の論理をもちこんで、そうしたなんともふっきれない関係を絶とうと試みましたが、最終的には地元で生活する建築主の立場を考慮し断念しました。また、建築家が遠隔地で住宅などの小規模建築を設計する場合の、建築主の不安、例えば管理の態勢など、を完全に払拭できなかったのでは、という反省も残りました。SDレビューに応募した作品は基本設計の第1案で、計画はそこで頓挫しました。

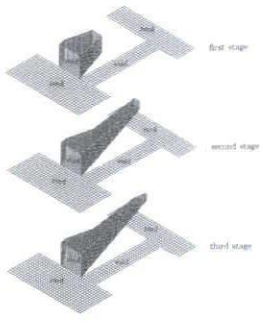
所在地：宮崎県延岡市
建築用途：住宅
構造：木造
敷地面積：386.7m²
延床面積：142.0m²

いちはら・いずる
1958年福岡県福岡市生まれ。市原出建築設計事務所主宰、東京工芸大学助教授

大林直高／KAJIMA DESIGN

S Building Project





本計画は、中央区銀座に位置し、3面の前面道路を持つ敷地に、低中層部店舗と上層部オフィスから構成されるビルディングの計画である。施設中央部に配置させた階段（ヴォイド）を利用し、前面道路からの、人・物・情報の垂直方向の移動に、水平方向のベクトルを付加させ、その視覚的運動を、建築物のイメージとして利用する事を試みたプロジェクトである。

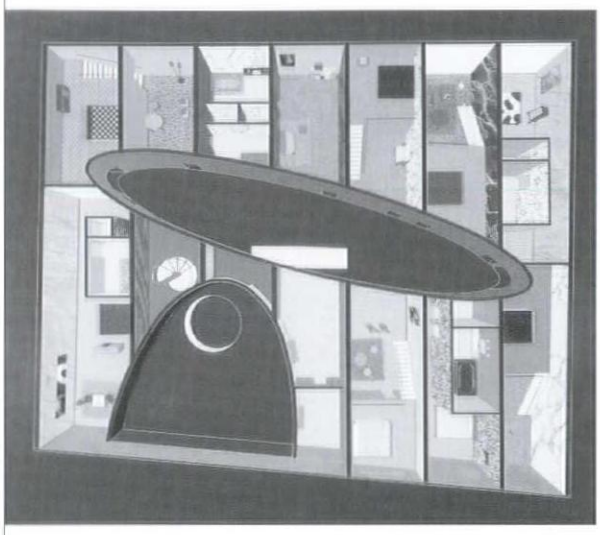
現在本計画は、フロアー構成の変更に伴い、中層部店舗群はオフィスに変更された。これにより、前面道路から施設中層部への動線の必要性が縮小され、形態的にも縮小は実行された。施設中央部の階段は、全体のボリュームを上下に分断するというイメージと、避難施設としての機能のみ、その形態を残すことなった。現在施工中である。

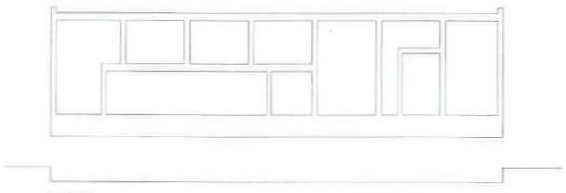
所在地：東京都中央区
建築用途：店舗+事務所
構造：SRC造（一部鋼管コンクリート柱）
敷地面積：230m²
延床面積：2,240m²

おおばやし・なおたか
1968年香川県生まれ。応募当時KAJIMA DESIGN勤務。現在KAJIMA DESIGN SHIKOKU勤務

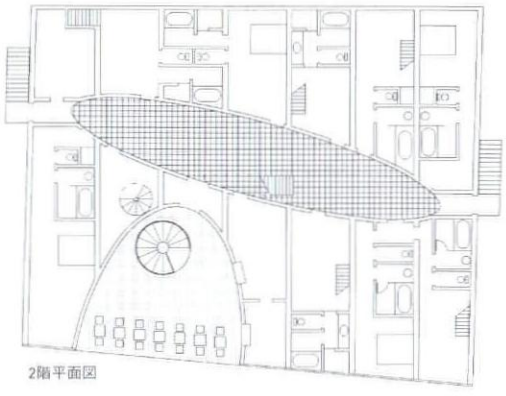
佐藤光彦

Mホテル計画





断面図



2階平面図

水戸駅から車で5分ほどの市街地に建つ予定の、客室数12の小さなホテルの計画。客室数+サービス車両の駐車台数を確保するため1階はすべて駐車場とし、ピロティの上の2、3階を客室とした。さらに駐車場のレベルを道路面より下げ、2階から直接地上に避難する動線を設けることによって2階を避難階とし、客室を防火区画なしのメゾネットとすることを可能にした。次に建蔽率いっぱいの平面と2層分の高さをもつヴォリュームを3.5m巾に分割し、川に望む位置にロビーを、中央に全面のトップライトを持つホールを、ヴォリュームからえぐり取るようにして設けることにより、さまざまな平面と断面をもつ12の客室をつくり出している。これらの客室にはそれぞれ異なった仕上げと造作が施される。

この計画は施主の都合により、基本設計の段階で中止となった。

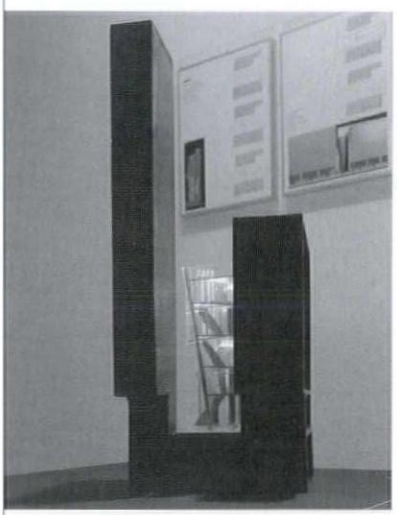
所在地：茨城県水戸市
建築用途：ホテル
構造：RC造
敷地面積：624.8m²
延床面積：1,132.3m²

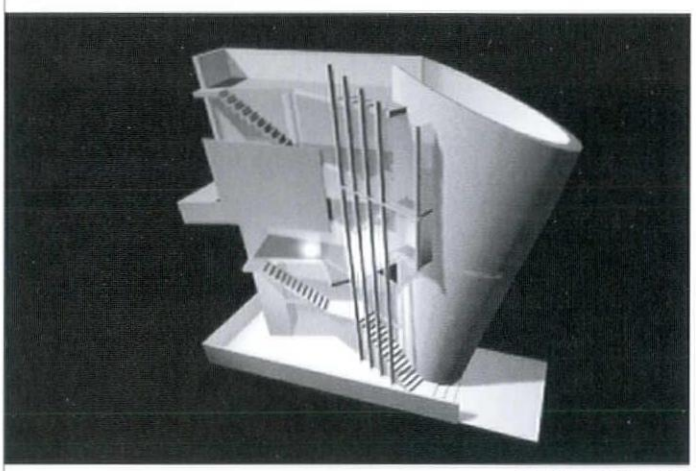
さとう・みつひこ
1962年神奈川県生まれ。佐藤光彦建築設計事務所主宰

季 鐵男／CHI'S WORKSHOP

Z邸

朝倉賞





CG＝CHI'S WORK SHOP

〈Z邸〉はもともとは、家族用住宅における「否・静的」方策の研究を第一のコンセプトとしていた。そのねじれたフォルムは、典型的なタウンハウスの箱のような形式に偶然の力が作用していった結果である。また感覚的なメタファーや刹那的なジェスチャーが、周辺の都市環境からの影響に状況的に対応するためにことさら描かれている。

コンペに参加する以前から私は、若い建築家たちの新しい手法による設計・建設を奨励するというSDレビューの精神にはいたく感動していた。ちょうどZ邸の設計を終えたばかりだった私は、コンペに必要な書類を用意したのである。

請負業者との交渉と建設費の見積りの後、クライアントは、当初の設計通りのものを建てるためにもう少し資金ができるまで工事を延期することにした。最近になってクライアントは、近々次の子供を持ちたいと思い始めたとのことで、床面積を増やしてほしい等いくつかの変更を申し出ている。そのため現在私はこのプロジェクトを再検討中である。

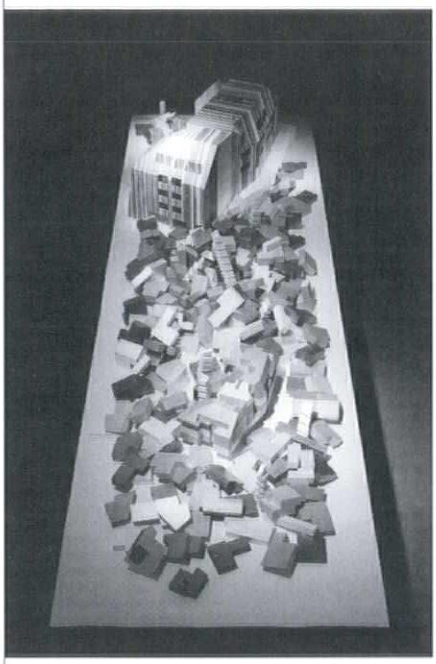
しかし新しい設計も、当初のコンセプトに沿ったものになる予定である。ただし可動性とねじれの度合いについては多少軽減されるかもしれない。その代わりに、裂けた皮殻と潰れた体躯といった形により近くなるだろう。

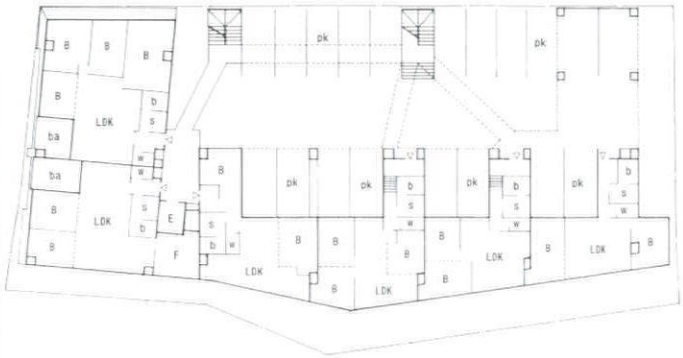
共同設計者：Shio-Sing Chen, Wei Lu, Chung-feng Huang, Won-ting Chiou
所在地：高雄市（台湾）
建築用途：研究所、住居
主要構造：RC造＋S造
敷地面積：91m²
延床面積：195.5m²

Ti-Nan Chi
1957年台湾台北市生まれ。CHI'S WORKSHOP（季鐵男工作所）主宰

長坂 大／Méga

MANSION 26





1階平面図

計画中止の理由は明解だった。

単位面積あたりの相場が収支計画を超えてダウンしたところで、計画は分譲マンション建設から土地売却へと変更されたのである。事業主は建設予定地を所有していた建設会社である。

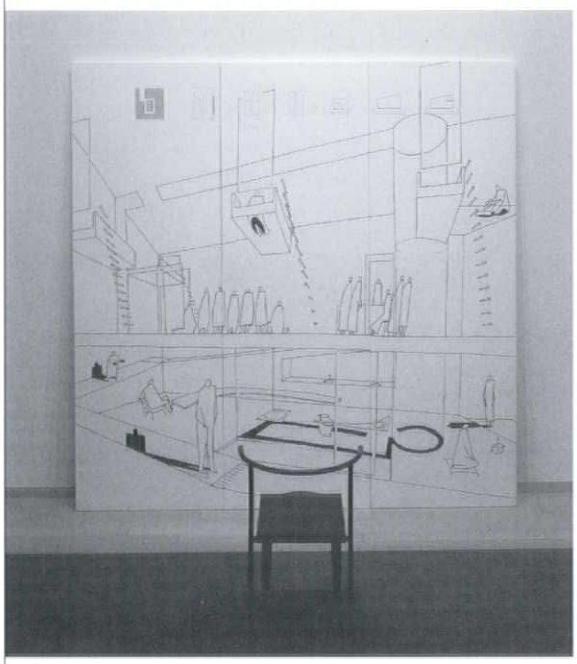
ところで、買い取る方はこの土地を別の目的で入手するのかというと、やはり低層の木造連戸型分譲住宅をつくって売る予定だという。それならこちらもそうすればいいではないかと思うのだが、話はそうクリーンではないのである。相場はすでに建蔽率違反を前提とした領域で争われていて、まともな建設会社には土地を売るしか道は残されていないのだそうだ。

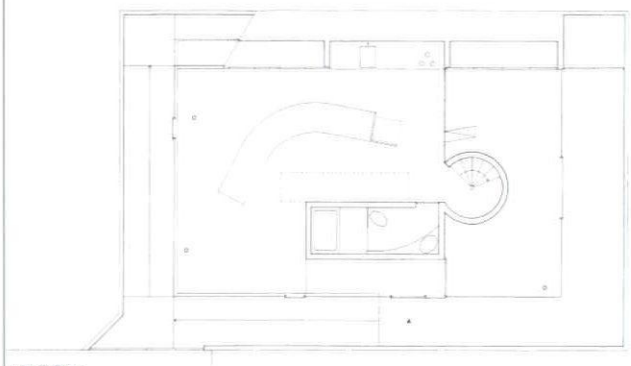
所在地：京都府京都市
建築用途：共同住宅（分譲マンション）
共同設計者：森本明雄+松井正樹+安田哲也（メガ旧所員）、北川恵昭／北川構造研究所
構造：RC造
敷地面積：1,054.59m²
延床面積：2,100.30m²

ながさか・だい
1960年神奈川県平塚市生まれ。京都工芸繊維大学造形工学科助手

西沢大良

小平のハウス





1階平面図

行き止まり道路のつきあたりに計画した住宅である。日照や通風を得にくい囲繞地であるため、建物を敷地のほぼ重心に置き、建物のまわりに恒久的な空地ゾーンを設定している。ここは外部スロープでもあり、半地下階と地上階のそれぞれへ、道路から別々にアプローチできるようになっている。また建物のほぼ中心にも全面トップライトの吹抜を細長く配置して、日照と通風を得ながら屋内動線を集約し、居住者どうしの緩衝スペースとした。この建物の居住者数は季節ごとに大きく変化する（常時6人、夏期10人、最大14人）。各人に個室を配する通常の平面計画は、面積的にも不可能だった。かわりにこの人数を、活動量の異なる3つの集団に分け（老人と大人と小人）、共有のリビングをひとつずつ設けた上で、4つめのリビングに全員（最大14人）で滞在できるようにした。

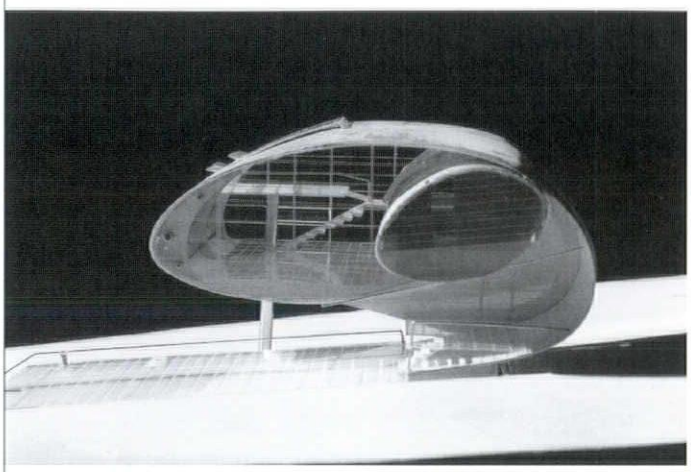
実施設計と見積調整を終了して着工を待っていたとき、クライアントのご親族内から相続上の異論があがり、着工は中止になった。1年後、同じクライアントから、1世帯用の設計依頼が新たにあり、土地選定から始めて〈立川のハウス〉として実現した。

所在地：東京都小平市
建築用途：専用住宅
共同設計者：システムデザイン研究所（設備）、梅沢建築構造研究所（構造）
構造：混構造（RC+木造）
敷地面積：127.1m²
延床面積：158.4m²

にしざわ・たいら
1964年東京都生まれ。西沢大良建築設計事務所主宰

山口 賢+BEAM STUDIO

OnO HOUSE



老夫婦の長期の滞在を目的とし、彼らの所有する美術工芸品のプライベートギャラリーを兼ねた別荘の計画である。この計画の主要なテーマは空間の表記の方法に関するものであり、またその作り方に建築の楽しみを求めたものであった。そこでまず建築をひとつながりの単一のものと捉え、1枚のプレート上にすべての空間情報を言葉と数値で表現しようと試みた。その結果空間はラウンドシェイプを持った滑らかな巻き物となり、内部空間への光の侵入、敷地に置かれたときのその容姿などデザイン上の諸問題がいっきに解決し、非常に魅惑的な建築が目の前に出現した。施主は特にその奥様がこの計画に強い興味を示しその実現を待つ旨の連絡が私の元に届いた。実施に向けての度重なる検討、材料、環境の充実特に構造形式を鉄骨造から集成材を利用した一体的な木構造へと変更し、当初のコンセプトを忠実に表現する手応えをつかんだ。SDレビュー入選より2年目の冬、施主の奥様の入院そして早期の回復の見込みがない旨の連絡を受け、プロジェクトはやむなく一時中断となる。以来このプロジェクトは実施のそのときまで待機。

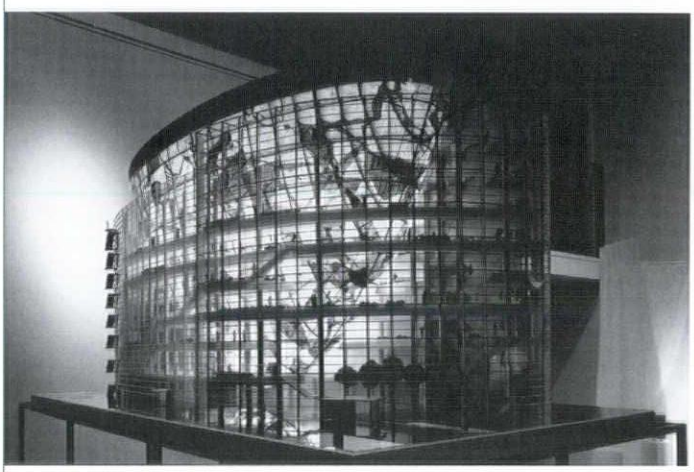


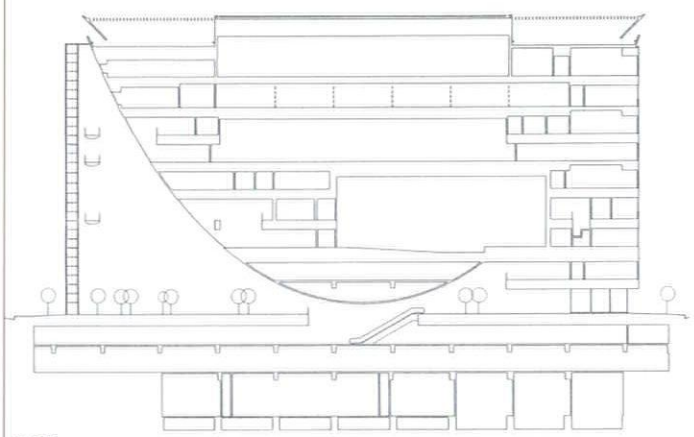
所在地：栃木県日光市霧降高原
建築用途：別荘+プライベートギャラリー
構造：木造、一部S造
敷地面積：360m²
延床面積：198.34m²

やまぐち・けん
1968年神奈川県横浜市生まれ。応募当時BEAM STUDIO所属。現在iq architects共同主宰

吉田 進+松本哲弥+ 有馬浩一+森吉直剛 ／大成建設設計本部

Project Q





断面図

日々の設計業務の中で、如何に自分の持つイメージやコンセプトを純粋に作品に反映させるかというのは、誰にとっても永遠のテーマだと思う。対象が大型物件となると、多くの関係者、複雑に絡み合う権利関係等で、思わずそのテーマを放棄しそうになることもある。そんな中で、われわれのQ-PROJECTでは、最初のイメージが不思議なぐらいスムーズに作品に反映されていった。施主にもわれわれのコンセプトは理解を得た。すなわち、文化を発信する核としての巨大な卵とそれを曖昧に包み込むガラス皮膜。

設計は順調に進み、防災評定も終了し、着工を約2ヶ月前にしたある日、この中に入るキーテナントのひとつが撤退するというニュースを聞いた。これがきっかけだった。

プロジェクトを取り巻く環境は、悪い方に転がり続け、たったの3週間で、とうとう事業の凍結という最悪の結果が発表された。

所在地：熊本県
用途：複合ビル
構造：S造
敷地面積：4,250m²
建築面積：2,280m²
延床面積：28,760m²

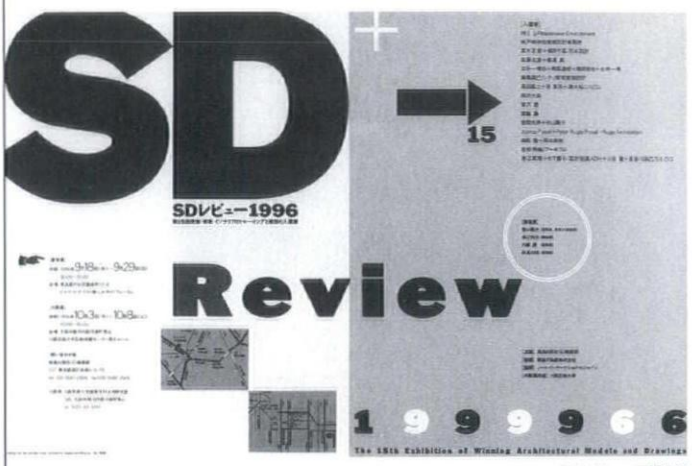
よしだ・すすむ
1950年大阪府生まれ。大成建設勤務

まつもと・てつや
1962年東京都生まれ。大成建設勤務

ありま・ひろかず
1965年大阪府生まれ。大成建設勤務

もりよし・なおつぐ
1967年徳島県生生まれ。大成建設勤務

第15回　1996年



デザイン＝工藤強勝

東京展：9月18日～9月29日

ヒルサイドテラスF棟ヒルサイドフォーラム+朝倉ギャラリー

大阪展：10月3日～10月8日

大阪芸術大学芸術情報センター展示ホール

審査員：香山壽夫、渡辺邦夫、内藤 廣、妹島和世

応募総数：174作品

入選数：15作品

受賞者：

ユストス・ピザール+ペーター・ルーゲ（鹿島賞）

高橋昌巳（朝倉賞）

城戸崎和佐建築設計事務所（SD賞）

城戸崎和佐　鈴木木材工業本社

黒木正郎+横田千晶／日本設計　明かり屋根の幼稚園

佐藤光彦+横溝 真　Sビル計画

三分一博志+塚田哲也+西尾通哲+土井一秀　PILOT HOUSE#01

高橋昌巳　土の自由被膜

長田直之+筏 真司+清水裕二　KANTAN HOUSE

西沢大良　立川のハウス

ユストス・ピザル+ペーター・ルーゲ／**Pysall·Ruge Architekten**

ハウス・ゾンネ［Haus Sonne］

宮沢 透　S邸

宮脇 勝　HOUSE ADDITION

安田光男+杉山陽子　Tategu House

由田 徹+岡本美樹　スクリイン

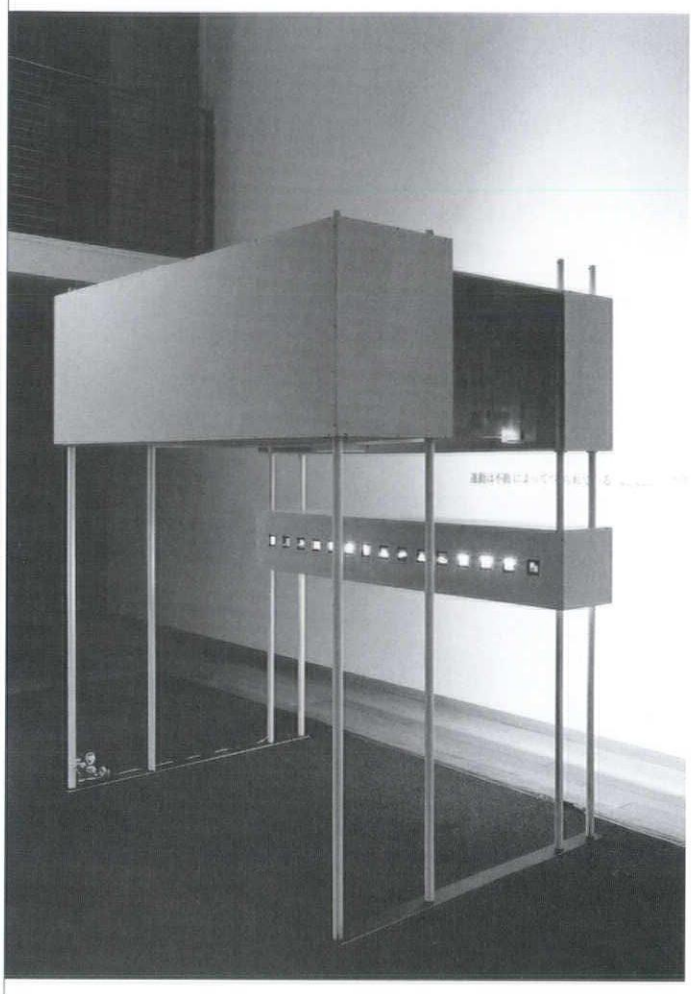
吉松秀樹　灰塚アースワークプロジェクト

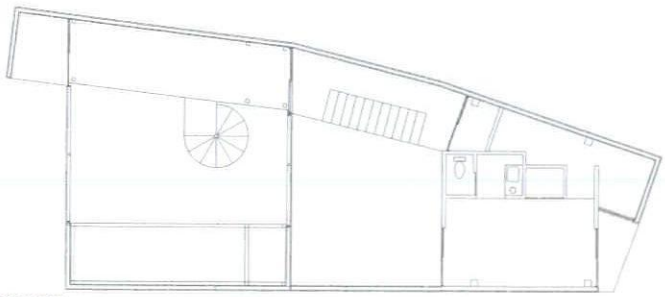
RE[ ] responsive Environment　ダンスパフォーマンスのための舞台装置

渡辺真理+木下庸子+三谷 徹+長谷川浩己　タウンセンターH

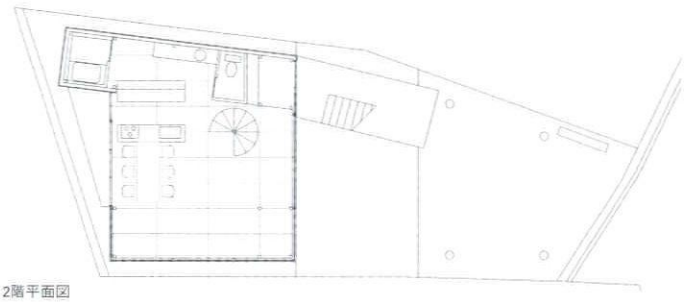
長田直之+筏 真司+清水裕二／I.C.U.

KANTAN HOUSE（邯鄲ハウス）

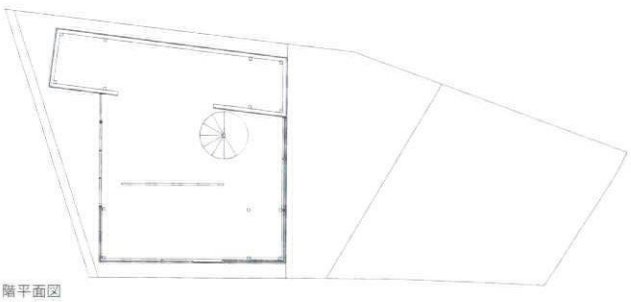




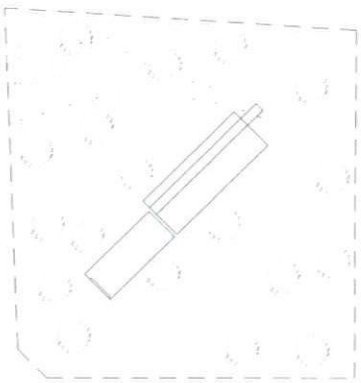
3階平面図



2階平面図



1階平面図



配置図

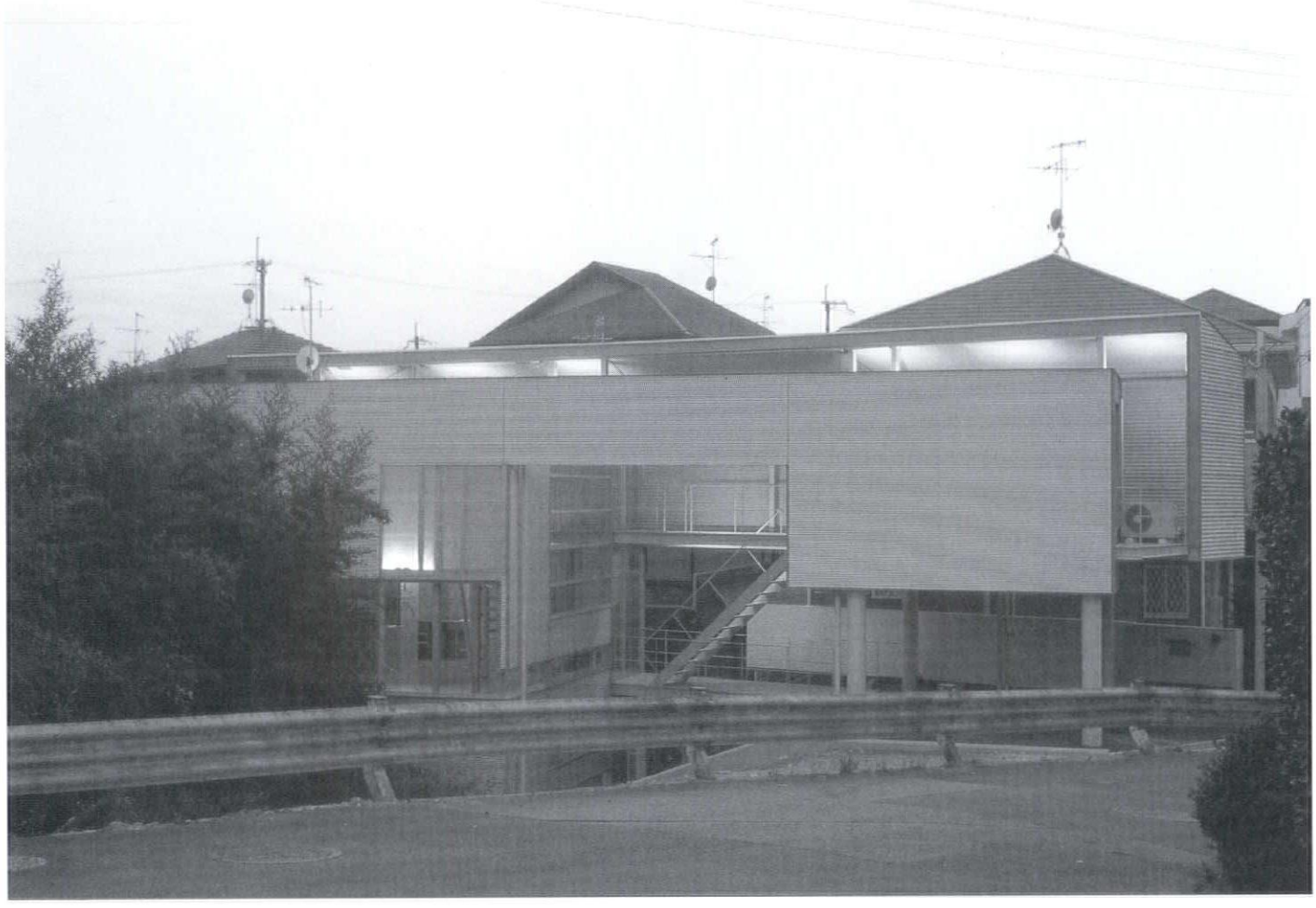
郊外の住宅地の中にありながら、恵まれた自然環境と隣接するこの敷地は、計画公園内にあり15年後には公園が拡張されるために解体・撤去されることが条件として課せられています。我々はまず隣接する自然環境と連続するような空間を作りたいと考えました。それは、分節が明確でなく周辺の環境と内部空間が相互に浸透するような空間です。また、15年後に解体されるという条件は必ずしも制約ではなく、固定的で硬直し強度をもったものとして捉えられがちな建築を、可変的で柔らかな「弱さの視点から捉えることの可能性」を我々に指し示しています。家族の成長や環境の変化、やがてくる消失の時に対して、思い切った建築的な取捨選択を行わなければなりませんでした。それは、慣習的な空間の認知の仕方とその行為との関係性を交換可能な状態に保つことです。この住宅は竣工した現在も完成してはいません。限られた時間のなかで空間の可能性を発見し続けることは、この住宅に限られたことではなく普遍的な問題でもあるのです。

所在地：大阪府箕面市
建築用途：専用住宅
構造：S造
敷地面積：150.19m²
延床面積：134.08m²
竣工年：1997年7月

ながた・なおゆき
1968年愛知県生まれ。I.C.U.主宰

いかだ・しんじ
1967年富山県生まれ。必募当時I.C.U.主宰。現在atelier[ia:]主宰

しみず・ゆうじ
1966年新潟市生まれ。I.C.U.主宰、千葉大学助手

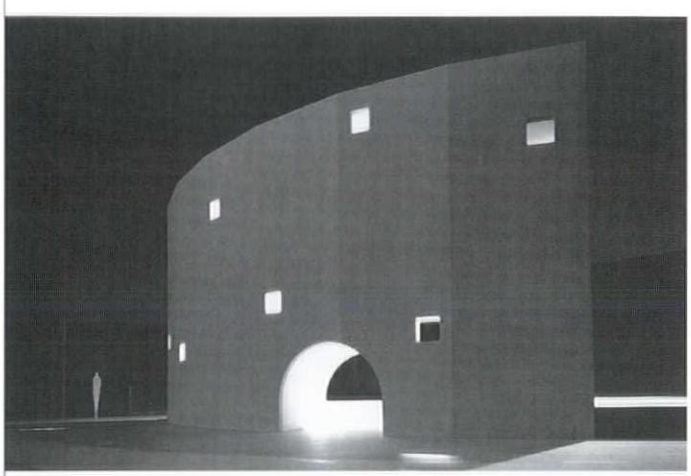


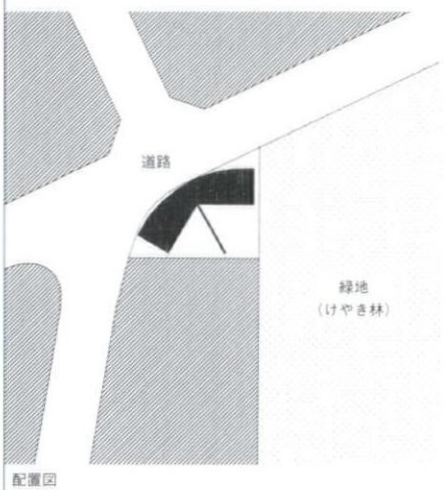


写真（2点とも）＝新建築写真部

西沢大良

立川のハウス

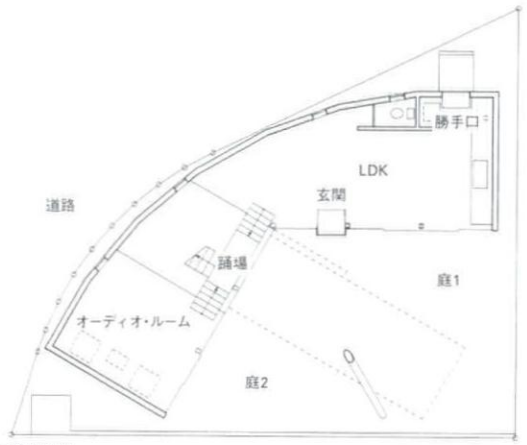




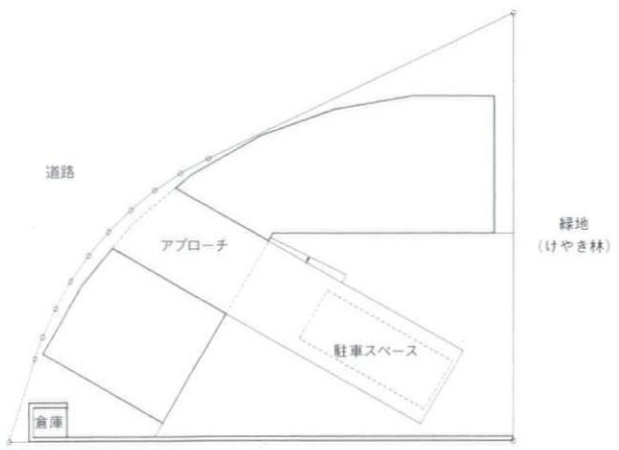
配置図



2階平面図



1階平面図



道路レベル平面図

北

けやき林の緑地と住宅街の三叉路とに挟まれた、小さな扇形の敷地である。緑地と道路の面積は、どちらも敷地よりかなり大きな面積を占めている。両者からの影響が、敷地内の印象を大きく変えてしまうため、建物の輪郭に注意して配置図の検討をした。

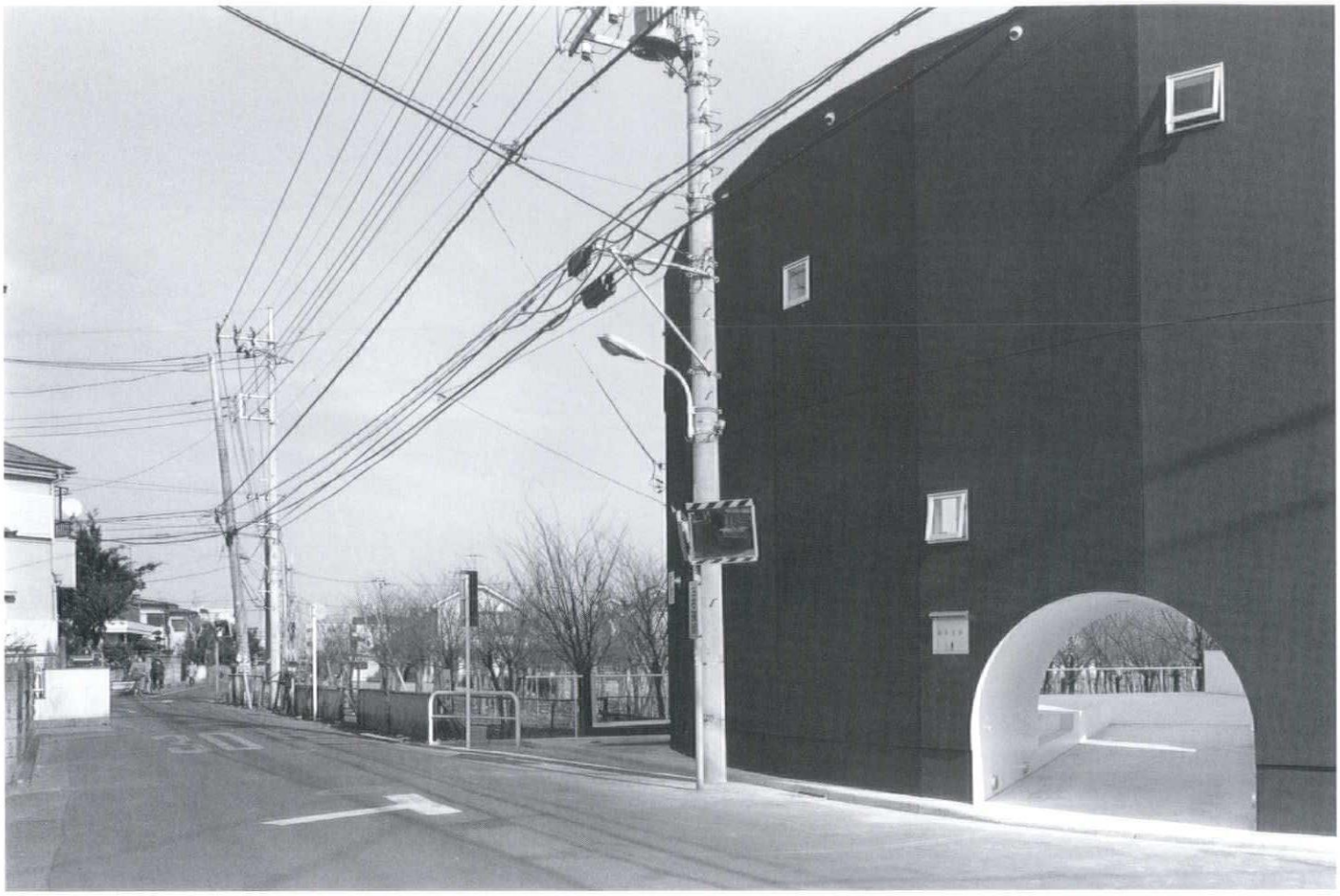
東側の緑地を意識しながら南隣家との距離をとり、建物を北西道路によせて配置した。建物の平面形は、道路にだいたい沿ったリボン型をしている。これらにより、浅くて長い建物内のどこからでも庭とけやき林を眺めうるようにした。庭はコンクリートで固めている。道路側の立面には、小さなトンネルを設けて庭側へ駐車スペースをとり、建物の配置を妨げないようにした。

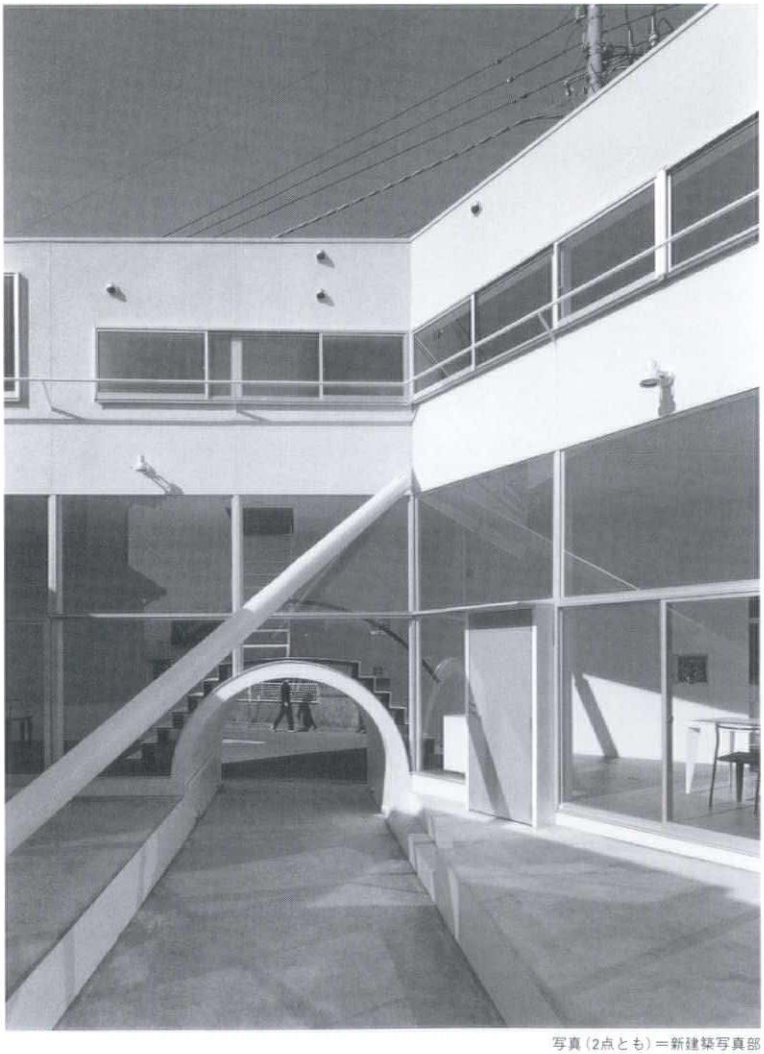
小規模の建物であるから、屋内にあらわれる要素をこれ以上ふやさないように注意した。構造は在来木造であるが、1階の室内中央に想定していた筋交いを、鉄骨の斜材に転換して屋外にとびださせ、LDKからオーディオ・ルームにわたる全長15mの室内に、障害物をあらわさない架構にした。

応募時からの変更は、ローム層に合わせて根切底を深くしたことと、その予算捻出のため道路側の外壁材を杉横羽目貼からモルタルリシンに変更したことの2点である。

所在地：東京都立川市
建築用途：専用住宅
共同設計者：イノウエ・インダストリーズ（家具）、伊藤構造計画工房（構造）
構造：在来木造（屋外の斜材のみS造）
敷地面積：121.22m²
延床面積：95.77m²
竣工年：1997年1月

にしざわ・たいら
1964年東京都生まれ。西沢大良建築設計事務所主宰

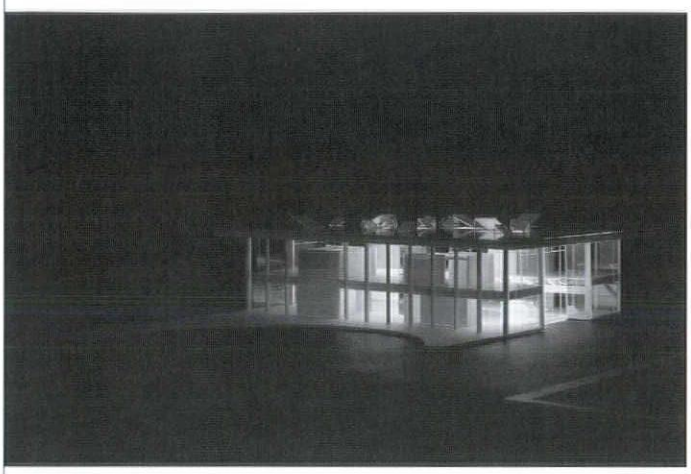


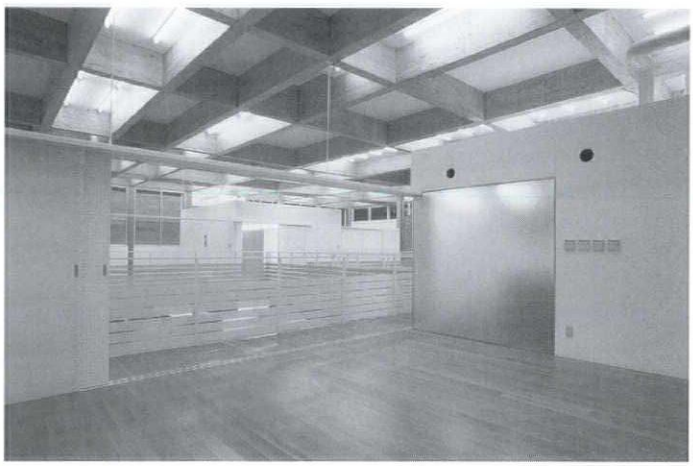


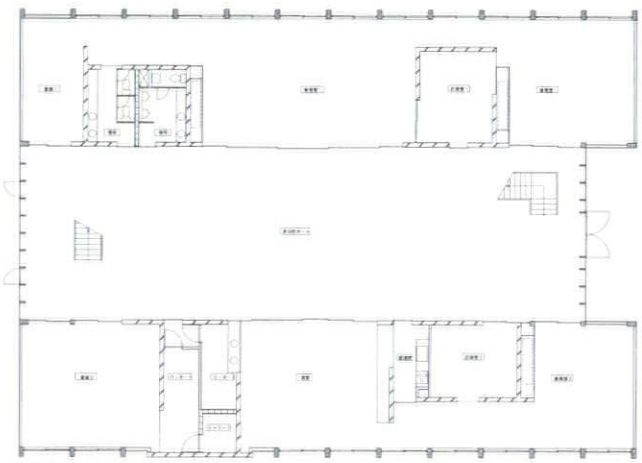
写真（2点とも）＝新建築写真部

鈴木木材工業本社

SD賞



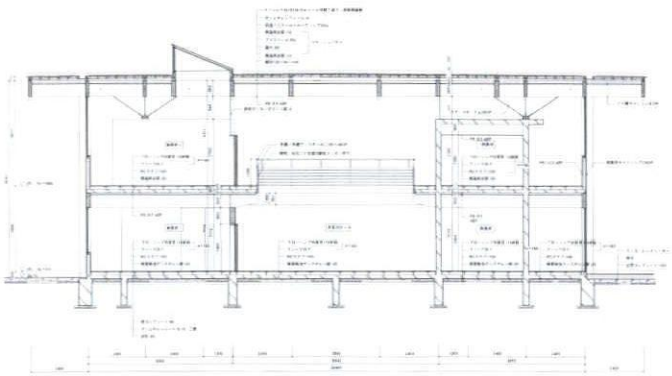




1階平面図



写真（右2点）＝淺川 敏



矩計詳細図

どこにでもある時間

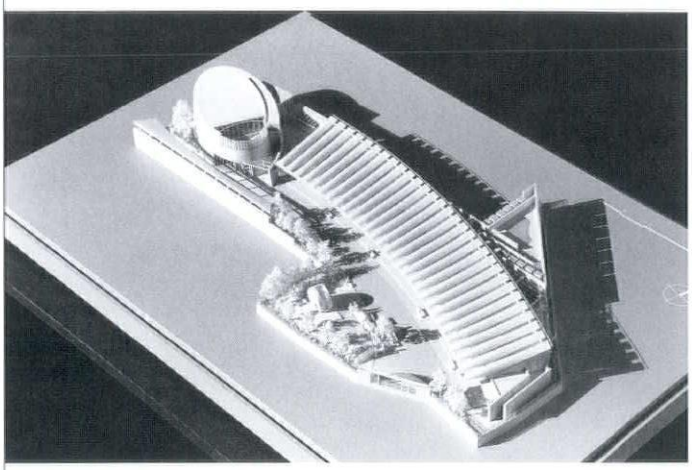
佐世保湾に面した工業団地の突端に位置する、木材会社の本社である。集成材の大スパン架構を用いて、木造の新しいオフィス空間をつくることが要求された。格子梁のフラットルーフや等間隔に並ぶ柱は、システムがどこまでも連続する自由なイメージを獲得するとともに、木のもつ温かみや伝統構法へのノスタルジックな記憶をいったん消去し、ニュートラルな工業製品として集成材を再定義している。吹き抜けの多目的ホールを挟んだ2層のオフィス空間は、内部でルーズにつながり、何通りもの経路を可能にする。また、いくつもの出入口から外部へもルーズにつながる。ここでは建物はなにもコントロールしない。どこにでもある時間が光とともに建物の内も外も同じ様に移動していく。人びとは、建物に出入りし、建物のなかを移動するたびに、いくつかの光を横切る。そうして、連続する空間のなかの不連続な時間を、瞬間、知覚する。

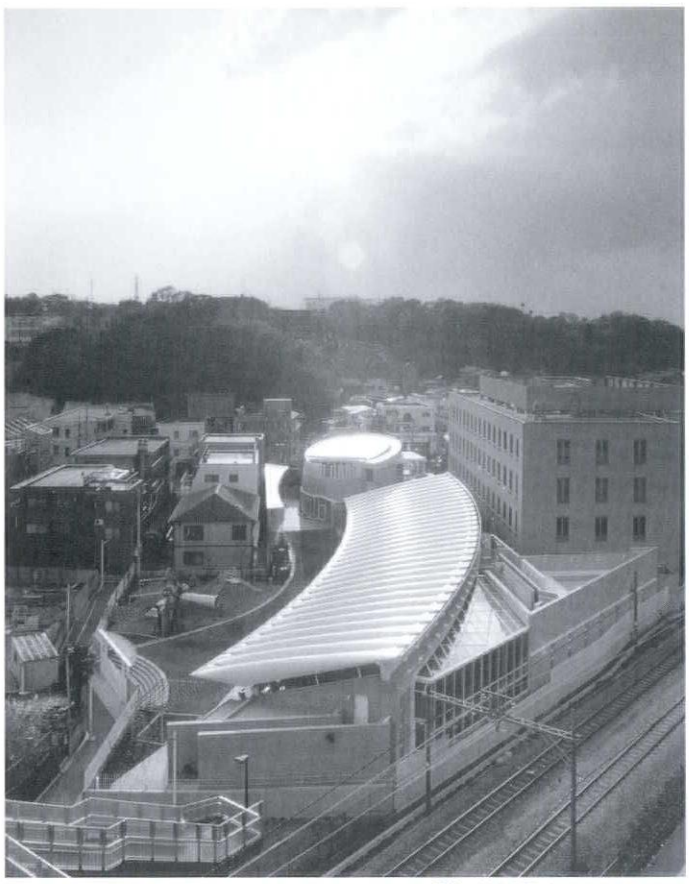
所在地：長崎県佐世保市
建築用途：事務所
共同設計者：飯田恵美（元所員）、中田捷夫／中田捷夫研究室（構造）、川口洋輔+東和夫／川口設備研究所（給排水衛生空調）、山崎克己／山崎設備設計事務所（電気）、井坂幸恵（照明デザイン）
構造：木造、一部RC造
敷地面積：20,884.16m²
延床面積：998.42m²
竣工年：1997年11月

きどさき・なぎさ
1960年東京都生まれ。城戸崎和佐建築設計事務所代表

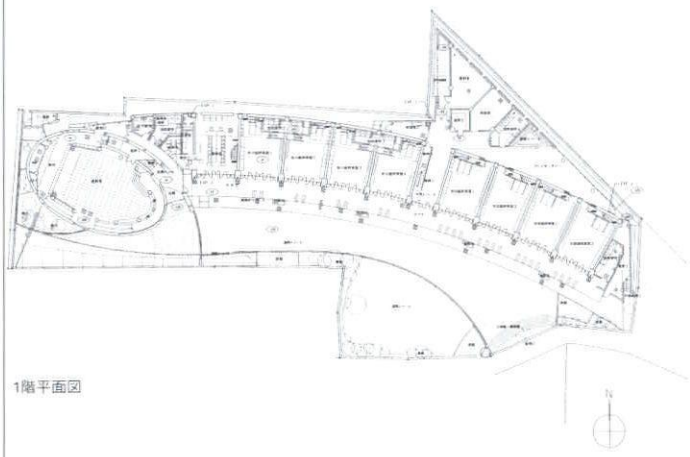
黒木正郎+横田千晶／日本設計

明かり屋根の幼稚園（洗足学園大学附属幼稚園）

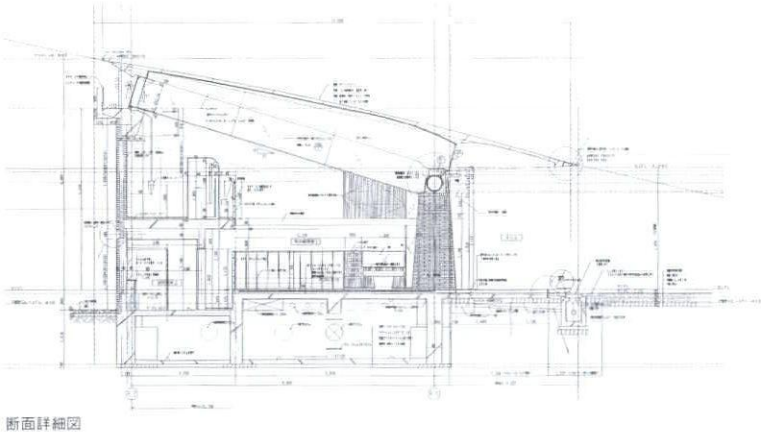




写真＝村上進吾／川澄建築写真事務所



1階平面図



断面詳細図

見慣れない形をしているわりには、工事は順調に進みました。PC屋根と煉瓦壁が特殊な所なのですが（ほとんど全部である）、最初から難しく見えるところは、えてして上手くいくものです。

始末に苦労したのは軒下の靴箱です。当初は、展示の絵に描いたように、子供の動線に沿わせて軒下に平置きする考えだったのですが、最近の子供は足が大きくて（最大22cm）、箱全体は結構な大きさになってしまい、そのままでは問題があることがわかりました。結局、靴箱は、教室間の仕切りの柱の前に積み重ねて置いています。動線的には問題ないようですし、教室間の横のつながりは少し希薄になりましたが、内外の空間の繋がりはずっと良くなって、この方が当初の建築の意図に合っていたのかもしれません。

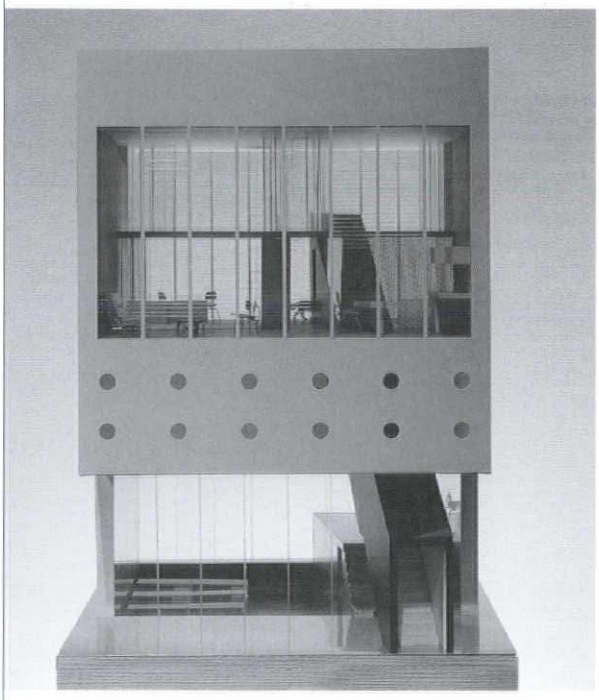
所在地：神奈川県川崎区
建築用途：幼稚園
共同設計者：河瀬尚美（意匠）、土田伸二（構造）
構造：RC+S造
敷地面積：2,811.79m²
延床面積：1,909.66m²
竣工年：1997年3月

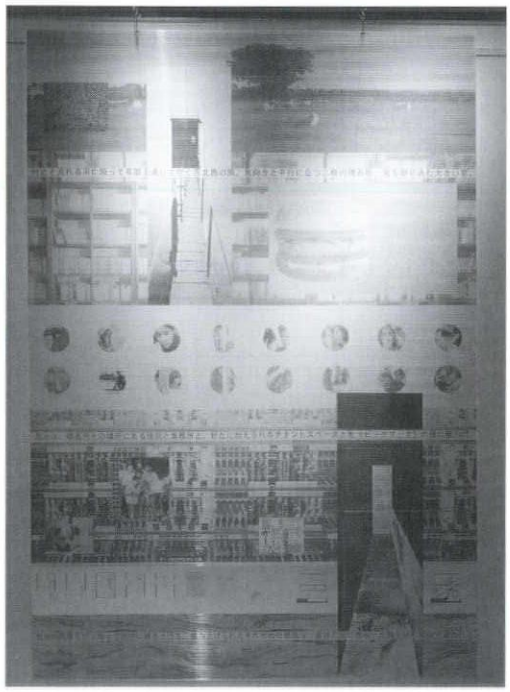
くろき・まさお
1959年東京都生まれ。（株）日本設計第2建築設計群勤務。

よこた・ちあき
1969年東京都生まれ。（株）日本設計第2建築設計群勤務。

佐藤光彦+横溝 真

Sビル計画



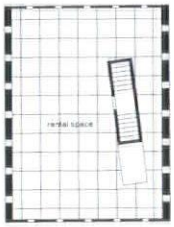




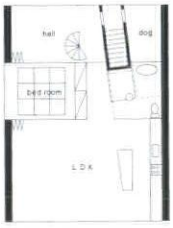
1階平面図



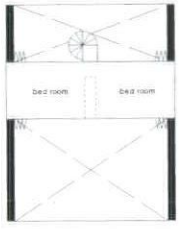
1.5階平面図



2階平面図



3階平面図



4階平面図



屋上平面図

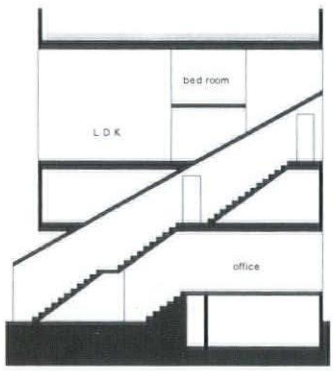
神奈川県秦野市に居住する施主は、現在自宅から2kmほど離れた場所に事務所を構え建築関係の仕事をしているが、事務所の敷地が道路の拡張計画にかかってくるのを機に、2ヶ所の土地と建物を売却して区画整理事業の進む秦野駅南口に敷地を購入し、新しい建物を建てることにした。設計を依頼された我々は、新しい敷地・現在別々の場所にあるふたつの建物・新たに加えられるテナントスペースを「ビッグマック」のように単純に積み重ねるようにしてひとつの建物をつくることを考えた。すなわち、区画整理前は田畑であった敷地の表面を切り取って空中に持ち上げ屋上庭園とし、中間にテナントスペースのヴォリュームを挿入することによって上下にふたつの敷地をつくり出し、そこに事務所と住居を割り当てるというものである。これらの積み上げられた領域は、空に向かって一直線にかけ上る路地状の階段によって連結される。

この計画は施主の都合により、基本設計の段階で中止となった。

所在地：神奈川県秦野市
建築用途：住宅+レンタルスペース+事務所
共同設計者：中田捷夫（構造）
構造：RC造
敷地面積：125.0m²
延床面積：304.34m²

さとう・みつひこ
1962年神奈川県生まれ。佐藤光彦建築設計事務所主宰

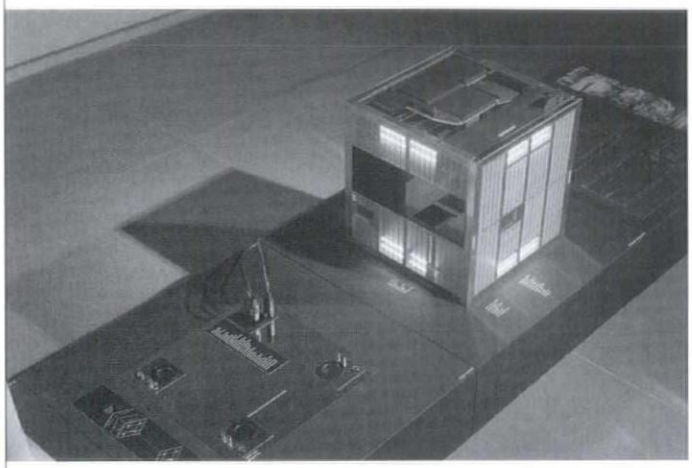
よこみぞ・まこと
1962年神奈川県生まれ。伊東豊雄建築設計事務所勤務

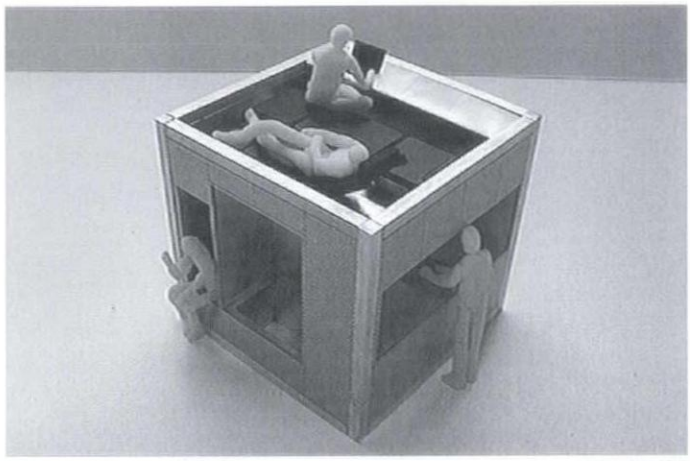


断面図

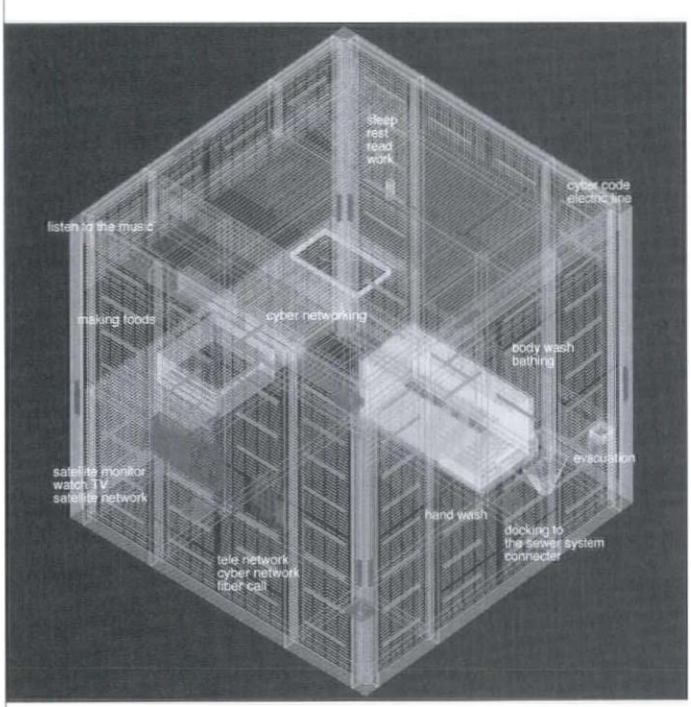
三分一博志+西尾通哲+塚田哲也+土井一秀

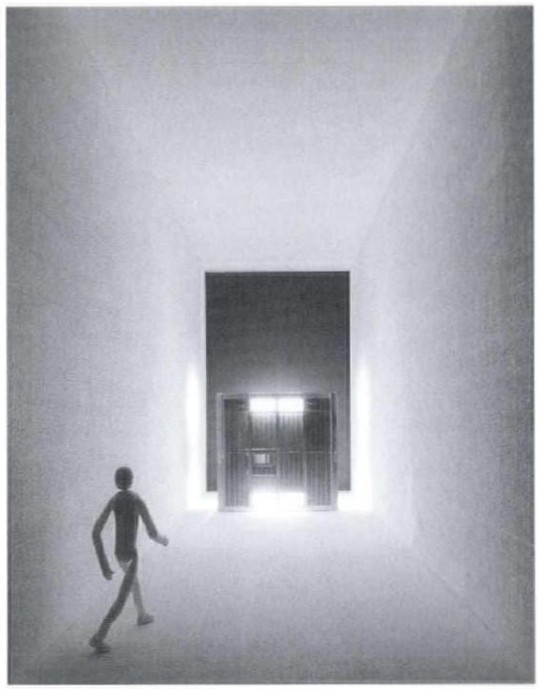
PILOT HOUSE＃01





2.25m×2.25m×2.5mの設備集合体　写真＝塚田哲也





RCボックスカルバート内に置かれた設備集合体　写真＝広瀬正治

我々の関心は人間の行為を支える設備と居住空間の関係にある。

現代の生活において、身体はエアコンや携帯電話をはじめとする設備機器とのつながりをますます明確にしている。

そのような状況にあって、ここでは厳密な設備集合体が、まず製品として存在し、それを中心に壁や天井といった建築的要素が派生することで空間を展開していく方法を提案した。

これは、設備から考えることによって、住宅のつくりかたを新しい自由なものへと解放する、革新的住宅のためのパイロットハウスである。

所在地：広島市西区
建築用途：住宅
構造：スチールフレーム+アルミ・ボディ・コンポーネント（キューブ）、RC造（ボックスカルバート）
敷地面積：55m²
延床面積：48m²

さんぶいち・ひろし
1968年広島市生まれ。応募当時小川晋一アトリエ勤務。現在三分一博志建築設計事務所主宰

にしお・みちあき
1969年広島市生まれ。応募当時広島大学大学院博士課程在籍。現在穴吹デザイン専門学校教員

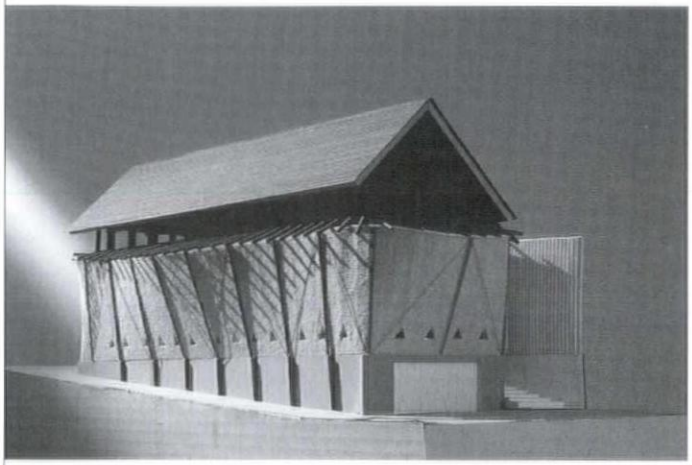
つかだ・てつや
1968年広島市生まれ。応募当時小川晋一アトリエ勤務。現在小川晋一都市建築設計事務所勤務

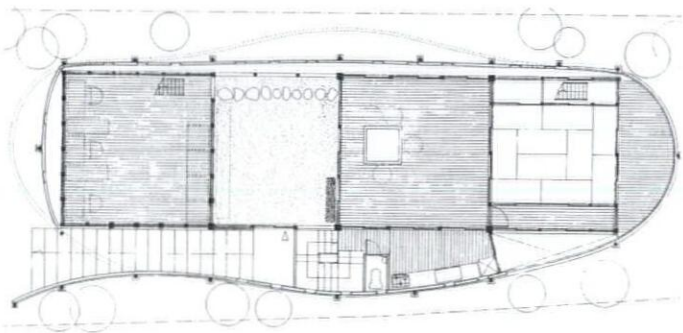
どい・かずひで
1972年広島市生まれ。応募当時広島大学大学院博士課程前期在籍。現在小川晋一都市建築設計事務所勤務

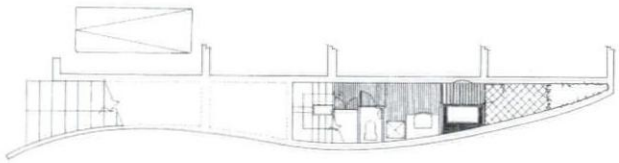
高橋昌巳

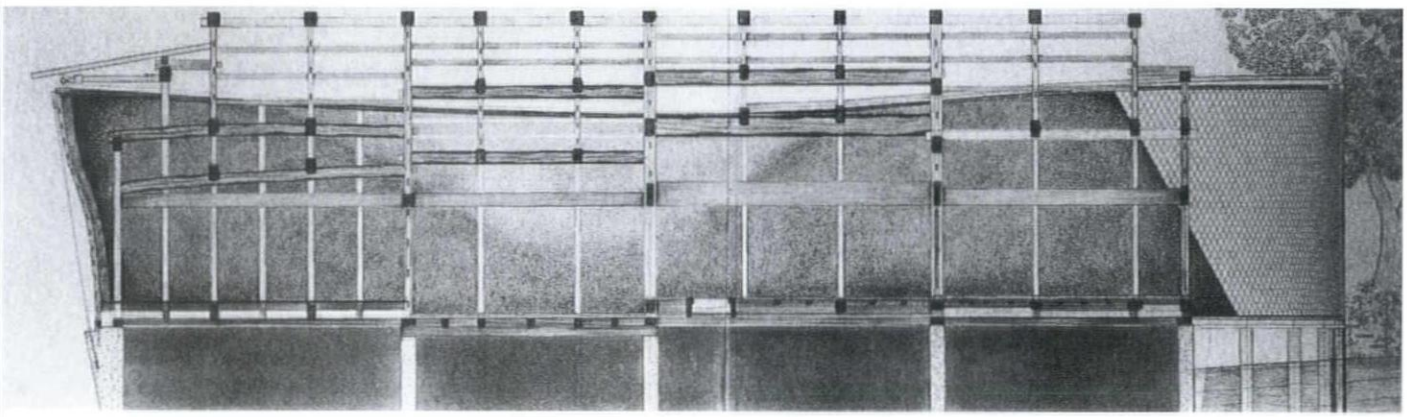
土の自由被膜

朝倉賞









プロローグ

1995年、解体処分寸前の旧坂本邸（青森県、田子町）を譲り受けることができた建主は、移築先の鎌倉市での再築にあたり、現在では得難い程の強度と美しさを持った骨組みを次の世代に引き継ぐことを前提とした計画を希望した。

そこで構造的主フレーム（移築構造体）に対しての負荷を最小限に抑えた新たな外壁の実現に向けて検討を始めた。

コンセプト

各世代におけるライフスタイルと周辺環境の変化への対応を可能とするために外壁を骨組みから解放させる。

軸組から解放された外壁は自由な形態と仕上げを可能とし、容易な維持管理を実現させる。

メソッド

構造的に強靭な外壁とするために竹ファイバーによる菱目張り立体構造で周囲を包み、上部を輪でつなぐ。

皮膜は竹ファイバーの構造体を土で覆い、ブレース補強することで構造的に主ブレースに依存することなく自立する。

現在、約1年遅れて、ようやく青森で骨組みの仮組みが行われ、小屋組等新規の部材の加工が始まり、鎌倉の現場では来春の建方に向けて、基礎工事に取りかかった。今回、時間をかけて追いかけた土のカーテンウォールの構想は、結局この現場では実現せずに、同じく来春着工の神奈川県相模原市の〈M邸〉にて改めて引き継がれて行われることになった。

新しい表現や構法の可能性を続けていこうとする時、これまでにSDレビューに発表された作品や構想を拝見するたびに勇気づけられる気がしております。

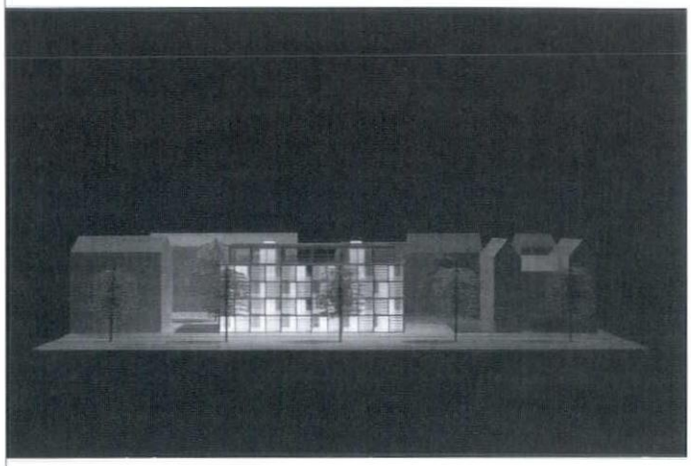
所在地：神奈川県鎌倉市
共同設計者名：池田亮介、手島伊知郎、芳井浩
建築用途：住宅
構造：木造
敷地面積：421.8m²
延床面積：185.86m²
工事予定期間：1997年12月～

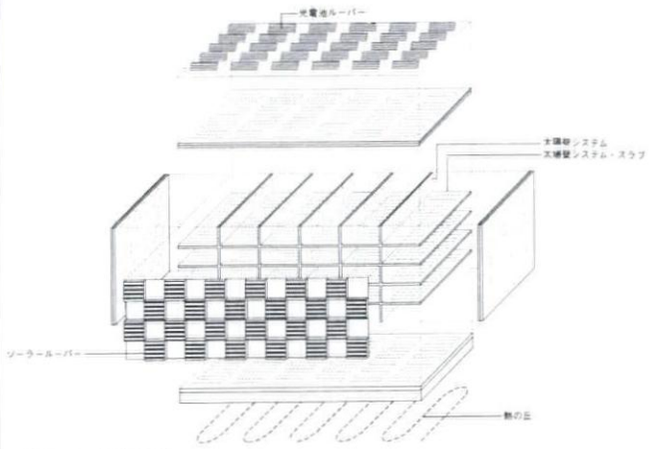
たかはし・まさみ
1954年東京都生まれ。シティ環境建築設計主宰

ユストス・ピザル+ペーター・ルーゲ／
Pysall・Ruge Architekten

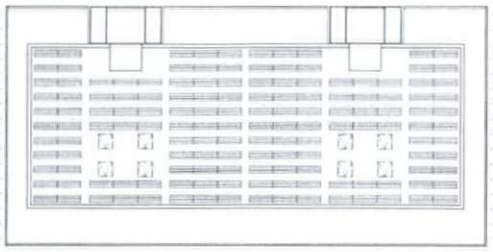
ハウス・ゾンネ [Haus Sonne]

鹿島賞

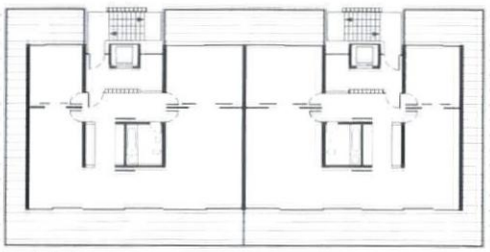




ハウス・ゾンネシステム



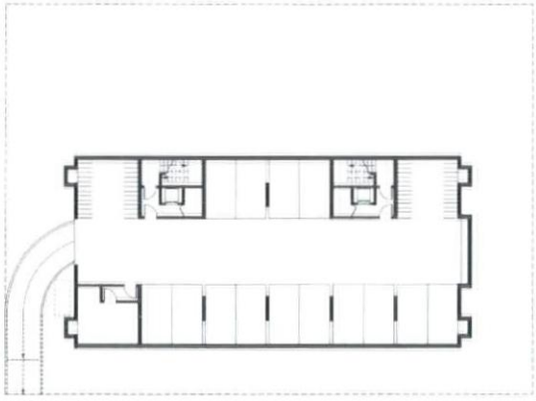
屋根伏図



5階平面図



基準階平面図



地階平面図

ハウス・ゾンネは、全く新しい簡易でローコストな省エネルギーハウスとして、旧東ベルリンの簡素な住宅地に計画された。

この建物の壁、スラブは「太陽壁」という銅パイプが張り巡らされたコンクリートパネルからできていて、室温を調整する。また、屋根ルーバーは給湯をつくり、ファサードの格子壁は太陽光を調整し電気エネルギーを保存する。まさにCO^2ゼロのニュートラルな集合住宅である。エコロジック首都として名乗りをあげているベルリンには特に興味深いプロジェクトであったに違いなかった。

しかし、確認申請提出後、1年間という長い審査期間にもかかわらず許可が下りなかった。役所いわく、システムもファサードも今までの例にないので審査ができない、というのである。結局、ここはヒストリズムの国なのだ。

システムとして構成された建築は場所を選ばない。日本で実現できることを期待する。

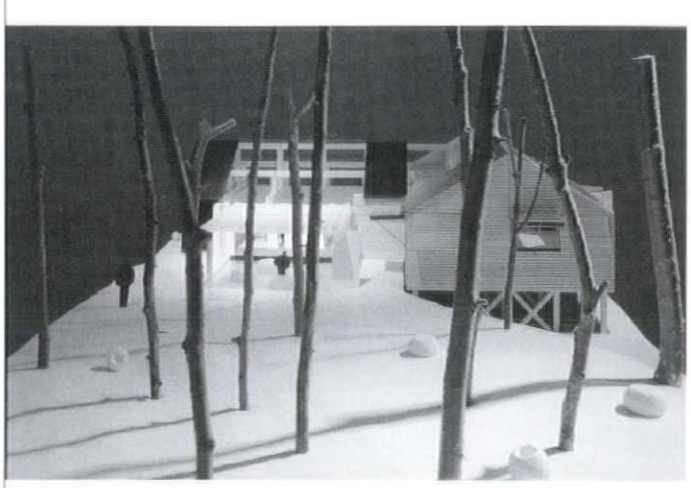
所在地：ベルリン（ドイツ）
建築用途：集合住宅
構造：RC壁構造
敷地面積：1,444m²
延床面積：527m²

Justus Pysall
1961年ブラウンシュヴァイヴ（ドイツ）生まれ。
Pysall・Ruge Architekten主宰

Peter Ruge
1959年デュセルドルフ（ドイツ）生まれ。
Pysall・Ruge Architekten主宰

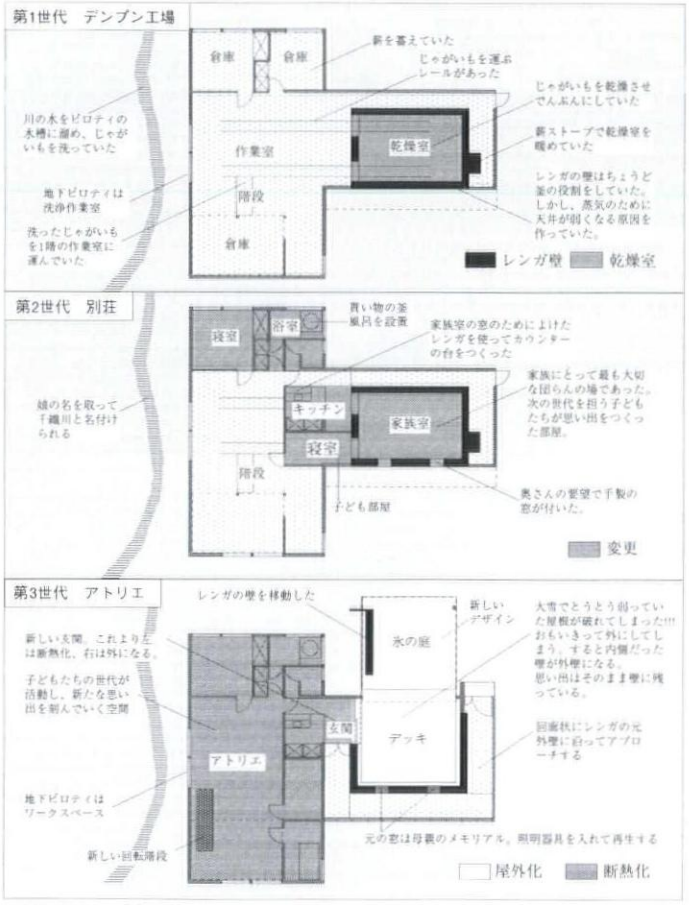
宮脇勝

HOUSE ADDITION





第1次審査時プレゼンテーション模型　写真＝宮脇勝

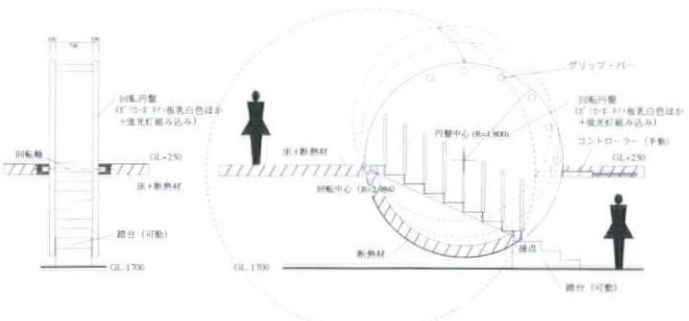


世代ごとのテーマの移り変わり

北海道ニセコ町にあるデンプン工場（第一世代）から別荘（第二世代）を経て、友人のアトリエ（第三世代）に引き継ぐための「変身（トランスフォーメーション）」を提案した。それは、内部の機能が時代で変化し、新しいプログラムに応じて空間ごと変身するものだ。大雪で屋根の一部が壊れたことをきっかけに、本提案では乾燥室や家族室を包んでいたレンガの壁の表裏を反転して、内部生活者の歴史を提示しながら展開していった。特に、SDレビューでは「ハウス・アディション」と呼び、10種類の建築パーツをアディション（付加）したことが特徴だ。各所にアクリル板やカーボン合材を接着剤で接合している。つまり「接着剤建築」で、1/1の模型ディテールの建築ができるのだ。結局第二世代が修復利用することになり、実施には至らなかった。既存の建築価値の再認識を通じ、どのように変身させるかが今重要なテーマのひとつだと言いたかった。

所在地：北海道ニセコ町
建築用途：アトリエ
構造：木造
敷地面積：3,621m²
延床面積：181m²

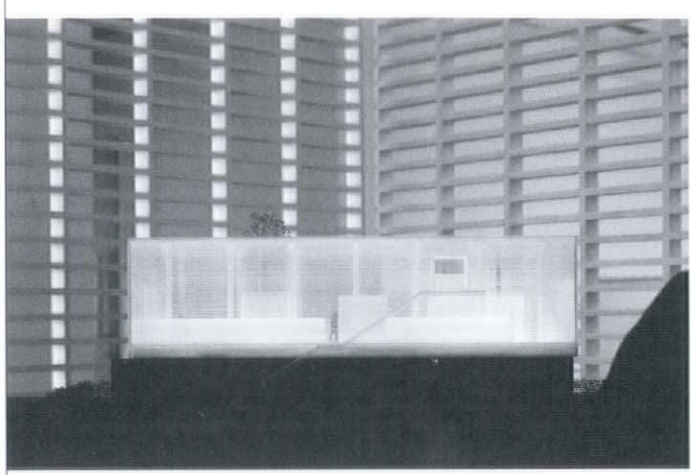
みやわき・まさる
1966年北海道生まれ。北海道大学助手

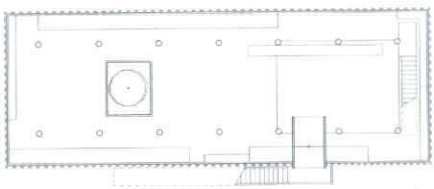


回転式階段ドアの詳細図
内部居室から直接ピロティに通じる階段として設計した。手動回転ドア形式で円盤が踏台まで降りる。階段自体が断熱床ドアとなっており、円形の側面スリットから自然光が入ったり、円盤自体が発光する。

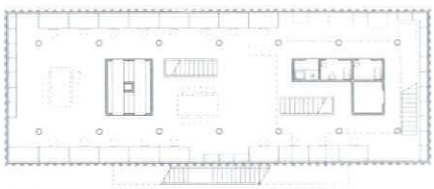
由田 徹+岡本美樹

スクリイン

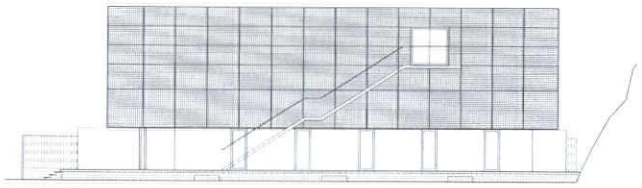




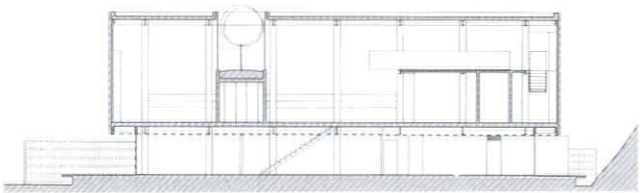
3階平面図



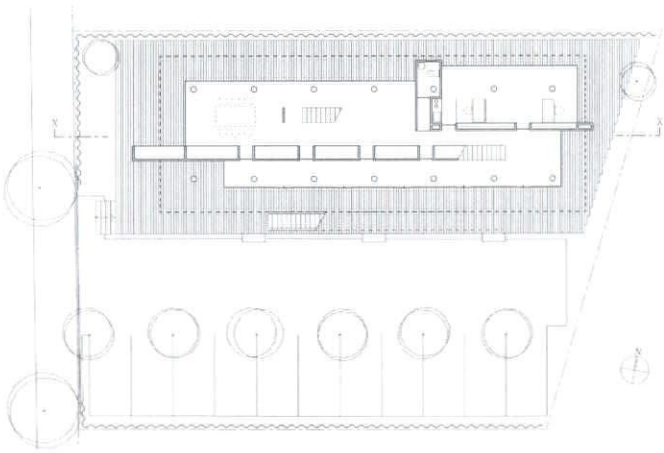
2階平面図



南側立面図



断面図



1階平面図



配置図

「何もない空間」こそ、無限に複雑である種の「よどみ」のようなものを抱いているのではないだろうか、という問いかけからこの計画のコンセプトが生まれた。空間の複雑性、空間のカオスを表出させるためには、歪曲した壁面や複雑な間仕切りによってではなく、建築の形態として最も一般的な直方体を用い、その中に無限の複雑性を閉じこめて「何もない空間」を作ろう、「在る」と「無い」の境目をつくろうと考えた。ある日、スギモトヒロシのドライブイン・シアターの写真を見て、その光の層が幾重にも重なったような漂白の画面にイメージがぴったりだと思った。この計画では、基本計画の段階で展示会の準備が始まり、展示会が済んだ直後に計画が中断してしまったので、実施設計に入れぬままでいる。基本計画では、イメージが先行してしまい、実施設計で具体的な構造や仕様の詰めができなかった事を残念に思いつつ、「何もない空間」に関する探求を続けている。

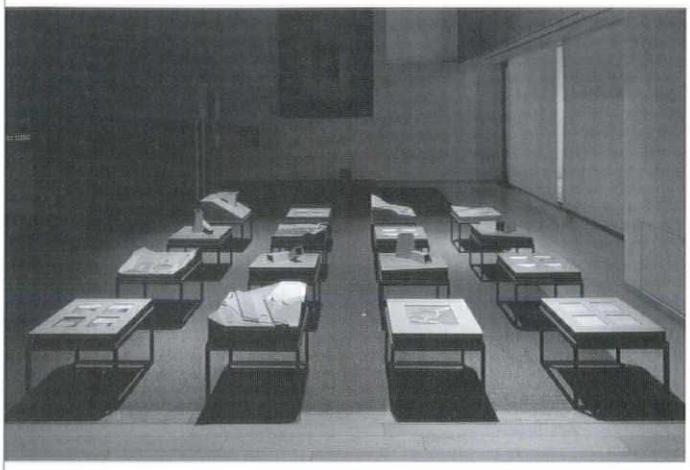
所在地：愛知県豊橋市
用途：オフィス
共同設計者：(株) 不二設計 (構造、設備)
構造：S造
敷地面積：765.72m²
延床面積：439.76m²

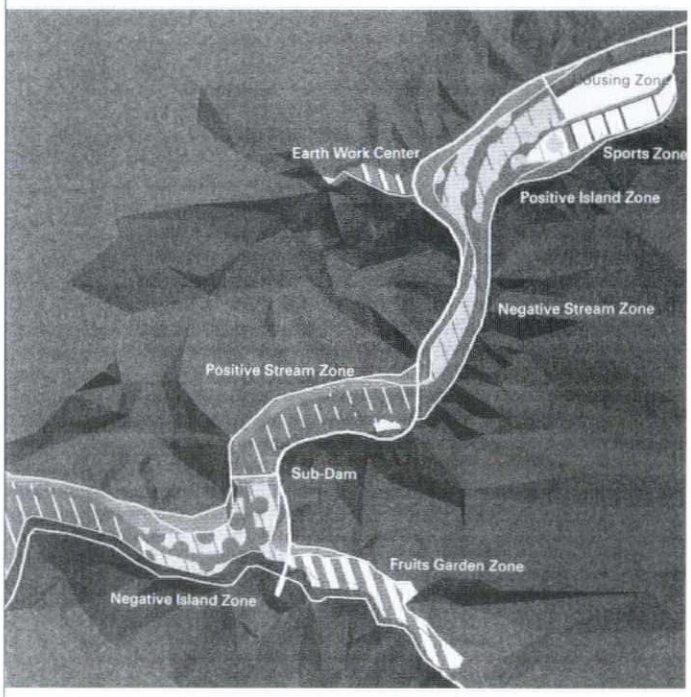
よしだ・とおる
1965年石川県生まれ。応募当時TXT建築研究所勤務。現在(株) 不二設計勤務

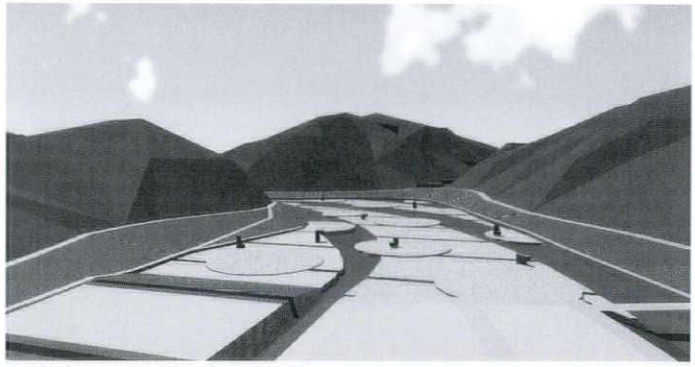
おかもと・みき
1966年徳島県生まれ。TXT建築研究所主宰。東京都立大学大学院博士課程

吉松秀樹／アーキプロ

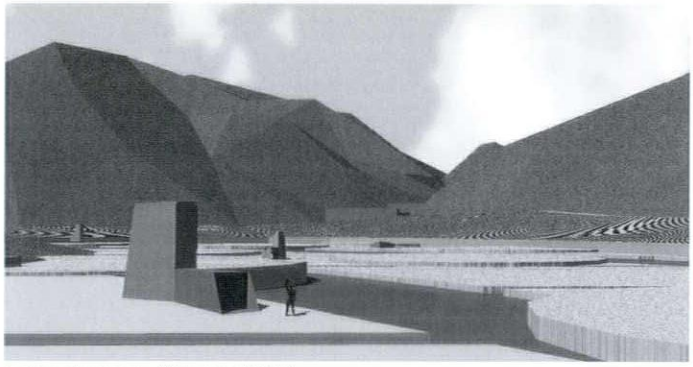
灰塚アースワークプロジェクト



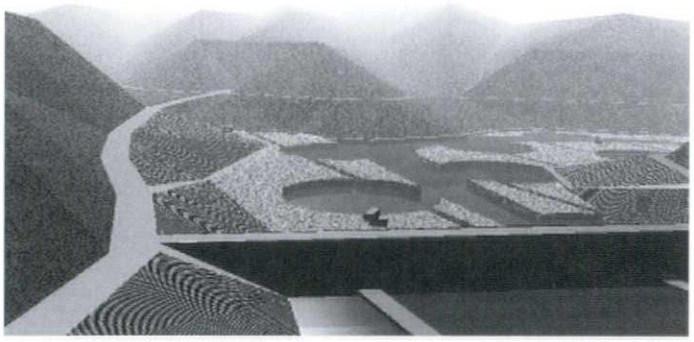




Positive Island Zone（Water Level 241m）



Positive Island Zone（Water Level 241m）



Negative Island Zone

CG制作＝前田道雄

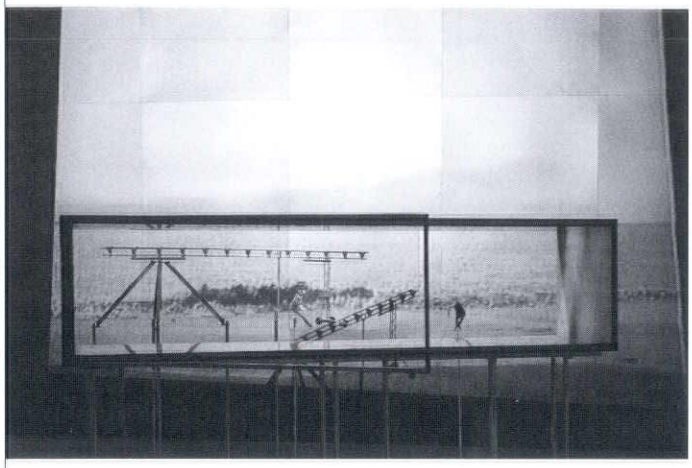
広島県の北東部の3町（総領、三良坂、吉舎）で行っている灰塚アースワークプロジェクトのメディア戦略の一環として応募した。土木事業に美術をもちこむだけでなく過疎対策を含む再建計画として行っているこの運動は、いままでのところ文化教育活動として続いてきた。しかし、この構想を現実化していくためには町や建設省と具体的に話をしていかなくてはならない時期にさしかかっている。こうした背景のもといままで提案してきたプロジェクトのコンセプトを分かりやすい形で広報し、各方面へプレッシャーをかけていこうと作業したものである。作成したCGとムービーは建設省の全国大会でも発表され、アースワークは実現へ向けてほんの少しずつ動き出してきている。しかし、SDレビューで提案したような公園がそのまま実現されるとは限らない。展示では、私たちの行っている活動のコンセプトを理解してもらいたいという主旨で歩き回れる展示空間を構成したが、いわゆる模型として審査員に理解されてしまったのが少し残念であった。

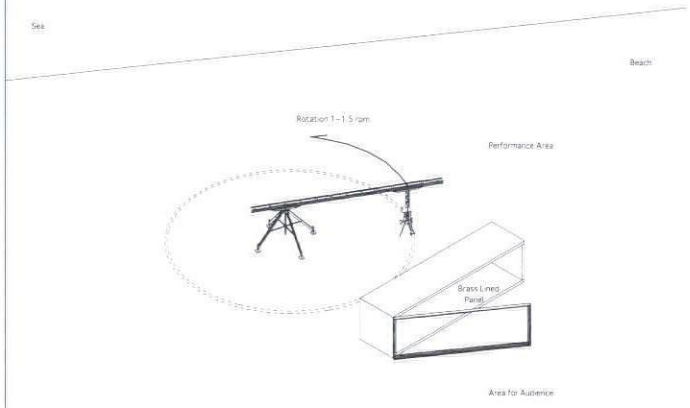
所在地：広島県甲奴郡
建築用途：アースワーク公園（環境美術園）
共同設計者：岡崎乾二郎（美術）、前田道雄＋小林賢司（アーキプロ）
構造：ブロック、石積み、木造
敷地面積：95.5ha

よしまつ・ひでき
1958年神戸市生まれ。アーキプロ主宰

RE[ ]/Responsive Environment

ダンスパフォーマンスのための舞台装置





はじめに、海岸でパフォーマンスをしたいと思った。
そのための装置は周囲の環境の中になるだけ、さり気なく。
浜辺に、長手に大きく開いた箱と、光を発しながらゆっくり回転するアームを置く。
集まって来た人びとはめいめいに場所を探す。
尻の下の砂の感触に馴染んだ頃、
アームに取り付けたライトを灯す。
薄明かりの残る砂の上をあかりが移動する。
次々に人々が現れて、消えていき、
明かりの灯ったアームは箱の壁の陰から姿を現しては、箱をかすめてゆっくりと遠ざかっていく。
アームの動きを止め、アームの光を消す時、波の音、尻の下の砂の感触、潮の匂いが再び支配的に現れて来る。
　この作品はインスタレーションとパフォーマンスを一体的に構想し、自らの手によって企画・製作を行おうとするものであった。制作上の都合もあり、このプロジェクト自体の実現の目処は立っていないが、このアイデアも取り込んだ新しい企画も行っている。

用途：仮設劇場
所在地：東京都近郊の海岸
構造：木造、一部S造

伊藤伸司／いとう・しんじ
1970年広島県生まれ。清水建設建築設計部勤務

遠藤拓己／えんどう・たくみ
1971年神奈川県生まれ。作曲家

遠藤徹夫／えんどう・てつお
1970年兵庫県生まれ。振付家、メーカー研究所勤務

馬場未織／ばば・みおり
1973年東京都生まれ。日本女子大学大学院住居学専攻修士課程在籍

日高仁／ひだか・じん
1971年広島県生まれ。磯崎新アトリエ勤務

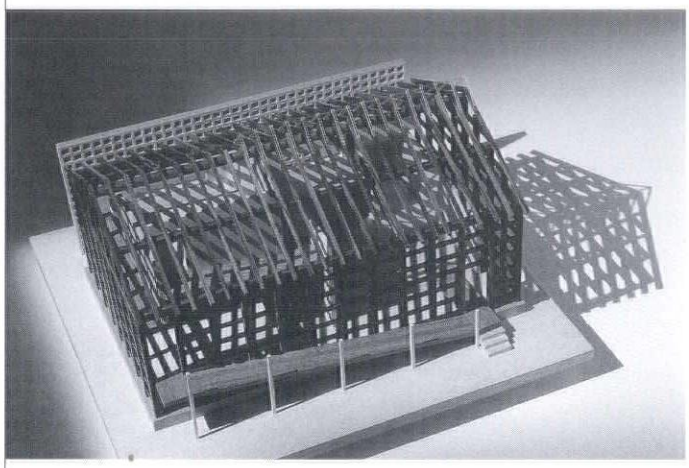
西澤高男／にしざわ・たかお
1971年東京都生まれ。長谷川逸子建築計画工房勤務

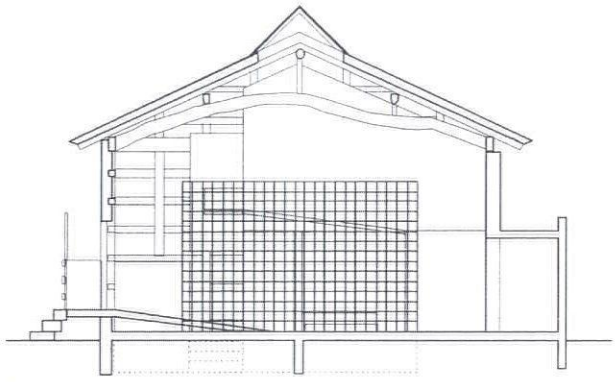
三田村哲哉／みたむら・てつや
1972年東京都生まれ。
東京都立大学大学院建築学専攻修士課程在籍

山代悟／やましろ・さとる
1969年島根県生まれ。横総合計画事務所勤務

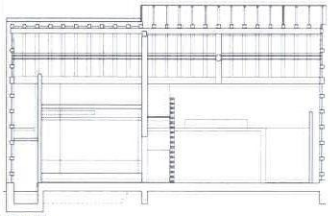
宮沢 透

S邸

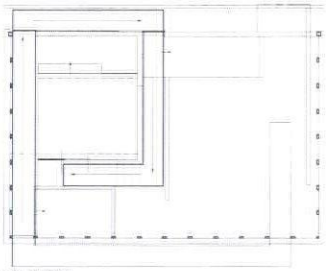




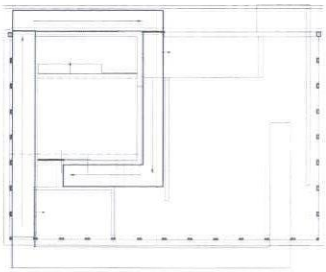
断面図



断面図



2階平面図



1階平面図

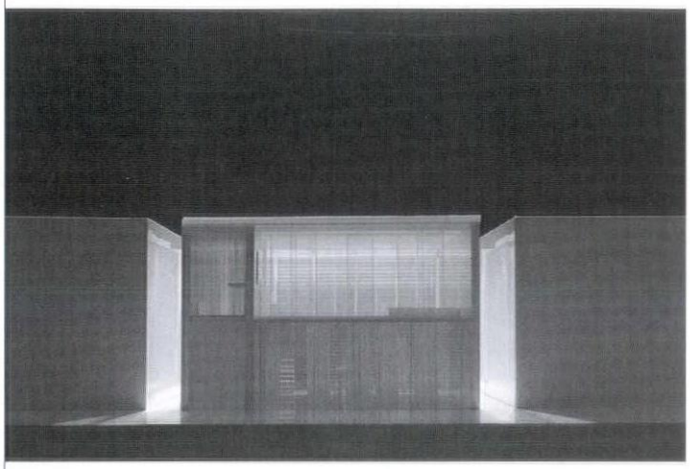
町に流れる固有の時間を保ちつつ、現在の技術を付加させていく。それが個の住宅からひとつの町にまで拡がっていけば、と考えていた。一身上の都合により、工事は当分延期の予定である。

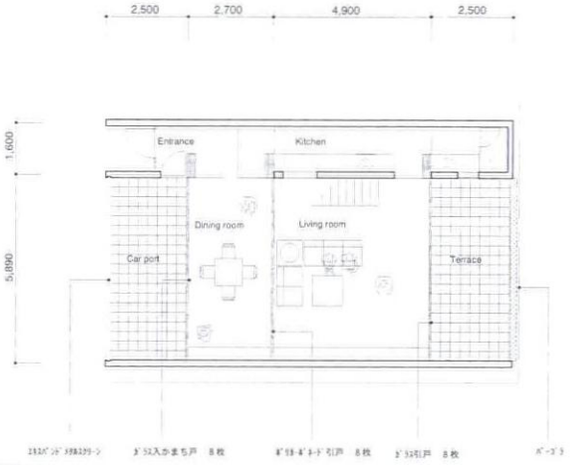
所在地：福井県坂井郡
建築用途：専用住宅
構造：RC造（改築）、木造（既存）
敷地面積：208m²
延床面積：174m²

みやざわ・とおる
1971年福井県生まれ。応募当時早稲田大学大学院修士課程在籍。現在池原義郎・建築設計事務所勤務

安田光男+杉山陽子

Tategu House





1階平面図

現在、設計者の都合で、一時、設計がストップしており、大幅に竣工が遅れています。施主からは新たな要望もあり、大きな設計変更をせまられています。「あのSDレビューに入選した建物はどうなった？」と多くの方に聞かれ、SDレビューというメディアの威力を感じます。独自のテーマで公の場に作品を発表し、それに対して評価を受けるというのは非常にユニークな経験でした。建築の世界は比較的、年齢の高い方が雑誌などのメディアを多く占めており、私達のような若い人間にとって、作品の評価次第で発表することができるSDレビューは非常に重要な役割を担っていると思います。また私達はお互い組織に属しており独立しているわけではないのですが、自分の時間を見つけて、個人として自分の考え方を発表することは重要だと思っています。

そういうSDレビューであるからこそ、自分の考えをはっきりとわかりやすく伝える必要があると考えています。

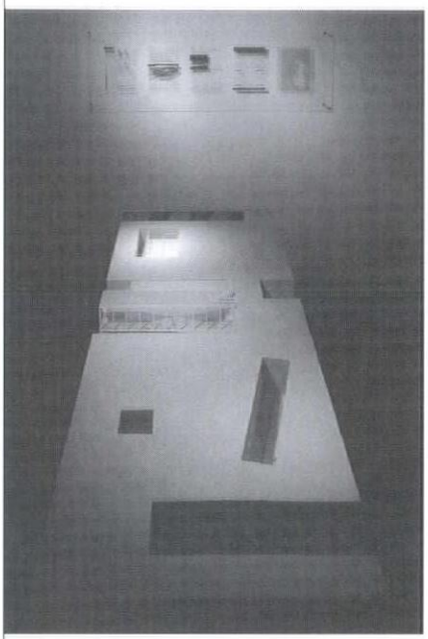
所在地：京都府長岡京市
建築用途：住宅
主体構造：RC造
敷地面積：111.38m²
延床面積：94.53m²
工事予定期間：1998年着工予定

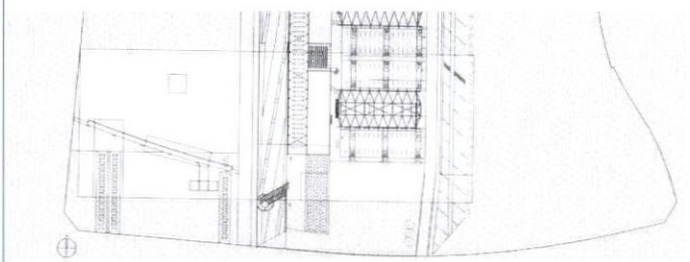
やすだ・みつお
1970年京都府生まれ。伊東豊雄建築設計事務所勤務

すぎやま・ようこ
1971年長崎県生まれ。日本設計勤務

渡辺真理+木下庸子／設計組織ADH+三谷 徹+長谷川浩己／S.E.D.O.

タウンセンターH





模型部分該当図

この施設はあるニュータウン居住者のための利便施設である。スーパーマーケット、飲食、物販などの商業施設のほか、行政窓口、郵便局、診療所、交番などの公共的な機能が集約されている。主として商業施設の入る2棟の建物には、都市建設初期のテナントビルとして究極の可変性が求められた。サスペンション構造の無柱空間が採用されたゆえんである。

それに対し公共的な施設はエスプラナードと名づけられた戸外の歩廊と一体になった直線的な形状の建物内におさめられている。

現在、建物部分はすでに供用が開始されているが、今年度中に施設前面の平地が「はらっぱ」として整備される予定になっている。「はらっぱ」はかっての原っぱがそうであったように、建設行為の開始されるまでのリザーブ用地の別称なのだが、建築とランドスケープが等価であるというコンセプトに基づくこのコンプレックスにしてみると、「はらっぱ」の完成をみて、はじめて、施設が完成することになる。

所在地：兵庫県
用途：複合用途
共同設計者名：ササキ・エンバイロメント・デザイン・オフィス（ランドスケープ）、梅沢建築構造研究所（構造）、環境エンジニアリング（設備）
構造：S造
延床面積：3,980m²
工事予定期間：1996年9月～1998年4月（予定）

わたなべ・まこと
1950年群馬県生まれ。設計組織ADH代表、法政大学教授

きのした・ようこ
1956年東京都生まれ。設計組織ADH代表、日本大学講師、芝浦工業大学講師

みたに・とおる
1960年静岡県生まれ。ササキ・エンバイロメント・デザイン・オフィス所属、滋賀県立大学助教授

はせがわ・ひろき
1958年千葉県生まれ。ササキ・エンバイロメント・デザイン・オフィス所属

座談会：SDレビューの15年をふり返って

世代を超えたゲーム性をめざして

鈴木了二×元倉眞琴×栗生 明×小嶋一浩

SD　SDレビューも16回目を迎え、東京展も大阪展も盛況のうちに終えることができ、多くの方々のご協力に感謝しております。16年間というのは、数字上では長い時間に思えますが、SDレビュー展の諸々を思うとあっという間の出来事だったというのが実感です。そこで、この1月号ではSDレビューの15年間（1982～1996年）を一挙に振り返り、実現作を検証し、建築家、建築界との関わりや意義などを再確認しようという特集を企画しました。さらにできれば今後の方向性をも含めて皆さんにご意見を伺えればと思っています。ではまず、SDレビュー展草創期の頃の印象をお話いただけますか。

SDレビューの草創期

元倉　SDレビュー展開催の契機について簡単に触れると、ヒルサイドテラスの活性化のために文化的なことをしたいということでオーナーの朝倉さんと、設計者である槇文彦さんが話し合われPA Awardのようなことができないだろうかと提案された。それもあまり権威的なものではなくて、気楽に応募できて、若い人たちに作品発表の場を与えるということと、普通の建築の情報メディアになかなか載らない地方の建築家たちにも機会を与えられればということで、なるべく縛りのない、だれでも応募できるフレームとしてスタートしたんです。

そういうスタートでの考え方が維持されて、ずっと継続されてきたというのは、当然みんなの努力があったわけだけれど、やはり最初の発想がかなりよかったんだろうと僕は思っています。

鈴木　僕は、過去のSDレビューを今回全部見直してみたら、はじめの方から自分の個人史みたいなものとほとんど連動してまして、なんともいえない気持ちになったんですよ。僕たちはグループで、1970年ごろからコンペをやってみたり作品をつくったりしていたんだけど、建築を実際につくるだけではなくて、プロセスの中で生み出される模型やドローイングにけっこう強い関心をもっていた。スーパー・スタジオとかアーキズームとか、影響が大きかったと思うんだけど。

ところが、そういうプロセスをそのままちゃんと出してくれる雑誌や場所がないわけです。かつてのジャパンインテリアは例外的に、模型とかドローイングをかなりこちらの希望に沿った形で出してくれたけれど。そういう場所がもっとないものかなと思っていた矢先に、第1回目のSDレビューが告知されたんですよ。その時の感じが、今までになくオープンというか、入れば全員同じ条件で展示される、展示作品制作費補助としてこれも一律5万円という、それがすごく気持ちいいな、これっ、という感じがあったんですね。それまで、あったらいいのになと思っていたものが、いきなり用意された。僕には最初から模型、ドローイングに関しては特別の気持ちがあったから、自分たちが思ってることをそのままやっていいんだろうということで、日常のままをプレゼンテーションして応募したというのが第1回でしたね。

我々の表現が初めてそのまま可能になった場所という意味で非常にうれしかったというか、そういう印象です。

栗生　お二人が言われたように、若手建築家の発表の場として、他にそういうものがなかった。僕は6回目に応募したんですが、すごく気楽に応募できるなというのが第一印象でした。それまでの建築家の展覧会というのは、評価の定まった建築家が完成度の高いものを並べるというものが多かったわけですが、SDレビューは完成度はあまり要求されてない。逆に言うと完成度を上げれば上げるほど陳腐に見えちゃうような展覧会だったし、設計の途中段階で応募するものは、内容そのものも十分練れていないけれど、未知の世界を切り開いていくような面白さとか、完成途上で闘ってる姿が見えてくるとか、そういうものをもろに出していく。そしてそれが伝わってくることの良さみたいなものがあったと思います。

87年に若い人を対象に、建築デザイン会議というのを難波和彦さんたちと組織したんです。そのとき、SDレビューが参考になった。20～30代の人たちの活動を一覧できるものはこれしかなかったですね、当時は。それで、「地方・若手との交流」を目的に、戦後生まれの若い人たちを100人集めることができたんですね。そういう意味では、まさに若手建築家の新しいステージができたという感じですね。

小嶋　この4人の中で僕だけは審査員の経験がなくて、応募するほうだけなんですね。SDレビューが始まった時は大学院の修士課程でして、ちょっと上の先輩で竹山聖さんたちのアモルフが2年続けて入選した。そういうのを見てましたから、僕にとっては当然のように、何か仕事をする機会があったらこれにまず出して……と。要するにそれ以外の世間への出て行き方なんてわからないわけです。

大学院は原研究室でしたから、それなりに建築家の世界の空気は吸えてたんですが、自分でやるとなると、どこから学生ではなくて建築家と名のっていいのかという線引きが非常に難しい。それが、SDレビューに入ると肩書きを建築家と書いてもいいんじゃないかとか、そういう意味では非常にわかりやすい指標だったような気がします。さらに、自分がやっているプロジェクトを出せばいいんだというところが非常にクリアで、フェアなルールという感じがあったわけです。

シーラカンスは大勢でやってますから、4回目、5回目、6回目、7回目と年中行事のように、とにかく応募したんです。事務所の中でも、こんなんじゃSDレビューに出せないよというのが一番わかりやすいクリティックになってましたし、人の前に発表するということは、これはこういうことを考えていて、ここが新しいとか、ここを見てくれということをきちんとメッセージとして出せなくてはいけないということを学びました。

クライアントとのやりとりでは、言語ではなくて、現実的な諸問題をいかに解決したかというようなことになりがちですが、こういう展覧会になると、建築としてエッセンシャルな部分を鍛えていかないと出せないということが自分にとってはすごく元気づけられるし、いい時期にいいものが始まってくれたということがまずあります。

また発案者である槇さんが、SDレビューをスタートさせて、5年間審査委員長をされて軌道に乗せられたということはすごい功績ではないか。作品をつくられていることとは別に、槇さんという方が、いかにいろんなことを考えておられるかということの表れなんじゃないかと思います。

元倉　これは審査員という制度をとっている



鈴木了二／すずき・りょうじ
1944年東京都生まれ。fromnowを経て、現在鈴木了二建築計画事務所主宰。早稲田大学教授
1982年〈Seijo First〉で入選、1984年〈杉並の住宅――物質試行10〉でSD賞受賞
1988～1989年SDレビューの審査員

けれど、コンペではないから、建つことに責任をもって選んでるわけではないですよね。審査員の独善というのかな、ちゃんと応募者の顔が見えて選ぶことができるということにしたわけですよね。それが、うまく運営できた一因だと思います。

栗生　応募するほうも、そういうことに対してあまり抵抗を感じないで応募してましたよね。

元倉　最初の数年は応募者名がわかっていて、たとえば鈴木さんはこんなのをやってるなというふうに審査してましたよ。権威づけをするのをやめようということもありましたね。

SD　最初の頃は名前を伏せてはいなかったんです。そこにはあくまでも各プロジェクトの途中段階を見ようという視点があったと思うんですね。皆さんがいま実際に仕事として進めているものに対してどんな解決策を講じているんだろうとか、その痕跡とか闘いみたいなものを見ることに意味があるのではないかということで。

元倉　アンデパンダンみたいに自分で持ち込んで展示すればいいんだけど、それではあまりにも縛りがないから。逆にいえば、権威のある賞というよりも、展示が最初にあって、展示するための選別というのがあったような気がする。

小嶋　途中から匿名にしたとか、ずいぶん変わってきたということですね。今は権威づけとはいわないまでも、入選してデビューするんだということがけっこう意味をもってると思うんです。なぜ匿名になったんですか。

SD　いくつか選ばれて、あと2点か3点をどうしようかという時に、この人ならこれでいいのかとか、この人の案でこれならもう一方の案を選んだほうがいいのではという判断材料として応募者名を確認することもありました。しかし、それではやはり公正さに欠けるということで、応募者名は伏せることにしました。

鈴木　1次審査の時点では、最終的にどんなものが出てくるかというのは、ある程度、賭けでしょ。ここが審査員が試されてる部分でもあるし、非常にスリリングなところで、とても面白いシステムですよね。

元倉　審査員側の読解力みたいなものね。

鈴木　ラディカルなものが出てきた時に、そのラディカルさを本人がわかってやってるのか、それとも本人は無自覚で、我々にラディカルに見えてるのかというあたりで非常に迷うというのを審査員になった時によく感じましたね。そのへんをめぐっての議論が非常に面白かったですね。

栗生　最初は20点以内ぐらいをとにかく拾い上げる。いろんな傾向や可能性みたいなものを拾い上げる。そういう一段階があっていいと思うんです。どう発展していくかというのが二段階目で見られる。危険もあるかもしれないけど、危険も含めて面白い試みだと思いますよね。もうひとつは、審査基準がはっきりしないところがあるでしょ。それもいい点だと思うんですよ。4人の審査員が統一した見解で当たるという仕組みじゃないところが非常に面白い。

元倉　審査員の構成によって傾向の揺らぎみたいなものがちょっとあるんですよね。そんなに明快ではないけど、あったと思うな。伊東豊雄さんが審査員になられた頃とか。

鈴木　4人の審査員の独特の組み合わせから出てくるんだけど、ある種の良識的スタンダードというか、基軸みたいなものが不思議に維持されましたよね。それが今でも続いているようで、これも不思議といえば不思議。でも基準がしっかり決まってないものだから、建物もいろんな種類が出てきますよね。

栗生　約束にとらわれないで、作品を見ながら基準を自分でどんどん変えてしまう。

鈴木　不思議にそれがある基軸をつくっていくみたいなところがある。

元倉　すごく乱暴な話ではないですか、選ぶほうも出すほうも。そういう乱暴さを許すのは、SDがやっているからで、某建築協会とかだったら全然違ってくるじゃないですか。つきつめていっても、権威に行きつかないルーズさを許してるところがあって、それが面白いんじゃないかな。

展覧会のプレゼンテーションの影響

SD　最初のころはわかりやすいというか、かなり手の凝ったものが出展されていましたが、だんだんオブジェ化してきたような面もあります。初期の頃は、鈴木了二さんや小宮山昭さんのプレゼンテーションが目を引きました。図面や模型のプレゼンテーションという面でもSDレビューは影響を与えてきたかなという気がします。その辺りはいかがですか。

鈴木　実際にやっている仕事に関して、その中に潜在しているある性格を模型化する。模型というと、それまでは建築の表現の雛型みたいなもの、全体のミニチュアだったでしょ。そうではなくて、建築も模型も同等の力があって、それ自体で何かものが言えるのではないかと思ってやっていた。模型そのものの力と可能性を試してみることです。そのことが建築について、それまで気のつかなかった発見に至ることにもなる。だから、SDレビューで試みた段ボールの模型がさらに発展して、もっと大きなインスタレーションみたいなものを美術方面の画廊いっぱいに展示するというような方向にまでどんどんドライヴしていったようなところが僕の場合にはありました。

元倉　最初の5年間ぐらいかな、模型が抽象化して、具体的な建築と模型とがどんどん乖離していくことに対して、乖離していていいんだ、模型は自立すべきだという意見と、実際に建つものだから、そこはきちっと結んでもらわないと困るという意見とふたつあって、気になってるところだったんですね。途中からは模型は模型で独自のプレゼンテーションの世界をもつというコンセンサスがとれてきたようです。

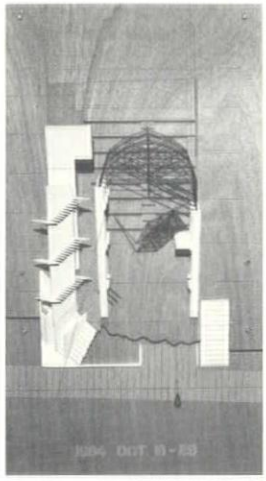
僕は、最初の年に審査員もやったし会場構成もやっていたので、鈴木さんと小宮山さんの模型はある意味で助かったというか、びっくりしましたよ。普通の建築模型が出てくるものとイメージしてたのが、ふたりとも全然違う表現の仕方なんだけど、どちらも展示として力があるし、よく記憶してるんですよ。

小嶋　僕はSDレビューと同時スタートなので、展覧会に模型を出す、イコールSDレビューで、それについてあまり悩んだことはなかったんですね。完成した建築を実物で見れば完成度が問題になるし、いくら元気なことを言ってたって、実物を見て悲惨なものは悲惨にしか見えない。

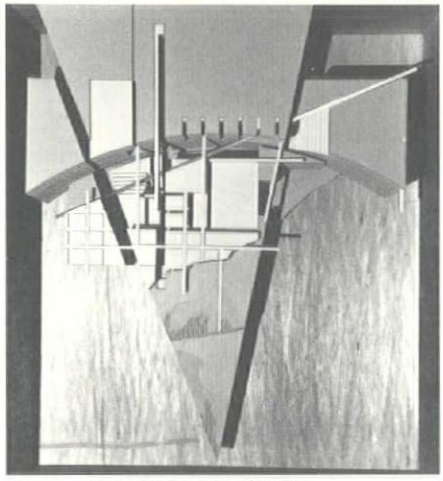
ところがSDレビューでのプレゼンテーションというのは、それとは違って、いまこん

元倉眞琴／もとくら・まこと
1946年千葉県生まれ。槇総合計画事務所を経て、現在スタジオ建築計画主宰
1985年〈HILLSIDE ANNEX〉でSD賞受賞、1987年〈コスモ池上7〉で入選
1982年SDレビューの審査員
SDレビュー開始以来、現在まで会場構成を担当





SDレビュー1984出展作品（SD賞）／小宮山昭



SDレビュー1984出展作品（SD賞）／鈴木了二

なことをやりたいんだという生のメッセージの部分がそのまま並んでるわけです。そういうことの面白さを素直に受け入れられたし、自分にとっては学生の延長でそのまま突っ走っていいんだというところがあって、とてもよかった。

それからエントリーする時に書く400字の設計趣旨というのは、すごく短いですよね。その中で偶然できたんじゃないぞ、確信犯だぞ、ということも伝えなくてはいけない。ちょっと丁寧に書いてるとすぐに溢れ出してしまうので、自分の考えてることを凝縮して表現するトレーニングがすごくできたような気がします。

鈴木　出展するものとして400字の文章とドローイングと模型、この3つの表現の枠組みとしての意味を、出すほうは考えますよね。この3つのみが勝負で、そこにやりたいことのすべてを凝集しなくてはいけない。文章がリニアーな一次元だとすると、ドローイングは平面だから二次元、模型は三次元なので、この３つの次元の運動については、うまく伝わったかどうかはわからないけど、ずいぶん考えましたね。このモデルをつくるとこのドローイングは違うとか、このモデルだったらこのドローイングだろうとか、その場合、文字はこうなるとか。その三つの枠組の連係の中で文字を書いてる時に突然何かに気がついて、普通だったら言えないことを言ってしまうようなこともあったような記憶がありますね。またその言葉が思ってもみなかったドローイングや模型の作り方を誘発したり。

栗生　ドローイングというのはもうちょっと手前で、内向きのものとして自立していく。もっと手前がスケッチという言い方になるのかもしれないけど、個人の作家性がそこに込められていて、それをのぞき見るような楽しみというのがドローイングにはあるんではないか。完成したものの写しではなくて、途中でいろいろストラグルしてる段階のものもドローイングだし、自分では隠しておきたいようなものも、垣間見えてしまうようなところも含めてドローイングには魅力があるでしょ。

鈴木さんや小宮山さんが模型で同じようなことをやられた。我々はそれにずいぶん影響されてますよ。こんなまとまった模型ではいかんなと思ったり。

鈴木　クライアントに対して建築のプレゼンテーションをしていく時というのは答えを出すという感じがあるでしょ。だから、ややもすると建築は与えられた条件で構成された問題への回答だという考え方が一般化しやすいし、またその方がものが言いやすい。しかし建築には全く別の側面があって、ひとつの建築を建ち上げる時に建築それ自体が問題提起になる場合がある。答を表現するのはたやすいけれど問題を表現するのは難しい。だってわからないことが問題なんですから。でもそれがうまく言えるかどうかは分からないんだけどありふれた答でお茶を濁すのではなくとにかく言おうとしてみることがこの場所で可能になったんではないか。うまく言えないものを、ともかくまず出してみる。物にしてみる、あるいはドローイングにしてみる、言葉にしてみる、というようなことが許されていたと思ったんですよ。

小嶋　それはSDレビューの形式を反映してると思いますね。コンペだと、ある宿題があって、いかに回答したかということを前提にしながら、さらに提起せよという話ですけど、この場合は、敷地とか条件とかを超えた普遍性や社会性みたいなものがどのように出せるかということが問われてる部分があって、そういう機会は今までなかったわけです。

しかもプレゼンテーションも含めて、いきなり15点20点という作品がひとつ会場に並んだり1冊の本になったりする。展覧会に15とか20あると、その中ですごく記憶に残るものもあれば、そうでないものもある。表現者としては記憶に残したいわけでしょ。プレゼンテーションの問題でいっても、去年まで透明のものが多かったから、今年は透明なものを出してもだめだよという話も当然出てくる。

栗生　さっき小嶋さんが確信犯的に自分の問題をはっきりさせて出してくると言われたけれど、審査員の立場で見てると、その問題はすごく陳腐であって、本人が気づかない他の問題をたくさんもってる場合があって、それを見つけ出す面白さがあるんですね。

鈴木　ありますよね。深読みしてるわけで、本人はそんな気はないんだろうけど、審査員はそれで盛り上がっちゃう。そっちのほうに発展するだろうと期待して待ってると、全然違うほうに行っちゃったりとかね。

小嶋　審査会の時にはそういうことを言いながらやってるんですか。

栗生　もちろん。ここが面白いけど、この人は気がついてないなとか、それが面白いんですよ。

小嶋　期待する方向になる率はどのくらいですか。

栗生　低いですよね。

鈴木　最後に残った3点か5点ぐらいの迷いはそこらへんに集中してくるんですよね。それが入ってこないと、妙に模範的なものばかり並んでいて展覧会の筋が読めてしまうというのは退屈でしょ。そうすると際どいやつを５点ぐらい入れてくる、ここが投機になってくるわけだ。

栗生　それはそれでいいではないかという気

分が審査会でもありますよね。

鈴木　あります。そこは腹を決めて。

栗生　はずれましたね、なんていうことで。

小嶋　出すほうからすると、本で初めて講評が読めるわけですよね。エントリーしてるほうからすると妙にあっさり流されてしまう講評の場合と、議論が盛り上がってる講評とは明らかにわかりますよ。そのへんは15なり20に入るのとは違ったステージの怖さもあるし。いまおっしゃったように1次ではよかったけど2次はつまらないねということも書いてあるから、そう言われないようにするにはどうすればいいんだというあたりもね。

元倉　原さんがどこかで書いてたけど、10点ぐらいはみんなでスーッと選べる。その10点のあとがいろいろ問題で、もしかしたら、というのもずいぶん入ってるわけですよね。自分が引いたやつがよくできてくるとすごくうれしいというのはありますよね。また、模型で建築を表現するやり方をSDレビューがリードしてたというのは確実にありましたね。模型が本当に模型だった時代というか、僕らが学生の時は、現実の建築の何分の1かの模型を建築家は提出してたわけです。そうではなくて、あるコンセプトなり自分の狙ってることを表現する媒体として模型が使えるというのをSDレビューが示していって、それが建築を設計する人の一般的なものになっていった。

栗生　建築でコンセプト、コンセプトと言い始めたのはそんなに古くはないんです。一種の近代主義だと思うんだけど。実際の建物であればその場の空気とかテクスチャーとかがわかるんだけど、それ以前の話だから、コンセプトというものが評価の対象にならざるをえない。そうするとコンセプトを伝えるためのテクニックとしてリアルな模型というのは戦略的にあまり得策ではないわけです。そういう流れがあったんではないかという気がします。

入選者とそのプロジェクトへの影響

SD　SDレビューに入選して、ましてや賞をとったりすると弾みがついて施主にも説得力をもつとか、若手の人はそのことで元気づけられて、さらにもう一歩挑戦しようとか、そういう影響もあったのかなという気がします。

地方の方ですが、SDレビューに応募して入選して、3度楽しめるというんですね。応募する時に自分で工夫して表現して通った。次に、展覧会のために一生懸命やってみる。それが12月号で本になる。動機はそんなにすごいものではなかったけど、応募してみたら入って、半年ぐらい楽しめて、それが施主に対しても説得力をもったことがうれしかったという話を何人かの人から聞いたことがあります。

小嶋　僕も4年続けて出した時は、応募、出展、SD掲載と、実際には一瞬ではなくて半年ぐらいのスパンがあるから、ずっとSDレビューをやってたような感じがありましたね。

栗生　SDレビューが若い建築家を励ますという役割はすごく重要だと思うんですね。いろいろ話はくるけど、なかなか実現できない。一生懸命いろんな提案するんだけど、なかなか理解してもらえない。説得の技術も悪いんだけど。僕の場合、鹿島賞をいただいたプロジェクトは、まだ基本設計の途中で、建てる建てないという話はなかなか先へ進まない段階で出したわけです。それが賞をもらって雑誌に載る。そうするとオーナーのほうもそれを見るわけです。そして理解度が深まって、それが弾みになって実現する。

最初は建物の中で空中に自転車を走らせるなんて、そんなの見たことないよという議論ばかりなんですよ。そういうものをSDレビューで評価してくれたわけでしょ。しかもこれは全国の書店に出る本ですから、そういう本に載せられること自体がオーナーにとっては決断の引き金になるわけです。内藤廣さんが書いてましたけど、思いつきのレベルから、それを実現させるためにプロモートする力が建築家に必要だとすれば、これもひとつの手段だった。あとから振り返ると、これに出したことによって実現に結びつくきっかけになったわけです。こうしたことは若い人たちには大きな糧になると思うんですね。

小嶋　SDレビューで並置されることによって、うまく相対化してくれると思うんですね。いまおっしゃったような話もそうです。建築家というのは基本的には建築家同士で何かやってるわけではなくて、個別の相手と個別に仕事をしてるわけです。いま栗生さんがおっしゃったように、僕も最初の仕事は、これで賞をいただいたから建てなきゃいけないんではないかということになって、それで建っちゃったところがあるんですよ。先にこういうところに出たことによって何かプレッシャーをかけた。

鈴木　それはすごい功績だな。

小嶋　やめるとまずいんじゃないかみたいな、そういう力があると思うんです。

鈴木　退路を断つわけね。

小嶋　建たなかったのもあるから万能ではないけど、そういう場合でも、クライアントとして会社名まで出ていて、それで建たなかったということにはしたくないわけですよね。

鈴木　それは脅迫だ（笑）。

小嶋　さっき相対化する力といったのは、一人でやってると、相手をうまく説得できてプロジェクトが進んでいても、それがどういうものなんだろうということをなかなか自分で定義できないところがありますよね。自分の方法を確立してる人ならそんなに迷わないのかもしれないけど。コンペだと、選ばれたというのはわかりやすいんですけど、自分が提案してるのは、その時の状況に左右されるところでやってるわけだから、そういうものが展覧会場で並んで、そこに建築家が集まってきて見るとか、コメントが入ると、その中で自信をもつこともできるし、逆にちょっとまずいかなと反省することもできるし、両方の機能があって、それは今でも有効な部分なんじゃないか。

栗生さんがおっしゃったのと逆のケースだって起こりうるわけですよね。クライアント相手には快調に説得できて、SDレビューにも入選したまではいいけど、コテンパンに講評されたりして、反省だってあるわけです。クライアントに見られたくないので、本が出たことを言えないとか（笑）。

栗生　この面白さっていうのはそういうところがありますよね。こんなのできるのかね、できたら見にいくけど、たぶんだめだろうなというような。

小嶋　栗生さんの〈カーニバル・ショーケース〉なんかは典型的な事例ですけど、1年とか数年たったあとで違うメディアでできあがったものを見て、あの時のものだとわかるものとわからないものがあるんですね。すごく強

いメッセージがあった場合は、あれがこんなふうになったんだというのがわかりますね。

鈴木　若い人たちに言えるのは、入選すると自分の苦労して作ったものが非常に優遇されてるという環境があることでしょう。ゆったりとした紙面で本に載せてもらえるし、会場の展示がしゃれてますよね。ブースで割られてる見本市みたいのが時々あるでしょ、1mごとにブースになって置いてあるようなのが。ああいうものではなくて、非常におしゃれな環境の中に遇されてるというかな、あれがうれしいですよね。自分たちの雑然としたアトリエや仕事場で見るのとまたずいぶん違って見える。僕のときなんかそういう印象をもちましたけど、今でもそれが維持されてる。

元倉　会場の構成を手伝ってると、会場の環境の中でどうするかというのを相当気にしてみんなかかわってくるんですね。それも面白いなと思って。

栗生　応募者同士で磨かれていくというか、何回か出てくるような常連を意識し始めるんですね。

テレビ番組で、「ボキャブラ天国」というのがあって、素人とセミプロみたいな人が入れ替わり立ち替わり出てきて、ダジャレをいうわけです。最初はなんてダサイんだろうと思ってたのがどんどんうまくなって、メジャーになるのもいる。繰り返し繰り返し出て、あの場でネタを試すようなところがあるんですよ。これは受けるぞとか。そういう感じがSDレビューにもちょっとあるかなと思うんです。どういうのがいま一番受けるのかというのが。直截な言い方をするとね。同じネタでも演者によって間の取り方とか、そういうところがどんどん磨かれていくんですね。

小嶋　若手ということで言うと、僕もそうだったんですけど、最初は建築家なんてそんなに知らないわけです。入選するとパーティーがあることも大きくて、その時に審査員を始め、多くの人がくるわけです。名前はよく知ってるけどお会いしたこともない人と、審査員だからという理由で寄っていって話ができたりとか、このパーティーの時に初めて話をした人がすごくたくさんいるわけです。そういう人たちがどんな見方をしてるのかというのは活字になってるのとはまた違うことをおっしゃるから、とても刺激になった。

栗生　若い人たちのある種の道場みたいにお互いに影響しあって、時代の風をはらんでどんどん伸びていく。それがひとつの傾向をつくりだしていくというのもあるけど、片方で違った表現を常に探してる。今まであったものでも、それに対する違った見方ができるとか違った評価がありうるとか、そういうのもあるんじゃないかな。

SDレビューの時代性と巡回展

SD　過去のSDレビューを振り返って、年代による建築の違いは見えていますか。実現するという前提のプロジェクトですから、時代を反映しているんだという見方はあるでしょうが、実際に展覧会の中でその点は見えているでしょうか。

鈴木　僕が審査員をやらせていただいたのは88年と89年ですから、バブルの真っ最中のころなんですね。そのとき審査する側から見て驚いたのは、第一次審査の段階からものすごくきれいにプレゼンしてる。コンペのプレゼンテーションを見てるような感じになっちゃって、実施図みたいなものやラフスケッチがなくなっちゃってる。第1次審査でプレゼンがきれいだとやっぱり惹かれますよね。それが果たしていいのかどうか。逆に言うとコマーシャライズされたなという印象が非常に強くあった。展覧会でのプレゼンも、ある意味では非常に精度が高い、ある水準まで達したと同時に、何となく角が取れて表現が似てきたような印象をもったんですね。どこか業者的というか、それがバブル期の性格だったのか……。

小嶋　僕は審査員をやったことがないからわからないですね。見かけの悪いものよりいいもののほうがいいだろうというのと、応募要綱にプレゼンは主要な評価の対象ではないと書いてあるから、あまりプレゼンテーションすると減点されるかなというのと、バランスがすごく難しい。

元倉　応募のメンバーにもよるんだろうけど、初期の頃の鈴木さんや小宮山さん、僕が鮮烈に覚えてるのが吉田保夫さんですね。どれもクラフト的、触感的というか、建築をつくることを軸に回ってたような気がする。バブル期の建築はそこからスッと乖離しちゃったようなところがあって、プレゼンテーションにもそういう傾向があったんじゃないかなと思います。

最近の5年間位は、間口がどんどん広がって大きな傾向としてうまくとらえることができないな。

SD　巡回展ができて各々の地で多くの方々の協力を得て、盛り上げていただきました。より広いフィールドをカバーしてきたかなということで各地の建築家にも影響があったかと思うんですが。

小嶋　吉田保夫さんや久保清一さんなど、ベテラン組の後に続いて、ここ数年でいうと遠藤秀平さんや中村勇大さん、長田・筏組とか、長坂大さんとか、東京のパーティーでさえ関西勢のほうが元気よくやってる。30歳前後の若い人になると、むしろ関西のほうが元気いいんじゃないかというのをはっきりと感じますけどね。

栗生　そういうのもSDがきっかけになってるんではないかと思うんですよね。建築ジャーナリズムって東京に集中してるわけでしょ。地方で建てたものを紹介して、載せてくれというのは大変なんですよ。SDレビューは気軽に応募して、入選すれば載る。それがきっかけになって東京に出てくる。知ってる人と会う。場ができる。そうすると建てたものの写真を撮ってくれということも言いやすくなる。載せてくれということも言いやすくなるわけでしょ。そういうきっかけですよね。

鈴木　人間関係から入っていかなくてすむわけね。それは大きい指摘だな。そのオープンさって重要ですね。

小嶋　チューリッヒ展や金沢展があって、肩に力を入れてやるというのではなくて、その時代、その時代でやれる場所で継続していって、その時にヒルサイド・テラスだけはちゃんとコアになっている、それもすごくいいなと思うんです。いい意味でSDレビューはイズムをつくっていないと思うんですね。審査員の強力な傾向とか。こういうのって利用しようと思えば、審査員がメッセージを出す場にだってできるわけですよね。戦略的に案を選んでいくとか。そういうことがないから、い



栗生 明／くりゅう・あきら
1947年千葉県生まれ。栗生総合計画事務所主宰。千葉大学工学部教授
1987年（カーニバル・ショーケース）で鹿島賞受賞、1989年（ギャザホール）で入選
1993〜1994年SDレビュー審査員

ろんな人が出してくる。実際に不思議な共存ですよね。土壁のカーテンウォールがあったかと思うとパリパリに透明なのがあったりとか。

鈴木　審査員のバランスが入選作品にも不思議なバランスをつくるのね、いつも。独特のスタンダードをつくってる。それがPA Awardなんかとちょっと違いましたよね。あれはもっと鮮明なものがある。審査員の権威みたいなものが強く出てましたものね。しかし、PAもなくなっちゃったわけだし、SDレビューは世界でも珍しいケースになってきてませんか。非常に貴重だと思いますよ。もう少し外に開くと面白いと思うんだけどね。招待でもいいと思うけど、外国から引っぱることができるとまた違う色になるのかなという。セットする方は大変なんでしょうけど。

今後のSDレビュに一期待するもの

SD　これまでSDレビューを16年間続けてきたんですが、その間に外から我々のところに入ってくる声として、マンネリ化しているのではないかとか、審査の方法も4人でやるのがいいのか、個性的な人にやってもらったほうが明快な展覧会になるのではないかとか、いろいろあります。また、どんなプロジェクトでも応募できるわけですから、ランドスケープもあれば住宅もあれば、公共の大規模市庁舎もある。それらが1次で選ばれても、最後に鹿島賞とか朝倉賞という時に、どういうところで判断していくんだろうか、といった審査員泣かせのところもあります。それらを踏まえ、今後のSDレビューへの期待をお話しいただきたいと思います。

鈴木　考え方がふたつあるんですね。スタンダードとして維持し続けるかというのと変動させるかというのがあるんだけど、SDレビューの16年というのは大変な時間だと思うんですよ。その間ずっと維持されてきた枠組みはそれぞれで充分貴重だから、基本的に維持することが大事という考え方もある。これが面白くなるかどうかは出す側の問題だと思うんですよね。毎年毎年、盛り上がり面白くあり続ける必要もないような気もして、時々ハッとするものがあればそれでいいんじゃないでしょうか。全然ハッとしないのも困っちゃうんですけど、淡々とした維持というのをまずは望みたい、というのがありますけどね。

少しずつ変更することはあるのかもしれないけど、まず存在として貴重だなと僕は思ってしまうんですけどね。特に目先の風向き次第でどんどん変えてしまったりやめてしまうこの国ではなおさらね。

小嶋　SDレビューという機会なり場所なりがあることが大事だというのは繰り返し話してます。突然なくなっちゃったら大変困るだろうなという感じがありますね。今回、1月号でSDレビューをやるというんで、えっ、今年で終わりなんですかと聞いちゃいましたよ。

皆さんも大学で教えられてると思うんですが、学生たちに設計をポジティブにやるのは面白いよ、ということを言う時に、レビューにも出せないようなものをつくってたって仕方がないから、という言い方をすると、すごくよくわかるわけです。そういう意味で、ひとつのスタンダードにはなっている。

鈴木さんがおっしゃるように出す側の問題になってくると思うんですが、テクニックが優先される部分があって、それは水準が上がると同時に強度が不足してるような気がする。

プレゼンテーションの話で出ていた、模型は模型だし建築は建築だという話は確かにあると思うんですが、実際に展示をしてみて難しいのは、我々がつくろうとしてるのは最終的には空間であるはずなのに、与えられたスペースの中に空間そのものを展示できないということで、違うメディアで展示することになるわけです。それは展覧会というものが宿命的にもってる部分だし、雑誌というペーパーメディアも同じ問題を抱えていて、その時にメディア寄りに考えるのか、やっぱり空間なんだということをしっかり押さえたままでやるのかというのはすごく違うように思うんですが、展示を見てると、なんとか空間のほうを伝えようとして凝ったことをやってる展示もあるし、逆に割り切ってるからオブジェクトとしてはスパッと迫力があるのもある。そのへんはSDレビューの問題ではないんだけど、建築の伝達方法の問題としてはずっと同じものを抱えてるなという気がして見ています。

今はテクノロジーを使えるようになってきているので、展示も、ある人たちは大がかりになっていったり、映像とかいろんなものを使いますよね。96年のレスポンシヴ・エンバイアロンメント、RE[ ]というグループが出してたようなものになってくると、従来の建築にはないものも出てくる。うまくやれば、ここは普通の建築とは違うものまで含めてエントリーできるし、その中で建築がどう闘うかということもやれる場所であるはずなんだけど、たまたま自分がやってる住宅のプロジェクトを出すんだというふうにだけとらえてしまうと弱くなる。

妹島和世さんが何回か出した時は、どれもものすごい強力な印象があるわけですよね。展覧会に出されているものが強力だったというのと、実現したものが強力だったというのがあのくらい結びついてる人はなかなかいない。吉本剛さんの作品も模型で即物的なことが新鮮だったのが、そのままバーンとできた時には、やっぱり強かった。

栗生　あれは実物もすごく魅力的ですよ。僕が推したんで、責任を感じて見にいったけど。SDレビューの方向は今のままでいいと思うんです。深刻なコンペにしないという方向ね。間口が広いというか、変なものが出てきやすいというか、評価しにくいものがどんどん応募されるというか、そういう場であったほうがいい。それが若い人たちのステージにしていくことにつながっていくと思うんですけどね。20代、30代でしかできない建築ってあると思うんですよ。実現するしないにかかわらず。それをちゃんと記録にとどめていくことだけでもすごく価値がある。そういうものに対する場をちゃんと確保してきたし、そういう効果があったと思います。

僕が設計した写真美術館が清里にあって、そこでヤングポートフォリオという企画をやってるんですが、20代しか応募できないんですよ。毎年、20代の人の写真だけのコンテストをやって、何点か美術館が買い取るんです。それを延々と続けて、それをコレクションにしていく。20年後、30年後にすごい価値が出てくるんですよ。写真をやめちゃう人もたくさんいるわけです。その1作だけが光輝いてるというのも含めて。どんどん伸びていって世界的な写真家になる人もいて、そういう人たちが美術館を支えるんですね。いろんな企

小嶋一浩／こじま・かずひろ
1958年大阪府生まれ。シーラカンス共同主宰。東京理科大学理工学部助教授
1985年〈氷室アパートメント〉で朝倉賞受賞。1987年〈GIMMICK〉〔シーラカンス〕でSD賞受賞。1988年〈TRANS—光の変換装置〉〔シーラカンス〕で入選



画を盛り立てて逆に美術館を育てる。恩返しですよね。そういう仕組みはなかなかうまいな、SDもそういう形になりつつあるなという気がするんですよ。

元倉　SDレビューには、一種のゲームみたいなものが底流にあったような気もするし、これからもあったほうがいいかなと思ってるんですね。リアルじゃないからだめじゃないかとはだれも言わないし、絶対的な価値みたいなものはどこにも含まない一種のゲームみたいなものがあって、面白いからSDレビューがここまで続いてきたところがあると思うんですよ。

そのゲームをお互いに面白がってる以上、それは続けていればいいかなと思う。応募する側も審査する側もそれをもっと自覚的にとらえていくといいのではないかと思います。どこかでリアリティというものが裏付けにあるようなゲームであって、世代を超えて、参加するゲームができるともっと面白くなるかなと思う。ゲームだということをはっきり意識してしまえばいいんじゃないかな。

鈴木　ゲームもゴールに蹴り込むというゲームではなくて、キックオフ的な、蹴り出すというスプリングボードの役割がね。スプリングボードの弾力性は強化したいというのはありますね。

元倉　サッカーの審判ぐらいの権威をもってて、間違ったってイエローカードだっていうのもありますね。それぐらいのものにしたら面白いかもしれない。

鈴木　楽しくなくなっても、だんだん応募作品が少なくなっても続行する、そういうのってあるな、やっぱり存在が大きいと今になって思いますね。参加してる時はそんなこと思ってないですけどね。

栗生　同じ場でやるか別の場でやるかわからないけど、若い人たちだけではなくて、すでにバンバンつくってる人たちが違った切り口で出してくるような仕掛けをつくったら面白いだろうね。招待作品という形か、あるいはもうちょっとゲーム感覚で出せるような、深刻さのない出し方ができるような仕掛けをね。

小嶋　今年は鈴木エドワードさんが入ってますよね。ああいうのを見てるとすごくいいなと思って。登竜門にだけになっちゃうとゲームのスケールが小さくなる。言い方を変えると、SDレビューは前衛性というのを問いかけてる気がするんですよね。そういうことで言うと、ベテランとか、バンバン建ててるとか、そういうことはあまり関係ないという位置づけで見えてくるといいんじゃないか。今はその点での規定は何もないから、出す人もいるし出さない人もいるということになるんだけど、出しづらくなっちゃうというのがあるんですよね。

栗生　前衛性だけではなくて、豊かな味わいがあるとか、渋いとか、そういうのもうんとあっていいと思うんですよ。

元倉　槇さんの次に原広司さんが審査委員長をされたのもすごく大きいと思うんですよ。そこでゲーム性みたいなものが生まれたような気がしてて、審査員のほうの踏んばりみたいなものがないと維持できないですよね。とんでもないものを拾う力のある人じゃないと、つまんなくなりますよね。

鈴木　腹が座っててくれないと困りますよね。

小島　原さんの時に渡辺誠さんが続けて入っていて、けっこう強力な印象があるものを出されてますよね。

元倉　ちょっと思いついたんで、今の文脈と関係ないんだけど、最近の映像的なプレゼンテーションはうまくいってないと思うんです。映像を使ったプレゼンテーションとか、インスタレーションに近いものとか、ドローイングを含めて表現の枠を広げようという動きがあるんだけど、どれもが一級ではないという感じがしてるんです。アートのレベルからみたとき建築の模型は独自の世界としてかなり高いポテンシャルをもってると思うんだけど、いろんなアートとクロスしてるようなプレゼンテーションは盛んに挑戦しているにもかかわらず、キラッとして、すごいというのがないんですね。

小嶋　それはSDレビューに限らないと思うんですけどね。建築の展覧会で難しいのは、オブジェクトをつくったってプロのアーティストには全然勝ててないわけですよね。そこに何か知的なコードが入っていて、違うものにつないでいくために建築のプレゼンテーションがあって、そのもので闘おうとしたって、なかなか……。一般的には、そういうプロの連中の横に置いたら耐えないという、その自覚がちょっと足りないというのがある。いわゆる素材としてのものではなくて、映像とかCGでも同じことで……。

鈴木　ひとつの過渡期に入ったことは間違いなくて、映像に対する感受性が急速に変わりつつある。まだそれが一般化するまでにはなってないけど、学生の話を聞いてると感受性が高いのね。空間映像という感覚が前より高くなっていて、極端にいうと模型なんかなくても実物を建ち上げてみせるというやつまで出てきている。まだ、なんとなく安っぽいんだけど、可能性としては相当ありうるなと思うんです。

元倉　これからはSDレビューのプレゼンテーションも変わってきますよね。

鈴木　たぶん変わってくると思いますよ。映像空間的な部門があってもいい。最初は見られないものばかりくると思うんだけど、関心は相当高い。

元倉　会場自体も今は模型を置いて、図面を掛けて見せてるわけだけど、古典的な会場構成ですよね。それをどこかで考えていかないとだめですかね。

鈴木　古典的な中に映像が入ってくると、映像が動いてる間は生きてるんだけど、映像が止まると全部死んじゃうという独特の時間の流れが入ってきちゃう。映像は別な部屋で見せるとか、時間を切って上映するというほうがいいのかもしれない。

元倉　共存しにくいですよね。

鈴木　映像が入ってきたとたんにスタティックな模型が死ぬし、映像もなんとなくだるいものになる。

小嶋　応募要綱には、「実施を前提とした設計中ないしは施工中の建築、屋外空間、インテリア」とバンとくるところがいいのかどうかというところまでいくわけですかね。

鈴木　そこは難しいところね。ゲームのかなめは意外とそこかなという……。

元倉　その枠をとったら全部だめになっちゃうから。

鈴木　そこは大きいかなめで、そのかなめさえ決まっていれば、表現はフリーでいい。

栗生　その枠を取り去ったとたんに全体の水位が下がるような感じがしますよね。

元倉　成立しなくなる。

鈴木　最近、でっちあげちゃうやつもいるらしいんだよね。もう少し実施性との関係について突っ込んだものを一次の段階で出してもらうというのもあるのかな。難しいところだけどね。実施図をつけろとか、確認申請書のコピーを一緒に出せとか、もちろんこれは冗談ですが。でも、実施だ、というところで出てくるものを見せてもらいたいなというのはあるんですね。

栗生　それは審査側の見極めではないですかね。そこまで細かくいわないほうがいい。5%の可能性でもいいけど、ある種のリアリティを感じさせる、できたらいいなと思わせる何かがある、そういうのは審査員側の眼力ではないですか。

小嶋　4人いる審査員をどういう布陣にするかということが重要でしょうね。片方に理論の立場に立つ人がいて、片方では門戸を広げる人がいてというのが必要で、偏っちゃうと、ある傾向だけを発展させる可能性があるわけです。今まではそれがうまくいっている。

元倉　世代の話とか、もうちょっとインターナショナルにということとか、16回やったけど、まだ未開拓の部分があって、それは広げていけばいいのではないかと思います。

栗生　外国の建築科のある大学とか近辺から広げていけば、それはすごい力になってくると思うけどな。

小嶋　建築のメディアに関して日本はかなり充実した国ですから、そういうところに広がりをもっていて、日本人作家なんてほとんど通らないようなコンテストになったっていいんじゃないか。

鈴木　パーティーを開くと、だれも来なかったりして。

栗生　けっこう来るんじゃないかな。

鈴木　国際化していくことは必要ですね。

栗生　刺激になると思いますよ。

鈴木　PAはもうないんだもの。そう考えるとSDレビューってすごいですよね。そういう位置にあるなと思いますよ。国際的に重要なかなめになってる。それをさらに強化するところまでもっていきたいですね。

(1997年11月13日　於：鹿島出版会)

SDレビューも1997年で、16回（＝16年）継続することができた。これは、審査員や協賛者の方々、展覧会運営関係者等々の多大なご協力の賜であり、さらに多数のご応募いただいた主役である建築家・デザイナーの方々すべてに、改めて深く感謝したいと思う。

本号はその第1回から15回まで（1982年〜96年）の15年間のSDレビューを記録したものである。この間の応募総数は2486点、入選数は271作品、審査員数は29名であった。

編集上のこととしては、まずはすべての入選作品を網羅すること、その実現の有無を確認し、設計者から新たなコメントをいただくということでスタートした。実現作については、展覧会出展作品と実現写真を掲載し、コメントとして、応募の動機、プロジェクトにおける初期のコンセプトは実現作にどう反映されたのか、また実現されなかった理由について、今後のSDレビューに期待するもの、などについて記述していただいた。実現されなかった作品については、ヴィジュアルとして当時の出展作品を再録した。大多数の入選作についてはこうした形式をとれたが、所在不明の方や、新たなコメントがいただけなかった方が数名あったことと、入選総数のうち約33%が未竣工であったことが残念に思えた。

本号の編集を通して、改めて若い世代を始めとし建築家の方々のSDレビューへの暖かい視線を感じ取ることができたのは、我々編集部にとってたいへん大きな収穫であったし、今後の励みになるだろう。

最後に、入選者の方々や写真家の方々に短期間で資料を揃えていただくことになり、ご迷惑をおかけしたことご容赦願いたい。

今後もSDレビューが、建築家や建築界にとっても貴重なイベントとして生き続けられるよう努力したいと思う。(編)

SDレビュー1982〜96入選者・審査員一覧	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988
審査員	槇文彦、鈴木恂、 元倉真琴、布野修司	槇文彦、鈴木恂、 布野修司、山本理顕	槇文彦、竹山実、 山本理顕、八束はじめ	槇文彦、竹山実、 小宮山昭、八束はじめ	槇文彦、木島安史、 小宮山昭、鈴木博之	原広司、木島安史、 鈴木博之、竹山聖	原広司、安藤忠雄、 鈴木了二、竹山聖
集合住宅	■安藤忠雄 □クリストファー・アレギザンダー	■富永譲	■小林克彦 ■小屋雅義＋大内栄 ■早川邦彦	■小嶋一浩（朝倉賞） ■中筋修	■大野秀敏 □堀池秀人	■スタジオ建築計画 小石川敏	■西岡弘（朝倉賞） □今・井アソシエイツ □北山孝二郎（SD賞）
住宅	■伊藤哲夫 ■黒川哲郎 ■佐々木繁 ■設計組織アモルフ ■高松伸 ■林賢次郎 □小宮山昭	■安藤忠雄 ■小川富之 ■小宮山昭 ■設計組織アモルフ □高松伸 中野誠一	■石田敏明 ■井上揺子 ■黒川哲郎 ■鈴木了二（SD賞） ■高松伸（鹿島賞） ■竹ノ内一雄（朝倉賞）	■石田敏明 ■出江寛 ■海野健三 ■山本理顕（鹿島賞） ■吉田保夫（入賞）	■伊藤哲夫（鹿島賞） ■北村陸夫 ■七月工房 ■堀場弘 □土井鷹雄 □中込清 □西岡弘	■神谷武夫 ■木下庸子 □板井宝一郎＋西島裕 □木田加夫利 山里茂樹	■入江一央 ■久保清一 □M.タルディッツ＋石田壽一＋ D.ユラノヴィッチ
別荘・アトリエ・ゲストハウス	■岩村和夫 ■鹿島建設建築設計部 □武澤秀一	■巽順	■海老塚耕一＋菱沼利行	■板井宝一郎＋セクションR ■大野秀敏 ■萩原剛＋藤田純也（入賞） □仲隆介	■小川守之 ■鈴木エドワード＋笹森則次 □竹ノ内一雄	■東利恵＋東孝光 ■隈研吾 □青島裕之	■鈴木文章＋坂牛卓 ■妹島和世（鹿島賞）
オフィスビル		■セクションR	■木村丈夫＋野田俊太郎 片岡山訓	■坂茂 ■元倉眞琴（SD賞）	■鹿島建設建築設計部（入賞）	■野々瀬徹 ■前田紀貞 □シーラカンス（SD賞） □團紀彦	■石原健也＋石原奈穂子 ■シーラカンス □松島健 □渡辺誠
公共施設	■坂倉建築研究所 ■日本設計事務所	■戸尾任宏			■上田堯吉（入賞） ■團紀彦 ■長島孝一＋中村勉（SD賞） ■日本設計事務所	■桂英昭（朝倉賞） ■栗生明（鹿島賞）	
環境デザイン・公園		■齊藤年明	□中澤王久東	■新居千秋 ■山田朗 □團紀彦			■山中知彦＋丸山恭
商業施設	■fromnow	□鈴木エドワード	■小宮山昭（SD賞） ■能勢修治＋永井久美 中野佳子	■北村修一 ■西岡弘	■北山恒＋木下道郎＋谷内田章夫＋ 野口昌夫 ■パルフィ・ジョージ（朝倉賞）	■ナイジェル・コーツ＋弾設計	■貴志雅樹 ■ブランソン・コーツ・アーキテクツ＋ 弾設計 ■若林広幸
教育施設		■中嶋龍彦 ■三上祐三 ■田村宏治		■末吉栄三	□久保清一		■黒田和司
その他 （橋、駐車場、ホテル、臨時郵便局、給油所、都市再開発、茶室、イベント施設、銭湯、工場、老人ホーム、病院、寺院、山門、教会、デイケアセンター）	■東孝光（教会） ■長島孝一＋AUR（教会）	■東孝光（教会） ■大浦洪二（山門） □荒知機（工場）	■若林広幸＋角野充俊（老人ホーム） ■渡辺武信（病院）		□吉田保夫（大阪賞）（銭湯）	■岸和郎（イベント） ■白川直行（茶室） ■日本設計事務所（都市再開発）	■青島裕之（旅館） ■沖中高行（イベント） ■玉川和正＋坂牛卓（パビリオン） ■坂茂（パビリオン） ■郵政省建築部（臨時郵便局）
展覧会場・講演会	[東京展] ペンファット・ギャラリー＋ ヒルサイドテラスE棟ロビー	[東京展] ペンファット・ギャラリー＋ ヒルサイドテラスE棟ロビー	[東京展] ヒルサイドギャラリー＋ ヒルサイドテラスE棟ロビー	[東京展] ヒルサイドギャラリー＋ ヒルサイドテラスE棟ロビー [大阪展] 都住創センター （竹山実講演会）	[東京展] ヒルサイドギャラリー＋ ヒルサイドテラスE棟ロビー [大阪展] 都住創センター	[東京展] ヒルサイドプラザ [大阪展] 都住創センター [金沢展] 金沢工業大学ライブラリーセンター （原広司講演会）	[東京展] ヒルサイドプラザ [大阪展] 都住創センター [金沢展] 金沢工業大学ライブラリーセンター [チューリッヒ展] チューリッヒ工科大学 （原広司講演会）

■：作品が実現した入選者　□：作品が実現しなかった入選者　無印：不明

	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996
審査員	原広司、安藤忠雄 鈴木了二、三宅理一	原広司、早川邦彦 六角鬼丈、三宅理一	原広司、早川邦彦 小林克弘、飯島洋一	穂積信夫、伊東豊雄 小林克弘、飯島洋一	穂積信夫、伊東豊雄 栗生明、隈研吾	高橋靗一、坂本一成 栗生明、隈研吾	高橋靗一、坂本一成 内藤廣、妹島和世	香山壽夫、渡辺邦夫 内藤廣、妹島和世
集合住宅	関太一	■妹島和世（SD賞）	□佐田野剛	■松岡恭子＋王大君（SD賞）	■片木篤＋有馬立郎（SD賞）		□長坂大	□ユストス・ピザル＋ペーター・ルーゲ（朝倉賞）
住宅	■小川晋一 ■西本圭敦 ■林賢次郎 ■原尚 ■吉松秀樹（SD賞） □大塚聡＋相場克彦 □滝澤隆	■石田敏明 ■ジン・ヨハネス（SD賞） □小川晋一（朝倉賞） □渡辺誠	■新井清一＋岡崎泰之（朝倉賞） ■飯村和道 ■石原健也 ■白川直行 ■妹島和世 ■中村勇大 □石田敏明（鹿島賞） □牛田英作＋キャサリン・フィンドレイ □川口とし子 □宮本佳明 □渡辺　誠	■戸田潤也 ■吉松秀樹 □井坂幸恵（SD賞） □高橋晶子＋高橋寛 □中尾寛 □村井正＋山口賢	■齊藤正 ■白川直行 ■吉本剛（SD賞） ■和田克明（朝倉賞） □河西立雄 □照井信三 □戸田潤也	■有泉秀明＋グリニス・M.ベリー ■前田紀貞 □城戸崎和佐 □中村勇大 □細田みぎわ	■佐々木聡＋中村宏美 ■中東壽一 □市原出 □季鐵男（朝倉賞） □西沢大良 □由田徹＋岡本美樹（鹿島賞）	■長田直之＋筏真司＋清水裕二 ■西沢大良 □佐藤光彦＋横溝真 □三分一博志＋塚田哲也＋西尾通哲＋土井一秀 □高橋晶巳（朝倉賞） □宮沢透 □安田光男＋杉山陽子
別荘 アトリエ ゲストハウス	□安達治雄 □圃紀彦	□難波寿治 瀧広空		■近藤裕之 □ジョージ国広 □室伏次郎		■丸谷勝也 □石黒由紀＋田堀繁（SD賞） □花田勝敬＋大西直子 □吉松秀樹（SD賞）	■トム・ヘネガン＋安藤和浩＋梶直樹（SD賞） □長田直之＋筏真司 □山口賢	□宮脇勝
オフィスビル	■板井宝一郎 ■戸田潤也＋細田みぎわ □猪狩一 □笹森則次＋笹森るり子 □渡辺誠（朝倉賞）	□榎本文夫	□小松清路	■乗富久哉 □小川晋一		□ユストス・ピザル＋ペーター・ルーゲ（朝倉賞） □三栖邦博＋浜田明彦＋安田幸一＋持田英明		■城戸崎和佐（SD賞） □由田徹＋岡本美樹
公共施設	■新居千秋 ■沖中高行（鹿島賞） ■ベフルズ・チニジ＋ジャン・チニジ	■木村博昭	□中村勉	■隈研吾（鹿島賞） ■三栖邦博＋浜田明彦	■北村修一 ■中村勉 ■安田幸一＋中屋敷公一 □森徹＋若松久男＋植野斜	■荒木正彦（鹿島賞） ■萩津郁夫 ■加茂紀和子＋マニュエル・タルディッツ	■遠藤秀平	■渡辺真理＋木下庸子＋三谷徹＋長谷川浩己
環境デザイン 公園			■長島孝一＋AUR					□吉松秀樹
商業施設	■粟生明	■吉田保夫＋吉川宏一＋藤原伸治 □飯村和道 □長坂大（鹿島賞） □乗富久哉（SD賞）	■大塚聡 ■小川晋一 ■増田実＋米田有		■杉本洋文	■鈴木敏彦	□大林直高 □吉田進＋松本哲弥＋有馬浩一＋森吉直剛	
教育施設	■ダムダン空間工作所		□前田紀貞		宮元健次＋東京コミュニケーションアート専門学校	■堀池秀人＋益田滋子		■黒木正郎＋横田千晶
その他	■寒竹伸一（給油所）	■小西彦仁（工場） ■新田正樹（寺院） □中込清	□A.T.System＋竹内申一（スタジオ）	■新井清一＋大藤淳哉（朝倉賞）（橋） ■石原健也（デイケアセンター）	□クライン ダイサム アーキテクツ（鹿島賞）（銭湯）	■遠藤秀平（駐輪場）	■手塚貴晴＋手塚由比（病院） ■藤本壮介（病院） □佐藤光彦（ホテル）	□RE[ ]/Responsive Environment（仮設劇場）
展覧会場 講演会	[東京展] ヒルサイドプラザ [大阪展] 都住創センター [金沢展] 金沢工業大学ライブラリーセンター	[東京展] ヒルサイドプラザ [金沢展] 金沢工業大学ライブラリーセンター [大阪展] 都住創センター	[東京展] ヒルサイドプラザ （槇文彦＋原広司講演会） [大阪展] 都住創センター [金沢展] 金沢工業大学ライブラリーセンター	[東京展] ヒルサイドフォーラム [大阪展] 都住創センター	[東京展] ヒルサイドフォーラム [大阪展] 都住創センター	[東京展] ヒルサイドフォーラム [大阪展] 都住創センター	[東京展] ヒルサイドフォーラム＋ 朝倉ギャラリー	[東京展] ヒルサイドフォーラム＋ 朝倉ギャラリー [大阪展] 大阪芸術大学芸術情報センター

■：作品が実現した入選者　□：作品が実現しなかった入選者　無印：不明／デザイン・製作：久世健

HITACHI

超高速エレベーターから、ホームエレベーターまで。



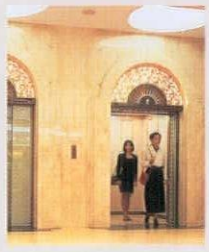
Office Building





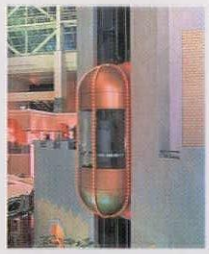








Hotel & Residence

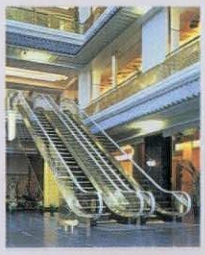






Public Space







Shopping Center







広がる生活空間を、
やさしく、
速やかに結びます。

地上数百メートルの超高層ビルから一戸建ての住宅まで。日立は、ますます多層化する暮らしを、より快適にするエレベーター・エスカレーターの研究・開発を続けています。たとえば、定格速度810m/分の"超高速エレベーター"や、身近な暮らしの中で利用される"車いす用ステップ付きエスカレーター"、"ホームエレベーター"など、施設に応じた設備で、誰もが住みやすい街づくりをサポートします。

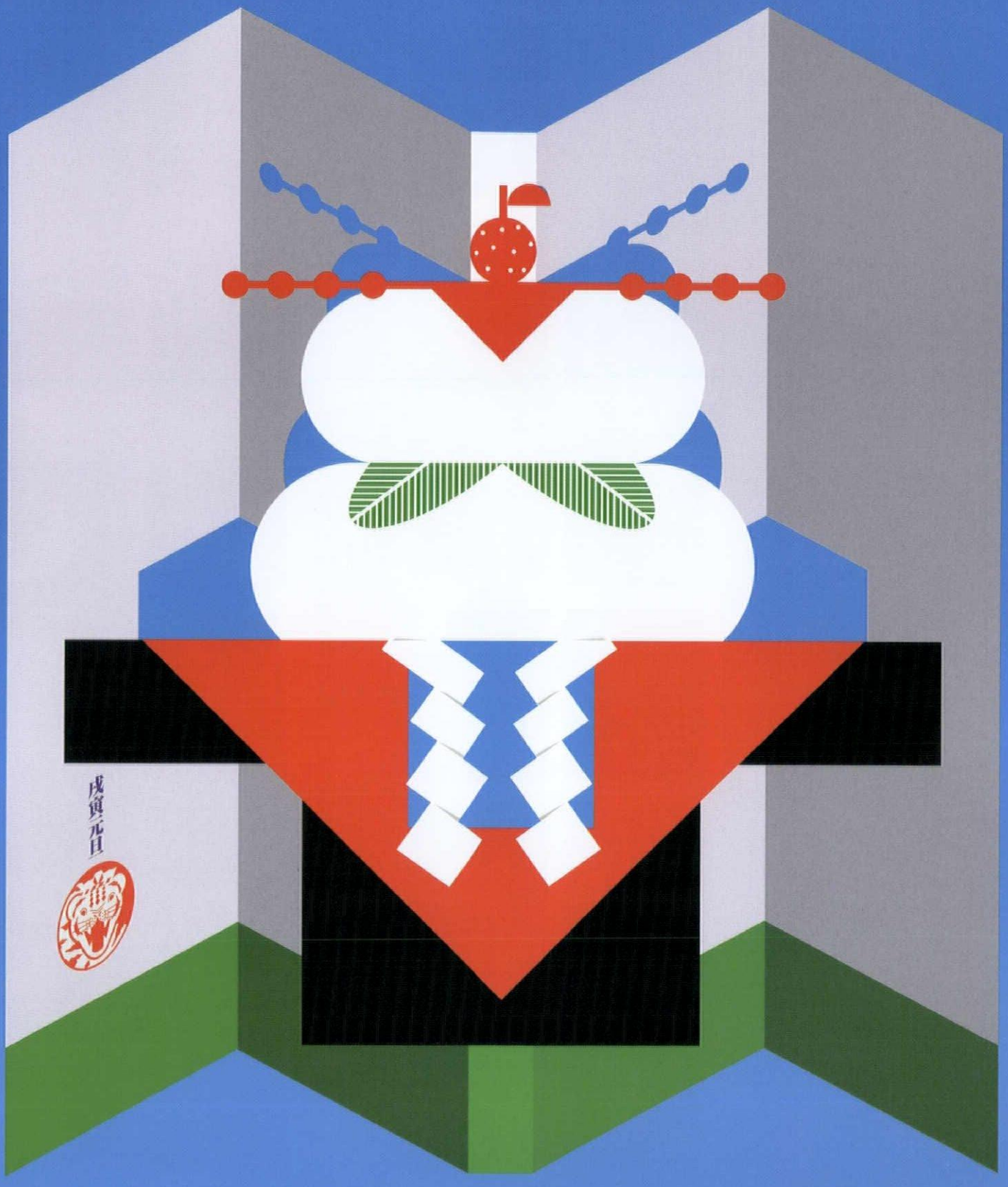
日立エレベーター・エスカレーター





株式会社 日立製作所

お問い合わせは＝電機システム事業本部 昇降機事業部/電機システム統括営業本部 〒101-10 東京都千代田区神田駿河台四丁目6番地
電話/(03)3258-1111〈大代〉 または最寄りの支社へ 北海道(011)261-3131・東北(022)223-0121・横浜(045)451-5000
北陸(0764)33-8511・中部(052)243-3111・関西(06)616-1111・中国(082)223-4111・四国(0878)31-2111・九州(092)852-1111



連載❶森島紘史の起こし繪図

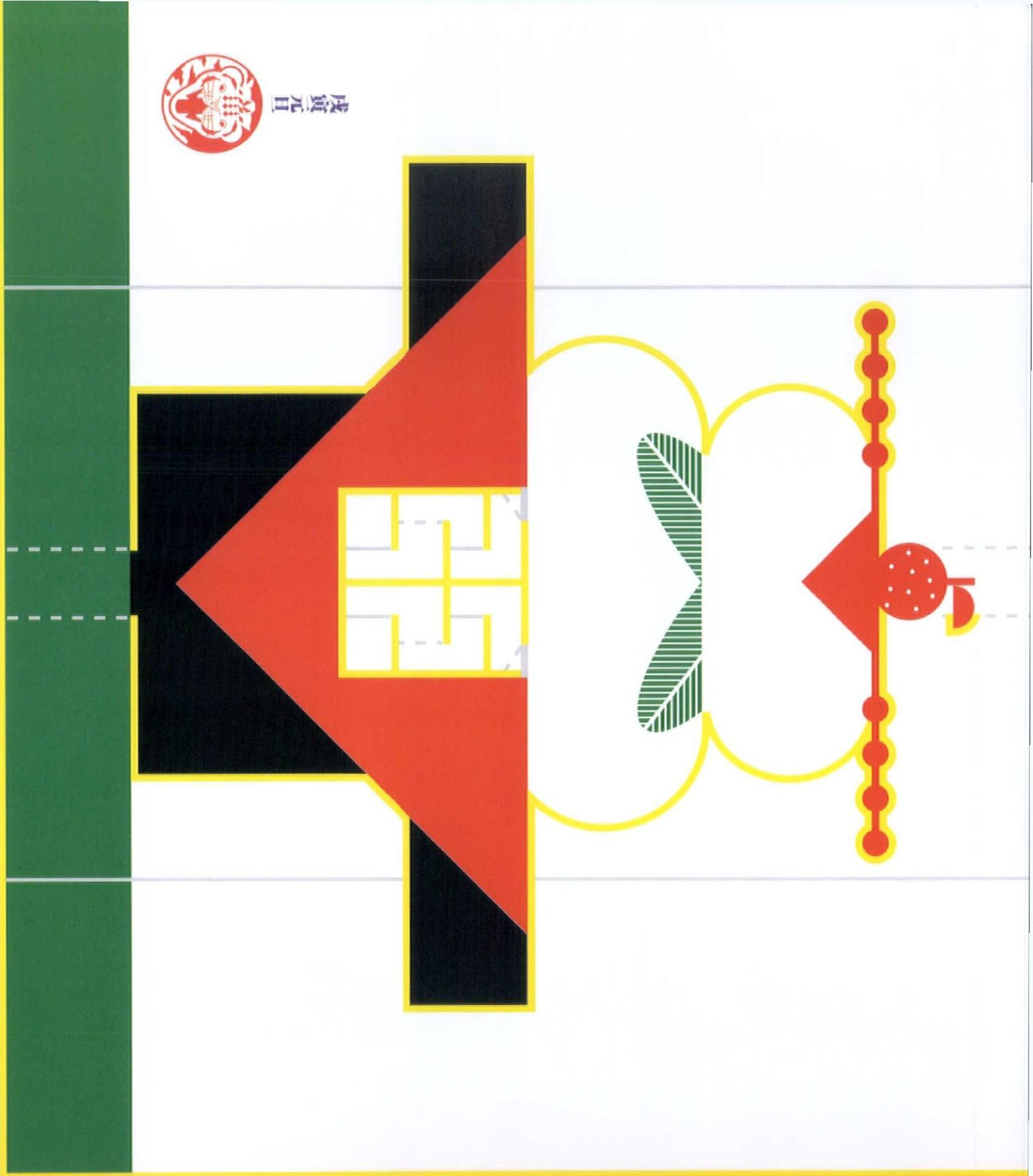
日本のかたち紙考

正月

日本人のルーツは、氏族ごとに原始共同的な生活をしていた農耕民族である。農耕は自然状況に左右されやすく、古代人は日照りや大雨などの気象条件を神々の意思と考え、自然をおさめる大いなる存在をおそれ敬った。巡り来る厳しい冬が終り春の訪れとともに、人々は田を耕す準備を始める。広場に集まり、八百万(やおよろず)の神々に無事に過ぎた1年の感謝と新たな年の五穀豊穣の願いを捧げる儀式と祭りを行った。それが日本の正月の原点である。

儀式を行うためにさまざまなかたちがつくられる。ものと精神を

SD9801
282



●起こし繪図　切り抜き線　山折り線　谷折り線

結びつけることに長けている日本人は、多彩な神々が降臨するための美しいかたちを造形した。

神々を迎える正月のかたちの代表的なものに鏡餅がある。正円を重ねた単純なかたちは、方形の三方の台に敷かれた紅白の和紙に置かれることによりかたちは完成する。ふくよかに膨らむ円盤形は三種の神器のひとつ、天下を知をもって治める八咫鏡になぞられている。中央に下がる紙垂は、豊かに稔り頭を下げる稲穂の姿をかたちにしたもので、注連縄と共に神々の降臨をいざなうシンボルである。

祝い事の色彩計画にも神々への真摯な祈願の象徴が表現されている。晴れの日には、普段用いることを手控えていた華やかな色彩が宴をもりたてる。基本色は紅白、紅色は古代から魔除けの色。邪気の侵入を防ぐために鳥居や門に塗られた。白は穢れのない清浄と邪心のないことを意味する。このほか神々の依り代と考える松や大杉などの常緑樹を表わす緑と朱、陰陽五行思想を基にした五色の組み合わせ、仏教の黄金色などが日本人の暮らしを華やかに演出するのである。

●もりしま・ひろし／名古屋市立大学芸術工学部教授

●世界のロックメーカー

MIWA


410 TYPE


415 TYPE


430 TYPE


441 TYPE


411 TYPE


420 TYPE


431 TYPE


442 TYPE


412 TYPE


421 TYPE


432 TYPE


443 TYPE


413 TYPE


422 TYPE


433 TYPE


444 TYPE


414 TYPE


423 TYPE


440 TYPE

◆
NEW
DESIGN

デザインで選んでもMIWA。

堅牢・安心・使いやすさなどを追求した品質第一の製品をお届けしているMIWAから、建物全体とのトータルコーディネイトにお応えする新作レバーハンドルが登場。建築空間の中に心地好さや安らぎを生み出す19モデルでバリエーションがさらにワイドになりました。

美和ロック株式会社 〒105 東京都港区芝3丁目1番12号 TEL.03(3452)5551㈹ FAX.03(3455)2437●カタログをご希望の方は、当社まで。

ニュース

表現から構成へ——「国際期」デ・ステイルと日本

梅宮弘光

1919年の分離派建築会結成以来、日本の近代主義建築運動は、ヨーロッパの新傾向にそのつど想を仰ぎながら何らかの美的近代性を探求してきた。運動のなかで生み出された計画案の外見には、1928年頃までは表現主義的傾向を、それ以降には構成主義的な傾向を見出すことができる。すなわち、曲線を多用した彫塑的造形から、直線的で装飾を廃した造形への変化である。日本の建築の近代主義は、様式主義を懸命に振り払いながら、表現主義に、そして構成主義にたどりついたのである。その推進力は何だったのか。

創宇社は、設立の宣言で次のようにいう。「古代人の純情なる創造の心を熱愛し、模倣てふ不純なる風潮に泣き……」(1923年)。創造を称揚し模倣を嫌悪するその気持ちは、表面的には様式主義という造形論理に向けられていただろう。しかし、どれほどの自覚があったかはともかく、その気持ちの底には、その論理が基づいている建築の外の世界との模倣関係、つまり建築の創造は自律的に行えないのか、という不満があったはずだ。だからこそ、彼らは自我という内部世界を問題にし、古代人といった無垢なものへの憧憬を語りながら、内からの表現を標榜したのである。

表現主義において表現の梃子としロマン主義を、こんどはいかに払拭するかのみならず、代わりに何があるのかが問題だった。1920年代も終盤となりかけたこの時期、知られるように、美の問題が、機械、機能、合理、社会といった事象に関連して議論されるようになっていた。しかし、機能や経済からの説明は一定の説得力はもっても、それで造形が説明しきれるわけではない。当時の近代主義者の発言をみても、かたちが機能に一義的に規定されるなどと本気で信じる者などいなかったことは明らかだ。かたちは、どのように生まれるのか。

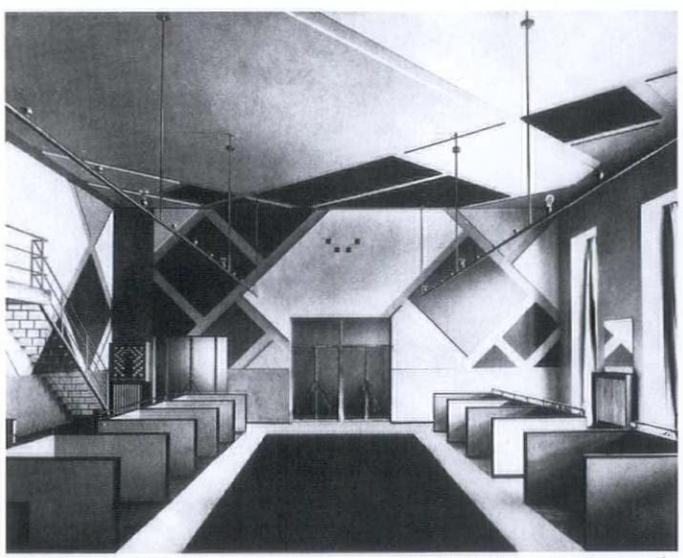
近代主義者がもとめていたのは、かたちをもっと直裁に呼び出すことのできる論理だったと思われる。構成主義が立ち現れるのは、まさにそうしたときだ。そこには日本におけるバウハウス受容が大きく作用してもいるが、そのバウハウスじたいの表現主義から構成主義への変容も含めて「構成」の源泉を遡るなら、それはデ・ステイル「国際期」に行き着くだろう。

「国際期」デ・ステイル——1920年代ヨーロッパ前衛のるつぼ

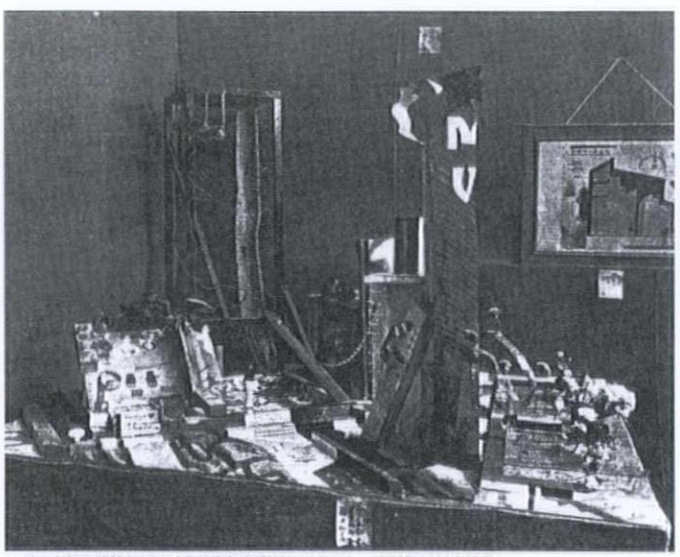
レイナー・バナムは1921年以降のデ・ステイルを、それ以前の「オランダ期」に対して「国際期」と規定している(『第一機械時代の理論とデザイン』鹿島出版会、1976年)。それは、ファン・ドゥースブルフの国際的ネットワークづくり、その成果としての雑誌『デ・ステイル』の多様化を意味している。

デ・ステイル「国際期」が、どれほど20世紀初頭の全ヨーロッパ的な前衛芸術のるつぼのなかにあったのか。それは、つぎのような状況に垣間見ることができよう。第一次世界大戦後のヨーロッパ社会の中で芸術家たちの交流と接触、機関誌の交換が再開される。イタリア未来派、ロシア未来派、ダダ、シュプレマティズム、ロシア構成主義、新造形主義、ハンガリー行動主義。こうした運動は、必ずしも主張や見解に一致があったわけではないが、しかし一方、自分たちが推進しようとしている新しい芸術が現実的世界の枠組みと関わるものであるという認識では一致していた。その中から、国際的な芸術家組織模索への方向が出てくる。

この動きの具体化のひとつが、1922年5月にデュッセルドルフで開催された国際進歩的芸術家会議である。この会議には前衛芸術家たちが一堂に会することになった。そしてこの国際性に、日本も無縁ではなかった。というのは、村山知義ら3名の日本人前衛芸術家が、この会議にも参加していたからである五十嵐利治の浩瀚精緻な研究(『大正期新興美術運動の研究』スカイドア、1995年)によると、後の村山とファン・ドゥースブルフらヨーロッパの前衛芸術家との直接的な関係はこれが契機であった。



カフェ・オーベット、1927年／テオ・ファン・ドゥースブルフ、ハンス・アルプ、ゾフィー・トイバー＝アルプ



マヴォ本部の建築的理念(帝都復興創案展出品作品)、1924年／村山知義

「構成」の行方——生産主義の陥穽

帰国した村山は「意識的構成主義」を掲げ、マヴォや三科といった前衛芸術家団体に関わりながら、ダダ／構成主義的な様式でアッサンブラージュ(五十殿はこれらを総じて「構成物」という用語で定義している)を精力的に制作する。1924年4月に国民美術協会の主催で開催された帝都復興創案展には、分離派建築会、創宇社、メテオールなどの近代主義建築運動の団体に加えてマヴォも出品する。このときの村山の出品「マヴォ本部の建築的理念」は都市的スケールを内包した大型のアッサンブラージュだった。これは、建築運動の側からは好意的ながら冷ややかな評価を受ける。たとえば「建築的素養のない作品は、建築としてはなっていない。建築智識による建築は人間味がない」(山田守「所感」『建築新潮』第5巻第6号、1924年6月)と。「構成物」と建築との間の溝は深いというほかないだろう。そこにはファン・ドゥースブルフやリシツキーにみられるような、アッサンブラージュや環境芸術によって旧来の範疇を互いに乗り越えていくような方向はみられない。この後の建築運動は、むしろ生産主義的な方向に進むのである。

レイナー・バナムは「デ・ステイル——国際期」の章末で、マルセル・ブロイヤーとバウハウス学生の協同によるウクライナ劇場国際設計競技応募案(1930年)を例に、1920年代が終わる頃にはデ・ステイルの美学がロシア構成主義の美学にとって代わられていくことを述べている。同様の事情は日本にもあった。たとえば川喜田煉七郎の同設計競技への応募案である。川喜田はこのような案は時間さえあれば誰にでもできると言う。それが真意か否かはともかく、建て前としては生産主義的な理念を表明する。つまり、その計画案は、今日の生産様式(もちろん革命後ロシアのそれが想定されている)からの帰結に過ぎないのであって作者の個性に帰する類のものではない、と。

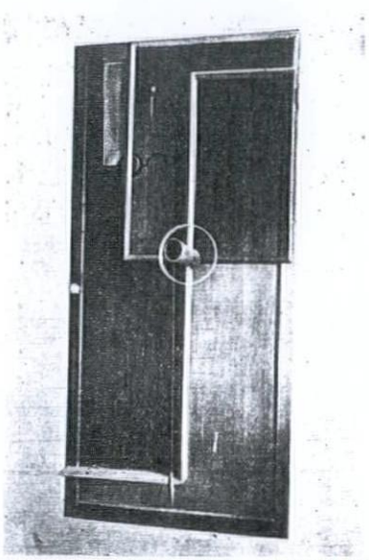
この生産主義は、アンドレイ・ナーコフにしたがえば「『生産』の本来の概念(それは常にオリジナルの生産の意味であった)を、近代産業の『大量生産』の実践の意味にゆがめて用い(……)この概念が本来もっていた意味を堕落させ」(「基本要素の発見」『ダダと構成主義展』神奈川県立近代美術館、西武美術館、1988年)られたものということになる。ナーコフが「生産」の本来の意味として参照するのは、モホイ＝ナジが雑誌『デ・ステイル』に書いた短い論文「生産／再生産」である(後にバウハウス叢書『絵画・写真・映画』所収)。そこでモホイは次のように述べる。「これまで知られていなかった新しい関係を生産するときのみ、その造形は価値がある。それと共に、他方では、豊かにする視点の欠けた再生産(既存の関係の繰り返し)は創造的造形という特殊な視点からはせいぜい名人芸の問題とみなすべきだと言える」(利光功訳)。

かたちは、どのように生まれるのか。世界はどのように形象されるのか。日本の近代主義建築運動もまた、この問題をめぐって「国際期」デ・ステイルからロシア経由の生産主義へ至る迷路を進みつつあった。

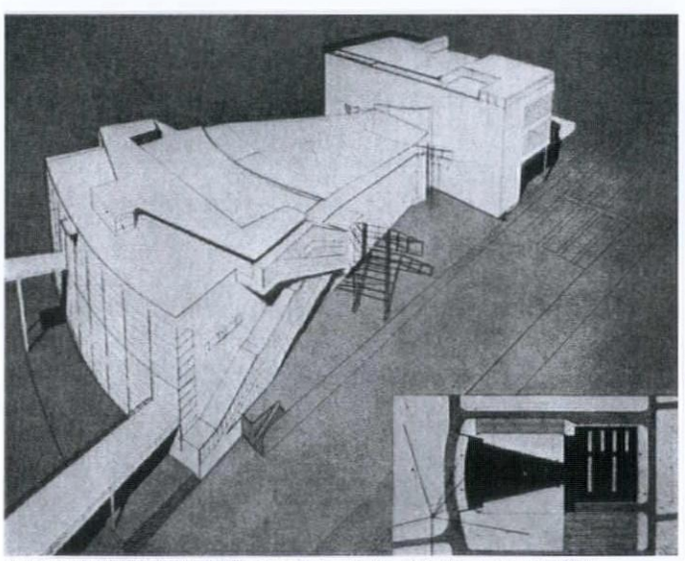
●うめみや・ひろみつ／神戸大学発達科学部講師

1997年12月13日から1998年2月15日までセゾン美術館で「デ・ステイル1917-1932」展が開催されると聞く。本稿執筆は開催前のことであり、内容を知りえないが、これまでデザイン系のすぐれた企画を手掛けてきた同館の新見隆、一條彰子らのチームによるブルーノ・タウト、バウハウス、ル・コルビュジエに続くものであってみれば、今回もまた大規模な展覧が期待される。それこそが、デ・ステイルのおきまりのイコンの実見にとどまらない、20世紀前衛のるつぼとしてのデ・ステイルにふさわしい展覧形式だろう。

新聞報道でセゾン美術館が1999年2月に閉館されることを知った。美術館で実物にふれることの意味を改めて考えさせられた。残念でならない。(梅宮)

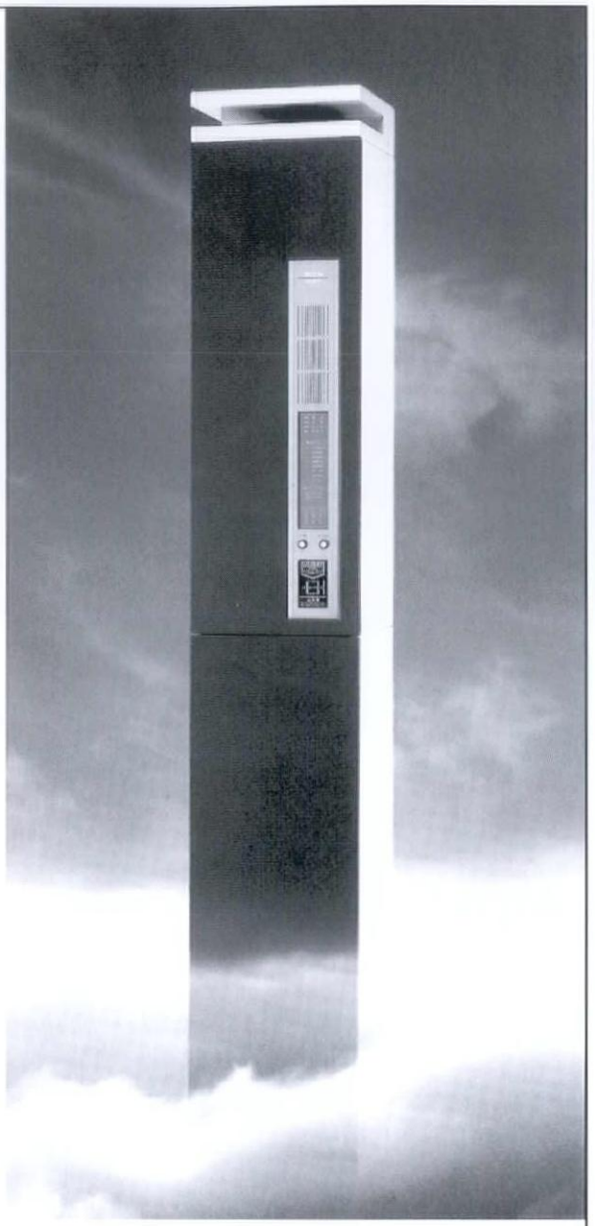


建築(第3回創宇社展覧会出品作品)、1925年／岡村(山口)蚊象



ウクライナ劇場国際設計競技応募案、1930年／マルセル・ブロイヤー+バウハウス学生

新ハロンガスを採用した、高速自動消火システム、トマホークⅢ。



特　長

●狭いスペースにも設置可能なスリムタイプ。

限られたスペースにも容易に設置できる幅34cm×奥行35.4cm×高さ215cmのスリムなボディ。しかもシンプルなデザインでコンピュータルームなどにも違和感なくマッチします。

●設置には配管工事の必要がなく経済的。

センサーと本体を接続するだけなので、工期も短く、経済的。 また、 既設のコンピュータ ルームなどに設置する場合も、コンピュータを停止させずに行えます。

TOMAHAWK-Ⅲ

●消防通達「ガス系消火設備等に係わる取扱について(平成7年5月10日付け消防予第89号)に基づき、(財)日本消防設備安全センターの「ガス系消火設備等の評価」を消火装置として日本で初めて取得しました。(評－ガ001号)

火災を感知 → **新ハロンガスで消火** → **二次災害の防止**

誤作動を防ぐふたつの高感度センサーで、火災を感知。

煙センサーと熱センサーで、火災の発生をキャッチ。自動／手動の切換えで無人時は、火災の感知から消火剤の放射まで自動作動。また、有人時は、消火剤を手動スイッチで放射させることができます。

地球にやさしい新ハロンガス(HFC-23)でわずか10秒の高速噴射を実現。

オゾン層破壊防止のため、1994年1月1日以降、全世界で生産が中止された従来のハロンガス。トマホークⅢはこれに対応し、地球にやさしい新ハロンガスを採用。わずか10秒の高速噴射による自動消火を実現します。

消火後の復旧も容易。

新ハロンガスは絶縁性が高く、電気火災にも威力を発揮。消火後の復旧も容易です。コンピュータルームやデータ保管室などに適しています。

SECOM

カタログ・資料等のご請求、その他のお問い合わせに関しては、下記へお気軽にどうぞー。

セコム機器販売株式会社

● 本　社:東京都文京区目白台2-7-8　セコム目白台ビル（〒112）
TEL（03）5395-8556・FAX（03）5395-2330

ヘリット・リートフェルト「シュローダー邸」1924年　写真:Frank den Oudsten



ラディカルな理論によって因習的な価値観を超え、
極限まで切り詰められた造形のもつ普遍的な美
20世紀モダニズムの原点「デ・ステイル」の純粋抽象は、
未来の時代精神を高らかに宣言していた。

Theo van Doesburg
テオ・ファン・ドゥースブルフ

Piet Mondrian
ピエト・モンドリアン

Gerrit Rietveld
ヘリット・リートフェルト

J. J. P. Oud
J.J.P.アウト

Geroges Vantongerloo
ゲオルグ・ファントンヘルロー

Vilmos Huszár
ヴィルモス・ヒュッツァー

Bart van der Leck
バルト・ファン・デル・レック

Cornelis van Eesteren
コルネリス・ファン・エーステレン

Jan Wils
ヤン・ウィルス

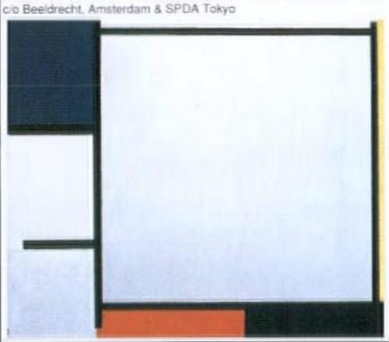
Robert van 't Hoff
ロベルト・ファン・ト・ホッフ

Art and Space Environment of Neoplasticism

DE STIJL
1917-1932

"ザ・スタイル(様式)"という言葉のオランダ語にあたる「デ・ステイル」とは、
1917年に創刊された芸術雑誌の名前であり、かつまた同誌で展開された芸術批評を実践すべく、
絵画、彫刻、デザイン、建築といったジャンルの壁を超えて集まったグループの総称でもある。
主導者ドゥースブルフとその同志たちは、従来の因習に縛られた装飾的な価値観を排除し
——水平/垂直のライン、白黒に赤青黄の3原色といった——
モンドリアンの抽象絵画に象徴されるシンプルで明快な空間原理を、
建築やインテリア等の広範な領域に展開していった。ヨーロッパの周縁でありながら
古くから交易国として繁栄したオランダの国柄を反映させるかのように、
デ・ステイルは同時代の前衛運動をワールドワイドなスケールで根底から揺るがし、
その影響はバウハウスからル・コルビュジエ～現代建築にまで及び、
ダダや抽象芸術運動でさえもデ・ステイル抜きには語れない。
ラディカルな理論と極限まで切り詰めた純粋な造形によって、
20世紀モダニズム運動の原点ともいわれる、この知られざるデ・ステイルの全貌を、
250点に渡る膨大数の作品から辿る、日本初の大規模な回顧展。

ピエト・モンドリアン「青、黄、赤、黒、灰色のコンポジション」油彩　1922年
アムステルダム、ステデリック美術館蔵　©1997 Mondrian/Holtzman Trust, c/o Beeldrecht, Amsterdam & SPDA Tokyo



出品内容:
*絵画、ドローイング、版画、彫刻、ステンドグラス……モンドリアン、ヒュッツアー、ファントンフェルロー、ファン・デル・レックなど　*建築図面、建築写真、建築模型……ドゥースブルフ、アウト、エーステレンなど　*デザイン、家具、インテリア(再構成)……リートフェルトなど　*その他、出版物、ビデオ、資料等多数



デ・ステイル 1917-1932
20世紀モダニズムの起源—オランダ新造形主義の美術と建築

1998年2月15日(日)まで

休館日=1998年1月1日(木)、20日(火)、27日(火)、2月3日(火)　開館時間=午前10時～午後8時(入館は閉館30分前まで。ただし、年末年始は閉館時間が異なります。詳細はお問い合わせください。)
主催=セゾン美術館、東京新聞　後援=オランダ大使館、日本建築学会、日本建築家協会、日本インダストリアルデザイナー協会、デルファイ研究所　協賛=浅海電気、小林工芸社、シマスタジオ、昭和ネオン、ダイダン、日創工芸、ハザマ、富士電機冷機
協力=KLMオランダ航空　制作協力:西友、西武百貨店
入館料=一般1300円(1100円)、大・高生1000円(800円)、中学生以下無料
※(　)内は団体10名以上料金。ただし、午後7時以降は夜間特別鑑賞時間として下記の料金でご観覧いただけます。一般1100円、大・高生800円(消費税込み)

セゾン美術館
SEZON MUSEUM OF ART

12月29日(月)～1月3日(土)はNTTハローダイヤル休業のため、03-5992-0155セゾン美術館へお問い合わせください。
東京都豊島区南池袋1-28-1(池袋駅東口西武百貨店となり)　http://www.mediagalaxy.co.jp/sezonmuseum/　お問い合わせ:NTTハローダイヤル 03-3272-8600

ヘリット・リートフェルト「レッド・ブルー・チェアー」1918年/1950年代再制作　大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室蔵

書評

『情報美学入門：基礎と応用』

評者＝下村千早

美学情報のダイナミックな構想力



『情報美学入門：基礎と応用』
M.ベンゼ＝著　草深幸司＝訳
A4判　198頁
勁草書房　2500円

1945年頃、コンピュータが発明され、C.E.シャノンの情報理論が発表された。そして、コンピュータが利用され始めると同時に、L.A.ヒラーとL.M.アイザックソンらによって「弦楽四重奏のためのイリアック組曲」(1957年)の実験的作曲が試みられ、コンピュータで作曲が可能なことを証明した。

その後まだ半世紀も経過していないが、驚異的な情報科学・工学の発達によって生活や意識の奥深くまでマイクロチップが浸透しつつある。コンピュータを中心にして現代社会の高度情報化が爆発的な勢いで進み、未来には情報ネットワーク・システムが社会的、文化的に不可欠な神経的基盤を形成することになるだろう。

J.F.リオタールがポスト・モダンの変革の最も重要な契機に挙げているコンピュータは、文字的記憶としての知識を、現実を制御することができる遂行的情報に変えたのである。さらに、コンピュータのマルチメディア化によって、教育、学習、エンターテイメント、デザインなど全ての領域で、美的イメージ情報の役割はますます重要になっている。

しかしながら、芸術やデザインの現場で用いられている美の論理は、いまだに鑑賞を中心にする古い主観的美学にもとづいた芸術の論理が支配しており、情報やその本質、革新性について十分な理解と自覚に至っていない。現代の美の可能性を探求するためには、美的情報とは何かをさらに深く認識する必要があるだろう。本書はそれに答えるものだと思われる。

この訳本を読む前に私が期待していたことは、人間の意識活動を代行することができるコンピュータの発明と情報科学の出現に対して、芸術の領域からどのような接近が行われたのか、そして、どのような方法で情報の美学が創造されたのか、ということであった。

20世紀初頭、それ以前のモノとしての美的対象を否定し、前衛美術家達が運動と空間の観点から美的時・空間として捉え直したように、驚くべきことだがM.ベンゼの構想は、美的対象というものを美的情報を創造する芸術家、その選択的行為とコミュニケーション過程などを包含した「美的状態」として捉え直すことになった。M.ベンゼの情報美学において、私の興味ある事柄は次のようなことである。

それは、Ch.S.パースの記号論における媒介、対象、解釈項の3項関係から構成されている記号を、コミュニケーション、実現、コード化の3項的機能関係として記号を動的に再編することから始まっている。そして、美的状態を実現する芸術行為は、混沌とした状態から組織化されたメッセージを形成する過程であり、すなわち、それはコミュニケーションを成立させるための情報の選択と構造化の過程であるという認識に到達する。

情報はいわゆる知識内容や作品表現と解釈ではなく、情報の単位ビットは一方でメッセージを組織化する選択的過程に関わっている。したがって、情報の概念そのものの中には、芸術家の意識と世界関係とのインタラクティブな過程、そして、創造的な状態をも含んでいるのである。「情報理論は、物理学の解釈も言語学や美学の解釈も含んでいる」(p.162)という部分はそのことを端的に示している。

このような革新的な美学の考え方は、当然、美的状態の解明だけに留まらない。どのようにして美的な状態を形成することができるのか、その実質的な方法とアルゴリズムなど、実験的な美学という次のステップを開くことになる。そして、ベンゼは本書の後半で、美的状態をシミュレーションする生成美学、言語を対象にしたテクスト理論、例えば、テクスト統計学、テクストのオートマトン理論、合成テクストなどの情報美学の構想を提唱している。

今回初めて訳出されたベンゼの情報美学入門は、私の内で断続的であった未解決の連鎖、例えば、デザインと情報の関係、コンピュータと美学の接点などを再考するに十分なものであった。我々がこのような機会を得ることができるのは、ベンゼの著作は学際的な専門語の難解なテクストであるという定説を覆して、わかりやすい言葉と文章で訳出された訳者、草深氏の大変な努力と造詣に負うところが多大である。芸術研究の分野でこの翻訳は真に研究というに値する成果であろう。最後に、情報時代に芸術とデザインを志す若い人々が、情報美学の創始期の体験と、ベンゼの創造的でダイナミックな構想力にふれて、情報の革新性に関心を向けてほしいものである。

●しもむら・ちはや／武蔵野美術大学視覚伝達学科教授

Book Review

書評

『彫刻の絆』

評者＝建畠哲

彫刻家への愛に満ちた論集



『彫刻の絆』
酒井忠康＝著
A5判　304頁
小沢書店　4000円

酒井忠康の4冊目の彫刻論集である。彼の著作に常に感じられることだが、『彫刻の絆』にも一貫しているのは、そこに確かに彫刻に向き合っている“私”がいるという生々しい感覚である。それは単に彼が肉声で語っているということばかりによるのではない。酒井には彼自身が身を置いている文化の状態に対する一種の違和感があるに違いない。それを本来の人間的な思索に必要なはずの「体温」が欠落していることへの懐疑といってもいいだろう。彼が彫刻に見出そうとするのは、その「私」と敏感な感受性をもつ彫刻家との間で共有されているに違いない危機の意識であり、いわば目の前の彫刻に自らの私的な問題提起が託されているのである。

記憶という言葉が、そのテキストにも繰り返し用いられている。たとえばダニ・カラヴァンのベンヤミン追悼の記念碑を論じた冒頭の美しいテキスト「消えた墓標」で、彼はこう記す。ベンヤミンが命を絶ったスペインの海岸の岸壁に置かれたこの環境彫刻は、「人間の記憶を過去から未来へ転換し、いまはまさに、実現していない『夢の現在』のなかにいるのだ、ということを確認する『装置』として考えられている」と。

夢の現在――。それは儚い現在のことではない。彫刻とは記憶の媒体であり、その“場”の力を前にすることによって、私たちは、いま想像力によるたしかな空間をともにすることができるのだ。酒井は「記念碑」からの帰りがけに「傍らの、ごつごつした岩肌からこぼれ落ちた小石をひろって、わたしのささやかな想い出と」するが、それはまさに「『場』の自生する力」が「第三者に体感的な性質の感受をうながす」が故の自然な行為なのである。カラヴァンの設営する「場」に対するこうした記述自体に、私たちは今日のコンペンショナルな都市の装飾としてのパブリック・アートのありようへの批判を読みとることができるようにも思う。

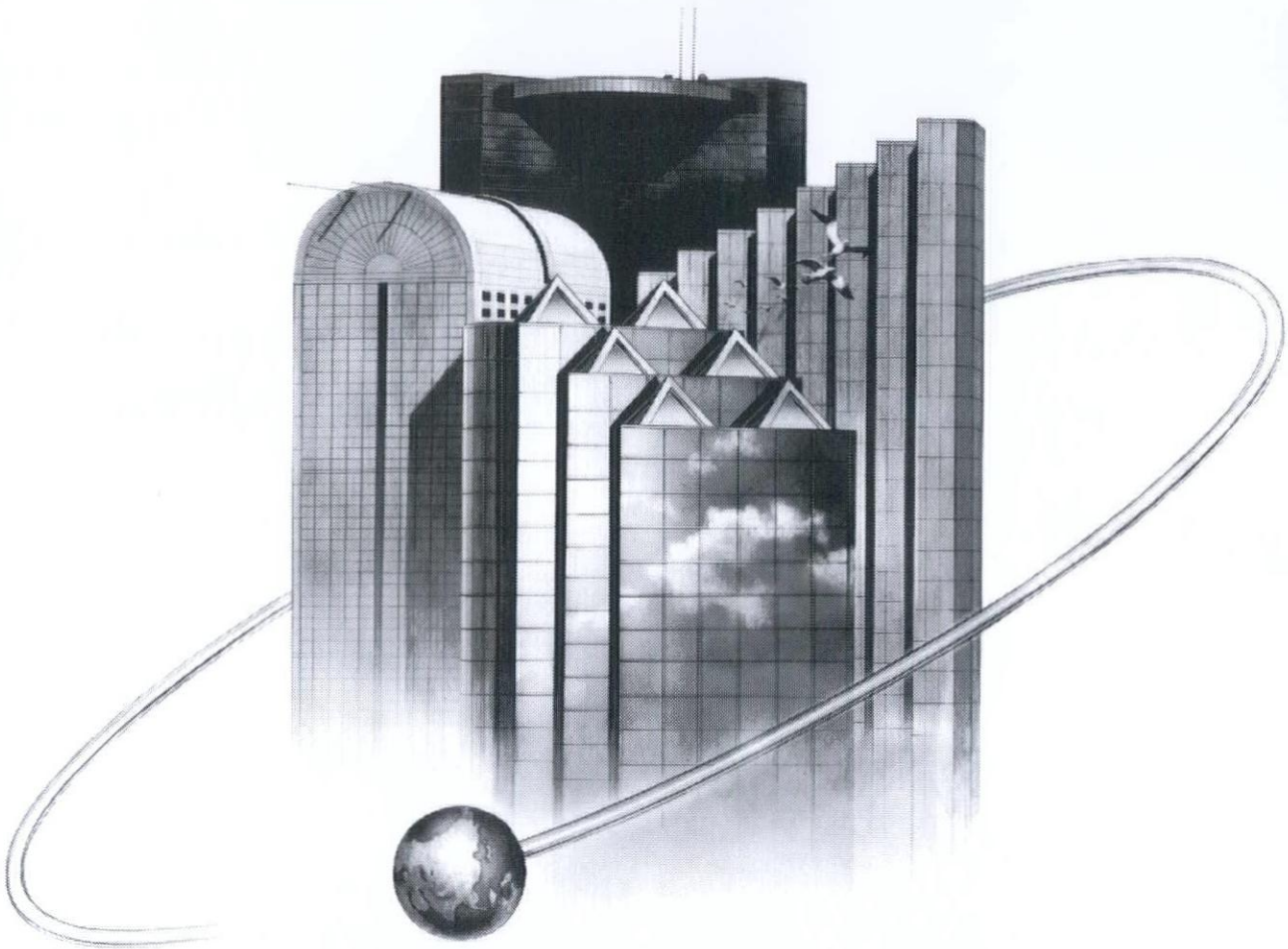
若林奮の展覧会(1988年)に際しても、彼はまた別の意味での「記憶」を問題にする。その黙示録的な世界は「風景の中に工作する記憶の装置」であり、また「時の堆積を示すかのような不思議な空間」でもあるというのだ。こうしたいかにも、“体感的な感受”は、突然彼に森羅万象の現象を「不思議」と呼んだ南方熊楠を思い起こさせもする。なぜならこの特異な学者もまた、記憶と夢と現実とが一体となった世界を理想としたからだ。

しかし美術館人である酒井本人は、あくまでも美術の現場に立とうとする人である。彫刻家のアトリエを訪れる時、彼の思いはとりわけ深く光景と共振し、いたるところにその主たちの生の意味を見出す。砂澤ビッキが亡くなった後、音威子府(おといねっぷ)の村はずれのアトリエに出向いた彼は、雪に埋もれた家の中の壁や床にも生の容体が凝縮し、そこで無量の夜を過ごしたであろう彫刻家にとっての働くという意味が、「たどたどしいが雄弁に」語られているのを耳にするのだ。

彫刻の「場」とは、酒井にとって人間と都市と、そしてまた自然とが共生し、記憶を未来へとつなぐ、救済の力を宿した空間である。その場を創出する者たちへの愛に満ちた論集と言えよう。

●たてはた・あきら／多摩美術大学芸術学科教授

快適創造

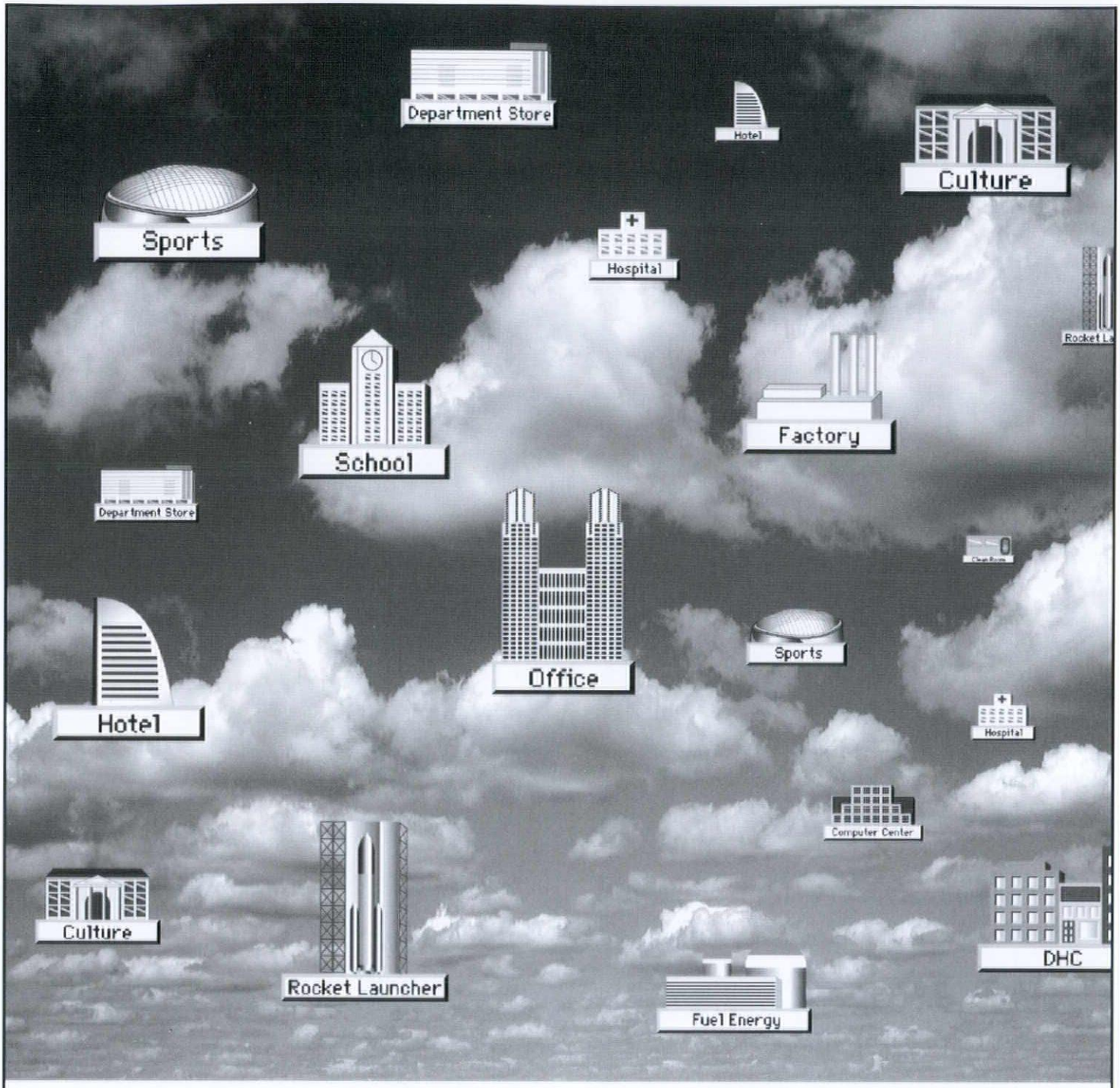


人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。
それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。
都市、コミュニティ、産業施設…人をとりまくさまざまな環境について考え、
その理想を追いつづけている三機工業は、
いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。

三機工業株式会社

〒100 東京都千代田区有楽町1-4-1　TEL.03（3502）6111



空気のメニュー。

オフィス、工場、学校、病院…。それぞれの建物には、もっとも適した空調システムがあります。
新菱冷熱は「さわやかな世界を創る」という思想のもとに、
用途に合わせたオーダーメイドの空調システムを、設計・施工しています。
バリエーション豊かな私たちの空気のメニューから、21世紀の新しい都市環境が始まります。

新菱冷熱
SHINRYO CORPORATION

本社：〒160 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151(代)　　支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・大阪・富山・広島・福岡

SD9801
292

メトロポリタンライブラリー

1998年の評者＝
渡辺武信／太田佳代子／港 千尋

今月の評者＝渡辺武信



「夢の場所・夢の建築」
吉武泰水＝著　工作舎　2500円



「住まいの夢と夢の住まい」
布野修司＝著　朝日新聞社　朝日選書　1400円

建築的「夢」の可能性

『住まいの夢と夢の住まい』は世界各地の住居を幅広く調査研究してきた著者が、ひとの住まいがいかに多様であり得るかを示した本で、冒頭に述べられた「住まうことへの想像力が著しく衰え、萎えて」いる日本の現状への生き生きとした賦活剤になっている。

扱われる対象はダンボール・ハウスからシュヴァルの理想宮まで、あるいはモンゴルのゲルからコルビュジエのユニテまで、実にさまざまで、それらが章ごとに定住―移住、恒久―仮設、独居―群居というふうに対比されて論じられる構成は、尽きせぬ興趣を生む。

しかし読み終えてみると、なんとなく商品カタログのページをめくり尽くしても何を買いたいのか分からなかったような空虚感が残る。確かに、多様な具体例の刺激によって住まいの夢が「庭付き一戸建ての持ち家」に限らないことは痛感させられるが、さらに考えると、ホームレスや山頭火の放浪・無所有の自由と、風水を代表とするコスモロジーによる拘束ゆえの安定を得ている東南アジアの住居、あるいは胎内願望を表わす洞窟住居と、合理的な理想に基づく集合住宅としてのファランステールは、もともと同じ土俵では論じられない異なる次元の夢なのだ。それを「これも、あれもあります」と並べて見せたところにカタログ性がある。これが著者の確信犯的意図だったとすればそれまでだが、私としては多様な事例に対する距離や角度を示す統一的視点を著者に望みたかった。布野は「はじめに」で「多様な住まいについて考えるなかに、僕のまったく個人的な住まいの夢を忍び込ませてもある」と記しているが、その個人的な夢はついに読み取れなかったのだ。

本書の末尾に「克明に夢の記録をとり続けた建築家」への言及があるが、これは吉武泰水のことで、その夢の記録の分析が『夢の場所・夢の建築』に実った。こちらでは著者が25年にわたって記録した自分自身の夢、約1100例を素材にして、その中に出てくる空間の構造が対比され、あるいは関連づけられていく。その分析の過程は、夢の記述にその茫漠性にふさわしい淡い青灰色を重ね刷りした杉浦康平の巧みな造本の効果もあって興味深く読めるが、その具体的引用は省略して進めば、結論として著者が提示するのはおおよそ次のような原理である。

成長期の家や周辺の空間を「原環境」、新たに接した空間を「現環境」と呼ぶと、前者はその人の一生を通じて、夢を含む無意識の中で後者に働きかけ続ける。「『原環境』が『現環境』に働きかけ、類似性によって強引にでもわがものにすることによって、『私』は『現環境』に落ち着くことができる。これが新たな環境に『住みつく』ことで、そこに安定した場を見出して『安住する』のだとも言えるだろう。新しい環境に直面しての空間的把握……の絶えざる働きかけは、覚醒時に意識的に行なわれることもあるが、その根は深く無意識の中にあり、とくに夢に顕著に現われるのではないだろうか」。

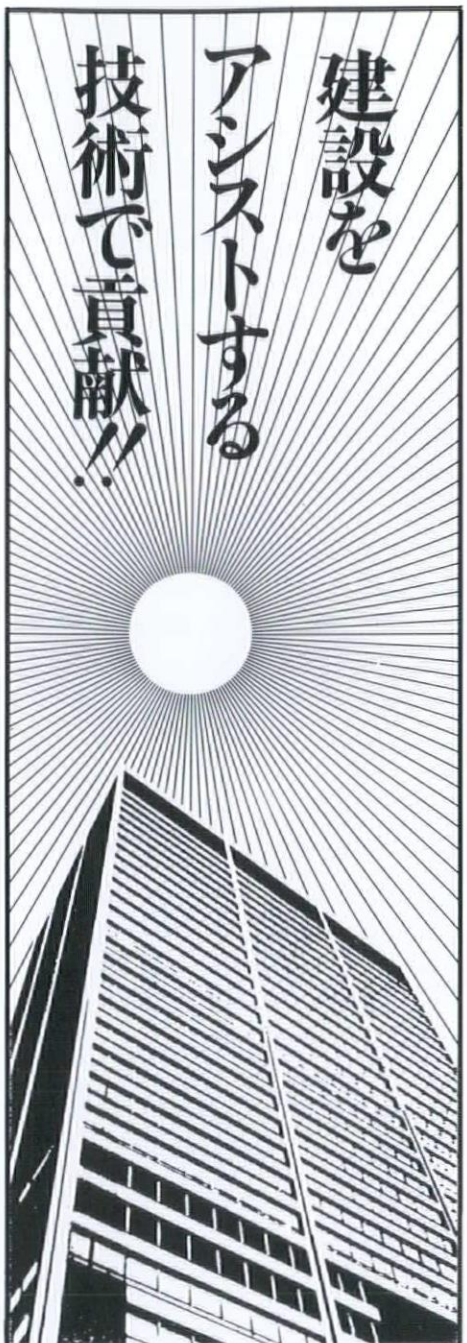
人間が新たな体験を記憶の中の体験に組み込み融合してゆくことで人格の統一性を保つというのは、よく知られた一般的原理であるが、それを空間認識に特化してきわめて具体的に論じたところに建築家ならではの新鮮さがあると思う。というのは私も本書を読んで深く思い当ることがあったからだ。自ら設計した現在の家が竣工して、中学時代からつきあい続けている絵の仲間を招いた時、彼らがそろって「この家の居間は昔のお前の部屋にそっくりだ」と言い出したのだ。彼らが思い出したのは、私が大学に入った時に親が、いわゆるお神楽の2階として建て増してくれたかなり広い部屋で、そう言われてみると、全体の細長さ、薄暗い経路と内に入った時の開放感、開口部や棚の配置などがよく似ているし、私が建築学科の学生として設計課題の図面を描き始めたのも、その部屋だった。

空間認識や想像力が「原環境」に還元されるとする吉武の原理は、布野の本に内在しているカタログ性と対照的である。もっとも布野もそのことを意識していて、「記録者が分析者であることによって、夢の内容がどう影響されるのか」ということに留保をつけつつも、「思い当ることがある。建築を学び始めた学生に住宅設計の課題を出すと、その設計案にどこかしら生まれ育った住まいの面影が表われるのである」と言う。

この認識の上に立って彼は自著を「さまざまな空間を体験すること……それが夢の住まいを自由につくる第一歩である」と意味付けているのだが、吉武の原理からすると、「さまざまな空間を体験すること」は確かに有意義だとしても、それが「原環境」の枠組みをどれほど変えるのかは疑わしい。

もっとも建築的想像力が生まれ育った環境で決定されるとすると認識の発展性を否定することになるので、「原環境」への還元を一面の真理と認めつつも、それと新たな環境との葛藤を通じて「夢」を豊かにするように努めるのが建築に関わる者の道だと思うが、この問題は引き続き考えていきたい。

●わたなべ・たけのぶ／建築家



●一般電気設備工事＝設計施工
●防爆電気設備工事＝設計施工
●計　装　工　事＝設計施工
●電気加熱保温工事＝設計施工
●静電気接地用リール＝＝販売

ASTEC
SHOWA ASTEC

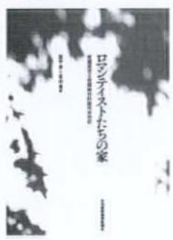
昭和アステック株式会社
（旧社名　昭和電機工業株式会社）

取締役社長　浦　道　雄

●本社／東京都港区東新橋２丁目７番３号
電話03(3437)3851(代表)　〒105
●支　社＝関東・中部・関西・中国
●営業所＝新潟・鹿島・千葉・四日市・堺
倉敷・岩国・徳山・坂出・松山
新居浜・大分・福岡
●駐在事務所＝ジャカルタ・テヘラン・タイ
シンガポール・マレーシア

新刊紹介

『ロマンティストたちの家――
佐藤武夫と佐藤総合計画の半世紀』
田中孝十米山勇＝著
四六判　350頁
日刊建設通信新聞社　2400円
建築音響学の開拓者でもあり、
早稲田大学大熊講堂を出発点に、東京ビッグサイト、旭川市役所などランドマークに値する「開かれた公共建築」を多く手掛けた佐藤武夫とその事務所の半世紀を綴る。



『保存と想像をむすぶ』
吉田桂二＝著
A5判　192頁
建築資料研究所　2300円
〈飛騨の匠文化館他一連の修景計画〉で吉田五十八賞特別賞を受賞し、ナショナルトラスト保存活用委員会などの委員も務める著者の建築論評集。
歴史の記憶として、民家の継続性の維持を説く著者の大平宿の保存への取り組みや、あるいは「建築家は芸人たれ」の持論を展開する。



『駅とまちづくり――ひと・まち・暮らしをつなぐ』
インターシティ研究会＝編
B5判　230頁
学芸出版社　2000円
単に交通における通過点のひとつではなく、人が集う場として、つまりは駅を「まち」ととらえることについての議論は、京都駅以来さらに活発になっている。本書では、日本や、フランスのTGV憲章を引きながら、まちの主役としての駅をさまざまな側面から語っている。



お知らせ

平成9年度住宅建築賞作品募集

応募内容：一戸建住宅、集合住宅および併用住宅等とする。大幅な増改築も含む。原則として最近3年以内に竣工したもので、雑誌等に発表したものも可。応募点数は自由だが、応募作品は東京への通勤圏内に限る。
審査委員：妹島和世(委員長)、石田敏明、隈研吾、小嶋一浩、内藤廣
応募資格：応募作品を設計した建築士
申込書：東京建築士会事務所で配布
提出期限：1998年2月20日(金)当日消印有効
提出・問い合わせ先：〒104-0061　中央区銀座2-6-4 プレイガイドビル4階　社団法人東京建築士会
Tel：03-3562-0641

Moving Systems Space展開催

内容：リサイクルが叫ばれている現在、改めて「変化に追従する装置(空間)」を再考する。
会期：1998年1月15日(木)～1月20日(火)
時間：10:30～18:30　入場無料
会場：リビングデザインセンターOZONE
主宰：一級建築士事務所CLIP
問い合わせ：リビング・デザインセンター
担当：伊藤、石渡　Tel：03-5322-6504

大手町・丸の内・有楽町地区まちづくり懇談会　キャッチフレーズ募集

東京駅を中心に、大手町から丸の内、有楽町に広がる都心地区約110haの将来像を表現するにふさわしい清新なキャッチフレーズを公募する。
内容：20～30年後の将来像をおおむね20文字以内
締切：1998年1月31日必着
問い合わせ：大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会　Tel：03-3287-6181
ホームページ：http://www.lares.dti.ne.jp/~tcc

マーク・ボスウィック写真展『Synthetic Voices』

内容：最近注目を集めているブリティッシュ系、フレンチ系オルタナティヴ若手写真家の代表であるマーク・ボスウィックは、ファッション雑誌を主な活動の場とする。写真では語りきれない美しさを自由な手法で表現してゆく彼の写真は、現在の日本人若手写真家ブームに一石を投じることになるであろう。
会期：1998年1月14日(水)～2月8日(日)
時間：10:00～20:00　入場料500円(学生400円)
会場：パルコギャラリー(渋谷パルコパート1内)
問い合わせ：パルコギャラリー
Tel：03-3477-5873



個性が集まって大きなエネルギー

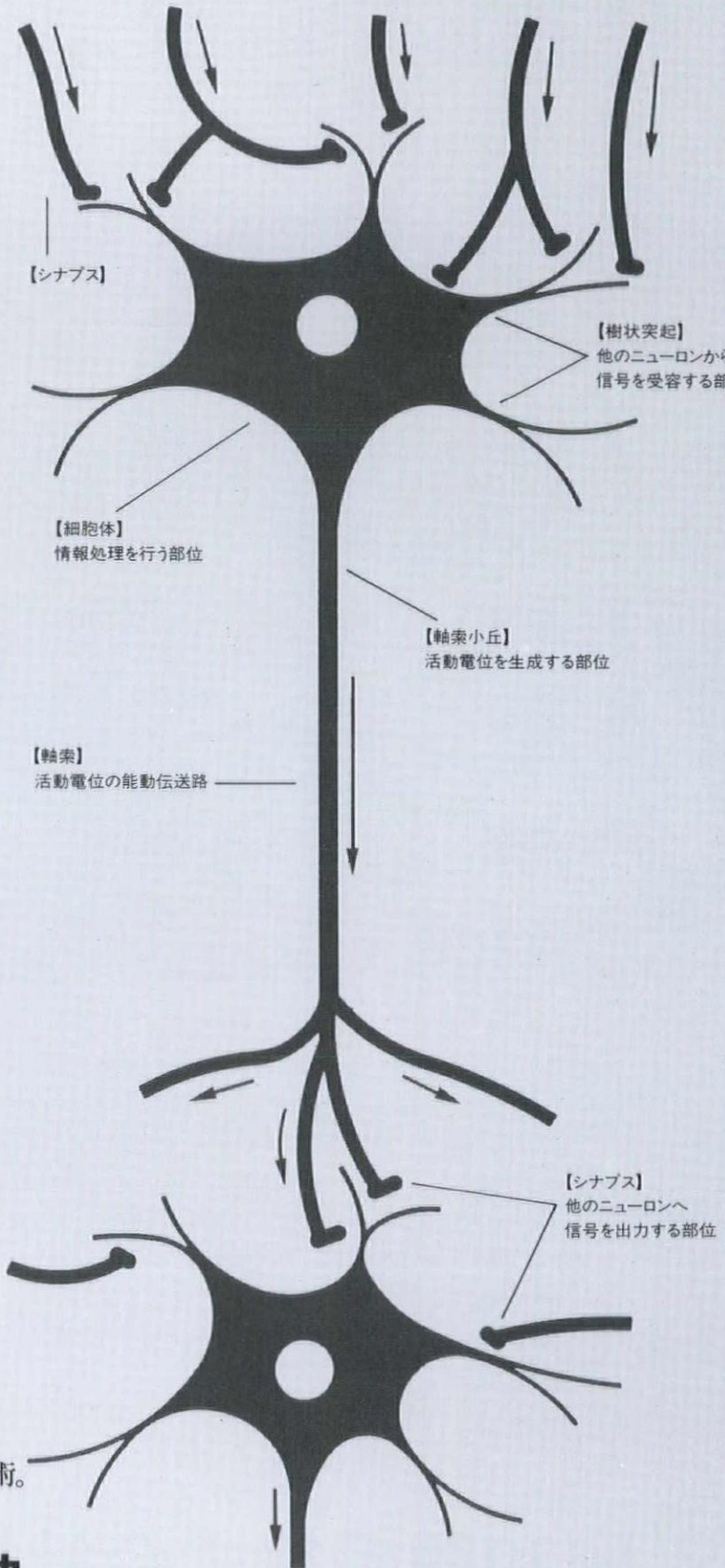
サッシ・カーテンウォールの総合メーカー

私たちは、今、ひと昔前の科学技術の進歩を強調するだけの時代から
〝テクノロジーとヒューマニズムの調和〟をめざす新しい時代をつくろうとしています。
とくに人間の生活空間を創造する建築業界においては、
こうした先進性が強く要求されていますが、その中で、生活空間としてのアメニティ(快適さ)や、
建築物内外の両面にわたるデザイン・外観・色彩など
美的付加価値の重要性もますますそのウェートを高めています。
弊社は斬新で、確かな品質の製品を供給することを通して、
社会へ大きく貢献していきたいと考えています。

昭和サッシ
昭和鋼機株式会社

本　　社▶〒174 東京都板橋区前野町6丁目1番10号
☎ 東京(03)3969-1101(代表)
所沢工場▶〒354 埼玉県入間郡三芳町大字上富1163
明石工場▶〒673-01 明石市二見町南二見21番3号
昭和鋼機サービス株式会社▶〒174 東京都板橋区前野町6丁目1番10号
大阪支店・札幌営業所・仙台営業所・横浜営業所・名古屋営業所・九州営業所

21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。

誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もっと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感知できないだろうか。そのテーマに応えるべく、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エア・デザイニング技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

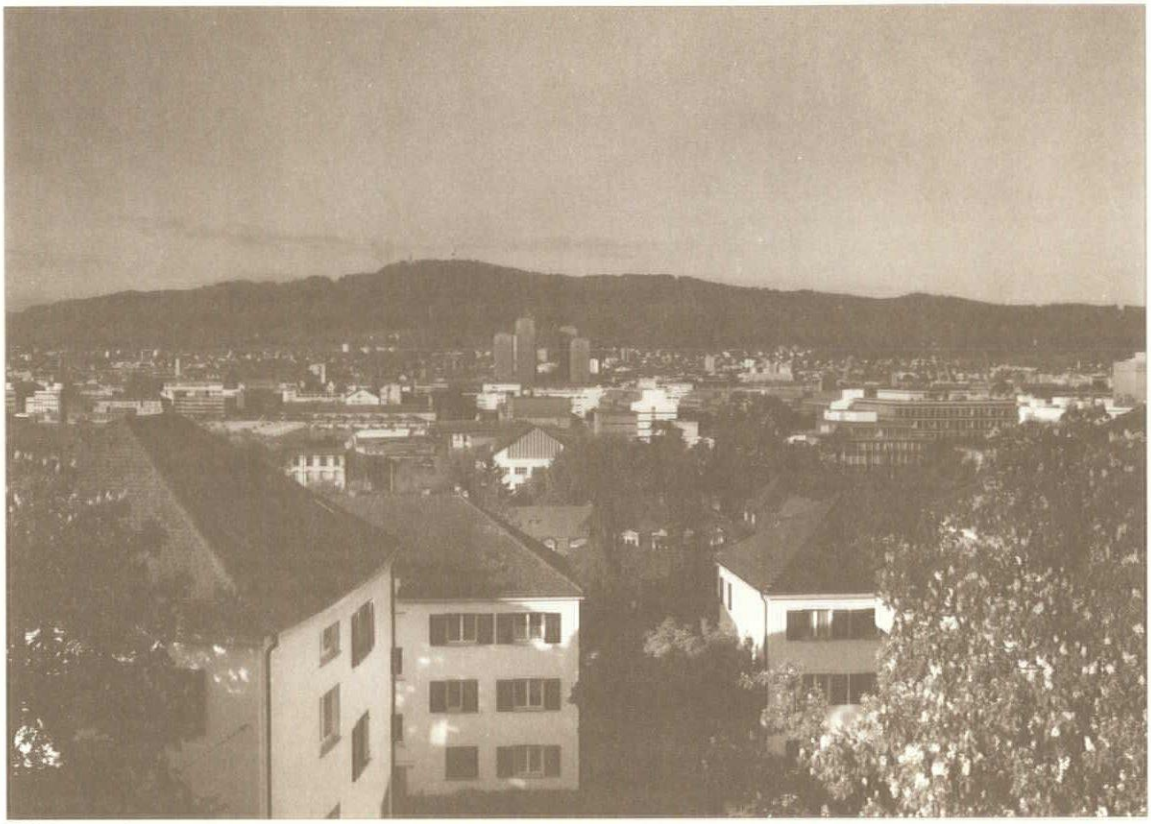
東洋熱工業株式会社　〒104　東京都中央区京橋2-5-12　TEL03-3562-1351

時代の呼吸に応える技術。

東熱

SD

2月号予告



写真＝Susanne Stauss

9802

特集

スイス・ドイツ語圏の建築

ここ数年、スイスの特にドイツ語圏における現代建築は、ヘルツォーク＆ド・ムーロン、ブルクハルター＆ズミ、ジゴン＆グイヤーなどの建築家の作品に見られるように、興味深い「四角い建築」が多く見られる。それらの「四角い」単純な形態の中にスイスという文脈、素材、敷地といった様々な問題を読みとることができる。またスイス・ドイツ語圏の建築家の多くがETH（スイス連邦工科大学）の出身であることも興味深い点である。

スイスの建築家が、意識的に絶えず「建築」を通して社会との対話を試みることで、「建築」という言葉が社会的な言語として認識されようとしている状況は、スイスの社会、都市、建築を考える上で非常に重要なことである。

今回の特集では、スイス建築の背景、建築の生まれる文脈を捉えながら、特にスイス・ドイツ語圏の魅力をさまざまな視点から探っていく。

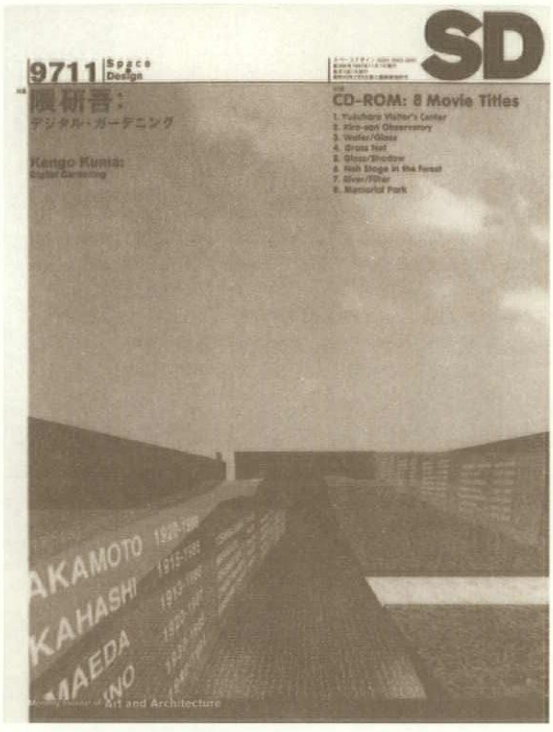
紹介建築家：ヘルツォーク＆ド・ムーロン、ジゴン＆グイヤー、ペーター・メルクリ、ディーナー＆ディーナー、
マルセル・メイリ＆マークス・ペーター、ミロスラフ・シク、ブルクハルター＆ズミ、モルゲー＆デゲロ、
マルケス＆ズッカーチェン
執筆予定者：貝島桃代（建築家）、塚本由晴（建築家）、ハンス・フライ（評論家）、アーサー・ルーゲ（ETH教授）、
マルティン・チャンツ（ETH助手）、パトリック・グムアー（ETH助手）、アンドレス・ヤンサー（Architese編集者）、
マリー・セレス・スタウファー（ETH助手）

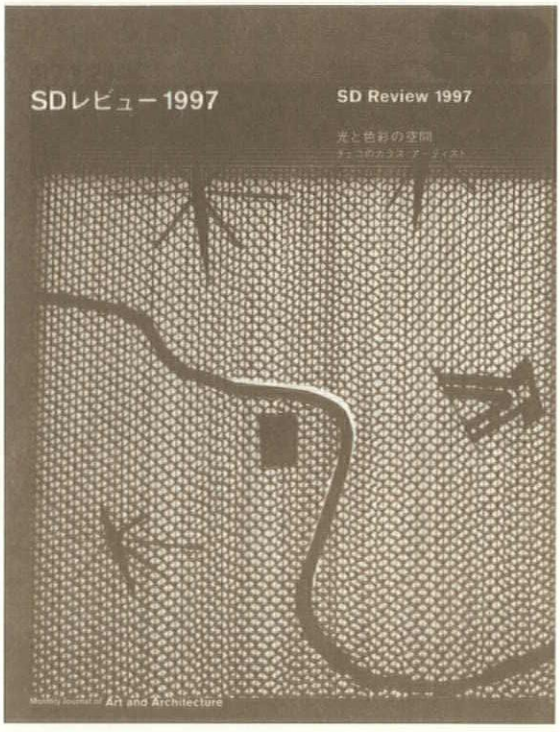
往復書簡：篠原一男×ジャック・ヘルツォーク

連載：
世界の現代美術館6／カトリーヌ・グルー
森島紘史の起こし繪図――日本のかたち紙考2／森島紘史

SD

バックナンバー





9711

特集

隈研吾:デジタル・ガーデニング

隈研吾はポストモダン以降の建築の言説をアクティヴに続けてきた。1986年の『10宅論』(トーソー出版)をはじめ、1989年の対談集『グッドバイ・ポストモダン』(鹿島出版会)、1994年にはベストセラー『新・建築入門』(ちくま新書)他、2冊の書籍を著し、さまざまな議論を呼んだ脱構築的建築作品も残された。そして近年、90年代後半に至って彼の作品は、次世代への提案を含みながら新たな展開を見せる。透明な建築は20世紀文化の視覚の優位性を超えられるか。環境と建築との新たな関係とは?鍵は「デジタル・ガーデニング」が握る。本特集は、今年建築学会賞、ヴェネディクタス賞を受賞した隈研吾の近年の主要作品を紹介する。

作品
慰霊公園、北上運河資料館、ストーンプラザ、森舞台、水/ガラス、川/フィルター、エコ・パーティクル、グラス/ネット:ミラノ・トリエンナーレ1996出展作品、シンプルガーデン、国立国会図書館関西館建築設計競技案、中原中也記念館設計競技案、ベニス・ビエンナーレ日本館、オートマチック・ガーデン、転送の湿度:「トポスの復権展出展2」作品、他

論文=飯島洋一、グレッグ・リン、隈研吾
対談=槇文彦×隈研吾

短期隔月連載:ポーランドのドイツ・アヴァンギャルド4/長谷川章
連載:世界の現代美術館探訪5/渡辺真理
連載:海外建築情報リミックス:12 Architects #11「グレン・マーカット」

特別定価=2,800円/本体2,667円

9712

特集

SDレビュー1997

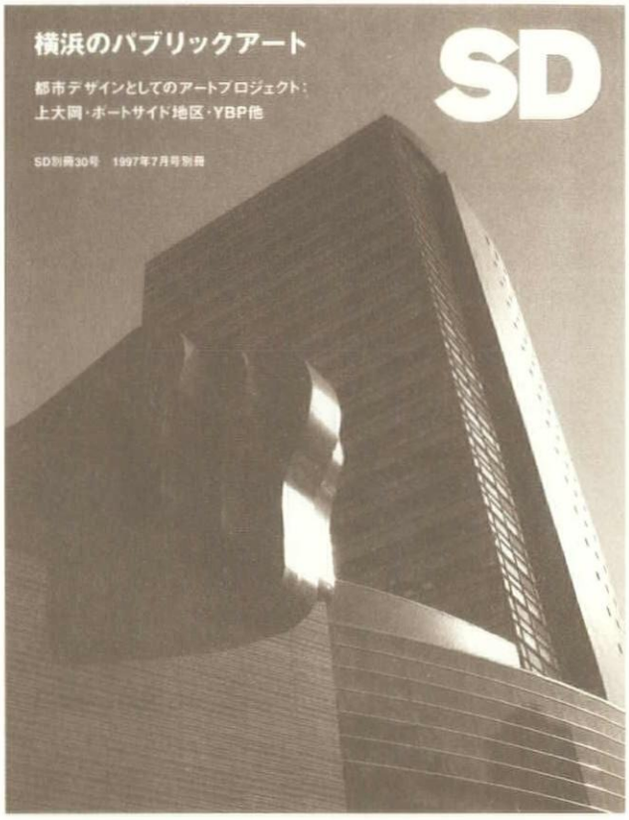
第16回SDレビュー1997入選展の結果を審査員のコメントと共に誌上発表する。
入選者=浅野静/エトスアソシエイツ+新井清一/アライ・アーキテクツ、今村雅樹+佐久間菜穂子/今村雅樹アーキテクツ、大野勝+境静也+鉾岩崇/佐藤総合計画、金井謙介+西田勇人、金子泰洋、川人洋志、佐藤孝明/フォレストシップ、建築研究室高安重一事務所+佐久間達也+橋爪宏直+重富博之、タカマスヨシコ、西沢立衛、藤本壮介、松澤穣、松本明、東日本旅客鉄道株式会社+JRE設計+鈴木エドワード建築設計事務所、三浦明彦+安田幸一+神成健+北川啓一/日建設計
審査員=香山壽夫、渡辺邦夫、岸和郎、團紀彦
文=木村博昭
写真=堀内広治

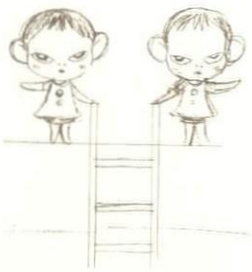
光と色が彩る空間——チェコのガラスアーティストたち

ガラスという繊細で敏感な素材を用いて住宅、教会、公共空間に彩りをそえるチェコのガラスアーティスト達の仕事を紹介する。
文=マリアン・カレル、鈴木崇英、水田順子

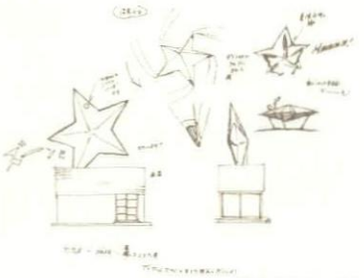
短期隔月連載:ポーランドのドイツ・アヴァンギャルド5(最終回)/長谷川章
短期隔月連載:ネットワーキングの極意4(最終回)/伊藤公文
連載:世界の現代美術館探訪6/太田泰人
連載:海外建築情報リミックス:12 Architects #12「ミース・ファン・デル・ローエ」(最終回)

定価=2,000円/本体1,905円

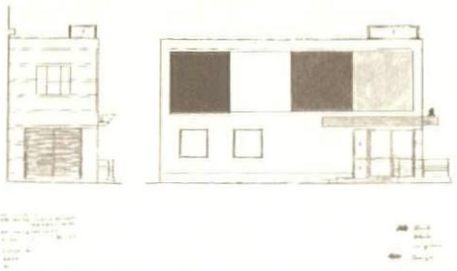




奈良美智の初期スケッチ



交番のプロポーザル



倉重光則の交番のプロポーザル

SD別冊30

横浜のパブリックアート

ー都市デザインとしてのアートプロジェクト：上大岡・ポートサイド地区・YBP他

判型・体裁：A4判変形・並製
総頁：132頁
定価：3000円（本体＝2857円）

発売中！！

都市デザインのパイオニアとして、またリーダーとして大きな役割を果たし、常にその動向が注目され続けてきた横浜市。

その活動の歩みは、すでにSD別冊11号「横浜＝都市計画の実践的手法－その都市づくりのあゆみ」と、SD別冊22号「都市デザイン横浜－その発想と展開」にまとめられてきた。

SD別冊30号は、それらに続くものとして、主としてパブリックアートに関わる取り組みを中心に、これまで行われてきた主なプロジェクトを詳細に紹介するものである。

アート、都市計画、都市デザインに関心を持つすべての人を対象に、デザインの意図、事業の内容を詳述し、評価を加え、都市デザインとパブリックアートの向かうべき道を示す。

第1部：ゆめおおおかアートプロジェクト（上大岡駅周辺再開発計画）
座談会／北川フラム、緒川たまき、南條史生
作品／18人の作家による19の作品
奈良美智、平川典俊、村上隆、倉重光則、方振寧、木津文哉、須田悦弘、吉水浩、福田美蘭、長澤伸穂、小沢剛、平林薫、岡崎乾二郎、高柳恵理、PHスタジオ、チェ・ジョンファ、ナウィン・ラワンチャイクン、シムリン・ギル
第2部：横浜市のパブリックアートの展開
座談会：松葉一清、南條史生、木下眞男、国吉直行
ヨコハマ・ビジネスパーク
ポートサイド地区
横浜彫刻展
金沢地区研究所群
キリン横浜ビアビレッジ
都心部での活動
論文：松葉一清、松井みどり、山東めぐみ、彦坂裕、谷新、他

SD別冊

都市空間の芸術

パブリックアートの現在

カトリーヌ・グルー著　藤原えりみ訳
A5判　208頁　定価(本体3,000円＋税)

本書は現在関心が高まりつつあるパブリックアートを歴史的文脈に沿って語りつつ，公共空間の意味とパブリックアートの現代的意味を示唆する。欧米のすぐれた最新事例を30余り豊富な写真とともに紹介する。

［主要内容］

1章　公共空間とは―ディブ・ダーク・ウォーター／リエージュ通り／サーチ／芸術の領域
2章　記憶の現代性―ドラム罐の壁―鉄のカーテン／勝利の門／共和国の本質と道徳／バス・ステーション／エイリアン・スタッフ／他
3章　場から多様性へ―垂直の1キロメートル／水鏡の上の光信号／ベサンの人／プレファブリケーション／時の蘇生，長崎／サンドイッチマン／他
4章　現在の時と空間の知覚―上下の方向，現場で働く彫刻／古典的な交信機器　伝声管／ハインツのナイチンゲール／植物の劇場／9つの空間，9つの木／他
5章　プロジェクト実現のための3つの方法論―ストラフブールの市街電車のためのプロジェクト／リヨンのテロー広場／他

美術から都市へ

インディペンデント・キュレーター15年の軌跡

南條史生著
四六判　240頁　定価(本体2,700円＋税)

現代美術の最前線で活躍する著者の初めてのエッセイ集。現代美術館，パブリックアート，国際展の企画，アーティスト・イン・レジデンス等，現代美術とのかかわり合いの中で思索した，様々なテーマについて語る。

［主要内容］

1章　パブリック・アートの現在―アートがつくる公共空間／職場におけるアートについて／都市は芸術を求める／美術館と都市のはざまで／他
2章　現代美術のための空間―理想の美術館と，美術館の理想／美術館建築とは何か／光と空間の夢を訪ねて／美的精神の形象としての美術館／他
3章　国際展をめぐって―芸術の国際交流について／ドクメンタ8の現場から／パヴィリオンを越えて／クオ・ヴァディス／読み終えることのない書物のために
4章　日本のアイデンティティ―前衛の日本展／リアリティからの出発／国際展と日本
5章　アーティスト・イン・レジデンス―アーティスト・イン・レジデンスとは／世界のアーティスト・イン・レジデンス

見えない庭

アメリカン・ランドスケープのモダニズムを求めて

P.ウォーカー，M.サイモ共著
佐々木葉二・宮城俊作共訳
A5判　352頁　定価(本体5,200円＋税)

本書は1925年から1975年の半世紀にわたるアメリカン・ランドスケープ界の歴史を個人作家のみならず組織事務所，さらには大学教育の足跡までを含めての，みずみずしいタッチで描かれた本格的なドキュメント。図版多数。

［主要内容］

序　章　ランドスケープ・アーキテクチュアの伝統
第1章　社会を映す庭
第2章　アートとしての庭
第3章　トーマス・チャーチによるモダニズムへの転換
第4章　アメリカン(あるいはカリフォルニア)ドリームの彼方
第5章　裏庭から都市へ
第6章　孤高の古典主義者
第7章　大学教育の近代化
第8章　第1世代の組織事務所：実践のための新しい受け皿
第9章　環境主義：アートに影を落とす科学
第10章　第2世代の組織事務所

数寄屋の美学

―待庵から金属の茶室へ―

出江　寛著
四六判　224頁　定価(本体2,800円＋税)

和風建築で定評のある著者がその独自の美学をもとに，日本の古典建築と文化について語るエッセイ集。風土・建築・美術・文化など著者の関心は多岐にわたり，数々の実作を通してその思想の展開を具体的に紹介する。

［主要内容］

1章　文明と文化―風土から生まれた美意識と風物／風土に根ざした色感／不透明な光と聖／俗と聖／色気の抽象化／二元対比の美／真・行・草の美／創造とは／住居の本質／古美る／文化の高さ／ウェットとドライ／冷艶美／沈黙の美／「逆」アール・デコ／他
2章　伝統建築の美について―茶室より学ぶ美学／金閣は宙に浮いた／龍安寺・銀閣寺の庭の真行草について／数寄屋とは
3章　実作品より―丸亀の家「ペンキの数寄屋」／逆瀬台の家「日本の倉」／朧月夜の家／瓦ミュージアム／竹葉亭／トタンの茶室「茫々庵」／岡慶東京支店／三四郎の家／基督兄弟団西宮教会

SD選書229

サウンドスケープ

—その思想と実践—

鳥越けい子著
四六判　216頁　定価(本体1,800円＋税)

近年アーバンデザインの分野でも関心の高まりつつあるサウンドスケープについて思想と計画の両面から理論的に紹介する。カナダの現代作曲家マリー・シェーファーの仕事を基礎に都市デザインへの展開を試みる。

[主要内容]

序　章　音の風景をめぐって
第Ⅰ章　マリー・シェーファーと20世紀音楽の地平　マリー・シェーファーとサウンドスケープ概念の成立／新しいデザイン活動の提唱／音の環境芸術の地平
第Ⅱ章　音の風景を聴く　聴く技術としてのアート／音風景の解析／サウンドスケープから捉える環境
第Ⅲ章　サウンドスケープ思想に基づくデザイン活動　思想としてのサウンドスケープ・デザイン／デザイン活動における聴覚の意識化／「モノづくり」から「情況づくり」へ
終　章　サウンドスケープを生きる

SD選書230

風景のコスモロジー

吉村元男著
四六判　224頁　定価(本体1,800円＋税)

地球環境が瀕死の重症に陥っているとき，地球の自然のなかで人類に文明の位置を明らかにするべき時代が来ている。本書では，古代世界の風景のなかに，楽園の思想を探り，持続可能な世界とは何かを考える。環境創造時代における新しい緑化，修景の技法として生み出す原理を探究。

[主要内容]

Ⅰ　コスモロジーの誕生—コメによる古代日本文明の誕生／自然における文明の位置／恐怖との闘い／コスモロジーの誕生
Ⅱ　風景のコスモロジー—共同体の風景／国づくりの風景／救済の風景／他
Ⅲ　楽園の領域：ニワの構図—楽園の構図／森の風景：神奈備の森／塔の風景：天と地を結ぶ道／自然と融和する都市の風景
Ⅳ　楽園のデザイン：ソノの構図—水平と垂直のコスモロジー／「しま」のコスモロジー／「流れ」のコスモロジー
Ⅴ　楽園の建設—古代世界の完成／寝殿造り庭園世界の建設

SD選書231

庭園から都市へ

—シークエンスの日本—

材野博司著　四六判　224頁　定価(本体1,800円＋税)

本書は，回遊式庭園の空間特性であるシークエンス(継起性)を誘因として，「その都市らしさ」をもった日本的都市空間の回復を目指して，現代都市をいかに豊かで変化のある空間へと演出してゆくかについて論じている。

[主要内容]

Ⅰ　動きを誘う空間の萌芽—シークエンス空間の遠視
京の空間を歩いて—京を特色づける歴史的空間／「らしさ」のある地域空間／空間のリズムと「ゆらぎ」／他
Ⅱ　連続性と分節性のあいだ—シークエンス空間への近づき
都市空間の分節性／大空間と独立的微小空間／パノラマ景観と額縁的景観／見透しのきく空間と小さい眺め／他
Ⅲ　継起的回遊空間の魅力—シークエンス空間の探訪
空間のシークエンス／日本の空間の継起的展開／シークエンス空間の恵み／回遊式庭園の継起性／他
Ⅳ　日本的都市空間づくりへ向けて—シークエンス空間による演出
現代都市空間のシークエンス／継起性から見た日本的都市空間／シークエンスによる都市空間の演出

イタリアのヴィラと庭園

P.ファン・デル・レー他著　野口昌夫訳
A5判　272頁　定価(本体4,100円＋税)

イタリア中・北部にある40余りのヴィラを紹介するガイドブック。昨今の庭園論，コスモロジーの議論につながり，ヴィラを建築物とランドスケープの一体化したコスモスとして，またゲニウス・ロキの表出と捉える視点には，単にイタリアのヴィラを紹介する以上の現代的価値がある。

[主要内容]

序論—ヴィラの分類とタイポロジー／「設計の教科書」としてのヴィラ
理論的再構築　田園生活の文化的理想／ランドスケープの享楽化／他
1.トスカーナ—「風景の統合」への導入／ボボリ庭園他／事例9
2.ローマ—都市ランドスケープの統御／事例6
3.ローマ郊外—マニエリスム：移動を引き起こす曖昧性／事例13
4.フラスカーティ—装飾対象としてのヴィラ／事例5
5.ヴェネト：パラディオ—パラディオ：農業のヴィラ／事例7
6.北イタリア—事例5

フランク・ロイド・ライトと日本文化

ケヴィン・ニュート著　大木順子訳
A5判　240頁　定価(本体3,800円＋税)

ライトの建築作品の解釈に新たな光をあてると同時に、日本と西洋という２つの文化が相互に作用しながら生まれ変わる不思議で魅力ある過程を、実証的かつ洞察力あふれる分析による建築論であり、比較文化論である。

[主要目次]
序　章　ライトの作品と日本の伝統美術・建築の関連性
第１章　「ジャパニズム」とボストンの東洋研究家たち
第２章　「日本住宅とその環境」――日本住宅の解析
第３章　鳳凰殿――南シカゴにおける寺院建築と住宅建築の融合
第４章　フェノロサと日本美術の「有機的」性質
第５章　「コンポジション」――美的な線による、構成としての絵画・平面図・パターン
第６章　浮世絵と、自然・人工・社会的形態の抽象化
第７章　岡倉と東洋の社会的・美的理念
第８章　日本訪問――江戸が得たものと与えたもの
第９章　発想源としての日本――日本建築との類似点
第10章　確証としての日本――日本文化にみた普遍原理

ポストヒューマニズムの建築　ハンネス・マイヤーとルートヴィヒ・ヒルベルザイマー

K.マイケル・ヘイズ著　松畑　強訳
四六判　272頁　定価(本体2,900円＋税)

理論的基盤は常に危うくもモダニズムは全世界を制覇した。しかしその初期、芸術的詩学にも集産主義的機械論にも抗した者がいた。反人間主義・形式主義者＝マイヤーとヒルベルザイマーにポストモダンの萌芽を見る。

[主要目次]
ハンネス・マイヤーのラディカリズム
　コープの陳列箱と大量生産の表象
　反ブルジョア・インテリア、コープの室内
　アヴァンギャルドと道具主義のはざまで、コープの建物としてのペーターシューレ
　バウハウスとラディカル・ビルディング
　再生産と否定、ノイエ・ザッハリッヒカイトの認識論的試み
ルートヴィヒ・ヒルベルザイマー、あるいはパラノイア
　人間主義の危機、対象の解体
　混沌からの希望、表現主義とダダイズム
　大都会建築とヴァイマールの気分

建築とデザインのフラクタル幾何学

C.ボーヴィル著　三井直樹　三井秀樹共訳
A5判　208頁　定価(本体2,900円＋税)

本書は、建築とデザインにおける人工的な造形という切口からフラクタルを扱っている貴重な一冊で、一般的にはまだなじみの薄いフラクタル幾何学を平易に解説した入門書で、若い研究者・設計実務者の格好のテキスト。

[主要目次]
1.序章――シンメトリー／自己相似性／フラクタル幾何学
2.基本的なフラクタル――カントール集合／コッホ曲線／ペアノ曲線／他
3.フラクタル次元――次元を測定する／相似性次元／測定次元／他
4.フィードバックと反復法――反復関数系／アフィン変換／複素数／他
5.ランダム・フラクタル、中点変位、凝集――アルキメデスの求積法／他
6.時間、ノイズ、音楽における自然界のゆらぎとフラクタルのゆらぎ
7.フラクタルの概念と建築・デザインの分析・評価――建築におけるフラクタル次元／他
8.デザインのためのフラクタルの概念――楽譜を使ってフラクタル・リズムをつくる／他
フラクタル理解のための基本図書

SD Space Design Back Issues

Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/group/publish/index.htm



9609 The Heyday of the Modern House in Denmark: Introduces Danish modern houses of the '50s and '60s: Summer Residence of Niels Bohr, Vilhelm Wohlert; Soholm I, Arne Jacobsen; Kingo Houses, Jorn Utzon; etc. Text: L.B.Jorgensen, Riichi Miyake, etc. **Yemen: Mountaintop Villages and Tower Houses:** Photo+Text: Ashikawa Research Institute ¥1,988



9610 Light and Space in the Middle Ages: Romanesque Architecture of Central and Southern France: Introduces Romanesque church and monastery. Abbaye du Thoronet, Abbaye St-Martine de Canigou, etc. Photo: Koji Horiuchi, text: Shuji Hanyu, etc. **Studies of Two Cities:** text: Yoichi Iijima, Minoru Tanokura **Ninety-seven Chairs:** text and photo: The Poor Boys Enterprise ¥1,988



9611 Akira Kuryu: Introduces the works crystalizing the fine collaboration supported by his outstanding direction. Okazaki Art and Historical Museum, Core Yamakuni, Patrie+Kiyosato Museum of Photographic Art, Uemura Naomi Memorial Muzeum, Carnival Showcase, etc. Text: Yoichi Iijima, etc. **Project pour La Chapell de St. Vigor de Mieux Par Takubo-3** ¥2,548



9612 SD Review 1996: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants : Justus Pysall and Peter Ruge, Masami Takahashi, Nagisa Kidosaki & Associates. **From the Recent Works of Jun Itami: Chapel of Stone, Chapel of Wood and Chapel of Earth.** ¥1,988



9701 Shoei Yoh: 12 Calisthenics for Architecture: Intoroduces majar works demonstrating the "calisthenics" prescribed for architecture under twelve categories. Uchino Community Center for Seniors and Children, Sundial, Welfare Facility for Seniors, Glass House with Breathing Grating, etc. ¥3,059



9702 Frameworks and Space for Wood: Twenty-five examples of architecture in Japan and Around the world featuring the bueuties of wood as architectural material. **The New Generation of Architects Exciting Asia:** Looks at architecture and metoropolises in Asia and how they will look in the feature. ¥1,988



9703 Minimal Space Architecture: Introduces simple architecture we call 'minimal': John Pawson (John Pawson House, Jigsaw), Shinichi Ogawa (Glass House), Waro Kishi (House in Nipponbashi), Toshiaki Isida (NOS House). Text: Hiroshi Maruyama, Tsuyoshi Matsuhata, etc. **Tokyo International Forum:** Photo: Koji Horiuchi. ¥1,988



9704 Expanding Horizons of Digital Design: introduces projects creating new environment of architecture and city with computer and network technology. Text: Noriyuki Tajima, Sigeyuki Yamaguchi, Eisi Katsura, Michael Benedikt, Masaki Hujihata, Akihiro Kubota, Ken Sakamura, Naohito Okude, Mitsuo Morozumi, etc ¥3,059



9705 Afra & Tobia Scarpa and Benetton: They have worked together for about 30 years. Introducing the office building, warehouse, shops etc they designed. Text+Interview: Hiroyuki Toyota. **Pisa and the Works of Massimo Carmassi:** Casa Muti, Restoration of the Theatro G.verdi,etc ¥2,000



9706 Takahiko Yanagisawa: The Composition of Theatrical Space: Introduces receent works focusing on the elements. New National Theatre, Tokyo Opera City, etc. Text: Muneshige Nagatomo, Yoshiaki Ogura, Shouzo Motosugi, Junichi Kawamura Disucussion: Masato Kawamukai and Takahiko Yanagisawa **Swedish Good Design: Undecorated Form Design** ¥2,000



9707 Hong Kong 1997: The Accelerating City
Grasping the aspect of Hong Kong through visual works by artists and interview with architects. artists: Alan Chan, Tycoon Graphics, Satoshi Asakawa, Shin Egashira, etc. Supervision: Shin Muramatsu, Kazuhiro Kojima, Hikaru Kinoshita. Text: Naonori Matsuda ¥2,000



9708 Venturi, Scott Brown and Associates: 1990's Works: Focuses on the first work in Japan, Mielparque Nikko Kirifuri and introduces 1990's works such as Seattle Art Museum and Additions, Renovations and Restoration, San Diego Museum of Contemporary Art. **Toward a New Living Environments:** Gifu Kitagata Housing Project ¥2,400



9709 A New Phase of Railway Station Space: Introduces Railway Stations having additional value and tie with community such as JR Yabuki and JR Ohmagari. Also Introduces JR Kyoto widely noticed as International Competition. Text: Takayuki Miyabayasi etc. Talk: Tadanori Yokoo×Hiroshi Hara ¥2,000



9710 Architecture in Glass: Introducing architectures which adopt the characters of glass in such as optical and structural aspects. Searching for the present situation and possibility in the future: Extension of the Winterthur museum of Art, Hotel P, Konami Nasu Seminar House, etc. Text: Kazuhiko Nanba, Masao Ando, etc. ¥3,000



9711 Kengo Kuma: Digital Gardening. Introduces recent leading works of Kengo Kuma, advocate of post-modern architecture and winner in 1997 of the Architectural Institute of Japan Prize and the Benedicta Prize. Memorial Park and other designs. Articles by Youichi Iijima, Greg Lynn, etc. Discussion: Fumihiko Maki and Kengo Kuma. ¥2,800



SD9712 SD Review 1997: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening commmittee. Participants: Shigekatsu Takayasu Architects+Tatsuya Sakuma+Hirotada Hashizume+Hiroyuki Shigetomi, Hiroshi Kawahito, Sosuke Hujimoto, etc. **Spaces of Lighit and Color: Glass Artsits of Czecho** ¥2,000

SD

Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. **SD** endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of **SD** is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card
Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:
☐ Please enter my SUBSCRIPTION to Space Design, starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto
A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2
His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2
Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake
Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2
13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai
Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sassetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo
Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brough forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3
29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2
Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito
9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu
All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiko Hayakawa
His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii
His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany
Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989
Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoei Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut
Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates
Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun
Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World
Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

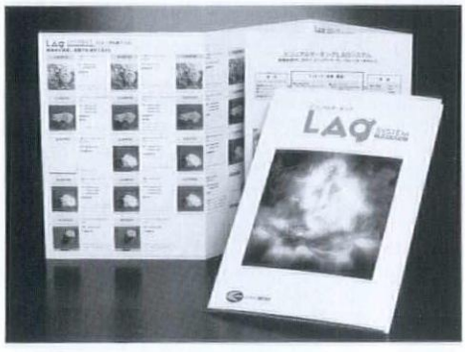
AM

カタログ
建材情報

●
ビジュアルマーキングシステム

LAGシステム

●
リンテック株式会社



リンテック㈱では，大型フルカラープリンター（ラージフォーマットプリンター/L.F.P）から生まれた画像を優しく包みこむビジュアルマーキングの新しいシステム，LAGシステムを新発売した。　同システムは，画像面を保護し耐候性や耐水性，防汚性を向上させるラミネート用粘着フィルム，LAGプロテクト，画像裏面を補強し掲示の利便性を高めるマウント用粘着シートLAGマウント，インクジェットプリンター用メディアのLAGジェットなど豊富なマテリアルをラインアップ。　さらに，ワイドラミネーターLAG LA-54で，ビジュアルプリントを美しく強靱にラミネートする。　用途は，屋内外看板をはじめ，カーマーキング，POP，タペストリー，ポスター，シャッターマーキング，仮囲いマーキングなど多彩で，施工も簡単である。　同社が永年にわたって培ってきた粘・接着技術を最大限に活用した。　また，製版代などの固定費が削減でき，必要なときに必要な量だけ出力することができ，特に多品種小ロットに適した方法である。

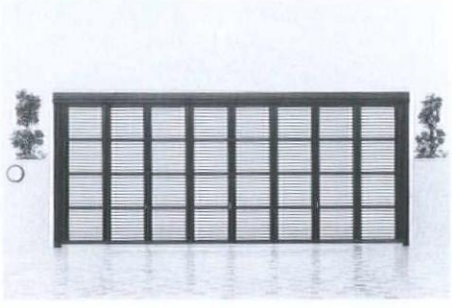
価格

LAGプロテクト　450円～3,300円/㎡
LAGマウントW（両面粘着シート）400円～2,000円/㎡
〃　　S（片面粘着シート）550円～1,850円/㎡

●
車庫用門

エクジス

●
新日軽株式会社



新日軽㈱では，2台駐車専用タイプの車庫用門として，両サイドに扉が開けられるエクジス スクリーンゲート ワイドタイプと自転車での外出時など人が出入りできる程度の専用門を組込んだ，エクジス スクリーンゲート両開き親子タイプを新発売した。

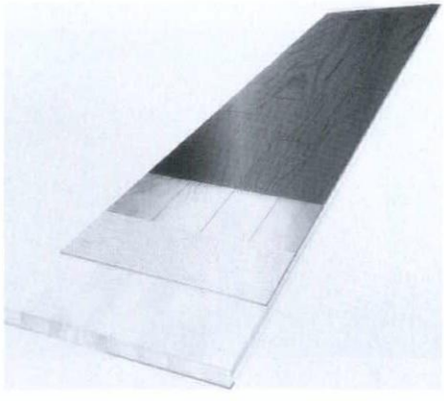
特長

①1型（横格子タイプ），2型（いげたタイプ），3型（目隠しルーバータイプ）それぞれ，エクジスシリーズの門扉・フェンスとのトータルコーディネートができる。
②吊元ガイドを小さく，コンパクトにし，外側だけでなく内側もすっきりとしたデザインである。
③水勾配のきつい現場や床面がでこぼこの現場での施工が可能なノンレール方式。　レールを埋め込む必要がないので，床面に鉄蓋などの障害物がある現場での施工も可能である。
④各扉（吊元扉・中間扉・戸先扉）を分割して吊り込むことができ，施工がラクにできる。
⑤中間アンカーで固定する必要がないので従来と比べ施工がラクになった。
⑥ワンタッチタイプの落し錠で，腰をかがめず操作できる位置に設定してあるので上げ下げがラクにできる。

●
床材

リ・アース

●
朝日ウッドテック株式会社



朝日ウッドテック㈱では，伐採され続けるフロアー基材の南洋材保護に向け，画期的な床材，リ・アースを新発売した。　同製品は，従来のフローリングに要求される機能を兼ね備え，再生可能な材として，環境保護に寄与できる，画期的な住宅用木質床材である。

特長

①地球環境に重要な熱帯雨林を守り，安全・健康・快適を考えた高機能製品である。
②接着剤・塗装を低ホルム化（F2レベル）した。
③抗菌剤を混入した，抗菌仕様である。
④摩擦に強いサイレックス仕上げである。
⑤電気カーペットの使用が，オーケーである。
⑥ヒビワレ防止処理フロアーである。
⑦キズがつきにくい。
⑧ラワン合板と同等以上の施工性を実現した。

リンテック株式会社　広報室
東京都板橋区本町23番23号
〒173　Tel　03-5248-7741

新日軽株式会社　エクステリア事業本部
東京都江東区木場2丁目7番23号
〒135　Tel　03-3820-2552

朝日ウッドテック株式会社　営業推進部　商品情報室
大阪市中央区南本町4丁目5番10号
〒541　Tel　06-245-9505

●
壁紙
ケナフ

●
東リ株式会社



東リ㈱では，枯渇することのない天然資源，ケナフを素材とした，世界初の壁紙を新発売した。　ケナフは，畑で栽培できるアオイ科ハイビスカス属の１年草で多量の繊維を含んでいるため，木材パルプと同じように紙にすることができる。　このケナフを素材に，発水や防カビ性，防火検定紙１級の機能を付加した。　森林資源の保護に貢献し，廃棄の際には焼却しても塩化水素ガスが発生せず，埋めれば土に戻る，非木材紙普及協会認定第一号壁紙である。

規格

巾92cm×長さ50m（切り売り可能）

価格

1,000円/m

●
カーポート
ニューシャコーレ

●
三協アルミニウム工業株式会社



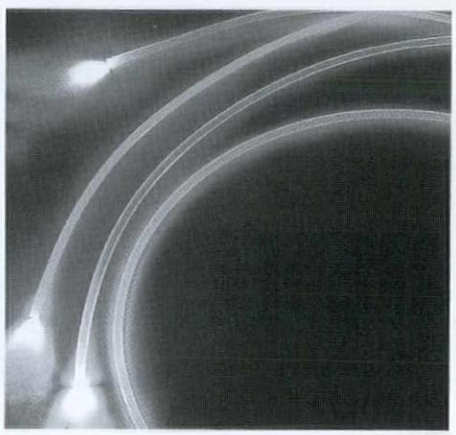
三協アルミニウム工業㈱では，カーポートのロングセラー商品「シャコーレ」を全面的にリニューアルした，ニューシャコーレを新発売した。

特長

①側面まで回り込んだ美しいアール形状の安定感のあるフォルムに加え，梁と柱の間の方杖をなくし，スッキリとしたデザインと広がりのある空間を実現した。
②シンプルな２本柱タイプにすることにより，車の乗り降り時，開いたドアが柱に当たらない安心設計。
③サイズバリエーションも豊富に，ひとまわりビックなゆとりある駐車空間を実現した。　また，ミニタイプも用意し，自転車やバイク置場，物干しスペースなどに広く活用できる。　敷地に合わせて奥行き２連結，合掌タイプなど設計プランの幅が広がる。
④本体カラーは，ブラック・ダークブロンズ・アーバングレー・ブロンズと住まいに合わせて選べる４色。いずれも同価格である。　屋根パネルは，ブラウンスモーク，ブルースモークの２色。
⑤屋根パネルにポリカーボネート板を採用し，優れた耐衝撃強度で，落下物から車を守る。　車の色褪せ，シートの日焼けの原因となる紫外線をカットする。　建設大臣が認定する，準難燃材料を採用している。

●
照明
３Mライトファイバー

●
住友スリーエム株式会社



住友スリーエム㈱では，高度な技術から生まれた，光を伝送するプラスチックケーブル，３Mライトファイバーを新発売した。　素材にプラスチックを使用し，従来の光ファイバーよりフレキシブルで低コストである。　単芯で大口径（直径12㎜―25㎜）を実現した。ファイバー同士の接続が容易である。　光の減衰がほとんどない。　端部から光を活用し，強力な光が得られるスポットライト用。　ネオン管のようにファイバー全体が発光するサイドライト用。　強力サイドライト用の３タイプ。

用途

①単一光源から分岐使用で，効率の良い配光が実現し，高度なデザイン性を要求されるものに活かせる。
②電球交換が難しい高い場所，危険な場所での使用。
③熱を出さないので，紙などの熱に弱いマテリアル，温度変化にデリケートな高級ワイン保管庫の照明。
④紫外線を出さないため，美術品・芸術品の照明。
⑤漏電の心配が必要ないので，熱帯魚の水槽・水族館・プールなどの水中照明。
⑥雨，風の心配が無用のガーデニング，外壁での使用。
⑦発光部分の爆発の危険性がないので，ガソリンスタンドや粉塵を伴う工場作業場での照明。

東リ株式会社　営業企画部
兵庫県伊丹市東有岡５番125号
〒664　Tel　06-494-6605

三協アルミニウム工業株式会社　広報室
富山県高岡市早川70番
〒933　Tel　0766-20-2332

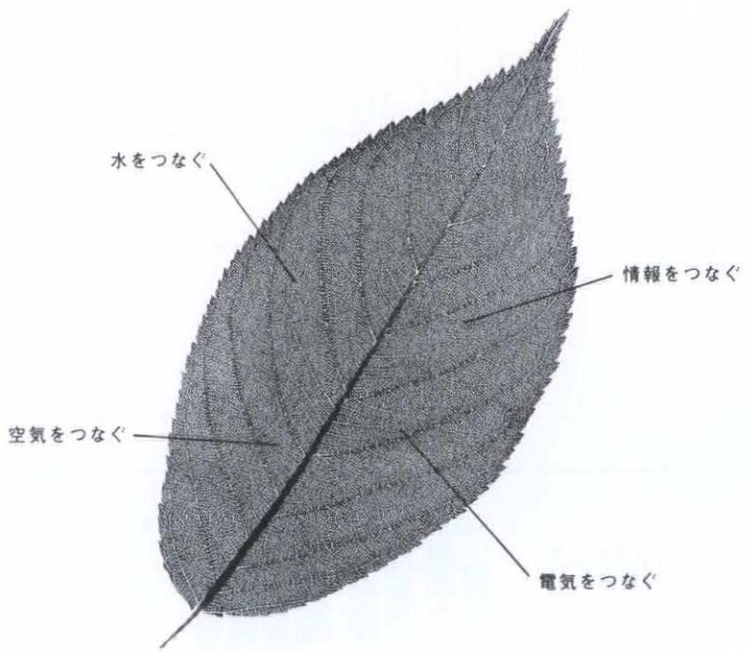
住友スリーエム株式会社
東京都世田谷区玉川台２丁目33番１号
〒158　Tel　03-5716-7784

SEM

ビルの、工場の、街の、
すみずみに、つながろう。

私たちの仕事は、ビルに、工場に、
街に、生命を与える葉脈として、
そのすみずみにつながっています。
もっと、人が快適になる環境へ。
総合設備業の
リーディング・カンパニーとして、
先端の技術で、高度な未来を
提案し続けます。

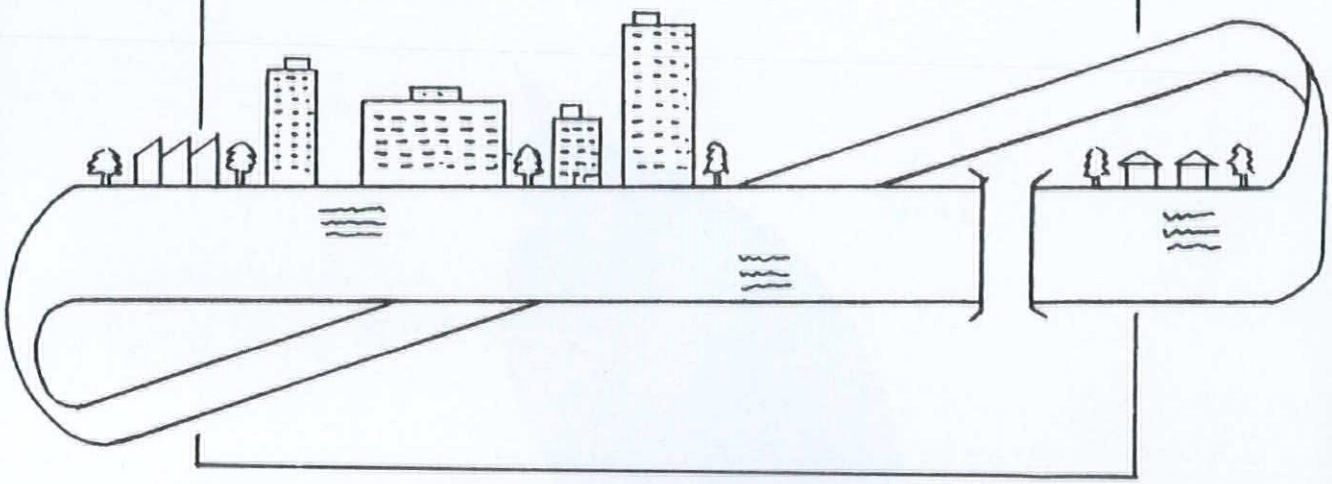
あなたと快適をむすびます。



住友電設株式会社
大阪本社 〒550 大阪市西区阿波座2-1-4 Tel 06(537)3400
東京本社 〒105 東京都港区芝2-2-17 Tel 03(3454)7311

営業種目：電気設備／空調・給排水・衛生設備／
プラント設備／情報通信設備／電力流通設備／その他

水環境を クリエイトする



株式会社
NEO 西原衛生工業所

東京都港区芝浦3-6-18
TEL.(03) 3452-7441大代

支店/札幌・東北・新潟・東関東・横浜・名古屋

N 日章工業株式会社

●本　　社　〒101　東京都千代田区内神田３－11－７(日立神田別館) ☎03-3254-3000
●大阪支店　〒541　大阪市中央区高麗橋２－４－６(大正不動産ビル６階) ☎06-201-5704
●仙台営業所　〒980　仙台市青葉区中央３－２－27(日産生命ビル) ☎0222-21-6989

日立製作所エレベーター・機電特約店
日立製作所ＯＡシステム特約店
日立金属フリーアクセス、ハイベース特約店
旭化成建材パイル・ヘーベル代理店
大和ハウス工業代理店

施設商品

エレベーター・エスカレーター
立体駐車場設備(新明和工業)
バスユニット(日立化成工業)
住宅機器類
集中浄化槽
受水槽
ソーラー
受変電設備
自家発電設備
無停電定電圧定周波電源装置
ビル監視制御装置
冷暖房空調設備
通信設備
ターボ冷凍機・吸収式冷凍機
各種ポンプ設備・換気設備

OAシステム機器

パーソナルコンピューター
ワードプロセッサー
ファクシミリ
オフィスコンピューター

建材商品

AHSパイル
ヘーベル
フリーアクセスフロア
ハイスプリット・ハイベース
鉄骨
大昭和ユニボード

建設商品

クローラクレーン
ショベル
軽量鉄骨プレハブ規格建築物
軽量鉄骨系プレハブ住宅

●㈳日本産業広告協会会員
●学術雑誌広告業協会会員

心から心へのメッセージ

We will serve you a message from heart to heart.

インフォメーション

数ある情報誌のうち的確にユーザーの脳裏を捕えるものは?それは学会・協会誌です。

適確な判断、敏速な対応そして広い視野を持った時、初めて時代の変化をキャッチし広告することの意義を考えさせられます。弊社は、皆様の心をアピールする手助けをモットーに心がけております。

【一手取扱誌】

●日本機械学会誌
●日本機械学会論文集
●Bulletin of JSME
●土木学会誌
●土木学会論文集
●建設の機械化
●産業機械
●高分子
●有機合成化学
●日本時計学会誌
●塑性と加工
●資源と素材
●科学教育研究
●港湾荷役
●建設荷役車両
●漁港
●新都市
●セメントコンクリート
●鋳造工学
●作業環境
●石灰石
●倉庫
●化学抄報
●日本土壌肥料学雑誌
●洗浄設計
●日本リモートセンシング学会誌

【準一手取扱雑誌】

●SD
●JACTニュース
●現代化学
●膜

その他、数千種の媒体を取扱っておりますので、ご利用をお待ち致しております。

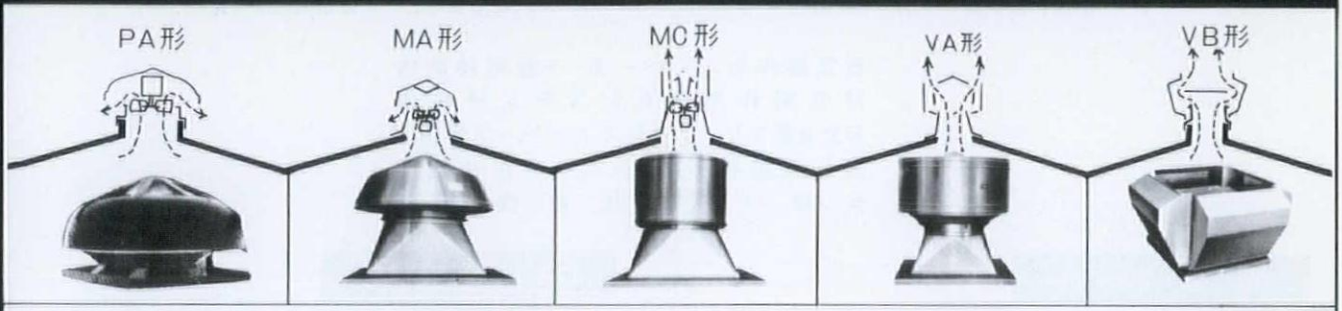
学術・技術誌専門広告代理業
株式会社 共栄通信社

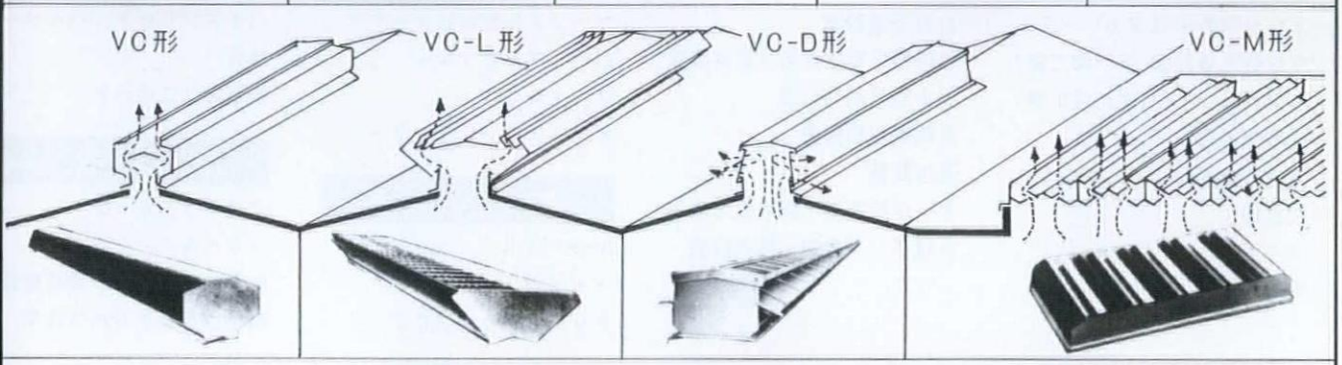
本　　社　東京都中央区銀座8-2-1(ニッタビル)　〒104
TEL.03(3572)3381㈹　FAX.03(3572)3590
大阪支社　大阪市北区西天満3-6-8(笹屋ビル)　〒530
TEL.06(362)6515㈹　FAX.06(365)6052

坂本商会は創業80年 **換気・排煙・採光の専門メーカー** です

“自然の風”を効率よく招く坂本式ルーフベンチレータ群

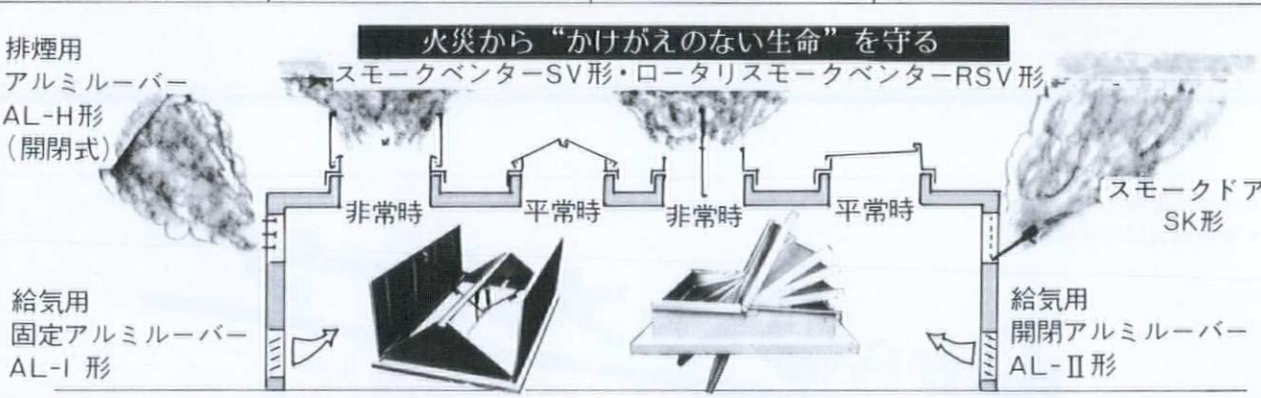
強制換気・自然換気装置





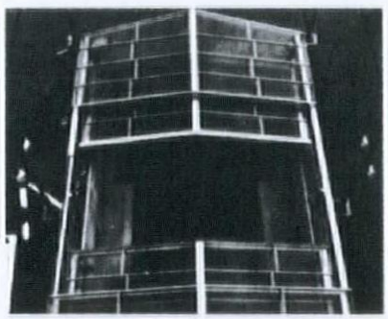
排煙・ルーバー装置

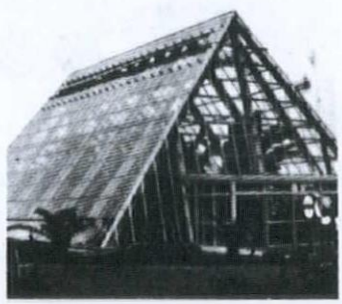
火災から“かけがえのない生命”を守る



採光装置

“太陽の恩恵”を全身でウケとめる坂本式スカイライト







株式会社 坂 本 商 会

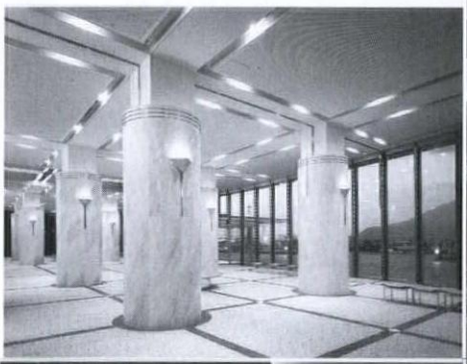
本　　社	東京都中央区日本橋2－16－12(江戸二ビル)	〒103	電話 東京 (03)3271－5591(代)
松戸工場	千葉県松戸市松飛台420番地	〒270	電話 松戸 (0473)87－6595(代)
技術研究所	千葉県松戸市松飛台217番地	〒270	電話 松戸 (0473)87－3148
施 工 部	東京都墨田区東向島2丁目15番11号	〒131	電話 東京 (03)3619－2221(代)

表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい・・・。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。











鹿児島県庁舎（鹿児島）
設計管理：株式会社 佐藤総合計画

yamada

山田照明株式会社

本　　社／ショールーム　〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12　TEL 03-3253-5161
仙台支社／ショールーム　〒980 仙台市青葉区二日町11-11（ANDOビル）TEL 022-267-1630　横浜支社／ショールーム　〒220 横浜市西区南幸 2-20-1　TEL 045-311-1731

大阪支社　〒542 東大阪市綿根 2-2-6　TEL 06-745-6811
北関東営業所　〒370 高崎市上中居町 51-1　TEL 0273-26-4111
広島営業所　〒730 広島市中区十日市町 2-2-34　TEL 082-293-6119
福岡支社　〒810 福岡市博多区店屋町 8-30　TEL 092-282-7635
名古屋事務所　〒461 名古屋市東区泉 1-21-35-1102　TEL 052-963-8411
鹿児島営業所　〒890 鹿児島市上之園町 4-14（第6相良ビル）　TEL 0992-58-0031
札幌営業所　〒003 札幌市白石区菊水七条 2-61　TEL 011-811-2215
静岡事務所　〒420 静岡市西草深 23-9-502　TEL 054-247-0811
宇都宮事務所　〒[illegible]　宇都宮市海道町818-2-1002　TEL 0286-60-1381

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご用命下さい（五十音順）

●共栄通信社

東京――東京都中央区銀座8-2-1
新田ビル（3572）3381
FAX（3572）3590

大阪――大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル06（362）6515
FAX06（365）6052

●建報社

東京――東京都文京区湯島2-30-8
（3818）1961
FAX03(3818)1968

大阪――大阪市中央区淡路町1-4-9
昭栄ビル06（231）4548
FAX06（227）0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10
ハヤシビル（3552）8247㈹
FAX（3552）8249

●中外

大阪――大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル06（379）1791

東京――東京都千代田区神田須田町2-5-2
須田町佐志田ビル（3255）8411

名古屋―名古屋市中区錦2-2-13
名古屋センタービル052（221）7641㈹

カ ㈱関電工――A1
鹿島――A4・A5
軽井沢ホテル鹿島ノ森――A6
サ 三建設備工業㈱――A10
三機工業㈱――291
㈱坂本商会――A18
シ 新日軽㈱――表4
新菱冷熱工業㈱――292
昭和アステック㈱――294
昭和鋼機㈱――295
ス 住友電設㈱――A15
セ セコム機器販売㈱――287
セゾン美術館――288
タ 大興物産㈱――A8
ダイダン㈱――A10
大栄電気㈱――A11
ト ㈱トーエネック――A11
東光電気工事㈱――A12
東洋熱工業㈱――296
ニ 日新工業㈱――A9
㈱西原衛生工業所――A16
日章工業㈱――A17
ヒ ㈱日立製作所――281
ホ ホテルイースト21東京――A7
マ 松下電器産業㈱――A2
ミ 三菱電機㈱――表3
美和ロック㈱――284
ヤ 山田照明㈱――A20
リ リリカラ㈱――表2
ロ ロンシール工業㈱――A3
㈱共栄通信社――A17